

豊 後 府 内 1

中世大友府内町跡第5次・第8次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2005

大分県教育庁埋蔵文化財センター

豊 後 府 内 1

中世大友府内町跡第5次・第8次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2005

大分県教育庁埋蔵文化財センター



中世大友府内町跡第5次・第8次調査区全景（西側より）



華南三彩壺（トラディスカント壺 第28図）

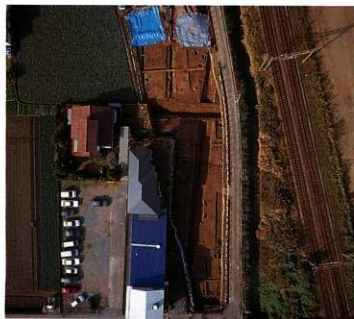


華南三彩鳥形水滴
（第18図9）

金箔貼り京都系土師器壺
（第90図1・第279図13）



中世大友府内町跡第8次調査区全景（西側より）



中世大友府内町跡第8次調査区東側全景（西側より）



中世大友府内町跡第8次調査区西側全景（西側より）



整地層出土
キリシタン遺物 コンタ



SD103出土
地藏菩薩像

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分駅付近連続立体交差事業に伴い大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した中世大友城下町跡の発掘調査報告書です。遺跡の所在する大分市には中世、九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていました。近年の発掘調査により、この大友氏の守護所である大友氏館を中心に、万寿寺をはじめとした寺社や町屋のにぎわいにあふれた府内の町の様子が、次第に明らかになってきました。

本書に収録した第5・8次調査区は、戦国時代の府内の町の景観を描いたとされる「府内古図」で見れば、大友氏に納められた米や大豆などの物資を保管する施設である「御蔵場」の北側や大友氏館跡の南側に隣接する地点に当たり、中世大友城下町跡のほぼ中央に位置します。

この調査区からは、掘立柱建物の柱穴をはじめ、ゴミ捨て穴と考えられる土坑、街路、井戸など当時の町屋の景観をうかがい知ることができる遺構群や、韓半島から中国・東南アジアにかけて、広くアジア全域からもたらされた数多くの遺物が出土しています。また、キリスト教関連遺物である「コンタ」は、豊後におけるキリスト教布教の歴史を考えるうえで重要な発見となりました。

本書は、これら調査成果を収録したもので、本年度から発足した大分県教育庁埋蔵文化財センターの発掘調査報告書第1集として刊行するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用いただけましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、こころから感謝申し上げます。

平成17年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 伊 藤 正 行

例 言

1. 本書は大分県大分市六坊北町・元町に所在する中世大友府内町跡第5次調査・同第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連絡立体交差事業の実施に伴い、大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 中世大友府内町跡第5次調査は平成11(1999)年9月から平成13(2001)年12月にかけて実施し、坂本嘉弘・高橋信武・植島隆二・吉田寛・山路康弘・中田裕樹・阿比留士郎(大分県教育委員会)が担当した。また、中世大友府内町跡第8次調査は平成12(2000)年4月から平成13(2001)年3月にかけて実施し、坂本嘉弘・甲斐寿義・輔上敬一(大分県教育委員会)が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は大分県教育庁文化課の職員のほか、国際航業・文化財リサーチの調査員が担当した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員のほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員が担当した。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター(大分市大字中判田ビワノ門1977)において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。
SD:溝、SB:掘立柱建物、SK:土坑、SE:井戸、SF:道路および道路状遺構、
SA:掘列および掘列状遺構、ST:墓、SH:竪穴住居跡、SP:柱穴および小穴
SX:その他の遺構(不明遺構・集石遺構・整地層など)
9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No2 1982年)
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』No2 1982年)
白磁 森田勉「14～16世紀の白磁の分類について」(『貿易陶磁研究』No2 1982年)
備前系陶器 桑岡実「中世備前焼(壺)の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」(『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』所収 2000年)
桑岡実「近世備前焼播鉢の編年案」(『岡山城三之曲輪跡-表町--丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査-』岡山市教育委員会 2002年)
中国南部産焼陶器 吉田寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼陶器について」(『貿易陶磁研究』No28 2003年)
京都系土師器 塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」(『博多研究会誌』第6号 1998年)
塩地潤一「九州出土の京都系土師器Ⅱ」(『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年)
瓦 森田寛「屋瓦」(『摂津高槻城 高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会)
10. 本書の執筆は第1・6章を坂本嘉弘、第2章を吉田寛、第3章を植島隆二、第4章を甲斐寿義が担当した。また、中世大友府内町跡第5次調査出土土人骨の同定を九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座に委託し、田中良之氏(同大学院教授)らによる分析結果を掲載した(第5章第1節)。また、中世大友府内町跡第8次調査出土ガラス玉の分析を大分県立歴史博物館主幹研究員山田拓伸氏に実施して頂き、分析結果に関する玉銘を得た(第5章第2節)。なお、執筆分担は目次にも明記している。
11. 本書の編集は、調査員で協議して行った。

目 次

第1章 はじめに (坂本嘉弘)	
第1節 調査の経緯	
Ⅰ. 調査に至る経過	1
Ⅱ. 調査の経過	1
Ⅲ. 調査の体制	3
第2節 遺跡の立地と環境	
Ⅰ. 地理的環境	5
Ⅱ. 歴史的環境	5
第3節 報告書作成にあたって	
Ⅰ. 府内古園と街路の名称	7
Ⅱ. 中世大友城下町跡出土の土師質土器幅年	8
第2章 中世大友府内町跡第5次調査A区 (吉田寛)	
第1節 調査の経緯	13
第2節 遺構と遺物	14
第3節 小結	207
第3章 中世大友府内町跡第5次調査B区 (植島隆二)	
第1節 調査の経緯	211
第2節 遺構と遺物	212
第3節 小結	374
第4章 中世大友府内町跡第8次調査 (甲斐寿義)	
第1節 調査の経緯	377
第2節 遺構と遺物	378
第3節 小結	495
第5章 自然科学的分析	
第1節 中世大友府内町跡第5次調査区出土人骨 (石川健・田中良之)	499
第2節 中世大友府内町跡第8次調査区出土ガラス玉の自然科学的分析 (山田拓伸)	504
第6章 総括 (坂本嘉弘)	506
遺物観察表	509
写真図版	565

図版目次

第1章 はじめに

第1図	地図上に復原された中世大友城下町跡と大分駅周辺総合整備事業……………2	第4図	府内古園と街路名称の設定……………7
第2図	中世大友城下町跡と周辺の遺跡……………3	第5図	中世大友城下町跡出土土師質土器編年図…9
第3図	中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡…6		

第2章 中世大友府内町跡第5次調査A区

第6図	年度毎の調査区……………13	第35図	SX608実測図……………50
第7図	中世大友府内町跡第5次調査A区遺構配置図①(上層遺構群)……………17・18	第36図	SX608出土遺物実測図……………50
第8図	中世大友府内町跡第5次調査A区遺構配置図②(下層遺構群)……………19・20	第37図	SD405出土遺物実測図……………51
第9図	5次調査A区土層図①……………21・22	第38図	SD420・SD415・SD429出土遺物実測図…52
第10図	5次調査A区調査区土層図②……………23・24	第39図	SD424実測図……………53
第11図	第5次調査A区の溝と関連遺構……………25	第40図	SD424出土遺物実測図……………53
第12図	SD101・SX102・SD103土層模式図……………26	第41図	SD128実測図……………54
第13図	SD101・SX102・SD103・SD109・SD110実測図……………27・28	第42図	SD428出土遺物実測図①……………55
第14図	SD101出土遺物実測図①……………30	第43図	SD428出土遺物実測図②……………56
第15図	SD101出土遺物実測図②……………31	第44図	SD428出土遺物実測図③……………57
第16図	SD101出土遺物実測図③……………32	第45図	SD436実測図……………59
第17図	SD101出土遺物実測図④……………32	第46図	SD436出土遺物実測図①……………60
第18図	SD103出土遺物実測図①……………34	第47図	SD436出土遺物実測図②……………61
第19図	SD103出土遺物実測図②……………35	第48図	SD425実測図……………62
第20図	SD103出土遺物実測図③……………36	第49図	SD425出土遺物実測図……………63
第21図	SD103出土遺物実測図④……………36	第50図	SD151・SD153遺構配置図……………65・66
第22図	SX102出土遺物実測図①……………37	第51図	SD153人骨出土状況……………67
第23図	SX102出土遺物実測図②……………38	第52図	SD153第1集中部遺物出土状況……………67
第24図	SX102出土遺物実測図③……………39	第53図	SD153出土遺物実測図①……………68
第25図	SX102出土遺物実測図④……………40	第54図	SD153出土遺物実測図②……………69
第26図	SX102出土遺物実測図⑤……………40	第55図	SD153出土遺物実測図③……………70
第27図	SX102出土遺物実測図⑥……………41	第56図	SD153出土遺物実測図④……………71
第28図	遺構間接合資料実測図①……………42	第57図	SD153出土遺物実測図⑤……………72
第29図	遺構間接合資料実測図②……………44	第58図	SX603出土遺物実測図……………72
第30図	遺構間接合資料実測図③……………45	第59図	SD403出土遺物実測図……………73
第31図	遺構間接合資料実測図④……………46	第60図	SD151人骨出土状況……………74
第32図	SD408出土遺物実測図……………48	第61図	SD151出土遺物実測図①……………75
第33図	SX604出土遺物実測図①……………48	第62図	SD151出土遺物実測図②……………76
第34図	SX604出土遺物実測図②……………49	第63図	SD151出土遺物実測図③……………77
		第64図	SD151出土遺物実測図④……………78
		第65図	SD151出土遺物実測図⑤……………79
		第66図	SD151出土遺物実測図⑥……………80

第67図	SD151出土遺物実測図⑦	81	第109図	SK004実測図	108
第68図	SD404実測図	82	第110図	SK004出土遺物実測図	109
第69図	SD404出土遺物実測図	83	第111図	SK002・SK003実測図	111
第70図	SD411・SD412・SD413実測図	85	第112図	SK002出土遺物実測図	112
第71図	SD411出土遺物実測図	86	第113図	SK003出土遺物実測図	112
第72図	SD412出土遺物実測図	87	第114図	SK017・SK018実測図	113
第73図	SD413出土遺物実測図①	88	第115図	SK017出土遺物実測図	113
第74図	SD413出土遺物実測図②	88	第116図	SK018出土遺物実測図	113
第75図	SD418出土遺物実測図	88	第117図	SK005実測図	114
第76図	SD431実測図	89	第118図	SK005出土遺物実測図	114
第77図	SD431出土遺物実測図①	90	第119図	SK013実測図	114
第78図	SD431出土遺物実測図②	91	第120図	SK013出土遺物実測図	114
第79図	SD431出土遺物実測図③	92	第121図	SK037実測図	115
第80図	SD430実測図	93	第122図	SK037出土遺物実測図	115
第81図	第5次調査A区の土坑	94	第123図	SK053実測図	116
第82図	SK001実測図	95	第124図	SK053出土遺物実測図	116
第83図	SK001出土遺物実測図	95	第125図	SK034実測図	117
第84図	SK026・SK027実測図	96	第126図	SK014実測図	117
第85図	SK026出土遺物実測図	96	第127図	SK014出土遺物実測図	117
第86図	SK027出土遺物実測図	96	第128図	SK009実測図	118
第87図	SK006実測図	97	第129図	SK009出土遺物実測図	118
第88図	SK006出土遺物実測図	97	第130図	SK011実測図	118
第89図	SK012実測図	98	第131図	SK036実測図	119
第90図	SK012出土遺物実測図	98	第132図	SK036出土遺物実測図	119
第91図	SK030実測図	99	第133図	SK029実測図	119
第92図	SK030出土遺物実測図	99	第134図	SK029出土遺物実測図	119
第93図	SK024実測図	99	第135図	SK025実測図	120
第94図	SK024出土遺物実測図	99	第136図	SK025出土遺物実測図	120
第95図	SK028実測図	100	第137図	SK038実測図	121
第96図	SK028出土遺物実測図	100	第138図	SK038出土遺物実測図	121
第97図	SK035実測図	101	第139図	SK019実測図	121
第98図	SK035出土遺物実測図	101	第140図	SK019出土遺物実測図	121
第99図	SK051実測図	102	第141図	第5次調査A区の集石遺構・石列	122
第100図	SK051出土遺物実測図	102	第142図	SX628実測図	123
第101図	SK048実測図	102	第143図	SX628出土遺物実測図	123
第102図	SK048出土遺物実測図	102	第144図	SX629実測図	124
第103図	SK031・SK032実測図	103	第145図	SX629出土遺物実測図	124
第104図	SK031出土遺物実測図	104	第146図	SX630実測図	125
第105図	SK032出土遺物実測図	104	第147図	SX630出土遺物実測図	125
第106図	SK033実測図	105	第148図	SX632実測図	125
第107図	SK033出土遺物実測図	106	第149図	SX632出土遺物実測図	125
第108図	SK049実測図	107	第150図	SX635実測図	126

第151図	SX635出土遺物実測図	126	第193図	SE514出土遺物実測図	155
第152図	SX625実測図	126	第194図	SE506実測図	156
第153図	SX625出土遺物実測図	127	第195図	SE506出土遺物実測図①	157
第154図	SX626実測図	127	第196図	SE506出土遺物実測図②	157
第155図	SX626出土遺物実測図	127	第197図	SE503実測図	158
第156図	SX638実測図	128	第198図	SE503出土遺物実測図	159
第157図	SX638出土遺物実測図	128	第199図	SE511実測図	160
第158図	SX621実測図	128	第200図	SE511出土遺物実測図	160
第159図	SX620実測図	129	第201図	SE504実測図	161
第160図	SX620出土遺物実測図①	129	第202図	SE513実測図	162
第161図	SX620出土遺物実測図②	130	第203図	SE513出土遺物実測図	162
第162図	SX617・SX618実測図	131	第204図	SE512実測図	163
第163図	SX617・SX618出土遺物実測図132		第205図	SE512出土遺物実測図	163
第164図	SX622実測図	133	第206図	SE507実測図	164
第165図	SX622出土遺物実測図①	133	第207図	SE507出土遺物実測図①	164
第166図	SXX622出土遺物実測図②	134	第208図	SE507出土遺物実測図②	164
第167図	SX634実測図	135	第209図	SE510実測図	165
第168図	SX619実測図	135	第210図	SE510出土遺物実測図	165
第169図	SX619出土遺物実測図	135	第211図	SE508実測図	166
第170図	SX627実測図	136	第212図	第5次調査A区の道路状遺構・その他の遺構	167
第171図	SX627出土遺物	136	第213図	SF650実測図①(江戸時代初頭～前葉)	169・170
第172図	SX645・SX649実測図①	137			
第173図	SX645・SX649実測図②	138	第214図	SF650実測図②(中世)	171・172
第174図	SX645・SX649出土遺物実測図①	139	第215図	SF650出土遺物実測図①	173
第175図	SX645・SX649出土遺物実測図②	140	第216図	SF650出土遺物実測図②	174
第176図	SX606・SX607実測図	141	第217図	SX601実測図	175
第177図	SX607出土遺物実測図	141	第218図	SX601出土遺物実測図	175
第178図	SX648出土遺物実測図	142	第219図	包含層・整地層出土遺物①(青花・五彩)	177
第179図	SX663実測図	143			
第180図	SX633出土遺物実測図	144	第220図	包含層・整地層出土遺物②(青磁・白磁・中国陶器)	179
第181図	第5次調査A区の井戸	145	第221図	包含層・整地層出土遺物③(中国南部産焼締陶器)	180
第182図	SE500実測図	146	第222図	包含層・整地層出土遺物④(華南三彩)	181
第183図	SE500出土遺物実測図	147	第223図	華南三彩参考資料(熊本県浜の館)	181
第184図	SE501実測図	148	第224図	包含層・整地層出土遺物⑤(東南アジア産陶磁器)	182
第185図	SE501出土遺物実測図	149	第225図	包含層・整地層出土遺物⑥(朝鮮王朝産陶磁器)	183
第186図	SE502実測図	150	第226図	包含層・整地層出土遺物⑦(国産陶磁器1)	185
第187図	SE502出土遺物実測図	150			
第188図	SE505実測図	151			
第189図	SE505出土遺物実測図	152			
第190図	SE515実測図	153			
第191図	SE515出土遺物実測図	153			
第192図	SE514実測図	154			

第227図	包含層・整地層出土遺物⑧(国産陶磁器2)	186
第228図	包含層・整地層出土遺物⑨(土師器1)	187
第229図	包含層・整地層出土遺物⑩(土師器2)	188
第230図	包含層・整地層出土遺物⑪(瓦質土器1)	189
第231図	包含層・整地層出土遺物⑫(瓦質土器2)	190
第232図	包含層・整地層出土遺物⑬(瓦質土器3)	191
第233図	包含層・整地層出土遺物⑭(瓦質土器4)	192
第234図	包含層・整地層出土遺物⑮(石製品)	193
第235図	包含層・整地層出土遺物⑯(石製品2)	194
第236図	包含層・整地層出土遺物⑰(金属製品)	195

第3章 中世大友府内町跡第5次調査B区

第251図	年度毎の調査区	211
第252図	中世大友府内町跡第5次調査B区遺構配置図	215・216
第253図	第5次調査B区土層図	217・218
第254図	第5次調査B区の溝	219
第255図	SD210出土遺物実測図	220
第256図	SD101・SX102・SD103・SD105・SD123 実測図	221・222
第257図	SD101・SX102・SD103・SD105・SD151 ・SD153土層断面図①	221・222
第258図	SX102石組遺構実測図	221・222
第259図	SD105遺物出土状況実測図	221・222
第260図	SX102土層図	223
第261図	SX102・SD103土層図	223
第262図	SD101・SX102・SD103土層図	223
第263図	SD101出土遺物実測図	224
第264図	SD101出土銭実測図	225
第265図	SX102出土遺物実測図①	226
第266図	SX102出土遺物実測図②	227
第267図	SD103出土遺物実測図①	228
第268図	SD103出土遺物実測図②	229
第237図	包含層・整地層出土遺物⑱(ガラス製品)	195
第238図	包含層・整地層出土遺物⑲(銅銭1)	196
第239図	包含層・整地層出土遺物⑳(銅銭2)	197
第240図	包含層・整地層出土遺物㉑(銅銭3)	198
第241図	包含層・整地層出土遺物㉒(銅銭4)	199
第242図	包含層・整地層出土遺物㉓(銅銭5)	200
第243図	包含層・整地層出土遺物㉔(銅銭6)	201
第244図	包含層・整地層出土遺物㉕(銅銭7)	202
第245図	包含層・整地層出土遺物㉖(銅銭8)	203
第246図	包含層・整地層出土遺物㉗(銅銭9)	204
第247図	包含層・整地層出土遺物㉘(銅銭10)	205
第248図	包含層・整地層出土遺物㉙(古墳時代以前の遺物)	206
第249図	5次調査A区遺構変遷図①	208
第250図	5次調査A区遺構変遷図②	209
第269図	SD103出土遺物実測図③	230
第270図	SD105出土遺物実測図①	232
第271図	SD105出土遺物実測図②	233
第272図	SD105出土遺物実測図③	234
第273図	SD105出土遺物実測図④	235
第274図	SD105出土銭実測図	236
第275図	SD105出土遺物実測図⑤	236
第276図	SD145・SD310実測図	237・238
第277図	SD145土層断面図	237・238
第278図	SD130土層断面図	237・238
第279図	SD145出土遺物実測図①	240
第280図	SD145出土遺物実測図②	241
第281図	SD145出土遺物実測図③	242
第282図	SD145出土遺物実測図④	243
第283図	SD310出土遺物実測図	244
第284図	SD114出土遺物実測図①	245
第285図	SD114出土遺物実測図②	246
第286図	SD123実測図	247
第287図	SD123土層図・断面図	247
第288図	SD123出土遺物実測図	248
第289図	SD123出土銭実測図	249

第290図	SD114・SD151・SD153実測図 ……251・252	第332図	SK226出土遺物実測図 ……277
第291図	SD151土層図折り込み ……251・252	第333図	SK229実測図 ……278
第292図	SD151出土遺物実測図① ……253	第334図	SK229出土遺物実測図 ……278
第293図	SD151出土遺物実測図② ……254	第335図	SK302実測図 ……279
第294図	SD151出土遺物実測図③ ……255	第336図	SK302出土遺物実測図 ……279
第295図	SD151出土遺物実測図④ ……256	第337図	SK304実測図 ……279
第296図	SD151出土遺物実測図⑤ ……257	第338図	SK304出土遺物実測図 ……279
第297図	SD151出土遺物実測図⑥ ……258	第339図	SK115実測図 ……280
第298図	SD151出土遺物実測図⑦ ……259	第340図	SK115出土遺物実測図 ……280
第299図	SD151下層出土遺物実測図① ……261	第341図	SK118実測図 ……280
第300図	SD151下層出土遺物実測図② ……262	第342図	SK118出土遺物実測図 ……280
第301図	SD151下層出土遺物実測図③ ……263	第343図	SK121実測図 ……281
第302図	SD151下層出土遺物実測図④ ……264	第344図	SK121出土遺物実測図 ……281
第303図	SD151出土銭実測図 ……265	第345図	SK125実測図 ……282
第304図	SD153・SD151出土鉄器実測図 ……266	第346図	SK125出土遺物実測図 ……282
第305図	SD153出土遺物実測図 ……266	第347図	SK126実測図 ……283
第306図	SD153出土銭実測図 ……266	第348図	SK126出土遺物実測図 ……283
第307図	SD254・SD255実測図 ……266	第349図	SK146実測図 ……284
第308図	土坑 ……267	第350図	SK146出土遺物実測図 ……284
第309図	SK127実測図 ……268	第351図	SK147実測図 ……284
第310図	SK127出土遺物実測図 ……268	第352図	SK147出土遺物実測図 ……284
第311図	SK140実測図 ……269	第353図	SK150実測図 ……286
第312図	SK241実測図 ……269	第354図	SK150出土遺物実測図① ……286
第313図	SK140・SK214出土遺物実測図 ……269	第355図	SK150出土遺物実測図② ……287
第314図	SK227実測図 ……270	第356図	SK204実測図 ……287
第315図	SK227出土遺物実測図 ……270	第357図	SK205実測図 ……287
第316図	SK106実測図 ……271	第358図	SK204・SK205出土遺物実測図 ……287
第317図	SK106出土銭実測図 ……271	第359図	SK206実測図 ……288
第318図	SK106出土遺物実測図 ……271	第360図	SK206出土遺物実測図① ……288
第319図	SK110・SK111実測図 ……272	第361図	SK206出土遺物実測図② ……289
第320図	SK110・SK111出土遺物実測図 ……272	第362図	SK218実測図 ……289
第321図	SK129実測図 ……272	第363図	SK218出土遺物実測図 ……289
第322図	SK129出土遺物実測図 ……272	第364図	SK225実測図 ……290
第323図	SK202実測図 ……273	第365図	SK225出土遺物実測図 ……290
第324図	SK202出土遺物実測図 ……273	第366図	SK246実測図 ……290
第325図	SK214・SK215・SK217実測図 ……273	第367図	SK246出土遺物実測図 ……290
第326図	SK214・SK215出土遺物実測図 ……273	第368図	SK130実測図 ……291
第327図	SK214出土遺物実測図 ……274	第369図	SK130出土遺物実測図 ……291
第328図	SK222実測図 ……274	第370図	SK133実測図 ……291
第329図	SK222出土遺物実測図① ……276	第371図	SK133出土遺物実測図① ……292
第330図	SK222出土遺物実測図② ……277	第372図	SK133出土遺物実測図② ……293
第331図	SK226実測図 ……277	第373図	SK133出土遺物実測図③ ……293

第374回	SK133出土銭実測図	293	第412回	井戸	314
第375回	SK135実測図	293	第413回	SE220実測図	316
第376回	SK135出土遺物実測図	294	第414回	SE220出土遺物実測図	317
第377回	SK217実測図	294	第415回	SE221実測図	318
第378回	SK217出土遺物実測図	294	第416回	SE221出土遺物実測図①	318
第379回	SK230実測図	295	第417回	SE221出土遺物実測図②	319
第380回	SK230出土遺物実測図①	296	第418回	SE248実測図	320
第381回	SK230出土遺物実測図②	297	第419回	SE248出土遺物実測図	320
第382回	SK230出土銭実測図	298	第420回	SE247実測図	321
第383回	SK234実測図	298	第421回	SE247出土銭実測図	321
第384回	SK234出土銭実測図	298	第422回	SE247出土遺物実測図	321
第385回	SK234出土遺物実測図	299	第423回	SE108実測図	322
第386回	SK235実測図	299	第424回	SE108出土遺物実測図	323
第387回	SK235出土遺物実測図	300	第425回	SE203実測図	324
第388回	SK242実測図	300	第426回	SE203出土遺物実測図	324
第389回	SK242出土遺物実測図	300	第427回	SE119実測図	325
第390回	SK244実測図	301	第428回	SE119出土遺物実測図	325
第391回	SK244出土遺物実測図	301	第429回	SE249実測図	326
第392回	SK303実測図	301	第430回	SE249出土銭実測図	326
第393回	SK303出土遺物実測図	301	第431回	SE249出土遺物実測図	326
第394回	SK245実測図	302	第432回	SE228実測図	327
第395回	SK245出土銭実測図	302	第433回	SE228出土遺物実測図	327
第396回	SK245出土遺物実測図	302	第434回	SE142実測図	328
第397回	SK139実測図	303	第435回	SE142出土遺物実測図	328
第398回	SK139出土遺物実測図	303	第436回	SE259実測図	328
第399回	SK160実測図	303	第437回	SE259出土遺物実測図	328
第400回	SK160出土遺物実測図	303	第438回	SE132実測図	329
第401回	SK316実測図	303	第439回	SE238実測図	330
第402回	SK316出土遺物実測図	303	第440回	SE238出土遺物実測図	330
第403回	SK252実測図	304	第441回	その他の遺構	331
第404回	SK252出土遺物実測図	304	第442回	SX270実測図	332
第405回	SK236実測図	304	第443回	SX253実測図	332
第406回	SK236出土遺物実測図	305	第444回	SX134実測図	333
第407回	SK109・SK122・SK128・SK136・SK139実測図	307	第445回	SX134出土遺物実測図	334
第408回	SK141・SK148・SK154・SK157実測図	308	第446回	SX170実測図	334
第409回	SK158・SK201・SK212・SK213・SK223実測図	309	第447回	SX170出土遺物実測図	335
第410回	SK220・SK231・SK232・SK233・SK243・SK250実測図	310	第448回	SX301実測図	336
第411回	SK256・SK257・SK311実測図	311	第449回	SX301出土遺物実測図	336
			第450回	SX308実測図	336
			第451回	SX308出土遺物実測図	337
			第452回	SX113実測図	337
			第453回	SX113出土遺物実測図①	338

第454図	SX113出土遺物実測図②	339	第475図	包含層・整地層出土遺物実測図①	354
第455図	SX113出土遺物実測図③	340	第476図	包含層・整地層出土遺物実測図②	355
第456図	SX120出土遺物実測図	341	第477図	包含層・整地層出土遺物実測図③	356
第457図	SX124実測図	342	第478図	包含層・整地層出土遺物実測図④	357
第458図	SX124出土遺物実測図①	342	第479図	包含層・整地層出土遺物実測図⑤	358
第459図	SX124出土遺物実測図②	342	第480図	包含層・整地層出土遺物実測図⑥	359
第460図	SX143実測図	343	第481図	包含層・整地層出土遺物実測図⑦	360
第461図	SX143土層断面図	343	第482図	包含層・整地層出土遺物実測図⑧	361
第462図	SX143出土銭実測図	344	第483図	包含層・整地層出土遺物実測図⑨	362
第463図	SX143出土遺物実測図①	344	第484図	包含層・整地層出土遺物実測図⑩	363
第464図	SX143出土遺物実測図②	345	第485図	包含層・整地層出土遺物実測図⑪	364
第465図	SX143出土遺物実測図③	346	第486図	包含層・整地層出土遺物実測図⑫	366
第466図	SX258出土遺物実測図	347	第487図	包含層・整地層出土遺物実測図⑬	367
第467図	SX306出土遺物実測図	347	第488図	包含層・整地層出土遺物実測図⑭	368
第468図	SX117出土遺物実測図	347	第489図	柱穴出土銭実測図	369
第469図	SX307実測図	348	第490図	包含層・整地層出土銭実測図①	370
第470図	SX307出土遺物実測図	348	第491図	包含層・整地層出土銭実測図②	371
第471図	SX131実測図	349	第492図	中世以前の遺物実測図	372
第472図	SX131出土遺物実測図①	350	第493図	遺構変遷図①	375
第473図	SX131出土遺物実測図②	351	第494図	遺構変遷図②	376
第474図	SX131出土遺物実測図③	352			

第4章 中世大友府内町跡第8次調査区

第495図	中世大友府内町跡第8次調査区	377	第509図	SD103出土遺物実測図①	400
第496図	中世大友府内町跡第8次調査区北側土層図	380	第510図	SD103出土遺物実測図②	401
	380	第511図	SD103出土遺物実測図③	402
第497図	中世大友府内町跡第8次調査区南側土層図	381	第512図	SD103出土遺物実測図④	403
	381	第513図	SD103出土遺物実測図⑤	404
第498図	中世大友府内町跡第8次調査区西・東側土層図	382	第514図	SD103出土遺物実測図⑥	405
	382	第515図	SD103出土遺物実測図⑦	406
第499図	中世大友府内町跡第8次調査区遺構配置図	383・384	第516図	SD103出土遺物実測図⑧	407
	383・384	第517図	SD103出土遺物実測図⑨	408
第500図	中世大友府内町跡第8次調査区溝状遺構分布図	385	第518図	SD103出土遺物実測図⑩	409
	385	第519図	SD103出土遺物実測図⑪	410
第501図	調査区東側溝状遺構配置図	387・388	第520図	SD103出土遺物実測図⑫	411
第502図	SD101・SD102土層断面図	389・390	第521図	SD103出土遺物実測図⑬	412
第503図	SD103土層断面図	391・392	第522図	SD108平面図及び土層断面図	413
第504図	SD101・SD103遺物出土分布図	391・392	第523図	SD108層出土遺物実測図	414
第505図	SD101・SD103地形測量図	393・394	第524図	SD101出土遺物実測図①	415
第506図	調査区西側溝状遺構配置図	395・396	第525図	SD101出土遺物実測図②	416
第507図	SD105・SD106A・B土層断面図	397・398	第526図	SD101出土遺物実測図③	417
第508図	SD103増堀出土状況	399	第527図	SD101出土遺物実測図④	418

第528图	SD101出土器物实测图⑤	419	第570图	SK130实测图	447
第529图	SD101出土器物实测图⑥	420	第571图	SK132实测图	447
第530图	SD101出土器物实测图⑦	421	第572图	SK132出土器物实测图	447
第531图	SD101出土器物实测图⑧	422	第573图	SK139实测图	447
第532图	SD101出土器物实测图⑨	423	第574图	SK139出土器物实测图	448
第533图	SD101出土器物实测图⑩	424	第575图	SK144实测图	448
第534图	SD102出土器物实测图	424	第576图	SK144出土器物实测图	448
第535图	SD105出土器物实测图	425	第577图	SK146实测图	448
第536图	SD106A 出土器物实测图	427	第578图	SK147实测图	449
第537图	SD106B 出土器物实测图	428	第579图	SK147出土器物实测图	449
第538图	SD106—一括出土器物实测图	428	第580图	SK148实测图	449
第539图	SD107实测图	429	第581图	SK106实测图	450
第540图	SD107出土器物实测图	429	第582图	SK106出土器物实测图	450
第541图	SD104出土器物实测图	429	第583图	SK112实测图	450
第542图	土坑配置图	430	第584图	SK112出土器物实测图	450
第543图	SK104·SK105实测图	431	第585图	SK113实测图	451
第544图	SK104出土器物实测图	432	第586图	SK114实测图	451
第545图	SK105出土器物实测图	432	第587图	SK114出土器物实测图	452
第546图	SK107实测图	433	第588图	SK116实测图	453
第547图	SK107出土器物实测图	433	第589图	SK116出土器物实测图	453
第548图	SK108实测图	433	第590图	SK119实测图	454
第549图	SK108出土器物实测图	433	第591图	SK119出土器物实测图	454
第550图	SK109实测图	434	第592图	SK120实测图	454
第551图	SK109出土器物实测图	434	第593图	SK120出土器物实测图	455
第552图	SK110实测图	435	第594图	SK122实测图	455
第553图	SK110出土器物实测图①	436	第595图	SK122~SK124实测图	456
第554图	SK110出土器物实测图②	437	第596图	SK122出土器物实测图	457
第555图	SK111实测图	438	第597图	SK123实测图	457
第556图	SK111出土器物实测图	438	第598图	SK123出土器物实测图	458
第557图	SK101实测图	439	第599图	SK124实测图	458
第558图	SK102·103实测图	439	第600图	SK124出土器物实测图	458
第559图	SK115实测图	440	第601图	SK127实测图	459
第560图	SK115出土器物实测图	440	第602图	SK127出土器物实测图	459
第561图	SK118实测图	441	第603图	SK128实测图	460
第562图	SK118出土器物实测图	441	第604图	SK133实测图	460
第563图	SK125实测图	442	第605图	SK131出土器物实测图	461
第564图	SK126实测图	443	第606图	SK133实测图	461
第565图	SK126出土器物实测图①	444	第607图	SK133出土器物实测图	462
第566图	SK126出土器物实测图②	445	第608图	SK134·135·136实测图	463
第567图	SK126出土器物实测图③	446	第609图	SK134出土器物实测图	463
第568图	SK121实测图	446	第610图	SK137实测图	463
第569图	SK121出土器物实测图	446	第611图	SK137出土器物实测图	464

第612図	SK138実測図	464	第637図	SX101実測図	482
第613図	SK140実測図	465	第638図	SX102実測図	483
第614図	SK140出土遺物実測図	465	第639図	SX103実測図	483
第615図	SK141実測図	466	第640図	SX101出土遺物実測図	484
第616図	SK141出土遺物実測図	467	第641図	SX102出土遺物実測図	484
第617図	SK142実測図	468	第642図	SX103出土遺物実測図	484
第618図	SK143実測図	468	第643図	SP100実測図	485
第619図	SK142出土遺物実測図	469	第644図	SP109実測図	485
第620図	SK143出土遺物実測図	470	第645図	ビット配置図	485
第621図	SK145実測図	470	第646図	ビット出土遺物実測図	486
第622図	コンタ実測図	470	第647図	井戸配置図	487
第623図	調査区東端遺構配置図	471	第648図	SE102土層断面図	487
第624図	東端土坑群出土遺物実測図①	472	第649図	SE102実測図	488
第625図	東端土坑群出土遺物実測図②	473	第650図	井戸枠実測図	489
第626図	東端土坑群出土遺物実測図③	474	第651図	井筒方形横板枠上段の釘による本組模式図	489
第627図	東端土坑群出土遺物実測図④	474	第652図	SE102出土遺物実測図	489
第628図	東端土坑群出土遺物実測図⑤	475	第653図	SE101土層断面実測図	490
第629図	東端土坑群出土遺物実測図⑥	476	第654図	SE101実測図	491
第630図	整地層出土遺物実測図①	477	第655図	SE101出土遺物実測図	492
第631図	整地層出土遺物実測図②	478	第656図	一括出土遺物実測図①	493
第632図	整地層出土遺物実測図③	479	第657図	一括出土遺物実測図②	494
第633図	土塁状遺構土層断面図①	480	第658図	14世紀遺構配置図	495
第634図	土塁状遺構土層断面図②	481	第659図	15世紀遺構配置図	496
第635図	土塁出土遺物実測図	482	第660図	16世紀遺構配置図	497
第636図	整地層延長部分	482			
第5章 自然科学的分析					
第661図	中世大友府内町跡第5次調査区出土人骨①	502	第663図	中世大友府内町跡第8次調査出土ガラス玉	504
第662図	中世大友府内町跡第5次調査区出土人骨②	503	第664図	蛍光X線分析チャート図	505
			第665図	X線屈折分析チャート図	505

表 目 次

第1表	遺構一覧表①	15	第7表	SK126出土銅鏡一覧表	443
第2表	遺構一覧表②	16			
第3表	遺構一覧表①	213			
第4表	遺構一覧表②	214			
第5表	遺構一覧表	379			
第6表	SD106計測表	426			

遺物観察表目次

<p>遺物観察表1 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類①)511</p> <p>遺物観察表2 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類②)512</p> <p>遺物観察表3 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類③)513</p> <p>遺物観察表4 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類④)514</p> <p>遺物観察表5 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑤)515</p> <p>遺物観察表6 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑥)516</p> <p>遺物観察表7 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑦)517</p> <p>遺物観察表8 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑧)518</p> <p>遺物観察表9 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑨)519</p> <p>遺物観察表10 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑩)520</p> <p>遺物観察表11 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑪)521</p> <p>遺物観察表12 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑫)522</p> <p>遺物観察表13 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑬)523</p> <p>遺物観察表14 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑭)524</p> <p>遺物観察表15 5次調査A区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑮) 5次調査A区遺物観察表 (土製品)525</p> <p>遺物観察表16 5次調査A区遺物観察表 (石製品)526</p>	<p>遺物観察表17 5次調査A区遺物観察表 (金属製品) 5次調査A区遺物観察表 (ガラス製品) 5次調査A区遺物観察表 (木製品) 5次調査A区遺物観察表(瓦) ...527</p> <p>遺物観察表18 5次調査A区遺物観察表 (銅銭①)528</p> <p>遺物観察表19 5次調査A区遺物観察表 (銅銭②)529</p> <p>遺物観察表20 5次調査A区遺物観察表 (銅銭③)530</p> <p>遺物観察表21 5次調査A区遺物観察表 (銅銭④)531</p> <p>遺物観察表22 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類①)532</p> <p>遺物観察表23 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類②)533</p> <p>遺物観察表24 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類③)534</p> <p>遺物観察表25 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類④)535</p> <p>遺物観察表26 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑤)536</p> <p>遺物観察表27 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑥)537</p> <p>遺物観察表28 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑦)538</p> <p>遺物観察表29 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑧)539</p> <p>遺物観察表30 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑨)540</p> <p>遺物観察表31 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑩)541</p> <p>遺物観察表32 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑪)542</p> <p>遺物観察表33 5次調査B区遺物観察表 (土器・陶磁器類⑫)543</p>
---	---

遺物觀察表34	5次調査B区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑬) ……………	544	遺物觀察表44	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類①) ……………	554
遺物觀察表35	5次調査B区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑭) ……………	545	遺物觀察表45	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類②) ……………	555
遺物觀察表36	5次調査B区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑮) ……………	546	遺物觀察表46	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類③) ……………	556
遺物觀察表37	5次調査B区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑯) ……………	547	遺物觀察表47	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類④) ……………	557
遺物觀察表38	5次調査B区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑰) ……………	548	遺物觀察表48	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器③) ……………	558
遺物觀察表39	5次調査B区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑱) ……………	549	遺物觀察表49	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑥) ……………	559
遺物觀察表40	5次調査B区遺物觀察表 (土製品①) ……………	550	遺物觀察表50	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑦) ……………	560
遺物觀察表41	5次調査B区遺物觀察表 (土製品②) 5次調査B区遺物觀察表 (金属製品) 5次調査B区遺物觀察表 (石製品) ……………	551	遺物觀察表51	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑧) ……………	561
遺物觀察表42	5次調査B区遺物觀察表 (瓦) 5次調査B区遺物觀察表 (銅錢①) ……………	552	遺物觀察表52	8次調査区遺物觀察表 (土器・陶磁器類⑨) 8次調査区遺物觀察表 (金属製品・石製品) ……………	562
遺物觀察表43	5次調査B区遺物觀察表 (銅錢②) ……………	553	遺物觀察表53	8次調査区遺物觀察表 (瓦類) ……………	563
			遺物觀察表54	8次調査区遺物觀察表 (古銭) ……………	564

写真図版目次

巻頭図版 1	中世大友府内町跡第 5 次・第 8 次調査区 全景 (西側より)	中世大友府内町跡第 8 次調査区東側全景 (西側より)
巻頭図版 2	華南三彩壺 (トラディスカント壺) 金箔貼り京都系土師器里 華南三彩鳥形水滴	中世大友府内町跡第 8 次調査区西側全景 (西側より)
巻頭図版 3	中世大友府内町跡第 8 次調査区全景 (西 側より)	巻頭図版 4 整地層出土キリシタン遺物 コンタ SD103出土地蔵菩薩像
写真図版 1	中世大友府内町跡 第 5 次調査区全景567	写真図版 7 SK028 SK028出土遺物近景 SK035 SK031 SK032 SK049 (礎石廃棄土坑) SK049礎石近景① SK049礎石近景②573
写真図版 2	SD101・SX102・SD103全景 (1999年度) SX102撤去後 (1999年度) SD101・SX102・SD103全景① (2000年度) SD101・SX102・SD103全景② (2000年度) SX102撤去後① (2000年度) SX102撤去後② (2000年度)568	写真図版 8 SK004・SD405 SK002 SK003 SK003遺物出土状況 SK053 SK053遺物 (磁州窯系陶器) 出土状況 SK034 SK036574
写真図版 3	SX102検出状況 SX102土層 SD101コーナー遺物出土状況① SD101コーナー遺物出土状況② SD428・SD429 SD428遺物出土状況 SD428・SD429土層569	写真図版 9 SK029 SK025 SK038 SK019 SX628 SX629 SX630 SX632575
写真図版 4	SD152土層 SD152 SD425土層 SD425検出 SD425完掘570	写真図版 10 SX635 SX625 SX626 SX638 SX620 SX618 SX617・SX618① SX617・SX618②576
写真図版 5	SD153人骨出土状況 SD411~413検出状況 SD151人骨出土状況① SD411~413完掘 SD151人骨出土状況② SD431石塔類出土状況 SD431完掘571	写真図版 11 SX622 SX634 SX649 SX619 SX645a SX633 SX627577
写真図版 6	SK001 SK026 SK027 SK006 SK012 SK012金箔貼り京都系土師器出土状況 SK030 SK024572	写真図版 12 SE500上面 SE500完掘 SE501掘り下げ SE500断ち割り SE502 SE505検出 (上面に大型の礎が覆う) SE505転用石塔 (近畿・瀬戸内地域からの搬入) SE505完掘578
		写真図版 13 SE514 SE506土層断面 SE506竹の出土状況 SE506完掘 SE503 SE503結桶出土状況 SE511 SE504579

写真図版14	SE513 SE512 SE510 SE508 SF650 (近世初頭～前葉段階の路面) SF650 (中世段階の路面) SF650近景 (中世段階のバラス敷き部分) SF650断面 (調査区西壁部分) ……580	写真図版24	SD151泥塔出土状況 SD151人骨出土状況 SD105土層断面① SD105土層断面② SD123土層断面① SD123土層断面② SD145土層断面① SD145土層断面② ……590
写真図版15	備前系陶器壺 備前系陶器広口壺 SK028出土備前系陶器壺 備前系陶器水屋壺 苜花瓶 ……581	写真図版25	SD145 SD145 SD145金箔土師器出土状況 SD310 SD310土層断面① SD310土層断面② ……591
写真図版16	SD428出土土師質土器 SD428出土五彩 SD428出土青花 ……582	写真図版26	SK127 SK129 SK202 SK106 SK302 SK214・SK215・SK216検出状況 SK214・SK215・SK216 ……592
写真図版17	SD153第1集中部上層・下層出土 土師質土器 ……583	写真図版27	SK304 SK229 SK227 SK226 SK222 SK306 SK206 SK205 ……593
写真図版18	SD153第1集中部東側出土遺物 SD153第1集中部最下層出土漆器椀 SD153出土漆器椀 ……584	写真図版28	SK204 SK146 SK126 SK125 SK121 SK303 SK245 SK230 ……594
写真図版19	SD411出土遺物集合写真 SD411出土在地系土師質土器 SD411出土京部系土師器 ……585	写真図版29	SK150 SK217 SK133完掘状況 SK133 SK236 SK252 ……595
写真図版20	SK013出土遺物 SD151出土白色系土師質土器皿 SX633出土泥塔 SK009出土遺物 SK019出土遺物 ……586	写真図版30	SE220 SE220 SE220 SE220 SE221 SE221 SE221 SE221 ……596
写真図版21	盛州窯系陶器 唐津系陶器 彫三島茶碗 黒軸陶器蓋 黒軸陶器小壺 (茶入) 石帯 (丸柄) 用途不明銅製品 小銅仏 提子把手金具 分銅・鉛玉 ……587	写真図版31	SE247 SE247 SE248 SE248井筒 SE132 SE132井筒 SE203 SE203 ……597
写真図版22	平成12年度調査区 SX102 SX102土層断面 SX102石列 SD151 SD151 SD151土層断面 ……588	写真図版32	SE108 SE108 SE108半截状況 SE108完掘状況 SE119 SE119 SE142 SE228 ……598
写真図版23	SD153 SD153 SD153 SD105遺物出土状況 SD105遺物出土状況 SD114 SD105遺物出土状況 SD105遺物出土状況 ……589	写真図版33	SE249検出状況 SE249完掘状況 SE259 SE238 SE238 SE238井筒 SE238井筒 SE238完掘状況 ……599
		写真図版34	SX270検出状況 SX270 SX270軒銭 SX270軒銭近景 SX253検出状況 SX253 SX253軒銭 SX134 ……600

写真図版35	SX131 SX170 SX143 SX308 SX301 SX301 SX258 SX307	601	写真図版43	SK101完掘状況 SK102・103遺物出土状況 SK102・103完掘状況 SK104・105遺物出土状況 SK105遺物出土状況 SK106 SK107遺物出土状況 SD108土層断面	609
写真図版36	SD105出土京都系土師器① SD105出土京都系土師器② SK106出土京都系土師器	602	写真図版44	SK109 SK110遺物出土状況 SD111遺物出土状況 SD111完掘状況 SD112遺物出土状況 SD112完掘状況 SK113完掘状況 SK114遺物出土状況	610
写真図版37	SK229出土遺物 SK230出土遺物① SK230出土遺物② SK230出土遺物③	603	写真図版45	SK115遺物出土状況 SK115完掘状況 SK116完掘状況 SK117完掘状況 SK118完掘状況 SK120 SK121遺物出土状況	611
写真図版38	SX113出土墨唐京都系土師器 SE221出土瓦質火鉢 SD103出土遺物 SD151出土天日茶碗 SD151出土泥塔 SD123出土遺物 SX633・SD151出土泥塔	604	写真図版46	SK122～124遺物出土状況 SK122～124完掘状況 SK125 SK126鏡出土状況 SK126完掘状況 SK127遺物出土状況 SK128遺物出土状況 SK128完掘状況	612
写真図版39	SX143出土遺物 SX134出土遺物 SX301出土遺物 SK252出土遺物 SK236出土遺物 SX170出土遺物	605	写真図版47	SK130 SK131 SK132西から SK133遺物出土状況 SK133完掘状況 SK134・135・136完掘状況 SK137完掘状況 SK138遺物出土状況	613
写真図版40	包含層出土遺物① 包含層出土遺物② 包含層出土遺物③ 包含層出土遺物④ 包含層出土遺物⑤ 包含層出土遺物⑥ SD103出土遺物	606	写真図版48	SK138完掘状況 SK139遺物出土状況 SK140遺物出土状況 SK141遺物出土状況 SK142完掘状況 SK143完掘状況 SK144完掘状況 SK145完掘状況	614
写真図版41	SD101全景 SD101東から SD101西から SD102 SD103 SD103南から SD103北から SD103堆端出土状況	607			
写真図版42	SD105東側 SD105西側 SD106全景 SD106A SD106B SD107 SD108	608			

- 写真図版49 SK146完掘状況
SK147遺物出土状況
SK148完掘状況 東端土坑群
土器状遺構 SX101 SX103 …615
- 写真図版50 SE101 SE101完掘状況 SE102
SE102 SE102全景
SP100遺物出土状況
作業風景 ……………616
- 写真図版51 SK110出土景徳鎮系青花碗
SD103出土中国産青磁皿
中国産翡翠軸小皿
SK109出土天目茶碗
東端土坑群出土 志戸呂焼天目茶碗 617
- 写真図版52 整地層出土景徳鎮系青花碗
SD103出土景徳鎮系青花皿
…括出土景徳鎮系青花皿
SD101出土中国産白磁皿
SD103出土彰州窯系青花皿 ……………618
- 写真図版53 SD106A 出土粉青砂器
整地層出土備前系徳利
SK110出土中国産褐色釉陶器
SD103出土朝鮮産陶器碗
SD101出土瀬戸美濃系御皿
SE101出土瀬戸美濃系深皿 ……………619
- 写真図版54 SD103出土備前系統締陶器壺
SP100出土備前系統締陶器大甕
SD101出土備前系統締陶器注口部
整地層出土タイ産焼締陶器
SD101出土瓦質土器火鉢脚
SD101出土瓦質土器火鉢脚
SD103出土増嶋 三法量
土師質土器小皿蓋
SD108出土銅銭 ……………620

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

I. 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。しかし、昭和40年代以降の自動車交通量の増加に伴い、大分駅周辺の交通状況も変化を起し、周辺の鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。また、拡大する大分市中心街にとって、鉄道部分は市内を分断する要因ともなった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市圏鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立された。この動きは、25年後の平成7年に「大分駅付近連続立体交差事業」として採択され、具体化することになった。一方、大分川左岸沿いには、自らキリシタンとなり、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、道路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では新たに府内古図が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、「中世大友城下町跡」として周知道跡となった。大分駅高架化事業である「大分駅付近連続立体交差事業」は、この戦国時代の「府内」を東西に貫く土木工事となり、しかもこの町の中枢部である大友館の南側を通過するものであった。そこで、大分県教育委員会では、事業主体者である大分県土木建築部と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

II. 調査の経過

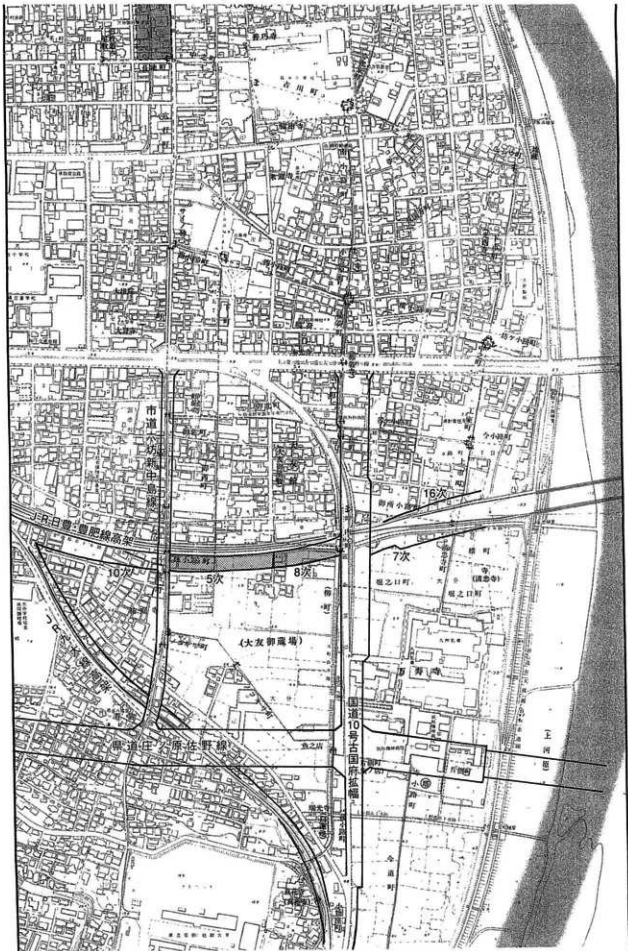
大分駅付近連続立体交差事業に伴う、大分県教育委員会による中世大友城下町跡の発掘調査は、平成11年8月から始まる。しかし、この道跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。すなわち、同じ道跡を2つの組織が発掘調査することとなった。そこで、大分市教育委員会と協議を行い、道跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友氏館部分は「大友氏館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手順に調査次数を重ねることとした。また、遺構実測をする際には、国土座標を必ず使用することにした。

こうして、平成11年8月、大分駅付近連続立体交差事業に伴う発掘調査として、「府内町跡5次調査」が、開始された。そして、平成12年から「府内町跡7次調査」と「府内町跡8次調査」が加わり、平成13年には「府内町跡10次調査」と「府内町跡16次調査」を実施した。そして、平成14年8月に「府内町跡10次調査」が完了し、この事業に伴う主要部分の発掘調査は終了した。その結果、大分駅付近連続立体交差事業に伴う中世大友城下町跡の発掘調査は、中枢部を含む部分に、東西に横断する巨大なトレンチを入れることになったものである。

本報告書は、このうち、平成11年から平成13年に調査した「府内町跡5次調査」、平成12年度に調査した「府内町跡8次調査」の報告書である。

大分駅付近
連続立体交差
事業

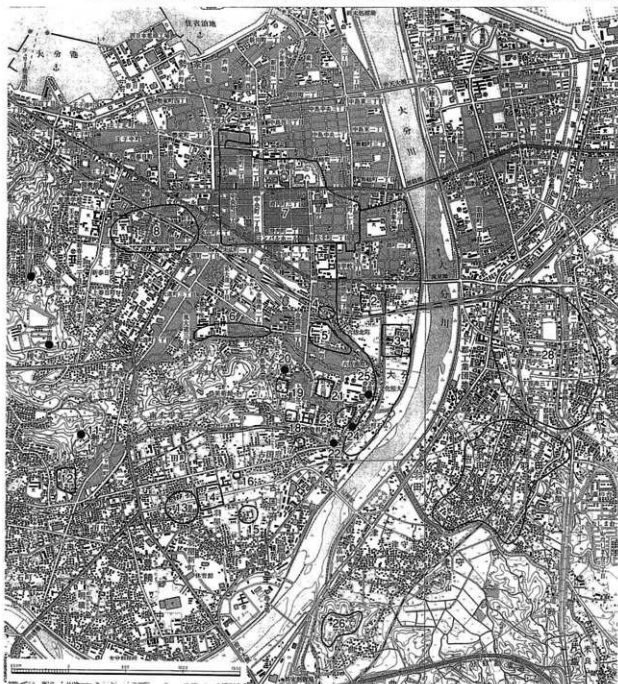
中世大友城下
町跡



第1図 地図上に復原された中世大友城下町時と大分駅周辺総合整備事業

Ⅱ. 調査の体制

この大分駅付近連続立体交差事業の発掘調査は平成11年8月から開始されたが、この事業区域の北側に隣接して「大友館跡」が想定されており、この地域に対して平成11年度から国指定史跡にするための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要遺跡に近接して実施されることとなり、事業と遺跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者を平成12年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会



第2図 中世大友城下町跡と周辺の遺跡

1. 中世大友城下町跡
2. 大友氏館跡
3. 万寿寺跡
4. 上野町・顕徳寺遺跡
5. 若宮八幡遺跡
6. 東大道遺跡
7. 府内城下町
8. 東田室遺跡
9. 亀甲山古墳
10. 古宮古墳
11. 千人塚古墳
12. 永興遺跡
13. 羽屋周遺跡
14. 金剛宝戒寺跡
15. 石明遺跡
16. 町口遺跡
17. 岩屋寺遺跡
18. 円寿寺
19. 金剛宝戒寺
20. 上野庵寺
21. 大友上原館
22. 岩屋寺石仏
23. 竜王畑遺跡
24. 元町石仏
25. 大匠塚古墳
26. 守岡遺跡
27. 羽田遺跡
28. 下部遺跡群

が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとなり、平成12年度は、大分駅付近連続立体交差事業の一部として開催した。平成13年度以降は本格的に開始された、国土交通省の国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査の事業で開催し、指導を受けた。

本書に報告する平成11・12・13年に発掘調査した府内町跡5・8次調査は以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

平成11年度

文化課長	山本芳直
参事	田原元基
課長補佐兼埋蔵文化財第2係長	清水宗昭
主幹	坂本嘉弘
主任	吉田 寛 (府内町跡5次調査 本書掲載)
嘱託	山路康弘

平成12年度

調査指導者	河原純之 (千葉大学文学部教授) 後藤宗俊 (別府大学文学部教授) 小野正敏 (国立歴史民俗博物館助教授) 坂井秀弥 (文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官)
-------	---

文化課長	山本芳直
参事兼課長補佐	伊藤正行
参事兼課長補佐	清水宗昭
主幹兼埋蔵文化財第2係長	栗田勝弘
主幹	坂本嘉弘
主査	甲斐寿義 (府内町跡8次調査担当 本書掲載)
主査	田中裕介 (府内町跡7次調査担当)
主査	植島隆二 (府内町跡5次調査B区担当 本書掲載)
主査	吉田 寛 (府内町跡5次調査A区担当 本書掲載)
嘱託	中田裕樹
嘱託	藤原由博
嘱託	阿比留士朗
嘱託	村上敬一

平成13年度

文化課長	工藤正徳
参事兼課長補佐	麻生祐治
参事兼課長補佐	清水宗昭
大型県事業担当主幹	坂本嘉弘
主査	田中裕介 (府内町跡7次調査・16次調査担当)
主任	植島隆二 (府内町跡5次B調査担当 本書掲載)
主任	吉田 寛 (府内町跡5次A調査担当 本書掲載)
主任	後藤晃一 (府内町跡10次調査担当)
嘱託	服部真知
嘱託	中田裕樹
嘱託	阿比留士朗

第2節 遺跡の立地と環境

I. 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。そうした中、中世以降、今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、政治経済の中心地となる。この地域は、東側を大分川が北流し、北側を別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40~30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高100mから80mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

こうした地域の中で、中世大友城下町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。「府内古園」に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、原地形が残されている部分からの観察から、低湿地の広がりが確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、「府内古園」に描かれる舟入に続いている。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。おそらくこの間に2~3m堆積し形成されたものと考えられる。

II. 歴史的環境

別府湾に近い大分川左岸地域化が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている小宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大真人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)・稚臣(わかみ)の墓と想定されている。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半~8世紀初頭の方形の掘方をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。

その後の設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された竜王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地堀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている。この遺跡の東北部には8世紀~9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治の中心地であったと考えられている。

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年(1053)、康平2年(1069)、承保4年(1077)に「勝津留島四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高(隆)国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留島」については守護所の設置場所と関わる

小宮古墳
壬申の乱
大分の君
羽屋井戸遺跡
羽屋園遺跡

竜王畑遺跡

岩屋寺石仏

元町石仏

大友頼泰

新御成敗状

重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、「府内古園」に描かれた「府内」の起源的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年(1242)の新御成敗状で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示す。

石明遺跡

しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留島」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、最初に豊後に南向した三代大友頼泰初期の守護館の指摘もある。

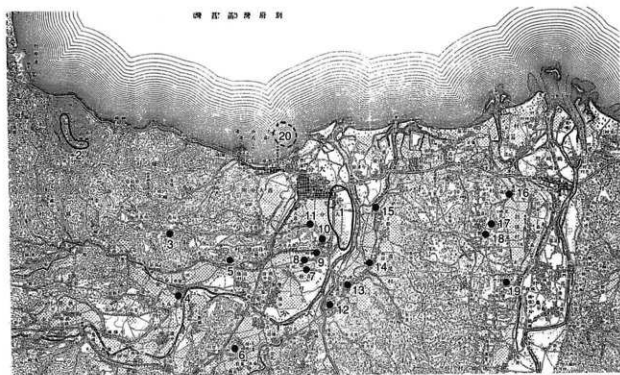
万寿寺

14世紀代になると、徳治元年(1306)に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

上原館

町口遺跡

この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下郡遺跡群や津守・片島地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的存在である。一方、上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館があり、その南の古園府地区には町口遺跡、北側にも16世紀の遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。このように、16世紀代の府内は、「府内古園」に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている。



第3図 中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡

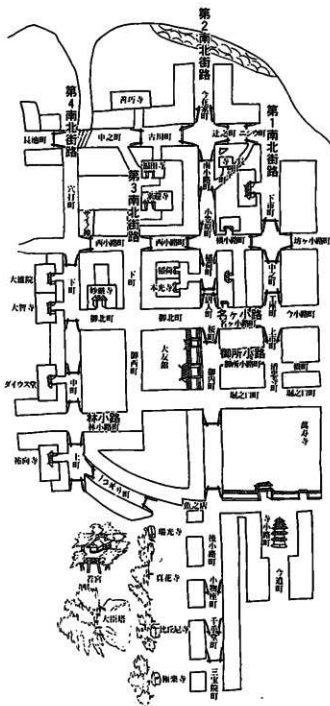
1. 中世大友城下町跡 2. 高崎城 3. 金谷泊山城 4. 賀来氏館 5. ニヶ城 6. 雄城城 7. 石明遺跡
8. 町口遺跡 9. 岩屋寺遺跡 10. 上原館 11. 東大遺跡 12. 守岡城 13. 津守遺跡 14. 片島遺跡
15. 下郡遺跡 16. 千歳城 17. 猪野新土井遺跡 18. 猪野中原遺跡 19. 横尾遺跡 20. 沖ノ浜(推定)

第3節 報告書作成にあたって

I. 府内古園と街路の名称

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古園」は、現在の地図との整合性を求める作業が一部で行われた⁽¹⁾が、永く文献学ではその信憑性が疑われてきた⁽²⁾。しかし、1970年代の中頃から、他の文書からの検討がおこなわれ⁽³⁾、その信頼性が増してきた⁽⁴⁾。そして、大分市史が1980年代後半に編集されたおり、それまで知られていた「府内古園」の元園と思われる絵図が確認された。そこで、明治時代の地籍図との照合をはかり、現在もその地に存在する大智寺・稲荷などを基点とし、「府内古園」を大分川左岸の現在の地図に写す作業を行った。その結果、ほぼ正確にその位置を把握することが出来た。発掘調査は、この地図を頼りに町屋の名称や道路の位置等を推測しながら実施している。

しかし、現在3種類12枚が確認されている「府内古園」は、その研究⁽⁵⁾によると成立年代は、寛永13年(1634)を遡らず、A類・B類・C類に分類され、その順で新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされた。報告書作成にあたり、こうした「府内古園」間の不整合と名称の



第4図 府内古園と街路名称の設定
(府内古園A類をトレースし一部改定)

註(1) 大分市「大分市史 上巻」(大分市史編纂審議会 1956年)

(2) 外山幹夫「人物叢書 大友宗麟」(吉川弘文館 1975年)

(3) 渡辺遊夫「古代中世の大分」(『大分縣地方史』第73号 大分県地方史研究会 1974年)

(4) 橋本権六「旧府内城下町の信憑性」(『大分縣地方史』第94号 大分県地方史研究会 1979年)

無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じた。すなわち、「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」もB・C類にはあるが、A類には見られない。さらに、府内の町中を走る幾筋もの街路の名称である。「府内古園」には4本の南北の街路と5本の東西の街路が描かれている。南北の街路についてはこれまで、大分川側から一之大路・二之大路・三之大路・四之大路⁽⁶⁾や、市町筋・大路筋・寺町筋⁽⁷⁾、南北路1・南北路2・南北路3・南北路4⁽⁸⁾などと仮称されてきた。本報告書では、全てが町を貫く大路ではないことや、文章との混乱などを考え、大分川側から第1南北街路・第2南北街路・第3南北街路・第4南北街路とした。街路としたのは、ルイス・フロイスの日本史の訳文⁽⁹⁾が「街路」とされており、都市内の道路の意味でこの名称を使用した。また東西の道路については、御所小路町・名ヶ小路町があり、それぞれ、「御所小路」「名ヶ小路」とした。「御蔵場」については、将来検討することを含め、そのまま使用する。

Ⅱ. 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年

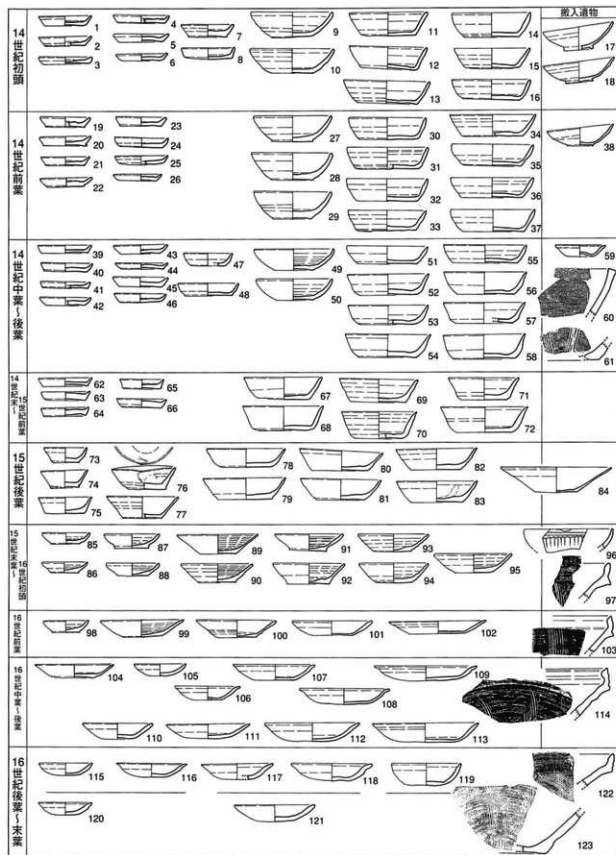
古文書によると、大分川の左岸地域は11世紀に「市河」として登場し、以後、「府中」「府内」と呼ばれながら、17世紀初頭に近世府内城下町に移転するまで、人々の活動が継続して存続する。発掘調査を実施するにあたり、大分市教員委員会と大分県教員委員会の複数の職員が担当することが予測され、お互い年代的な共通認識を持つ必要が生じた。そこで、継続的に存続したと考えられる中世大友城下町跡の出土土物の大半を占める土師質土器の編年の確立を、この遺跡のみで目指すことにした。

白杵石仏群
 玖珠山城跡
 八坂久保田遺跡
 八坂本庄遺跡
 八坂中遺跡

豊後地域の11世紀から17世紀初頭の土師質土器の編年は、白杵石仏群の調査⁽¹⁰⁾や玖珠町玖珠山城跡⁽¹¹⁾の報告書で試みられ、上野淳也⁽¹²⁾と塩地潤一⁽¹³⁾は16世紀代の土師質土器の編年案を提示している。また、坪根伸也・塩地潤一は大分県内で蓄積した8世紀から16世紀までの発掘資料の編年を試みている⁽¹⁴⁾。さらに、最近では後藤一重が、別府湾を挟んで中世大友城下町跡の北側にある八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土質土器を編年している⁽¹⁵⁾。

以上のような研究成果を元にまとめたのが第5図の編年表である。現時点で、遺構出土のまとまりのある最古の資料は1～18の、府内町第35次調査 S017出土資料である。溝状遺構に廃棄された状態で出土したもので、土師質土器の皿1～6は、口径が8.3cm、器高1.3cm、底径6.5cmであるが、7・8は器高が1.9cmと高い。また、杯9・10は、口径が12.7cm、器高3.8cm、底径は6.6cmの底径が小さいタイプであるが、11～16は、口径が12.1cm、器高3.3cm、底径は8.6cmで、底

- (5) 木村幾多郎「府内古園の成立」(『大分市歴史資料館年報 1992年度版』大分市歴史資料館 1993年)
- (6) 鹿毛敏夫「文献・絵図からみた大友館と府内の町一都市と国際性一」(『南筑都市・豊後府内一都市と交易一』中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001年)
- (7) 木村幾多郎「府内と府内古園」(『南筑都市・豊後府内一都市と交易一』中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001年)
- (8) 池造千太郎・上野淳也「大友府内6一中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書一」(大分市教育委員会 2003年)
- (9) 松田毅・川崎桃太「フロイス日本史」1977～1980年
- (10) 菊田徹「白杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書」(白杵市教育委員会 1982年)
- (11) 渋谷忠孝・後藤一重「小結一土師質土器の位置づけを中心に一」(『玖珠山城跡』玖珠町教育委員会 1984年)
- (12) 上野淳也「千人塚遺跡出土の土師質土器について」『千人塚遺跡』緒方町教育委員会 1999年
- (13) 塩地潤一「九州出土の京都系土師器」『中近世土器の基礎研究 XIV』日本中世土器研究会 1999年
- (14) 坪根伸也・塩地潤一「豊後の土器編年」『大分・大友土器研究会論叢』所収 大分・大友土器研究会 2000年
- (15) 後藤一重「八坂の遺跡」大分県文化財調査報告書第150冊 大分県教育委員会 2003年



第5図 中世大友城下町跡出土土師質土器編年図

1～18 (府内町跡35次 S-017) 19～38 (府内町跡30次 S-115) 39～61 (府内町跡30次 S-109) 62～72 (府内町跡20次 A S-1505) 73～84 (大友氏館跡1次 S-008) 85・87・91 (府内町跡5次 B SK-245) 86・93 (府内町跡5次 B SK-134) 88・89・92・96 (府内町跡5次 B SD-251) 90・94 (府内町跡5次 B SK-230) 95・97 (府内町跡5次 B SK-234) 98・99・102 (府内町跡5次 A SD 153下層) 100・101 (府内町跡5次 B SK-121) 103 (府内町跡5次 B SK-206) 104・114 (府内町跡5次 B SD-222) 105～109 (府内町跡5次 B SD-105) 110～113 (府内町跡5次 B SK-106) 115・117・118 (府内町跡4次 S-160) 116・119 (大友氏館跡1次池Ⅲ期) 120～123 (府内町跡4次 S-64)

吉備系土師器
鹿田遺跡

径が大きい。11~16の底部から口縁部にかけての器壁の厚さはほぼ一定であるか、やや口縁部にかけて厚らむ。これらの遺物に、口径11.1cm、器高3.4cm、高台の底径4.4cmの17・18の吉備系土師器が伴う。この吉備系土師器は岡山県鹿田遺跡での研究によると14世紀前葉に位置づけられている¹⁶⁾が、この土師器の器形変化の特徴は、口径と底部高台の縮小化である。中世大友城下町跡で次に編年される府内町第30次調査 S115からさらに、新しい傾向の吉備系土師器が出土していることから、14世紀初頭に位置づける。

その、府内町第30次調査 S115は、小土坑に一括廃棄された土器群である。19~38は代表的な資料であるが、組成は口径が8.1cm、器高1.4cm、底径6.4cmの皿、口径12.3cm、器高4.0cm、底径は6.3cmの底径が小さいタイプ、口径12.6cm、器高3.2cm、底径は9.0cmの底径が大きいタイプがある。この底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、口縁部が肥厚する傾向が強い。この土器群には38の口径10.2cm、器高2.9cm、底径4.0cmの吉備系土師器が伴う。この土器は、17・18よりさらに口径が小さく、高台も断面三角形で矮小化している。こうしたことから、この時期を14世紀前葉に位置付ける。

京都系土師器
備前焼插鉢
桑岡実の編年

39~61の資料は府内町第30次調査 S109出土の資料である。この遺構は大型の土坑で、中位と間層を挟んで下位から一括廃棄された状態で土器が出土した。図示したのは中位出土の代表的な資料である。組成は皿が口径8.1cm、器高1.2cm、底径6.6cmの39~46のタイプが主体をしめ、口径が小さく器高が高い47、口径が大きい48なども見られる。坏は、口径12.1cm、器高3.3cm、底径は5.6cmの底径が小さいタイプと口径12.6cm、器高3.3cm、底径は9.1cmの底径が大きいタイプがある。底径の小さいタイプは、やや小振りになり、内面に凹線状の整形痕が残る。また、底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、底部に近い部分が肥厚し、口縁部にかけて外反し、口縁端部が尖る傾向が強い。この土器群には59の口径7.3cm、器高1.5cmの京都系土師器と60・61の備前焼插鉢が伴う。京都系土師器は、小森俊寛・村上遼章による13世紀末から14世紀中頃に定型化し15世紀末まで見られる白色系薄手のヘソ皿である¹⁷⁾。また、備前焼插鉢は、桑岡実の編年案¹⁸⁾では14世紀後半にあたる。これらの資料から、この土器群を14世紀後葉と考える。

62~72は府内町第20次 A 調査 S1505出土の資料である。出土量は多くないが、組成は皿が口径7.7cm、器高1.4cm、底径6.3cmで、底部が平い。前時期に比較すると小振りになる。坏は、口径12.3cm、器高3.8cm、底径は7.9cmで、前時期より、器高が高く、底径が小さくなる。口縁部は回転を利用し引き出すようにし、器高を高くして反らせ、端部は尖る。時期を決定できる明確な資料はないが、前後の関係から14世紀末から15世紀前葉と考える。

73~84の資料は大友氏館跡1次調査 S008出土資料である¹⁹⁾。遺物は庭園遺構に切られる長方形の土坑から廃棄された状態で出土している。73~75の小型の坏の口径は6.9cm・7.5cm・8.6cm、器高は2.4cm~2.7cm、底径は4.0cm・4.7cm・6.3cmである。また、76・77の中型の坏は口径10.2cm・11.4cm、器高は3.3cm・3.5cm、底径は6.2cmである。そして、坏の口径は12.8cm、器高3.2cm、底径8.0cmが平均である。こうした在土土器は、前時期までの皿と坏の基本的な組成が見られず、小型・中型の坏が一定量みられ、法量分化の傾向が見られる。しかし、色調は褐色色

(16) 山本悦生「吉備南部地域における古代末~中世の土師器の展開」(『中近世土器の基礎研究』編 日本中世土器研究会 1992年)

(17) 小森俊寛・村上遼章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」(『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年)

(18) 桑岡実「備前焼插鉢の編年について」(『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000年)

(19) 高富豊「X X II 大友館跡第1次調査」(『大分市埋蔵文化財年報』vol.10 1998年度 大分市教育委員会 1999年)

系・淡褐色と前時期と同じである。こうした在地系土器に、口径17.6cm、器高5.5cm、底径は6.6cmの84の色調が白色の薄手の坏が伴う。この土器は、周防の大内氏館跡の編年によると15世紀後葉に位置付けられている⁽²⁰⁾。しかし、中世大友城下町跡では、この後、在地系土器の色調が赤褐色化し、それに薄手の白色系土器が伴う時期がある。このため、この時期を、15世紀後葉と考える。

85-97は府内町跡5次B調査区出土の資料である。85・87・91はSK245、86・93はSK134、90・94はSK230、95・97はSK234でいずれも土坑に廃棄された状態で出土した。また、88・89・92・96は大規模な区画溝であるSD251の下層からの出土である。図示した土器の口径は85・86が7.6cm・7.2cm、87・88が8.8cm・8.5cm、91・93・94が10.8cm、90が11.4cm、95が12.0cm、89が12.9cmで境界は不明であるが法量分化が明確である。こうした在地系土器は、前時期84の薄手の白色系土器の影響を受けて成立したと考えられ、内面に回転を利用した強い螺旋状の指撫でや工具による螺旋状の沈線が見られる。色調も赤褐色で、73-83までの資料とは異なる。またこの土器は、より古式のもの、製作時の粘土塊からの切り離しの際の痕跡か、底部の外端が直立し、口縁端部にかけて内消し、口唇部断面は「コ」の字状になる。内面の強い螺旋状のナデは内底部までおよび、えぐれている。これが新しくなるにつれ、底部からの立ち上がり94・95のように丸みを帯び、口縁部は外反し、口唇部断面は丸みを帯びる。また、内底部の中央は横ナデで平坦に仕上げている。これらの土器には、15世紀代の青磁碗⁽²¹⁾や備前焼鉢が伴い、次の時期に京都系土師器が見られることから、15世紀末葉から16世紀初頭と考える。

98-103は府内町跡5次調査区出土である。98・99・102は5次A調査区のSD153の下層で近接して出土した一括性の強い土器である。100・101は5次B調査のSK121、103はSK206出土の土器である。在地系土器は、99に見られるように、底部からの立ち上がりが丸みを帯び、口縁部は明らかに外反し、口唇部断面は尖るように丸みを帯びる。内面は螺旋状の工具による沈線文があり、内底部は平坦に仕上げている。この土器群には非ロクロ系土師器である101・102の京都系土師器が伴う。この土器は埴地編年の1期にあたりと考える。在地系土師器が赤色系であるのに対し、京都系土師器は白色系である。器形は、側面観が扁平な「逆台形」をし、口縁断面は紡錘形で端部は丸い。器壁は薄く、特に底部は薄い。この新しい土師器作りの影響か、京都系土師器の胎土でロクロ成形したものや、100のように外面下位に段が付くものなどが見られる。

京都系土師器の導入時期は、周防の大内氏との関連や、京都からの直接的な導入などが考えられているが、ここでは埴地編年・小野貫史⁽²²⁾が論じた「式三献」に代表される室町幕府からの儀礼の導入時期である天文6年(1537)とし、16世紀前葉に位置づける。

104-114は府内町跡5次B調査区出土の資料である。104-109はSD105、それに切られたSK106から出土した110-113、114はSK222出土である。SD105からは多くの京都系土師器が出土しており、その口径は約8.2cm・10.5cm前後、12-13cm、14.3cm前後、16cmの5法量に明確に分かれる。口縁部は外面を強い指ナデで仕上げ、門輪状に窪むため、急に外反する形態になる。これらは埴地編年の2期に相当する。この資料より新しい遺構から出土した110-113は若干大型化し、器高も高くなる。114は16世紀代の備前焼鉢である。この資料は、前後の関係から、16世紀

(20) 古賀信幸「大内氏館跡Ⅱ・大内氏関連町並遺跡Ⅰ-大内氏遺跡発掘調査報告書Ⅱ-」(山口市埋蔵文化財調査報告35集 山口市教育委員会 1991年)

(21) 上田秀夫「14-16世紀の青磁碗の分類」(『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会 1982年)

(22) 埴地編年「九州出土の京都系土師器Ⅲ」(『中世土器の基礎研究』XⅣ 日本中世土器研究会 1999年)

小野貫史「大友氏における『式三献』について」(『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 2001年)

中葉から後葉と考える。

115～123の資料の内、116・119は大友氏館跡1次調査の庭園の池Ⅲ期からの出土で、それ以外は府内町跡4次調査出土である。前時期に比べると、器壁が厚くなり、口径に比べ器高が高くなる。これらは埴地福年の3期にあたると考える。

また、119のように埴形に近い形態の非ロクロ系土師器がみられる。その出現時期は、遡る可能性もあるが、この時期から明確に伴う。これらと一緒に出土する備前焼擂鉢は、斜め擂目で16世紀後葉から末葉に福年されている。また、府内町4次調査区は府内古園の上市町の一角にあたり、報告書⁽²³⁾によると2枚の火災にかかわる層と処理土坑があり、ひとつは大正14年(1586)の島津氏侵攻、もうひとつを慶長元年(1596)の慶長大地震に起因すると考えている。こうしたことから、これらの時期を16世紀後葉から末葉と考える。

島津氏侵攻
慶長大地震

(23) 河野史郎「大友府内 4 - 中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書 -」大分市教育委員会 2002年

第2章 中世大友府内町跡第5次調査A区

第1節 調査の経緯

大友御成場
林小路町

中世大友府内町跡第5次調査A区は、大分県大分市六坊北町に所在し、標高約4mの沖積低地上に立地する調査区である。1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は「大友御成場」の推定北辺境界ラインの一部と北西隅部および中世府内を構成する41町のひとつである「林小路町」に相当する地点であった。

中世大友府内町跡は、1993年発行の『大分県遺跡地図』において、「中世大友城下町跡」の名称で登録されていた周知遺跡である。本章で検討する第5次調査区については、大分駅周辺総合整備事務所の依頼により、大分県教育委員会が1999年(平成11年)6月7日から9日に確認調査を行い、16世紀代に比定される柱穴・土坑などの遺構や複数の整地層・遺物包含層の存在が確認された。これを受けて、直ちに本調査に移行するための予算措置と準備が行われ、同年8月末から表土剥ぎに着手し、9月上旬には本格的な発掘調査が開始された。

発掘調査では排土置場を用地内で確保しなければならなかったため、調査区内を3度にわたって切り返しながら調査が行われた。さらに、通学路等に使用されていた北端部の里道部分についても、南側の調査終了後に条件整備を行い、調査の最終局面で発掘調査の対象とした。年度ごとの調査期間と調査対象面積は、以下の通りである(第6図参照)。

平成11年度調査区(1A~5A区) 1999年9月~2000年3月 調査面積約390m²

平成12年度前半期調査区(98A~0A区・98B~3B区) 2000年4月~2001年1月 調査面積約510m²

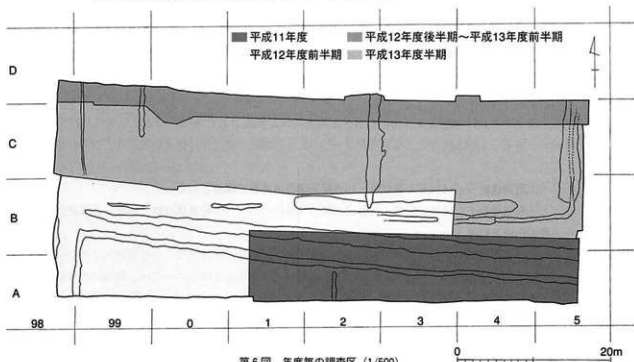
平成12年度後半期~13年度前半期調査区(4B~5B区・98C~5C区)

2000年2月~2001年7月 調査面積約730m²

平成13年度後半期調査区(98D~5D区=里道調査区) 2001年11月~12月 調査面積約210m²

調査面積
約1,840m²

以上のように、調査期間は1999年9月から2001年7月および2001年11~12月の25ヶ月であり、最終的な発掘調査面積は約1,840m²におよぶこととなった。



第2節 遺構と遺物

I. 遺構の概要と基本順序

中世大友府内町跡第5次調査A区では、縄文時代から近世に至る各時代の遺物が出土しているが、遺構が主体的に検出される時期は15世紀後半から16世紀代の戦国時代である。

当該調査区では国土座標に乗せた10m方眼を設定し、それぞれの小区画を西から東へ99～5、南から北へA～Dの番号を付し、数字とアルファベットの組み合わせで、各々の区画を呼称することにした（例えば98A区、5D区など）。

基本順序

本調査区では旧表土上に近年の造成による置土が0.6～0.9mほど堆積しており、この造成土の下部には近世から現代の所産と思われる水田層が0.5mほど堆積する。発掘調査ではこの水田層より上位を大型重機によって除去し、それより下位の遺物包含層については、発掘作業員を投入して手掘りによる掘り下げを行った。平成11年（1999年）度の調査区では、包含層掘り下げの初期の段階で唐津系陶器が出土することを確認し、最も上位に堆積する遺物包含層が近世初頭のものであることが判明したが、一部の土坑・築石遺構を除いて当該時期の明確な遺構を確認することはできなかった。この遺物包含層の掘り下げがほぼ終了した時点で、後にSX102とする積土遺構（大友御蔵場の北側区画遺構あるいは道路遺構）の上部部が検出された。そこで当該遺構の性格を把握するために調査区東端部に先行トレンチを設定し、部分的な断ち掘りを行ったところ、SX102が砂質土と粘質土を交互に積み上げた盛土で構成されており、南北に溝を伴う遺構であることやその下部に大型の掘り込み（後に溝SD153、SD151と判明）が存在することを確認した。以上のように、平成11年度の調査区では積土遺構SX102とそれに付属する溝SD101・SD103等を主要遺構とする16世紀後半以降の上層遺構群とSX102の下部に構築された溝SD153・SD151等を主要遺構とする16世紀前葉以前の下層遺構群に大別され、切り合い関係や出土遺物から、それぞれの遺構群がさらに細かい時期に細別されることが判明した。

平成12年（2000年）度以降の調査区でも、ほぼ同様な堆積状況が確認されている。平成12年度前半期の調査区では、SX102・SD101・SD103の延長部を確認し、SD101が南側に屈曲し、SD410とした溝と接続することを確認した。これらの遺構の下部に存在するSD153・SD151の遺構についても、その延長部を検出できた。平成12年度後半期から平成13年（2001年）度前半期の調査区では、調査区の西端部に標高きの道路遺構SF650を検出し、当該道路が中世から唐津系陶器を出土する近世初頭まで使用が続けられていたことを確認した。平成13年度後半期の調査区（里道調査区）ではこれまでに検出されていた遺構の延長部を確認するとともに、他の調査区と同様に上下2面に大別される遺構群を確認している。

このように、中世大友府内町跡第5次調査A区で検出されたすべての遺構の層位と時期を確認した結果、上層遺構群と下層遺構群は下記のような時期の遺構群で構成されることが明らかになった。

上層遺構群

上層遺構群……16世紀末葉以降・16世紀後葉の遺構群で構成される。

下層遺構群

下層遺構群……16世紀前葉・15世紀末葉～16世紀初頭・15世紀後葉以前・古代（9世紀）の遺構群で構成される。

唐津系陶器を含む遺物包含層

上層遺構群の上位には、調査区のほぼ全面に渡って唐津系陶器が含まれる遺物包含層が存在していることも確認されている。しかし、唐津系陶器を出土する遺構については、調査区西端部で検出された道路遺構SF650の他には、明確なものが確認できていない。各々の遺構の配置と土層の堆積状況については、第7～10図を参照されたい。また、本報告書で使用している遺構番号と発掘調査時に使用した遺構名称が異なるため、第1・2表で提示した遺構一覧表で整理を行っている。

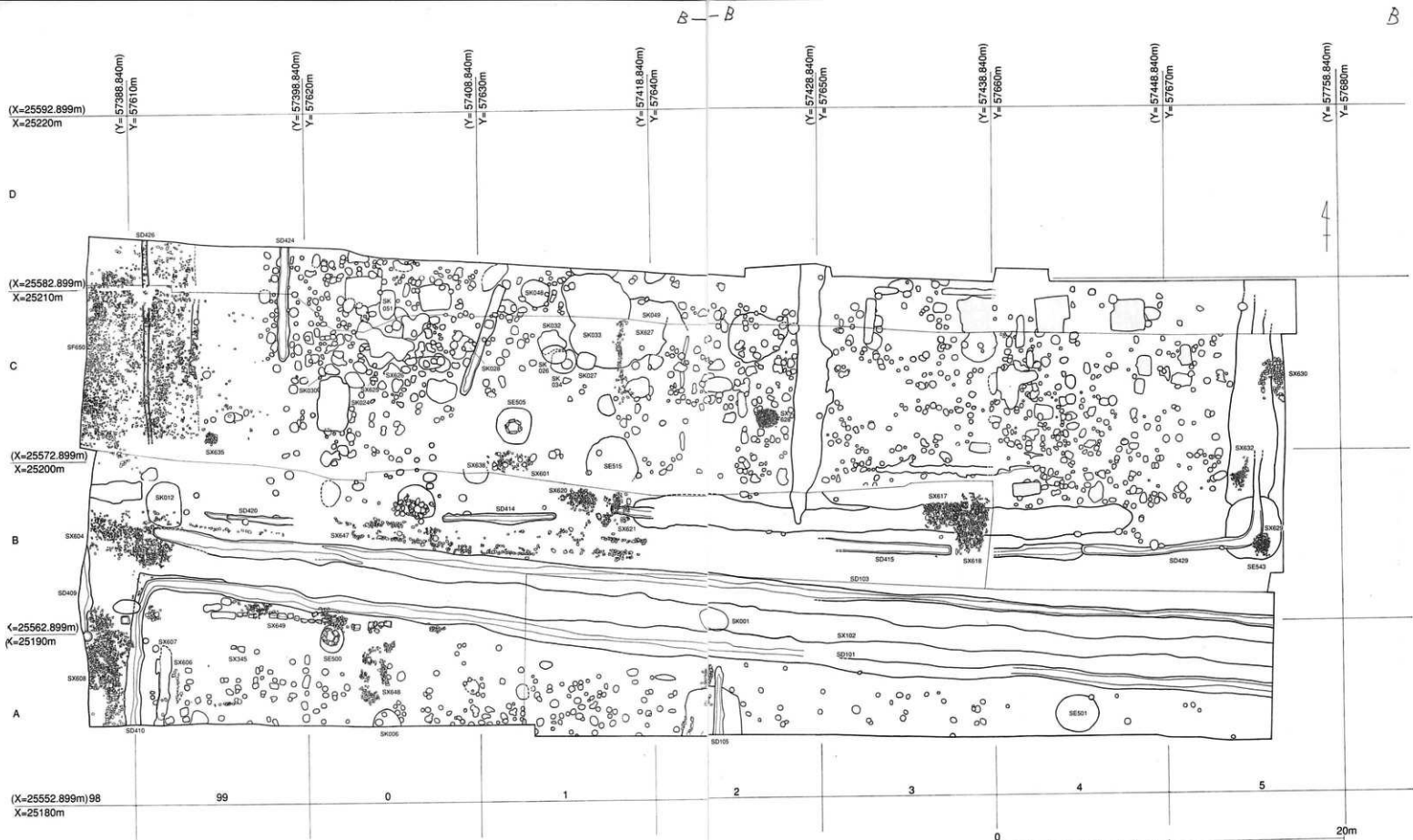
以下、遺構と出土遺物の詳細を報告する。

第1表 遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK001	SK 1	土坑	2 B 区	16世紀末葉～17世紀初頭		96
SK002	SK 2	土坑	4 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭		110
SK003	SK 3	土坑	4 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭		110
SK004	SK 4	土坑	2 A 区	16世紀中葉～後葉		108
SK005	SK 5	土坑	1 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭		114
SK006	SK 6	土坑	0 A 区	16世紀後葉		97
SK009	SK 9	土坑	1 A 区	14世紀代		118
SK011	SK11	土坑	99A 区	時期不明		—
SK012	SK12	土坑	99B 区	16世紀後葉	金箔貼り京都系土師器出土	98
SK013	SK13	土坑	99B 区	15世紀末葉～16世紀初頭		115
SK014	SK14	土坑	3 B 区	15世紀末葉～16世紀初頭		117
SK017	SK17	土坑	1 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭		113
SK018	SK18	土坑	1 A 区	15世紀後葉以前		113
SK019	SK19	土坑	99A 区	古代(9世紀)		121
SK024	SK24	土坑	0 C 区	16世紀後葉		100
SK025	SK25	土坑	99A 区	時期不明		120
SK026	SK26	土坑	1 C 区	16世紀末葉～17世紀初頭		95
SK027	SK27	土坑	1 C 区	16世紀末葉～17世紀初頭		95
SK028	SK28	土坑	0 C 区	16世紀後葉	備前焼の壺が破砕状態で出土	100
SK029	SK29	土坑	0 C 区	15世紀後葉以前		120
SK030	SK30	土坑	0 C 区	16世紀後葉		99
SK031	SK31	土坑	1 C 区	15世紀末葉～16世紀初頭	2 時期の土坑が重複	103
				16世紀後葉		
SK032	SK32	土坑	1 C 区	16世紀後葉		103
SK033	SK33	土坑	1 C 区	16世紀後葉		105
SK034	SK34	土坑	3 C 区	15世紀末葉～16世紀初頭		116
SK035	SK35	土坑	1 C 区	16世紀後葉		101
SK036	SK36	土坑	99C 区	15世紀後葉以前		119
SK037	SK37	土坑	99C 区	15世紀末葉～16世紀初頭		115
SK038	SK38	土坑	99C 区	時期不明		121
SK039	SK39・SK51	土坑	99C・99D 区	時期不明		—
SK044	SK44	土坑	4 B 区	時期不明		—
SK048	SK48	土坑	1 C 区	16世紀後葉		101
SK049	SK49	土坑	1 C～2 C 区	16世紀後葉	礎石高麗土坑	107
SK052	未設定	土坑	1 C 区	16世紀後葉		—
SK053	未設定	土坑	2 C 区	15世紀末葉～16世紀初頭	磁州窯系陶器獅子形燗台出土	115
SK054	未設定	土坑	0 A 区	時期不明		—
SD101	SD 1	溝	99B～5 A 区	16世紀後葉～末葉	SX102に付属する溝	26
SX102	SX 1	積土遺構	99B～5 A 区	16世紀後葉～末葉	大友御殿場の北側区画 または道路遺構	26
SD103	SD 2	溝	99B～5 B 区	16世紀後葉～末葉	SX102に付属する溝	26
SD151	SD 6	溝	99B～5 B 区	15世紀末葉～16世紀初頭	人骨頸部 2 体出土	74
SD153	SD 7	溝	99B～5 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭	人骨頸部 1 体出土	63
					1 期以前の京都系土師器を含む在地系土師器の一括資料	
SD403	SD 3	溝	4 A～5 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師器が 2 枚重ねで出土	72
SD404	SD 4	溝	2 A～4 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭		82
SD405	SD 5	溝	2 A 区	16世紀後葉		51
SD408	SD 8	溝	3 B～5 A 区	16世紀後葉	SX102の下部に構築	47
SD409	SD 9	溝	99B 区	16世紀後葉		47
SD410	SD10	溝	99A～99B 区	15世紀後葉以前		47
SD411	SD11	溝	0 A～0 B 区	15世紀後葉以前	1 期以前の京都系土師器を含む	84
SD412	SD12	溝	0 A～0 B 区	15世紀後葉以前		84
SD413a	SD13a	溝	0 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭		84
SD413b	SD13b	溝	0 A 区	15世紀末葉～16世紀初頭		84
SD414	SD14	溝	0 B～1 B 区	16世紀後葉		52
SD415	SD15	溝	3 B 区	16世紀後葉		52
SD416	SD16	溝	99B 区	15世紀後葉以前		88
SD418	SD18・SD31	溝	99B～99D 区	15世紀後葉以前		88

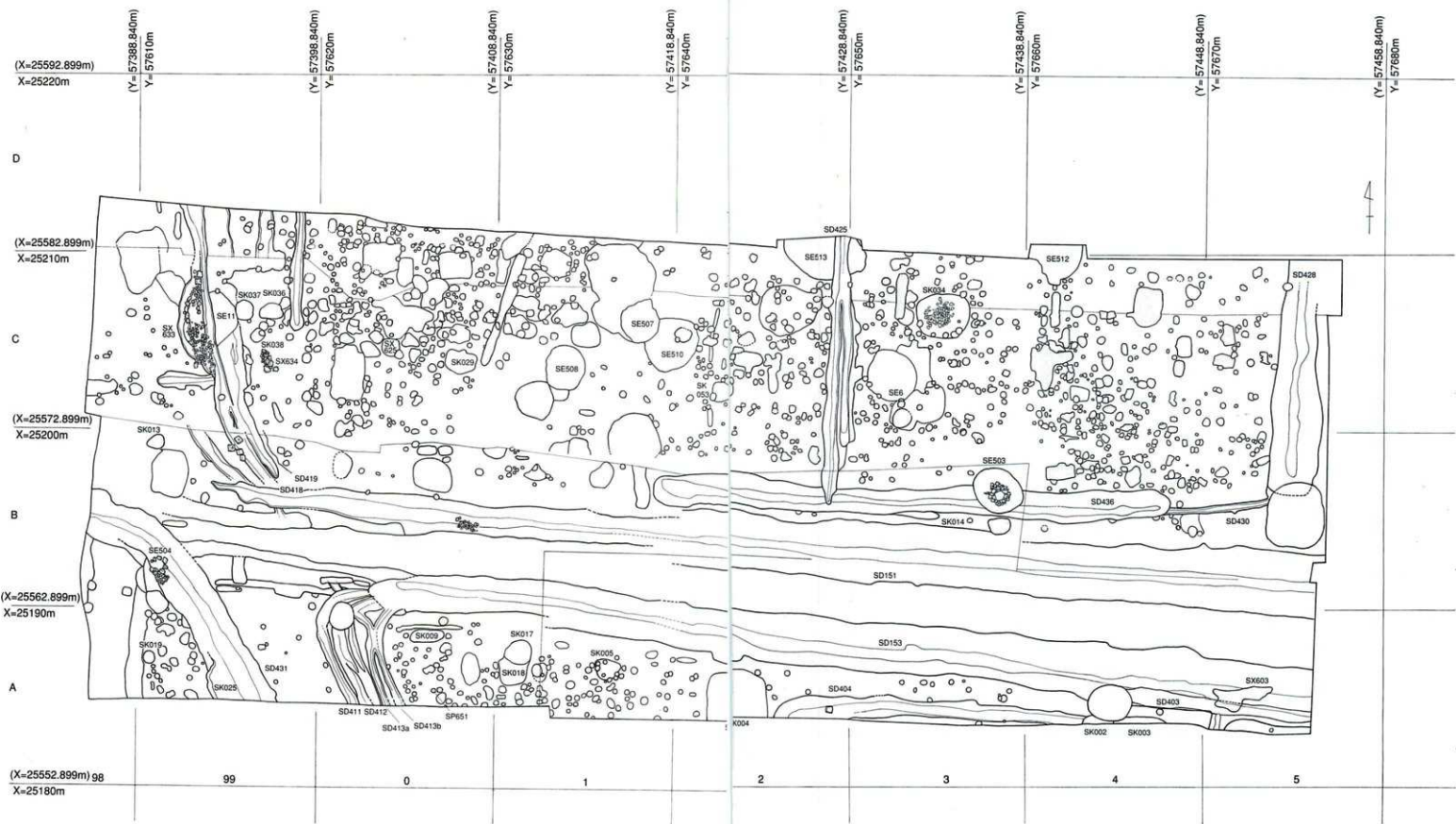
第2表 遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD420	SD20	溝	99B 区	16世紀後葉		52
SD424	SD24	溝	99C～99D 区	16世紀後葉		53
SD425	SD25	溝	2B～2D 区	16世紀前葉		62
SD426	SD26	溝	99C～99D 区	16世紀後葉以降	道路遺構 SF650に伴う溝	167
SD428	SD28	溝	5B～5C 区	16世紀前葉	青花・五彩の細片多数出土	53
SD429	SD29	溝	4B～5C 区	16世紀後葉		52
SD430	SD30	溝	4B～5B 区	時期不明		93
SD431	SX11	溝	98A～98A 区	15世紀後葉以前		89
SD436	SX16	溝	1B～4B	16世紀前葉		58
SE500	SK10	井戸	0A 区	16世紀後葉～末葉		146
SE501	SE 1	井戸	0A 区	16世紀末葉		148
SE502	SE 2	井戸	4A 区	16世紀末葉		150
SE503	SE 3	井戸	0B 区	15世紀末葉～16世紀初頭		158
SE504	SE 4	井戸	3B 区	15世紀後葉以前	溝 SD431の底面で検出	161
SE505	SE 5	井戸	99B 区 0C 区	16世紀末葉	井戸側の石組に近畿・瀬戸内産の 石塔空輪を使用	151
SE506	SE 6	井戸		15世紀末葉～16世紀初頭	竹を使用した井戸封じを行う	156
SE507	SE 7	井戸	3C 区	15世紀後葉以前	未発掘	163
SE508	SE 8	井戸	1C 区	15世紀後葉以前	未発掘	166
SE510	SE10	井戸	1C 区	15世紀後葉以前	未発掘	165
SE511	SE11	井戸	1C～2C 区	15世紀代		161
SE512	SE12	井戸	99C 区	14世紀後葉以降		162
SE513	SE13	井戸	4C 区	15世紀代		161
SE514	SK43	井戸状遺構	2C～2D 区	16世紀後葉		154
SE515	未設定	井戸状遺構	1C 区	16世紀末葉		153
SX601	未設定	遺物集中部	99A 区	16世紀後葉		175
SX602	未設定	壁地層	5A 区	16世紀後葉		136
SX603	SX 3	壁地層	5A 区	15世紀末葉～16世紀初頭	道路構築に伴う壁地か	72
SX604	SX 4	墓石遺構	98B～98B 区	16世紀後葉		48
SX606	SX 6	石列	99A 区	16世紀後葉		141
SX607	SX 7	積土遺構	99A 区	16世紀後葉		141
SX608	SX 8	墓石遺構	98A～98B 区	16世紀後葉		—
SX617	SX17	墓石遺構	3B 区	16世紀後葉		130
SX618	SX18	墓石遺構	3B 区	16世紀後葉		130
SX619	SX19	墓石遺構	0B 区	時期不明	SD151底面で検出	135
SX620	SX20	墓石遺構	1B 区	16世紀後葉		128
SX621	SX21	墓石遺構	2B 区	16世紀後葉		128
SX625	SX25	墓石遺構	0C 区	16世紀後葉		126
SX626	SX26	墓石遺構	0C 区	16世紀後葉		127
SX627	SX27	石列	1C 区	16世紀末葉以降		135
SX628	SX28	墓石遺構	2C 区	16世紀後葉		123
SX629	SX29	墓石遺構	5B 区	16世紀後葉		124
SX630	SX30	墓石遺構	5C 区	16世紀後葉		125
SX632	SX32	墓石遺構	5B 区	16世紀後葉		125
SX633	SX33	石列	99C 区	15世紀後半～16世紀初頭		142
SX634	SX34	墓石遺構	99C 区	時期不明		135
SX635	SX35	墓石遺構	99C 区	16世紀後葉		126
SX638	SK 8	墓石遺構	0B～1B 区	16世紀後葉		128
SX645	未設定	石列	99A 区	16世紀後葉		136
SX646	未設定	不明遺構	3B～4B 区	16世紀後葉		—
SX647	未設定	石列	99B～1B 区	16世紀後葉		142
SX648	未設定	墓石遺構	0A 区	16世紀後葉		142
SX649	未設定	石列	99A～0A 区	16世紀後葉	石塔・板碑を使用した石列	136
SF650	未設定	道路遺構	98C～99D 区	16世紀後葉以降		167



※網掛けは攪乱。
※数値は旧日本測地系・括弧内は世界測地系による。

第7図 中世大友府内町跡第5次調査A区遺構配置図① (上層遺構群 1/200)



第8図 中世大友府内町跡第5次調査A 遺構配置図② (下層遺構群 1/200)

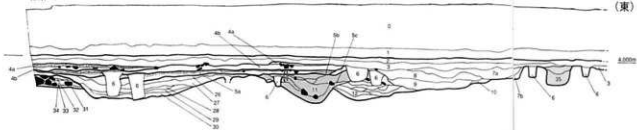


※網掛けは覆土。
 ※数値は旧日本測地系、括弧内は世界測地系による。

土層①

(西)

(東)



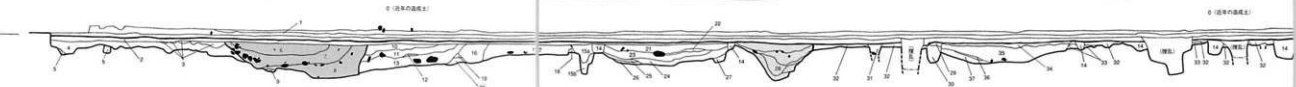
- 1. 旧表土・旧床土
- 2. 暗褐色粘質土 (鉄分を含む) } 近世前期の整地層
- 3. 灰茶褐色粘質土
- 4a. 灰茶褐色粘質土 } 17世紀切埋~
- (上面に砂層あり) } 前葉の道路形成面
- 4b. 茶褐色粘質土
- 5a. 灰茶褐色粘質土
- 5b. 黄白質褐色粘質土 } 16世紀末葉の
- (小礫を含む) } 道路形成面
- 5c. 暗褐色粘質土 } (道路東端部に黄白粒褐色粘土を盛り付ける)

- 6. 柱穴埋土
- 7a. 暗茶褐色砂質土
- 7b. 暗褐色粘質土
- 8. 暗黄褐色粘質土
- 9. 暗褐色粘質土
- 10. 暗黄褐色砂質土
- 11. SD418埋土
- 12. 溝埋土または整地層
- 26. 明茶褐色粘質土
- 27. 暗黄褐色粘質土
- 28. 灰茶褐色粘質土
- 29. 暗黄褐色粘質土
- 30. 暗灰黄褐色粘質土
- 31. 暗褐色粘質土 (焼土粒を含む)
- 32. 暗褐色粘質土

- 33. 暗褐色粘質土 (焼土)
- 34. 暗褐色粘質土
- 35. S. 5

土層②

(西)



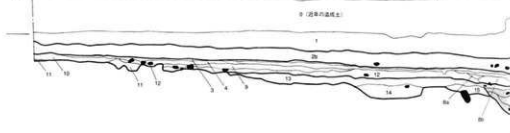
- 1. 旧表土・旧床土
- 2. 暗茶褐色粘質土 (唐津系陶器を含む整地層)
- 3. 暗褐色粘質土
- 4. 暗褐色粘質土
- 5. 暗黄褐色粘質土
- 6. 暗黄褐色粘質土
- 7. 灰黄褐色粘質土
- 8. 暗褐色粘質土
- 9. 灰褐色粘質土
- 10. 暗褐色粘質土
- 11. 暗灰褐色粘質土
- 12. 暗赤茶褐色粘質土
- 13. 暗灰褐色粘質土
- 14. 暗褐色粘質土
- 15a. 暗褐色粘質土
- 15b. 灰褐色粘質土
- 16. 暗褐色粘質土
- 17. 暗褐色粘質土 (わずかに焼土を含む)
- 18. 暗灰褐色粘質土
- 19. 灰褐色粘質土
- 20. 暗褐色粘質土

- 21. 灰褐色粘質土 (焼土粒を含む)
- 22. 暗灰褐色粘質土
- 23. 暗褐色粘質土
- 24. 暗灰黄褐色粘質土
- 25. 暗褐色粘質土
- 26. 暗灰褐色粘質土
- 27. 暗褐色粘質土
- 28. 遺構 (溝) 埋土
- 29. 暗灰褐色粘質土
- 30. 暗褐色粘質土
- 31. 暗褐色粘質土
- 32. 灰黄褐色粘質土
- 33. 暗茶褐色粘質土

- 34. 灰黄褐色粘質土 (焼土粒を含む)
- 35. 暗褐色粘質土
- 36. 暗黄褐色粘質土
- 37. 暗灰褐色粘質土

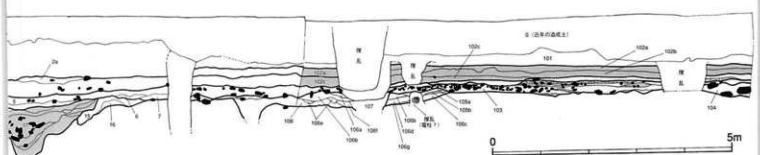
土層④

(南)



- 1. 旧表土・旧床土
- 2a. 灰茶褐色粘質土
- 2b. 茶褐色粘質土
- 3. 灰黄褐色粘質土
- 4. 灰褐色粘質土
- 5. 灰茶褐色粘質土
- 6. 灰褐色粘質土
- 7. 暗褐色粘質土
- 8a. 黄灰色砂質土ブロック
- 8b. 灰茶褐色粘質土
- 9. 暗褐色粘質土
- 10. 暗灰褐色粘質土
- 11. 暗灰褐色砂質土
- 12. 灰茶褐色粘質土
- 13. 暗灰褐色粘質土
- 14. 暗褐色粘質土
- 15. 暗灰黄褐色粘質土
- 16. 暗赤褐色粘質土
- 17. SD431埋土 (詳細は第761号参照)

土層③

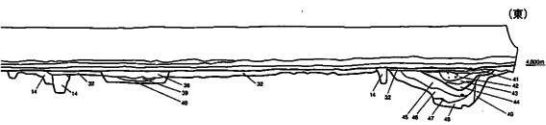


- 101. 灰茶褐色粘質土
- 102a. 暗褐色粘質土
- 102b. 灰茶褐色粘質土
- 102c. 暗褐色粘質土
- 103. 16世紀末葉の道路形成面 (粘質土と砂質土を交互に積み上げる。礫を多量に含む。)
- 104. 暗赤褐色粘質土 (焼土・炭を多量に含む)
- 105a. 黄灰褐色粘質土
- 105b. 黄褐色粘質土
- 106. 灰褐色粘質土
- 106b. 赤茶褐色粘質土
- 106c. 赤褐色粘質土
- 106d. 青灰色粘質土
- 106e. 青灰色粘質土ブロック
- 106f. 青灰茶褐色粘質土
- 107. 暗褐色粘質土
- 108. 暗褐色粘質土

色粘土
褐色粘土
暗褐色粘土
暗褐色粘土

- 2/22
②

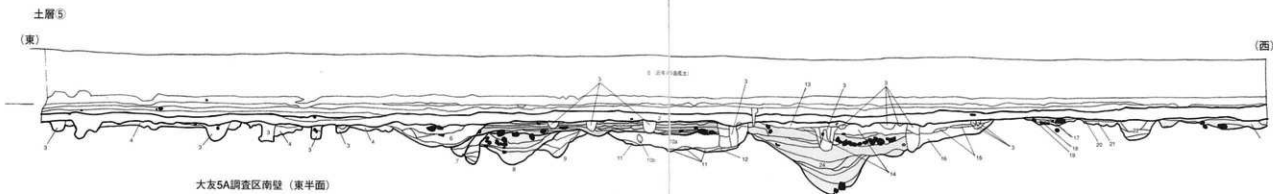
褐色粘質土
粒を含む
灰黄褐砂質土
24埋土
は第39頁参照



(北)

100m

- 2/22
④



1. 旧表土・旧床土
2. 暗褐色粘質土
(唐津系陶器を含む整地層)
3. 柱穴 (遺構) 埋土
4. 暗灰褐色粘質土

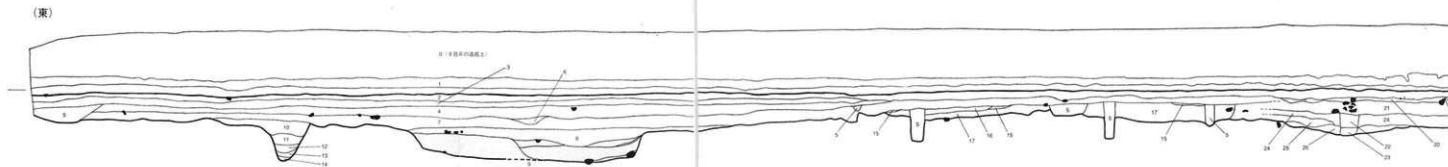
5. 整地層
(詳細は第70図参照)
6. SX006埋土
(詳細は第70図参照)
6. SD413埋土
(詳細は第70図参照)
8. SD412埋土
(詳細は第70図参照)
9. SD411埋土
(詳細は第70図参照)

- 10a. 明黄褐色粘質土
- 10b. 茶褐色粘質土ブロック
11. 暗褐色粘質土
12. 暗褐色粘質土
13. 暗褐色粘質土
14. 黄褐色粘質土
15. 黄褐色粘質土

16. 暗褐色粘質土
17. 暗褐色粘質シルト
18. 暗灰褐色砂質土
(固く焼き締まった
焼土塊を含む)
19. 灰褐色砂質土
20. 灰褐色粘質土
21. 暗灰褐色粘質土
(焼土塊を含む)

22. SD410埋土
(詳細は第35図参照)
23. SX608埋土
(詳細は第35図参照)
24. SD431埋土
(詳細は第76図参照)

土層6



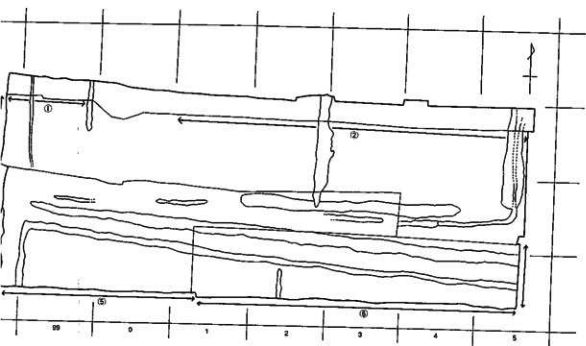
1. 旧表土・旧床土
2. 暗褐色粘質土
3. 茶褐色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土
(遺構埋土)

6. 茶灰色粘質土
7. 茶褐色粘質土
8. 暗褐色粘質土
9. SK002・SK003埋土
(詳細は第111図参照)

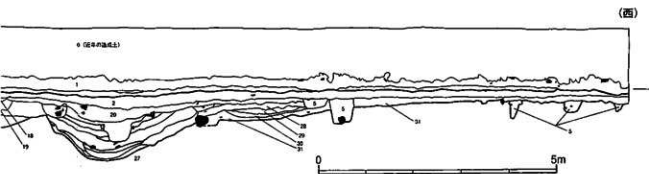
10. 灰褐色粘質土
11. 暗灰褐色粘質土
12. 暗褐色粘質土
13. 灰黄褐色粘質土
14. 暗灰褐色粘質土

15. 黄灰褐色粘質土ブロック
16. 灰褐色粘質土
17. 暗暗褐色粘質土
18. 焼土 | 遺構埋土
19. 暗褐色粘質土
20. 褐色粘質土

21. 茶褐色粘質土
22. 黒褐色粘質土
23. 黒褐色粘質土
(地山ブロックを含む) | 遺構埋土
24. 暗褐色粘質土
25. 暗茶褐色粘質土
26. 暗褐色粘質土
(地山ブロックを含む)



土層の位置



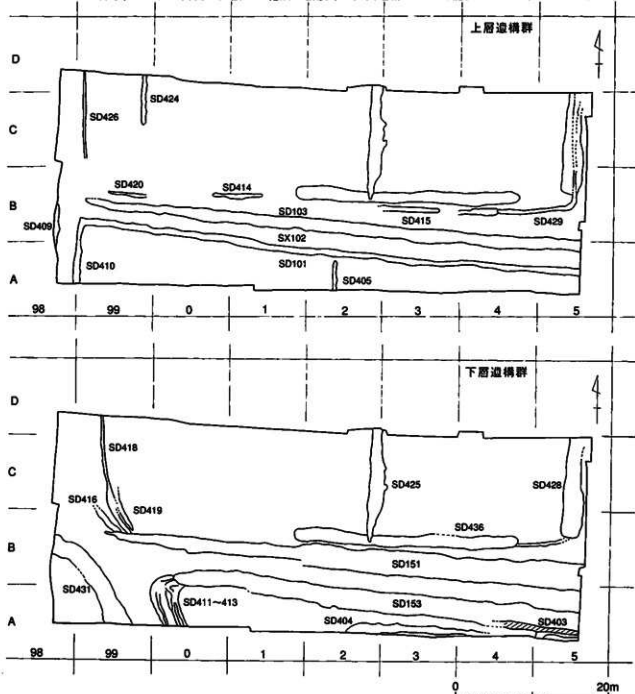
- SK404 埋土
(詳細は第76図参照)
- 1. 暗褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 暗褐色粘質土
- 4. 暗褐色粘質土
(地山ブロックを含む)
- 5. 暗褐色粘質土

I. 遺構と遺物

1. 溝と関連遺構

概要 中世大友府内町跡第5次調査A区では、27基の溝を検出している。溝は上層遺構群に属するものが11基、下層遺構群に属するものが16基である。

上層遺構群に属するものは、すべて16世紀後葉以降の所産と推定される。これらの中で特に注目される遺構はSD101・SD103・SD410で、積土遺構SX102とともに大友御藏場の推定北辺区画あるいは道路遺構と推定されるものである。SD420・SD414・SD429は、積土遺構SX102の北側に位置する遺構で、SX102北側に位置する屋敷の区画溝の一部である可能性が考えられる。同様にSD405も、SX102の南側に位置する施設や屋敷等の区画遺構である可能性があろう。SD424は調査区



第110図 第5次調査A区の溝と関連遺構 (1/500)

北西側で検出された道路遺構 SF650とその西側に位置する屋敷とを区画する溝である。

下層遺構群に属するものは、出土遺物から16世紀前葉・15世紀末葉～16世紀初頭・15世紀後葉以前の3時期に細別される。16世紀前葉に比定されるSD425・SD428・SD436は、3つの遺構で囲まれる幅約23m、長さ15m以上の空間が屋敷地の一部となる可能性がある。いずれの溝からも1期に比定される京都系土師器が一定量出土している。15世紀末葉から16世紀初頭に比定される溝の中で、代表的なものがSD153・SD151である。前者には在地系土師器が主体となる良好な一括資料が認められ、この中にはごく薄い器壁からなる京都系土師器皿1枚も含まれている。また、SD153・SD151の埋土中からは、頭蓋骨のみが廃棄された状況の人骨が合計3体出土している。SD153・SD151に挟まれた空間からは遺構が全く検出されておらず、当該部分が道路であった可能性が考えられよう。15世紀後葉以前の溝遺構としては、SD431・411・412・416・418・419がある。SD411～413とSD416・418・419は、それぞれ15世紀末葉から16世紀初頭に比定したSD153およびSD151に接続するような形で検出されており、SD107・106も構築時期は15世紀後葉まで遡る可能性が考えられる。SD151・153・411～413・416・418・419が構成する空間はあたかも三叉路のようにも見えることから、これらの空間が果たした役割についての解釈が必要になるだろう。

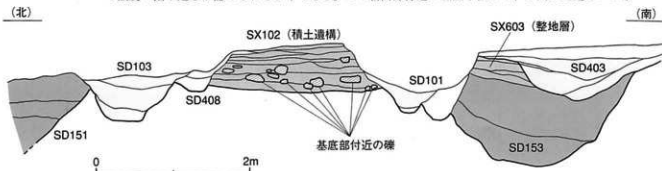
本項目では、検出された溝27基のうち、26基を報告の対象とする。また、溝SD101・SD103と深い関連を有する積土遺構SX102、集石遺構SX604・SX608についても本項目で報告する。

SX102

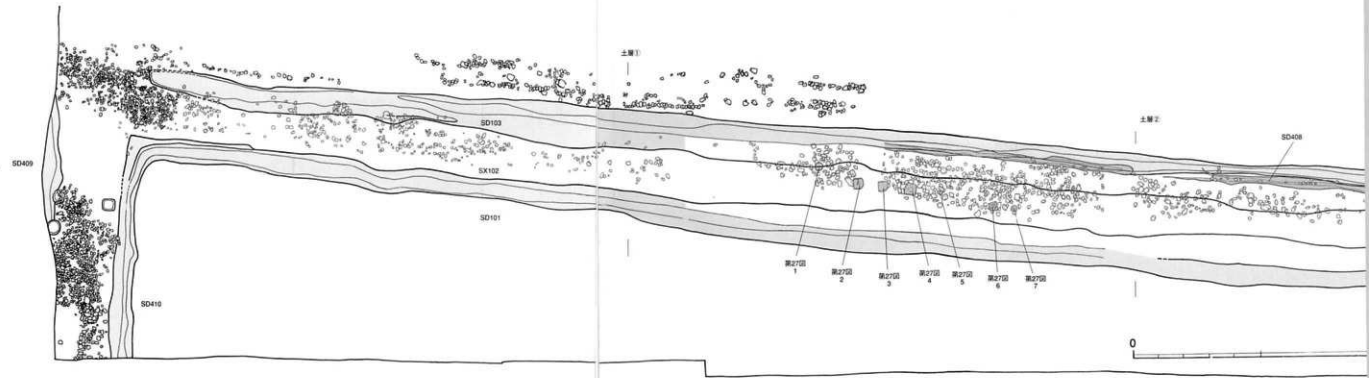
SX102・SD101・SD103 (第12・13図) **SX102**は99B区から5A区にかけて、調査区を斜走するかたちで検出された積土遺構である。その規模は、基底部幅が2.1～3.1m、上端部の幅が1.5～2.1mを測る。遺構の残存状態は東側が良好で、西側に向かうと上端部の削平が著しくなる傾向がある。第5次調査A区では長さ66mを検出したが、延長部が第5次調査B区でも検出され、総延長が115m以上におよぶ遺構であることが確認された。積土遺構は砂質土と粘質土を交互に数cm単位で帯状に積み上げる版築状の工法によって形成され、その高さは10～50cmを測る。基底面直上ないし積土下位には拳大から頭大の礫を敷いた部位が認められ、土留めの機能を果たしていたと推定される。また、土留めに用いられていた礫には石塔類の部材も使用されていた。礫敷きを集中して行う部位とそうでない部位とが認められる。遺構上面はかなりの削平を受けていると推定されるが、検出時に積土遺構の上部に築地等の施設が構築されていたことを直接に示す痕跡は認められなかった。積土中から出土した遺物の中に3期に比定される京都系土師器皿(第24図3)等が存在し、遺構の構築時期は16世紀末葉以降に比定される。

SD101

SD101はSX102の南側に付属する溝である。その規模は幅1.0～1.2m、深さ30cm前後を測る。第5次調査A区では長さ66mを検出し、遺構の延長部が第5次調査B区に伸びることを確認している。また、99B区で南側に屈曲し、SD410と接続する。土層断面を見ると、遺構の存続期間の中で数度の掘り返しが認められるようである。この屈曲部付近の埋土中位から、3期に比定される京



第12図 SD101・SX102・SD103土層横式図 (1/50)

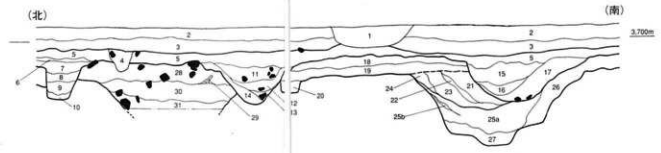


- 1. 褐色粘質土
- 2. 褐色粘質土
- 3. 褐色粘質土
- 4. 褐色粘質土
- 5. 褐色粘質土
- 6. 褐色粘質土
- 7. 褐色粘質土
- 8. 褐色粘質土
- 9. 褐色粘質土
- 10. 褐色粘質土

- 11. 褐色粘質土
- 12. 褐色粘質土
- 13. 褐色粘質土
- 14. 褐色粘質土
- 15. 褐色粘質土
- 16. 褐色粘質土
- 17. 褐色粘質土
- 18. 褐色粘質土
- 19. 褐色粘質土
- 20. 褐色粘質土

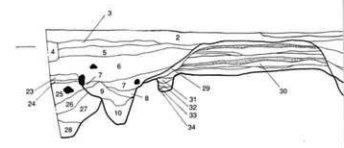
- 21. 褐色粘質土
- 22. 褐色粘質土
- 23. 褐色粘質土
- 24. 褐色粘質土
- 25a. 褐色粘質土
- 25b. 褐色粘質土
- 26. 褐色粘質土
- 27. 褐色粘質土
- 28. 褐色粘質土
- 29. 褐色粘質土
- 30. 褐色粘質土
- 31. 褐色粘質土

土層①
(北)



(南)

土層③

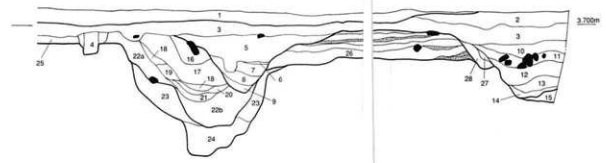


- 1. 褐色粘質土
- 2. 褐色粘質土
- 3. 褐色粘質土
- 4. 褐色粘質土
- 5. 褐色粘質土
- 6. 褐色粘質土
- 7. 褐色粘質土
- 8. 褐色粘質土
- 9. 褐色粘質土

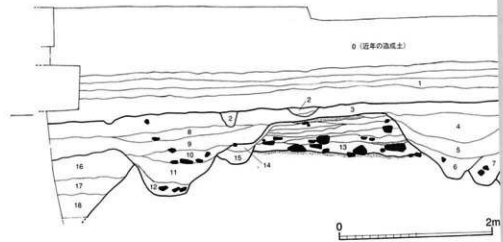
- 10. 褐色粘質土
- 11. 褐色粘質土
- 12. 褐色粘質土
- 13. 褐色粘質土
- 14. 褐色粘質土
- 15. 褐色粘質土
- 16. 褐色粘質土
- 17. 褐色粘質土
- 18. 褐色粘質土
- 19. 褐色粘質土
- 20. 褐色粘質土

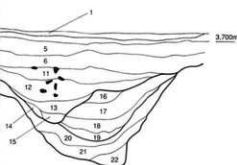
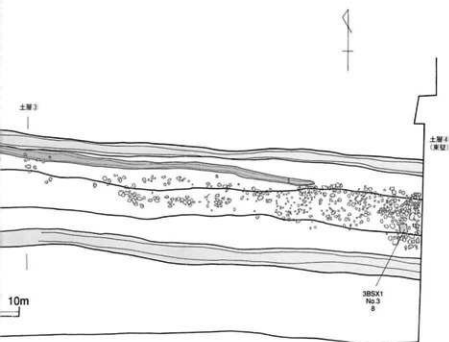
- 21. 褐色粘質土
- 22a. 褐色粘質土
- 22b. 褐色粘質土
- 23. 褐色粘質土
- 24. 褐色粘質土
- 25. 褐色粘質土
- 26. SX102埋土
- 27. 褐色粘質土
- 28. 褐色粘質土

土層②

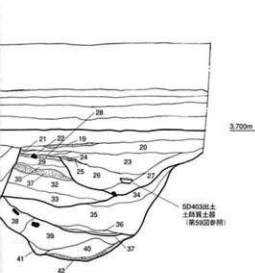


土層④ (東壁)





- | | | | | |
|------------------|-------------|-----------|-------------|-------------|
| 1. 青灰褐色粘質土 | 11. 赤褐色粘質土 | } SD101埋土 | 23. 暗褐色粘質土 | } SD151埋土 |
| (II) 時代別砂の堆積6-7) | 12. 灰褐色粘質土 | | 24. 赤褐色粘質土 | |
| 2. 暗褐色粘質土 | 13. 暗褐色粘質土 | | 25. 暗褐色粘質土 | |
| 3. 褐色粘質土 | 14. 赤褐色粘質土 | | 26. 赤褐色粘質土 | |
| 4. 暗灰褐色粘質土 | 15. 暗赤褐色粘質土 | } SD153埋土 | 27. 暗褐色粘質土 | } SD102埋土 |
| (柱穴埋土2-7) | 16. 暗赤褐色粘質土 | | 28. 暗褐色粘質土 | |
| 5. 褐色粘質土 | 17. 暗褐色粘質土 | | 29. 暗褐色粘質土 | |
| 6. 暗褐色粘質土 | 18. 暗赤褐色粘質土 | | 30. SS102埋土 | |
| 7. 灰褐色粘質土 | 19. 青灰褐色粘質土 | } SD103埋土 | 31. SS102埋土 | } (SN102埋土) |
| 8. 灰褐色粘質土 | 20. 赤褐色粘質土 | | 32. 青灰褐色粘質土 | |
| 9. 暗灰褐色粘質土 | 21. 青灰褐色粘質土 | | | |
| 10. 暗灰褐色粘質土 | 22. 青灰褐色粘質土 | | | |



- | | | |
|--------------|-------------|-----------|
| 1. 粗表土-砂層土 | 19. 黄褐色粘質土 | } SD403埋土 |
| 2. 遺構埋土 | 20. 暗褐色粘質土 | |
| 3. 赤褐色粘質土 | 21. 暗褐色粘質土 | |
| (砂質赤褐色粘土を含む) | 22. 黄褐色粘質土 | |
| 4. 灰褐色粘質土 | 23. 暗褐色粘質土 | } SD603埋土 |
| 5. 暗褐色粘質土 | 24. 赤褐色粘質土 | |
| 6. 暗赤褐色粘質土 | 25. 暗褐色粘質土 | |
| 7. 暗灰褐色粘質土 | 26. 暗褐色粘質土 | |
| 8. 褐色粘質土 | (埋土中に灰を含む) | } SD153埋土 |
| 9. 暗赤褐色粘質土 | 27. 暗褐色粘質土 | |
| 10. 灰褐色粘質土 | 28. 黄褐色粘質土 | |
| (下部に硬を含む) | 29. 暗褐色粘質土 | |
| 11. 灰褐色粘質土 | 30. 暗灰褐色粘質土 | } SD153埋土 |
| 12. 灰褐色粘質土 | 31. 黄褐色粘質土 | |
| (硬を含む) | 32. 暗赤褐色粘質土 | |
| 13. SS102埋土 | 33. 暗褐色粘質土 | |
| (砂質土と粘質土を交互に | (埋土中に灰を含む) | } SD153埋土 |
| 積み重ねる) | 34. 暗褐色粘質土 | |
| 14. 灰褐色粘質土 | 35. 灰褐色粘質土 | |
| 15. 灰褐色粘質土 | 36. 灰褐色粘質土 | |
| (SS109埋土) | 37. 赤褐色粘質土 | } SD153埋土 |
| 16. 暗褐色粘質土 | (鉄分を多く含む) | |
| 17. 暗赤褐色粘質土 | 38. 青灰褐色粘質土 | |
| 18. 青灰褐色粘質土 | 39. 青灰褐色粘質土 | |
| | 40. 青灰褐色粘質土 | } SD153埋土 |
| | 41. 青灰褐色粘質土 | |
| | 42. 赤褐色粘質土 | } SD153埋土 |
| | (鉄分を多く含む) | |

都系土師器Ⅲ（第15図24）が出上しており、遺構の年代を示唆する良好な資料であると考えられる。なお、SD101の下位には、15世紀末葉から16世紀初頭に構築された溝 SD153がほぼ同じ位置に検出された。遺構の構築時期は16世紀末葉に比定される。

SD103

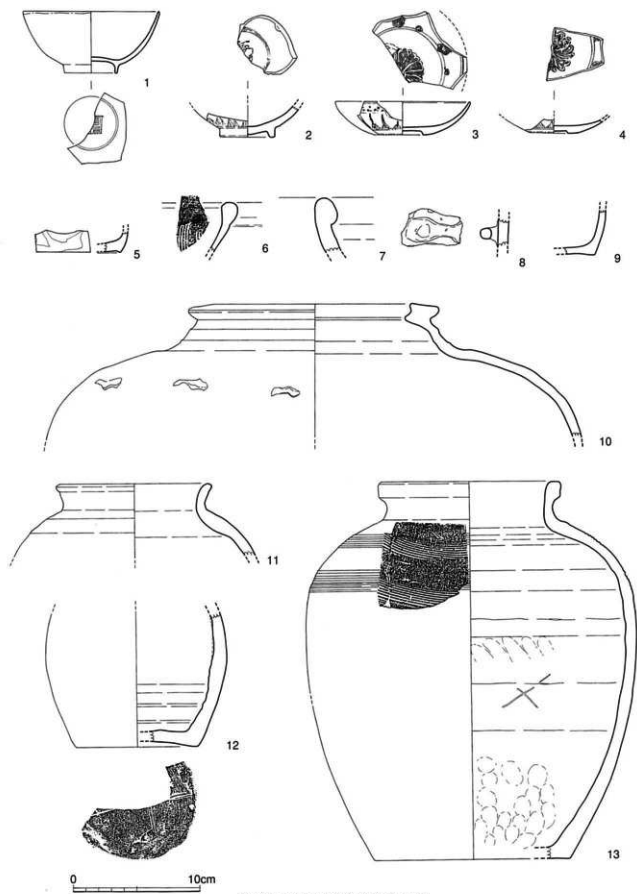
SD103はSX102の北側に付属する溝で、その規模は幅0.7～1.5m、深さ30cm前後を測る。第5次調査A区では長さ66mを検出し、やはり遺構の延長部が第5次調査B区に伸びることを確認している。当該遺構も数度の掘り返しが行われている可能性がある。遺構の時期はSD101やSX102と同様、16世紀末葉に比定される。出土遺物の中で、華南三彩の烏形水滴（第18図9）は特に注目すべき資料のひとつである。SD103の下位には、15世紀末葉から16世紀初頭に比定される溝 SD151がほぼ同じ位置に検出されている。遺構の構築時期は、やはり16世紀末葉以降である。

大友御藏場の
北側西
遺構または
道路遺構

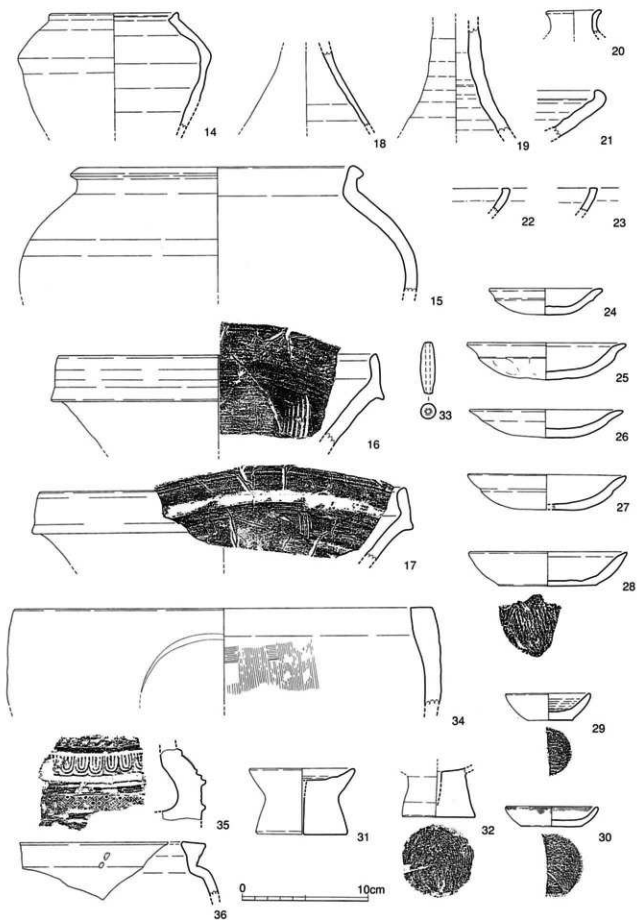
以上のSX102・SD101・SD103は、16世紀末葉に構築された一連の遺構である。これらの遺構の位置は大分市史編さん室が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、大友御藏場の北西隅部および北側推定ラインとほぼ一致する。このことから、当該遺構は大友御藏場の北側境界施設である可能性が高いと思われ、SX102は築地状あるいは小規模な土塁状の遺構で、SD101・SD103はそれに伴う雨落ち溝と推定される。しかし、またその位置関係から当該遺構を大友氏館跡南側に位置する東西方向の道路遺構と解釈することも可能で、この場合SX102は道路遺構で、遺構断面に見られる版築状の砂質土と粘質土は道路構築に伴う硬化面であり、SD101・SD103は道路側溝であるとの判断もできる。これらの遺構の解釈については、第3節で再び触れることとしたい。

SD101出土遺物（第14～17図） 第14図1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野正敏分類のE群に分類される製品である。内外面は無文であるが、内底部には一重方形枠内に「富貴尊器」銘を掻く。16世紀後葉の所産である。2は中国漳州窯系青花碗の底部破片である。SD101の下層に位置するSD153の出土遺物として取り上げたが、SD153の構築時期と矛盾するため、SD101の帰属遺物であると推定した。高台内面から内底部にかけて、初段と思われる付着物が認められる。16世紀末葉の製品である。3・4は苜蓿底となる中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類C群の製品である。製作年代は15世紀後葉から16世紀前葉に比定される。5は華南三彩の底部破片で、外面に緑釉と黄釉が施され、内面は無釉となる。小片であるため、器種は不明であるが、水注などである可能性を考えておきたい。6は中国南部産と推定される焼締陶器鉢である。7はタイ産メナムノイ窯系焼締陶器四耳壺の口縁部破片である。胎土には小豆色の粒子が混入する。8は中国産の黒釉陶器壺の把手である。外面に黒褐釉、内面に鉄釉が施され、胎土は淡赤褐色から灰白色を呈する磁器質である。9も中国産の黒釉陶器壺の底部と推定するが、産地不明の製品である。外面に灰緑色、内面に暗黄褐色の釉を施し、底部外面に目跡が認められる。10は中国産の黒褐釉陶器壺である。外面に暗赤褐色に近い黒褐色釉を施し、内面は露胎となる。胎土は暗褐色を呈し、白色粒子を多く含む陶器質となる。11～13は備前系陶器の壺である。12は底部に「十」字状のヘラ記号を有する。13は肩部に帯描き直線文を施す。胴部内面中位にも「×」字状のヘラ描き文が認められるが、彫りが浅く、意図的なものかどうかの判断が難しい。第15図14・15は、それぞれ備前系陶器の無頸壺・頸壺である。14は当該資料より大型の器形のものが水指として報告されることがあるが、本資料は水指としては口径が小さく小型のものとなっている。16・17は備前系陶器鉢で、中世6期の所産である。製作年代は16世紀前葉から中頃に比定される。18～21も備前系陶器で、18・19は瓶、20は小壺の口縁部、21は鉢である。22・23は瀬川美濃系陶器の御皿の口縁部である。内外面に薄緑色を呈する灰釉を施す。古瀬川後期段階の14世紀代の所産と思われ、混入品である。24～27は京都系土師器Ⅲで、いずれも3期の特徴を有する資料である。このうち、24はSD101・SD410のコーナー付近からの埋土中位から出土しており、SD101の年代を示唆する上で重要な資料である。28は底部が糸切り底となる在地系土師器Ⅲであるが、胎土や内面の仕上げの状況が京都系土師器Ⅲに類似してお

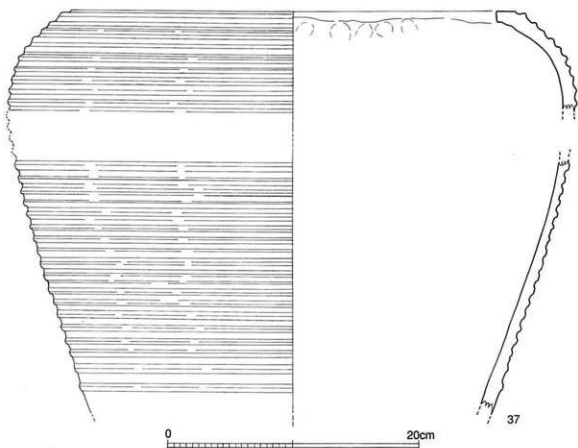
タイ産メナム
ノイ窯系
四耳壺



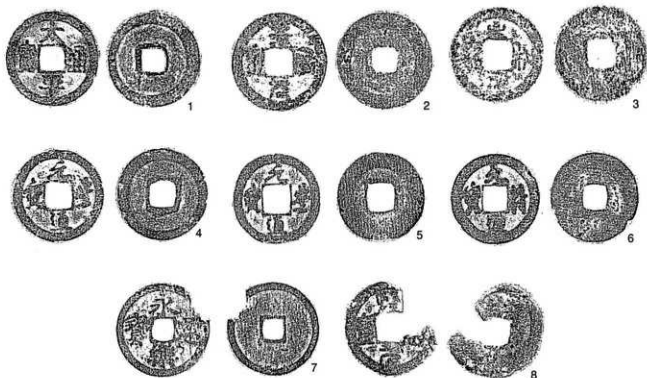
第14図 SD101出土遺物実測図① (1/3)



第15図 SD101出土遺物実測図② (1/3)



第16図 SD101出土遺物実測図③ (1/3)



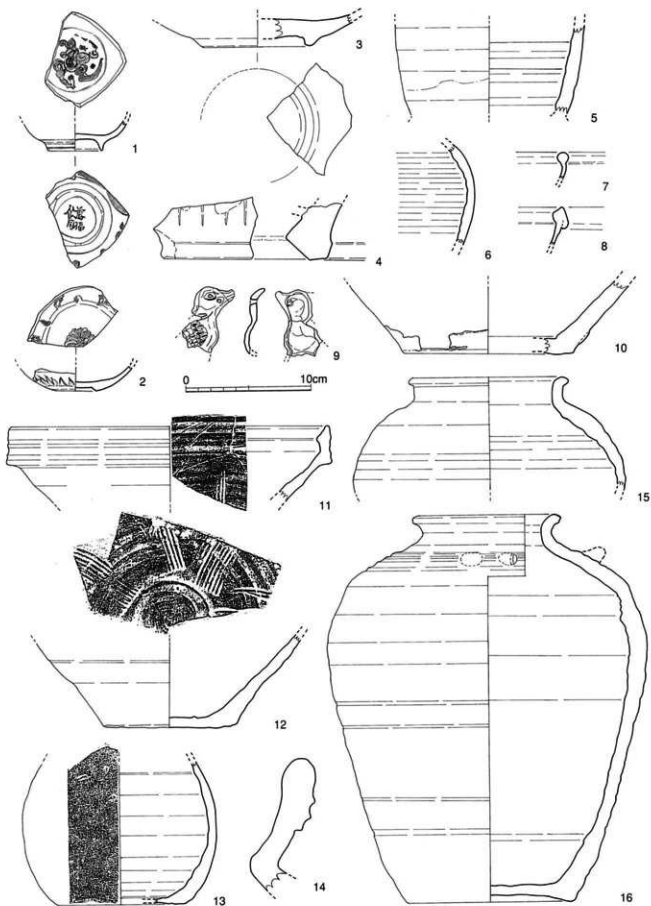
第17図 SD101出土遺物実測図④ (1/1)

り、京都系土師器を模倣した製品と推定される。29は在地系土師器の皿で、内面にロクロ目が残存する資料である。30も在地系土師器の皿で、口縁部内外面に煤の付着が認められ、灯明皿として使用された痕跡を残している。31・32は土師質土器の燗台である。前者は胎土が京都系土師器と共通する浅黄褐色の色調で、底部に糸切り痕がなくナデを施すもの、後者は在地系土師器と共通する赤褐色の色調で、底部に糸切り痕を有するものである。皿部から底部にかけての穿孔は、前者が貫通するのに対し、後者は貫通しないようである。33は土鉢である。34は瓦質土器の風炉あるいは火鉢で、胴部上位に円形の透かし孔を有する。外面はナデ仕上げを行い、内面には刷毛目を施す。35は瓦質土器火鉢の底部付近の破片で、壓押しによる蓮弁文・菱形文を有する。36も瓦質土器火鉢の口縁部で、口縁部と胴部の屈曲部の境に刺突文を有する。防長地域や北九州地域を主体に分布が認められる型式である。第16図37も瓦質土器火鉢である。口縁部から胴部上位と胴部下位が接合しないが、同一個体のもので、外面に多条の沈線を施している。第17図1～8は銅銭である。1は北宋代の「太平通寶」で、書体は真書体、初鋳年代は976年である。2も北宋代の「景祐元寶」で、書体は篆書体、初鋳年代は1034年である。3も北宋代の「至和元寶」で、書体は篆書体、初鋳年代は1054年である。4・5も北宋代の「元豊通寶」で、書体は行書体、初鋳年代は1078年である。6も北宋代の「元符通寶」で、書体は行書体、初鋳年代は1098年である。7は明代の「永樂通寶」で、書体は真書体、初鋳年代は1408年となる。8は「元寶」のみが判読できる資料である。

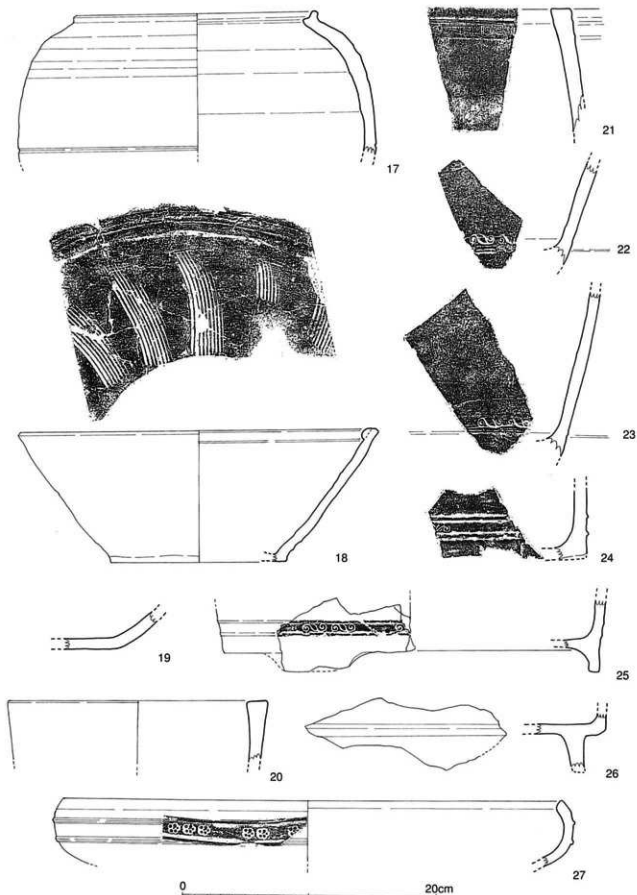
SD103出土遺物 第18図1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野正敏分類のE群に分類される製品である。内底部には一重園線内に「萬福収回」銘を描く。2は中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類C群の製品である。3は中国産青磁の皿あるいは盤で、内底部が蛇の目状に釉剥ぎとなっている。15～16世紀代の製品であろうか。4は中国龍泉窯系青磁壺の底部で、いわゆる「酒会壺」と言われる器形を呈する製品である。外面には蓮弁文が認められ、底部断面は酒会壺に特徴的な形態を呈している。14世紀代の製品で、威信材として伝世されたものであった可能性も考えられる。5は中国産の白磁瓶で、胴部の破片である。残存部の上半部に施釉し、内面は露胎となる。14世紀代の製品であろうか。6は青白磁の瓶あるいは壺の胴部破片で、これも中国産の製品と推定される。外面のみに施釉し、内面は露胎となる。7・8は中国南部産と推定される焼締陶器鉢の口縁部で、7はB類、8はC類に分類される製品である。9は華南三彩の鳥形水滴である。顔部に径が3mmほどの穿孔が認められる。二次的な被熱を強く受けており、本来緑色を呈していた部位は赤褐色に変色している。中世大友府内町跡の発掘調査では華南三彩の鳥形水滴の破片が各地点で多数出土しているが、当該資料は大型破片で、現状では最も良好な資料となっている。10は中国産黒梅釉陶器壺の底部である。外面に黒釉、内面に鉄釉を施し、胎土は磁器質で、その色調は淡黄褐色から灰白色を呈する。外底部は露胎であるが、底端部に目跡が認められる。11・12は備前系陶器搦鉢で、中世6b期の製品である。製作年代は16世紀前葉から中葉に比定される。13は備前系陶器の瓶または徳利で、肩部以上を欠損する。14は備前系陶器大甕の口縁部で、口縁外面に数条の凹線を施す。近世1期に比定され、1570年以降に登場する型式である。15・16は備前系陶器の壺で、16は肩部に複数の把手(耳)を有する製品である。第19図17は備前系陶器の甕で、口縁部に蓋受けを設けた形態を呈する。水屋甕である可能性を考えておきたい。18は瓦質土器搦鉢で、端部を短く内側に折り返す口縁形態をもつ「防長系搦鉢」である。19は瓦質土器鉢の底部破片で、内外面にミガキを施し、底部外面は未調整となる。20は瓦質土器火鉢の口縁部である。21～25は豊後府内を主体に分布する在地系の瓦質土器の製品である。いずれも焼きがやや甘い上に器表面の炭素の吸着が十分でないため、胎土や色調は赤褐色を呈する。21には雷文、22～25には双頭龍手流雲文を刻印によって施している。双頭龍手流雲文にはいくつかのバリエーションが認められる。26は瓦質土器火鉢で、脚部付近の破片である。27も瓦質土器火鉢であるが、胴部が浅鉢形の形態を呈するもの

酒会壺

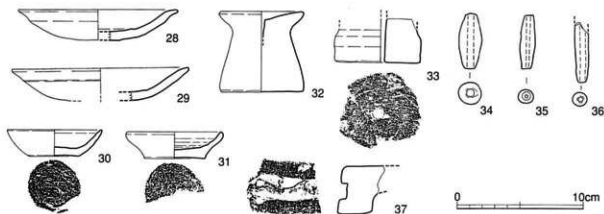
中国南部産
焼締陶器鉢華南三彩
鳥形水滴



第18圖 SD103出土遺物実測図① (1/3)

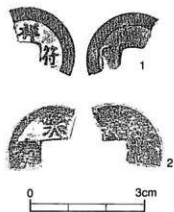


第19図 SD103出土遺物実測図② (1/3)



第20図 SD103出土遺物実測図③ (1/3)

である。胴部中に2条の突帯を有し、突帯間に梅花文の刻印をスタンプする。第20図28・29は京都系土師器皿で、いずれも3期の特徴を有するもの。30・31は在地系土師器の皿で、後者には内面にロクロ目が認められる。32・33は土師質土器の燗台である。前者は胎土が京都系土師器と共通する浅黄色系の色調で、底部に糸切り痕がなくナデを施すもの、後者は在地系土師器と共通する赤褐色系の色調で、脚台部がやや短く、底部に糸切り痕を有するものである。皿部から底部にかけての穿孔は、前者は貫通しないのに対し、後者は貫通している。34~36は土錘である。37は軒平瓦で、瓦当文様は均整唐草文であろうか。第21図1・2は銅銭である。1は北宋代の「祥符□□」で、書体は真書体、初鑄年代は1008年である。2は北宋代の「熙寧元寶」で、書体は篆書体、初鑄年代は1068年である。いずれも欠損が認められ、2分の1弱の残存である。

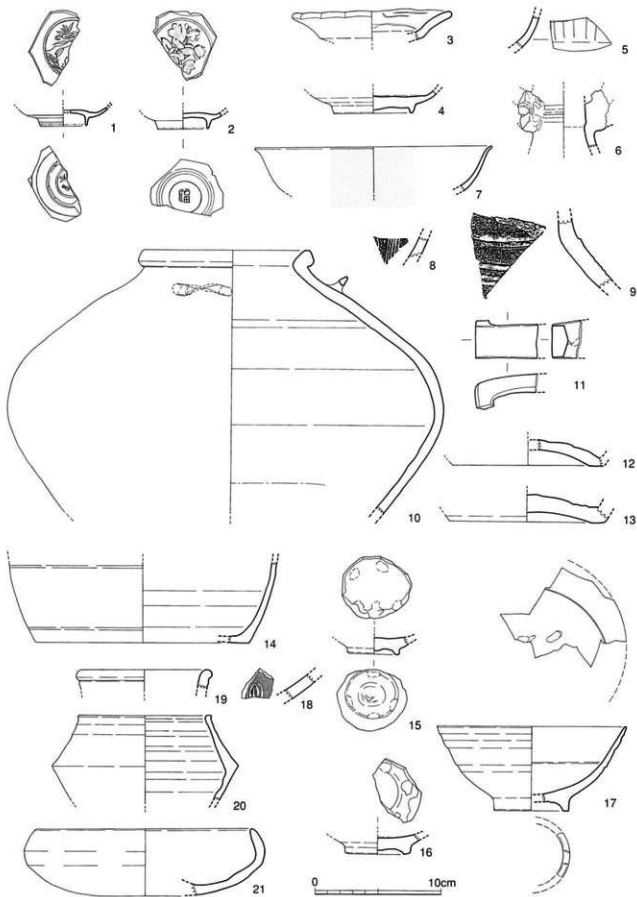


第21図 SD103出土遺物実測図④ (1/1)

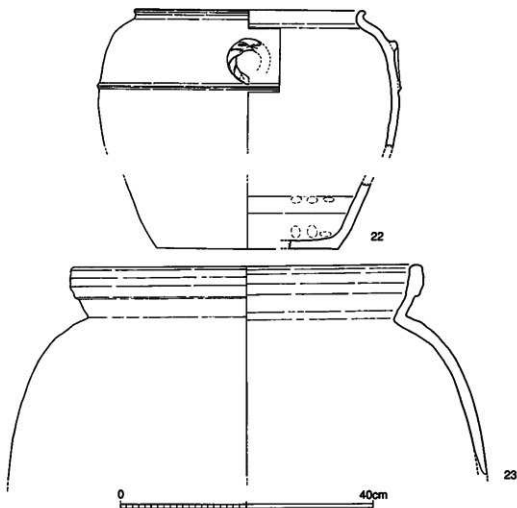
SX102出土遺物 (第22~27図) 1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類のE群に分類される中でもやや上手の製品である。見込みには鬼文が描かれ、外底部には二重圏線内に「富貴長春」銘をもつ。外面には毛彫り文様が認められるが、欠損のため、文様の詳細は明らかでない。2も中国景德鎮窯系青花で、E群青花碗である。外底部には一重圏線内に「福」字銘を有する。3は中国龍泉窯系青磁後花皿で、15世紀代の製品である。4は中国産の青磁皿で、内底部は露胎となる。15~16世紀代の製品であろうか。5は中国龍泉窯系青磁碗で、外面に蓮弁文を有する16世紀代の製品であろう。6は中国龍泉窯系青磁瓶の頸部破片と思われる。15世紀代の製品か。7は中国景德鎮窯系の磁器で、黄釉碗または鉢と思われる。口縁部は端反りとなり、内外面に黄釉を施す上手の製品であろう。8は中国南部産と推定される擂鉢の破片である。小片であるが、中世大友府内町跡の調査で近年注目されている遺物であるので、図示を行った。9はタイ産の焼締陶器で、メナムノイ窯系四耳壺の頸部破片と思われる。10は中国産の黒釉陶器で、包含層中の出土ものが大多数を占めるが、一部の小片がSX102から出土していたため、この項目で報告する。内外面に黒釉を施し、胎土は灰褐色で、陶器質を呈する。二次的な被熱を強く受けており、内外面の器表面が荒れている。11は中国産褐釉陶器の把手の部分である。内外面に褐釉を施し、胎土は淡赤褐色で、小豆色の小粒子を含む。12・13は中国産施釉陶器の底部である。いずれも胎土は陶器質で、内外面ともに露胎となるが、12の胎土は赤褐色、13の胎土は淡褐色を呈する。14は中国産黒釉陶器の底部である。内外面に

黄釉碗あるいは鉢

タイ産メナムノイ窯系四耳壺



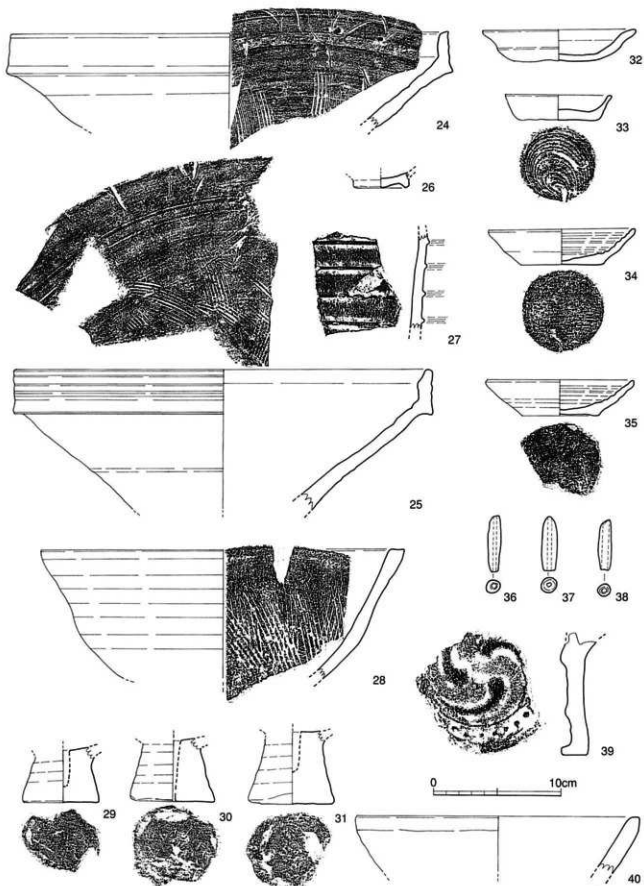
第22図 SX102出土遺物実測図① (1/3)



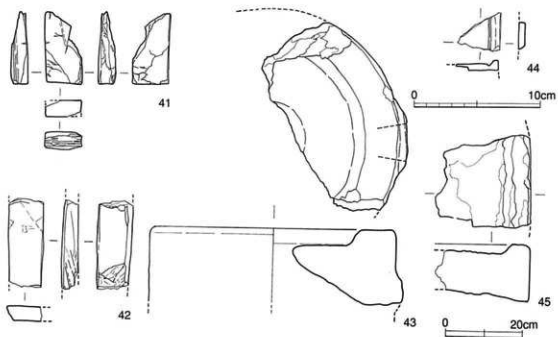
第23図 SX102出土遺物実測図② (1/6)

朝鮮王朝産
陶器

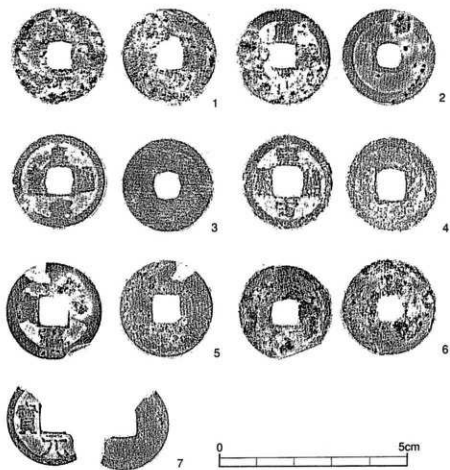
黒釉を施し、底部外面は露胎となる。胎土は灰褐色で陶器質を呈する。15～18は朝鮮王朝産陶器で、15～17は灰青釉陶器碗、18は内面に象嵌文様をもつ皿である。19～21は備前系陶器で、19は壺の口縁部、20は深鉢、21は鉢である。20については当該資料より大型の器形のものが水指として報告されることがあるが、本資料は水指としては口径が小さく小型のものとなっている。また、21の胴部外面下位には重ね焼きの痕跡が認められる。第23図22・23は備前系陶器の大型の製品で、22は水屋甕、23は大甕である。前者は胴部中位以上の大型破片と底部付近の破片である。同一個体と思われるが、接合していない。後者については口縁外面に数条の凹線を施すもので、近世1期に比定され、1570年代以降の所産とされるものである。第24図24・25は備前系陶器播鉢で、前者は中世6期、後者は近世1b期に比定される型式である。24は16世紀前半から中頃に比定される。また、25は放射状播目を斜め播目を交差させる播目の特徴をもち、1570年代以降に出現する製品である。26は瓦質土器境の底部で、内外にミガキを施し、断面方形の高台を有する。豊後・豊前地域を主体に分布する在地色の強い製品である。27は瓦質土器火鉢で、胴部外面に多条の三角突帯を巡らすものである。残存部の上部には、巴文と推定される刻印の一部がわずかに認められる。28は瓦質土器の播鉢である。類例の少ないものであるが、交差する播目が認められることから、備前系陶器播鉢の影響を受けている可能性が考慮される資料である。29～31は場台形土器で、いずれも胎土や色調が赤褐色を呈するものである。胴部から底部にかけての孔は貫通するもの(30)としないもの(29)



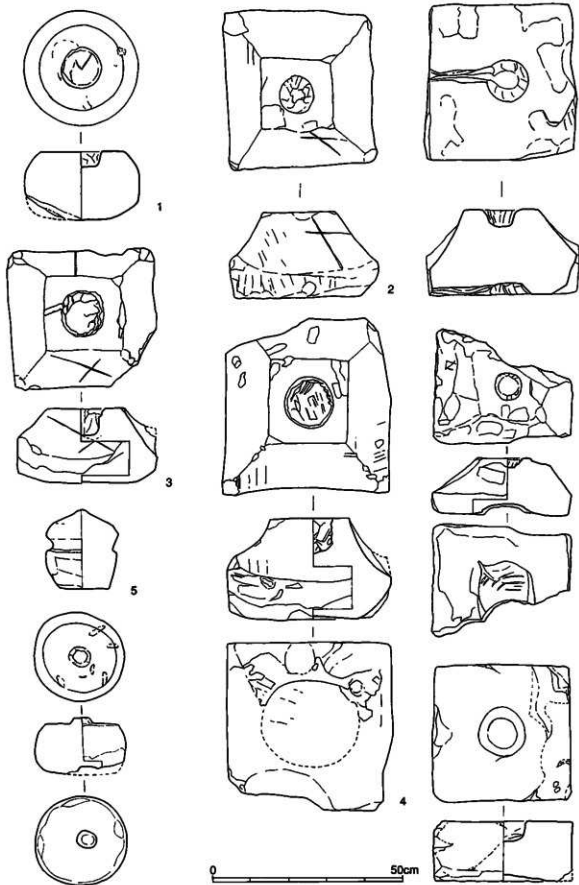
第24図 SX102出土遺物実測図③ (1/3)



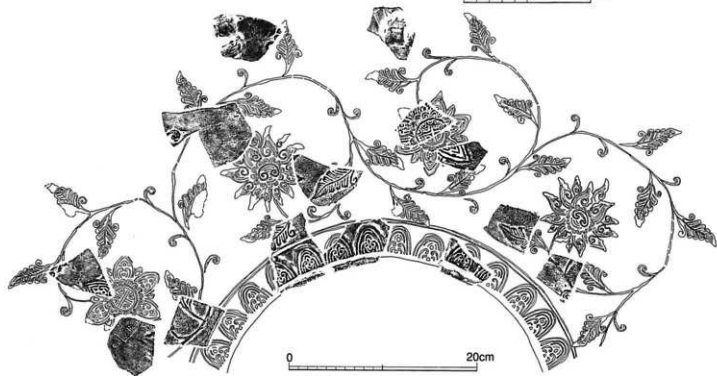
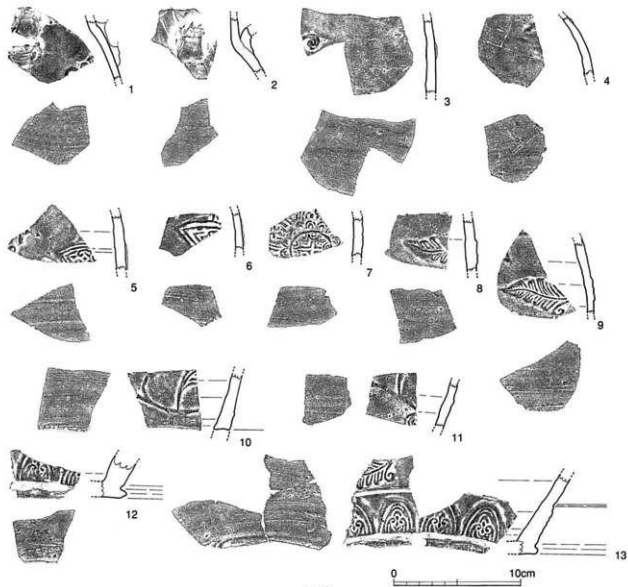
第25図 SX102出土遺物実測図④ (40~44は1/3、45は1/10)



第26図 SX102出土遺物実測図⑤ (1/1)



第27図 SX102出土遺物実測図⑥ (1/10)



第28図 遺構間接合資料実測図① (1/3 文様展開模式図は1/5)

・31)がある。32は京都系土師器皿で、口縁部にナデを施し、口縁端部が大きく外反する器形を呈するものである。3期に比定される型式で、16世紀末葉の製品である。SX103の基底部付近の積土中から出土しており、当該遺構の構築年代を示す上で重要な資料である。33は在地系土師器皿で、断面形態が箱形を呈するものである。14～15世紀前半の所産で、混入品であろう。34・35は在地系土師器皿で、内面にロク目を残す製品である。34の底部には、糸切り痕の他に狂痕が認められる。36～38は土鐘、39は軒丸瓦である。39は瓦当部の破片で、瓦当文様は右回転の巴文となる。巴文の尾部は長く伸び、珠文帯を有する。40は滑石製石罏あるいは容器である。破片の加工品であるため、本来の用途以外の機能を果たすように転用されたものである可能性も考えられるが、詳細は不明である。第25図41～44は石製品で、41・42は砥石、43は石臼、44は硯、45は凝灰岩の石材加工品である。このうち、43は輝緑凝灰岩(赤間石)を使用した赤間硯の破片である。第26図には、SX103から出土した銅銭を図示した。1は南唐代の「開元通寶」で、書体は真書体、初鋳年代は960年である。2は北宋代の「咸平元寶」で、書体は真書体、初鋳年代は976年である。3・4は北宋代の「皇宋通寶」で、書体は真書体、初鋳年代は1038年である。5も北宋代の「嘉祐通寶」で、書体は真書体、初鋳年代は1056年である。6は判読不明である。7は「元寶」のみが判読可能な資料である。第27図には、SX103の基底部付近から出土した石塔類を図示した。出土地点は第13図に提示しているので、参照されたい。1は水輪、2～4は火輪、5は空風輪、7は水輪、8は地輪で、いずれも凝灰岩製である。なお、2・3・6には刻線が認められ、さらに6には一辺を削るなどの意図的な二次加工が認められる。

遺構間接合資料(第28～31図) 第28～31図にはSD101・SX102・SD103の各遺構から出土した破片が、遺構間接合した資料を図示している。第28図1～15は華南三彩貼花文五耳壺で、「トラディスカント壺」とも呼称されるタイプのものである。小片となっているが、同一個体と推定されるものが、SD101・SD103・包含層から出土している。このうち、10がSD101、4・9がSD103、その他が包含層中からの出土である。胴部外面裾部の蓮弁文が密に配置されていること(12・13)や莖に葉と子葉が表現されている(3・10・11)ことから、中西武尚あるいは木村幾多郎分類⁽¹⁾によるI類で、トラディスカント壺の中では最も古い型式に属する。全体的に二次的な被熱を受けており、外面には緑・黄色・褐色の鮮やかな色彩を残している部分もあるが、大多数は変色している。内面には鉄軸が施されている。大分市内では竹中勝光寺に伝世品(現在は大分市歴史資料館に寄託中)があり、中世大友府内町跡第3次調査SX210⁽²⁾でも同様な製品が出土している。竹中勝光寺の資料も戦国期からの伝世品と推定されることから、戦国期の豊後府内において、現状で少なくとも3個体の華南三彩貼花文五耳壺(トラディスカント壺)が中国から輸入されていたことになる。中世大友府内町跡第3次調査SX210出土遺物は天正14年(1586)12月の島津侵攻に伴う火災一括資料と評価されており、さらに本報告で扱っている遺構間接合資料も火災によると推定される二次的な被熱を受けていることから、これらの廃棄年代は1580年代に比定されよう。また、竹中勝光寺伝世品の外面文様を参考にして、文様の対比図(第28図下段)を作成したので、参照されたい。

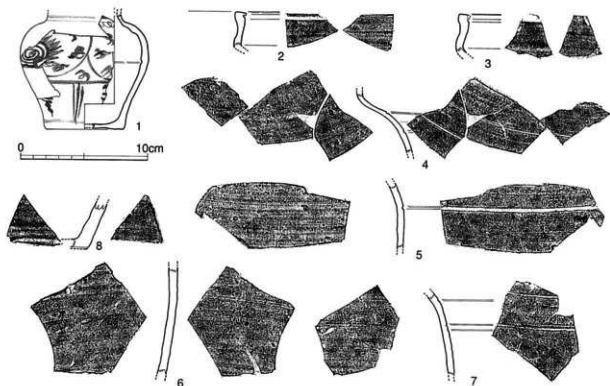
華南三彩貼花
文五耳壺
(トラディス
カント壺)

註(1) 中西武尚「戦国時代を生きぬいた壺—大分市竹中勝光寺伝世品—」(『Funai—府内および大友氏関係遺跡総合調査研究年報Ⅰ—』大分市歴史資料館 1999年)

木村幾多郎「いわゆる「トラディスカント壺」について」(『豊後府内 南蛮の彩り—南蛮の貿易陶磁器—』大分市歴史資料館 2003年)

(2) 本資料については、木村幾多郎氏から多大な教示を賜った。

(3) 大分市教育委員会の調査。報告書待刊予定。



第29図 遺構間接合資料実測図② (1/3)

景徳鎮窯系
青花小型壺
(罐)

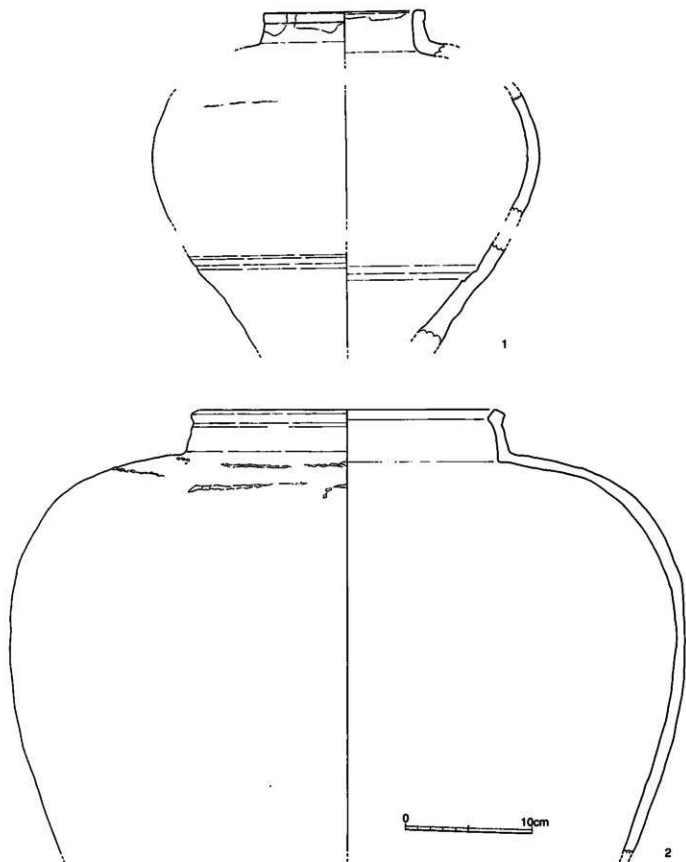
第29図1に示したものは、中国景徳鎮窯系青花小型壺(罐)である。SD101・SX102・SD153・包含層から出土した破片が接合している。SD153の破片は少量であるため、取り上げミスである可能性が考えられ、おそらく本来は上位に位置するSD101の帰属資料であろうと推定する。口縁部を欠損するが、胴部中に宝相蓮華唐草文、胴部下にラマ式蓮弁文を描く。胴部内面中位には刷継ぎの痕跡が認められる。類例が富山県富山佐藤美術館関コレクション⁽⁴⁾中にあり、また中国景徳鎮市新平公社の正徳12年(1517)銘幕葬出土資料⁽⁵⁾中に極めて類似した製品の存在を認める。これらのことから、当該資料は遅くとも1510年代には出現しており、その製作年代は15世紀後葉に遡る資料であると考えられる。2～8はベトナム産焼締陶器長胴壺である。2・3が口縁部、4が肩部、5～7が胴部、8が底部付近の破片である。SD101・SD103・包含層から出土した破片が同一個体であると推定される。やや湾曲しながら立ち上がる口縁部をもち、口縁部外面には1条の深い沈線を施す。また、肩部にも数条の沈線を有する。肩部に重ね焼きの痕跡があり、外面は重ね焼きの部位を境に色調が異なる。外面は肩部以下が暗赤褐色、口縁内外面および内面は淡褐色を呈する。胎土は硬質で、縮状をなす部位があり、小豆色の粒子が含まれる。本資料は伝世のベトナム産長胴壺(切溜花入)とは焼成や作行きの点でやや異なった印象を与えるものの、口縁部形態や胎土の状況からベトナム産焼締陶器長胴壺の範疇に属する製品であると判断した。

ベトナム産
焼締陶器
長胴壺

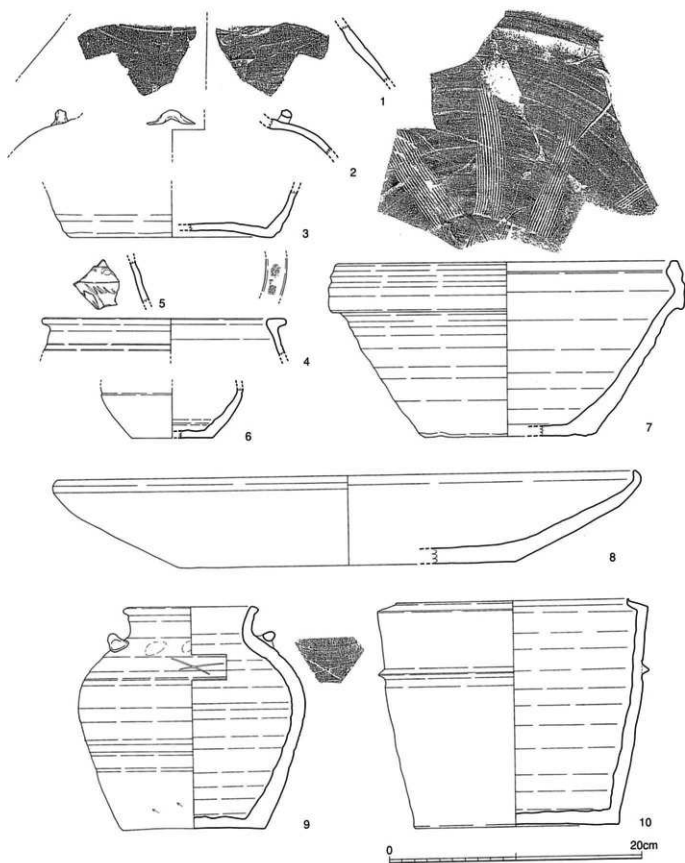
(4) 山口県立萩美術館・浦上記念館「富山佐藤美術館関コレクション フィリピンにわたった焼きもの」(2000年 72頁 No149)

(5) 楊道敏・載定九『景徳鎮民間青花磁器—中国陶瓷全集19—』(1983年)

中村渉「青花白瓷の形式と年代—瓶・小型罐—」(亀井明徳編『明代前半期陶器の研究—首里城京の内SKD1出土品—』
専修大学アジア考古学研究报告書1 2002年) 30頁および pl. 18 II-90



第30回 遺構間接合資料実測図③ (1/3)



第31圖 遺構間接合資料実測図④ (1/3)

第30図1・2は中国産の褐陶器壺である。1は外面および口縁端部を除く口縁内外面に黒褐色の釉を施し、内面および口縁端部付近は露胎となる。胎土は陶器質で、大粒の白色粒子・褐色粒子・小豆色粒子等の不純物が多量に混入する。肩部付近には重ね焼きの痕跡がある。SD101・SX102・SD103から破片が出土している。2は肩の張る胴部と内湾気味に立ち上がり端部を方形に整形する口縁部をもつ。外面に茶褐色の釉を施し、内面は露胎であるが、赤褐色の釉を横方向に薄く粗雑に施釉する部位も認められる。胎土は淡褐色～灰褐色で、小豆色の粒子を少量含む。肩部に重ね焼きの痕跡が見られる。SD101・SX102から破片が出土している。第31図1～5も中国産の褐陶器壺である。1は肩部付近の破片で、外面には暗赤褐色の釉を施し、3条の沈線文が認められる。内面は露胎であるが、暗赤褐色の釉が垂れる部位が見られる。胎土は陶器質で、淡褐色を呈する。SD101・SX102から破片が出土している。2・3は接合しないが、同一個体と推定され、2はSD101からの出土で、3はSD103とSD408の出土破片が接合している。外面に茶褐色の釉を施し、内面および外底部は露胎となる。胎土には小豆色の粒子を含み、色調は淡赤褐色を呈する。4・5も接合しないが、同一個体と推定される資料である。SX102・SD103・SD408からの破片が出土している。外面に暗緑褐色の釉、内面に赤褐色の釉を施している。頸部には2条の浅い沈線、口縁部上面には目跡の痕跡が認められる。5で提示した破片は肩部ないし胴部上位の部位と思われ、隆帯と腹文の一部と思われる表現が認められる資料である。4・5とも胎土は暗褐～暗赤褐色を呈し、小豆色の粒子を含む。6は備前系陶器壺の底部で、SD101・SX102から出土した破片が接合している。胴部下に沈線状の段が見られる。7・8も備前系陶器で、いずれもSX102・SD103から出土した破片が接合している。前者は播鉢で、中世6期に分類され、製作年代は16世紀前葉から中葉に比定される。後者は平鉢で、内面に灰を被っている。9は備前系陶器壺で、肩部に把手(耳)を有する。SD101・SX102・SD103から出土した破片が接合している。肩部には「X」のヘラ記号が認められる。10は備前系陶器広口壺である。SX102・SD103から出土した破片が接合している。肩曲する口縁部をもち、端部は短く直立する。胴部中位に1条の突帯を有する。焼成等が極めて良好で、上手の製品と思われる。見立てにより、水指などとして使用された可能性が考えられる製品である。

備前系陶器
広口壺
(水指)

SD409 (第13図) 98B～99A区で検出された遺構である。遺構は調査区外に広がる様相を見せるが、長さ5m、最大幅0.9m、深さ30cmを検出した。98B～99A区で検出された柱穴と切り合い関係をもち、柱穴に切られていることを確認している。調査当初、当該遺構がSD410とセットになる溝であると解釈していたが、調査区の制限から溝であると断定できず、大型土坑であった可能性も考えられる。図示していないが、掘土中から口縁外面に凹線をもつ備前系陶器大甕の破片が出土しており、遺構の構築年代は1570年代以降と推定している。

SD410 (第13図) 99B～98A区で検出された溝で、長さ9m、幅0.7～0.8m、深さ約40cmを測る。99B区で西側に屈曲し、SD101と接続する。SD101と一連の遺構であることから、16世紀末葉以降に比定される。遺構平面図については第13図を、土層断面図については第35図を参照された。図示が可能となるような遺物は出土していない。

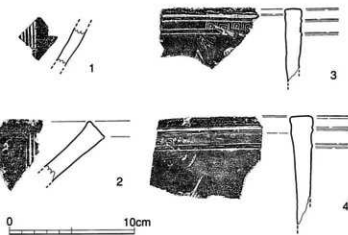
SD408 (第13図) 積土遺構SX102の盛土を撤去した後の基底面で検出した溝である。2B～5A区で検出したが、SX102の土層断面から0B区以西にも確実に伸びていることが判明した。従って、遺構の規模は長さ44m以上、幅20～50cm、深さ約20cmを測る。土層断面の検討からは、SX102と併行して機能していた時期とSX102の盛土によって積土下に完全に埋没してしまう時期が認

められるようである。遺構の性格は明らかにできなかった。埋土中より出土遺物が少量認められ、それらの年代観から、遺構の構築年代は16世紀末葉に比定される。

SD408出土遺物 (第32図)

1・2は備前系陶器摺鉢で、2の口縁部は14世紀後半に比定される中世3期bに属する資料である。3・4は在地系の瓦質土器火鉢である

が、それぞれ別個体の製品である。口縁部外面の2条の突帯間に雷文の刻印をスタンプしている。16世紀末葉の製品である。また、図示していないが、ガラス小玉の破片が3点出土している。色調はコバルトブルーを呈する。以上の出土遺物のうち、3・4が遺構の構築年代を示唆する遺物と判断している。

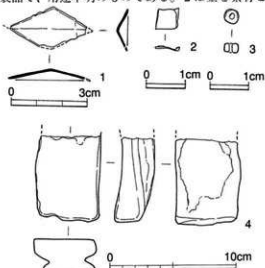


第32図 SD408出土遺物実測図 (1/3)

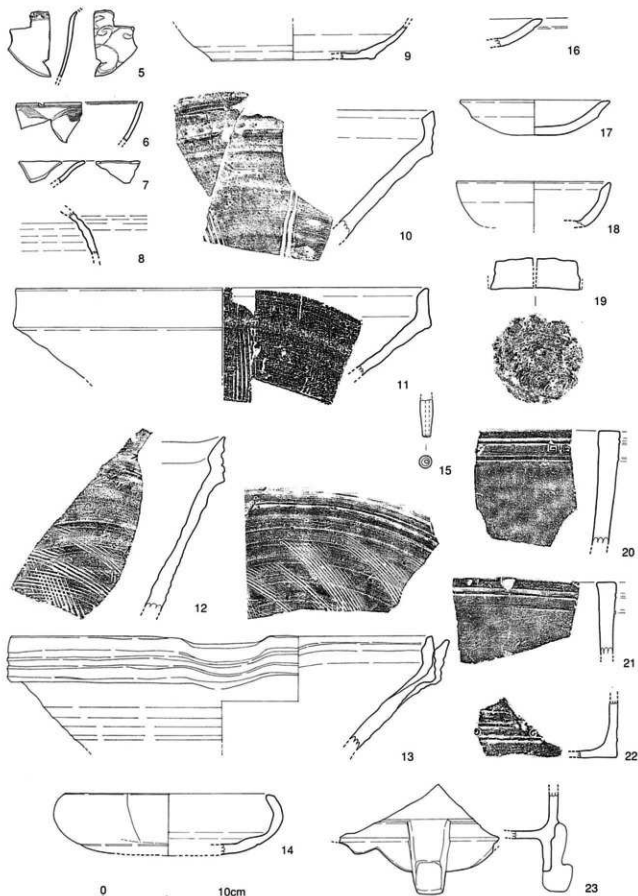
SX604 (第13図) 98B・99B区で検出した遺構である。発掘当初は集石遺構として認識していた。集石は頭大から拳大の大きさの礫で構成され、南北約3.2m、東西約5.5mの範囲に展開する。明瞭な平面プランや掘方などは認められないが、礫の分布状況は北西方向に向かって伸びるような状況がうかがわれ、その延長部は中世大友府内町跡10次調査区で検出された砂利敷きの道路遺構に接続する可能性も考えられる。礫には集中する部位と疎散的に分布する部位があり、必ずしも意図的に集められたものとはいえない部分もある。従って、これらの礫群は整地層内につき込まれたものか、あるいは整地層上面を補強する機能を果たしたものと考えられる。また、調査当初には気づかなかったが、北側の98C～99D区で道路状遺構 SP650の存在を確認しており、SX604がこの道路状遺構と一連のものか、関連する遺構であった可能性もある。礫群中や周辺から出土した遺物から、遺構の構築年代は16世紀末葉に比定される。

金を素材とした金属製品

SX604出土遺物 (第33・34図) 第33図1は銅製品で、用途不明のものである。2は金を素材とした金属製品であるが、小片であるため、これも用途不明である。3はガラス小玉で、色調はダークブルーを呈する。4は砥石である。第34図5は中国景徳鎮窯系青花碗で、口縁部が端反りとなる器形を呈する。小野分類のB1群に属するもので、口縁内面には呉須で四方禪文を描き、胴部外面には毛彫りによる唐草文が認められる。16世紀前葉の製品である。6は中国漳州窯系青花碗の口縁部で、16世紀末葉に比定されるものである。7は中国産の白磁皿で、口縁部は稜花となる。16世紀代の所産である。8は中国産白磁瓶の肩部破片で、内面は露胎となる。9は中国南部産の燒締陶器鉢の底部である。内外面とも無輪で、外底部は未調整となる。10～

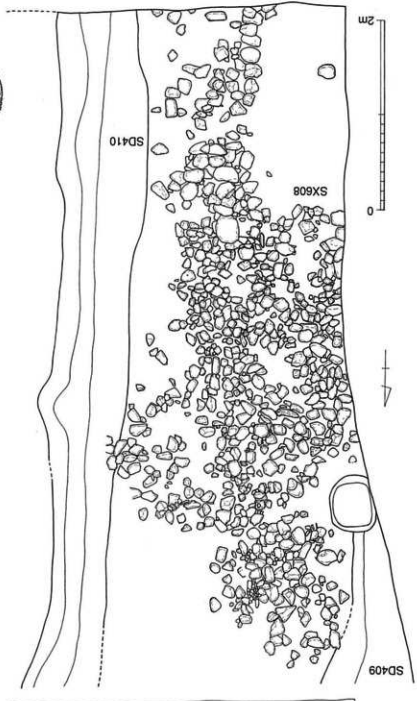


第33図 SX604出土遺物実測図①
(1は1/3、2・3は1/1、4は1/3)

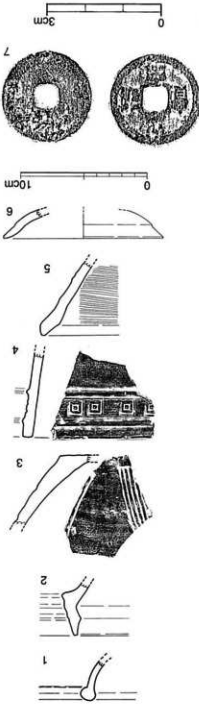


第34図 SX604出土遺物実測図② (1/3)

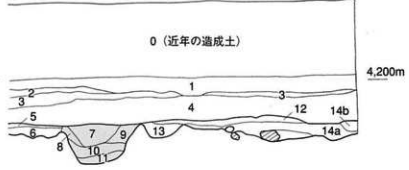
第35図 SX608家測図 (1/30)



第36図 SX608出土遺物家測図 (1/3)



0 (近年の造成土)

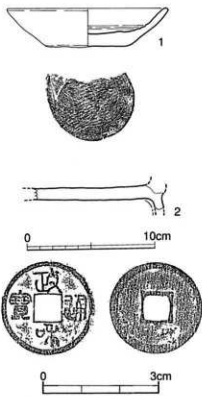


- 0 近年の造成土
- 1 3. 田舎土・田舎土
- 2 4. 暗灰褐色粘質土
- 3 5. 暗灰褐色粘質土
- 4 6. 暗灰褐色粘質土
- 5 7. 暗灰褐色粘質土
- 6 8. 暗灰褐色粘質土
- 7 9. 暗灰褐色粘質土
- 8 10. 暗灰褐色粘質土
- 9 11. 暗灰褐色粘質土
- 10 12. 暗灰褐色粘質土
- 11 13. 暗灰褐色粘質土
- 12 14a. 暗灰褐色粘質土
- 13 14b. 暗灰褐色粘質土
- 14 14b. 暗灰褐色粘質土

13は備前系陶器播鉢で、10は中世6期、11は中世5期、12・13は近世1期bの特徴を示す。14は備前系陶器の鉢である。15は土錘で、上半部を欠損する。16～18は京都系土師器で、16・17は2～3期の皿、18は3期の坏である。19はロク口成形による燗台で、底部に糸切り痕が認められる。色調は赤褐色を呈し、断面中央の孔は貫通する。20～22は在地系の瓦質土器火鉢で、色調は赤褐色を呈する。20の外突帯間には雷文、21の外突帯間には双頭蕨手流雲文の刻印をもつ。1580年代前後を中心に製作された製品である。23は瓦質土器火鉢の脚部で、灰黒色の色調を呈する。この形態の脚部は20～22に伴う脚部ではなく、他型式のものである可能性が高い。

SX608 (第35図) 調査区南西隅の98A・98B区に位置する遺構で、集石遺構として報告する。SX608は頭大から拳大の礫で構成される礫敷きであり、その分布は最大幅2.6m、長さ6.8m以上を測るが、その範囲は溝SD410とSD409に挟まれた空間の一部に限られる。また、調査区南西隅の南北2.1m、東西0.9mの範囲には確実に礫の分布を認めることができず、その周囲の縁辺部には拳大の礫を意図的に並べたような状況も観察できる。これらの礫敷きは、前述した積土遺構SX102の基底部やSX604の礫敷きの状況とも類似点を見い出せるものである。調査当初の段階では、周囲に堆積する土層の判別に苦慮したため、礫敷き部分のレベルまで一気に掘り下げを行っている。そのため、礫敷き上位に堆積する土層や施設の確認が不明瞭になってしまったが、調査区南壁土層の観察から、礫敷きの上位に砂質土からなる盛土がなされていることが確認された。この盛土の一部には硬化した部分が認められる。従って、SX608の性格はSX102に接続し南方向に屈曲する積土遺構基底部の延長、あるいは道路状遺構の一部である可能性が考えられよう。礫敷きの間より京都系土師器皿などの遺物が少量出土しており、これらの年代観から、遺構の構築年代は16世紀末葉に比定される。

SX608出土遺物 (第36図) 1は中国南部産と推定される焼締陶器鉢の口縁部で、B類に分類されるものである。2は備前系陶器播鉢の口縁部で、中世6期bから近世1期の特徴を示す。3も備前系陶器播鉢での底部で、中世6期以前の特徴を有する製品である。4は瓦質土器火鉢の口縁部で、外面の突帯間に二重方形文を刻印する。5は土師質土器土鍋で、内面にハケ状工具による調整、外面に指頭痕が認められる。6は京都系土師器皿で、2期の特徴を有する製品であることから、16世紀後葉に比定される製品である。7は中国北宋代の銅銭で、「皇宋通寶」である。書体は真書体で、初鑄年代は1038年である。



第37図 SD405出土遺物実測図
(1・2は1/3、3は1/1)

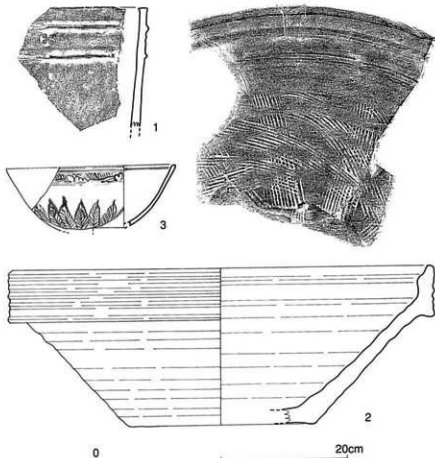
SD405 (第109図) 2A区で検出された溝で、長さ3.9m、幅0.6m、深さ40cmを測る。南側はさらに調査区外に伸びる。16世紀中葉の土坑SK004を切っており、遺構の構築順序はSK004→SD405となる。出土遺物は少ないが、京都系土師器を模倣した土師器皿が出土していることから、遺構の構築年代は16世紀後葉以降に比定される。溝SD101・SD410で囲まれた空間(屋敷地?)をさらに東西に区切る機能をもつ溝と解釈される。遺構の平面図・土層図については、第109図を参照されたい。

SD405出土遺物 (第37図) 1は土師質土器の皿である。底部内面付近に不整方向ナデ、口縁内外面および胴部外面には回転ナデを施す。底部外面には回転糸切り痕とともに圧痕が認められる。色調や胎土が浅黄色を呈しており、京都系土師器を模倣した製品である可能性が高い。2は瓦質土器火鉢の底部である。3は中国北宋代の銅銭で、「政和通寶」である。書体は篆書体で、初鑄年代は1111年である。

SD420・SD414・SD415・SD429 (第7図) いずれもSD103の北側に位置する溝で、同時期に併存したと思われる遺構である。SD420は99B区で検出され、長さ5.2m、幅0.3~0.5m、深さ30cmを測る。さらに東側に伸びていた可能性もあるが、確認できなかった。埋土中から瓦質土器火鉢の口縁部が出土している。SD414は0B~1B区で検出され、長さ6.5m、幅0.4~0.6m、深さ30cmを測る。0B~1B区の境付近でいったん途切れるが、本来連続していたと推定される。図示可能な遺物は出土していない。SD415は3B区で検出され、長さ7.5m、幅0.5m、深さ30cmを測る。さらに西側に伸びていたと思われるが、調査上のミスで検出できなかった。東側は集石遺構SX618が覆うような形で検出されているが、本来SD429と接続していた可能性がある。近世1期bの備前系陶器挿鉢が出土しており、16世紀末葉の構築である。SD429は4B~5D区で検出され、5B区で北側に屈曲する。総延長29.5m、幅0.5~0.9m、深さ60cmを測る。溝SD428・井戸状遺構SE514・集石遺構SX629等と切り合い関係をもち、遺構の構築順序はSD428→SE514→SD429→SX629となる。SD428と重複する部位の埋土は、黄褐色砂質土となっている(第41図)。4B区

の埋土中から青花碗が出土した。切り合い関係や出土遺物から、遺構の構築年代は16世紀末葉である。以上の4つの溝は、SX103の北側に存在する屋敷地の区画溝である区画溝の可能性が高いと考える。

屋敷地の
区画溝

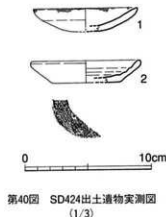


SD420・SD415・SD429出土遺物 (第38図)

1は瓦質土器火鉢の口縁部で、口縁部外面に2条の突帯を有し、突帯間に刻印をスタンプする。16世紀代の製品である。

第38図 SD420・SD415・SD429出土遺物実測図 (1/3)
(1. SD420 2. SD415 3. SD429)

2は備前系陶器搦鉢で、放射状描目と斜め描目を交差させる描目の特徴をもつ。近世1期bに属し、1570年代以降に出現する型式である。3は中国景徳鎮窯系青花碗で、小野分類C群に比定される資料である。口縁外面に波濤文、胴部外面下位に芭蕉葉文を描くもので、蓮子碗と呼ばれる典型的な製品である。16世紀前葉の所産である。



第40図 SD424出土遺物実測図 (1/3)

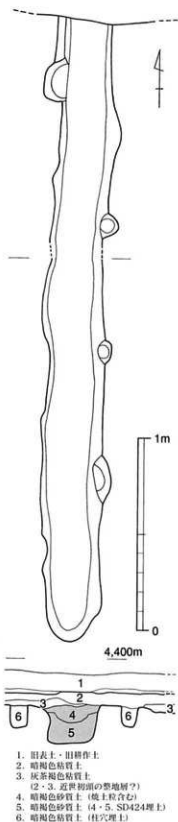
SD424 (第39図) 99C~99D区で検出された溝で、長さ6.5m、幅0.7m、深さ40cmを測る。北側はさらに調査区外に伸びる。埋土は2層に大別されるが、掘り直し等の痕跡を認めることはできなかった。埋土中から京都系土師器皿が出土しており、遺構の構築年代は16世紀後葉以降と推定される。SD424の西側約4.5mには道路状遺構SF650が存在しており、道路状遺構と東側の屋敷地とを区画する遺構である可能性が高い。

SD424出土遺物 (第40図) 1は京都系土師器皿で、口縁端部内外面で煤の付着が見られる。2期の特徴を有し、16世紀後葉に比定される。2は在地系土師器の皿で、底部に回転系切り痕をもつ。内面にはロクロ目が認められる。

SD428 (第41図) 5B~5D区で検出された溝で、その規模は長さ13.5m、幅2.0~2.6m、深さ1.2を測る。北側は擾乱により状況が不明であるが、さらに調査区外に伸びることが想定される。井戸状遺構SE514、溝SD429、集石遺構SX330・SX332と切り合い関係を有するが、これらの遺構すべてに切られている。埋土の状況からは流水の痕跡は認められず、溝の機能時には空欄状を呈していたと思われる。埋土上位には焼土を多量に含む4層が堆積しており、当該部位から熱を強く受けて変形し、細片となった銅銭片が多量に出土した。また、埋土上位から中位には、長さ幅とも3cm前後に破砕された五彩・青花の細片が多量に包含されていた。陶磁器類については被熱していないが、意図的に砕かれたものが廃棄されているような印象を受ける。埋土中から銅銭や陶磁器類の細片が多数出土する状況は極めて奇異に感じたが、これらの遺物が廃棄されるに至った原因については明らかにできていない。さらに、埋土中位から下位にかけて、大型破片あるいは完形に復元される京都系土師器皿が一定量出土している。これらの京都系土師器は器壁が薄く、1期に比定されるものが主体を占める。以上のように

道路状遺構と
屋敷地との区
画溝

被熱・変形し
た銅銭片およ
び陶磁器細片
の出土



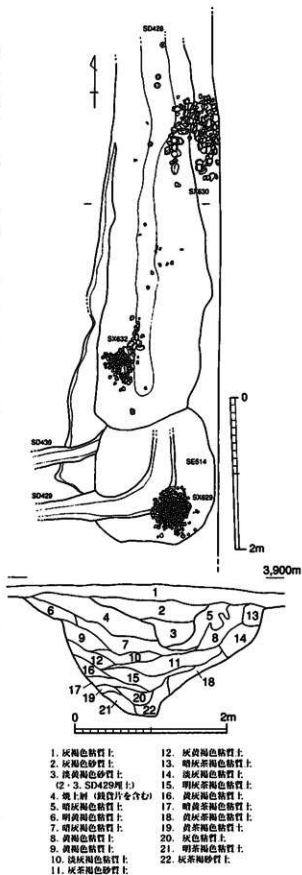
第39図 SD424実測図 (1/40)

1. 照表土・旧耕作土
2. 暗褐色粘質土
3. 灰茶褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土 (2・3. 近世初期頃の築地層?)
5. 暗褐色砂質土 (埋土を含む)
6. 暗褐色粘質土 (柱穴埋土)

屋敷地に伴う
区画溝

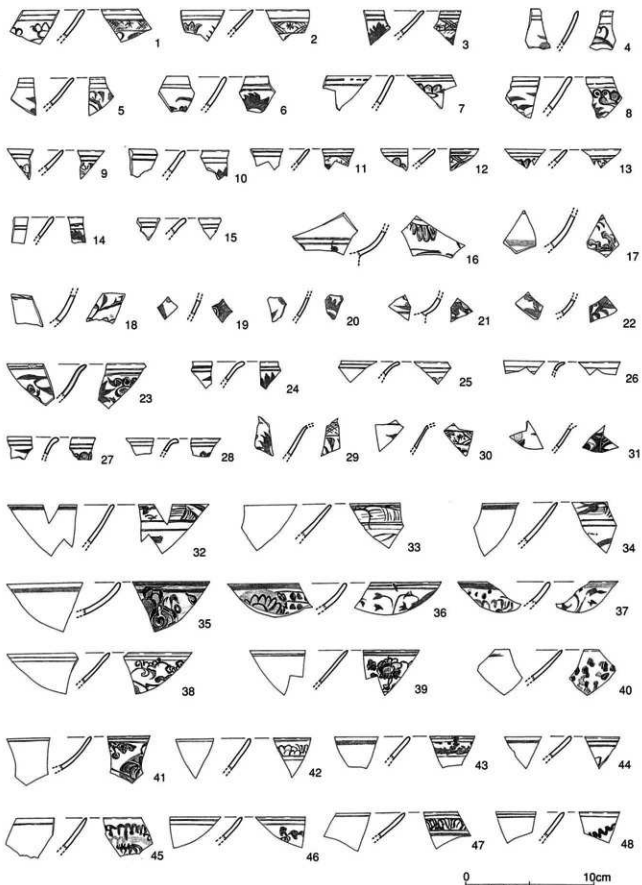
な出土遺物から、遺構の構築年代は16世紀前葉に比定される。当該遺構は同時期に併存したと推定されるSD425・SD452とともに調査区北東側の屋敷地に伴う区画溝と推定される。

SD428出土遺物（第42～44図） 第42図1～31は中国産の五彩である。このうち、1～22は五彩碗、23～31は五彩皿で、いずれも意図的に破砕され、細片化された後に廃棄された資料である。細片のため、断定が難しい資料もあるが、五彩碗は小野分類C群碗、五彩皿はB1群皿に比定され、16世紀前葉までに製作された製品である。32～第43図52は中国産の青花で、32～48は青花碗、49～52は青花皿である。このうち、32～37・44は漳州窯系青花と推定され、後述する京都系土師器などと年代観が合致しないため、取り上げミスあるいは混入品である可能性も考えられる。53～71は中国龍泉窯系青磁である。このうち、53～60は口縁部外面に雷文帯から脱化した波状文を有する青磁碗で、15世紀末葉から16世紀前葉の所産である。61～62も青磁碗で、波状文が省略され、無文となる製品である。63～65は外面に蓮弁文あるいは細蓮弁文を有する青磁碗で、これらも16世紀前葉までに比定される。66～69は無文の青磁碗、70～71は屈曲する口縁部を有する青磁皿あるいは盤である。72～79は中国産の白磁で、72～78は白磁皿、79は白磁鉢である。このうち、72～74・78については森田勉分類によるD群に属し、72～74は口縁部が端反りとなる白磁皿、78は萁筒底となる白磁皿に復元できよう。75～77については森田勉分類に類例が認められない資料で、口縁内外面に乳白色の白磁釉を施し、見込みと外底部および高台周辺が露胎となるタイプの白磁皿である。田中克子による集成図⁽⁶⁾の中

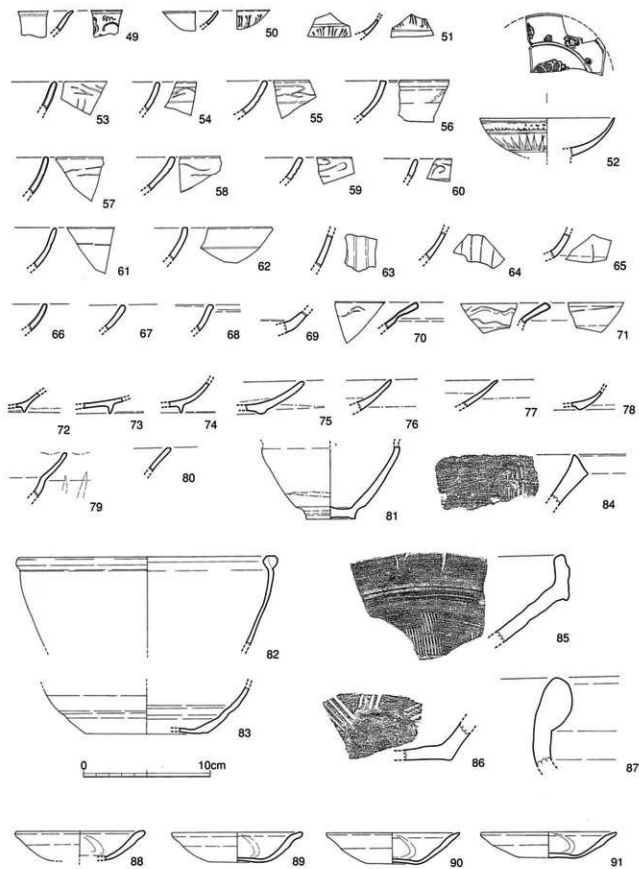


第41図 SD128実測図
(遺構平面図は1/80、土層図は1/50)

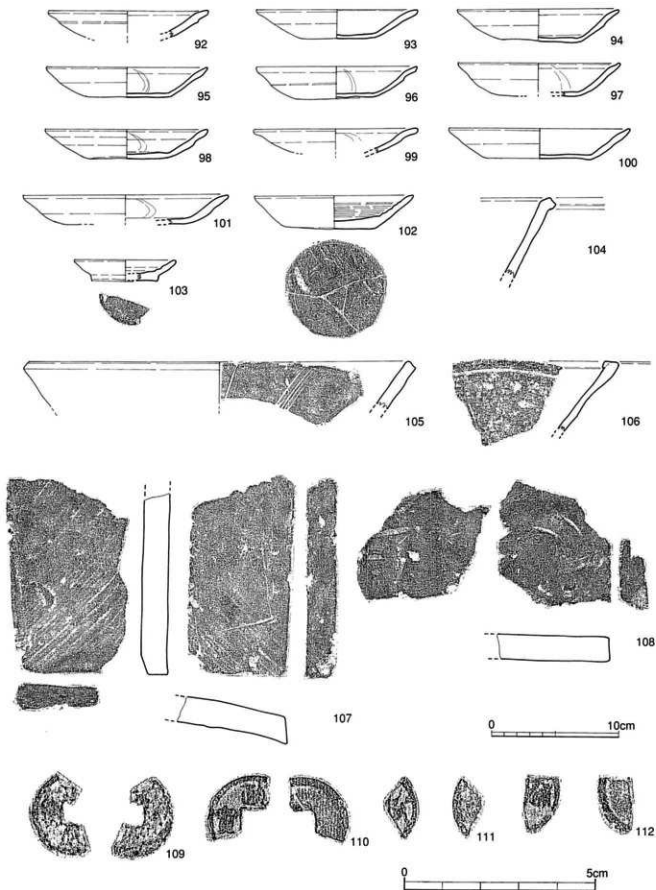
(6) 田中克子「博多道跡群出土の内底露胎の時期の一群について」(『博多研究会誌』第4号 1996年)



第42図 SD428出土遺物実測図① (1/3)



第43回 SD428出土遺物実測図② (1/3)



第44図 SD428出土遺物実測図③ (92~108は1/3, 109~112は1/1)

に類例が認められ、16世紀前葉には出現している形式のようである。中世大友府内町跡5次調査A地区でもSK004から良好な資料が出土している(第110図2)。79は白磁鉢で、胴部と口縁部の境に屈曲を有する。胴部外面に縞を施し、口縁部は輪花となる。80は朝鮮王朝産灰青陶器製の口縁部である。81は中国産の天目碗で、口縁部を欠損する。2度掛けの施釉が行われている状況が観察でき、外底部と高台周辺は露胎となる。82・83別個体と思われるが、いずれも中国南部産と推定される焼締陶器鉢である。82は口縁部の形態からB類に属する。84~86は備前系陶器鉢鉢で、84は中世3期b(15世紀前葉)、85は中世6期(16世紀前葉)に比定される口縁部である。87も備前系陶器大甕の口縁部で、中世4期(15世紀後半)以降に比定される型式となる。88~第44図101は京都系土師器皿で、いずれも1期に比定される資料である。102は内面にロクロ目を有する在地系土師器皿で、底部外面には糸切り痕の他に圧痕が認められる。103も内面にロクロ目を有する在地系土師器の小皿である。104は土師質土器の土鍋で、内面に横方向のナデを施す。105・106は瓦質土器鉢鉢で、後者は口縁端部を内側に折り返す防長系の製品である。109は平瓦で、凸面・凹面に糸切り痕(コビキA)が見られる。108は埴である。109~112は銅銭で、このうち109・111は判読不明、112は「通」字のみが判読可能である。110は中国北宋代の「政和通寶」と思われ、「政」「寶」字が判読できる。書体は篆書体で、初鋳年代は1038年である。この他、2次的な被熱を受けた銅銭の小片が多数出土している。

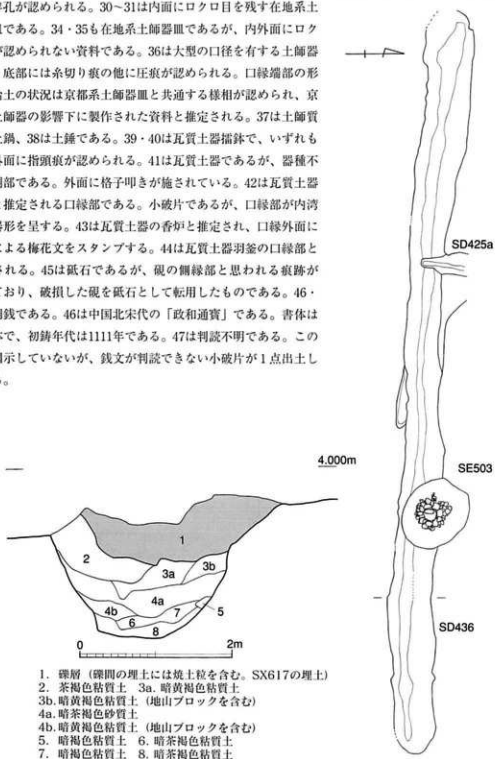
SD436(第45図) 1B~4B区で検出された溝で、その規模は全長29.5m、幅1.4~1.9m、深さ1.7mを測る。調査区の範囲内で、溝の東端部と西端部を確認することができた。15世紀末葉から16世紀初頭に構築された井戸SE503および16世紀末葉に比定される集石SX317・SX318と切り合い関係を有する。遺構の構築順序はSE503→SD436→SX617・SX618となる。さらに、2B区で北側へ伸びる溝SD425aと接続することを確認した。また、SD452の東端部と前項で記したSD428とは接続せず、両道構間に約5.5mの空地が認められる。埋土の状況からは流水の痕跡は認められず、溝の機能時には空堀状を呈していたことが推定される。埋土中より、1期の京都系土師器皿とともにC群青花碗、青磁盤、備前系陶器水指などが出土しており、16世紀前葉に比定される遺構である。遺構の切り合い関係や出土遺物の年代観と矛盾しない調査所見が得られている。当該遺構も同時期に併存したと推定されるSD425・SD428とともに、調査区北東側の屋敷地に伴う区画溝と推定される。

屋敷地に伴う
区画溝

SD436出土遺物(第46・47図) 第46図1・2は中国景德鎮窯系青花碗で、蓮子碗と呼称される小野分類C群に属する典型的な製品である。2の口縁部は欠損しているが、いずれも口縁外面に波濤文、胴部外面に芭蕉葉文、見込みに巻貝文を描くものである。2の外底部には、異体字による銘款も認められる。16世紀前葉の所産である。3~5も口縁部の小破片であるが、中国景德鎮窯系青花碗C群に比定される資料である。6は中国産の青磁碗で、口縁外面に雷文帯から変化したと推定される波状文が認められる。口縁端部は口縁状に赤褐色を呈しているが、これが意図的なものかどうかは判断できない。15世紀末葉から16世紀初頭以降の製品である。7は中国龍泉窯系青磁盤で、深緑色の青磁釉を呈するもの。口縁が大きく開く器形を呈し、口縁部と胴部の境に屈曲部を有する。内底部は露胎となり、高台登付け部にも施釉している。当該遺構の他に、井戸SE403、整地層SX603から出土した破片が接合している。SE403出土の破片は、本遺構の下位に構築されていた井戸であるため、取り上げミスの可能性も考えられる。8は中国産の白磁皿で、輪花を呈する口縁部の破片である。9は粗製の白磁皿で、高台内面と外底部が露胎となる。中国南部(福建・広東系)の製品であろうか。10は備前系陶器水指である。筒状の胴部をもち、口縁端部上面は平坦面をなす。茶器としての水指の専用器として製作されたものである可能性が高く、注意を払っておきた

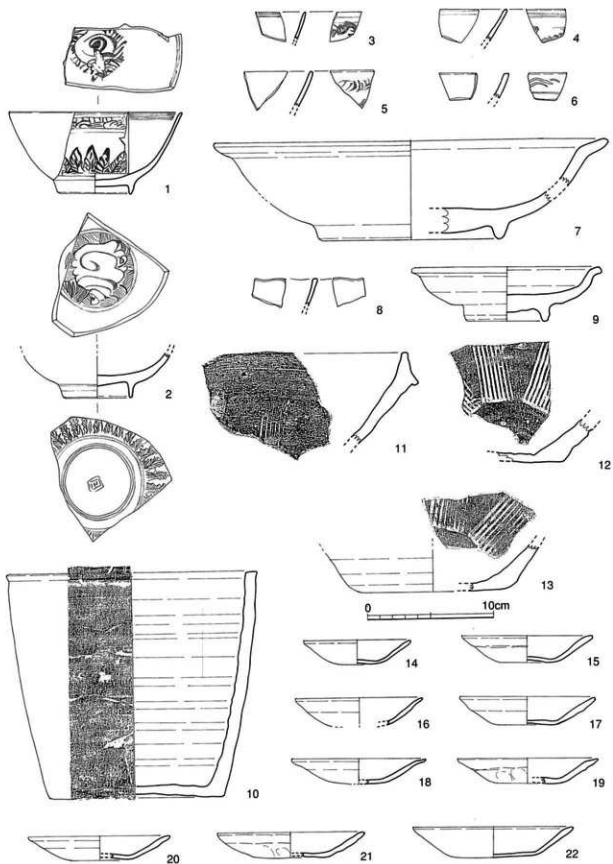
備前系
陶器水指

い資料である。11～13は備前系陶器搨鉢で、このうち口縁部の形態が判明する11は中世4期（15世紀前葉）に比定される。14～第47図29は京都系土師器皿である。14～28は1期に属する資料であるが、このうち28は特に器壁が薄く、当該資料については1期に先行する型式である可能性が考えられる。29はやや厚手のものであり、2期に降る資料である可能性がある。当該資料の出土地点は溝の埋土中であると判断したが、取り上げミスあるいは混入品である可能性も捨てきれない。胴部下位に穿孔が認められる。30～31は内面にロクロ目を残す在地系土師器皿である。34・35も在地系土師器皿であるが、内外面にロクロ目が認められない資料である。36は大型の口径を有する土師器皿で、底部には糸切り痕の他に圧痕が認められる。口縁端部の形態や胎土の状況は京都系土師器皿と共通する様相が認められ、京都系土師器の影響下に製作された資料と推定される。37は土師質土器土鍋、38は土鍾である。39・40は瓦質土器搨鉢で、いずれも胴部外面に指頭痕が認められる。41は瓦質土器であるが、器種不明の胴部である。外面に格子叩きが施されている。42は瓦質土器の埴と推定される口縁部である。小破片であるが、口縁部が内湾する器形を呈する。43は瓦質土器の香炉と推定され、口縁外面に刻印による梅花文をスタンプする。44は瓦質土器羽釜の口縁部と推定される。45は砥石であるが、硯の側縁部と思われる痕跡が残っており、破損した硯を砥石として転用したものである。46・47は銅銭である。46は中国北宋代の「政和通寶」である。書体は篆書体で、初鑄年代は1111年である。47は判読不明である。この他、図示していないが、銭文が判読できない小破片が1点出土している。

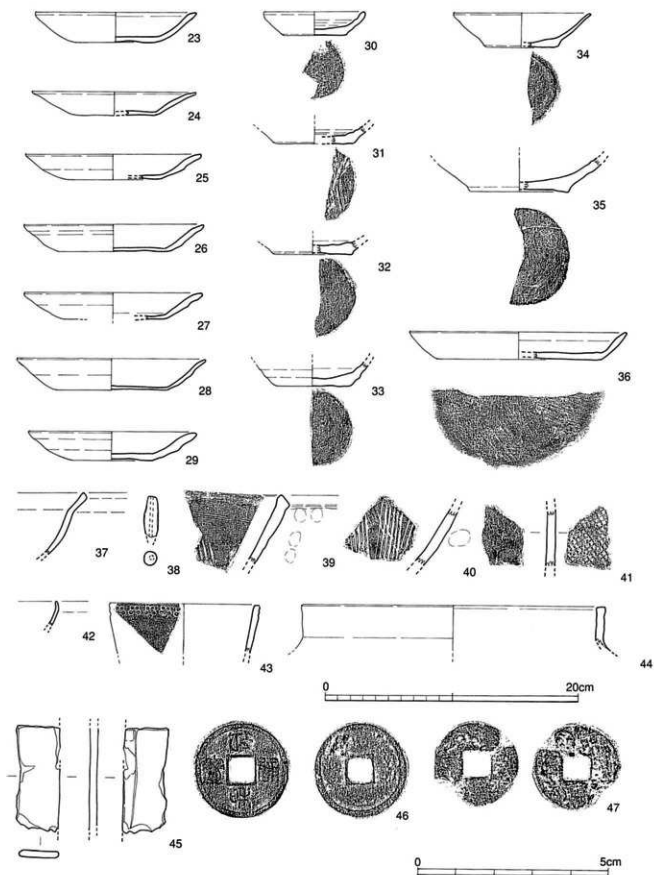


1. 硬層（硬層の埋土には焼土粒を含む。SX617の埋土）
2. 茶褐色粘質土 3a. 暗黄褐色粘質土
- 3b. 暗黄褐色粘質土（地山ブロックを含む）
- 4a. 暗茶褐色砂質土
- 4b. 暗黄褐色粘質土（地山ブロックを含む）
5. 暗褐色粘質土 6. 暗茶褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土 8. 暗茶褐色粘質土

第45図 SD436実測図（遺構平面図は1/150、土層図は1/50）



第46図 SD436出土遺物実測図① (1/3)



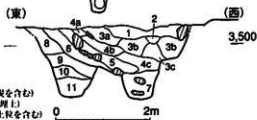
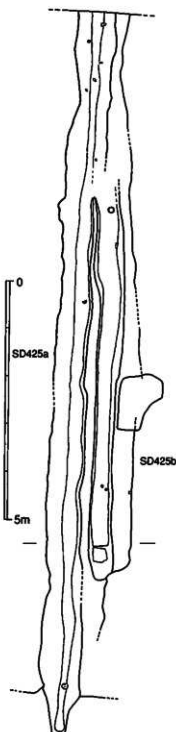
第47图 SD436出土遺物実測図② (23~45は1/3、46・47は1/1)

2条の溝が
重複

SD425 (第48図) 2B～5D区で検出した溝である。検出当初は1条の溝と認識して掘り下げを進めたが、調査終盤での遺構底面の状況や土層観察により、切り合い関係にある2条の溝が重複していることが判明した。古く構築された溝をSD425a、新しく構築された溝をSD425bと呼称する。さらに、これらの溝は4C区付近で井戸SE513を切っており、以上の遺構の構築順序はSE513→SD425a→SD425bとなる。SD425aは長さ15m、幅0.9m以上、深さ80cmを測り、断面形態は台形状になる。南端部で溝SD436と接続し、北側はさらに調査区外に伸びる。SD425bは長さ12m、幅1.5m、深さ80cmを測り、断面形態は2段掘りとなる。南端部はSD436とは接続せず、2.4mほどの空開地を保つようになる。また、北側はさらに調査区外に伸びる。埋土上位には多量の礫が出土し、土層断面の状況から、西側から礫を多量に含む埋土で人為的に埋め立てられた様子がうかがわれた。SD425aとSD425bの埋土は互いに類似しており、両者の出土遺物を併別して取り上げを行うことはできなかったが、一部の出土遺物については出土地点から、遺物の帰属を想定することが可能であった。両遺構から16世紀前半に比定される1期の京都系土師器が出土しており、出土遺物の様相からは明確な構築時期の違いは認められなかった。同時期に併存したと推定されるSD428・SD436とともに、調査区北東側の屋敷地に伴う区画溝と推定される。

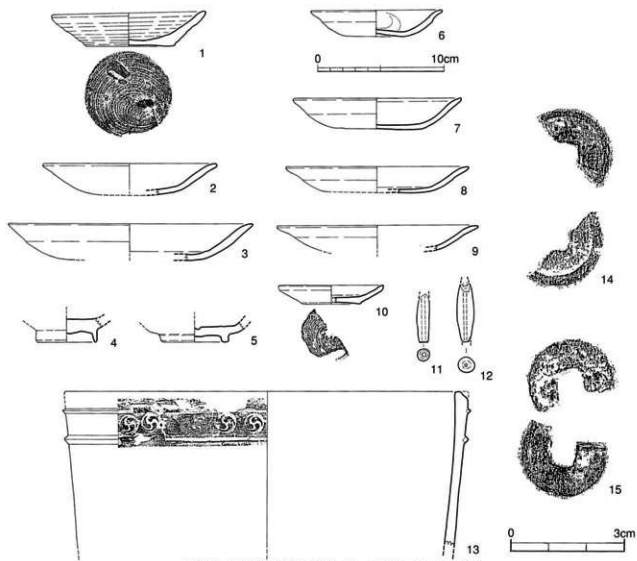
屋敷地に伴う
区画溝

SD425出土遺物 (第49図) 1～5はSD425aに帰属する遺物である。1は内外面にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿である。2・3は京都系土師器皿で、器壁が薄く、1期の特徴をもつ資料である。4・5はいずれも中国産の青磁碗の底部で、4は内底部のみが露胎になるのに対し、5は見込み部分も露胎となる。6はSD425bの出土遺物で、1期の特徴をもつ京都系土師器皿である。SD425bの出土遺物として確実で図示可能な資料としては、当該遺物が唯一のものである。7～13についてはSD425一括として取り上げたものである。7～9も京都系土師器皿で、これらも薄い器壁をもつ1期に属する資料である。10は在地系の土師質土器皿で、内外面にロクロ目を残さないタイプである。11・12は土鐘である。13は瓦質土器火鉢で、外面に貼付される2条の突起間に巴文のスタンプを有する。14・15は判読不明の銅銭である。



1. 茶褐色粘質土 (埋土段をわずかに含む)
2. 黒褐色の炭を多く含むブロック
- 3a. 淡茶褐色粘質土
- 3b. 茶褐色粘質土 (炭を含む)
- 4c. 判別色粘質土
5. 暗灰褐色粘質土 (炭を含む)
6. 灰褐色粘質土 (炭を含む)
7. 暗灰褐色粘質土 (炭を含む) (1～7, SD425aの埋土)
8. 茶褐色粘質土 (埋土段を含む)
9. 明茶褐色粘質土
10. 暗茶褐色粘質土
11. 明茶褐色粘質土
12. 暗茶褐色粘質土
13. 暗茶褐色粘質土 (8～11, SD425aの埋土)

第48図 SD425発掘面
(遺構平面図は1/80、土層図は1/50)



第49図 SD425出土遺物実測図 (1~13は1/3、14・15は1/1)

SD153 (第50図) 0B~5A区で検出した大型の溝である。その規模は長さ53.6m、幅2.0~3.5m、深さ約1mを測る。0A区で遺構西端部を検出するとともに、当該部位に向かってSD411~413が接続する。また、5A区で南北方向に伸びる溝とも接続している。さらに、4A~5A区ではSD153の埋土上部に位置する整地層SX603およびSD153・SX603を切って構築された溝SD103と切り合い関係を有する。遺構の構築順序は、SD153→SX603→SD103となる。溝の埋土(第9図参照)は上位の土層群と下位の土層群に大別され、両者は整合面をなすことから、少なくとも1回は大規模な掘り直しあるいは修築がなされたことがうかがわれる。埋土にはシルト系や粘質土系土層の堆積が認められ、遺構内が滞水の状況であったことを示唆している。上位・下位の土層群からはともに土師質土器や瓦質土器等を包含するが、下位の土層群にはこれらに加えて漆器椀や下駄などの木製品が出土している。出土遺物の分布状況は概して疎散的ではあるが、4A区と3A区においては一定量の遺物が集中する地点を検出した。前者を第1遺物集中部、後者を第2遺物集中部と呼称する。

大規模な掘り直しあるいは修築

第1遺物集中部

第1遺物集中部(第52図)では土師質土器皿を主体とする遺物の集中が認められ、それらは出土したレベルから、上層・下層・最下層の遺物群に細別できる。上層・下層の遺物群には最大で70

第2遺物
集中部

cm程度のレベル差が認められるが、いずれも在地産の土師質土器皿が主体となる遺物群で、同時期か極めて近い時期に溝中に廃棄された状況を呈している。特に、下層遺物群（第53図9～18）とした土師質土器皿10点はほぼ同時に廃棄された良好な一括資料と解釈され、この中に極めて薄い器壁をもつ京都系土師器皿（同18）が存在する。この京都系土師器皿は、下層遺物群の中で最も下位のレベルから出土している。上層および下層遺物群は、土層で確認した大規模な修築がなされた以降の溝に属する遺物である。また、最下層遺物群は修築以前の溝に属する遺物と推定され、漆器碗や下駄、加工木材（第54図19～21）など、一定の環境下でしか出土しない木製品で構成されている。第2遺物集中部でも遺物の集中出土が認められたが、土師質土器皿を除いて、その大部分は破片資料である。

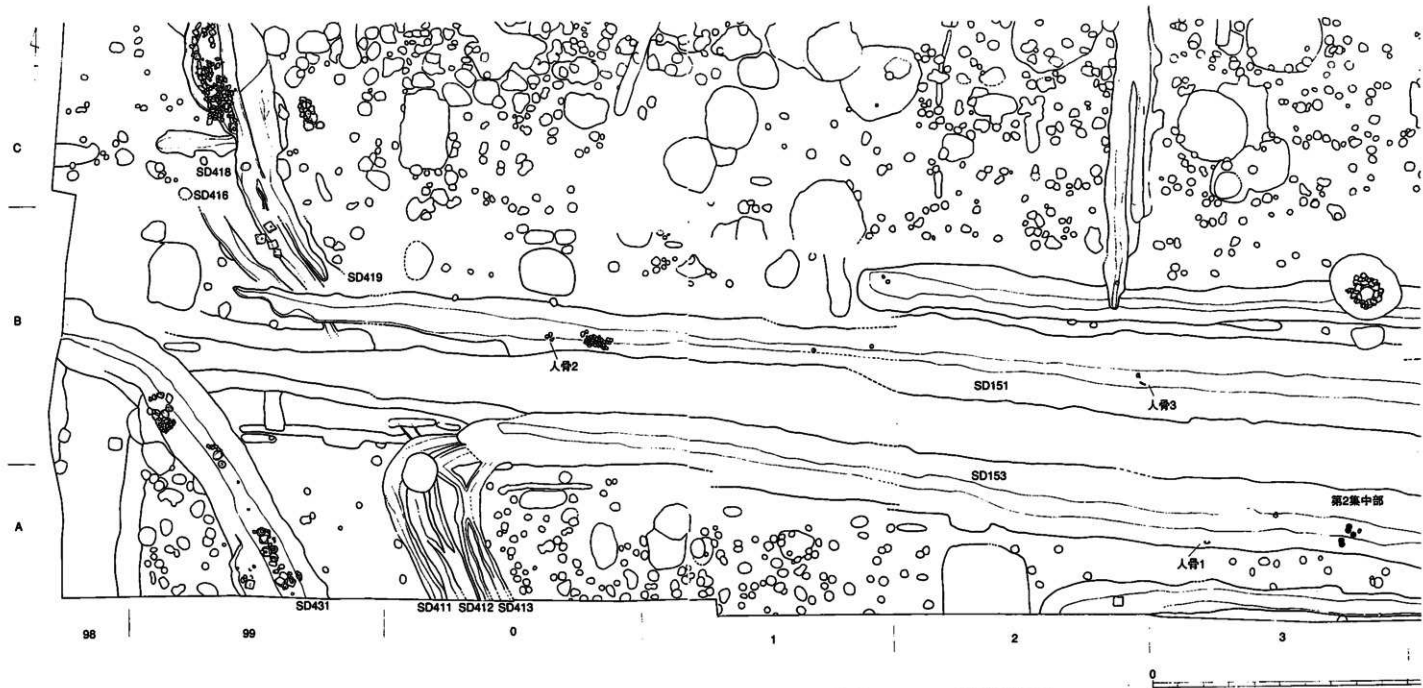
頭蓋骨の出土

さらに、4A区西側では修築以降の溝の埋土中から頭蓋骨1体（人骨1）が出土した（第51図）。頭蓋骨の周辺に遺物の分布は認められず、単独の出土である。下顎骨は遊離して失われた状態であり、頭蓋骨のみが単独で溝中に廃棄されたと推定される。この頭蓋骨は成年男性のもものと推定され、残存部には刀傷などの殺傷痕は認められなかった（第5章第1節参照）。

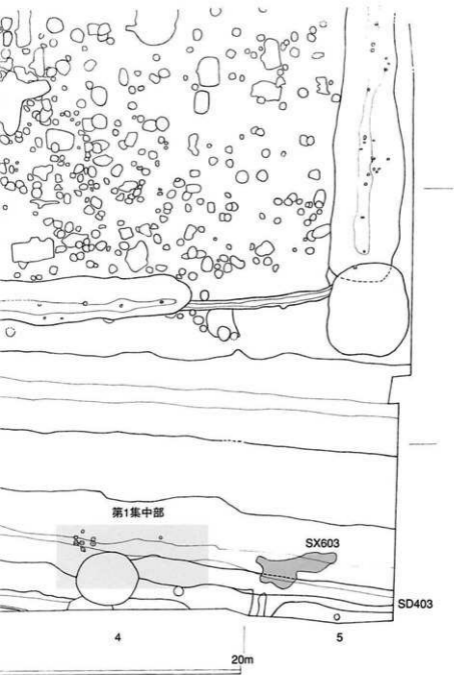
SD153の構築時期の主体は、出土遺物の大半が内外面にロクロ目を有する在地系土師器皿であることから、15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。ただし、後に詳述するように、さらに先行する時期に構築された溝SD411～413がSD153に接続することから、SD153の構築時期が15世紀後葉以前に遡る可能性も考えている。

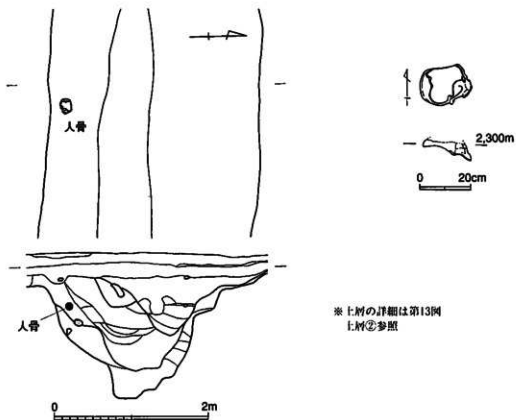
極めて薄い器
壁をもつ京都
系土師器皿

SD153出土遺物（第53～57図） 第53図1～18・第54図19～22は、第1遺物集中部に属する遺物である。1～3は第1遺物集中部東側で検出されたもので、1・2は土師質土器皿、3は備前系陶器指鉢である。4～8は第1遺物集中部上層から出土したもので、いずれも土師質土器皿である。9～18は第1遺物集中部下層からの出土で、9～17は内面あるいは内外面にロクロ目を有する在地産の土師質土器皿である。18は極めて薄い器壁をもつ京都系土師器皿で、1期に属する製品より、さらに古相の特徴を有するものである。口径は15.4cmを測り、京都系土師器皿としては大型の部類に属する。1～18は同時期か極めて近い時期に廃棄された資料群で、この中でも特に下層遺物群（9～18）とした在地産土師質土器皿9点と京都系土師器皿1点は、ほぼ同時に廃棄された良好な一括資料と評価される。19～22は第1遺物集中部最下層に属する遺物である。19は漆器碗で、外面には黒漆を施し、赤漆で松樹文・松葉文を描く。内面には赤漆を施している。外底部には刃物を使用した記号が認められる。20は下駄で、下端部を欠損する。21は加工木材で、先端部のみを尖頭状に加工している。22・23は第2遺物集中部に属する遺物である。22は在地産の土師質土器皿で、内面にロクロ目を顕著に残す。底部には糸切り痕とともに圧痕が認められる。23は土師質土器の羽釜である。24～第57図63は、第1・第2遺物集中部以外の地点から出土した遺物を図示している。24は土師質土器の小皿、25～第55図40は土師質土器皿である。このうち、25・26は内外面にロクロ目を残さないもの、27～39は内面あるいは内外面にロクロ目を有する在地産の土師質土器皿である。40は白色系の胎土を有する薄手の土師質土器皿の底部で、底部のみを円形に残し、胴部以上を意図的に除去した土器片加工品である可能性がある。用途は不明である。41は燗台で、底部に糸切り痕を有する。上端部を欠損しているが、心棒を固定するための孔の痕跡がわずかに認められる。42は土師質土器鍋の口縁部で、口縁内外面と胴部内面にナデ、胴部外面には削りを施す。43～46は土鉢である。47は瓦質土器火鉢の口縁部で、外面の突帯間に刻印による七宝文をスタンプする。48は瓦質土器火鉢の脚部である。49は瓦質土器壺あるいは壺の口縁部から胴部上半にかけての破片で、内面にはハケメ状の工具で調整が行われている。50は瓦質土器埴の底部である。高台断面が方形となる古相のものではあるが、伴件遺物との時間的な整合性がなく、上位の溝SD101からの混入品である可能性が高い。51は瓦質土器の円盤状の製品で、器形・用途ともに不明である。第56図52～54



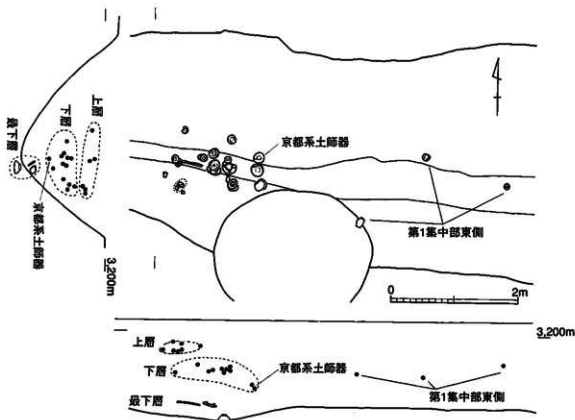
第50圖 SD151・SD153遺構配置圖 (1/150)



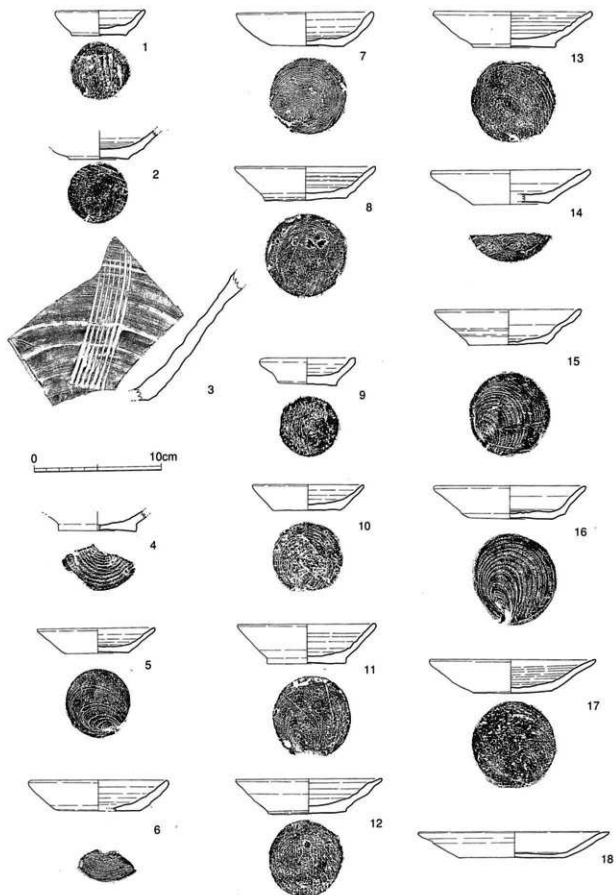


※上層の詳細は第13図
上層②参照

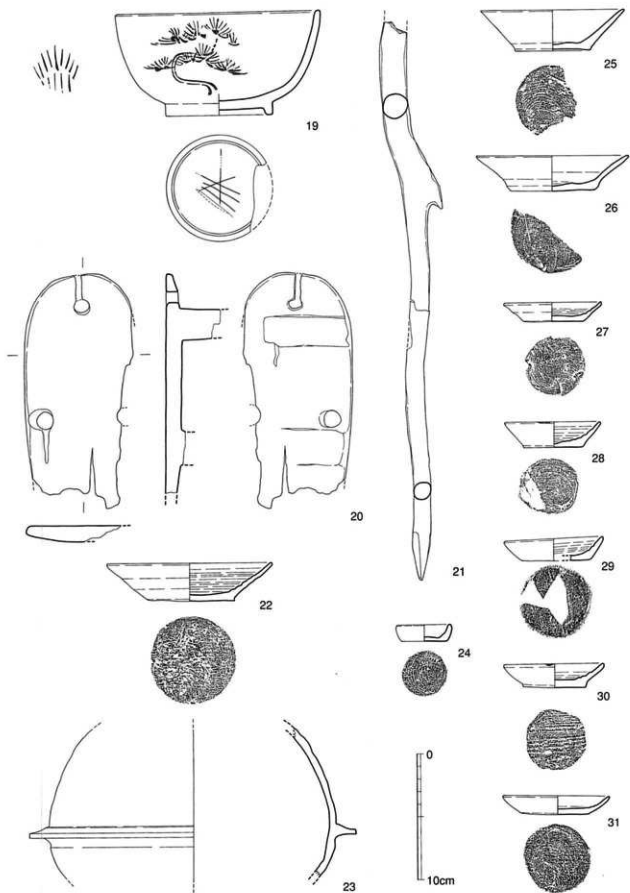
第51図 SD153人骨出土状況 (道横断1/50、人骨1/15)



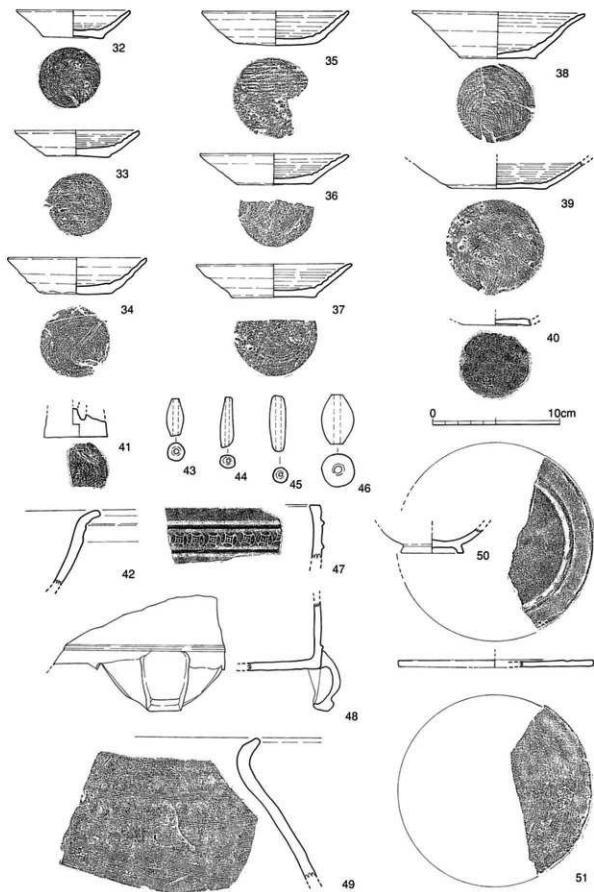
第52図 SD153第1集中部遺物出土状況 (1/60)



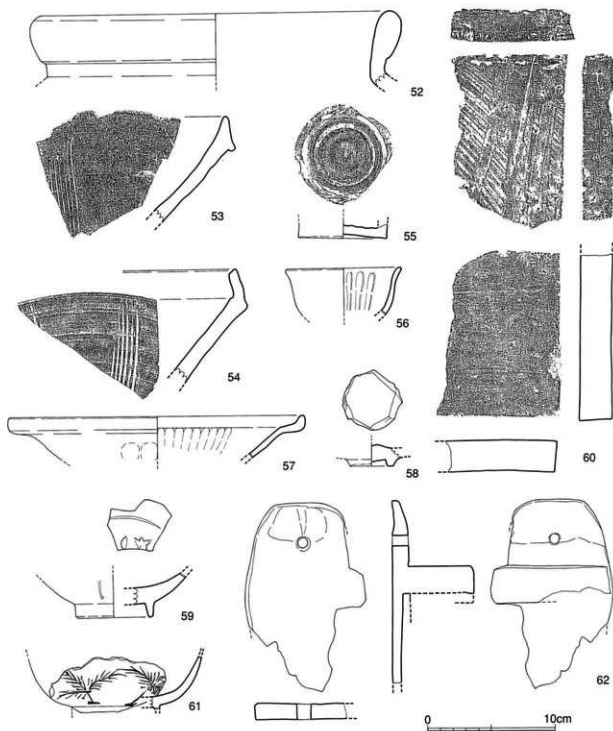
第53図 SD153出土遺物実測図① (第1集中部出土遺物 1/3)
 (1~3 第1集中部東側、4~8 同上層、9~18 同下層)



第54図 SD153出土遺物実測図② (1/3)
 (19~21 第1集中部最下層、22・23 第2集中部)



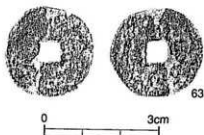
第55図 SD153出土遺物実測図③ (1/3)



第56図 SD153出土物実測図④ (1/3)

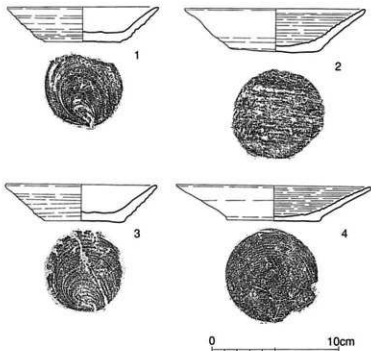
は備前系陶器で、52は大甕の口縁部、53・54は播鉢である。このうち、播鉢については53が中世5期a、54が中世5期bに属し、いずれも15世紀後葉の所産となる。55も備前系陶器の製品と考えるが、胎土が織状を呈する部位なども認められ、必ずしも産地が特定できない特徴をもつ製品である。中国南部から東南アジア方面の製品である可能性も考慮する必要があるかも知れない。当該製品が備前系陶器とすれば、花入などの筒状の器形となる可能性が高い。56は中国龍泉窯系青磁の小型碗あるいは小杯である。内面に壁打ちによる蓮弁文が認められる。57は中国龍泉窯系青磁の盤である。58も中国龍泉窯系青磁の小型碗あるいは小杯で、高台部を残して、他の部位を意図的に除去し

た再加工品である。用途は不明である。59は中国龍泉窯系青磁碗で、外面に蓮弁文、見込みに印花による花文を有する。14～15世紀代の製品であろうか。61・62は最下層から出土した資料で、61は漆器碗、62は下駄である。前者の外面には黒漆を施し、赤漆による文様を描く。内面には赤漆が施されている。後者は下端部を欠損し、先端部には足の指が当たった部位に、使用によるわずかな窪みが認められる。第57図63は銅銭である。中国銭と推定されるが、銭文は判読不明である。



第57図 SD153出土遺物実測図⑤ (1/1)

SX603 (第50図) SD107埋土上部で確認された整地層で、5A区で検出された。5～10cm程度の黄褐色粘質土と砂質土を交互に、帯状に積み重ねる版築状の整地を行っている。SD107上の埋設土付近の地盤沈下を防ぐ目的で行われた整地と推定される。土層図については、第13図土層④を参照されたい。この整地層SX603を切って溝SD103が構築されており、これらの遺構の構築順序は



第58図 SX603出土遺物実測図 (1/3)

SD153→SX603→SD103となる。整地土中から、完形に復元される土師質土器皿4個体が出土した。土師質土器皿は器高が低く、口縁部が外反するなど、SD153出土資料より型式学的には明らかに新しい様相を呈している。当該資料の編年的な位置が確実でないため、整地層の詳細な実年代を確定できない現状であるが、15世紀末葉から16世紀初頭の年代幅を想定しておきたい。

SX603出土遺物 (第58図) 1～4は赤褐色系の胎土をもつ土師質土器皿である。いずれも内面あるいは外面にロクロ目が認められ、底部には糸切り痕あるいは糸切り痕とともに圧痕が認められる。良好な一括資料と評価してよい土器群である。器高が低く、口縁部が大きく外反する等の特徴をもつ資料が認められ、当該製品の中では型式学的に新しい様相を示す資料として注目される。

SD403 (第50図) 4A～5A区で検出された溝で、長さ10m、幅1.5～2.0m、深さ約70cmを測る。前項で触れた整地層SX603を切って構築されている。また、西端部は井戸SE501によって切られており、これ以上西側に延長部が認められないことを確認している。東側は調査区外に伸びている。平成11年(1999年)度調査区西壁面付近の埋土下位より、在地産の土師質土器皿が2枚重なった状態で出土した(第13図土層④)。埋土には流水の痕跡が認められず、区画溝としての性格を有する遺構と推定されるが、調査区の制限から、それを断定するには至っていない。

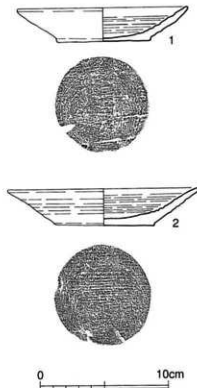
SD403出土遺物 (第59図) 1・2は赤褐色系の胎土をもつ土師質土器皿である。いずれも内面

在地産の土師質土器皿が2枚重ねて出土



SD403遺物出土状況

あるいは外面にロクロ目が認められ、底部には糸切り痕とともに圧痕が認められる。二枚重ねで出土しており、両者が口径差を有するものであることから、口径分化が一定程度進んだ段階の資料であることが想定される。また、器高が低く、口縁部が外反する傾向が認められる等、この種の土師質土器皿の中では、型式学的に新しい様相をもつ資料である。15世紀末葉から16世紀初頭の年代幅の中に位置づけられる資料である。

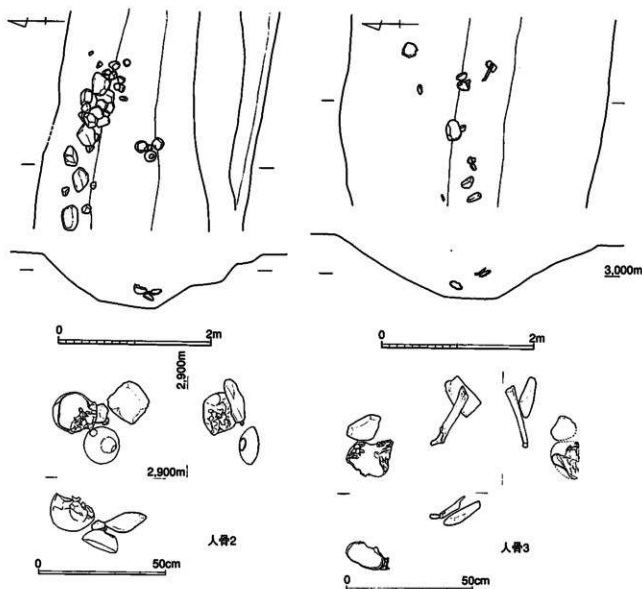


第59図 SD403出土遺物実測図 (1/3)

SD151 (第50図) 99B～5B区で検出した大型の溝である。その規模は長さ62.7m、幅1.2～3.3m、深さ0.3～約1.0mを測る。西側では削平を受けており、遺構の残存度がやや不良となる。99B区で遺構西端部を検出しており、溝SD416・418・419等と交差している。また、遺構東側については、さらに調査区外に伸びる状況を呈している。0B区と2B区の埋土中位からは人骨2体(人骨2・人骨3)が出土した(第60図)。人骨2は成人男性と推定される頭蓋骨のみが出土したもので、下顎骨がすでに失われている状況から、頭蓋骨のみの状態で埋土中に廃棄された資料と推定される。人骨付近からは頭大の礫と被膜のみが残存する漆器椀(取り上げ不能)が分布しており、さらにその周辺には、溝の埋土中に投棄された礫や土器片などの遺物が散布していた。従って、これらの漆器椀や頭大の礫も人骨とともに埋葬されたものではなく、溝中に廃棄されたものと判断した。人骨3は性別不明の頭蓋骨と四肢骨であり、いずれも残存状況がやや不良であった。特に四肢骨については風化が著しく、取り上げが不能であった。頭蓋骨については、他の個体と同様、下顎骨が遊離し、すでに失われている状況であった。人骨3についても埋葬行為の痕跡を認めることができず、SD106埋土中に廃棄された資料と推定される。出土遺物の中に、ロクロ目を残す在地産の土師質土器皿が多量に認められることから、遺構の構築年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。ただし、3B区から5B区では1～3期に比定される京都系土師器が一定量混在して出土した。これらについては、当該地区が平成11年(1999年)度調査区と平成12年(2000年)度調査区との境界部に相当しており、遺構の弁別が正確に行われていなかった可能性が高い。すなわち、京都系土師器を主体とする16世紀前葉以降の遺物群は、SD151の上位に構築された遺構の帰属遺物であるか、見落としてしまった溝あるいは土坑の包含遺物であった可能性が考えられる。この点については率直に発掘現場での作業ミスを認めざるを得ず、遺憾である。

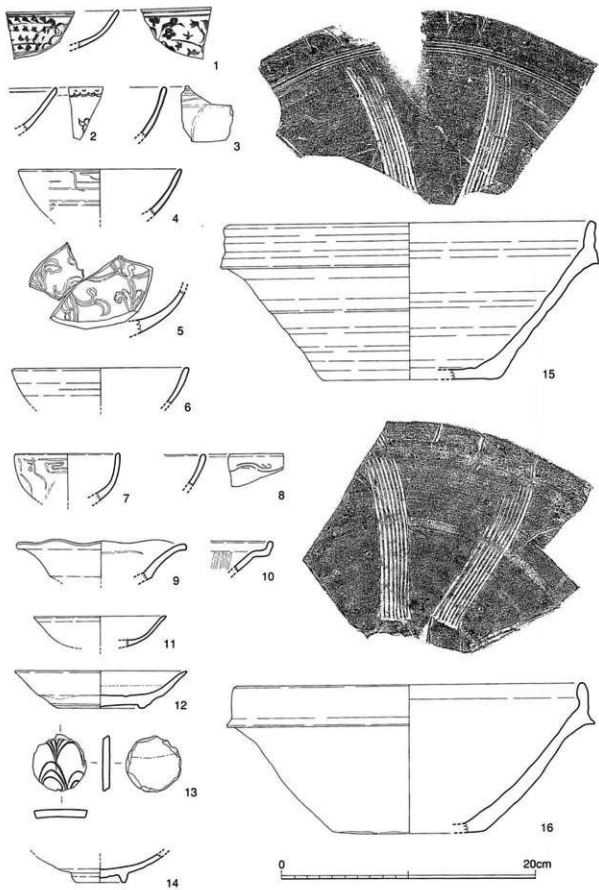
人骨2体の
出土

発掘調査の作
業ミスによる
遺物の混在

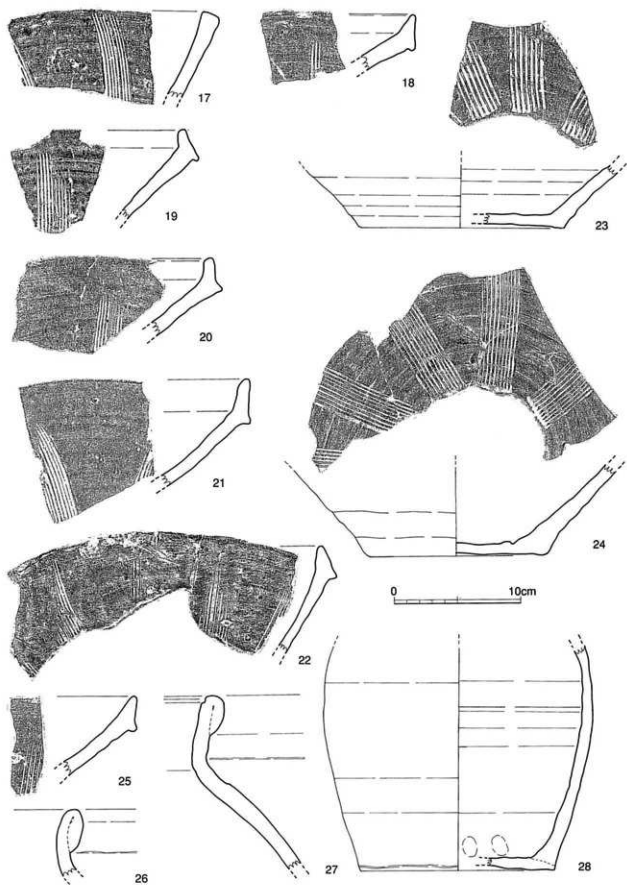


第60図 SD151人骨出土状況（遺構1/50、人骨1/15）

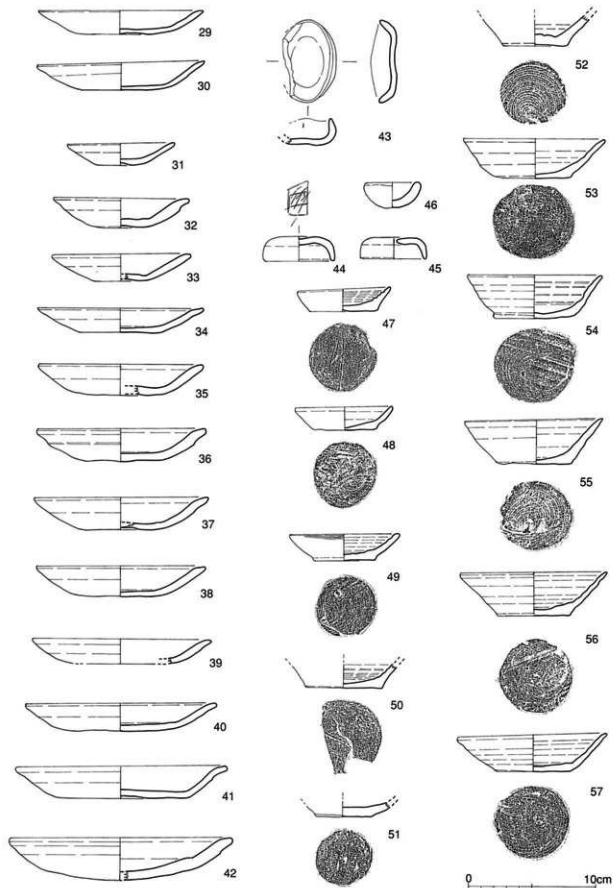
SD151出土遺物（第61～67図） 第61図1・2は中国景德鎮窯系の青花碗で、小野分類C群に属する製品である。16世紀代以降の年代に比定される。3～10は中国龍泉窯系青磁である。3～5は雷文帯青磁碗で、15世紀代の所産である。5は破片資料であるが、内面に刻花で草花文を描く。6は口縁外面の雷文帯が消失している資料である。7は小型の雷文帯青磁碗である。8は口縁部に雷文帯から脱化した波状文を有する青磁碗の口縁部である。9は桜花風、10は青磁盤の口縁部である。11・12は中国産の白磁皿で、12は見込みと高台周辺が露胎となるタイプのものである。13は中国産褐軸陶器片を円盤状に再加工した製品である。外面には褐軸を施し、刻花による波状文を描く。内面は褐軸が施される部位と露胎となる部位が認められる。14は朝鮮王朝産灰青軸陶器碗の底部破片である。SD428出土の破片資料と接合している。15～第62図25は備前系陶器権鉢である。このうち、15・16・21は中世6期（16世紀前葉）、17は中世3期（14世紀後葉～末）、18～20・22・25は中世4期b（15世紀前葉）に比定される。26・27は備前系陶器大甕の口縁部、28は備前系陶器甕の底部から胴部下半部の破片である。第63図29～42は京都系土師器甕で、このうち29・30は1期、32・36・42は3期、他は2期の特徴を有する資料である。43は土師質土器耳皿で、京都系土師器と共通する胎土・技法によって製作されている。44・45は土師質土器の埴壇蓋あるいは小皿で、44



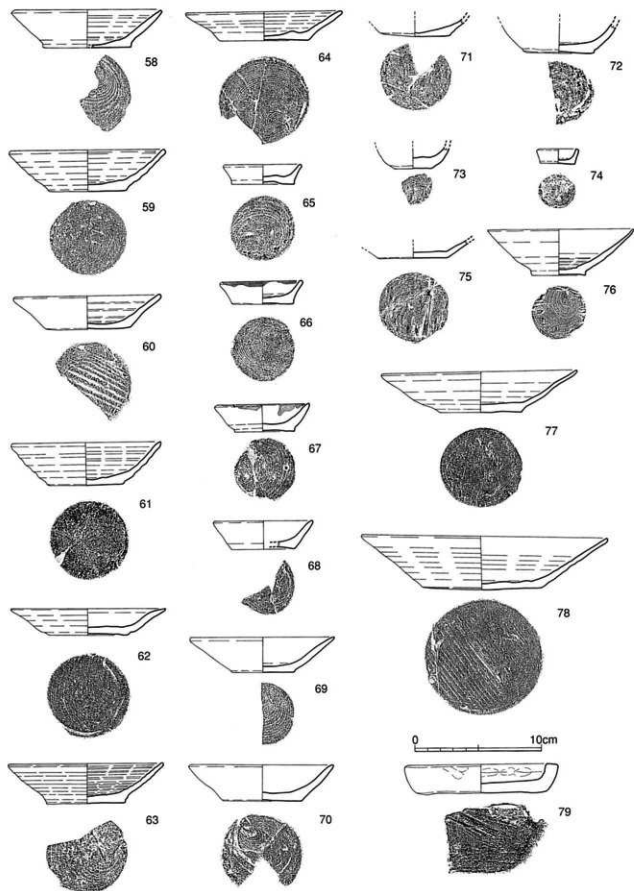
第61图 SD151出土遺物実測図① (1/3)



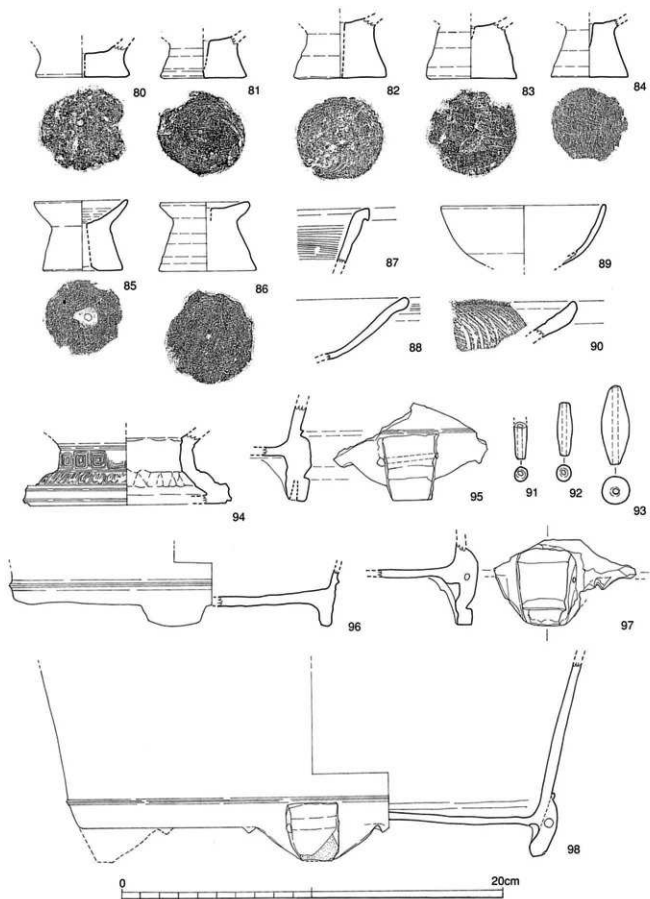
第62図 SD151出土遺物実測図② (1/3)



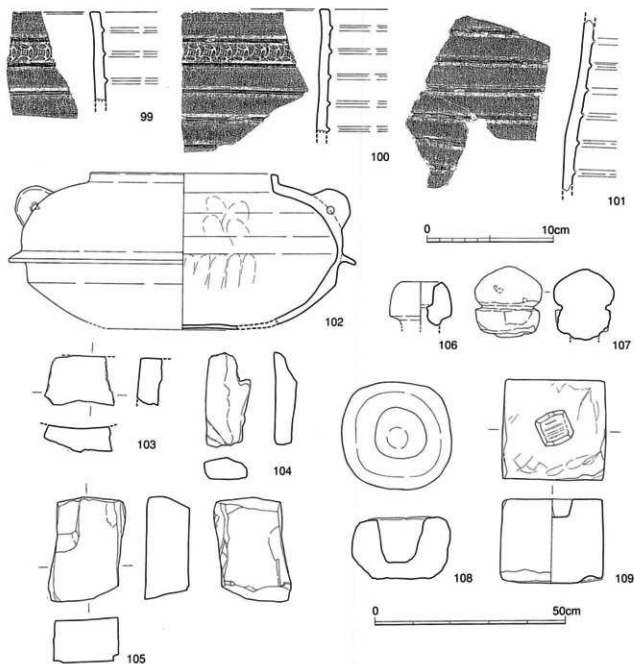
第63図 SD151出土遺物実測図③ (1/3)



第64図 SD151出土遺物実測図④ (1/3)

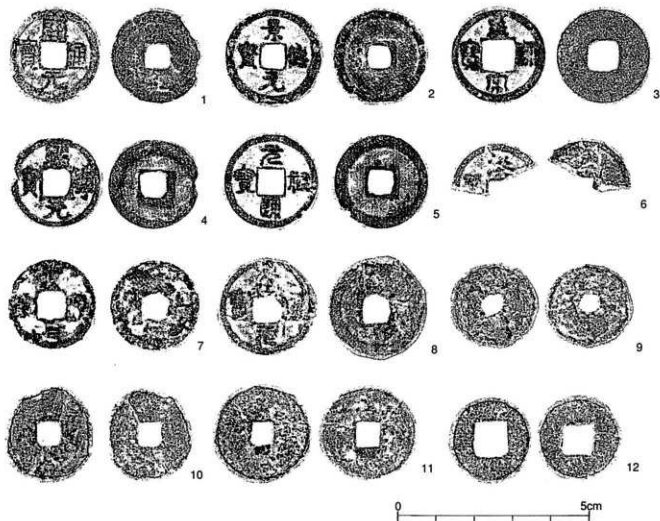


第65图 SD151出土遺物実測図⑤ (1/3)



第66図 SD151出土遺物実測図⑥ (1/3)

の天井部にはヘラ描きによる記号が記されている。46は土師質土器の取皿で、製錬関連の遺物である。47～第64図64は赤褐色系の胎土を使用した在地産の土師質土器皿で、内面あるいは内外面にロクロ目が認められる。65～73も底部に糸切り痕が認められる在地産の土師質土器皿であるが、内面等にロクロ目を残さない資料である。この中には、71～73に見られるような丸味を帯びた胴部をもつ製品も見られる。74～78は白色系の胎土を使用した薄手の土師質土器皿である。74は小皿、77・78は大型の皿で、内外面にはやや不明瞭ではあるが、ロクロ目が認められる。79も土師質土器皿であるが、器壁の厚い手捏ね整形による製品である。内外面には指頭痕が顕著に認められ、底部には糸切り痕がなく、板状圧痕が認められる。第65図80～86は燗台で、いずれも底部に糸切り痕が見られる。脚台部がやや短いものと長く伸びるものがあり、心棒を立てるための孔も貫通するものと貫通しないものの両者がある。87・88は鍋で、前者が土師質、後者が瓦質の製品である。89は瓦質土



第67図 SD151出土遺物実測図⑦ (1/1)

器塚で、内外面にミガキを施す。90は瓦質土器の製品で、内面に描目が認められることから、描鉢の口縁部である可能性が高い。91～93は土錘である。94は瓦質土器の火鉢あるいは風炉で、脚部外面に型打ちによる雷文および蓮弁文が認められる。95～98は瓦質土器火鉢の底部あるいは脚部である。第66図99～101は瓦質土器火鉢で、胴部外面に多条突帯を有し、口縁外面の突帯間に刻印による七宝文をスタンプする。102は瓦質土器の羽釜である。底部外面は未調整で、型作りによって整形された可能性が考えられる。103～105は砥石、106～109は石塔類である。石塔類はすべて凝灰岩を素材として製作されている。このほか、瓦類や埴が一定量出土しているが、図示を行っていない。第67図1～12は銅銭で、1は開元通寶(唐960年・真書体)、2は景德元寶(北宋1004年・真書体)、3は皇宋通寶(北宋1038年・篆書体)、4は熙寧元寶(北宋1068年・真書体)、5は元祐通寶(北宋1086年・篆書体)である。6は「洪」字、7・8は「元寶」のみが判読可能で、9～11は判読不明である。12は銭径に対して、孔が大きなやや特異な形態を呈する銭貨である。銭文も認められず、日本列島内で生産された無文銭と考えられる。

無文銭

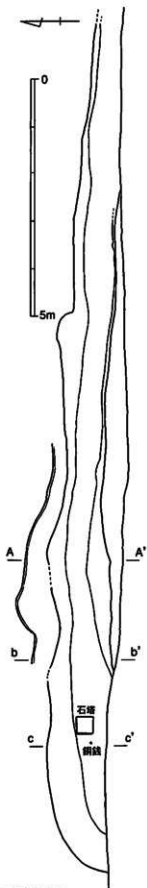
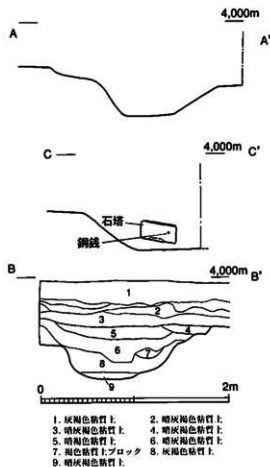
以上、SD151からは赤褐色系の胎土を使用した在地産の土師質土器を主体とする時期の遺物群と京都系土師器を主体とする時期の遺物群が混在している。SD151の構築時期を示す遺物は赤褐色系の胎土を使用した在地産の土師質土器の一群で、15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。京都系土師器をはじめとする16世紀前葉以降の製品は、取り上げミスによる遺物群と解釈している。

SD404 (第68図) 2A~4A区で検出された溝で、長さ17.6m、幅0.8~1.4m、深さ40~50cmを測る。2A区で南側に屈曲する可能性があるが、調査区の制約によって明らかにできていない。また、4A区では土坑SK002・SK003に切られている。埋土の状況からは流水の痕跡は認められず、遺構の上面は京都系土師器(第228図10・11)や朝鮮王朝産灰青釉皿(第225図93)などを包含する16世紀代の整地層で完全に被覆されていた。埋土中からは土師質土器小皿の他、銅銭、石塔地輪等の遺物が出土している。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。

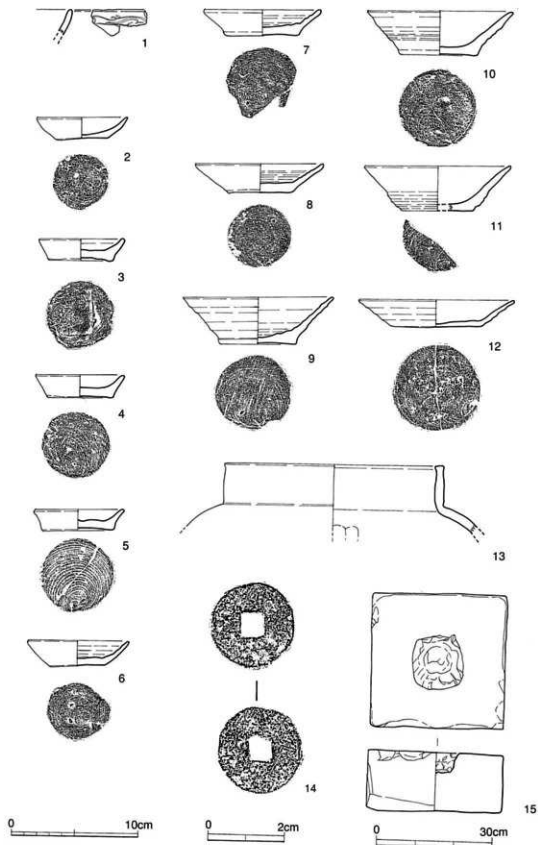
SD404出土遺物(第69図) 1は中国産青磁碗の口縁部破片で、口縁外面に雷文帯から変化した唐草状の文様を施すものである。15世紀後葉

から16世紀前葉に比定される製品である。2~12は赤褐色系の胎土を使用する在地系の土師質土器で、2~6は小皿、7~12は坏である。小皿の中には内面にナデのみを施すもの(2~5)とロクロ目が認められるもの(6)がある。また、5の底部の回転糸切り痕は左回転である。以上の在地系土師質土器は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。13は瓦質土器羽釜で、口縁部から肩部にかけての破片である。14は銅銭で、錆出が著しく、判読不明ある。15は石塔類の地輪で、凝灰岩を素材とする資料である。

左回転の糸切り痕



第68図 SD404発掘面(遺構平面図は1/150、土層図は1/40)



第69図 SD404出土遺物実測図 (1~13は1/3、14は1/1、15は1/10)

流木の取跡

SD411～413 (第70図) O A区で検出された切り合い関係を有する4条の溝である。いずれの溝も東方向に大きく蛇行し、SD153(63頁参照)の西端部に接続する。調査区南壁土層の検討から、遺構の切り合いはSD411→SD412→SD413a→SD413bとなることが確認され、細長い溝が西から東へ順次構築されていったことが明らかになった。以上の遺構はSD153の西端部と接続することから、当該遺構と一連の構築物として機能していた溝と想定される。また、SD411やSD413aに顕著にみられるように、いずれの溝にも埋土の一部に砂質土の堆積が認められることから、溝の機能時に流水があったことが観察できる。これらの溝は埋没した後、その上面を16世紀代の整地層 SX602 (136頁参照)や集石遺構 SX648 (172頁参照)によって完全に被覆されている。さらに、南東側ではSD413が16世紀後葉の土坑 SK006によって、北西側ではSD411・SD412・SD413が16世紀末葉の井戸 SE500 (146頁参照)によって切られている。

SD411は幅0.6m、長さ約8.5m、深さ60cmを測る。埋土上面から土師質土器が良好な状態で出土しており、その中には極めて薄い器壁によって製作された京都系土師器皿(搬入品か?)も存在する。SD412は幅1.1m、長さ約7m、深さ65cmを測る。埋土上位からは拳大から頭大の礫が多く出土しており、礫を投棄することによって、溝が意図的に埋め戻された状況を示唆している。SD413aは幅0.6m、長さ約6m、深さ60cmを測る。遺構上面およびその周辺から出土した土師質土器や瓦質土器は15世紀代の所産であるが、出土地点や位置からは、当該遺構に直接帰属する遺物ではないようである。SD413bは幅0.5m、長さ約6m、深さ45cmを測る。出土遺物の中に良好な資料は認められない。以上の溝は切り合い関係と出土遺物から、SD411・SD412が15世紀後葉、SD413a・SD413bが15世紀末葉から16世紀初頭前後に比定される。また、これらの溝がSD153と一連の構築物として機能していたことが想定されることから、SD153の構築時期も15世紀後葉に遡ることを示唆している。

極めて薄い器壁の京都系土師器皿

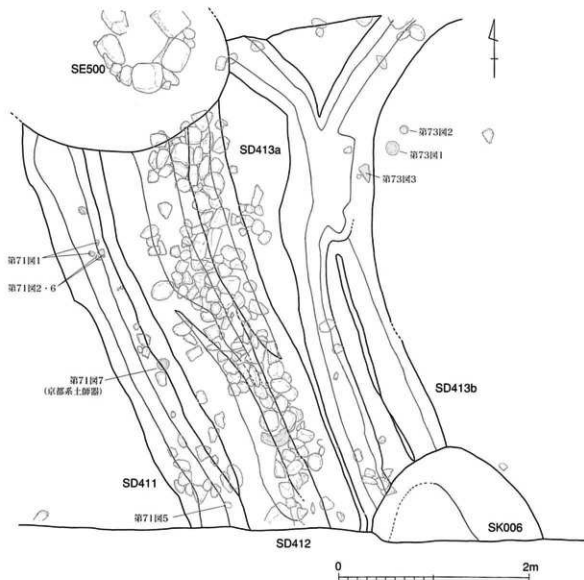
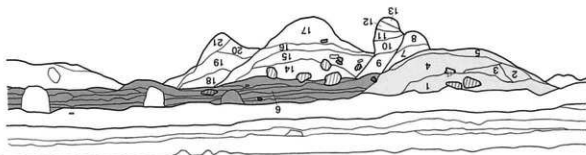
SD411出土遺物(第71図) 1～6は在地系の土師質土器坏で、器高が比較的高く、体部が直線的に立ち上がる器形を呈するものである。胎土の色調は赤味の弱い黄白褐色である。底部外面は右回転糸切りとなる。中世大友城下町跡では大友氏館跡第1次調査 S008⁽⁷⁾で類似資料が認められ、当該遺構では大内2期⁽⁸⁾に比定される白色系の胎土を使用した薄手の土師質土器皿が共存していることから、15世紀後葉に比定されている。7は京都系土師器皿で、底部がやや上底となり、極めて薄い器壁を有するものである。胎土の色調は淡褐色を呈する。京都系土師器1期以前の資料である可能性が高く、他地域からの搬入品である可能性も考えられる。1～7の土師質土器は溝の埋土上面および埋土中より出土したものであるが、出土地点やレベルに一定のまとまりが認められ、良好な一括遺物として評価している。8は平瓦で、凹面に布目痕が残存することから、古代瓦である可能性が高い資料である。当該資料は混入品である。9も平瓦の破片であるが、凹凸面にナゲ仕上げを行っており、中世段階の所産であろう。

SD412出土遺物(第72図) 1は在地系の土師質土器坏で、体部が内湾気味に立ち上がる器形を呈するものである。底部は回転糸切りとなる。15世紀後葉前後の所産である。2は備前系陶器大甕の底部破片である。3は平瓦で、凹凸面にコビキA(糸切り痕)が認められる。4は伏間瓦の破片で、特徴的な断面形態を呈する資料である。5は凝灰岩を素材とした石製品であるが、用途不明のものである。

SD413周辺出土遺物(第73・74図) 第73図1は赤褐色系の胎土を使用した在地系の土師質土器坏で、口縁部がやや外反し、断面形態が箱形を呈するものである。底部には回転糸切り痕と板状圧

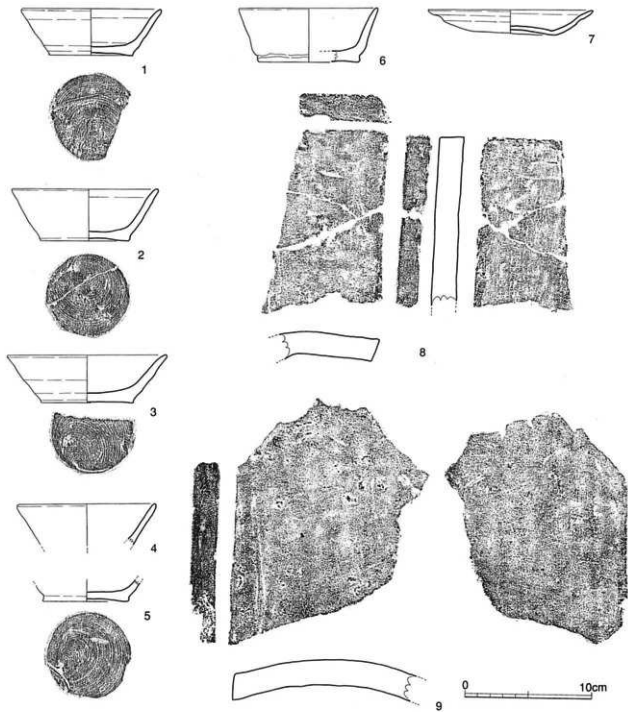
(7) 高島豊「大友氏館跡第1次調査」(『大分市埋蔵文化財年報』vol.10 1998年度 大分市教育委員会 1999年)

(8) 古賀信幸「大内氏遺跡出土土師器の編年」(『大内氏館跡・大内氏関連可並遺跡1』山口県教育委員会 1991年)



- | | | | | |
|--------------------------|-----------|--------------------------------------|-------------|-----------|
| 1. 暗灰褐色粘質土 | } SK006埋土 | 6. 惣地層SK602形成土
(粘質土と砂質土を交互に積み上げる) | 14. 暗灰褐色粘質土 | } SD412埋土 |
| 2. 黒褐色粘質土
(炭・焼土を多く含む) | | 7. 暗灰黄褐色粘質土 | 15. 暗褐色粘質土 | |
| 3. 暗茶褐色粘質土 | | 8. 灰黄褐色粘質土 | 16. 濁黄褐色粘質土 | |
| 4. 灰・焼土層 | | 9. 黄褐色粘質土 | 17. 暗黄褐色粘質土 | |
| 5. 灰黒色粘質土
(炭を多く含む) | | 10. 暗黄褐色粘質土 | 18. 暗黄褐色粘質土 | |
| | } SD413埋土 | 11. 黄褐色粘質土 | 19. 暗褐色粘質土 | } SD411埋土 |
| | | 12. 濁黄褐色粘質土 | 20. 黄褐色粘質土 | |
| | | 13. 暗黄褐色粘質土 | 21. 暗黄褐色粘質土 | |
- ※上層注記のない部分は、第10回上層⑤参照

第70図 SD411・SD412・SD413実測図 (1/40)

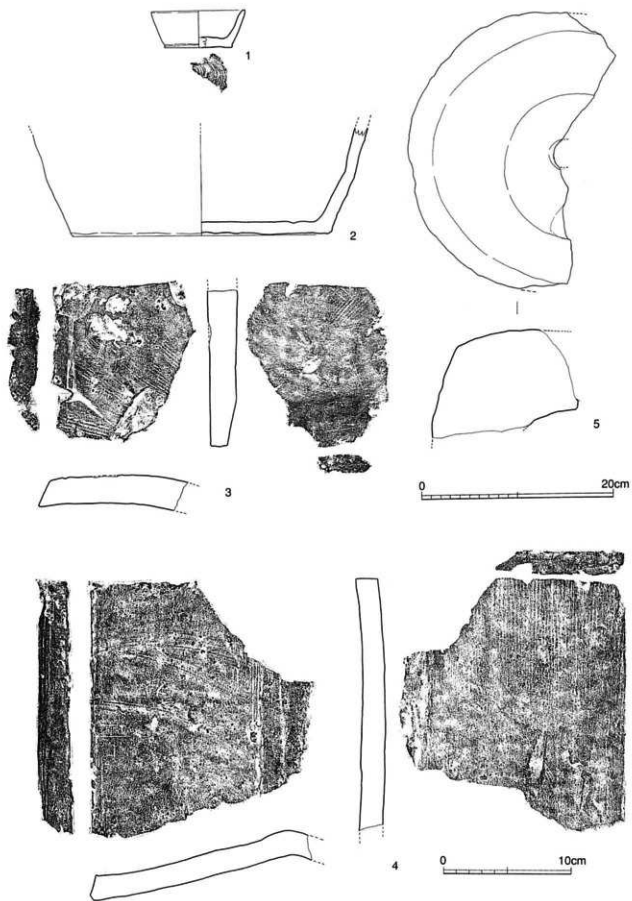


第71図 SD411出土遺物実測図 (1/3)

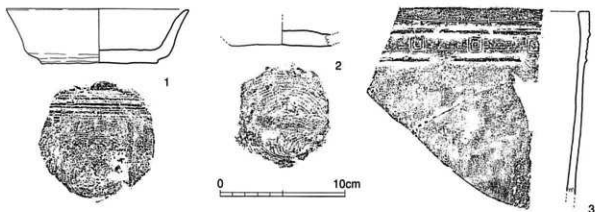
痕が認められる。2も同様な在地系の土師質土器坏で、右回転糸切りの痕跡を有する底部破片である。1・2はいずれも15世紀代の所産と推定される資料である。3は瓦質土器火鉢の口縁部で、口縁外面

土師質土器はSD413の構築時期を示さない

に2条の突帯を有し、突帯間に刻印による雷文を押し捺す。15世紀代の製品である。なお、1～3はいずれも15世紀代の遺物であるが、SD413aの周辺や検出面より上位で出土していることから、遺構の構築年代を示唆するものではないことに注意を促しておきたい。4は銅銭で、残存部に「景」「徳」字が判読できることから、中国北宋代の銅銭「景德元寶」である。初鑄年代は1004年で、書体は真書体である。当該資料はSD413aの埋土中より出土しており、SD413aに直接帰属する遺物



第72図 SD412出土遺物実測図 (1~4は1/3、5は1/4)



第73図 SD413出土遺物実測図① (1/3)

である。

SD416・SD418・SD419 (第50図) 99B～99D区で検出した溝である。複数の溝が切り合った状況で検出されたが、互いの埋土の性状が類似しており、詳細な構築順序を明らかにすることはできなかった。ただし、いずれの溝も15世紀末葉から16世紀初頭に構築された溝SD151によって切られていることは確認が取れている。SD416・SD418・SD419はすべて下層遺構群に属するが、上層遺構群の構築時に上面に削平を受けており、詳細な規模を確定できていない。この中でSD418は総延長17.5m以上を測り、99B区では西側に石塔類の部材を用いて護岸状の施設を構築した痕跡が確認できた。また、99Cでは15世紀末葉から16世紀初頭の集石遺構SX633や15世紀後葉以前の井戸SE511と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE511→SD418→SX633となる。SD416・SD418・SD419については構築時期を示す良好な出土遺物が認められないが、切り合い関係や層位的な所見から、いずれも15世紀後葉の所産と推定している。

SD418出土遺物 (第75図) 図示した遺物は石臼で、凝灰岩を素材とした上臼である。全体の4分の1弱の破片である。



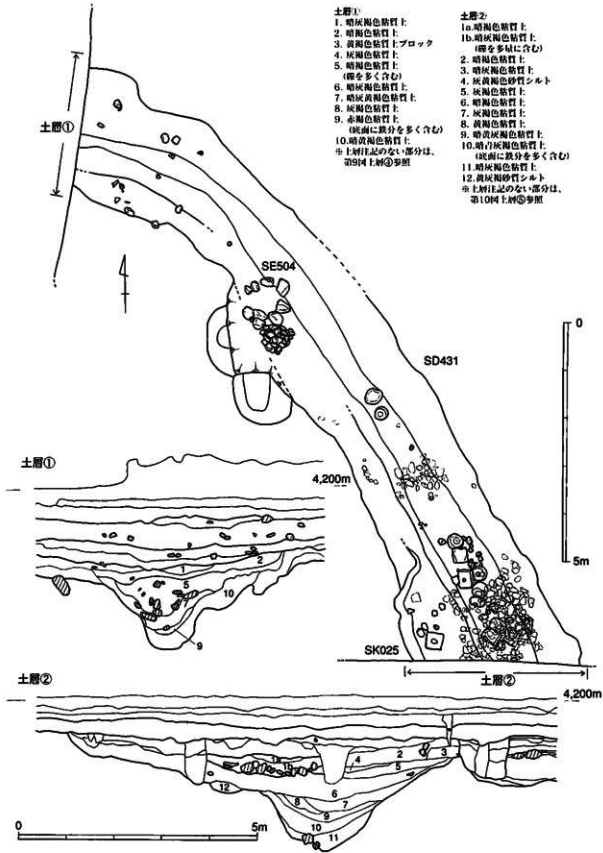
第74図 SD413出土遺物実測図② (1/1)

石塔類による
護岸状の施設

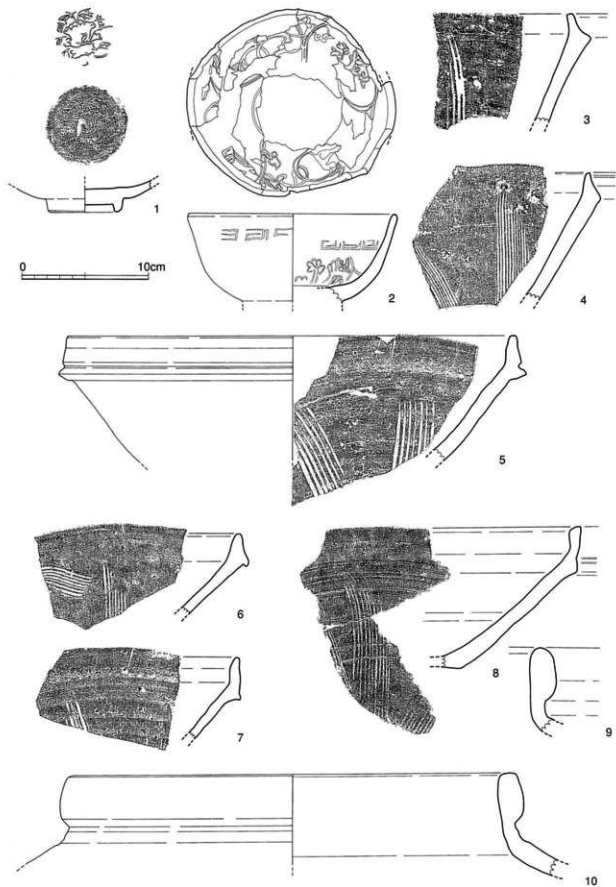
SD431 (第76図) 98B・99A・99B区で検出した遺構で、下層遺構群に属する溝である。西に向かって緩やかに湾曲し、長さ約14m、幅2.5m、深さ1.1mを測る。西側と南側の延長部は、さらに調査区外に伸びている。当該遺構は99A区では土坑SK025に切られており、99B区では底面付近で井戸SE504が検出された。以上の遺構の構築順序は、SE504→SD431→SK025となる。さらに、99B区では上層遺構群に属するSD410によって切られ、整地層SX602・石列SX606・積土遺構SX607・石列SX645などによって、遺構上面を完全にバックされていた。溝の埋土下位には砂質土とともに青灰褐色粘質土の堆積が認められ、遺構の機能時に流水とともに滞水の期間が生じていたことが観察された。また、99A区では溝の底部付近から石



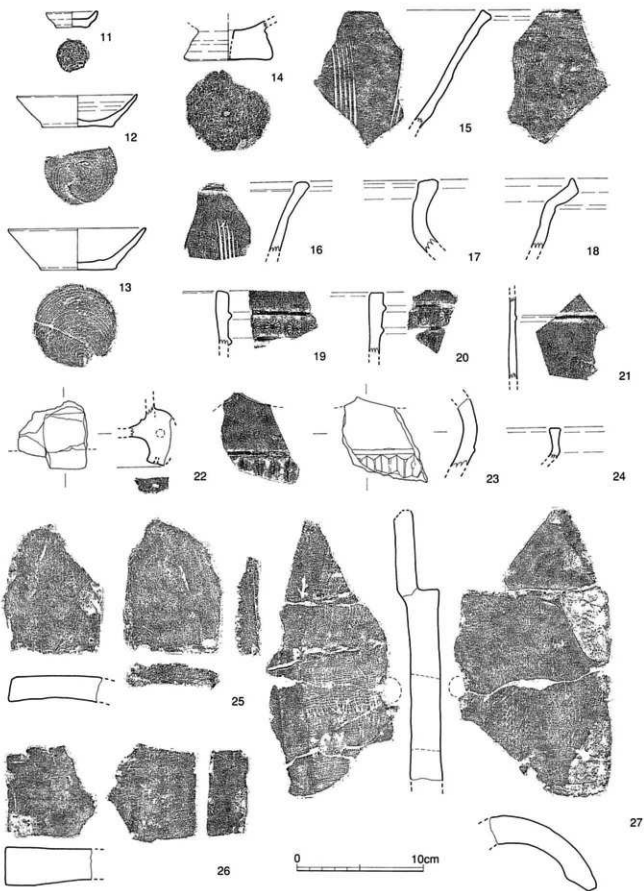
第75図 SD418出土遺物実測図 (1/3)



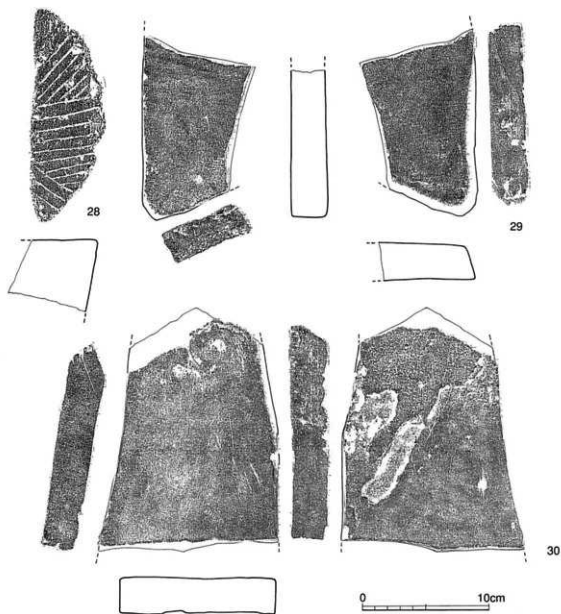
第76図 SD431実測図 (遺構平面図は1/80、土層図は1/50)



第77図 SD431出土遺物実測図① (1/3)



第78図 SD431出土遺物実測図② (1/3)



第79図 SD431出土遺物実測図③ (1/3)

塔類の部材が多数廃棄されている状況が検出された。当該遺構の時期は、出土遺物の年代観から15世紀後葉に比定される。

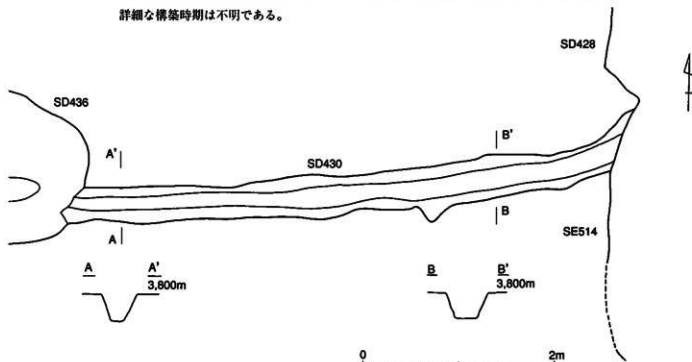
SD431出土遺物 (第77～79図) 第77図1は中国龍泉窯系青磁碗の底部付近の破片である。見込みと内底部は露胎となる。見込みには印花による文様が認められ、現状では文様の詳細をほとんど判別できない状況である。そのため拓影図を作成したところ、当該文様が唵丹文と左字による「富貴」の文字であることが確認できた。14～15世紀代の所産と推定される。2も中国龍泉窯系青磁碗で、胴部上位の内外面に刻印による雷文を押し、内面には花文を施す。15世紀代の製品である。3～8は備前系陶器襖鉢である。このうち、3・4は中世4b期(15世紀前葉)、5・6は中世5期(15世紀後葉～末葉)、7・8は中世5期b～中世6期a(15世紀末葉)に属する製品であろう。9・10は備前系陶器大甕の口縁部で、いずれも中世5期(15世紀後葉～末葉)以前の製品である。第78図11～13は在地系の土師質土器である。11は最も小さな口径を有するもので、底部には糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。12・13は体部が直線的に立ち上がる器形を呈する土師質土器坏

「富貴」の文字

左回転糸切り

である。12の内面にはわずかにロクロ目が残存し、底部は左回転糸切りとなる。14は土師質土器埴台で、脚部はやや短く、内孔は貫通する。底部には回転糸切り痕が認められる。15・16は瓦質土器摺鉢の口縁部である。前者は断面形態が略三角形になり、外面にハケメ状の調整、内面に5条を一単位とする摺目を施している。後者は口縁端部が内側に肥厚し、内外面にナダを施す。内面には5条を一単位とする摺目が認められる。17は瓦質土器あるいは須恵質土器の甕の口縁部破片である。18は瓦質土器鍋で、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方につまみ上げる特徴を有する。その形態から、防長系の瓦質土器鍋である可能性が高い。19～21は瓦質土器火鉢で、19・20は外面の突帯間に刻印による菊花文を押捺する。21は胴部外面下位の突帯の一部が残るが、残存部の突帯間に相当する部位に文様は認められない。22は瓦質土器火鉢の脚部で、脚端部に火鉢を台に固定するための小孔が設けられている。23は瓦質土器の火鉢あるいは風炉の胴部破片で、透かし孔の一部が残存している。24も瓦質土器の口縁部破片であるが、小片で類例が少ないため、器種不明である。25～27は瓦類である。25は平瓦で、凹凸面・側面・端面ともにナダが施されている。26は埴と推定される製品であるが、断面が中央部に近づくほど薄くなる形態を呈する。調整はナダを主体とする。27は玉縁部を有する丸瓦で、凸面に縄目叩きが残存し、凹面には布目痕が残る。粘土帯積み上げ痕がみられることから、古代瓦である可能性も考えられる。混入品であろう。第79図28は石臼の下臼と推定される製品で、断面形態から側面に二次加工が加えられ、再利用された製品である。加工後の用途は明らかでないが、その後さらに意図的に破砕され、廃棄されたものである可能性が高い。29・30は粘板岩製の石板で、表面に擦過痕が認められることから、砥石の可能性が考えられる製品である。

SD430 (第80図) 4B～5B区で検出した遺構で、下層遺構群に属する溝である。その規模は長さ5.5m、幅0.5m、深さ40cmを測る。西側は16世紀前葉の溝SD436、東側は16世紀後葉の井戸状遺構SE514および16世紀前葉の溝SD428によって切られている。出土遺物は小片のみで、図示可能な資料は存在しない。遺構の切り合い関係から、16世紀前葉以前の所産と推定されるが、その詳細な構築時期は不明である。



第80図 SD430実測図 (1/40)

2. 土坑

概要 中世大友府内町第5次調査A区では、29基の土坑を検出している。上層遺構群に属するものが14基、下層遺構群に属するものが15基である。

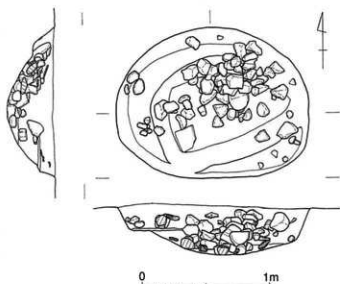
上層遺構群に属するものは、16世紀後葉と16世紀末葉から17世紀初頭以降に比定できるものに大別できる。16世紀後葉から末葉の土坑は当調査区の最盛期に属し、前項で記した積土遺構とそれに付随する溝 SX102・SD101・SD103と同時期に存在した遺構群である。その大半が廃棄土坑（ゴミ棄て穴）と推定されるが、良好な一括資料を出土するものや土坑の詳細な性格が判明するものは少ない。このような中で、金箔貼りの京都系土師器を出土したSK012や比較的良好な一括資料を出土したSK006などが注目される。16世紀末葉から17世紀初頭以降に比定される土坑群は、積土遺



第81図 第5次調査A区の土坑 (1/500)

構 SX102等が廃絶または機能停止した後に構築されたものである。時間的にも、層位的にも唐津系陶器が出現していてもおかしくない時期であるが、出土遺物の中に唐津系陶器は認められなかった。

下層遺構群に属するものは、16世紀前葉、15世紀末葉～16世紀初頭、15世紀後葉、15世紀後葉以前、古代（9世紀）の5時期に細別できる。このうち、SK019は9世紀代に比定されるもので、本調査区で検出された古代の遺構としては、唯一のものである。



第82図 SK001実測図 (1/30)

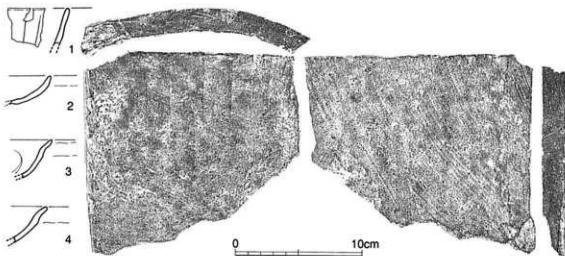
SK001 (第82図) 2B区に位置す

る土坑で、積土遺構 SX102の上面に掘り込まれた遺構である。平面形態は楕円形状を呈し、規模は長径1.5m、短径1.2m、深さ40cmを測る。埋土中からは多量の礫が出土している。層位・切り合い関係とも最も上位に位置する遺構で、SX102とそれに付属する溝 SD101・SD103が廃絶した後に形成された遺構と解釈される。16世紀末から17世紀初頭以降に構築された廃棄土坑であると推定する。

SK001出土遺物 (第83図) 1は中国産の青磁碗で、外面に蓮弁文を施している。15世紀代の

製品である。2～4は京都系土師器で、いずれも2期の特徴を示す。2の内面には鉄滓が付着した痕跡がある。5は平瓦で、凸面には側面と平行の調整痕、凹面にはコピキA（糸切り痕）が認められる。以上の遺物はすべて、周辺遺構からの混入品で、遺構の時期を示すものではない。

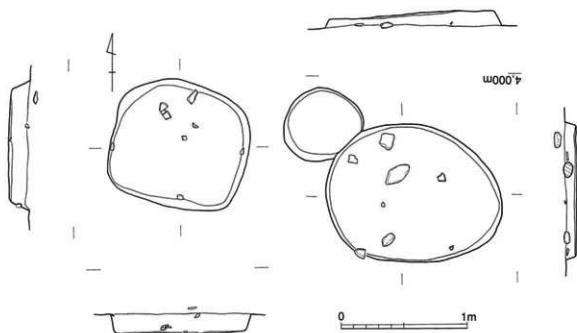
鉄滓が付着した京都系土師器



第83図 SK001出土遺物実測図 (1/3)

SK026・SK027 (第84図) SK026、SK027とも1C区に位置する土坑である。SK026の平面プランは略楕円形を呈し、長径1.35m、短径1.1m、深さ10cmを測る。埋土は焼土粒や炭化物を少量含む暗黄褐色土である。SK027の平面プランは隅丸方形を呈し、長辺1.05m、短辺1m、深さ15cmを測る。埋土の状況はSK026と同様である。埋土上位より、赤間硯をはじめとする遺物が少量出

る。埋土上位より、赤間硯をはじめとする遺物が少量出

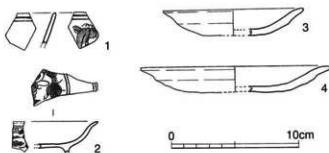


第84図 SK026・SK027実測図 (1/30)

土した。これらの2つの土坑は、いずれも層位・切り合い関係とも最も上位に位置することから、16世紀末17世紀初頭以降に構築された土坑と推定する。両土坑とも、出土遺物中に唐津系陶器は確認できていない。

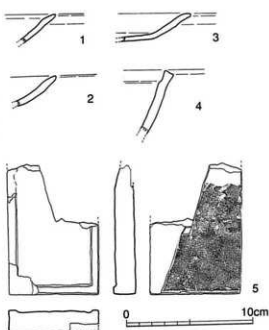
SK026出土遺物 (第85図)

1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類E群に属する。16世紀後半の製品である。2は中国景德鎮窯系青花皿B1群で、16世紀前半に比定される。3・4は京都系土師器皿で、2期ないし3期の特徴を有する資料である。なお、SK026からの出土遺物はすべて16世紀末葉以前の年代観を示すものであるが、層位や切り合い関係から、遺構の年代は16世紀末葉から17世紀初頭以降と推定している。



第85図 SK026出土遺物実測図 (1/3)

SK027出土遺物 (第86図) 1～3京都系土師器皿で、2期の特徴を有する資料である。4は土師質土器土鍋の口縁部と思われる。5は輝緑凝灰岩製の硯で、現在の山口県厚狭郡楠町付近を原産地とする赤間石で製作された赤間硯である。SK027からの出土遺物もすべて16世紀後葉以前の年代観を示すものであるが、これも層位や切り合い関係から、遺構の年代は16世紀末葉から17世紀初頭以降と推定している。

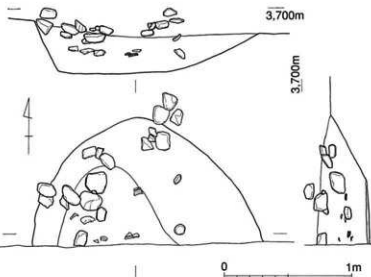


第86図 SK027出土遺物実測図 (1/3)

赤間硯

SK006 (第87図)

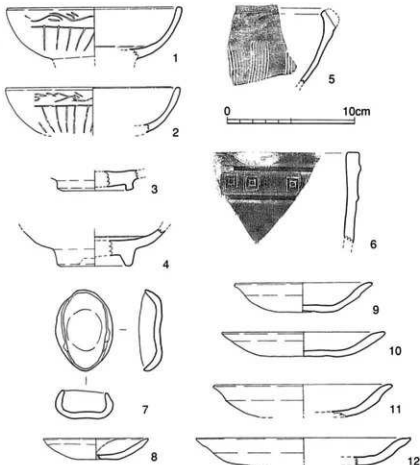
0A区に所在する土坑である。土坑の規模は長辺1.8m、短辺0.95m以上、深さ30cmで、遺構の南側はさらに調査区外に伸びる。下層遺構群のSD113bや周辺の柱穴を切っており、最も新しく構築された遺構であることがわかる(土層図は第70図を参照)。埋土に焼土層を含まないことから、廃棄土坑と思われる。良好な一括出土遺物と判断される遺物群が出土しており、これらの年代観から、遺構の構築年代は16世紀後半に比定される。



第87図 SK006実測図 (1/30)

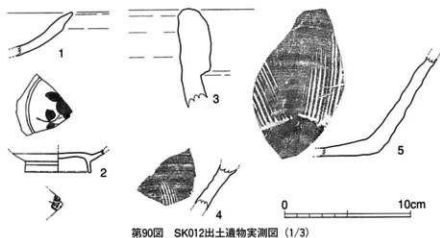
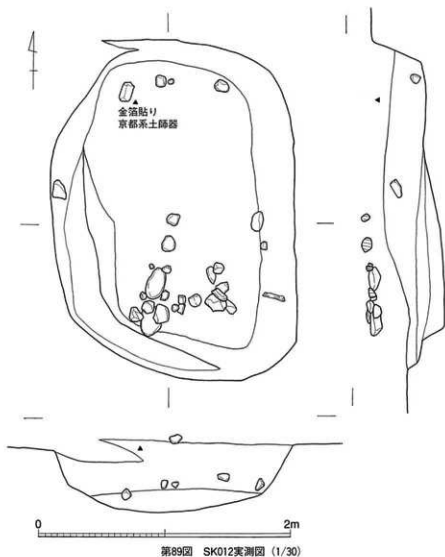
SK006出土遺物 (第88図)

1・2は中国産の青磁碗で、口縁外面に雷文帯から変化した文様、胴部外面に蓮弁文を施す。3・4は中国龍泉窯系青磁碗で、内底部が露胎となる。5は中国南部産と推定される焼締陶器描鉢で、同一個体と判断される破片が集石遺構SK635でも出土している(第151図参照)。6は瓦質土器火鉢の口縁で、外面の突帯間には二重方形文が刻印されている。7は手捏ね成形によって製作された土師質土器耳皿である。8~12は京都系土師器皿で、いずれも2期の特徴を示す。図示した資料の多くに煤の付着が認められ、灯明皿として使用されている。以上の遺物群は、16世紀後半の良好な一括資料と判断される。



第88図 SK006出土遺物実測図 (1/3)

中国南部産
焼締陶器描鉢
(同一個体が
SK635で出土)



SK012 (第89図) 99B区に位置する土坑である。規模は長辺2.7m、短辺2.0m、深さ50cmを測る。埋土上位から、金箔貼りの京都系土師器皿が出土した。当該遺物が2～3期の特徴を示すことから、16世紀後葉から末葉の遺構である。なお、この土坑の周辺には道路状遺構 SF650 (167頁参照) が存在しており、本来SK012とSF650は切り合い関係を有するはずであるが、調査当初に

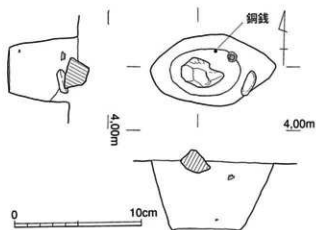
道路状遺構の存在を認識できず、周辺を均一に掘り下げてしまうミスを犯している。そのため、両者の切り合い関係については確認が取れていない。

金箔貼りの
京都系土師器

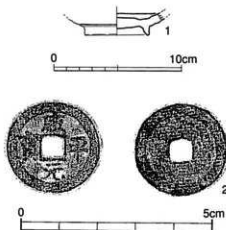
SK012出土遺物 (第90図) 1は金箔貼りの京都系土師器皿である。内外面に黒漆を施し、その上に金箔を貼っている。内外面の金箔は剥落する部分も多くあるが、鮮やかな輝きを有する部位も認められる。器壁が厚いことから、京都系土師器2期から3期の特徴を示す資料と判断され、16世紀後葉から末葉に比定される。2は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類のE群に属する。内底部には異体字の銘款を有する。3は備前系陶器甕の口縁部で、中世6期(16世紀前葉)の特徴を示す製品である。4・5は備前系陶器播鉢である。

SK030 (第91図) 0C区に位置する土坑である。土坑のプランは略楕円形で、その規模は長辺0.95m、短辺0.6mを測る。埋土上位から順大ないし拳大の磔2個と漳州窯系青花碗、埋土下位から銅銭が出土した。出土遺物から、遺構の年代は16世紀末葉に比定される。

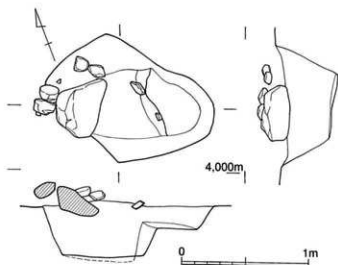
SK030出土遺物 (第92図) 1は中国漳州窯系青花碗の底部である。見込みは蛇ノ目軸刺ぎとなり、内面に1条の圏線が描かれる。2は中国北宋代の銅銭で、「咸平通寶」である。初铸年代は976年である。



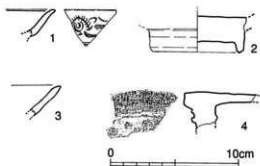
第91図 SK030実測図 (1/30)



第92図 SK030出土遺物実測図 (1は1/3、2は1/1)

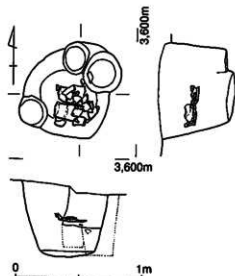


第93図 SK024実測図 (1/30)



第94図 SK024出土遺物実測図 (1/3)

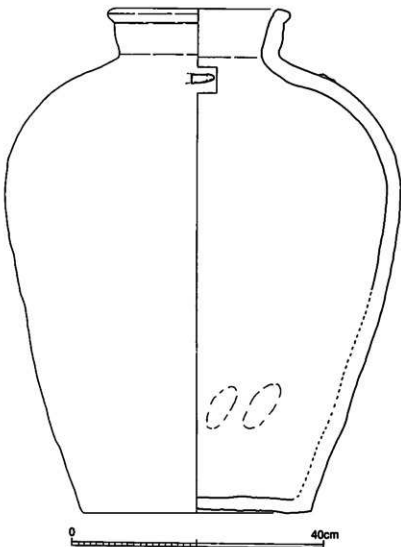
SK024 (第93図) 0C区に位置する遺構である。調査当初、遺構上面に礫数個を検出したため、集石遺構と考えていたが、礫の出土は少量に留まり、礫の下位に土坑が存在することが判明した。土坑の規模は長径1.4m、短径1.0m、深さ48cmを測る。底面は見かけの上で2段掘りとなっており、本来2基の土坑が切り合っていた可能性も考えられる。土坑上位の礫が分布しているレベル付近から遺物が出土しているが、その量は少なく、しかも小破片が多い。土坑の埋土中からは、出土遺物が認められなかった。遺構の年代は16世紀後葉と推定される。



第95図 SK028実測図 (1/30)

SK024出土遺物 (第94図) 1は中国景德鎮窯系青花風で、B1群に分類される製品である。16世紀前葉に比定される。2は中国龍泉窯系青磁碗の高台部分の破片で、外底部は露胎となる。見込みには刻印による花文がスタンプされているが、文様の詳細が読み取れないため、図示していない。14~15世紀の製品である。3は2期に比定される京都系土師器皿の口縁部小片である。4は軒丸瓦で、珠文と圏線の一部が残存する破片である。

SK028 (第95図) 0C区に位置する土坑である。土坑の平面プランは不整形で、その規模は径0.7m、深さ60cmを測る。埋土中位から、備前系陶器の四



第96図 SK028出土遺物実測図 (1/3)

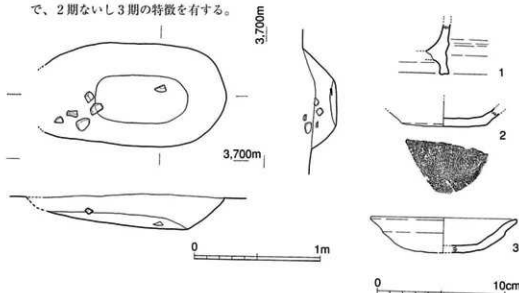
破砕された状態の備前系陶器壺

耳壺が破砕された状態で出土した。四耳壺は完形に復元できず、すべての破片をつなぎ合わせても、2分の1程度の残存率である。SK028は周囲の柱穴群に切られていることや四耳壺の詳細な製作年代が確定できないことから、下層遺構群に属する遺構である可能性も考えられる。

SK028出土遺物 (第96図) 図示した遺物は、備前系陶器の四耳壺である。把手は基部の痕跡を一部残すのみで、すべて剥落している。中世5期ないし6期の製品と思われるが、詳細な時期を確定できない。

SK035 (第97図) 1 C区に位置する土坑である。平面プランは長楕円形で、その規模は長径1.5m、短径0.8m、深さ30cmを測る。埋土上位に礫と遺物が集中する部位があり、この部分から、京都系土師器皿などをはじめとする遺物が出土した。遺構の年代は16世紀後葉から末葉と推定される。

SK035出土遺物 (第98図) 1は瓦質土器火鉢の底部で、脚部が残存する部位に相当する。2は在地系の土師質土器皿の底部で、底部外面には回転車切り痕が認められる。3は京都系土師器皿で、2期ないし3期の特徴を有する。



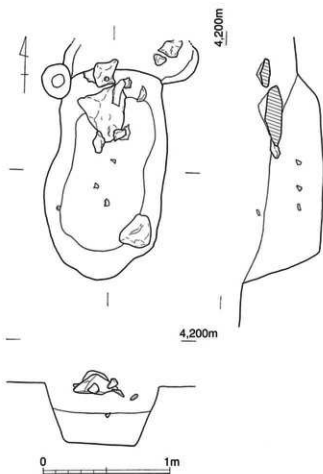
第97図 SK035実測図 (1/30)

第98図 SK035出土遺物実測図 (1/3)

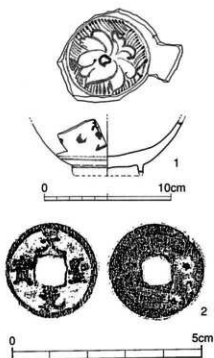
SK051 (第99図) 0 C区に位置する土坑である。規模は長径1.7m、短径0.9m、深さ50cmを測る。埋土中より、中国景徳鎮窯系青花・漳州窯系青花や銅銭などが出土した。出土遺物は銅銭を除き、すべて小破片である。遺構の年代は16世紀後葉と推定される。

SK051出土遺物 (第100図) 1は中国漳州窯系青花碗である。景徳鎮窯系青花C群(通子碗)の模倣品であるが、色調や釉調が灰オリブ褐色を呈しており、漳州窯系青花の特徴を示している。16世紀後半の所産である。2は中国北宋代の銅銭で、「天聖元寶」である。書体は真書体で、初鑄年代は1023年である。その他、中国景徳鎮窯系青花が出土しているが、小片のため、図示していない。

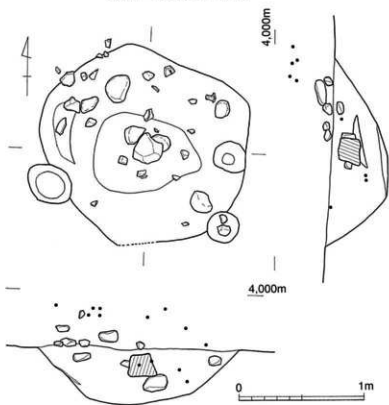
SK048 (第101図) 1 D区に位置する土坑である。規模は長径1.7m、短径0.9m、深さ50cmを測る。埋土中より、小片を主体とした遺物と礫などが出土した。遺物のエヴェレーションを検討すると3.6m付近を境に上下に分布する傾向が認められる。上位の遺物群は土坑の上端のレベルより、かなり上位に位置するものもあり、遺構の年代を示すものではない可能性も考えられる。出土遺物は下位の遺物群、すなわち埋土中に包含される資料より、16世紀後葉に比定される。



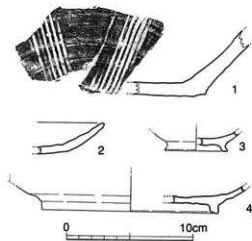
第99図 SK051実測図 (1/30)



第100図 SK051出土遺物実測図
(1は1/3, 2は1/1)



第102図 SK048出土遺物実測図 (1/3)

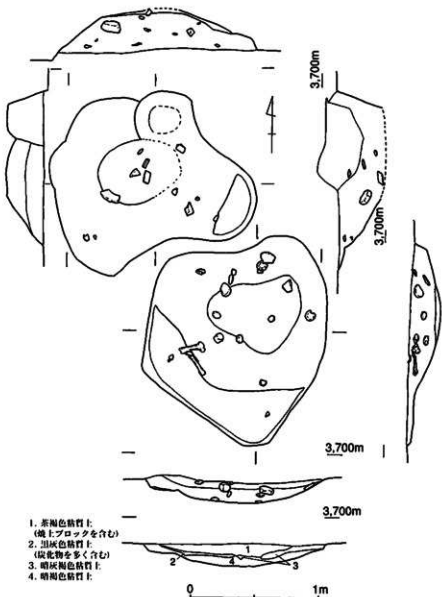


第101図 SK048実測図 (1/30)

SK048出土遺物(第102図) 図示した遺物の中で、1・2は埋土上位から出土した上位遺物群、3・4は埋土中から出土した下位遺物群である。1は備前系陶器播鉢の底部である。周辺の包含層から出土した破片と接合している。2は京都系土師質土器皿の破片で、2期の特徴を示し、16世紀後葉の所産である。3は在地系の瓦質土器境の底部破片で、高台断面は方形を呈する。4は土師質土器台付き鉢の底部で、これも在地産の製品と思われる。以上の遺物のうち、3・4が遺構の年代を示唆する遺物と解釈されるが、いずれも16世紀後葉に比定される製品である。

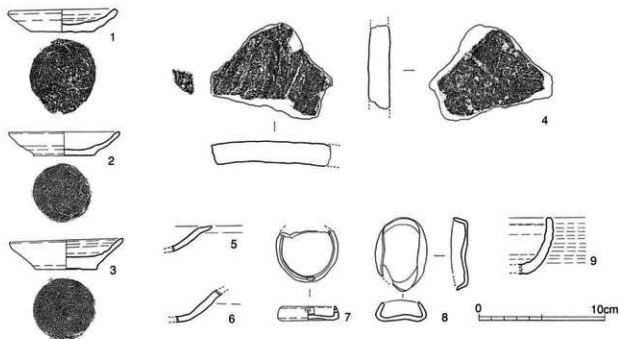
SK031・SK32(第103図) いずれも、1C区に位置する土坑である。SK031は廃棄土坑と思われる、その規模は長辺1.5m、短辺1.4m、深さ18cmを測る。当初は1基の土坑と認識していたが、掘り下げの結果、遺構底面の形状や遺物の分布傾向から、16世紀前葉以前と16世紀末葉に掘り込まれた2つの土坑が重複していることが判明した。16世紀前葉以前の土坑からは、内面にロクロ目を残す在地系の土師質土器、16世紀後葉の土坑からは京都系土師器や耳皿などが出土している。また、16世紀末葉の土坑埋土中からは獣骨が出土したが、遺存状態が悪く、取り上げを行うことができなかった。

SK032も廃棄土坑と推定され、その規模は長辺1.6m、短辺1.2m、深さ30cmを測る。これも当初1基の土坑と認識していたが、掘り下げの結果、柱穴や複数の土坑が重複していることが判明した。従って、出土遺物は良好な一括資料とはいえない。銅銭や漳州窯系青花、京都系土師器皿などの小片が出土しており、遺構の構築年代は16世紀末葉と推定される。



第103図 SK031・SK032実測図(1/30)

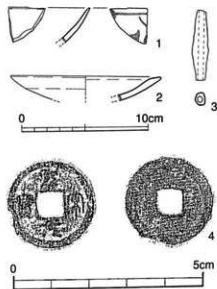
2つの土坑の
重複



第104図 SK031出土遺物実測図 (1/3)

SK031出土遺物 (第104図) 1～3は色調・胎土が赤褐色を呈し、内面あるいは外面にロクロ目を残すタイプの在地系土師器である。15世紀後半から16世紀前半に比定される。4は平瓦の小破片で、側面がわずかに残存する部位が認められる。凸凹面にはナデが施され、布目などの痕跡は残っていない。5・6は京都系土師器皿で、2期の特徴を示すことから、16世紀後葉の所産であろう。7は手捏ね成形による土師質土器の小皿、あるいは焼壺の蓋である。口縁部に1箇所貫通孔を認めるが、その機能は不明である。8は手捏ね成形による土師質土器の耳皿である。9は鉢状の器形を呈する土師質土器の破片である。以上の遺物は、その年代観と出土状態から、16世紀前葉以前に比定される1～4のグループと16世紀後葉に比定される5～8のグループに大別でき、遺構の重複関係と対応するものと考えられる。なお、9については類例が少なく、时期的な判別ができていない。

SK032出土遺物 (第105図) 1は中国漳州窯系青花碗の口縁部で、16世紀末葉の所産である。2は京都系土師器皿で、口縁部の小片を反転復元して図示している。2期の特徴を有し、16世紀後葉の所産である。3は土鍾である。4は中国北宋代の銅銭で、「聖宋通寶」である。書体は篆書体で、初铸年代は1101年である。その他、備前系陶器壺の胴部破片が出土しており、当該資料はSK033出土の破片(第107図5)と接合している。

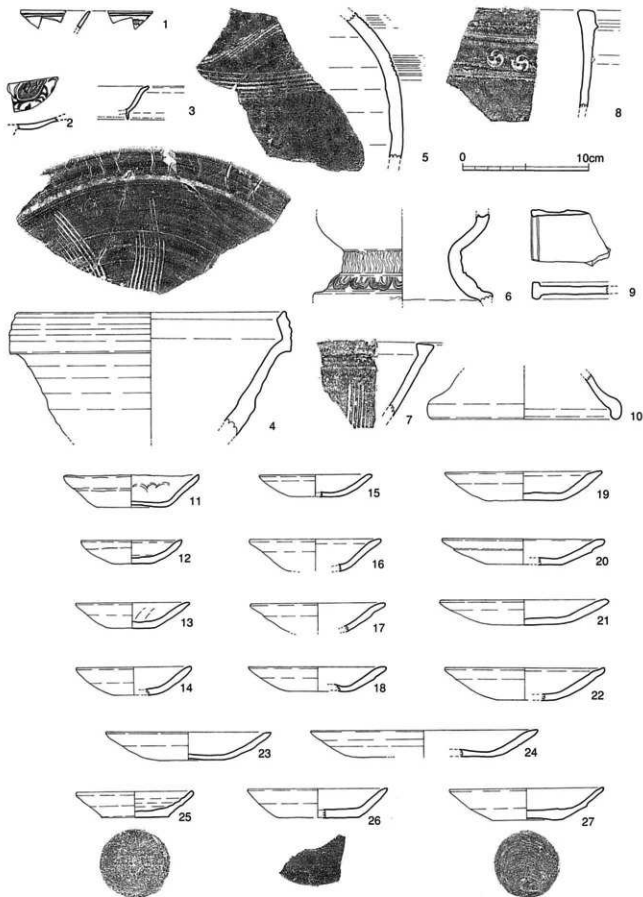
第105図 SK032出土遺物実測図
(1～3は1/3、4は1/1)



第106図 SK033実測図 (1/30)

SK033 (第106図) 1C区に位置する大型の土坑である。当該遺構の上位には土坑SK027や石列SX627が存在しており、これらの遺構をすべて撤去した後にSK033を検出した。土坑は長辺4.5m以上、短辺3m以上、深さ50cmを測るが、周辺の遺構との切り合いにより、詳しい規模は不明である。埋土中からは礫がかなり多量に出土し、特に北東側では頭大の礫が集中する部位も認められた。埋土の状況や遺構の平面プランなどから、本来複数の廃棄土坑が重複していた可能性も考えられる。そのため、出土遺物については良好な一括資料とはいえないものの、時期的なまとまりが認められる遺物群で構成されている。遺構の年代は、16世紀後葉に比定される。

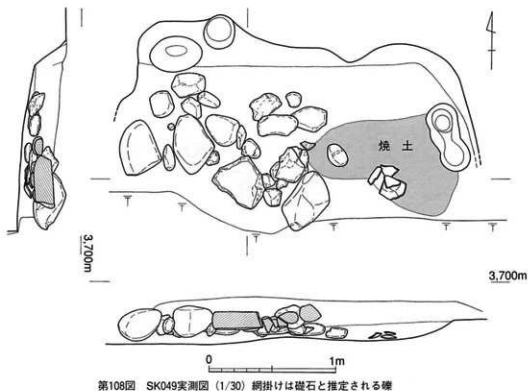
SK033出土遺物 (第107図) 1は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部で、小野分類のE群青花碗である。16世紀後葉の所産である。2は中国景德鎮窯系五彩皿の胴部破片で、内面に赤絵が上絵付されている。この他、図示していないが、赤と緑を上絵付する五彩細片が1点出土している。これら五彩の製作年代は、16世紀代に比定される。3は中国産の白磁皿で、森田勉分類のD群に属する。15世紀後葉から16世紀前葉の所産である。4は備前系陶器播鉢で、中世6期b(16世紀中葉から後葉)に比定される製品である。5は備前系陶器壺の付部で、外面に飾描き波状文が認められる。SK033とSK032出土の破片が接合した。6は瓦質土器火鉢または風炉で、脚部外面には刻印によって蓮弁文が表現されている。色調は内外面とも黒褐色を呈し、外面には丁寒なミガキが施されている。7は瓦質土器播鉢で、口縁端部内面に三角形の突帯を貼り付ける防長系播鉢と呼称されているタイプである。8は瓦質土器火鉢の口縁部で、外面の突帯間に巴文を刻印する。9は土師質土器であるが、器種不明の製品である。内外面にはナデが施されている。10は土師質土器の脚部である。



第107図 SK033出土遺物実測図 (1/3)

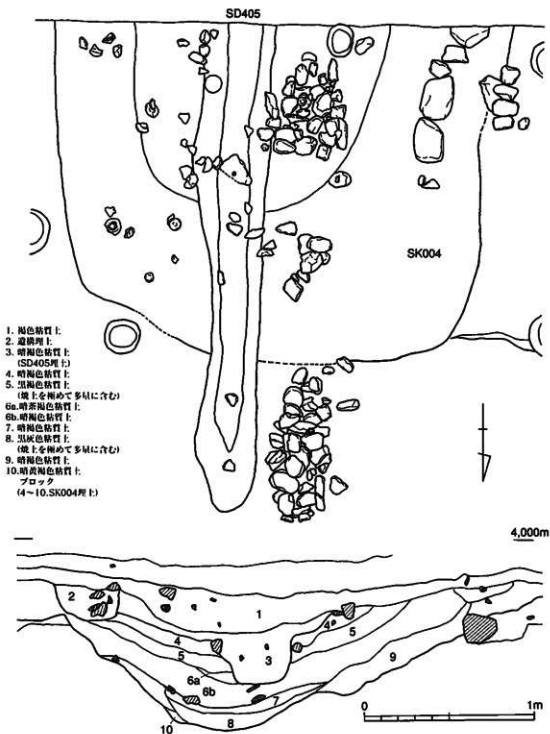
が、これも器種不明である。11～21は京都系土師器皿である。このうち、11は器壁が極めて薄く、内面に指頭痕が顕著に認められるなどの特徴を有する。この資料のみ、1期ないしそれ以前に比定される特徴を有し、混入品である可能性も考えられる。他の12～21は、すべて2期の特徴を有する資料である。これらの京都系土師器皿には内面あるいは内外面に煤が付着するものが多く、その大半が灯明皿として使用されたことを示している。25は内面にロクロ目を有する在地産の土師質土器皿である。26・27は底部に回転系切りの痕跡を残す土師質土器皿である。色調や器形が京都系土師器に類似しており、京都系土師器の模倣品あるいはその影響下に製作された製品である可能性が考えられる。以上の遺物は、遺構の状態から良好な一括遺物とはいえないものの、京都系土師器2期を主体とする時期的にまとまりのある遺物群で構成されている。

SK049 (第108図) 1C～2C区に位置する土坑である。周辺の遺構との切り合いや擾乱により、遺構の平面プランははっきりしないが、その規模は東西2.7m以上、南北1.4m以上、深さ45cmを測る。底面付近から頭大の礫が出土し、そのうち特に大型である4個の礫には表面を平滑にするなどの加工が認められた。これら4個の礫は、その形態や加工の状況などから、本来礎石として使用されていた可能性がある。礎石と推定される礫には二次的な被熱が認められるものもあり、当該遺構は火災などによって使用されなくなった礎石を廃棄した土坑と推定される。土坑の底面からは東西1m、南北0.7mの範囲で焼土が認められた。しかし、焼土の直上より弥生時代末から古墳時代初頭に比定される甕の胴部の大型破片(図化不能)が出土したことから、この焼土が土坑に伴う可能性は少ないと判断した。出土遺物には弥生時代末から古墳時代初頭の甕の他に、備前系陶器の胴部破片が認められるが、詳細な時期を判別できる資料ではない。遺構の年代は不明であるが、加工のある礫が礎石であると推定したことが妥当であるとすれば⁽⁹⁾、16世紀後葉以降に比定できる公算が大きい。



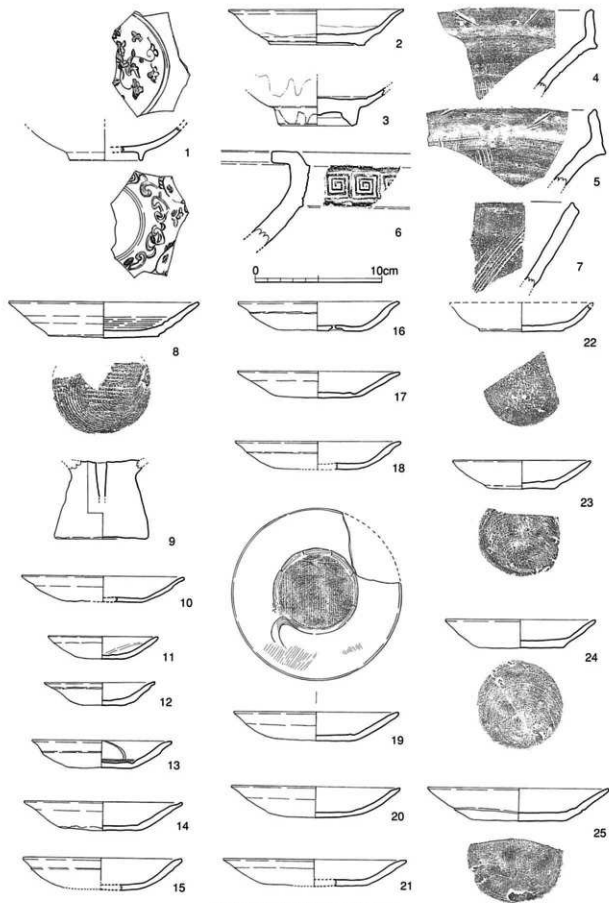
第108図 SK049実測図 (1/30) 網掛けは礎石と推定される礫

(9) 中世大友府内町跡では、16世紀後葉以降に町屋部分にも礎石建物が出現をみる事が明らかになっている。



第109図 SK004実測図 (1/30)

SK004 (第109図) 2A区に位置する大型の土坑である。土坑の規模は長辺2.65m以上、短辺3.4mで、遺構の南側はさらに調査区外に伸びる。溝SD405と切り合い関係を有しており、構築順序はSK004→SD405となる。埋土を観察すると、焼土と炭が混在する層が少なくとも2枚認められることから、一定期間土坑が開口しており、土坑が徐々に埋没するか、あるいは埋められていったことが判明する。上位の焼土・炭層は溝SD405に切られている。遺構の状況から、出土遺物は良好な一括資料であるとの評価はできないが、京都系土師器2期を主体とする時期的なまとまりが



第110図 SK004出土遺物実測図 (1/3)

認められる資料で構成されている。遺構の年代は16世紀中葉から後葉に比定される。

SK004出土遺物(第110図) 1は中国景德鎮窯系青花皿で、小野正敏分類のB1群に相当する。16世紀前葉の製品である。2は見込みと高台周辺および内底部を露胎とするタイプの白磁皿で、16世紀代に生産された中国南部地域の製品と思われる。3は中国産青磁碗で、内底部が露胎となる。4・5は備前系陶器の鉢で、乗岡実福年の中世6期に相当するものである。16世紀前葉に比定されている。6は浅鉢形を呈する瓦質土器の火鉢で、口縁部には雷文の刻印が押されている。7は瓦質土器の鉢で、型式学的に古相を呈するものであることから、混入品である可能性も考えられる。8は胎土が赤褐色を呈し、内面にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿である。京都系土師器に先行して出現する形態の土師器皿として位置づけられており、当該資料は混入品あるいは残存形態である可能性も考えられる。9は土師質土器の燗台である。胎土や色調の特徴は浅黄褐色を呈し、京都系土師器に使用される胎土や色調と類似する。芯棒を立てるための孔は貫通していない。底部にはナデを施し、糸切りの痕跡は認められない。10~21は京都系土師器皿である。このうち、10の器壁は3mm前後を測り、他の出土資料に比して、器壁の厚みが薄いことが特徴である。埴地潤一による京都系土師器1期あるいはそれ以前の型式学的特徴を有する資料である。11~21は器壁の厚さが5mm前後を測り、京都系土師器1期ないし2期の特徴を有するものである。このうち、19の底部内面には布状の調整具を使用して一定方向の直線ナデを施している。なお、型式学的に同一のカテゴリーに属する11~21の京都系土師器皿の口径について着目すると、口径8.6cmを測るもの(11・12)、11cmを測るもの(13)、12.5cm前後を測るもの(14・15)、13cm前後を測るもの(16~20)、14.8cmを測るもの(21)の5法量に細別できる可能性が考えられる。注目しておきたい事象であるが、出土状況が良好であるとは評価できないことから、これらの法量が規格的なものであるか否かの判断は保留しておきたい。なお、図示した京都系土師器にはいずれも煤の付着が認められ、灯明皿として使用あるいは転用されたものと考えられる。22~25は底部に回転糸切り痕をもつ在地系の土師質土器皿である。回転糸切りの方向が判明するものは、いずれも右回転である。色調は浅黄褐色を呈し、胎土の特徴などは京都系土師器のそれと共通する。以上、SK004からの出土遺物には型式学的にやや古相を呈するものが混在する(7・8・10など)ものの、16世紀中葉から後葉の特徴を示すものが大半を占める。

5法量の京都系土師器

SK002・SK003(第111図) いずれも4A区に位置する土坑である。これら2つの土坑は切り合い関係をもち、さらにSK002は16世紀後葉から末葉に比定される井戸SE501、15世紀末葉から16世紀初頭に比定されるSD404とも切り合いが認められる。構築順序はSD404→SK003→SK002→SE501となる。

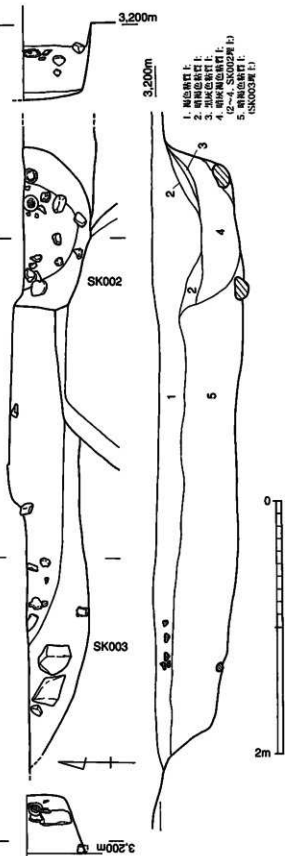
SK002は径約1.25m、深さ60cmを測る略円形プランの土坑である。土坑の南端はさらに南側に伸びていると推定されるが、調査区の限界で未調査となっている。埋土上位からは完形品を含む在地系土師質土器皿などが出土した。これらは一括廃棄された状況を呈しており、出土遺物は良好な一括資料と解釈される。

SK003も土坑で、遺構北側の一部を検出した。遺構の大半はさらに南側に伸び、その部分は調査区の限界で未調査となっている。検出部分は長径3.6m以上、深さ40cmを測るが、SK002やSE501との切り合いのため、詳細な規模は判明しない。調査部分の東側で、中国産青磁碗1や土師質土器皿2が原位置で出土し、これらは同一時期に廃棄された資料と推定される。埋土は見かけの上では暗茶褐色粘質土の単一層であると認識したが、埋土一括として取り上げた出土遺物の中には異なった時期幅の資料が認められる。このため、現場では確認できなかったものの、SK003については単一の遺構でなく、複数の遺構が重複していた可能性も考慮すべきであるかもしれない。

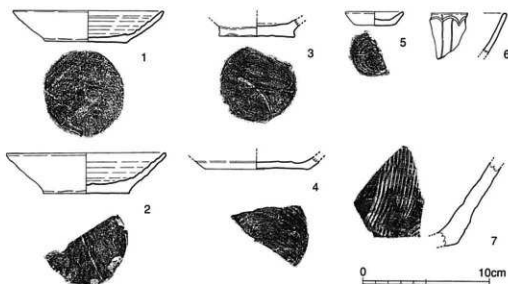
SK002・SK003の年代は、出土遺物や遺構の切り合い関係から、前者を15世紀末葉から16世紀初頭、後者をそれ以前の時期に比定しておきたい。

SK002出土遺物 (第112図) 1～3は色調が赤褐色を呈し、内面にロクロ目を顕著に残す在地系の土師質土器皿である。1の底部には糸切り痕とともに板状圧痕が認められる。4も土師質土器皿の底部であるが、内面にはロクロ目を顕著に残さない資料である可能性が高い。5は土師質土器の小皿で、当該時期の土師質土器皿としては、口径が最も小さなタイプのものである。6は中国龍泉窯系細選弁文青磁碗の口縁部で、15世紀後葉から16世紀前葉に比定される資料である。7は備前系陶器措鉢の底部付近の胴部である。以上の遺物群は、出土状況から良好な一括資料と判断される。

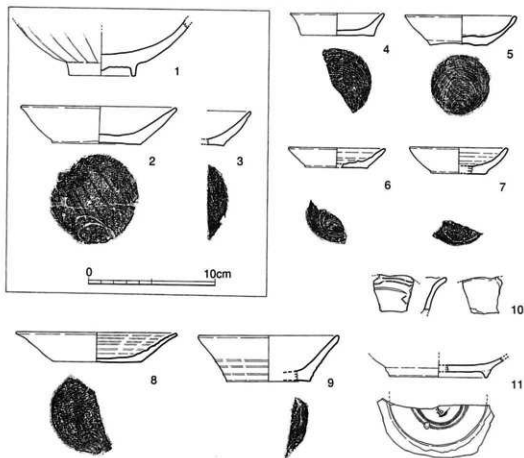
SK003出土遺物 (第113図) 1～3はSK003埋土中のほぼ同一レベルの近接した位置から出土したもので、同一時期に廃棄されたと推定される資料である。1は中国龍泉窯系選弁文青磁碗の底部で、外底部は露胎となる。13世紀代に比定される製品である。2・3は在地系の土師質土器皿であるが、内外面にナデを施し、ロクロ目等は認められない。4～11は埋土一括として取り上げたもので、異なった時期幅の資料が認められる。4・5は内外面にナデを施し、ロクロ目等が認められない土師質土器皿である。ただし、2つは形態が大きく異なり、同一時期の所産とは思われない資料である。6・7は内面にロクロ目が認められる土師質土器小皿である。8も内面にロクロ目を顕著に残す土師質土器皿であるが、大きく外反する口縁部をもつことから、型式学的には切り合い関係にあるはずのSK002出土資料よりも後出の傾向を有する。そのため、当該資料は混入品あるいは取り上げミスである可能性も考えられる。9は内面にはロクロ目がないが、外面には若干のロクロ目が認められる土師質土器皿である。10は中国龍泉窯系青磁椀花皿の口縁部で、15世紀代に比定されるものである。11は内外面に青磁釉を施すが、内底部は透明釉のみの裏白となり、その部位に呉須によって二重圏線と「・造」の銘款を描くものである。中国景德鎮窯系の青磁皿と推定され、16世紀後葉の製品である。当該資料は他の資料と明らかに時期が異なることから、混入品あるいは取り



第111図 SK002・SK003実測図 (1/30)



第112図 SK002出土遺物実測図 (1/3)

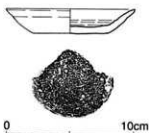
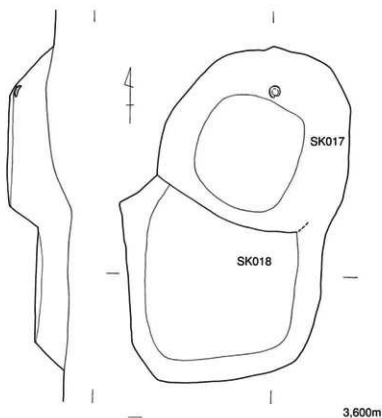


第113図 SK003出土遺物実測図 (1/3)

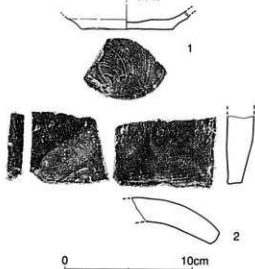
上げミスのもと判断される。以上、SK003の遺構の年代を示す遺物は原位置で押さえた1～3であり、埋土一括として取り上げた4～11の中には混入品が存在している可能性が考えられる。1～3の出土遺物は、現状では詳細な時期を確定できないため、遺構の年代は切り合い関係にあるSK002に先行するものであることを指摘するに留めておく。

SK017・SK018 (第114図) O A区の暗黄褐色砂質土(地山)上面で検出した、切り合い関係

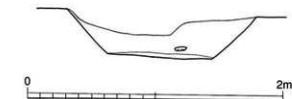
を有する2基の土坑である。構築順序はSK018→SK017となる。SK017は平面プランが略円形を呈し、その規模は長径1.5m、短径1.4m、深さ30cmを測る。埋土下位より土師質土器皿が出土しており、その年代観より、遺構の構築年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。SK018は平面プランが略隅丸方形を呈するが、北側はSK017の構築によって破壊されている。その規模は長辺1.6m前後、短辺1.5



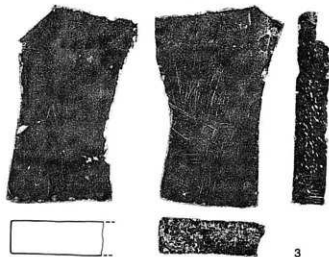
第115図 SK017出土遺物実測図 (1/3)



第116図 SK018出土遺物実測図 (1/3)



第114図 SK017・SK018実測図 (1/30)



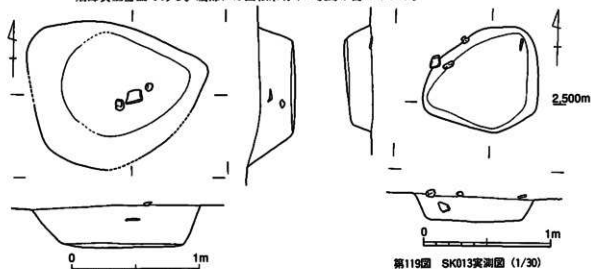
m、深さ50cmを測る。埋土中より遺物が少量出土しているが、時期を確定する良好な資料は認められない。切り合い関係より、16世紀初頭以前に構築された遺構と推定される。

SK017出土遺物 (第115図) 図示した遺物は在地系の土師質土器皿で、内面の胴部下位にロクロ目が認められる。15世紀末葉から16世紀初頭に比定される資料である。

SK018出土遺物 (第116図) 1は土師質土器皿の底部破片で、底部外面には右回転の糸切り痕が認められる。2は丸瓦の小破片で、凸面にナデを施す。3は粘板岩製の製品で、砥石と思われる。

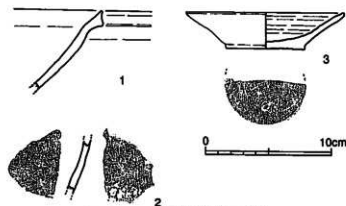
SK005 (第117図) 1A区に位置する土坑である。最下面の暗黄褐色砂質土(地山)で検出された。周辺に存在するすべての遺構(柱穴など)に切られている。平面プランは不整形形で、その規模は長径1.4m、短径1.2m、深さ35cmを測る。埋土中位から土師質土器皿などが出土しており、数量的には少ないものの、出土状況としてはまとまった状態を示している。出土遺物から、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀初頭と推定される。

SK005出土遺物 (第118図) 1は土師質土器の土鍋である。口縁端部が肥厚し、面をもつ形態を呈する。内面から口縁外面にかけてナデ調整を行い、胴部外面はやや粗い削り状のナデを施す。2は瓦質土器の土鍋で、胴部下半部の破片と思われる。内面にはハケ状工具によるナデを施し、外面には格子目叩きが認められる。3は色調が赤褐色を呈し、内面にロクロ目が認められる在地系の土師質土器皿である。底部には回転糸切りの痕跡が認められる。

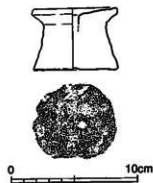


第117図 SK005実測図 (1/30)

第119図 SK013実測図 (1/30)



第118図 SK005出土遺物実測図 (1/3)



第120図 SK013出土遺物実測図 (1/3)

SK013 (第119図) 99B区に位置する小型の土坑である。南側には金箔貼りの京都系土師器皿が出土したSK012が存在する。SK013の規模は長辺0.9m、短辺0.8m、深さ20cmを測る。出土遺物は少なく、検出面付近で土師質土器燗台等が出土した。15世紀末葉から16世紀初頭前後の遺構と考える。なお、SK013の周辺には道路状遺構SF650が存在する(167頁参照)が、調査当初SF650の存在を認識できず、周辺を均一に掘り下げてしまったため、両者の層位的な関係や切り合い関係については確認が取れていない。

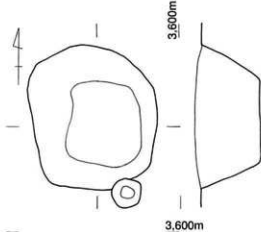
SK013出土遺物 (第120図) 図示した資料は、土師質土器燗台である。色調は赤褐色を呈し、底部には糸切り痕が認められる。底部外面中央付近には小さな窪みが認められるが、芯棒を立てるための孔は、貫通していない。15世紀末葉から16世紀初頭前後に比定される。

SK037 (第121図) 99C区に位置する土坑である。平面プランは不整形で、その規模は長径1.1m、短径0.95m、深さ55cmを測る。埋土中から備前系陶器燗鉢の口縁部が出土しており、その年代観から、遺構の構築年代は16世紀前葉以降に比定される。また、本遺構は道路状遺構SF650から続く整地層によって、完全にバックされていたことを確認しており、道路状遺構が構築される以前の遺構であることが推定される。

SK037出土遺物 (第122図) 1は備前系陶器燗鉢の口縁部で、中世6期の特徴を示す。製作年代は16世紀前葉に比定される。2は瓦質土器の胴部破片で、外面にハケメもしくは引き目状の調整痕が認められ、内面にはナデが施される。器種・年代ともに不明である。

SK053 (第123図) 2C区に位置する土坑である。平面プランは不整形円形で、その規模は長径1.2m、短径1.1m、深さ30cmを測る。埋土は炭・焼土を含む暗褐色粘質土で、周辺の整地層の埋土と同様のものである。この整地層の上面には16世紀後葉以降の遺構群が構築される。層位的には、明らかに16世紀後葉以前に比定される遺構である。注目すべき遺物に、中国磁州窯系白地鉄絵褐彩馬形燗台の破片があり、在地系の土師質土器皿と共存している。15世紀末葉から16世紀初頭に比定される遺構である。

SK053出土遺物 (第124図) 1は中国磁州窯系陶器白地鉄絵褐彩馬形燗台とした製品の破片である。型作りによって製作されており、開口した状態の馬または獅子、あるいは龍の頭部を表現したものと推定される。ピンク味を帯びた淡褐色の胎土に白化粧土を施し、鉄絵によって眉・鼻穴・唇等が描かれ、唇の部位には褐泥彩による彩色がなされている。整地層・包含層からも同様な製品



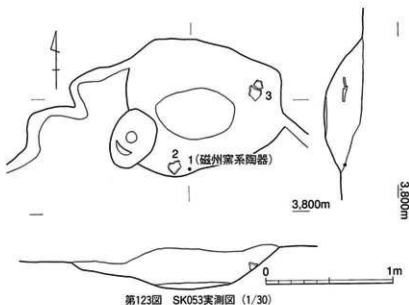
第121図 SK037実測図(1/30)



第122図 SK037出土遺物実測図(1/3)

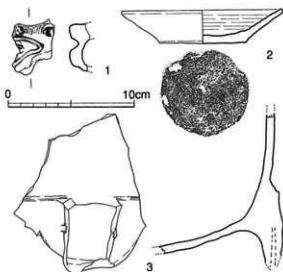
中国磁州窯系陶器馬形埴台

(第200図14)が出土している。根津美術館所蔵品⁽¹⁰⁾や山口県大内氏館跡出土品⁽¹¹⁾などの事例から、「絵高麗獅子形埴台」と呼称される資料に復元される可能性が高いと考えられる⁽¹²⁾。2は赤褐色系の胎土をもち、内面にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿である。15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。3は瓦質土器火鉢で、脚部を有する底部付近の破片である。



第123図 SK053実測図 (1/30)

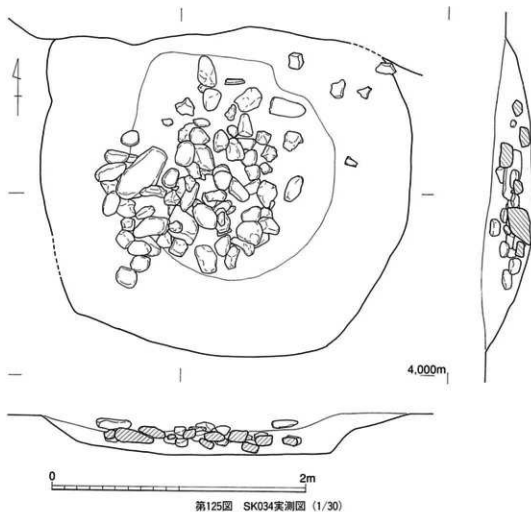
1～3は良好な状態で出土した一括資料であり、特に1の磁州窯系陶器馬形埴台と2の在地系土師器は至近の位置から出土している。磁州窯系陶器馬形埴台に関しては、16世紀後葉以前の層位で検出されていることが確認できていることや在地系の土師質土器と共存していることなど、当該遺物の製作年代を示唆する考古学的な情報が得られたことになる。



第124図 SK053出土遺物実測図 (1/3)

SK034 (第125図) 3C区に位置する土坑である。遺構南側の大部分は平成12年度後半期～平成13年度前半期の調査区に属し、残りの北半は平成13年度後半期の調査で確認した。平面プランは不整楕円形で、その規模は長径2.9m、短径2.6m、深さ25cmを測る。底面からは頭大以上の大きさの碟が多数出土した。碟群のいくつかには二次的な被熱によ

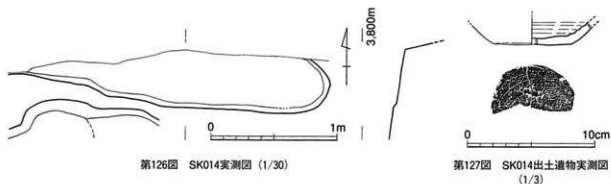
- (10) 鈴木裕子「絵高麗獅子埴台について」(『陶説』第539号 1998年)
大阪市立美術館「白と黒の競演-中国・磁州窯系陶器の世界-」(2002年 153頁)
- (11) 山口県教育委員会「大内氏館跡1」(1979年)・同「大内氏館跡」IV (1982年)
長谷川道隆「大内氏館跡出土の中国陶磁」(『貿易陶磁研究』No.3 1983年)
大内氏館跡出土の磁州窯系獅子形埴台は、第1次調査第3号井戸および第4次調査第2号井戸から出土している。第4次調査第2号井戸の年代については、天文20年(1551)における大内氏滅亡時、あるいは弘治3年(1557)における大内氏滅亡直後の館跡への龍福寺建立時と関連づけて報告されてきた。近年、古賀信幸は当該井戸出土遺物に二次的的被熱を経た資料が多く認められることから、文献史料上で確認できる永禄2年(1569)における大内輝弘の乱に関連づけて、その年代を解釈されているようである。
古賀信幸「山口県における15・16世紀の遺跡出土の貿易陶磁-大内氏館跡出土資料を中心として-」(『城跡出土の貿易陶磁器-織豊前夜の西国大名と貿易-』(貿易陶磁研究集會四国大会資料集 2000年))
- (12) 本資料については、鈴木裕子氏より多大なご教示を得た。



る赤変が認められたが、礫群や土坑の性格は不明である。また、土坑底面の形状から、複数回に渡る掘り返しが行われた可能性がある。出土遺物には良好なものがないが、内面にロクロ目を有する在地系土師器の小片等が認められることから、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀初頭前後に比定しておきたい。

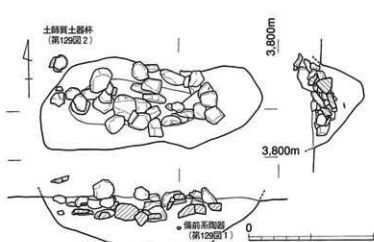
SK014 (第126図) 3B区に位置する土坑で、その規模は幅0.45m、長さ2.5m、深さ10cmを測る。北西側を16世紀前葉の溝SD416によって切られており、構築順序はSK014→SD416となる。切り合い関係や埋土中の遺物より、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。

SK014出土遺物 (第127図) 図示した遺物は在地系の土師質土器皿で、内面にロクロ目が認められる。15世紀末葉から16世紀初頭に比定される資料である。

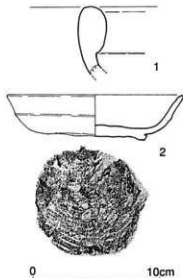
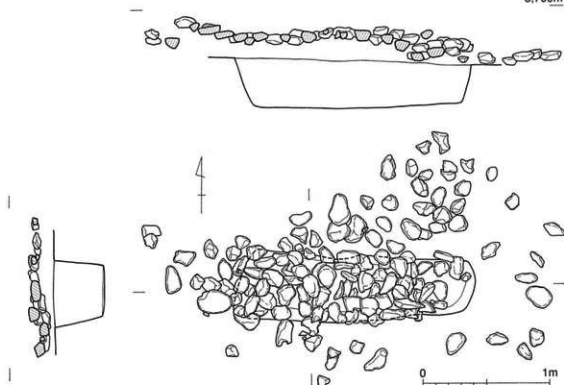


SK009 (第128図) 1A区に位置する土坑である。埋土の上位から中位にかけて拳大の礫30個程度を配置している。土坑の規模は長径1.7m、短径0.7m、深さ40cmである。当初、この遺構が土坑墓であることを想定して調査を進めたが、底面のレベルが一定していないことや釘等の出土が認められないことなどより、その可能性は少ないと判断した。集石のレベルよりさらに上位で、完形に復元できる土師質土器皿が出土している。また、埋土中位からは備前系陶器甕の口縁部が出土した。備前系陶器甕は確実に遺構に伴う遺物といえるが、土師質土器皿の方は遺構に直接伴う遺物であるかどうかの判断が難しい。遺構の年代は14世紀代の可能性が考えられるが、断定できない。

SK009出土遺物 (第129図) 1はSK009の埋土中より出土した備前系陶器甕である。詳細な時期の特定は困難であるが、中世4期(15世紀前半)以前に比定される資料である。2は集石のレベルよりさらに上位で出土した土師質土器皿である。14世紀代に比定される資料であろう。



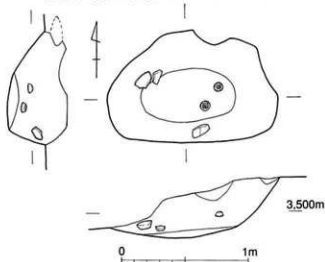
第128図 SK009実測図 (1/30)

第129図 SK009出土遺物実測図 (1/3)
3.700m

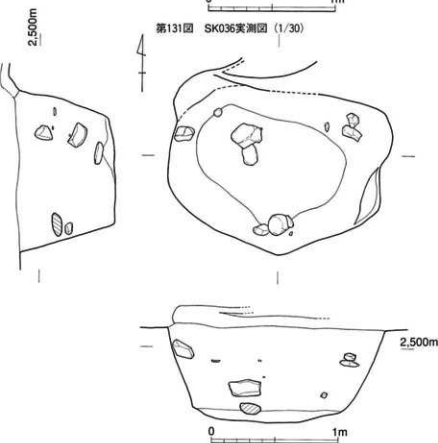
第130図 SK011実測図 (1/30)

SK011 (第130図) 99A区に位置する土坑である。遺構の上面に拳大の礫を多量に配置している。土坑の規模は長径1.9m、短径0.9m、深さ65cmである。埋土中より漆器碗と思われる小片が出土したが、遺存状態が悪く、取り上げ不能であった。この他に時期を判別できるような遺物はない。遺構の性格・時期ともに不明である。

SK036 (第131図) 0C区に位置する土坑である。平面プランは略楕円形を呈し、その規模は長径1.3m、短径0.9m、深さ40cmを測る。埋土中には多量の炭化物が含まれる。土坑内部東側からは、床面より約15cm浮いた位置で、土師質土器小皿2個が出土した。いずれも口縁部を下、底部を上に向けた状態で出土した。小皿は内外面にべったりと煤が付着しており、灯明皿として使用



第131図 SK036実測図 (1/30)



第133図 SK029実測図 (1/30)



第132図 SK036出土遺物実測図 (1/3)

第134図 SK029出土遺物実測図
(1・2は1/3、3・4は1/1)

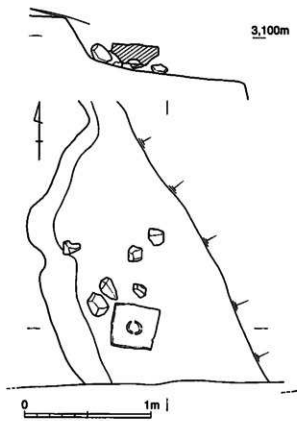
されたものが廃棄されたと推定される。埋土中に多量に認められた炭化物も、灯明皿に関連したものであった可能性が高いと考える。遺構上面は道路状遺構 SF650から続く整地層によってバックされている。出土遺物の年代観から、15世紀代の遺構と考える。

SK036出土遺物（第132図） 1・2は土師質土器小皿で、底面に糸切りの痕跡が認められる資料である。詳細な時期を確定できないが、15世紀後葉の資料と推定する。

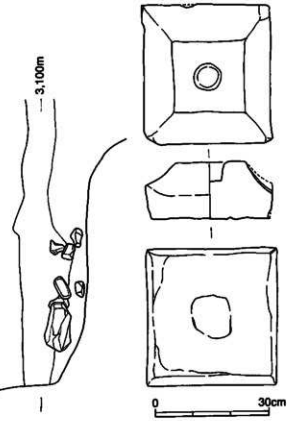
SK029（第133図） 0C区に位置する土坑である。その規模は長径1.7m、短径1.2m、深さ75cmを測る。埋土中から、少量の礫とともに土師質土器小皿、土錘、銅銭などの遺物が出土した。出土遺物の中に京都系土師器や内面にロクロ目を残す在地系の土師質土器皿などが認められないことから、遺構の年代は15世紀代と推定する。

SK029出土遺物（第134図） 1は土師質土器皿の底部で、底部外面に糸切り痕が認められる資料である。2は土錘である。3・4は中国産の銅銭である。3は「天」と「寶」の文字が残存しており、中国北宋代の「天聖元寶」の可能性が最も高いと考える。当該資料が天聖元寶であるとする、書体は真書体で、初鑄年代は1023年である。4は北宋代の「熙寧元寶」である。書体は真書体で、初鑄年代は1068年である。

SK025（第135図） 99A区に位置する土坑である。溝SD431と切り合い関係を有する。調査区南壁土層（第76図参照・89頁）を検討すると、SD431→SK025の順序で構築されているようであるが、発掘調査時には2つの遺構埋土の違いを判別できず、結果的に土坑の東側ラインを確認せずに掘り下げを行ってしまっている。土坑の規模は長辺2.2m、短辺1.3m、深さ50cmを測る。底面付近から、頭大の礫数個と石塔の火輪部分が出土した。これらの他に、遺構の時期を確定できるよ



第135図 SK025実測図 (1/30)



第136図 SK025出土遺物実測図 (1/10)

うな遺物は出土していない。切り合い関係から、15世紀後葉以降の時期に比定される遺構である。

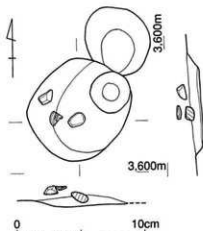
SK025出土遺物 (第136図) 図示した遺物は石塔類の火輪部分である。凝灰岩製で、四隅に意図的に手を加えており、角を丸くするような加工を行っている可能性がある。また、水輪部と組み合わせるための突起を意図的に削っている。

SK038 (第137図) 99C区に位置する土坑である。平面プランが不整形形で、その規模は長径0.8m、短径0.75m、深さ10cmを測る。埋土上面から軒平瓦が出土しているが、これだけでは年代を特定できず、遺構の詳細な構築年代は不明である。また、本土坑は道路状遺構SF650から続く整地層によって、完全にバックされていたことを確認しており、道路状遺構が構築される以前に掘り込まれた遺構である。

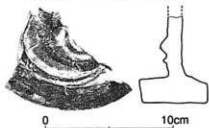
SK038出土遺物 (第138図) 図示した遺物はSK038の出土遺物で、軒丸瓦の瓦当部分の破片である。製作年代は、現状では特定できない。図示できるのは、当該遺物のみである。

SK019 (第139図) 99A区に位置する土坑である。遺構の平面プランは地山である暗黄褐色砂質土上で確認したが、当該遺構に帰属する出土遺物は地山より上位のレベルで出土しており、地山より上位に堆積する整地層中から掘り込まれていた遺構である可能性が高い。土坑の西端部はSD410によって切られている。また、当該遺構の上位には積土遺構と石列SX606・SX607が構築されている。平面プランは略円形で、径0.6~0.7m、深さ15cmを測る。遺構埋土上位から下位にかけて、9世紀代の所産と思われる土師器数個体が出土した。本調査区における古代の遺構としては、唯一のものである。

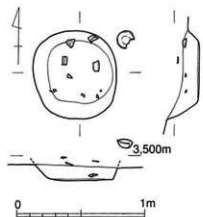
SK019出土遺物 (第140図) 1は土師器の坏で、口縁端部がわずかに外反する器形を呈する。底部にはヘラ切りの痕跡を残し、その後にはナデを施している。2・3は土師器の碗で、胴部が直線的に開き、口縁端部がわずかに外反する器形を呈する。底部には高台を有し、底部内面にはナデが施されている。1~3はいずれも9世紀代に比定される資料であろう。



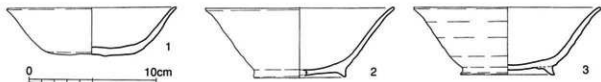
第137図 SK038実測図 (1/10)



第138図 SK038出土遺物実測図 (1/3)



第139図 SK019実測図 (1/30)



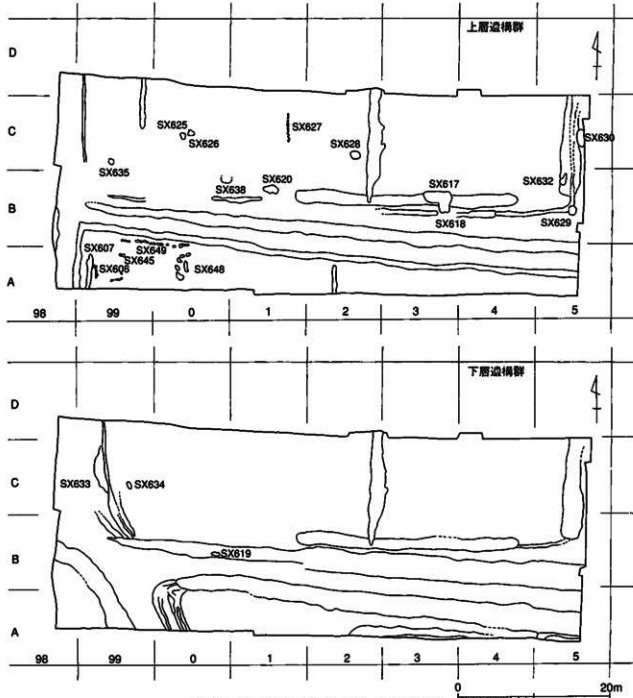
第140図 SK019出土遺物実測図 (1/3)

3. 集石遺構・石列

概要 本項目では、集石遺構および石列について、遺構の詳細と出土遺物を報告する。

集石遺構の概
要

中世大友府内町跡第5次調査A区では、14基の集石遺構を検出している。このうち、上層遺構群に属するものが12基、下層遺構群に属するものが2基である。集石遺構については、頭大ないし準大の礫を多量に集めているものが多い。これらの礫の中には、被熱しているものも認められる。戦国時代に描かれた屏風等の絵画資料を見ると、屋根上に重しとして礫や石を置いた建物の姿が描かれている場合が認められ、集積された礫はこのような用途に使用された可能性が考えられる。ただし、礫の中には屋根の重しとしては役に立たないような小さなものもあり、礫群のすべてが重しの機能を果たしたものでないことも容易に想像ができる。従って、現状では集石遺構の性格は不明

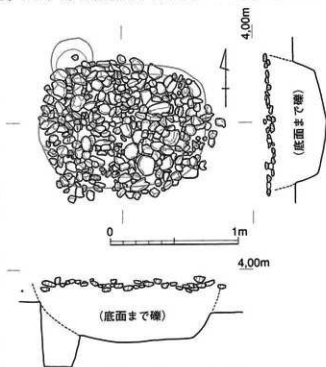


第141図 第5次調査A区の集石遺構・石列 (1/500)

としておきたい。また、集石遺構の中には、井戸や溝などを埋める際に礫群を投棄し、地盤沈下を防ぐ目的で形成されたものも確実に存在するようである。本調査区で集石遺構の詳細な性格や機能が判明する場合は、その都度、記述を行うこととする。

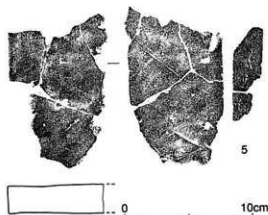
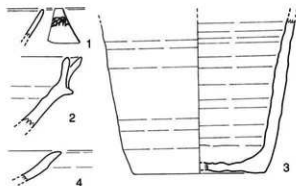
石列の概要

石列については、4基を調査している。このうち、上層遺構群に属するものが3基、下層遺構群に属するものが1基である。上層遺構群の中でも16世紀後葉～末葉に比定される遺構群と16世紀末葉以降に比定され、積土遺構SX102等が廃絶した後、構築されたもの(SX627)に細別できる。これらの中で最も注目されるものが石列SX649で、石塔類の部材や板碑を再加工した石材、頭大の礫等を並べて構築したものである。当該遺構は99A・0A区で認められる整地層の土留めの機能と区画の役割を果たし、さらに石列SX645・SX607、積土遺構SX606ともに建物に付属する施設を形成している可能性もある。



第142図 SX628実測図 (1/30)

SX628 (第143図) 2C区に位置する集石遺構である。平面プランが楕円形を呈する土坑の中に、頭大から拳大の礫がぎっしりと充填された状態で検出された。礫は屋根の重しや建築部材として使用されたものが廃棄されたか、あるいはそれらに使用されることを想定して集められたものと推定される。礫の一部には被熱が認められ、何らかの用途に使用された後に集められた礫も確実に混在している。土坑の規模は長径1.3m、短径1.0m、深さ50cmを測る。層位や切り合い関係から最も上位に位置づけられる遺構であり、周辺の柱穴などをすべて切っている。層位的な所見から、遺構の年代は16世紀末葉以降と推定する。ただし、出土遺物中に唐津系陶器は確認されていない。



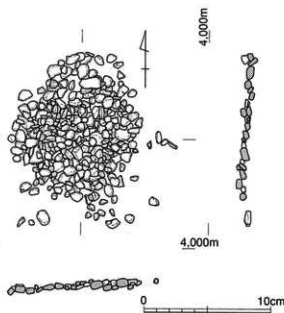
第143図 SX628出土遺物実測図 (1/3)

SX628出土遺物 (第143図) 1は中国景德鎮窯系青花碗C類で、16世紀前葉の製品である。2は備前系陶器掻鉢で、中世5期b期 (15世紀後葉)

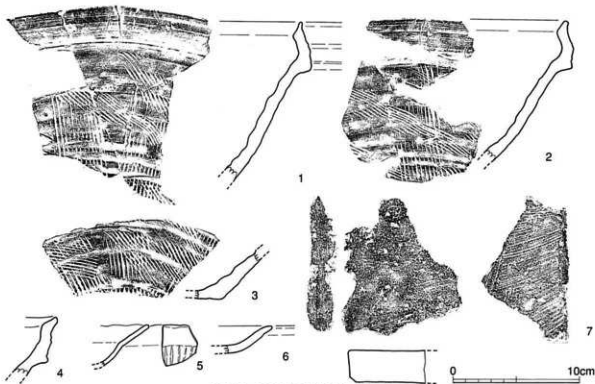
に比定される。3は備前系陶器壺の底部である。4は京都系土師器皿の口縁部の破片である。2期に比定される製品で、16世紀後葉に比定される。5は埴で、内外面や側面にナデが施されている。以上の出土遺物はすべて16世紀葉半以前の年代を示しているが、層位や切り合い関係から、当該遺構の年代は16世紀末葉以降と推定している。

SX629 (第144図) 5B区に位置する集石遺構で、溝遺構SD429、井戸状遺構SE543と切り合い関係を有する。構築順序はSD429→SE543→SX629となり、最も新しい時期に比定される遺構である。集石遺構を形成する礫は略楕円形プランの形で配置されており、その規模は長径1.2m、短径1.0mを測る。集石の周囲に掘方を認めることはできなかった。集石を構成する礫の一部には二次的に被熱したものが認められる。遺構の詳細な性格は不明である。礫中より出土した遺物より、遺構の構築年代は16世紀後葉から末葉に比定される。

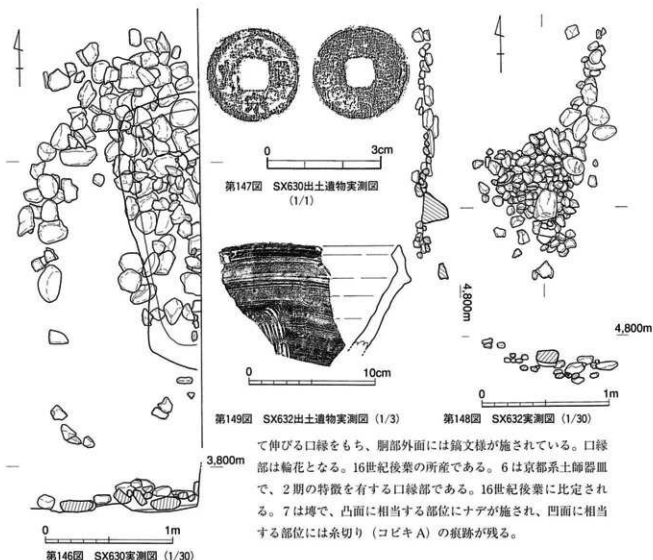
SX629出土遺物 (第145図) 1～4は備前系陶器掻鉢で、同一個体と推定される資料である。SX629だけではなく、溝SD101、積土遺構SX102からの出土資料が接合している。近世1b期に比定される資料で、内面の掻目は放射状掻目に斜め掻目を重ねる特徴をもち、1570年代以降に出現するタイプである。5は中国産の白磁皿で、胴部から屈曲し



第144図 SX629実測図 (1/30)



第145図 SX629出土遺物実測図 (1/3)



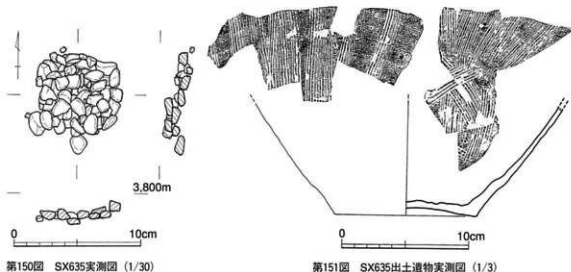
て伸びる口縁をもち、胴部外面には鍔文様が施されている。口縁部は輪花となる。16世紀後葉の所産である。6は京都系土師器皿で、2期の特徴を有する口縁部である。16世紀後葉に比定される。7は埴で、凸面に相当する部位にナデが施され、凹面に相当する部位には糸切り（コビキA）の痕跡が残る。

SX630（第146図） 5C区に位置する集石遺構である。

溝SD428の上位に構築されており、また遺構西端部を溝SD429に切られている可能性もある。構築順序はSD428→SX630→SD429となる。集石は頭大程度の礫で構成されており、礫の分布範囲は南北2.2m、東西1.3mを測る。東側は調査区の限界のため、未検出である。礫の下位からは南北2.1m、東西0.6m以上、深さ15cmの土坑を検出した。土坑の東側は、やはり未検出となっている。礫中より少量の遺物と銅銭が出土したが、土坑埋土中からは遺物の出土は認められなかった。遺構の構築時期を明確に示す遺物はないが、16世紀前葉の溝SD428を切っていることや遺構の全体的な配置の状況から、16世紀末葉以降に比定できる可能性が大きいと考える。

SX630出土遺物（第147図） 図示した遺物は、中国北宋代の銅銭で、「皇宋通寶」である。書体は真書体で、初铸年代は1038年である。図示可能な遺物は、当該遺物1点のみである。

SX632（第148図） 5C区に位置する集石遺構である。これも溝SD428を切って構築されており、また遺構東端部を溝SD429に切られている可能性もある。構築順序はSD428→SX632→SD429となる。礫は意図的に集積された状況を示しており、その分布範囲は南北2.0m、東西1.0mを測る。礫の下位からは土坑などの遺構は検出されなかった。礫中から遺物が少量出土している。当該遺物の構築時期も切り合い関係や全体的な配置の状況から、16世紀末葉以降に比定できる可能性が大きいと考えられる。



第150図 SX635実測図 (1/30)

第151図 SX635出土遺物実測図 (1/3)

SX632出土遺物 (第149図) 図示した遺物は、備前系陶器搦鉢の口縁部である。中世6期bに比定され、16世紀前葉から中葉の所産である。図示可能な遺物は、当該遺物1点のみである。

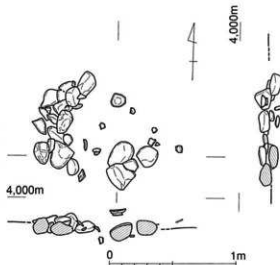
SX635 (第150図) 99C区に位置する集石遺構である。集石は頭大程度の礫で構成されており、礫の分布範囲は南北0.7m、東西0.65mを測る。集石の周囲には掘方などのプランを検出することはできなかった。集石内部から出土遺物は認められないが、周辺から中国産焼締陶器搦鉢の破片が出土している。当該遺物はSX635の南東側約19mに位置する土坑SK006からの出土遺物と接合した。当該遺物は集石遺構SX635に直接帰属するものではないが、遺構の年代を示唆する遺物であると考えられる。遺構の構築年代は16世紀後葉に比定される。

中国南部産
焼締陶器搦鉢
(同一個体が
SK006で出土)

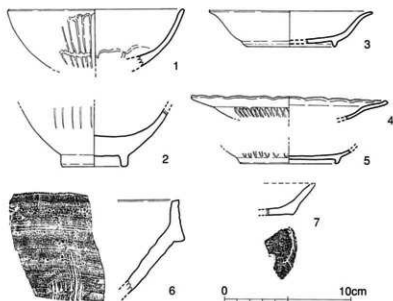
SX635出土遺物 (第151図) 図示した遺物は、SX335の遺構付近から出土した中国南部産と推定される焼締陶器搦鉢である。胴部下半部から底部の大型破片で、内面には搦目が認められる。SX635とSK006から出土した破片が接合しており、さらに第88図5(97頁)で図示した口縁部が同一個体である可能性が考えられる。16世紀後葉の所産と推定される。

SX625 (第152図) 0C区に位置する集石遺構である。集石は頭大から拳大程度の礫で構成されており、集石の間から陶磁器類を主体とした遺物が出土している。集石の下位には柱穴や小土坑と思われる遺構のプランが検出されているが、集石遺構に伴うものではない。遺構の性格は不明である。出土遺物の年代観から、遺構の集石年代は16世紀後葉に比定される。

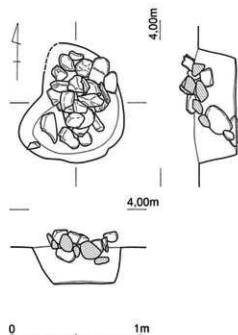
SX625出土遺物 (第153図) 1・2は中国龍泉窯系青磁細連弁文碗で、15世紀後葉から16世紀前葉に比定される製品である。3は中国産の白磁皿で、D群に属する資料である。製作年代は16世紀代に比定される。4・5も中国産の白磁皿で、口縁部と胴部の境に屈曲部を有し、胴部外面に鎊文を施すものである。16世紀後葉の所産である。6は備前系陶器搦鉢で、中世6期(16世紀前葉)に比定される資料である。7は土師質土器皿で、15世紀代の製品であろうか。当該資料は混入品で



第152図 SX625実測図 (1/30)



第153図 SX625出土遺物実測図 (1/3)



第154図 SX626実測図 (1/30)

ある可能性が高いと考える。以上の出土遺物の中で、3～5が遺構の年代を示す資料と考える。

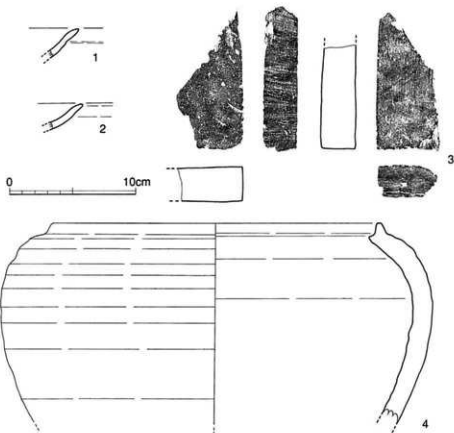
SX626 (第154図)

0C区に位置する集石遺構である。集石は頭大から拳大程度の礫で構成されており、礫群は南北0.9m、東西0.8m、深さ28cmの土坑内に廃棄されたような状況で検出された。16世紀後葉に比定される遺構である。

SX626出土遺物

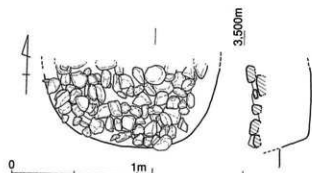
(第155図) 1・2は京都系土師器皿の口縁部の破片で、2期に比定される資料

である。16世紀後半に比定される。3は備前系陶器水屋甕である。胴部上半部分の破片で、口縁端部内面には蓋受けのための突帯を設けている。4は埴で、凸凹面に相当する部位にナアを施している。側面には成形時に生じた痕跡が、未調整のまま残存している。



第155図 SX626出土遺物実測図 (1/3)

SK638 (第156図) 0B区と1B区の境界付近に位置する遺構である。規模は長辺1.4m、短辺0.6m以上、深さ40cmで、北側は平成12年度前半期と後半期の調査区の境界部分に相当していたため、未検出となってしまう。内部には拳大の礫が底面までぎっしりと充填されていた。埋土中の礫は意図的に集積されていたものと思われるが、その性格は不明である。礫中に混入していた出土遺物から、遺構の構築年代は16世紀後葉と推定される。



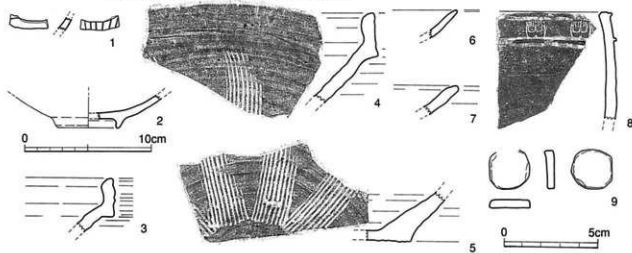
第156図 SK638実測図 (1/30)

中国磁州窯系
陶器

SK638出土遺物 (第157図) 1は中国磁州窯系白地鉄絵陶器である。内外面に鉄絵による文様が認められる。小片のため、器種や詳細な製作年代は不明である。2は中国産の青磁皿で、内外面に青磁釉を施すものの、内底部は透明釉のみの裏白となる。このような特徴から、中国景德鎮窯系青磁皿と判断され、16世紀代の製品である。3～5は備前系陶器播磨鉢で、3は中世5期b、4は中世6期の特徴を示す。6・7は京都系土師器皿の口縁部で、6は1期、7は2～3期の特徴を示す。8は瓦質土器火鉢の口縁部で、蓮弁状の文様を刻印する。口縁外面の突帯が口唇部直下に貼付されていることから、16世紀後葉以降の製品であろう。9は土器片加工品で、「おはじき」などの道具として使用された可能性が高いものと考えられる。

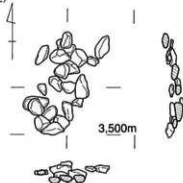
中国景德鎮窯系
青磁皿

土器片加工品



第157図 SK638出土遺物実測図 (1～8は1/3、9は1/2)

SX621 (第158図) 1B区に位置する集石遺構である。南北0.8m、東西0.5mの範囲に拳大から頭大の礫が20個程度集積されている。集石の周辺からは、掘方などのプランは検出されていない。出土遺物は認められないが、後述する集石遺構SX620と至近の位置にあることや同一層位で、ほぼ同一のレベルから検出されていることより、16世紀後葉の所産と推定される。



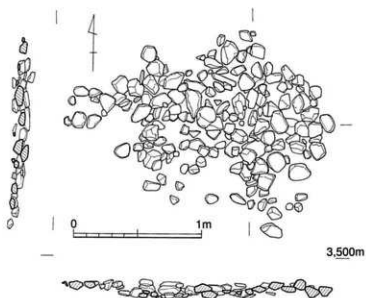
第158図 SX621実測図 (1/30)

SX620 (第159図) 1B区に位置する集石遺構である。東西2.1m、南北1.5mの範囲に拳大から頭大の礫が多数分布

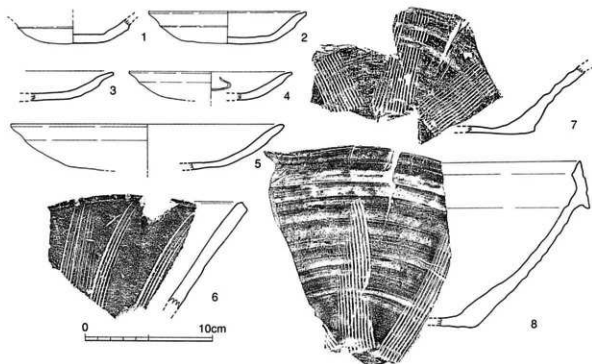
している。周囲からは明瞭な掘方などは検出できなかった。礫群の一部には二次的に被熱したものもあるが、これらが何のために集められたのかは不明である。礫とともに京都系土師器や備前系陶器播鉢等が出土しており、遺構の年代は16世紀後葉から末葉に比定される。

SX620出土遺物 (第160・161図) 1～5は京都系土師器皿である。いずれも2期あるいは3期の特徴を有し、16世紀後葉から末葉に比定される。6は瓦質土器の播鉢

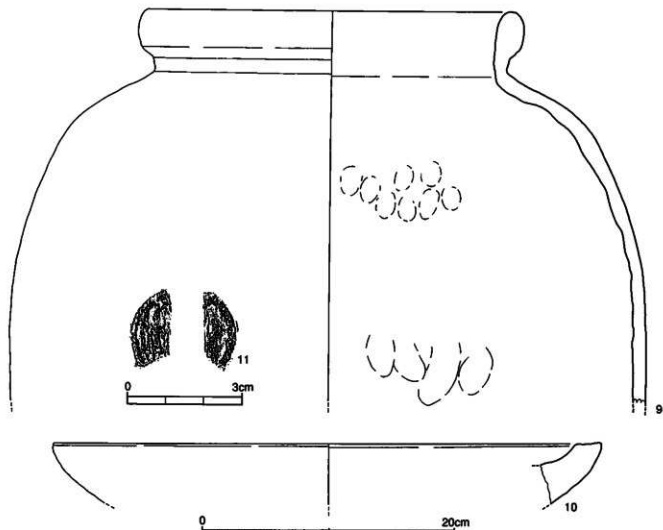
で、内面には5条を1単位とする播目が認められる。7・8は同一個体と推定される備前系陶器播鉢で、中世6期bに比定される製品である。16世紀前葉から中葉の所産である。図示した他にも、同一個体と思われる破片が複数存在する。9は備前系陶器大甕で、中世4期b(15世紀前葉)以降に比定される製品である。10は茶臼の下臼で、鈎の部分の破片である。11は中国銭の破片であるが、錆化が著しく、銭文を判読できていない。以上の出土遺物のうち、京都系土師器が遺構の構築時期を示唆する遺物であると推定する。



第159図 SX620実測図(1/30)



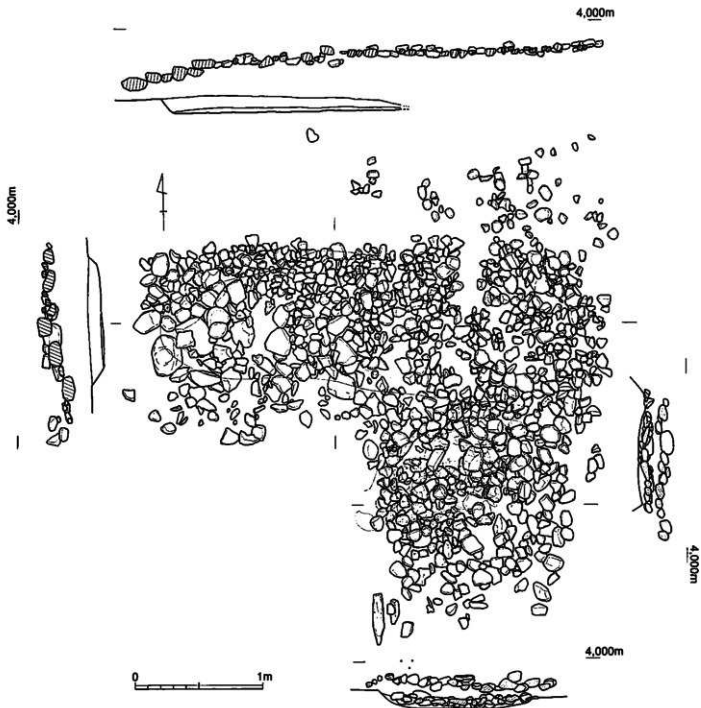
第160図 SX620出土遺物実測図①(1/3)



第161図 SX620出土遺物実測図② (1~10は1/3, 11は1/1)

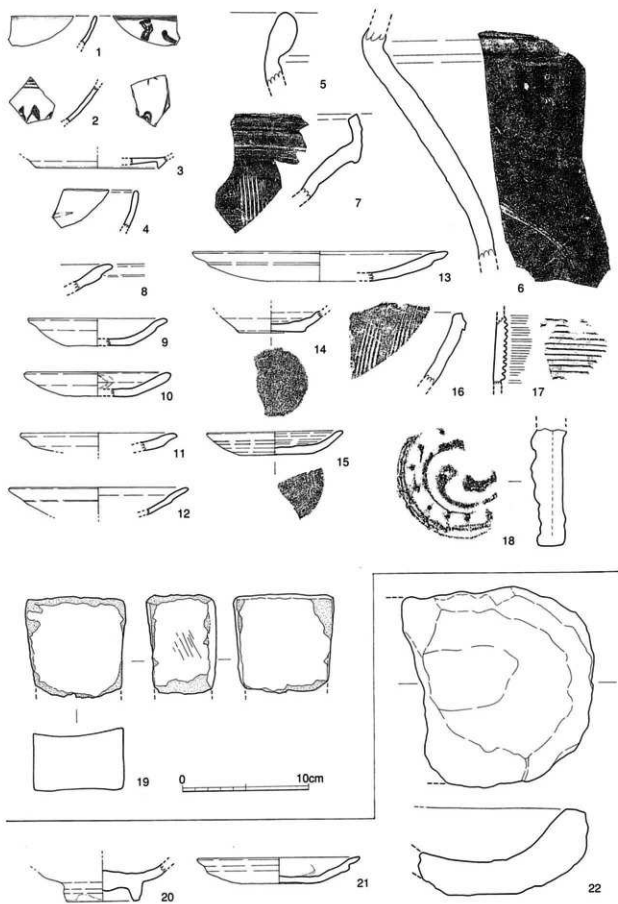
SX617・618 (第162図) いずれも、3B区に位置する集石遺構である。SX617の集石は南北1.3m、東西3.6mの範囲で頭大から拳大の礫をぎっしりと配置しており、礫の厚みは厚いところでは40cmにおよぶ。礫を取り除くと、南北1.0m、東西3.0m、深さ10cm程度の浅い土坑が検出された。礫の内部などから、京都系土師器をはじめとした遺物が出土している。SX618の集石も東西1.2m、南北1.3mの範囲で頭大から拳大の礫が集積されており、上面の礫を取り除くと、南北0.7m、東西1.1m、深さ10cm程度の平面プランが不整形を呈する土坑が検出されている。礫は土坑の底面までぎっしりと充填されており、礫の厚みは厚いところでは30cm以上におよんでいる。礫の上面から3期の特徴をもつ京都系土師器皿、土坑底面付近から白磁碗の底部および手水鉢状の凝灰岩製の加工石製品が出土している。SX617・SX618はいずれも、16世紀前葉の溝SD152、15世紀末葉から16世紀初葉の井戸SE203と切り合い関係を有しており、遺構の構築順序はSE503→SD436→SX617・SX618となる。SX617・SX618の礫の分布範囲は、溝SD436と井戸SE503が重複して築かれていた地点にはほぼ限定されるようである。このことから、これら2つの集石遺構の礫は、かつて存在した溝や井戸の埋設によって軟弱となった地盤の沈下を防ぐ目的で、集積されたものと推定される。集石遺構の構築時期は、遺構の切り合い関係や出土遺物から、いずれも16世紀後葉から末葉に比定される。

地盤沈下を防ぐ
目的で構築
された集石
遺構



第162図 SX617・SX618実測図 (1/30)

SX617出土遺物 (第163図) 1～3は中国景德鎮窯系青花で、1・2はC群青花碗、3は基筒底をもつC群青花皿に分類される。いずれも16世紀前葉の所産である。4は中国産の青磁碗で、外面にわずかに片彫り文様が認められる。15～16世紀の所産であろうか。5・6は備前系陶器甕で、5は1縁部、6は頸部から胴部上にかけての大型破片である。6のヘラ書き文字は、肩部外面に記された「□□入」の「入」字第2画の一部と推定される。5は中世5期に属し、15世紀後葉以降の製品である。また、6については近世1期に属し、1570年以降に出現する型式であろう。7

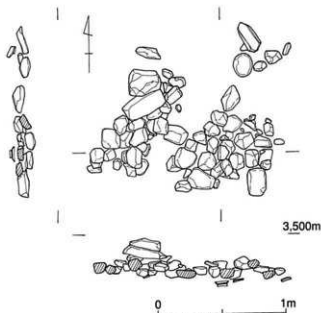


第163圖 SX617・SX618出土遺物実測圖 (1/3)

は備前系陶器擂鉢で、中世6期b(16世紀前葉~中葉)に比定される。8~13は京都系土師器皿で、12は1期、9は2期、8・10・11・13は3期の特徴を有する資料である。このうち、16世紀末葉に比定される3期のものが遺構の構築年代を示唆する資料で、他は混入品と推定する。14・15は内面にロクロ目を有する在地系の土師器皿である。いずれも底部に糸切り痕のほか、板状圧痕が認められる。16は瓦質土器擂鉢の口縁部である。類例が少ない製品であるが、在地産のものであろうか。17は外面に多条沈線を描す瓦質土器火鉢の胴部片である。近年、中世大友府内町跡で出土例が増加しているもので、在地産の製品であろう。18は右回りの巴文をもつ軒丸瓦の瓦当部である。周辺には8個以上の珠文がみられる。瓦当裏面にはナデが施されている。19は砥石で、粘板岩を素材としている。そのサイズから置砥と思われる。

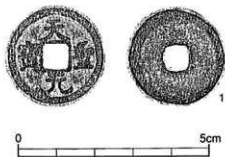
SX618出土遺物 (第163図) 20は中国産の白磁碗の底部である。外底部は露胎となる。16世紀代の所産と推定される。21は京都系土師器皿で、器壁の厚みから3期に比定される資料である。16世紀末葉の所産である。22は凝灰岩を使用した加工石製品である。手水鉢状の形態を有するものであろうか。

SX622 (第164図) 0C区に位置する集石遺構である。集石は頭大から拳大の礫で構成され、一部の礫には二次的な被熱が認められる。礫群は見かけの上では東と西の2つのブロックに別れ、両者が接するような状況で検出されている。集石の周辺には、土坑の掘方等のプランは検出されていない。集石の北側から丸瓦の大型破片、集石の直下から青磁碗の底部破片などが出土した。出土遺物にロクロ目を残す土師質土器皿や京都系土師器が認められないことから、集石遺構の構築時期は、15世紀代に比定されよう。

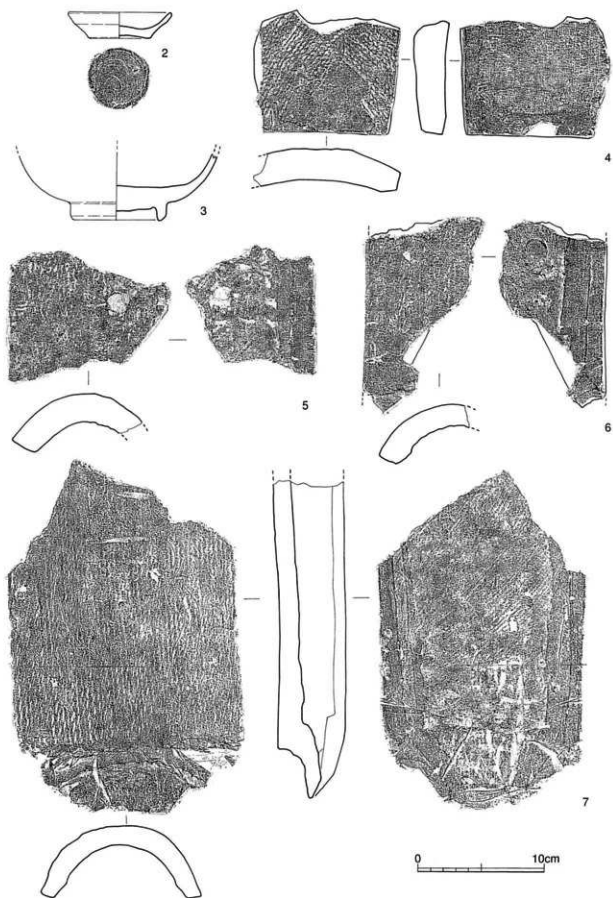


第164図 SX622実測図 (1/30)

SX622出土遺物 (第165・166図) 第165図1は中国北宋代の銅銭で、「天聖元寶」である。書体は真書体で、初铸年代は1023年である。第166図2は底部外面に糸切り痕を有する在地系の土師質土器皿である。内面にロクロ目は認められない。3は中国龍泉窯系青磁碗で、胴部上半から口縁部を欠損する。外底部は蛇の目状に軸剥ぎとなっている。14~15世紀代の所産である。4~7は瓦類である。4は凸面に交差する縄目叩き、凹面に布目痕が認められる。凹面の側縁部と淡緑釉にはナデが施され、面取りが行われている。当該資料は一枚作りによる古代瓦である可能性が考えられる。5~7は中世の所産と思われる丸瓦である。いずれも外面に縄目叩きが認められる。5には釘穴である貫通孔、7の凹面には糸切り痕(コビキA)がみられる。

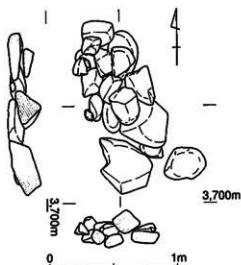


第165図 SX622出土遺物実測図① (1/1)



第166図 SXX622出土遺物実測図② (1/3)

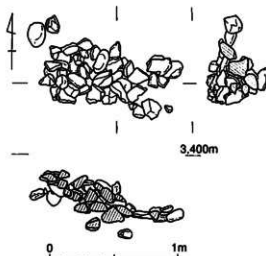
SX634 (第167図) 99C区に所在する集石遺構である。その規模は南北1.3m、東西0.6mを測る。集石は頭大から拳大の礫20個前後で構成されているが、他の集石遺構で使用されているものより大型の礫で構成されている。表面を観察する限りでは、二次的な被熱を受けている礫は認められないようであった。遺構の性格は不明である。当該遺構は、上位に位置する道路状遺構SF650から続く整地層によって完全にバックされていた。また、出土遺物も皆無で、詳細な構築時期も不明であるが、層位的な所見から、16世紀前葉以前の遺構と推定される。



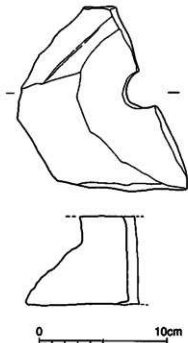
第167図 SX634実測図 (1/30)

SX619 (第168図) 0B区に所在する集石遺構である。その規模は南北0.5m、東西1.1mを測る。溝SD151の底面付近から検出されているが、遺構の切り合い関係から、SD151より先行する時期に構築されたものである可能性が高い。集石の一部には、二次的な被熱を受けているものが認められた。遺構の性格は不明である。層位的な所見から、15世紀代の所産と考える。出土遺物としては加工石材と九瓦の破片があるが、図示可能なものは前者のみである。

SX619出土遺物 (第169図) 図示したものは、加工石製品である。凝灰岩を素材とするもので、石臼を再加工したものである可能性が考えられる。

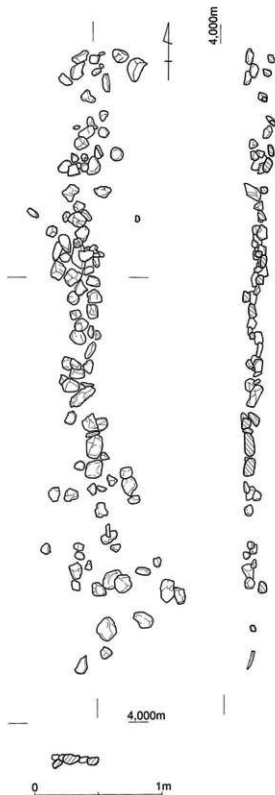


第168図 SX619実測図 (1/30)



第169図 SX619出土遺物実測図 (1/3)

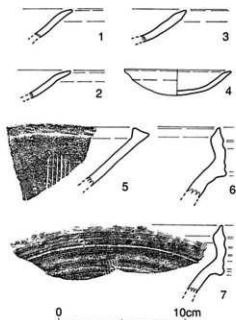
SX627 (第170図) 1C区で検出された南北方向に伸びる石列遺構である。拳大以下の礫を使用した幅40cm程度の石列が、長さ5m以上の範囲で確認されている。層位的には最も上位の面で検出されており、当該遺構の下位には16世紀後葉に比定される上坑SK033等が存在している。何らかの区画の機能をもつと思われるが、石列自体は堅固なものではなく、非常に簡便なものである印象を与える遺構である。層位的な所見から、遺構の年代は16世紀末葉以降に比定される。



第170図 SX627実測図 (1/30)

整地層
SX602

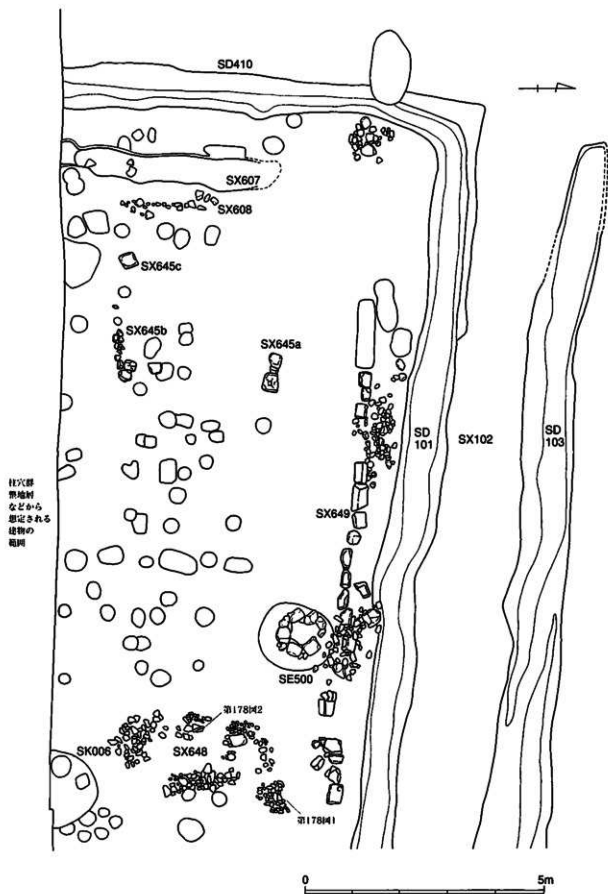
質土と砂質土を交互に積み重ねる版築状の工法で構築された整地層SX602が形成されており、整地層が認められる範囲は99A・99B・0A区の東西約8m、南北約6mにおよぶ。石列SX649はこの整地層SX602の北端部に位置しており、整地層の土留めの役割を果たすとともに、整地層上に存在したと推定される建物に伴う区画の役割を果たしたものと推定される。SX645は99A区に位置



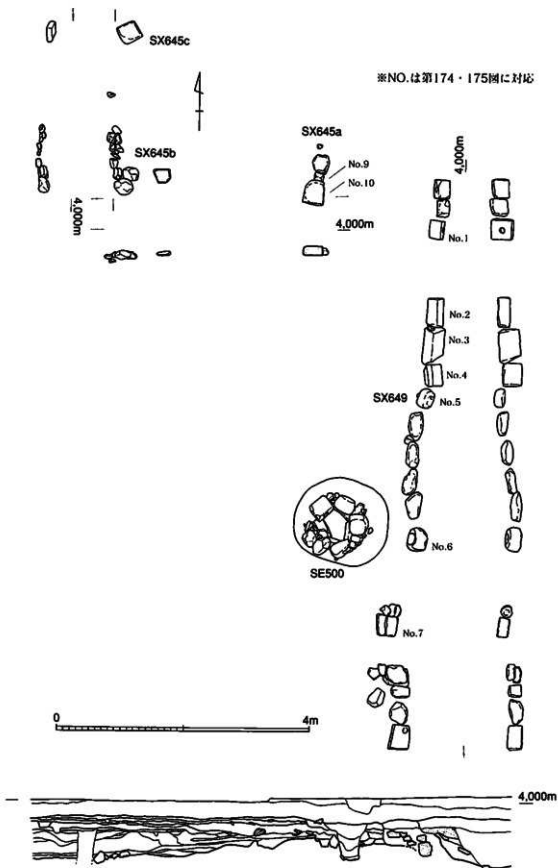
第171図 SX627出土遺物 (1/3)

SX627出土遺物 (第171図) 1～4は京都系土師器皿で、1期ないし2期の特徴を有する資料である。5は瓦質土器の摺鉢で、口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける防長系の摺鉢である。6・7は備前系陶器摺鉢の口縁部で、中世6期(16世紀前葉～中葉)に比定される。以上の出土遺物はすべて16世紀後葉以前の年代観を示しているが、層位や切り合い関係から、石列遺構の構築年代は16世紀末葉以降と推定している。

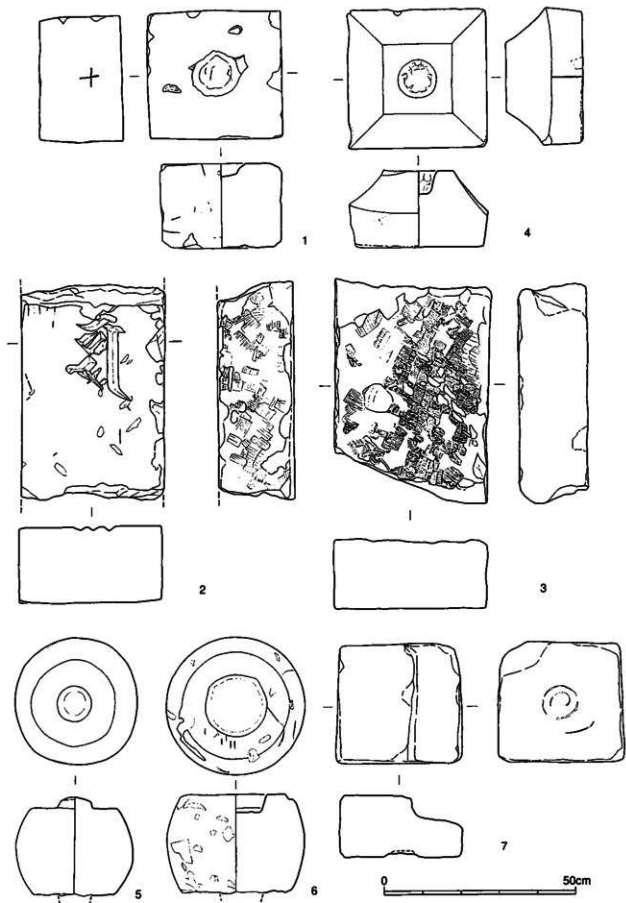
SX649・SX645・SX602 (第172・173図) 99A～B・0A～B区で確認された石列および整地層である。SX649は99B～0B区の溝SD101南端部に接する地点に位置する石列で、石塔類や板碑を再利用した石材が使用され、それらを縦あるいは斜めに立てかけるようにして構築されている。その長さは9.1mを測るが、石列西端部のさらに西側には石材を据えるための掘方(長さ1.5m、幅0.4m、深さ40cm)が検出され、本来の長さが10.5m前後におよぶことが判明した。当該遺構より南側には粘



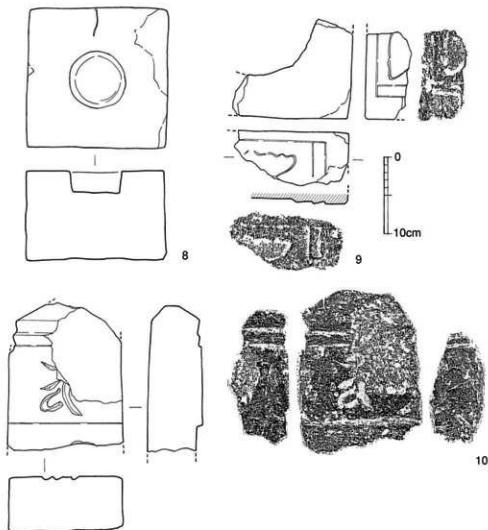
第172図 SX645・SX649実測図①(1/80)



第173図 SX645・SX649実測図② (1/60) ※上列同の網掛けは築地村SX602



第174圖 SX645・SX649出土遺物実測圖①(1/10)



第175図 SX645・SX649出土遺物実測図② (1/10)

する石列で、板碑や宝塔露盤等を再利用した石列 (SX645a)、拳大の礫約15個を集積した石列 (SX645b)、火輪を反転して使用した礫 (SX645c) で構成される。いずれも整地層 SX602上に据えられている。この石列 SX645は後述する石列 SX606・積土遺構 SX607および前述した石列 SX649とともに、整地層 SX602上に構築された建物遺構に伴う区画の役割を果たしたものと推定される。石列遺構に転用された石塔類には、その製作年代が南北朝期に遡る資料も認められ、遺跡周辺に造営されていた石塔類が集積され、再利用されたことが想定される。上記の遺構の構築年代は、16世紀後葉に比定される。

SX649・SX645出土遺物 (第174・175図) 第174図1～第175図8は、石列 SX649に使用されていた石材で、いずれも凝灰岩を素材とする。1は地輪で、上面中央部には円形の窪みを有する。側面には「十」字の記号が刻まれている。2・3は板碑の碑身部で、接合しないが同一個体であった可能性が考えられる資料である。2には文殊菩薩を表す梵字「マン」が刻まれている。4は火輪、5・6は水輪である。5は上面と下面に突起を有するが、転用に当たって再加工が行われ、突起の部位を削ろうとした意図が認められる。6についても、同様に下面の突起がほぼ完全に削られている。7・8は地輪であるが、7については断面形態が階段状になるように再加工が加えられている。第175図8・9は、石列 SX645aに使用されていた石材で、いずれも凝灰岩を素材とする。8は宝塔類の露盤で、中央に径約20cmの貫通孔を有する。側面に格状間の表現が認められる。9は

板碑の額部から山型部にかけての破片で、額部正面に大日如来を表現する梵字「バン」が刻まれている。以上の石塔類については、原田昭一の教示¹³⁾によると、梵字や格狭間の形りの状況、および板碑額部の切り込み断面形態などから、詳細な年代が推定可能なものが存在する。すなわち、2・3・5の板碑については南北朝の初頭から前半（1330～1340年代）、9の宝塔露盤については南北朝期（1330～90年代）前後に比定される。

推定年代が判明する石塔類

SX606

SX606・SX607（第176図） いずれも99A区に位置する遺構である。SX606は長さ約2mを測る石列遺構で、準大から須大の礎を1段ないし2段積み上げて形成されている。SX607との間には焼土が堆積し、その西側は10cm弱程度の深さで溝状に窪んでいる。SX607は2層の砂質土で形成される積土遺構である。下位の堆積土は粗くボサボサの砂質土であるが、上位の堆積土は硬くしまり、上面にマンガン粒の付着が認められる。積土内から京都系土師器皿が出土しており、それらの年代観から16世紀後葉の構築と想定される。以上の石列遺構 SX606と積土遺構 SX607は、前述した石列遺構 SX645・SX649とともに、整地層 SX602上に構築されたと推定される建物遺構に作る区画の役割を果たしたものと推定される。

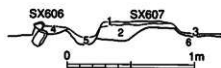
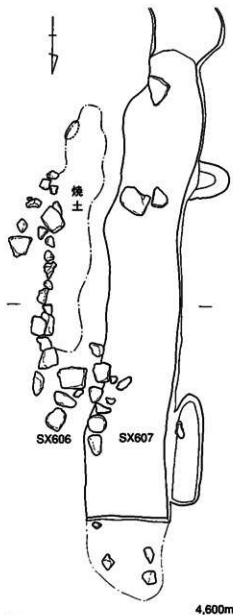
SX607

区画の役割

SX607出土遺物（第177図） 1・2はいずれも京都系土師器皿で、2期の特徴を有する資料である。製作年代は、16世紀後葉に比定される。



第177図 SX607出土遺物実測図（1/3）



1. 暗茶褐色砂質土
 2. 灰茶褐色砂質土
 3. 暗褐色粘質土
 4. 焼土
 5. 暗褐色粘質土
- （州く締まる。上部にマンガン粒含む）

第176図 SX606・SX607実測図（1/30）

(13) 原田昭一（大分県教育庁埋蔵文化財センター）氏から直接のご教示をいただいたほか、下記文献を参照した。

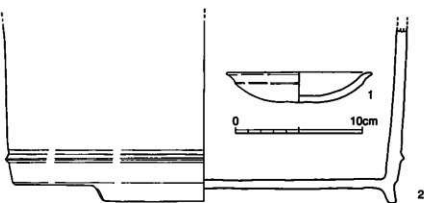
原田昭一「板碑変遷史-豊前・豊後における紀年名板碑を通して-」（『古文化談叢』第51集 九州古文化研究会 2004年）

地盤の崩壊のためと推定される集石遺構

SX648 (第172図) 0A区で検出した遺構で、集石遺構として報告する。拳大から頭大の礫を多数集積したもので、平面的には5つ程度のブロックで構成されている。当該遺構の下位には15世紀末葉から16世紀初頭に構築された溝SD413が存在している。これらの集石は溝SD413の埋没によって軟弱となっていた地盤を補強し、地盤沈下を防ぐ目的で、整地層中につき込まれたものと推定される。従って、このSX648の周辺には建物の構築は不可能で、柱穴などの建物に関わる遺構の存在や切り合い関係は認められない。集石間から京都系土師器や瓦質土器火鉢などが出土しており、これらの年代観から、SX648の年代は16世紀後葉に比定される。

SX648出土遺物 (第178図)

1は京都系土師器の皿である。器壁の厚みは5mm前後を測り、2期の特徴を有する資料である。16世紀後葉に比定される。2は瓦質土器火鉢の胴部下



第178図 SX648出土遺物実測図 (1/3)

半から底部にかけての大型破片である。長方形の板状脚部を有し、底部付近の胴部外面には1条の突帯を貼付する。16世紀後半の所産と推定する。遺物の出土地点は第172図中に明記しているので、参照されたい。

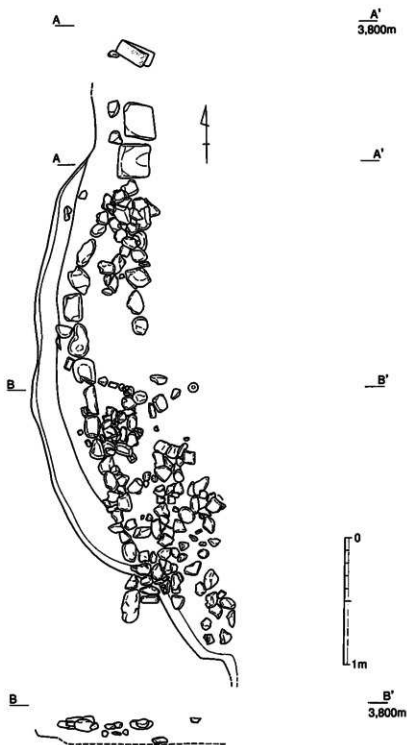
SX647 (第13図) 16世紀後葉から末葉の溝SD103の北側に構築された石列遺構である。拳大の礫を1段ないし2段重ねることによって、石列を構築している。99B~1B区にかけて断続的に検出され、総延長は26mにおよぶ。さらに東側の2B区でも延長部が検出されていた可能性があるが、残存状況が不良であったため、意図的な石列であったと認識できず溝SD151の掘り下げの過程で撤去してしまっている。99B区では1列、0B区および1B区では見かけの上で2列の石列が検出され、1A区南側の石列の残存状況が特に良好であった。0B~1B区の2列の石列については、これらが同時期に併存していたか否かの確認は取れなかった。これらの石列はSD103の北側に展開する屋敷地の南側ないし東側の区画遺構と推定され、その一部は屋敷地背後の区画施設に関わる遺構であった可能性も考えられる。石列間および石列の周辺から出土遺物が認められるが、図示可能なものはない。出土層位や周辺の遺構との関連から、SX647の構築年代は16世紀後葉から末葉に比定される。

SX633 (第179図) 99C区で検出された石列遺構である。石列は北端部を石塔類の地輪を転用した石材2個を用い、他はやや大きめの拳大の礫を弧状に配列している。南半部周辺では礫の配列がやや不明瞭になり、集石が乱雑に積み上げられたような状況を示す。また、礫を弧状に配列した部位の北端部分にも、配列された礫とは別の集石が行われている。遺構の切り合いと埋土の性状を弁別しにくいのが、弧状を示す礫の部位には、それに関連する浅い掘方を伴う可能性が高い。SX633は溝SD418、井戸SE511と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD418→SX633→SE511となっている。また、これらの遺構は道路状遺構SF650の下位に存在し、SF650に関連する整

地土によって完全にバックされていたことを確認している。出土遺物にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿が存在することや遺構の切り合い関係などより、SX633の構築年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。また、注目すべき出土遺物として、泥塔が挙げられる。遺構の性格は不明で、何の目的で当該遺構が構築されたか、明らかにすることはできなかった。

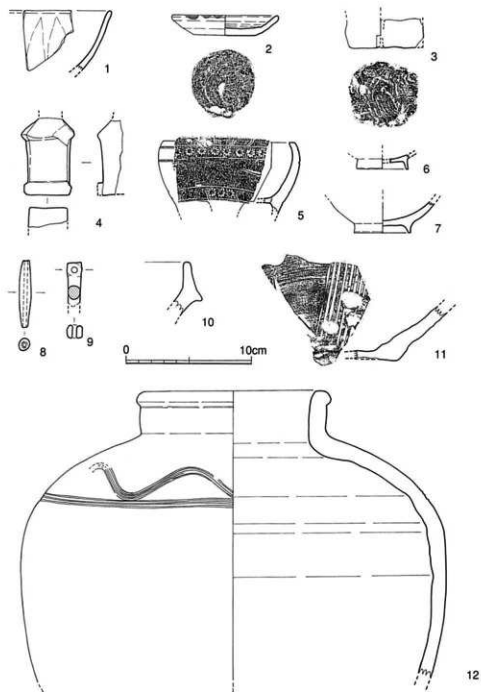
SX633出土遺物 (第180図) 1は中国龍泉窯系青磁碗で、外面に題弁文を有する資料である。題弁文の形態から、14世紀末葉から15世紀初頭に比定される。2は内外面にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿である。口縁端部に煤の付着が認められ、複数回にわたって灯明皿として使用されたことを示唆している。15世紀末葉から16世紀初頭に比定される製品である。3は胎土が赤褐色を呈し、

底部に糸切り痕をもつ土師質土器燗台である。脚部中央にごく小さな貫通孔が認められる。4は土師質の泥塔で、屋根部の一部と背面を欠損する。外面が黒褐色を呈するように焼成されている。第5次調査B区SD151で、類似の資料が出土している。5は瓦質土器香炉である。11緑外面と底部付近の胴部外面に2本の沈線を描き、沈線間に菊花文の刻印をスタンプする。欠損しているが、本来3個程度の脚部を有する資料と推定される。6・7は瓦質土器境で、断面が方形を呈する高台部を有する。16世紀前葉以降に出現する製品で、混入品である可能性が考えられる。8・9は土錘で、前者は管状土錘、後者は有孔土錘である。9の有孔土錘については6～7世紀に散見できるも



第179図 SX633実測図 (1/30)

泥塔 (第5次調査B区SD151に類似あり)



第180図 SX633出土遺物実測図 (1/3)

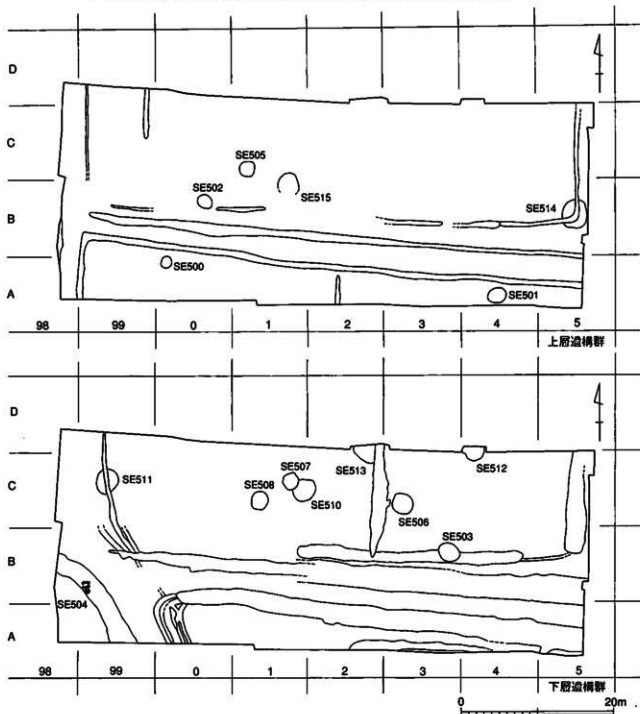
有孔土鉢
(古墳時代)
の混入

のであり、古墳時代後期の遺物が混入したものと断定できる。10・11は備前系陶器播鉢で、このうち10の口縁部については中世4b期（15世紀前葉）に属する資料である。11の内面には8条を一単位とする播目が施されている。12は備前系陶器壺である。肩部外面に播描き直線文および播描き波状文が施されている。以上、SX633からの出土遺物は混入品が多く認められ、良好な一括資料ではない。遺構の切り合い関係が著しかったことや遺構埋土の性状が互いに近似しており、個々の遺構の出土遺物を正確に弁別できなかったことに原因がある。遺物の共伴関係や年代観を検討する際には、注意が必要である。

4. 井戸・井戸状遺構

概要 中世大友府内町跡5次調査A区では、15基の井戸あるいは井戸状遺構を検出している。上層遺構群に属するものが6基、下層遺構群に属するものが9基である。井戸および井戸状遺構については、調査時の危険性を回避するため、十分な掘り下げや記録の作成を行っていないものが多い。

上層遺構群に属するものは、16世紀後葉に比定される井戸状遺構1基と16世紀末葉にされる井戸4基、井戸状遺構1基に細別される。この中で、16世紀後葉に比定される井戸および井戸状遺構は当調査区の最盛期に属し、すでに報告した積土遺構とそれに付属する溝 SX102・SD101・SD103と同時に併存したものである可能性が高い。特に、SX102・SD101・SD103より南側で検出された井戸 SE500と SE501は、溝 SD405を挟んで等間隔に位置する状況が観察される。



第181図 第5次調査A区の井戸 (1/500)

下層遺構に属するものは、掘り下げが十分でないものや出土遺物が僅少であるため、詳細な時期が確定できないものも多い。報告に当たって再検討を行ったところ、15世紀末葉から16世紀初頭に比定されるもの3基、14世紀代に比定されるもの1基、詳細な時期が確定できないものが5基である。

本調査区で検出された井戸には水溜めに結桶を使用し、井戸側の石積みには石塔類を転用したものが多く見られる。その他、素掘りの井戸や水溜め部に曲物を使用した可能性の高い井戸も存在するようである。また、井戸の廃棄に当たって、節を抜いた竹を使用して井戸封じを行ったものや井戸内に礫や大石を使用して井戸側を被覆するもの、水溜め部の桶を抜いた後に礫を充填するなどの様々な行為が認められるものがある。以下、それぞれの遺構の詳細を報告したい。

SE 500

(第182図)

0A~0

B区に位置

する井戸で

ある。調査

当初、準大

の礫が多数

集石された

状態で検出

され、井戸

と認識でき

なかつた遺

構である。

今から考え

れば、これ

らの礫は井

戸の廃棄時に

上面を塞いだ

井戸封じに関

わるものであ

った可能性が

高いが、図面

や写真などの

十分な記録を

行わずに掘り

下げを進めて

しまっている。

当該遺構を井

戸と認識し、

報告に耐える

記録の作成を

始めたのは、

井戸側の石積

みが明確に検

出されて以降

である。井戸

の掘方は略楕

円形を呈し、

長径1.5m、

短径1.3m、

深さ1.1mを

測る。井筒部

の平面プラン

も略楕円形を

呈し、長径約

0.45m、短径

0.3mである。

井戸の規模は

他の調査区で

検出されている

ものと比較す

ると、小型の

部類に属する。

井戸側の石積

みは2段が残

存しており、

上段北西側の

石材(火輪)が

井筒内に転落

していた。石

積みの大部分

は、石塔類の

火輪・水輪・

地輪等を転用

している。これ

より上位の石

材は井戸の廃

棄時に抜き取

られ、再利用

された可能性

も考えられる。

水溜め部には

結桶が使用さ

れており、こ

の結桶も土圧

による若干の

変形が考慮さ

れるものの、

本来の平面形

態が楕円形を

呈する製品

であった可能

性が高い。前

述のように、

井戸の廃棄に

当たって、上

位の石積みを

撤去した後、

その上面に準

大の礫を被覆

する井戸封じ

の行為を行っ

た可能性が考

えられるが、

当該部位に関

しては十分な

記録を作成せ

ずに礫群を撤

去している。井

筒内や掘方か

ら良好な出土

遺物は認めら

れなかつた。

SE500は前述

した石列SX34

9・SX347等と

同時に併存し

ていることや

0A区で検出さ

れた整地層

を切って構築

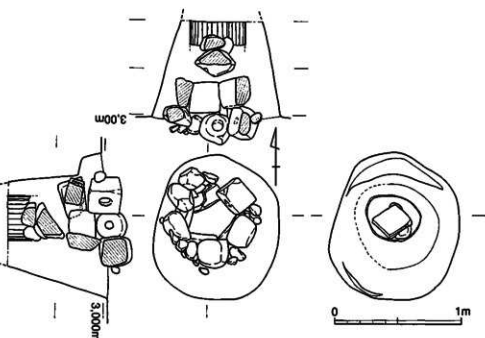
されているこ

となどから、

16世紀後葉

以降の所産と

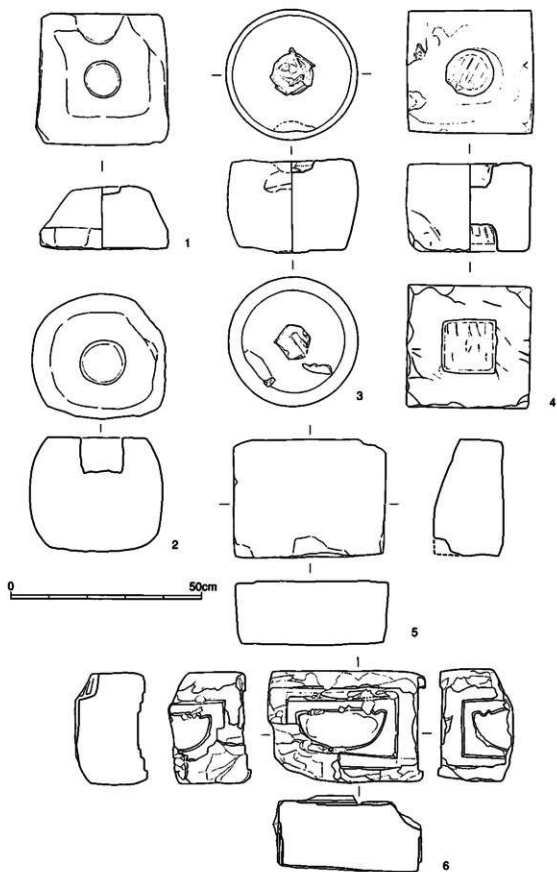
考える。



第182図 SE500実測図 (1/30)

石塔類の転用

礫を被覆する
井戸封じ

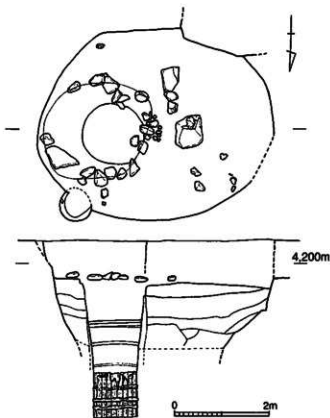


第183図 SE500出土遺物実測図 (1/10)

格狭間を有する
宝塔地輪

SE500出土遺物(第183図) 1～6は、いずれも井戸側石積みで転用されていた石塔類あるいは加工品で、いずれも凝灰岩を素材とするものである。1は火輪で、転用に当たって天井部や隅角部に程度の強い再加工を加えており、断面は石塔火輪の本来のカーブを留めていない。2・3は水輪で、このうち2については周縁部に再加工が加えられている。4は地輪で、上面に円形、下面に方形の窪みが認められる。5は凝灰岩製の加工石材で、石塔類に使用されていたものかどうか、判断の難しいものである。加工しやすい凝灰岩という素材を使用しているにもかかわらず、正確な直方体に加工できていない。加工も雑な印象を与える。6は宝塔類の地輪と思われ、正面には格狭間が彫刻されている。

SE501(第184図) 4A区に位置する井戸で、上層遺構群に属する遺構である。下層遺構群のSK002・SK003・SD403・SD153と切り合い関係を有し、これらすべての遺構を切って構築されている。調査当初、上層遺構群の検出面で桶の抜き取り痕と想定される土坑状のプランを検出し、その後の掘り下げの過程で、井戸の掘方ラインを確認した。井戸の掘方は略楕円形を呈し、長径2.45m、短径約2m、深さ1.6m以上を測る。井筒部の平面プランは略円形で、その規模は径55cmである。井戸の規模は他の調査区で検出されているものと比較すると、小型の部類に属する。井戸の掘方の上位で、井筒部を開鑿するように準大から頭大の礫が検出されており、本来井戸側に石積みをも有するタイプの井戸であった可能性が考えられる。水溜の部位には2段程度の結桶が重ねられていたことが確認できるが、残存するのは下段の結桶



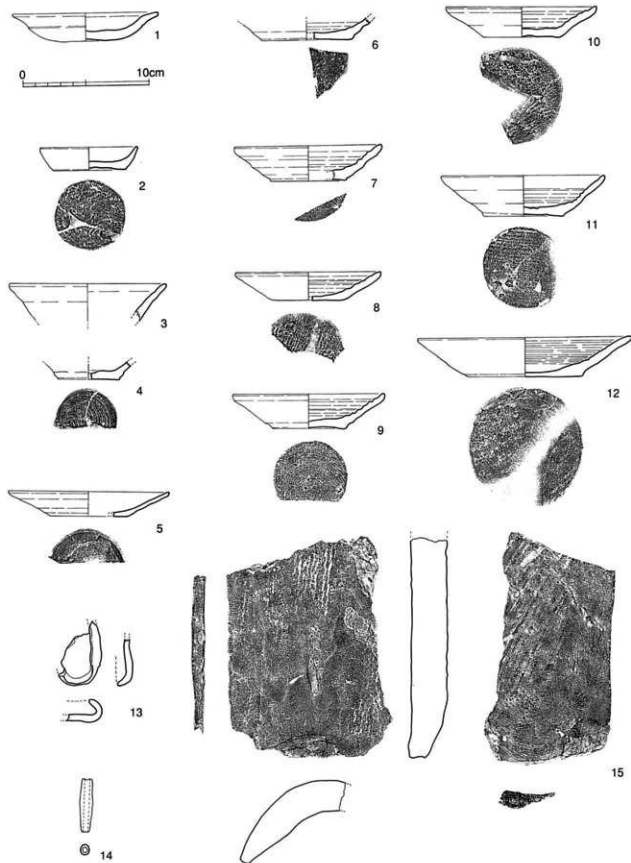
第184図 SE501実測図(1/40)

桶の抜き取り

1個体のみで、上段の結桶は抜き取られている。出土遺物には混入品が多く認められるが、京都系土師器3期に比定される資料の存在から、16世紀末葉の所産と推定される遺構である。

SE501出土遺物(第185図) 1は京都系土師器皿で、口縁部にナデを施すことによって、当該部分が大きく外反する器形を呈する。3期の特徴を有する資料で、16世紀末葉に比定される。2は内外面にロクロ目を残さないタイプの土師質土器小皿で、15世紀後葉以前の所産である。3・4は口縁部がラッパ状に開く土師質土器皿で、SD411で類似の資料が出土している(第71図1～5)。15世紀後葉に比定される。5は極めて薄い器壁をもち、白色系の胎土を使用した土師質土器小皿である。6～12は内面あるいは外面にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿で、15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。15は丸瓦の大型破片で、凸面に縄目叩き、凹面に糸切り痕(コビキA)が認められる。以上の遺物は、1の京都系土師器のみが遺構の時期を示唆する遺物で、他は切り合い関係にあるSD404またはSD153の遺物が混入したものと推定する。

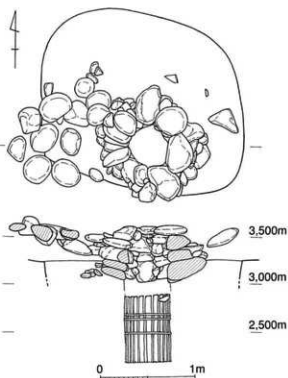
白色系の胎土
を使用する土
師質土器皿
(説)



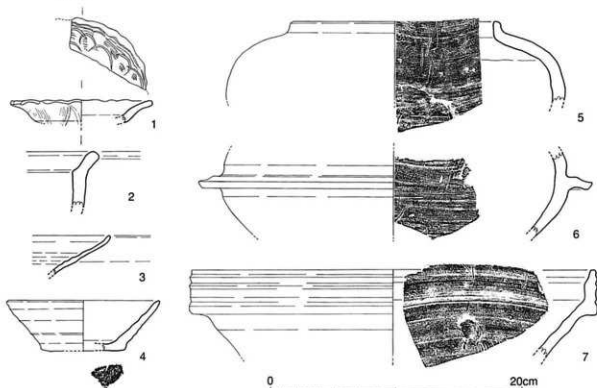
第185図 SE501出土遺物実測図 (1/3)

SE502 (第186図) 1C区に位置する井戸で、上層遺構群に属する遺構である。下層遺構群のSE508と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE508→SE502である。井戸の掘方は径約2mの不整形円形を呈し、深さは1.1m以上となる。井筒部の平面プランも略円形で、その規模は径約40cmである。他の調査区で検出されている井戸と比較すると、小型の規模といえるものである。井戸側には頭大前後の川原礫を使用して石積みを行っており、石積みは4段程度が残存していた。また、井戸側の西側にも円礫15個程度を集積した施設が検出されたが、その機能は不明である。水溜の部位には結桶が使用されていた痕跡が認められたが、結桶そのものは抜き取られたか、腐朽してしまっており、残存していない。遺構の実測図中には、結桶の設置状況を模式的に図示している。出土遺物中に近世1期に比定される備前系陶器鉢があり、当該遺構の構築年代は16世紀末葉に比定される。

井戸側西側の
集石



第186図 SE502実測図 (1/40)



第187図 SE502出土遺物実測図 (1/3)

SE502出土遺物 (第187図) SE502からの出土遺物を第187図に提示した。2・3・5・6は井戸掘方内、4・7は井戸内部からの出土で、1は詳細な出土地点が不明なものである。1は中国産の青磁椀花皿で、15世紀代の製品である。内外面にヘラあるいは櫛状工具を使用して、文様を施している。2は土師質土器土鍋の口縁部である。3は白色系の胎土を使用し、極めて薄手の器壁をもつ土師質土器皿の口縁部である。内面にはロクロ目が認められる。4は底部に糸切り痕を有し、赤褐色系の胎土を使用する在地系の土師質土器皿である。15世紀代の製品であろうか。5・6は瓦質土器の羽釜で、接合していないが、同一個体である可能性がある。16世紀代の製品である。7は備前系陶器插鉢で、近世1期に比定されるものである。内面の一部が残存する襷目は斜め方向に施されており、1570年以降に出現する製品である可能性が高い。以上の遺物は、7の備前系陶器插鉢が遺構の時期を示す遺物であり、5・6も同時期のものである可能性が考えられる。その他の遺物は混入品であると推定する。

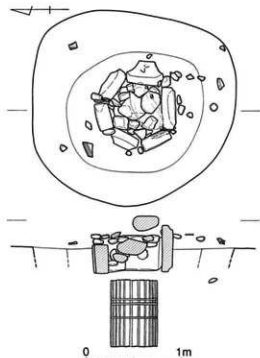
SE505 (第188図) 1C区に位置する井戸で、上層遺構群に属する遺構である。井戸の掘方は径2.1mの不整形円形プランを呈し、その内部に長径1.4m、短径1.2mの楕円形プランの土色の変化を確認した。当該部分は井戸側部分の改修を示唆する事跡である可能性が考えられるが、発掘調査時には井戸遺構に対する問題意識と調査事例の蓄積が少なく、断ち割りなどの最終的な確認を行っていない。井筒部の石組は1段のみが残存しており、使用された石材はすべて石塔類の火輪あるいは地輪を転用していた。石塔類のほとんどは凝灰岩製であるが、このうちの火輪1点については花崗岩が使用されている¹⁴⁾。また、井戸内部には頭大の礫を意図的に投げ込んで井筒部分を充填しており、さらにその上位には大型の河原礫をのせている状況が確認できた。これらは井戸の廃棄に関わる呪術的な行為である可能性が考えられる。水溜の部位には結桶の使用を確認したが、調査中途の雨によって井筒部分の石組が崩落したため、詳細な記録の作成を行っていない。遺構の実測図中には、結桶の設置状況を模式的に図示している。出土遺物の年代観から、当該井戸の構築年代は16世紀末葉に比定される。

SE505出土遺物 (第189図) 1は中国景德鎮窯系青磁皿の口縁部で、16世紀後葉に比定されるE群青花皿である。内外面に1条の圈線を施している。2は中国漳州窯系青磁碗の口縁部で、16世紀後葉の所産である。3・4は京都系土師器で、2期以降の製品であろう。5～7は在地系の瓦質

井戸側部分の改修？

花崗岩製の火輪

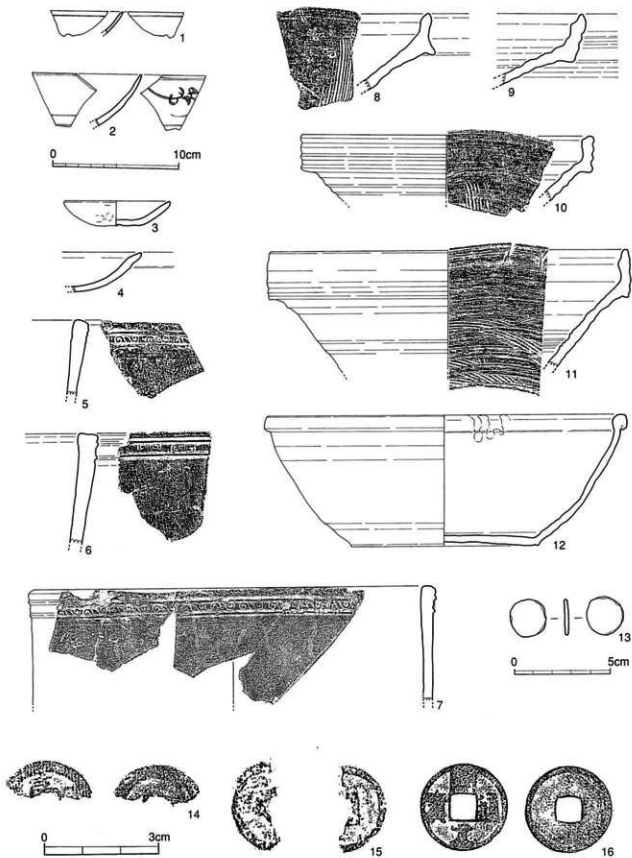
井筒部分の充填と大型の礫を使用した井戸廃棄の行為



第188図 SE505実測図 (1/40)

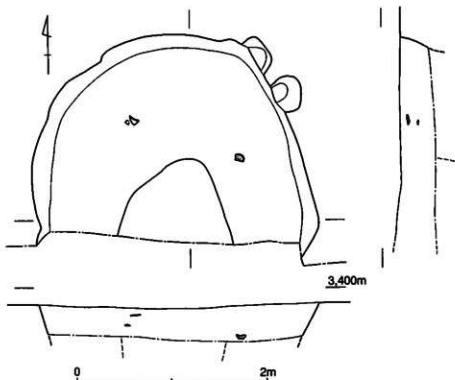
(14) 火輪に使用されている花崗岩は地元産出しない石材である。この石材が使用されていた石塔は、近畿・瀬戸内地域からの搬入品である可能性が高い。原田昭一・田中裕介氏の教示による。なお、下記文献も参照した。

原田昭一「大分県における石造物の分布と流通」〔海をこえての交流-石造物から中世社会を探る-〕石造物研究会第4回研究資料 2003年)



第189図 SE505出土遺物実測図 (1~12は1/3, 13は1/2, 14~16は1/1)

土器火鉢で、口縁部外面の2条の突帯間に刻印が認められ、5・7は双頭獣手流雲文、6は雷文である。8～11は備前系陶器播鉢で、8は中世4期b(15世紀前葉)、9・11は近世1期(16世紀末葉)、10は中世6期

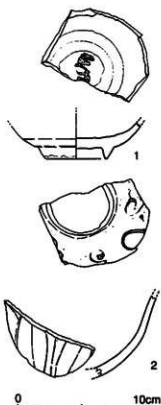


第190図 SE515実測図(1/40)

(16世紀前葉から中葉)に属する製品である。12は中国南部産と推定される焼締陶器鉢で、B類に分類される器形を呈する。13は土師質土器を再加工した土器片加工品で、周辺部に研削を加え、径約2cmの円形に加工している。14～16は銅銭で、14・15は判読不明、16は中国唐代の「開元通寶」で、初鋳年代は960年である。

SE515(第190図) 1B～1C区に位置する井戸状遺構である。遺構の検出位置が平成12年度前半期と平成12年度後半期～13年度前半期調査区の境界部に相当したため、遺構壁面が崩壊する危険性を認め、掘り下げを途中で中断している。井戸の掘方は径2.9mの円形を呈する。検出面から40cm程度掘り下げた段階で、井筒部と思われる長径1.1mほどの土色の变化を認めている。これらのことから、当該遺構は石積みをもたない素掘りの井戸である可能性が高い。出土遺物から、遺構の構築時期は16世紀末葉に比定される。

SE515出土遺物(第191図) 1は中国漳州窯系青花碗で、口縁部から胴部上半部を欠損する。見込みは蛇の目軸洞ぎとなる。16世紀後葉の所産である。2は中国龍泉窯系青磁碗の胴部破片である。外面に鋳を有する蓮弁文が認められ、13世紀代に比定される製品である。



第191図 SE515出土遺物実測図(1/3)

中国南部産
焼締陶器鉢
B類

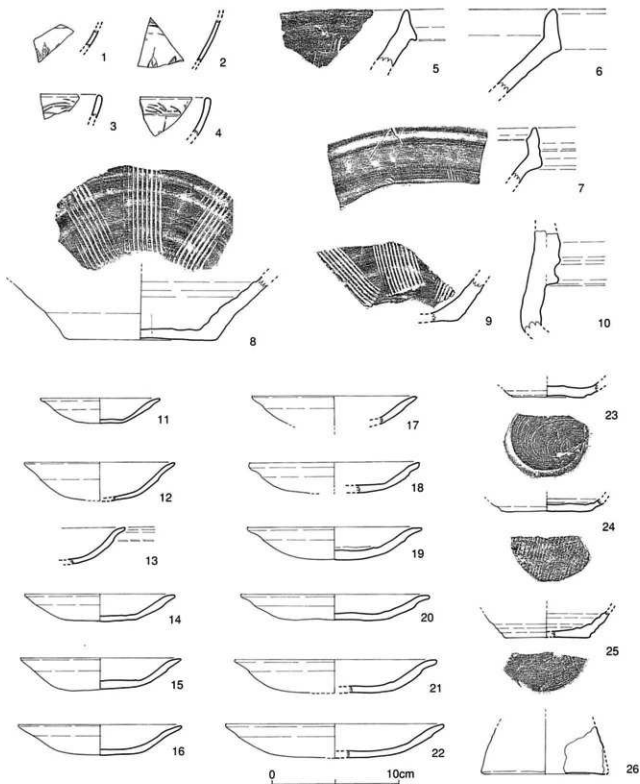
素掘りの井
戸?



SE514 (第192図) 5B区に位置する井戸状遺構である。16世紀前葉の溝SD428、16世紀末葉の溝SD429と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD428→SE514→SD429となる。遺構の平面プランは不整形円形を呈し、その規模は長径3.4m、短径3.1m、深さ1.1m以上を測る。遺構は2段掘りの形状を呈し、埋土中位には拳大の礫が多数出土した。検出面から1.1m掘り下げた段階で多量の湧水が認められ、これ以上の掘り下げを断念している。遺構の形状や湧水の状況から、素掘りの井戸と推定されるが、井戸側や水溜部の構造の詳細を明らかにすることはできなかった。出土遺物には一部SD428やSD429からの混入と思われる資料も認められるが、その大半が16世紀後葉の所産であり、遺構の構築年代も16世紀後葉に比定されよう。

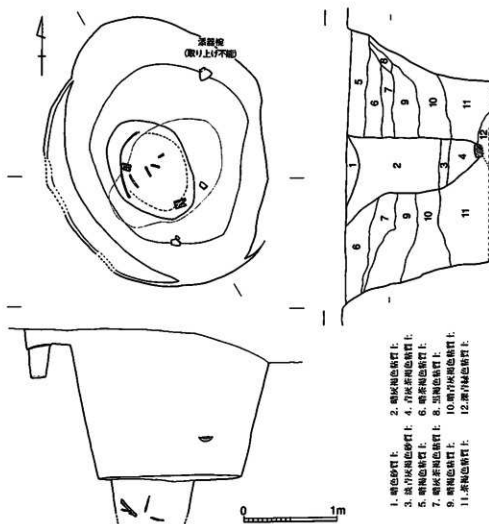
SE514出土遺物 (第193図) 1・2は中国景德鎮窯系青花碗で、C群に比定される製品である。16世紀前葉の所産で、胴部外面下位の文様は芭蕉葉文である。3・4は口縁外面に唐草文を施す青磁碗の口縁部である。15世紀後葉から16世紀初頭前後に比定される。5～9は備前系陶器播鉢で、5は中世4期b(15世紀前葉)、6は中世5期(15世紀後葉)、7は中世6期b～近世1期a(16世紀前葉～中葉)に属する資料であろう。10は備前系陶器大甕の口縁部で、口縁外面に凹線を有するものである。中世6期b～近世1期に比定され、生産年代は1570年代前後を上限とするものである。SD429からの混入品である可能性も考えられる。11～22は京都系土師器皿で、2期の特徴を示

素掘りの井戸か？



第193図 SE514出土遺物実測図 (1/3)

す資料である。23～25は赤褐色系の胎土を使用し、内外面にロクロ目を有する在地産の土師質土器皿である。このうち、24の底部外面には糸切り痕の他に板状圧痕が認められる。26は土師質土器燭台の脚部破片で、京都系土師器と共通する浅黄色系の胎土を使用するものである。底部外面には糸切り痕が認められず、ナデによって仕上げられている。



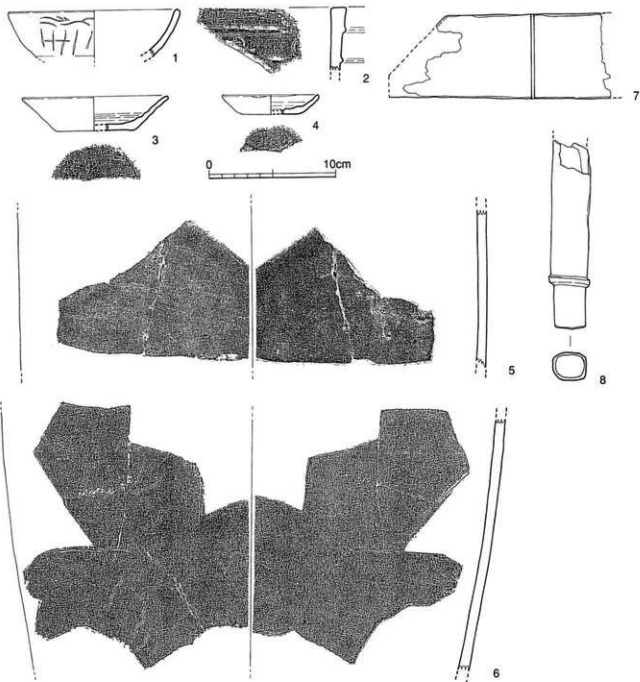
第194図 SE506実測図 (1/40)

SE506 (第194図) 3C区に位置する井戸で、下層遺構群に属する遺構である。遺構の平面プランは略楕円形を呈し、長径2.9m、短径2.1m、深さ1.6mを測る。掘方の底面には長径1.1m、短径0.8m、深さ50cm以上の水溜め部がある。また、検出面の上面には長径1.4m、短径0.95mの桶抜き取り痕と推定される掘方プランが確認され、その最も上位には茶褐色粘質土の堆積が認められた。当該土層は桶抜き取り痕の上面を覆うために意図的に埋設されたものである可能性が高い。水溜め部からは節を抜いた竹の一部が斜め方向に立った状態で出土しており、このような竹を使用した井戸封じの行為が行われていた可能性が考えられる。また、水溜め部の埋土中から結桶のタガの部位が出土していることから、当該遺構は水溜め部に桶を使用した素掘りの井戸であったことが推定される。出土遺物には水溜め部から曲物銅板や節を抜いた竹、結桶のタガや布、掘方埋土中から土器・陶磁器類や漆器碗の破片が出土した。漆器碗については残存状況が不良であったため、取り上げが不可能であった。遺構の構築年代は、15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。

SE506出土遺物 (第195図) 1は15世紀代に比定される中国産の青磁碗である。口縁外面に波状文、胴部外面に退化した蓮弁文を施している。2・5・6は瓦質土器の火鉢で、2は口縁外面の突帯間に巴文を刻印する。3・4は内面にロクロ目が認められる在地系の土師質土器皿である。7は曲物銅板破片、8は井戸封じに使用されたと推定される竹である。8の竹は下端部に加工が施され、節が抜かれている。9・10は中国産の銅銭で、前者は洪武通寶(明・真書・初純年1368年)、

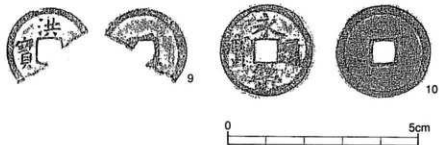
桶抜き取り痕の
上位に意図的
な埋土

竹を使用した
井戸封じ



第195図 SE506出土遺物実測図① (1/3)

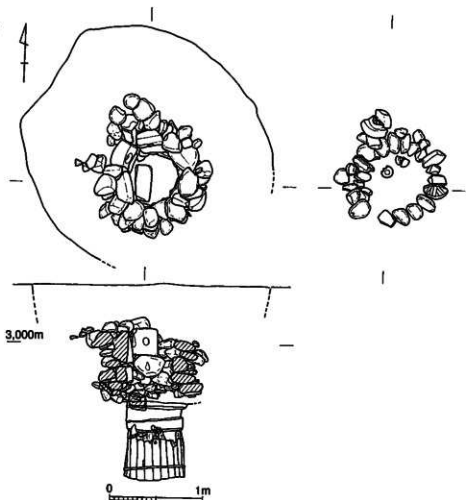
後者は永楽通寶
(明・真書・初
鑄年代1408年)
である。その
他、図示してい
ないが、布や結
桶のタガが出土
している。



第196図 SE506出土遺物実測図② (1/1)

SE503 (第197図) 3

B区に位置する井戸で、下層遺構群に属する遺構である。16世紀前葉の溝SD436、16世紀末葉の集石遺構SX317と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE503→SD436→SX617である。井戸の掘方は径約2.6mの円形を呈し、検出面からの深さは約2mを測る。井筒部の平面プランも

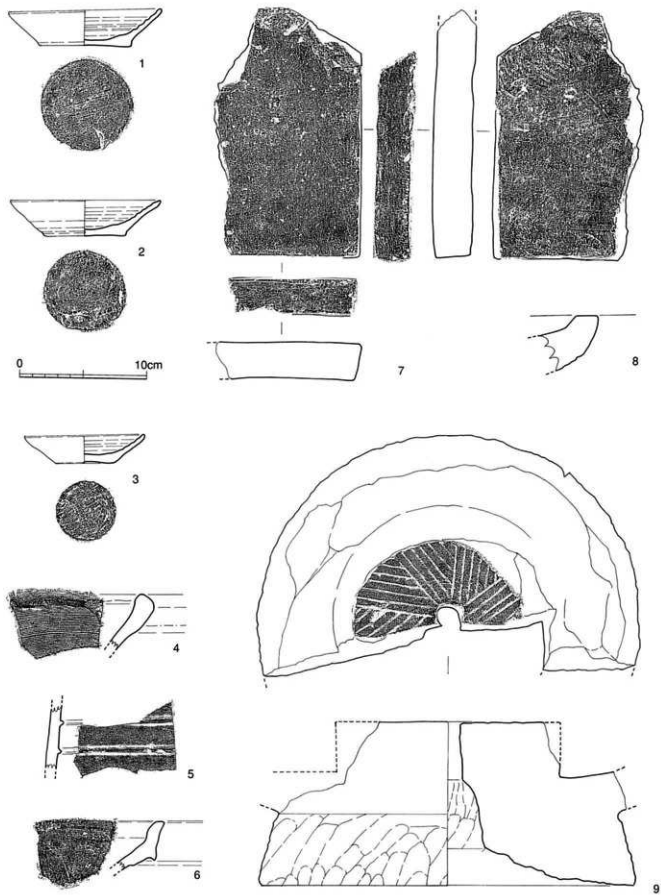


第197図 SE503実測図 (1/40)

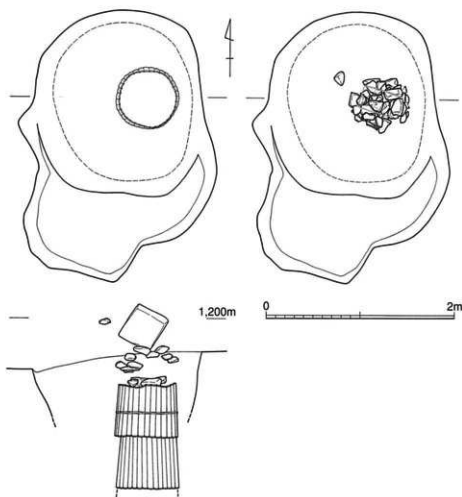
略円形で、その規模は径約50cmを測る。井戸側には頭大から拳大の川原石ともに石塔類の火輪や地輪、石臼等を再利用した石積みが4段程度残存していた。水溜の部位には2段に重ねられた結桶が使用されていたが、残存しているものは下段の結桶1個体のみで、上段のものは腐朽していた。井戸内部からはほぼ完形に復元される土師質土器皿2個体が出土しており、井戸の使用時期を示唆する資料と思われる。出土遺物の年代観から、遺構の構築時期は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。なお、井戸の上位に位置し、16世紀末葉に比定される集石遺構SX617については、この井戸の埋没土の地盤沈下を防ぐための機能をもつ遺構であることは前述したとおりである(130頁参照)。

集石遺構 SX317との関係

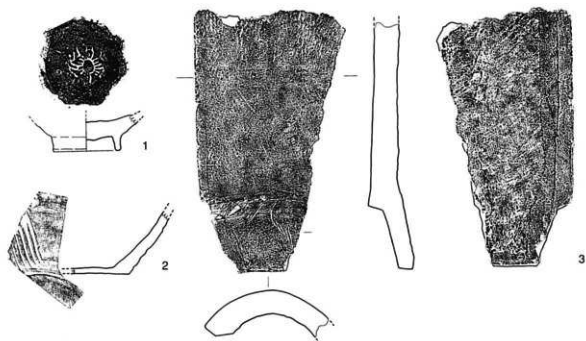
SE503出土遺物 (第198図) 図示した遺物の中で、1・2が井戸内部、他は掘方埋土中または石積み内から出土した資料である。1～3は赤褐色系の胎土を使用し、内面にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿である。いずれも底部外面に糸切り痕が認められる。4は瓦質土器の鉢あるいは搦鉢で、内面に横方向のハケ調整を施す。5は瓦質土器火鉢の胴部で、外面に断面形態が三角形を呈する多条突帯をもつタイプのものである。同種の資料がSD151で出土している(第66図99～101参照)。6は備前系陶器搦鉢の口縁部で、中世5期(15世紀後葉)に比定される資料である。7は埴で、内外面にナデを施す。8・9は石臼の破片で、同一個体である可能性もあるが、接合していない。このうち9については、井戸側の石積みの石材として転用されており、本来の半分程度の大きさに分割され、鈎の部分を意図的に削るなどの加工が行われていた資料である。



第198図 SE503出土遺物実測図 (1/3)



第199図 SE511実測図 (1/40)



第200図 SE511出土遺物実測図 (1/3)

SE511 (第199回) 99C区に位置する井戸で、下層遺構群に属する遺構である。15世紀末葉から16世紀初頭の築石遺構 SX617、15世紀代の溝 SD418と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は SE511 → SD418 → SX633となる。また、これらの遺構は道路状遺構 SF650の下位に存在し、SF650に関連する整地上によって完全にバックされていたことを確認している。井戸の掘方は長径約2.0m、短径1.8mの楕円形を呈し、南側は不整形の土坑と切り合っている。掘方の深さは湧水のため完掘できていないが、約2mを測る。井筒部の平面プランは径約60cmを測る円形である。水溜の部位には結桶が2段以上に重ねられたことを確認したが、湧水のため、これ以上の掘り下げを断念している。井戸の内部には埋土上位に準大の礫が投棄されており、さらにその上位には石塔類の地輪が廃棄されていた。これらの礫群や地輪は、井戸廃棄時の祭祀的な行為に関わるものである可能性が考えられる。このような状態から、当該遺構は水溜部に結桶を設置する素掘りの井戸であった可能性が高い。井戸側には石積みが存在した可能性も考えられるが、上位の遺構の構築時に撤去されている。井戸の内部や掘方埋土中から、青磁や備前系陶器などが出土している。出土遺物からは井戸の詳細な構築時期を確定できないが、遺構の切り合い関係などより、当該遺構の年代は15世紀代に比定される。

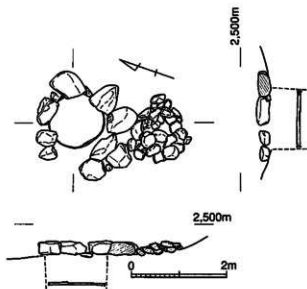
SE511出土遺物 (第200回) 1は中国龍泉窯系青磁碗の底部である。見込みに刻印を有し、外底部は露胎となる。15世紀代の製品であろう。2は備前系陶器插鉢の底部で、5条を一単位とする描目が認められる。3は九瓦の大型破片で、凸面に縄目叩き、凹面に布目痕および糸切り痕(コビキA)が認められる。

SE504 (第201回) 99B区に位置する井戸で、下層遺構群に属する遺構である。15世紀後半代に比定される溝 SD431の底部で検出されており、遺構の切り合い関係は SE504 → SD431となる。井戸の掘方は溝 SD431の構築によって完全に破壊されており、井戸側の最下段の石積みのみが残存していた。石積みには頭大の川原礫が10個程度使用されており、その南側には準大の礫が約30個集積されていた。水溜め部には結桶が使用されていたタガが残存していたが、結桶そのものは抜き取られていた。井戸の底面については、湧水のため、掘り下げを断念している。

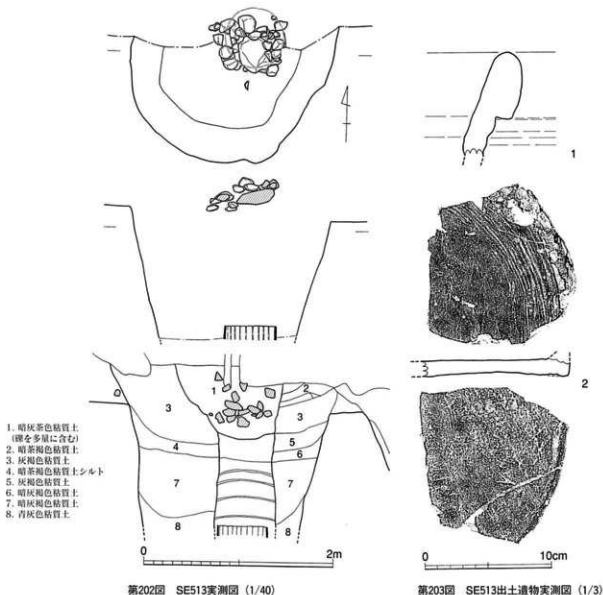
このような状態から、当該遺構は水溜部に結桶を設置し、井戸側に石積みを有する井戸であったことが判明した。出土遺物は認められず、詳細な構築年代は不明であるが、遺構の切り合い関係から15世紀後葉以前の所産と推定される。

SE513 (第202回) 2C～2D区に位置する井戸で、下層遺構群に属する遺構である。16世紀前半葉の溝 SD425と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は、SE513 → SD425となる。井戸の掘方は径約2.1mの円形と思われ、北半部は調査区の制限で未発掘である。井筒部の平面プランは径約60cmの円形である。検出面から1.8m掘り下げたところで、水溜部に使用された結桶を検出した。これ以上の掘り下げを行うと、調査区北壁が崩壊する危険性が考えられたため、井戸底面の確認や結桶の取り上げ等の作業は行っていない。以上の状況から、当該遺構は水溜部に結桶を使用する素

井戸廃棄時の
祭祀的な行為



第201回 SE504実測図 (1/40)

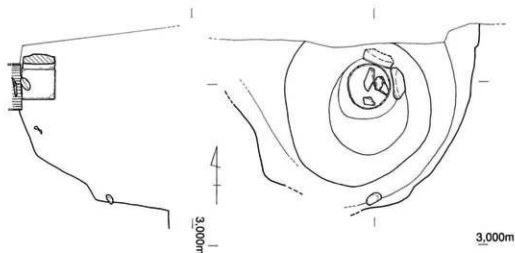


井戸廃棄時の
祭祀的な行為

掘りの井戸であることが判明した。井戸の土層断面を観察すると、水溜め部の桶は2段ないし3段以上が重ねられて使用されており、上から1段目および2段目の結桶は抜き取られている。また、結桶の抜き取りのために掘削した土坑状の掘方を塞ぐような形で、大型の河原礫や拳大の礫を投棄している状況が観察された。これらは井戸廃棄時の祭祀的な行為に関わるものである可能性が高い。出土遺物には備前系陶器大甕や瓦質土器火鉢が認められるが、遺構の詳細な構築年代を確定できる資料ではない。遺構の状態や出土遺物から、当該井戸の構築年代を15世紀代に比定しておきたい。

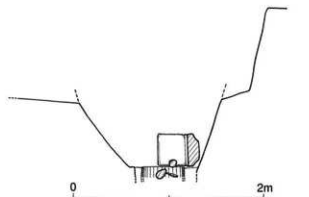
SE513出土遺物 (第203図) 1は備前系陶器大甕の口縁部の破片である。2は瓦質土器で、火鉢の底部と思われる製品である。いずれも詳細な年代を確定できる資料ではない。

SE512 (第204図) 4C~4D区に位置する井戸で、下層遺構群に属する遺構である。井戸の掘方は径約1.6mの円形と思われ、北端部は調査区の制限で未発掘である。井筒部の平面プランは径約45cmの円形である。検出面から1.3m掘り下げたところで、井戸側石積みにも転用された石塔類の地輪と水溜部に使用された結桶を検出した。これ以上の掘り下げを行うと、調査区北壁が崩壊



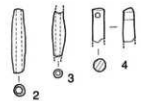
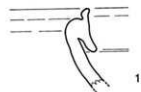
する危険性が考えられたため、井戸底面の確認や結桶の取り上げ等の作業は行わなかった。以上の状況から、当該遺構は水溜部に結桶を使用し、井戸側に石積みを有する井戸であることが判明した。井戸側の石積みには石塔類の部材が転用されていたことも確認できた。出土遺物に常滑系陶器の口縁部破片があり、その形態から井戸の構築年代を14世紀後葉以降に比定できるが、これ以上の詳細な年代を確定することは不可能であった。

石塔類の部材の転用



第204図 SE512実測図 (1/40)

SE512出土遺物 (第205図) 1は常滑系陶器の口縁部破片である。中野晴久⁽¹⁵⁾による8型式に相当する資料で、14世紀後葉の所産である。2は瓦質土器香炉で、口縁部外面に刻印による菊花文を押し出す。現状では詳細な所産時期を確定できないが、15世紀代のものであろうか。3・4は管状土錘、5は有溝土錘である。このうち、5の有溝土錘は古墳時代の遺物と推定される混入品である。



第205図 SE512出土遺物実測図 (1/3)

SE507 (第206図) 1C区に位置する井戸と思われる遺構で、下層遺構群に属するものである。次項で記述する井戸SE510と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE507→SE510となる。周辺地盤の崩壊が生じる可能性が考えられたため、検出面から30cm程度を掘り下げた段階で調査を中断している。掘方の平面プランは円形を呈し、その規模は径2.2mを測る。埋土中の出土遺物から15世紀代の所産である可能性が考えられるが、一部に混入品も認められ、断定できない。井戸であることは間違いないと推定される遺構であるが、その詳細な構築時期については保留しておきたい。

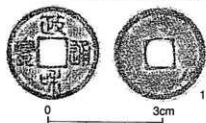
未定層で調査中断

SE507出土遺物 (第207図) 1は中国北宋代の銅銭で、「政和通寶」である。書体は篆書体で、初鑄年代は1111年である。2は土師

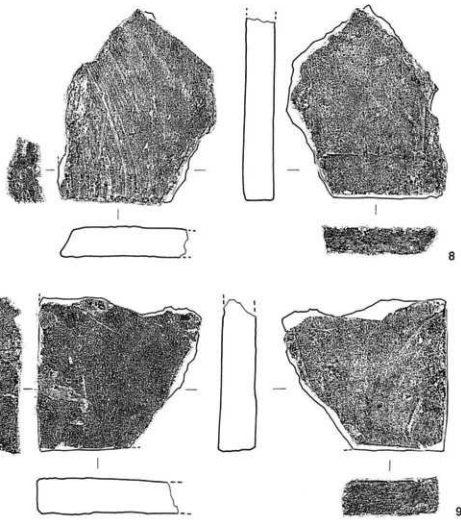
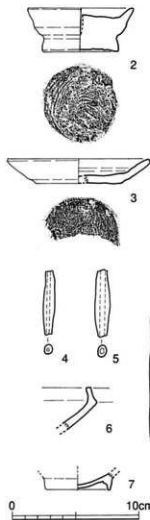
(15) 中野晴久「常滑・源美」〔概説 中世の土器・陶磁器〕真陽社 1995年) 397頁

舞台

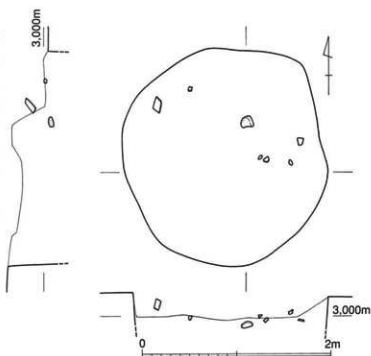
質土器揚台で、底部が厚く、口縁部が外反しながら伸びる形態を呈する資料である。小梅和宏による4類に相当する製品で、14世紀後葉以降に比定されている⁽¹⁶⁾。3は底部外面に糸切り痕を有する在地系の土師質土器皿で、内面にわずかにロクロ目が認められる。4・5は管状土錘である。6は瓦質土器の口縁部で類例が少ないもの



第207図 SE507出土遺物実測図① (1/1)

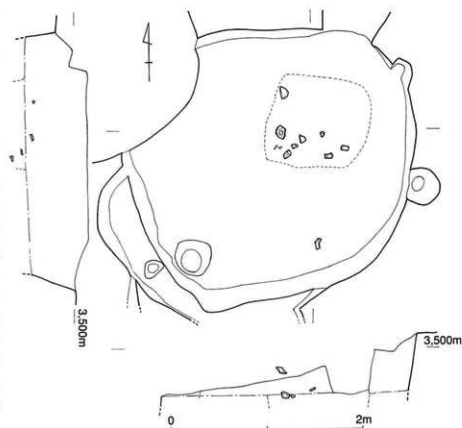


第208図 SE507出土遺物実測図② (1/3)



第206図 SE507実測図 (1/40)

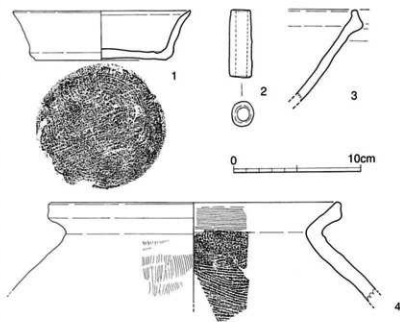
である。鉢の口縁部であろうか。7は瓦質土器塊の底部で、16世紀代に下る製品であるため、混入品である可能性が高い。8・9は埴で、凹凸面にナデを施すが、凸面に相当する部位に糸切り痕を残す資料がある。以上の出土遺物には、14世紀後葉以降の資料と16世紀代に下るものが混在している。



第209図 SE510実測図 (1/40)

SE510 (第210

図) 1C~2C区に位置する井戸と思われる遺構で、下層遺構群に属するものである。前述した井戸SE507と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSE507→SE510となる。この遺構についても周辺地盤の崩壊が生じる可能性が考えられたため、検出面から50cm掘り下げた段階で調査を中断している。掘方の平面プランは径2.8~3.0mの不整形円形で、掘方内部の北西側には平面プランが方形を呈する井筒部(一辺約1m)を検出した。他の調査事例から、方形の井戸枠



第210図 SE510出土遺物実測図 (1/3)

未完形で調査
中断

方形の井戸枠

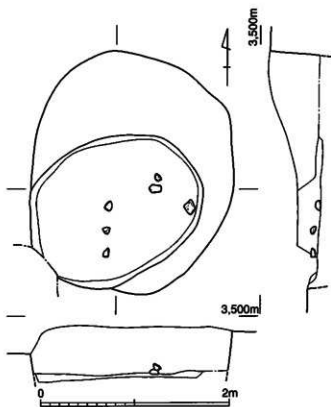
(16) 小柳和宏「灯火具について」(『豊後国田原郡の調査I』 大分県西国東郡大田村教育委員会 1994年) 154~155頁

と推定されるが、未発掘のため最終的な確認ができていない。井筒部の埋土上位から15世紀代に比定される遺物が出土しており、井戸の使用停止の時期を示唆する遺物と考えられる。当該遺構の構築年代は、不確定な要素も多いが、15世紀代に想定しておきたい。

SE510出土遺物 (第210図) 1は断面形態が箱形を呈する在地系の土師質土器坏である。底部には糸切り痕の他に板状圧痕が認められる。15世紀代の所産である。2は管状土鉢であるが、通常のものに比して大きめの孔径をもつ製品である。3は瓦質土器鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、内外面ともにナデ調整が行われている。4は瓦質土器壺の口縁部から肩部の破片で、肩部内外面および口縁内面にはハケメ状の調整が認められる。口縁外面にはナデを施す。以上の出土遺物は、良好な一括資料という評価が可能である。

SE508 (第211図) 1Cに位置する井戸と思われる遺構で、下層遺構群に属するものである。16世紀末葉に比定され、上層遺構群に属する井戸SE505と切り合い関係を有する。遺構の構築順序はSE508→SE505となる。当該遺構についても、検出面から60cm程の掘り下げで調査を中断している。掘方の平面プランは長径2.5m、短径2.1mの不整楕円形を呈する。掘方内部の南西側には長径1.8m、短径1.6mを測る楕円形の掘り込みを確認した。この掘り込みは井戸に使用された石材や結桶等の抜き取り跡の可能性が考えられる。しかし、未発掘のため、これらの事象の最終的な確認ができていないことになる。出土遺物には図示が可能となる良好な資料が認められず、遺構の詳細な構築年代を確定することができなかった。

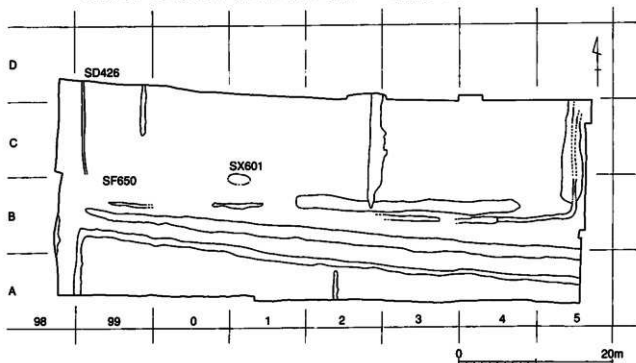
未発掘で調査
中断



第211図 SE508実測図 (1/40)

4. 道路状遺構・その他の遺構

- SF650 概要 本項目では道路状遺構1・道路状遺構に伴うと推定される溝1・その他の遺構1について、記述を行いたい。道路状遺構SF650は調査区北西側で検出されたもので、複数の硬化面を有する砂利敷きの舗装道路である。その幅員は最大幅で6.4m以上の規模をもち、「府内古園」に描かれた第4南北街路の一部に相当する遺構と推定される。SF650は16世紀末葉以前の中世段階に確実に遡る遺構と推定されるが、当該遺構を構成する下位の整地層からの出土遺物が少なく、詳細な構築時期を確定するに至っていない。また、SF650を構成する上位の整地層およびそれに続く東側の整地層には、唐津系陶器をはじめとする17世紀初頭以降の遺物が包含されており、当該道路が近世初頭から前葉にかけて、中世より引き続き使用されていた可能性が高いと考えられる。SD426は道路状遺構SF650に付属する溝で、中世末葉段階のある時期に道路側溝としての機能を果たしていた可能性が考えられるものである。その他の遺構として本項目で取り上げたSX601は、1B~1C区で検出された遺物集中部である。当該遺構は、断片的な所見と出土遺物から16世紀末葉に比定されるものである。以下、それぞれの遺構の詳細について報告したい。
- SD426
- SX601



第212図 第5次調査A区の道路状遺構・その他の遺構 (1/500)

第4南北街路
(幅員10m以上?)

SF650・SD426 (第213・214図) SF650は調査区北西側の98C~99D区で検出された道路状遺構で、「府内古園」に描かれた第4南北街路の一部に相当する遺構である。調査区内で検出されたSF650の規模は、東西約6.4m、南北12m以上を測る。中世段階の道路面では調査区西辺ライン付近に小礫が密集して敷かれている部位が認められ、当該部位が道路中央部付近と想定される。この想定が正しいとすれば、第4南北街路の幅員は10mを超える規模となる。また、平成12年(2000年)度前半期の調査では、SF650の南側に隣接する地点の調査(98B・99B区付近)を行っているが、当該地点の整地層が道路状遺構であるという認識と問題意識がないままに掘り下げを進行させてしまっている。従って、98B~99B区以南の地点における道路状遺構の展開やSF650と積土遺構SX102との関係、およびSF650と集石遺構SX608との関係などについては、正確に記述できない状況である。SF650を構成する整地層は粘質土と砂質土を交互に積み重ねた版築状の土層で形成され、砂質土の上には硬化面が形成されている。また、整地層中には多くの小礫や砂利が意図的に

舗装道路を指向した道路状遺構

混入されており、当該遺構が舗装道路を指向した道路状遺構であったことが想定される。

近世初頭から前葉にかけて、中世より引き続き使用

SF650を構成する土層のうち、粘質土と砂質土を1単位の土層群として把握した場合、少なくとも3単位以上の土層群の堆積が認められる。このうち最上層の土層群やそれに続く東側の整地層には、唐津系陶器や寛永通寶などの17世紀初頭から前葉の遺物が包含されており、当該道路が近世初頭から前葉にかけて、中世より引き続き使用さ

近世段階の道路面

れていた可能性が高いと考える。近世段階の道路面には、道路東側付近に礫が集中する部位が認められ、中世段階と比較して大きめの礫が混入されている傾向がうかがえる。また、詳細な性格は不明であるが、路面の一部には焼土や炭化物が集中する土坑状の広がり（東西60cm、南北90cm）が認められる部位も検出されている。近世段階の路面では道路の境界部を明示する側溝などの構築は認められておらず、道路構築に伴う整地層の平面的な広がりや土層断面から、路面の東端部分を推定している。SF650を構成する土層群のうち、中位から下位にかけての整地層には唐津系陶器などの近世初頭以降の遺物を全く包含しない。従って、SF650構築の初源の時期は16世紀末葉以前の中世段階に遡ると推定される。しかし、当該土層からの出土遺物に良好な資料が少ないため、SF650の構築当初の詳細な時期を確定するには至っていない。中世段階の道路面では調査区西辺ライン付近（道路中央部付近か？）に小礫や砂利を敷きつめている状況がうかがわれ、さらに路面全体にわたって小型の礫を整地層中に混入させている。また、道路面東端ラインの一部には幅40cm、長さ4.2m、厚さ10cm前後の規模で粘土帯が貼られている部位があり、道路東端部を明示する施設であった可能性も考えられる。さらに、中世段階の土層断面からは、版築状の土層を形成する以前に掘り込み事業を構築している可能性が高いことが観察されている（第214図土層図参照）。掘り込み事業に伴う道路状遺構は、中世大友府内町跡第2・3次調査の東西道路や同第4次調査¹⁷⁾の東西道路（名ヶ小路）でも確認されており、中世府内で最も一般的な道路構築法であったことが明らかになりつつある。溝 SD426は29C～99D区に位置し、SF650の中央部を縦断するような形で検出された溝である。遺構の規模は幅25cm、長さ11.5m以上を測る。深さが数cm前後の溝であるため、土層断面図では掘り込み面を確認しにくい遺構であるが、中世段階の路面に伴う施設であることを確認している。出土遺物には良好な資料が認められないが、中世末葉前後のある時期に道路側溝の機能を果たしていた遺構である可能性が考えられよう。

中世段階の道路面

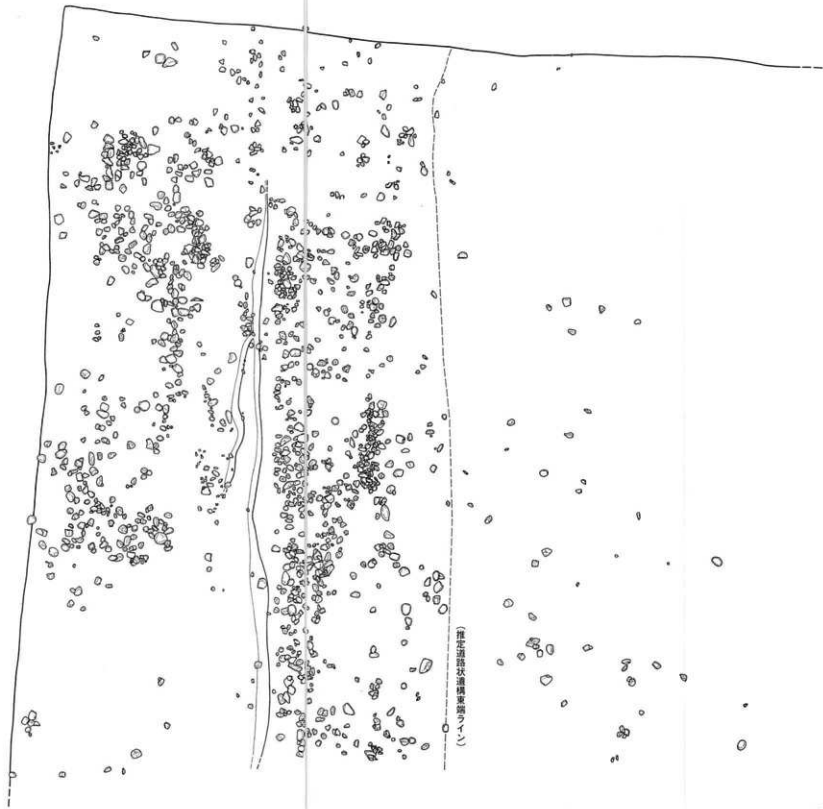
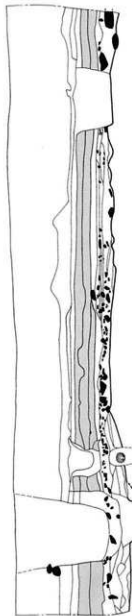


SF650路面礫敷き部分（トレンチ調査時）

SF650出土遺物（第215・216図） 第215図および第216図では、SF650に関連する出土遺物を図示している。このうち、1～13は近世初頭から前葉の道路形成層およびそれに続く整地層からの出土遺物で、14・15は中世段階の道路形成層からの出土遺物である。1は中国景德鎮窯系青花皿で、小野分類E群に分類される製品である。外面に花唐草文、見込みに鶴松文を描き、外底部には二重圏線内に「萬福収同」銘を有する。16世紀後葉の所産である。2は中国産の青磁碗の底部破片で、青磁の釉色は淡青色を呈する。見込みと胴部外面に施釉し、高台周辺および内底部は露胎となる。

(17) 大分市教育委員会「大友府内4～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～」（2002年）

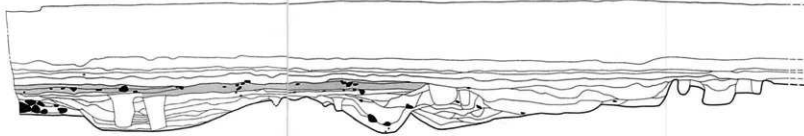
※網掛けは江戸時代初期～
前葉の道路形成土層
※土層の詳細は第9図
土層3参照



(ハケリ遺構等(石垣基部分等))

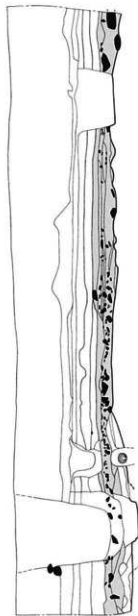
0 4m

※土層の詳細は
第9図土層1参照



第213図 SF650実測図① (江戸時代初期～前葉、1/60)

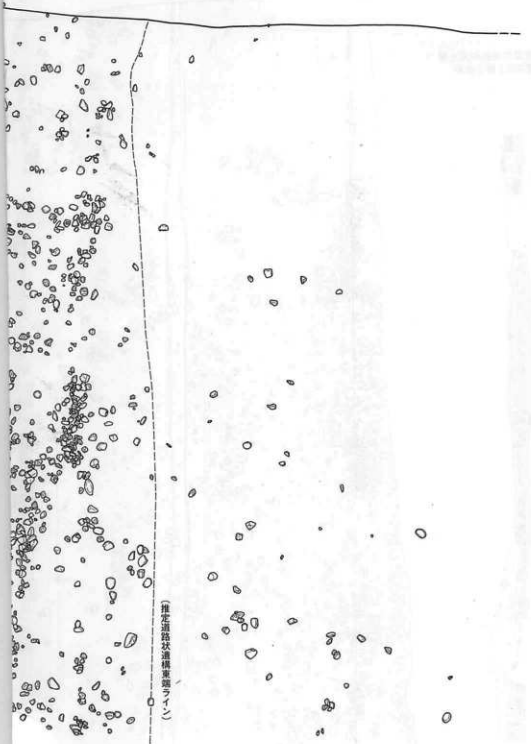
※網掛けは中世末葉の遺跡形成土層
※土層の詳細は第9図土層③参照



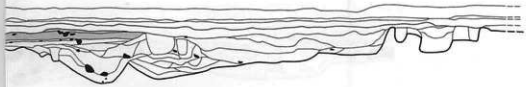
※土層の詳細は第9図土層①参照



第214図 SF650実測図②(中世、1/60)

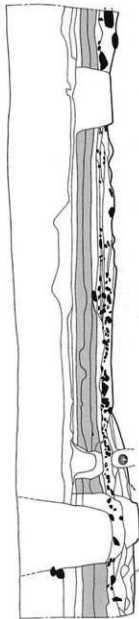


鎌倉道路状遺構断面図(1)

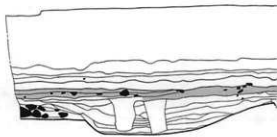


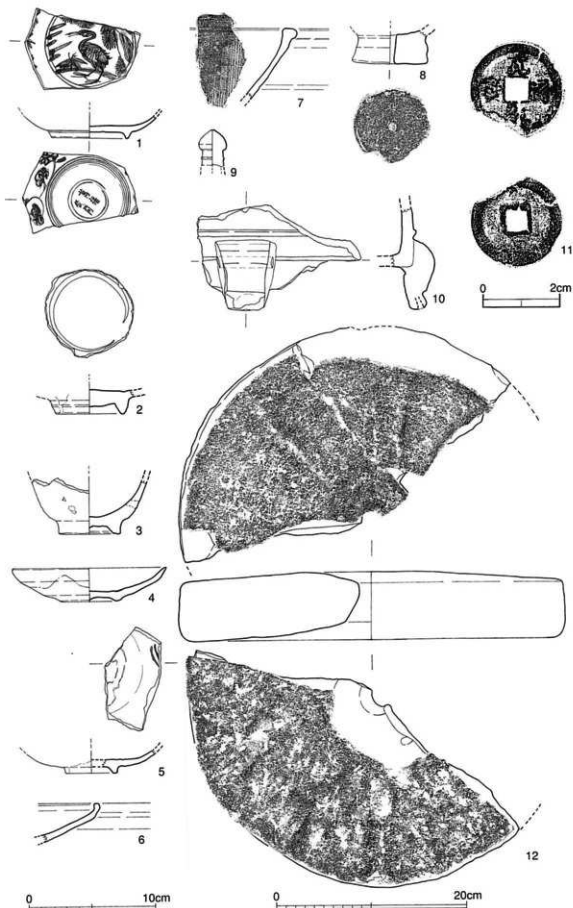
図① (江戸時代初頭～前葉、1/60)

※網掛けは江戸時代初頭～
前葉の道路形成土層
※土層の詳細は第9図
土層③参照



※土層の詳細は
第9図土層①参照

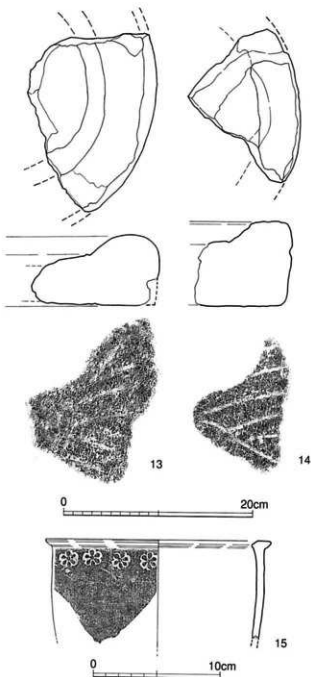




第215図 SF650出土遺物実測図① (1~10は1/3、11は1/1、12は1/4)

高台および見込み部分のみを残して、周辺部に意図的な再加工が施されている製品である。3は産地不明の陶器碗の底部で、朝鮮王朝産か唐津系陶器の製品と推定されるが、いずれであるかの判断が難しいものである。内外面には淡黄褐色を呈する透明釉が施され、高台登付部や内底部を含めて施釉されている。胴部下半に貫通する小孔があり、意図的なものではない可能性が高い。このままでは使用時に水漏れするため、不良品と考えられる製品である。17世紀初頭以降の製品であろうか。4は唐津系陶器皿で、内面および胴部外面上半部に灰釉が施される。胴部外面下半および外底部は露胎となる。見込みに胎土目が認められることから、16世紀末葉から17世紀初頭（1590～1610年代）の所産である。5は唐津系陶器鉄絵皿で、見込みに砂目が認められる製品である。内面には鉄絵文様の一部が描かれ、胴部外面下半および外底部は露胎となる。17世紀初頭から前葉（1600～1630年代）の製品である。6は唐津系陶器鉢の口縁部破片で、内外面に灰オリブ色の釉を施す。図示した口縁部の破片の他に、同一個体と推定される胴部破片が出土している。17世紀初頭から前葉の製品である。7は中国南部産と推定される縮輪陶器摺鉢である。口縁部の破片で、内面には7条程度を一単位とする櫛状工具を使用して摺目が施されている。

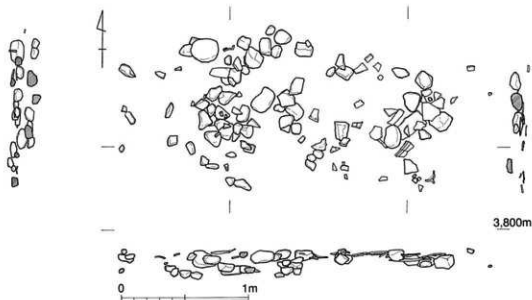
8は土師質土器の燗台で、脚部の孔は貫通する。赤褐色系の胎土が使用され、底部外面には糸切り痕が残る。脚部の長さが短いものであることから、15世紀代の製品と推定されるもので、混入品であろう。9は瓦質土器のつまみで、宝珠状の形態を呈するものである。外面は丁寧にナメ仕上げされており、焼成も良好で、硬質である。類例が少ないものであるが、蓋のつまみであろうか。10は瓦質土器火鉢の底部付近の破片である。脚部が残存しており、脚部中位には横方向の貫通孔、脚端部には火鉢を固定するための小孔が認められる。11は寛永通寶である。「寶」字の形態から、古寛永（初鑄年代1636年）に分類される資料である。12～14は石臼の破片である。いずれも摺目が著しく磨り減っており、石臼としての機能を果たさなくなるまで使用された後に分割され、整地層中に廃棄されたものと推定する。いずれも凝灰岩製の製品である。15は瓦質土器火鉢で、L字状に屈曲する口縁部を有する。口縁部直下の胴部外面には、刻印による梅花文を施す。16世紀末葉に比定される製品である。



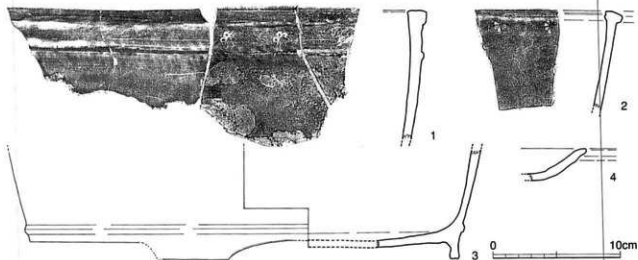
第216図 SF650出土遺物実測図② (13・14は1/4、15は1/3)

中国南部産
焼輪陶器摺鉢

寛永通寶
(古寛永)



第217図 SX601実測図 (1/30)



第218図 SX601出土遺物実測図 (1/3)

遺物集中部

SX601 (第217図) 1B・1C区の境界部分で検出された遺物集中部で、上層遺構群に属する遺構である。東西2.7m、南北1.1mの範囲に礫や瓦質土器火鉢・京都系土師器などの遺物が集中して出土している。礫や遺物の周辺に掘方などは検出されていない。出土遺物の年代観や層位的な所見から、16世紀末葉に比定される遺構である。

SX601出土遺物 (第218図) 1・2は同一個体と推定される瓦質土器火鉢である。口縁端部と胴部外面上位に断面台形の突帯を貼り付け、突帯間には梅花文を刻印する。底部には板状の脚部を有する。16世紀末葉の製品である。3も瓦質土器火鉢で、T字状を呈する口縁部をもつ。口縁外面直下には菊花文を刻印する。4は京都系土師器皿で、2期に分類される製品である。16世紀後葉に比定される。

5. 包含層・整地層出土遺物

概要 本項目では、遺構以外の包含層整地層から出土した遺物のうち、残存度の高いものや注目すべきものを選別して報告する。また、柱穴やピットから出土した遺物の中で注目すべきものについても、便宜的に本項目で記述を行いたい。報告すべき資料は多数におよぶが、紙幅の関係から、図示できた遺物は報告者が特に重要と判断した少数の資料に留まる。

中国景德鎮
窯系青花

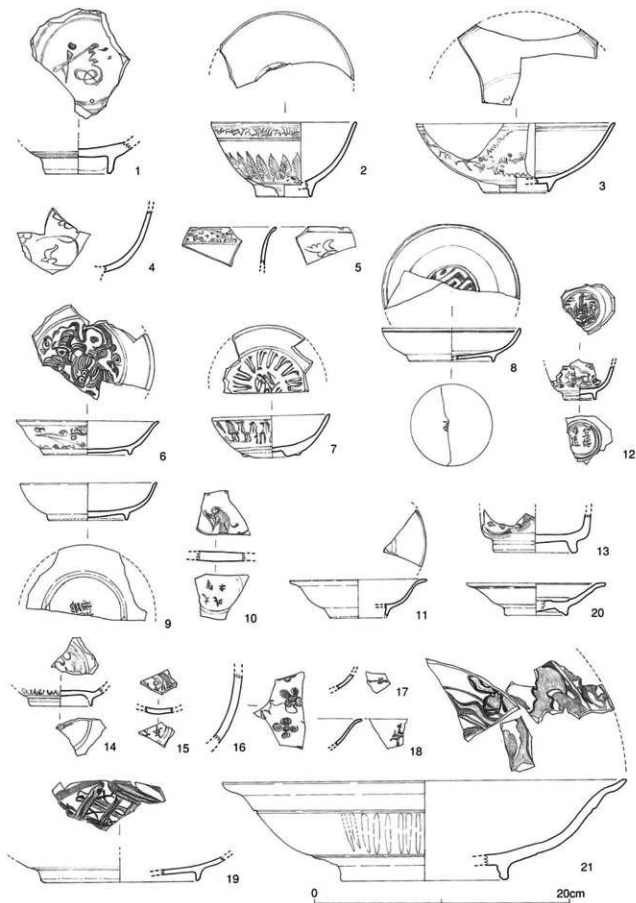
陶磁器類(第219~227図) 第219図1~13には、中国景德鎮窯系青花を図示した。1はB群青花碗の底部で、口縁部を欠損する。やや高さの高い高台を有し、見込みに二重圏線内に「福」字を描く。15世紀代の製品である。2は蓮子碗と通称されるC群青花碗で、口縁外面に波濤文、胴部外面に芭蕉葉文を描く。見込みの文様は欠損のため、不明である。3もC群青花碗で、胴部外面と見込みに梅樹文を描く。2・3とも16世紀前葉の製品である。4・5は外面に毛彫り文様を有する青花碗で、5の口縁内面には四方標文が描かれる。16世紀前葉の製品である。6はB1群青花皿で、外面に唐草文、見込みに崩れた獅子文あるいは龍文を描く。7は荷筒底を呈するC群青花皿で、外面に梵字文、見込みに「福」字と梵字文を描く。いずれも16世紀前葉の製品である。8はE群青花皿で、外面は口縁端部の圏線を除いて無文となり、見込みに圖案化した「壽」字、外底部に「福」字を描く。16世紀後葉の所産である。9もE群青花皿で、内外面とも無文となるが、外底部に「富貴佳器」銘が描かれる。10もE群青花皿と思われる見込み部分の破片である。内面(見込み)に人物文が描かれ、外面(内底部)には二重圏線内に「大明洪武年造」銘が認められる。11は口縁部が外反する器形を呈する青花皿で、見込みに二重圏線が描かれている。12は小坏で、口縁端部が外反する器形を呈する製品と推定されるが、当該部位が欠損している。外面に魚藻文(?)、見込みに山水文を描き、内底部には「宣徳年造」銘が認められる。16世紀代の製品である。13は胴部下半と高台部の破片で、青花の鉢と思われる製品である。16世紀代の所産である。14~15は中国産の五彩である。14はE群碗(燂頭心碗)の器形を呈するもので、内底部には銘款の一部が認められるが、その詳細を読み取れない。15もE群碗(燂頭心碗)の見込み部分の破片である。内面(見込み)には見文、外面には二重圏線に銘款(「大明年造」か?)が描かれている。14・15とも16世紀後葉の所産である。16は瓶の胴部破片と思われる、16世紀代の製品である。後述する唐津系陶器鉢(第226図2)と同一層位で、至近の位置から出土している。17・18は同一個体で、薄手の胴部に外反する口縁をもつ皿である。二次的な被熱を受けているためか、外面文様は本来の色彩を失っており、黒ずんだ色になっている。19はやや大型の皿で、文様の大半は呉須で描かれているが、外面圏線の一部と見込み部分の圏線の一部が赤絵で描かれている。20・21は中国漳州窯系青花の製品で、いずれも16世紀末葉の所産である。20は皿で、口縁部が外反する器形を呈し、口縁内外面と胴部下半に圏線を描く。見込みは蛇の目軸刺ぎとなる。21は大型の皿あるいは盤で、外反する口縁をもち、胴部外面には鎗が施されている。第220図1~8には中国産の青磁を図示している。1・2は龍泉窯系の製品で、1は小型の香炉、2は碗の底部である。2の見込みに、刻印による文様を施している。3は青磁の皿であるが、類例の少ない製品である。胴部上半と内面に青磁釉を施し、胴部下半と高台周辺は露胎となる。4も青磁皿で、口縁部は輪花を呈し、内底部が露胎となる。3・4については中国産ではあるが、龍泉窯系以外の製品である可能性が考えられる。26は口縁部が輪花となる青磁皿であるが、内底部は透明釉が施され、裏白となっている。中国景德鎮窯系の製品で、16世紀代に比定される製品であろう。6は中国龍泉窯系青磁瓶で、頸部の破片である。把手部分が剝離した痕跡が認められる。7・8も龍泉窯系青磁の製品で、瓶類の把手あるいは不連続の一部と思われる。9~13は中国産の白磁である。9は類例の少ない製品であるが、外面に退化した蓮弁様の文様を施す白磁碗である。10は白磁皿の底部で、見込みと内底部が露胎となる。内底部には

五彩

中国漳州窯系
青花

青磁

白磁



第219図 包含層・整地層出土遺物①(青花・五彩 1/3)

磁州窯系陶器

使用時に施したと推定される朱点が3点残存している。11は白磁皿で、口縁部が外反し、高台周縁と内底部が露胎となる。見込みには印花による文様が認められる。森田勉分類によるB群に属する製品である可能性が高く、14世紀代に比定される。12は白磁水注の蓋で、型押し（印花）によって製作されている。外面にリング状の小環が貼付されていた痕跡が認められるが、すでに剥落していた。13～14世紀代の製品である。13は白磁の小坏で、見込みが蛇の目軸割きとなる。16世紀代に比定される。14・15は中国磁州窯系陶器の製品である。14は獅子形湯台で、獅子頭部の鬚と右目が鉄絵によって描かれている。根津美術館所藏品や山口県大内氏館跡の出土資料と極めて類似する資料である。また、本調査区のSK053からも類品（第124図1、116頁）が出土している。15は白地鉄絵龍鳳凰文壺の胴部破片で、鳳凰文の羽の部位と思われる文様が鉄絵によって描かれている。13世紀後半から14世紀代の製品である。大分県教育委員会が実施した中世大友府内町跡第26次調査や若宮八幡宮遺跡、また大分県教育委員会が実施した中世大友府内町跡第10次調査でも類品が出土している⁽¹⁸⁾。府内町跡第26次調査や若宮八幡宮遺跡の出土例は約500m離れた地点で出土した破片が接合した事例である。また、府内町跡10次調査出土資料も、府内町跡26次や若宮八幡宮遺跡出土資料と同一個体である可能性が考えられる。15が出土した府内町跡5次調査A地区は、府内町跡10次や26次調査地点と近接した距離に位置するため、当該資料もこれらの一連の資料と同一個体である可能性を考えておきたい。16～28は中国産と推定する黒軸・褐軸陶器を图示した。16は壺類の蓋と推定される製品で、外面に灰軸が施され、内面は露胎となる。17～19も蓋で、口縁外面と内面に黒軸が施され、胴部外面以下は露胎となる。18・19は近接した地点で出土した同一個体と推定されるものであるが、口縁内面には型押しによる成形された記号様の文様が貼付されている。類例が沖縄県首里城⁽¹⁹⁾で出土しているが、首里城の資料には記号様の文様が認められないようである。また、大友府内町跡では13次調査で、同様な製品が出土しているようである。中国南部産と推定される黒軸陶器四耳壺類の中に、当該製品と一致する口径をもつものが存在することから、17～19は黒軸陶器四耳壺類とセットになる蓋と考えている。20は器種不明であるが、黒軸陶器皿と考えた製品である。内面のみに黒軸が施され、外面は露胎となる。また、見込み部分には鉄絵によって、「福」字が描かれている。21は中国産の黒軸陶器碗で、内面と胴部下半まで黒軸が掛かる。胴部下半以下は露胎となる。22は瓶と思われる施軸陶器で、詳細な産地が不明のものである。胴部に沈線状の段を有する。二次被熱のため、器表面が荒れており、軸の状況を詳細に観察できない状態である。23は褐軸陶器の底部破片で、内外面に褐軸を施し、底部外面付近は露胎となる。24は褐軸陶器の把手と推定される製品で、外面に3条の凹線が施されている。25・26は同一個体と推定されるもので、皿として图示したが、上下逆となって蓋である可能性も考えられる製品である。口縁内面に小さな突帯を巡らし、外面と口縁内面に黒軸を施す。胴部内面は露胎となる。27は褐軸陶器茶入れの底部破片である。内外面に褐軸を施し、露胎となる底部外面には左回糸車切り痕が認められる。胎土は暗褐色を呈する。28は褐軸陶器壺の胴部付近の破片を再加工した陶器片加工品である。外面のみに褐軸が施され、内面は露胎となる。また、内面にはクロコ成形時の横ナデ痕が残っている。

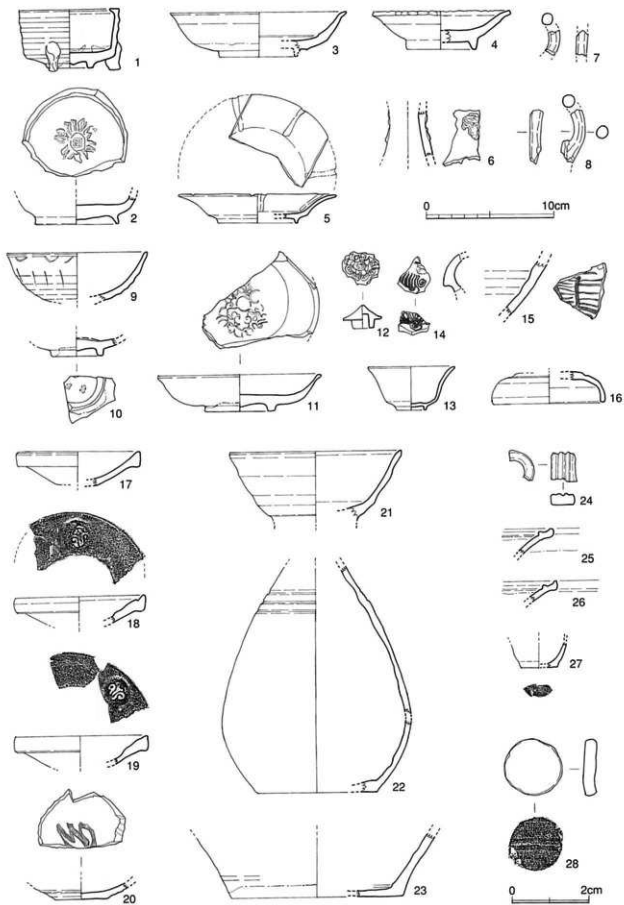
黒軸・褐軸陶器

第221図1～16では、中国南部産と推定される焼締陶器を图示した。1～5は焼締陶器搦鉢で、口縁部が玉縁状になるもの（1・2・4）やし字状に屈曲するもの（5）、内面に張り出した玉縁状を呈するもの（3）などのバリエーションがある。6・7は焼締陶器壺の口縁部で、同一個体と推定されるものである。やや湾曲する頸部と断面が略三角形を呈する口縁部をもつ。8は小破片であるが、焼締陶器蓋の口縁部と推定されるものである。他の調査地点からの出土事例を参照すると、外反す

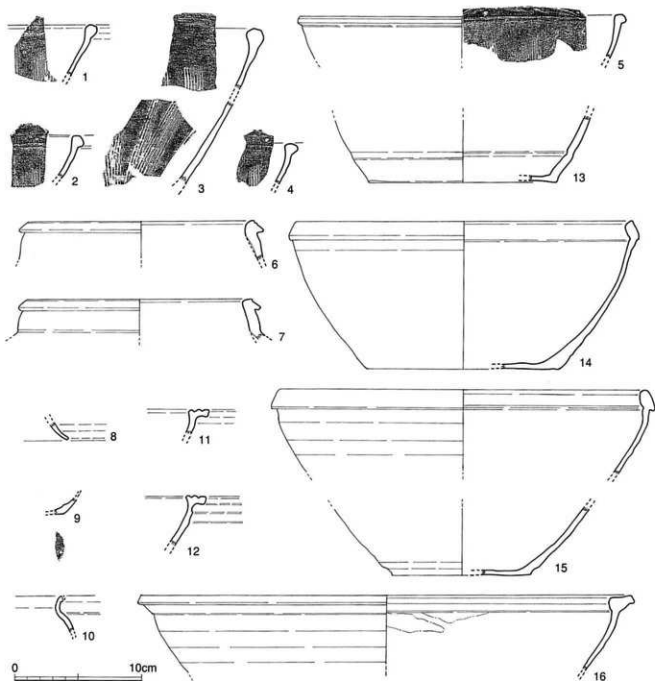
焼締陶器

(18) 大分県教育委員会五十川雄也・上野卓也、大分県教育庁埋蔵文化財センター田中裕介、各氏のご教示による。

(19) 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡」（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集 2001年）第514頁・18、82頁



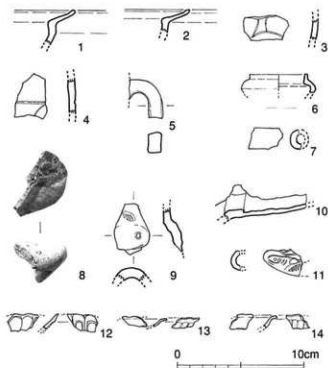
第220図 包含層・整地層出土遺物②(青磁・白磁・中国陶器 1/3)



第221図 包含層・整地層出土遺物③ (中国南部産焼締陶器 1/3)

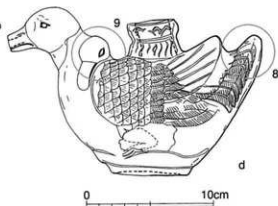
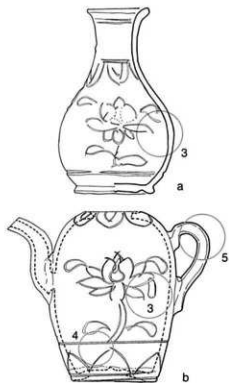
る口縁部に平坦な天井部を有する器形に復元される資料と推定される。類例の少ない資料と思われるが、今後確実に出土事例が増加するものと想定されることから、敢えて図示を行った。9・10は焼締陶器小壺で、前者は糸切り痕が残る底部破片、後者は口縁部の破片である。11～16は焼締陶器鉢である。このうち、11・12はA類、14・15はC類に分類される製品で、また13は底部の大型破片である。16は器壁の厚いT字状の口縁部を有するもので、内面に薄い褐釉を施している。当該資料も類例の少ないものであるが、胎土や焼成の状況から、他の焼締陶器鉢と同様の産地の製品と推定される。第222図1～14では、華南三彩の製品を図示した。1・2は華南三彩盤の口縁部で、同一個体と推定される資料である。端部を内側に折り返す口縁部をもち、内外面に緑釉を施してい

華南三彩



第222図 包含層・整地層出土遺物④(華南三彩 1/3)

る。森村健一による(C)類⁽²⁰⁾、伊野近富による丸形鈎緑タイプⅡ類⁽²¹⁾に属する製品で、16世紀中葉の産品である。3は華南三彩の胴部小片で、外面に刻花による文様の一部が認められ、緑釉・黄釉が施されている。熊本県浜の館跡⁽²²⁾出土の完存品(第223図a・b)等を参照すると、瓶あるいは水注の胴部破片であることが推定される資料である。4・5は緑釉が施されている胴部破片と把手で、浜の館出土品(同b)から、前者は水注⁽²³⁾の胴部下半部の破片、後者は把手の破片であることが判明する。6は柑子形水注の口縁部と推定される破片で、外面に緑釉が施されている。これも浜の館出土品に類例(同c)がある。7・10は水注の筒部である可能性が考えられる破片資料である。8・9は鴨形水注の破片で、前者は尾部、後者は子鴨の顔部の部位に相当する。浜の

第223図 華南三彩参考資料
(熊本県浜の館・註(22)文献より引用 1/3)

(20) 森村健一「畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器—新政権成立を契機とする新輸入陶磁器の採用—」(『貿易陶磁研究』No11 1991年)

(21) 伊野近富「京都府庁出土の華南三彩壺を中心に」(『東洋陶磁』vol.19 1992年)

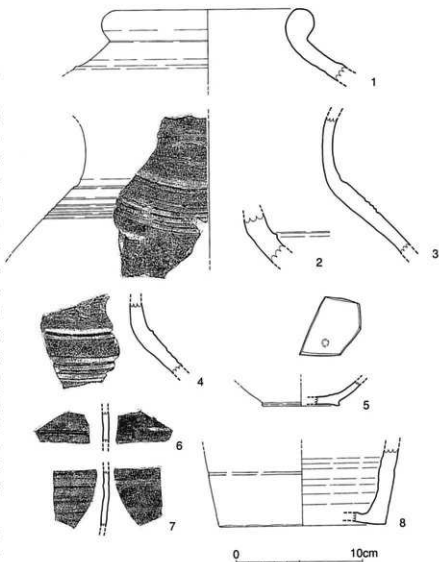
(22) 熊本県教育委員会「浜乃館」(熊本県文化財調査報告第21集 1977年)

(23) 浜の館跡出土品と同類の資料が、富山県富山佐藤美術館関コレクション中にも所蔵されている。ただし、関コレクション藏品では胴部下半部の蓮弁文が施されていない。

山口県立萩美術館「フィリピンにわたった焼きもの—青磁と白磁を中心に—」(2000年) 83頁, No188

館(同d)のほか、福岡市美術館本多コレクション蔵品中にも類例²⁴⁾が認められる。11は鳥形水滴の尾部の破片である。外面に緑軸が施され、羽毛の表現が認められる。12~14は型打ち成形によって製作された小型の皿で、79は緑軸小皿、80・81は青軸小皿である。緑軸小皿と青軸小皿で、器形や文様の細部が異なっていることが観察される。第224図では、東南アジア産の陶磁器を图示した。1~4はタイ産メナムノイ窯系統締締陶器四耳壺である。图示した破片のすべてが無頸四耳壺に分類され、16世紀中葉から後葉に比定される

東南アジア産
の陶磁器



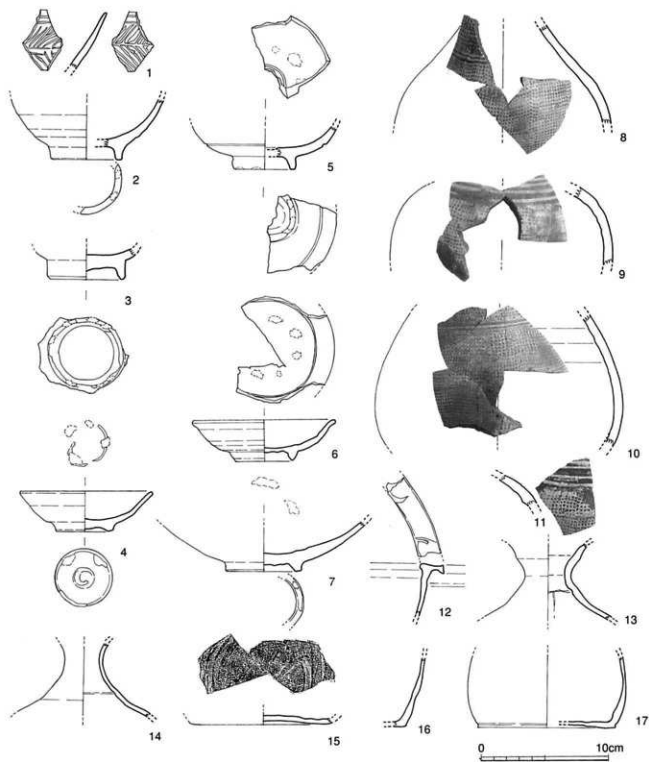
第224図 包含層・整地層出土遺物⑤(東南アジア産陶磁器 1/3)

る製品²⁵⁾である。4は北部ベトナム産白磁碗である。外底部は露胎となり、内面には目跡を残す。6~8は中部ベトナム産焼締陶器長脚壺で、いずれも16世紀中葉の所産である。6・7は同一個体と思われる破片で、色調は赤褐色を呈し、内面にロクロ成形時のナデ調整が顕著に認められる。89はやや厚めの器壁をもつものであるが、胎土が糞状を呈し、外面に沈線状の段が認められる底部破片である。第225図では、朝鮮王朝産の陶磁器を图示した。1は「影三島」と呼ばれている高麗茶碗の口縁部破片である。内外面に象嵌技法による楡垣文が見られる。影三島は慶長年間(1596~1612)前後に日本側からの注文によって朝鮮半島南部で焼成された高麗茶碗といわれている。本資料は唐津系陶器などが共存する整地層中からの出土で、上記の年代と矛盾しない考古学的な所見が得られている。中世大友府内町では影三島の出土数が増加しており、現状で報告者が把握しているだけでも5次・9次・10次・13次・34次の各地点から6個体以上の出土が確認されている。2は琵琶色に発色する軸を内外面および内底部に施軸する碗である。高台畳付部に目跡が認められる。3は灰青軸陶器碗の底部破片で、高台端部に目跡をもつ。4は灰青軸陶器皿で、見込みと高台端部に

朝鮮王朝産の
陶磁器

(24) 福岡市美術館「交趾焼展-インドネシア・スラウェシ島に渡った三彩-」(2001年)44頁、No.8

(25) 向井互「タイ黒褐軸四耳壺の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.23 2003年)



第225図 包含層・整地層出土遺物⑤ (朝鮮王朝産陶磁器 1/3)

目跡が認められる。4については二次被熱を受けている可能性が考えられ、器表面が荒れている。5～7は白磁で、5は碗、6・7は皿である。これらも見込みや高台端部に目跡があり、また6の見込みには鏡が形成されている。8～11は瓶で、外面に象嵌技法による列点文が認められる。15世紀代の製品である。12は鉢で、口縁上面に貝目の痕跡が認められる資料である。13～17は舟徳利と呼称される瓶類である。

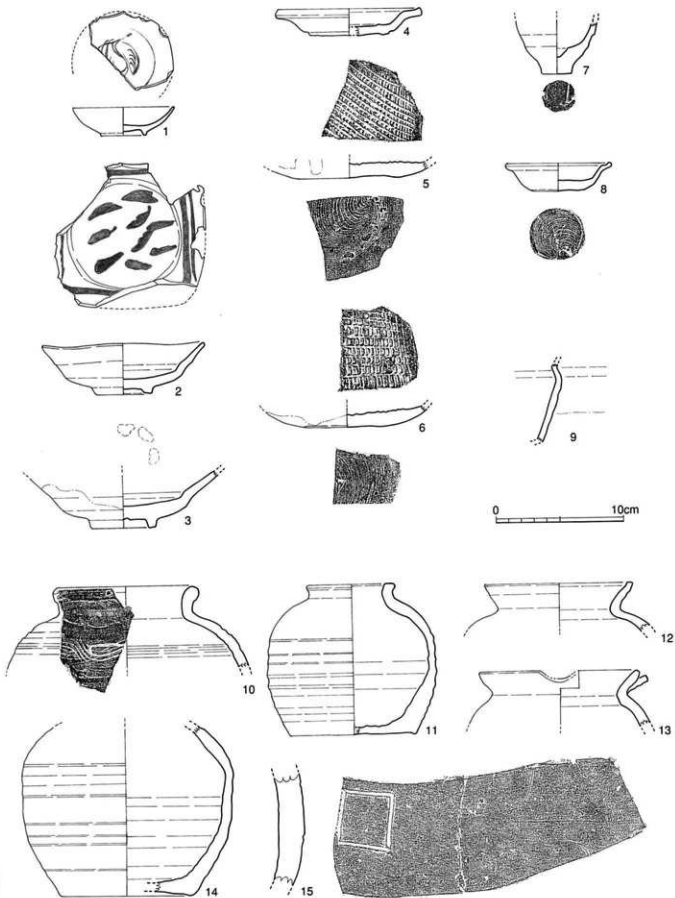
国産の陶磁器類

第226・227図には、国産の陶磁器類を図示した。1は肥前産の染付（初期伊万里）皿で、内面に鴛文を描く製品である。1630～50年代の所産である。2は唐津系陶器鉢で、内面に鉄絵文様が認められる。平面形態が隅九方形を呈する器形で、絵唐津向付とも呼称される製品である。中世遺構群の上面を覆う整地層中からの出土で、至近の距離から中国産の五彩瓶の破片（第219図16）が出土している。16世紀末葉から17世紀初頭（1590～1610年代）に比定される。3は見込みに砂目が認められる唐津系陶器皿で、内面および胴部上半部以上に灰釉が施されている。胴部下半以下および高台周辺は露胎となる。17世紀初頭から前葉（1600～1630年代）の製品である。以上で図示したものの他にも唐津系陶器の破片が多数出土しているが、それらはすべて中世遺構群の上面を覆う整地層中からの出土である。4～8は瀬戸美濃系陶器である。4は折縁皿で、器高が低く扁平な印象を与えるものであることから、大室4期末（16世紀末～17世紀初頭）²⁶⁾に比定される資料である。5・6は御皿で、内面にヘラ描きによる御目、底部外面に右回転の糸切り痕が認められる。胴部外面には淡緑色の灰釉が施されている。7は深手の小型鉢、8は小皿で、いずれも底部に糸切り痕が認められる。古瀬戸段階の製品である。9は志戸呂系陶器の天目碗と推定される製品である。内面と胴部外面下半以上には、やや薄目の茶褐色釉が施され、胴部外面下半以下は露胎となる。胎土はやや暗めの暗褐色である。志戸呂系陶器の天目碗は、瀬戸美濃系陶器や中国産の天目碗と比較して非常に出土数の少ないものであるが、中世大友府内町跡では他に5次B区や8次調査でも出土例がある。10～23は備前系陶器である。10～14は壺で、このうち10の肩部には縞描波状文が施され、13の口縁部には注口が認められる。15は大甕の胴部と思われる大型破片で、外面には四角形のヘラ記号が施されている。16～21は小型の壺である。このうち16の肩部には小さな貫通孔をもつボタン状の把手が付されており、20には胴部と底部に、21には底部にヘラ記号が認められる。また、20・21は糸切り底となっている。22・23は水屋甕で、いずれも16世紀後葉から末葉に比定される整地層中から出土した破片が接合している。

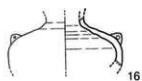
志戸呂系陶器
天目碗

土師質土器・瓦質土器（第226～233図） 第228・229図には、土師質土器を提示した。1～4は0A区の下層遺構に属する柱穴SD651から一括出土した土師質土器皿である。いずれも赤褐色系の胎土を使用し、底部に糸切り痕を有する在地系のものである。1の内外面はナデ調整が行われ、ロクロ目が残存しないが、他の資料には内面あるいは内外面にロクロ目が認められる。なお、3の底部外面の糸切り痕は左回転となっている。5も在地系の土師質土器皿で、このタイプの中では最も小さな口径となる資料である。赤褐色系の胎土を使用し、内面にはロクロ目が認められる。6・7は天井部に棒状のつまみを有する土師質土器の蓋である。この蓋とセットになる製品は、現状では不明である。このうち、6は京都系土師器あるいは焼塩蓋の胎土や器形と共通点の多いものである。8・9は手捏ね成形によって製作された耳皿で、これらも胎土や色調が京都系土師器のそれと共通する。10・11は極めて薄い器壁によって製作された京都系土師器皿で、3A区の整地層から出土した。この整地層は15世紀末葉から16世紀初頭に構築された溝SD404を完全に埋設しており、当該資料はいずれも京都系土師器1期あるいは1期に先行する型式に属する資料であろう。12は小型の羽釜で、内外面が「丁」にナデ仕上げされている。現状では残存部に外面に煤等の付着は認められない。13～23は土師質土器の燗台である。このうち13～20は赤褐色系の胎土を使用し、底部に糸切り痕を有する在地系の製品である。21～23は浅黄色系の胎土を使用し、底部をナデ仕上げするので、京都系土師器の胎土・色調と共通する製品である。なお、21の底部外面には匠痕が認められるが、匠痕の原体は不明である。24はフィゴの羽口で、残存部の下半部が強く被熱している。25～

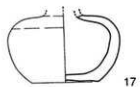
(26) 藤沢良祐「瀬戸・美濃大室編年の再検討」〔財団法人瀬戸市文化財センター研究紀要〕第10集（2002年）



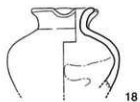
第226図 包含層・整地層出土遺物⑦ (国産陶磁器 1 1/3)



16



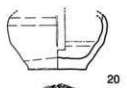
17



18



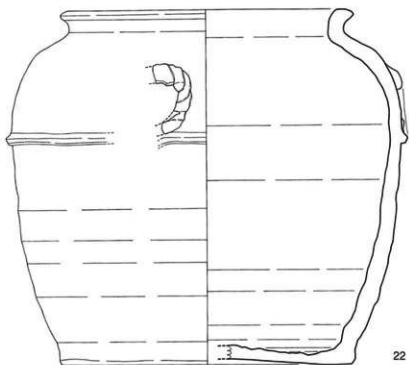
19



20



21



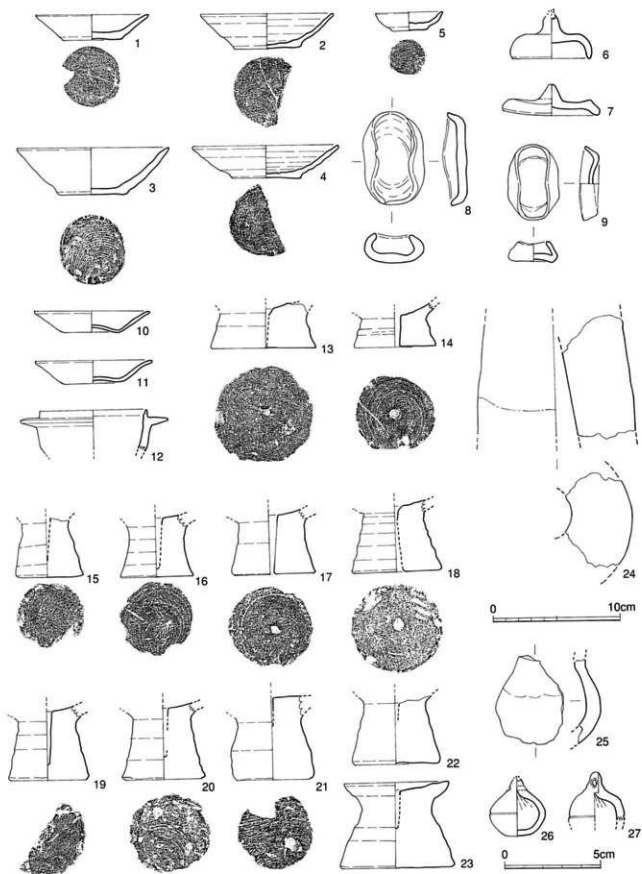
22



23



第227回 包含層・整地層出土遺物⑧(国産陶磁器 2 1/3)



第228回 包含層・整地層出土遺物⑨ (土師器1 1/3)

27は土鈴で、25は大型、26・27は小型の製品である。28～30は土製円盤である。このうち29は土師質土器小皿の底部、30は土師質土器の小片を再加工した土器片加工品である。31・32は有孔土製円盤である。中世大友府内町跡で出土例が増加している資料であるが、詳細な用途は不明である。

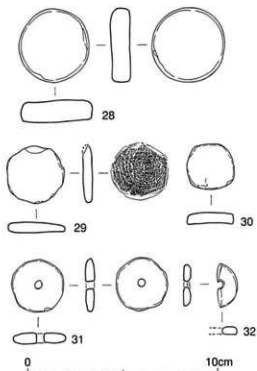
瓦質土器

第230～233図には、瓦質土器を提示した。1は蓋として図示しているが、上下逆で皿となる可能性も考えられる製品である。2～5は瓦質土器碗で、内外面をミガキによって仕上げている。16世紀後葉以降、中世大友府内町跡で散見される製品⁽²⁷⁾であるが、近年では福岡県北九州市宗林寺墓地跡⁽²⁸⁾などでも類例が確認されている資料である。6～8は瓦質土器楕鉢で、6・8が口縁部、7が底部付近の破片である。7の底部内面には波状文の襦目が施されている。9～11は口縁部が屈曲し、端部を上方につまみ上げる属性をもつ瓦質土器鍋である。器形の特徴から、防長系の瓦質土器鍋に分類される製品である。外面の調整にはバリエーションが認められ、ナデを施すもの

(9)、胴部下半に格子状の叩きを施すもの(10)、

口縁下半から胴部にかけて指頭痕が認められ、底部付近の胴部にハケメ状の調整が認められるもの

(11) などがある。内面はいずれもハケメ状あるいはカキメ状の工具を使用して調整が行われている。12は瓦質土器の羽釜で、胴部中位に断面三角形の突帯をもつ。外面は胴部下半のみハケメが残存しており、他の部分はナデ調整が行われている。内面には胴部中位に接合のための指頭痕が認められ、全面にわたってハケメ状の調整が残存している。13は瓦質土器鉢で、平底の底部から斜めに伸びる胴部を有し、短い口縁部が立ち上がる器形を呈する。外面はナデによって仕上げられており、内面にはハケメ状の調整が残存している。在地系の瓦質土器と推定される製品である。14は浅鉢形の火鉢で、内側に屈曲する口縁部を有する。口縁部の外面に刻印による巴文をスタンプしている。15～29は長胴形の火鉢で、口縁部外面に2条の突帯あるいは沈線を有し、その間に刻印による文様を施すタイプの製品である。文様については、15が車輪状文、16・19が雷文、17が七宝文、18が梅花文である。20～21・25～29は在地系の火鉢で、口縁外面あるいは底部付近の外面に2条の突帯を有し、突帯間に刻印による文様を施すものである。文様には雷文(20・21)と双頭厭手流雲文(22～24・26～29)が認められ、後者の双頭厭手流雲文には、流雲文が右上がりの方向を向き、中央に分割線を有する古相のもの(24・26)と左上がりの方向を向き、中央に分割線を有さない新相のもの(22・23・27～29)が存在する。近年、大分市教育委員会が調査を実施した中世大友府内町跡第47次調査で、古相の双頭厭手流雲文を有する浅鉢形の火鉢が、内面にロクロ目を有する在地系の土師質土器皿と良好な状態で出土している⁽²⁹⁾。従って現状では、24・26についてはその上限年

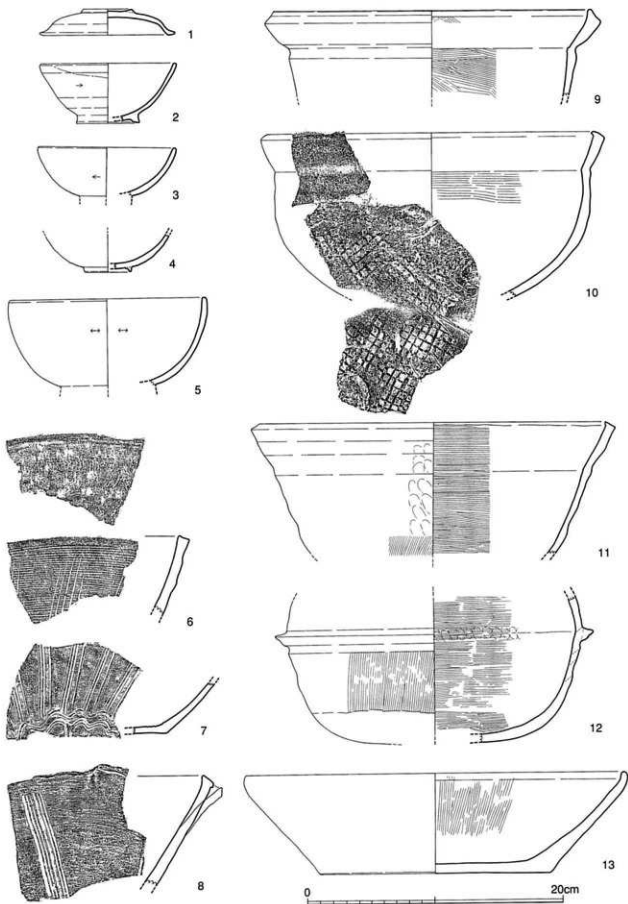


第229図 包含層・整地層出土遺物⁽¹⁰⁾
(土師器 2 1/2)

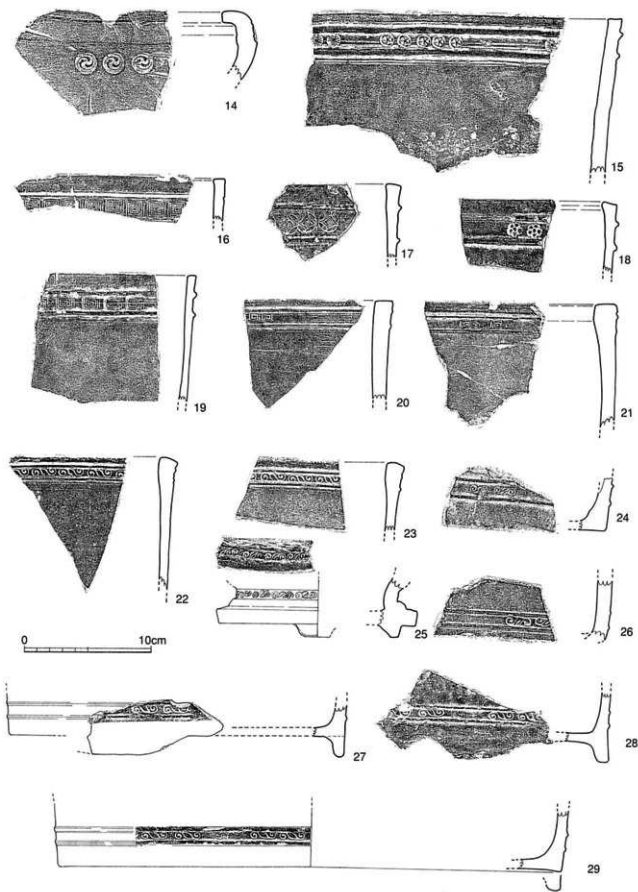
(27) 塩地潤一「戦国時代土師器検についての一考察」(『大分・大友土器研究』第16号 大分・大友土器研究会 1997年)

(28) 財団法人北九州市教育文化振興財団埋蔵文化財調査室「宗林寺墓地跡」(2004年)

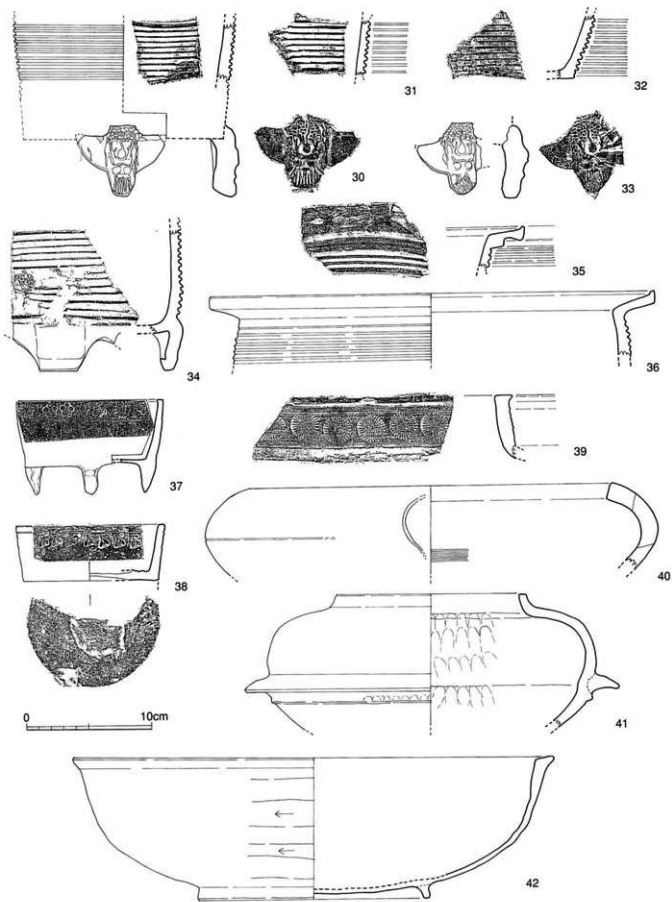
(29) 大分市教育委員会佐藤道生・五十川雄也、両氏のご教示による。



第230図 包含層・整地層出土遺物①(瓦質土器 1/3)

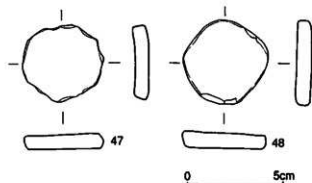


第231図 包含層・整地層出土遺物② (瓦質土器 2 1/3)



第232図 包含層・整地層出土遺物③ (瓦質土器 3 1/3)

代を15世紀末葉から16世紀初頭以降に比定し、他の20～23・27～29については16世紀後葉から末葉の年代観を考えておきたい。25は古相の双頭歯手流雲文を有する瓦質土器で、香炉と推定される製品である。色調は黒褐色を呈し、内外面を丁寧に磨いている。また、内面には使用時の炭化物が僅かに残存する。生産年代の上限が15世紀末葉から16世紀初頭に遡る可能性が考え



第233図 包含層・豊後層出土遺物④(瓦質土器4 1/3)

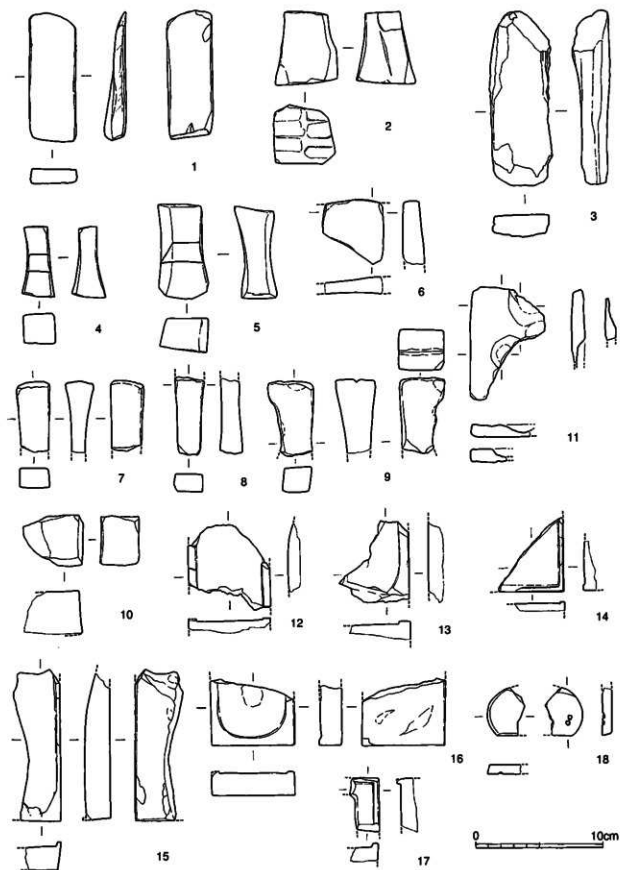
広域流通(?)
する瓦質土器
香炉(湯築城
跡に類例)

られる資料である。31～33は外面に多条沈線を巡らし、押搾しによる龍を象った脚部を有する小型の香炉である。色調は内外面とも明褐色を呈する。愛媛県湯築城跡⁽³⁰⁾に類例があり、広域流通する瓦質土器の製品である可能性が考えられる。湯築城跡の出土事例は「湯築城2～3段階」に属する資料であることから、その生産年代は16世紀中葉前後に比定される。34も同様な器形を呈するが、脚部が龍形でなく、板状のものとなっている。35・36は瓦質土器火鉢で、胴部に多条沈線を施し、し字状に屈曲する口縁部をもつ器形を呈する。口縁端部は上方につまみ上げられている。豊後地域に分布する在地系の製品である。37・38は瓦質土器の香炉で、色調は黒褐色を呈する。口縁外面に刻印による文様が認められる。また、38については脚部が脱落しており、底部と脚部の接合面に格子状の沈線を施すことによって、脚部の接合をより強固にするための工夫を行っていたことが観察できる。39は瓦質土器の口縁部で、外面に刻印による菊花文がみられる。風炉の口縁部である可能性が高い。40も瓦質土器風炉の口縁部から胴部にかけての破片で、胴部中位には透かし孔が認められる。前述した井戸 SE500 (16世紀後葉、146頁参照) の上面から出土しており、本来当該井戸の扇風遺物であった可能性も考えられる。41は瓦質土器羽釜の大型破片である。42は瓦質土器鉢で、豊前・豊後地域に広く分布する在地系の製品である。16世紀後葉の所産である。47～48は瓦質土器の破片を再加工した土器片加工品である。

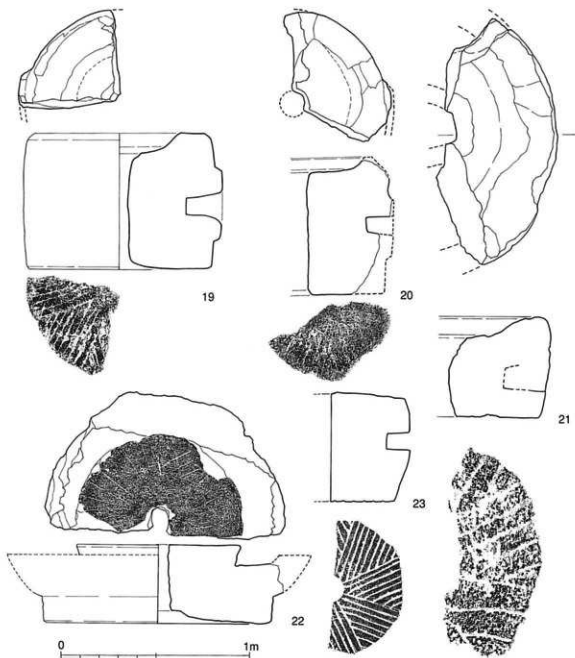
砥石 石製品 (第234・235図) 第234・235図には、石製品を図示した。1～10は砥石である。破損によってサイズがはっきりしないものも多いが、その大半が中型から小型の製品である。特に小型のもの(4)は、携帯用の砥石である可能性も考えられる。11も砥石の一種と考えられるが、表面に凹形の窪みが認められる資料である。12～17は硯あるいは硯の再加工品である。このうち、12～16は輝緑凝灰岩製の製品で、山口県阿蘇郡楠町付近で産出された石材を使用した赤陶硯である。いずれも破片であるため、使用後に意図的に分割され、砥石に転用された可能性が考えられる。特に、15については砥石に再加工された痕跡が顕著である。17は頁岩製の硯で、陸部が貫通するほどに使い込まれている。その後、意図的に分割され、携帯用の砥石などに転用しようとした可能性も考えられる。18は石帯の丸斬である。古代(9世紀代)の製品で、磨り孔が1箇所残存している。99B区の地山直上より出土している。周辺には古代の遺物の散布は認められなかったが、近接する99A区には9世紀代の土坑 SK019 (121頁参照) など存在している。中世段階にすでに削平されてしまったことが想定されるが、本来調査区の西側に当該時期の遺構や遺物包含層が存在した可能性が考えられる。第235図は茶臼(19～22)あるいは石臼(23)で、いずれも凝灰岩製の製品である。

(30) 財団法人愛媛県歴史文化財センター「湯築城跡」(第1分冊(本文) 1998年)図155-1107、190頁

湯築城跡の調査担当者の一人である柴田圭子氏にも実見のうえ、確認いただいた。



第234図 包含層・整地層出土遺物15 (石製品 1/3)

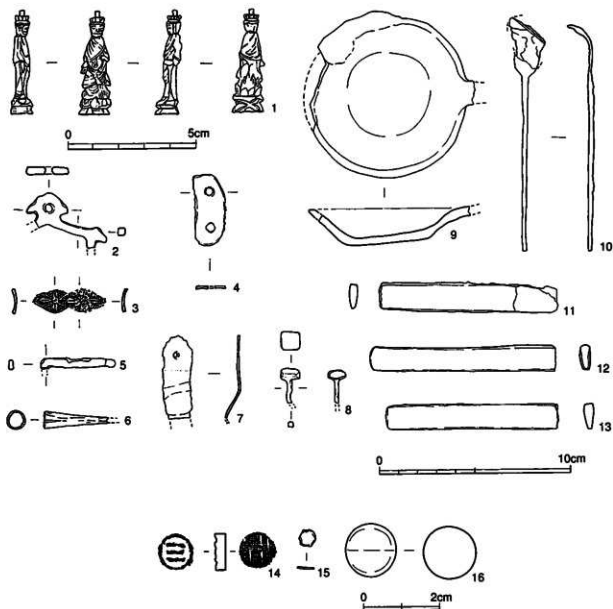


第235図 包含層・整地層出土遺物⑧(石製品2 1/4)

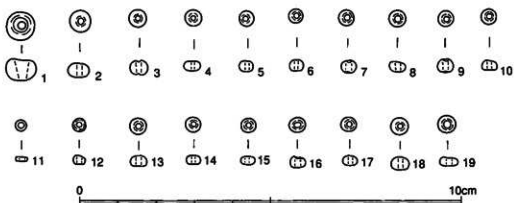
金属製品

金属・ガラス製品 (第236～237図) 第236～237図では、金属製品およびガラス製品を図示している。第236図1は銅製の小銅仏で、観音菩薩の小像である。2は提子の把手基部に付属する金具で、鉄を素材とした製品である。上部部に把手金具が付属するための貫通孔を有する。3～6は銅製品で、3は目貫金具、4は小札金具、5は錠前の一部、6は用途不明品である。3の表面には四菱文が表現されている。6は薄い銅板を円錐形に整形した製品で、中世大友府内町跡の他の調査地点でも複数の出土事例がある資料であるが、用途がはっきりしない製品である。7も用途不明で、銅の地金に渡金を行う製品である。上部部に小さな貫通孔が認められる。8も銅製品であるが、これについても用途不明である。9は鉄製の杓子で、把手の一部を欠損している。10は銅製の匙状製品であるが、これも詳細な用途は不明である。11～13は銅製の小柄である。いずれも表面は無文で、タガネ影りなどによる文様は認められない。14は銅製の太鼓形分銅である。表面に大友氏の定

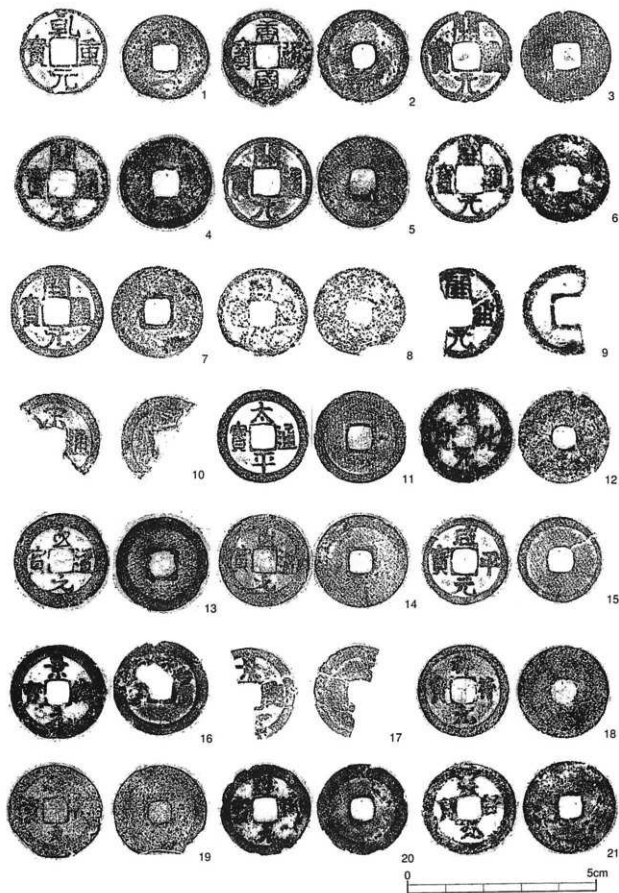
太鼓形分銅



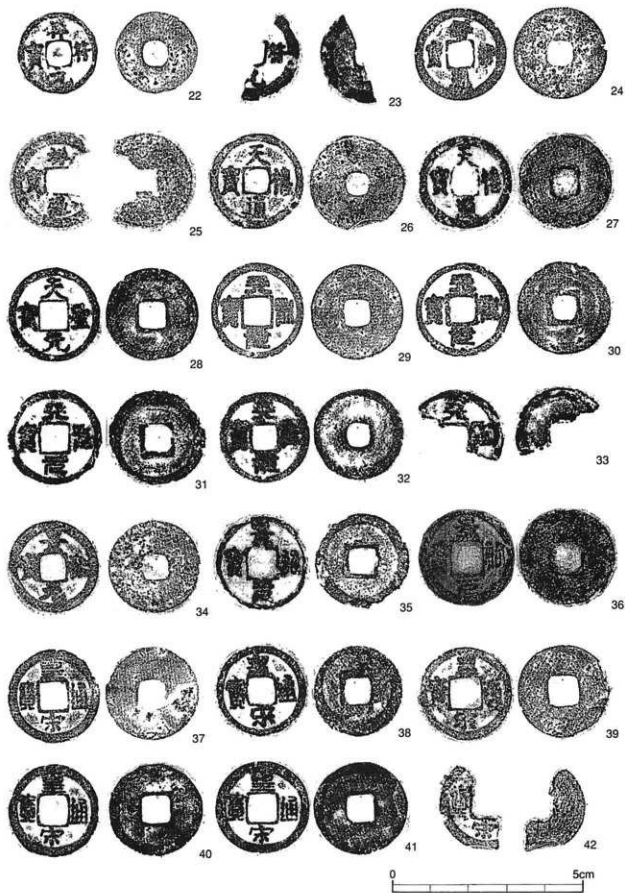
第236図 包含層・壁地層出土遺物ⅴ (金属製品 1は2/3、2~13は1/2、14~16は1/1)



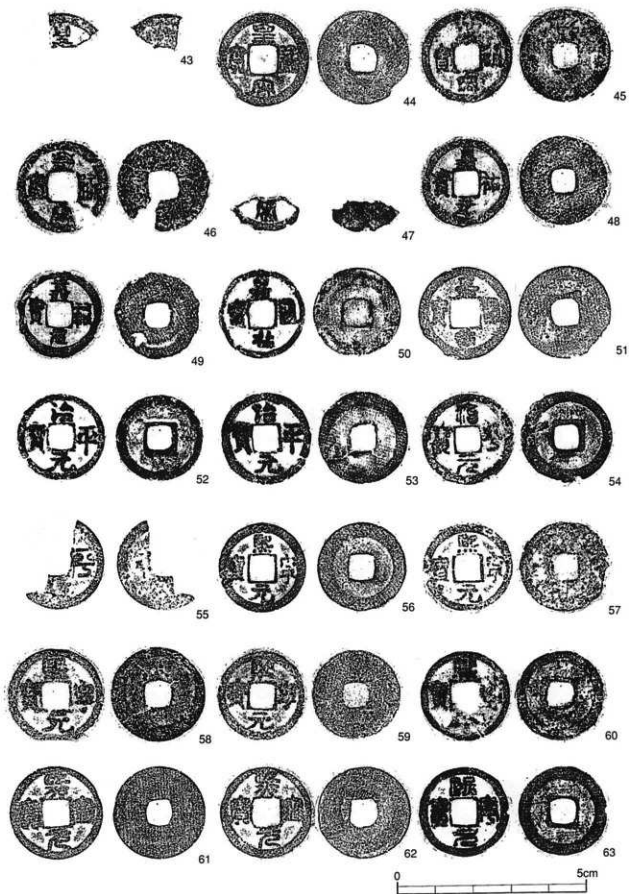
第237図 包含層・壁地層出土遺物ⅴ (ガラス製品 1/1)



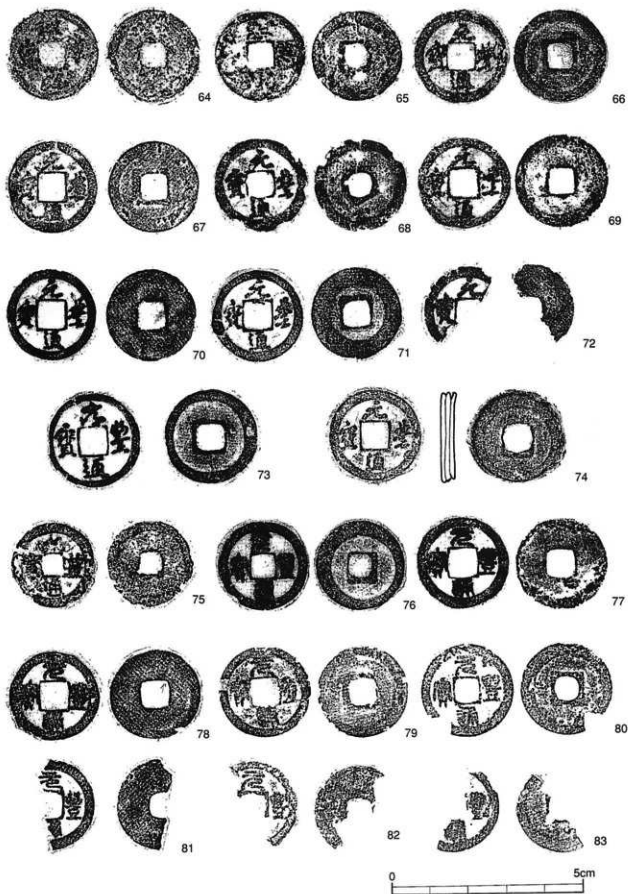
第238図 包含層・整地層出土遺物④(銅錢1 1/1)



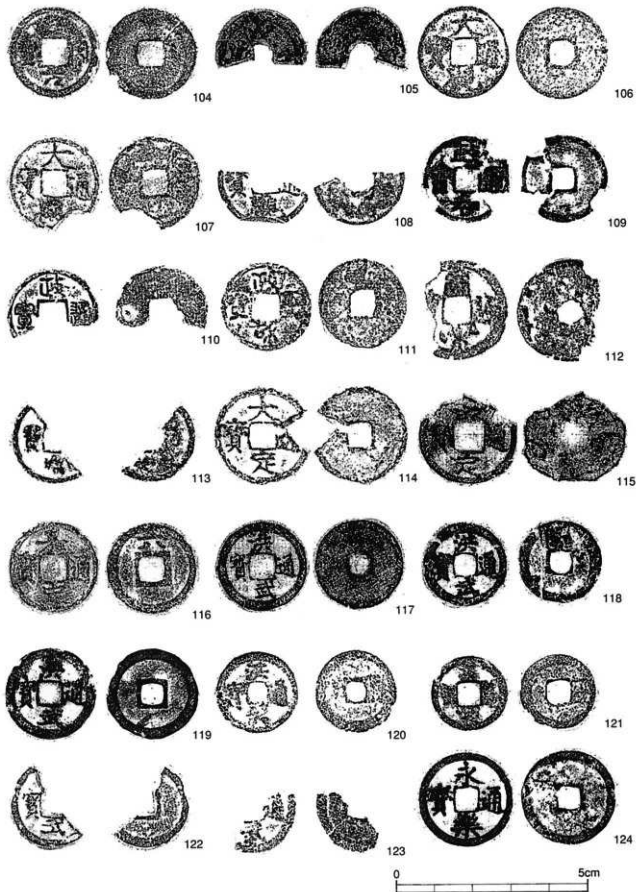
第239図 包含層・整地層出土遺物②(銅銭2 1/1)



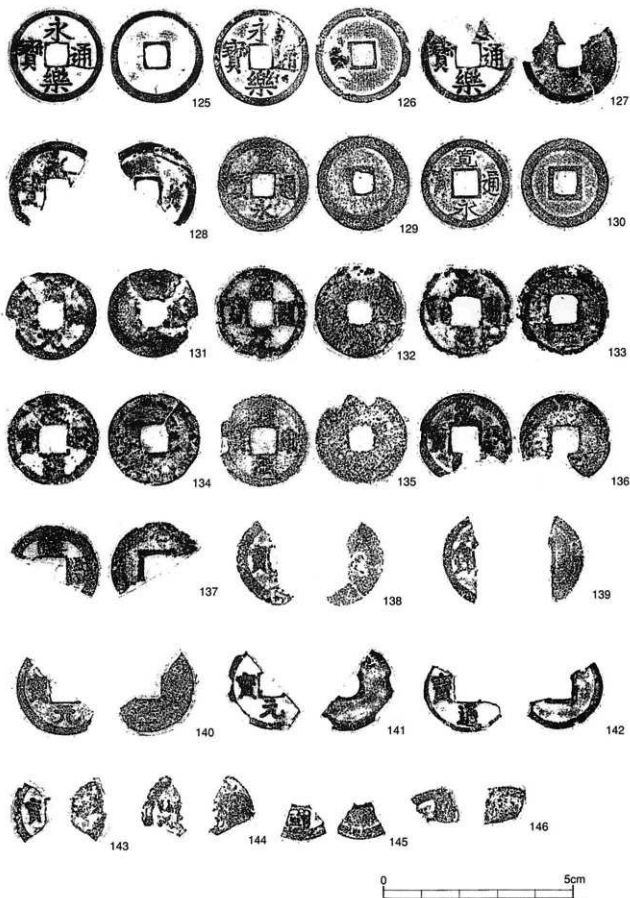
第240図 包含層・整地層出土遺物②(銅銭3 1/1)



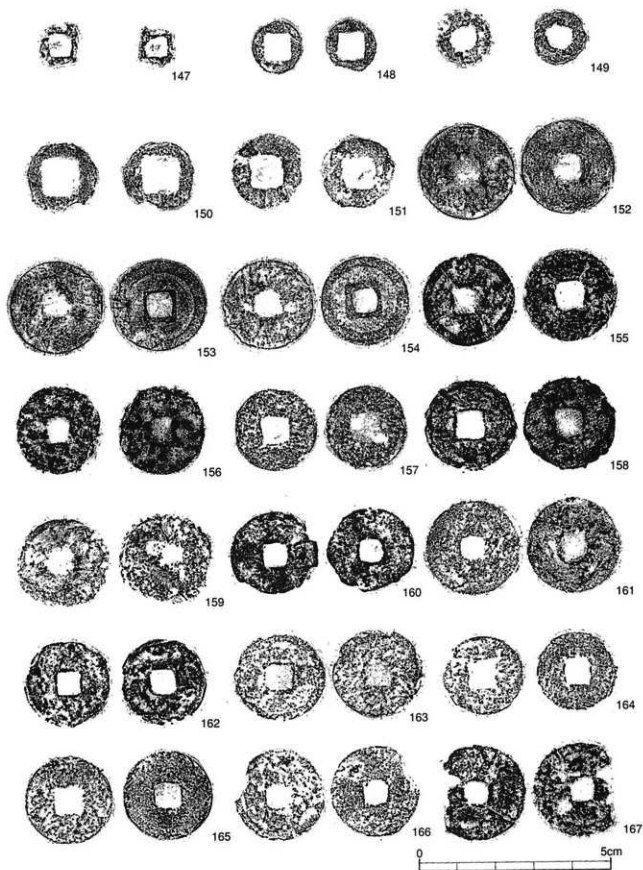
第241図 包含層・整地層出土遺物②(銅銭4 1/1)



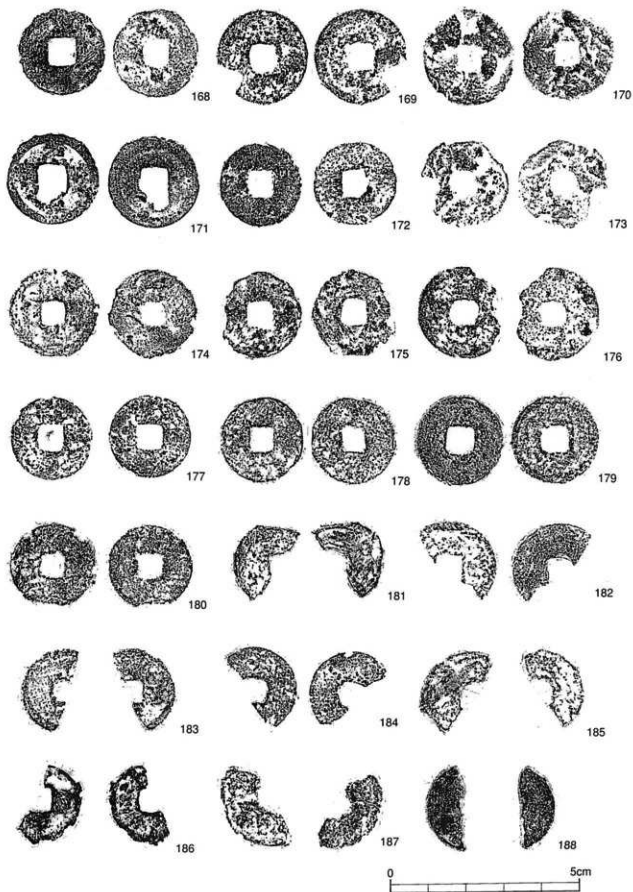
第243図 包含層・整地層出土遺物群(銅銭6 1/1)



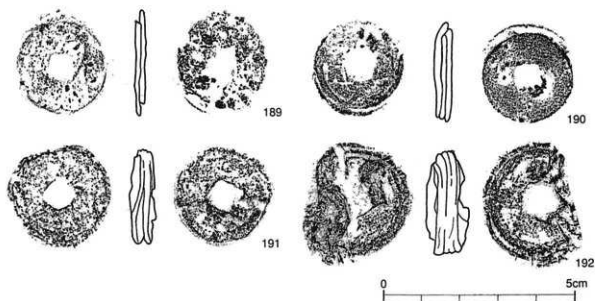
第244回 包含層・整地層出土遺物②(銅銭7 1/1)



第245図 包含層・整地層出土遺物⑧(銅銭8 1/1)



第246圖 包含層・整地層出土遺物②(銅錢 9 1/1)



第247図 包含層・整地層出土遺物②(銅銭10 1/1)

三本紋(大友氏の常紋)

紋である三本紋⁽³¹⁾を表現し、裏面にはタガネ彫りによる4条の記号が認められる。重さは1.27gを測る。中世大友府内町跡では当該資料のような表面に三本文、裏面に4条の記号を有する太鼓形分銅の出土が増加しており、様々なサイズの製品が存在していることが明らかにされつつある。当該資料が、豊後府内に特有な太鼓形分銅のひとつである可能性が考えられるようになってきている。15は金の小片で、詳細な用途が不明のものである。16は鉛玉(鉄砲玉)で、中央部に型合せの痕跡が認められる。第237図1~19はガラス小玉である。径3~8mm前後を測るもので、色調は風化によって灰白色となっているものを除けば、藍色ないし緑色を呈する。

ガラス小玉

銅銭(第238~247図) 第238~247図では、銅銭を図示している。それぞれの銭種や初鑄年代については一覧表に譲る。ただし注意しておきたいことは、この中で判読不明とした資料の中に、明らかに無文銭と推定されるもの(第245図147~151など)が存在することである。今回は詳しい検討ができていないが、これらの無文銭は中国銭ではなく、日本列島内で製作されたと考えられる資料である。

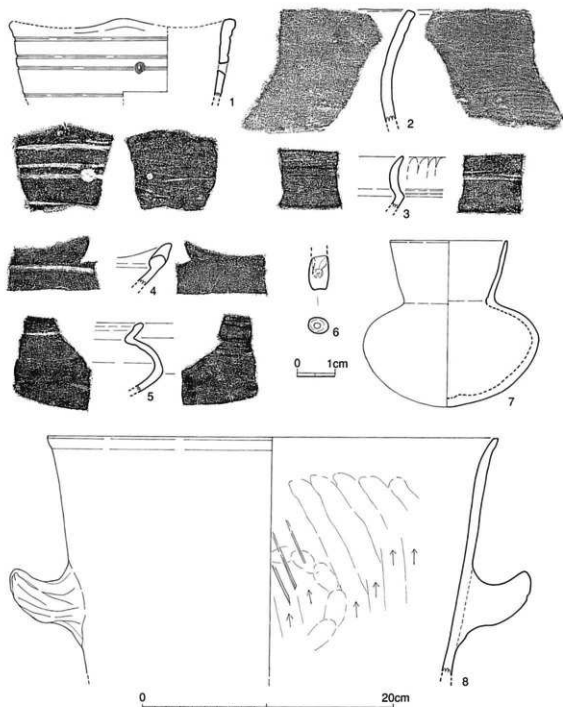
無文銭

古墳時代以前の遺物(第248図) 第248図では、包含層や整地層および遺構内に混入した古墳時代以前の遺物を図示している。当該時期の遺物については、有孔土錘等を本文中で報告しているが、ここでは土器類や玉類を主体に記述を行う。1は波状口縁を呈し、外面にヘラ描き文を有する縄文土器である。ローリングを激しく受けており、器表面が磨滅している。縄文時代後期の所産と推定されるが、型式名が付されていない深鉢形土器である。補修孔と思われる貫通孔が1個認められる。集石遺構SX633に混入した状態で出土した。2は内外面に2枚貝条痕を有する深鉢形土器で、縄文時代後期中葉前後の所産である。3~5は縄文時代晩期中葉前後の浅鉢形土器である。3は「く」の字状に屈曲する口縁部を有し、外面に浅い沈線状の段を有する。4は口縁端部を肥厚させ、ヒレ状突起を有するものである。5は玉葱状の胴部にやや内湾気味の口縁部を有するもので、口縁端部の肥厚部分は段状に退化している。溝SD431の埋土中に混入した状態で出土した。6は縄文時代晩期の所産と推定される管玉で、深緑色を呈する石材が素材として使用されている。縦方向の

縄文土器

縄文晩期の管玉

(31) 秦政博「守護大名から戦国大名へ」(『大分市史』中 1987年) 228頁



第248図 包含層・整地層出土遺物② (古墳時代以前の遺物 1~5・7・8は1/3, 6は1/1)

貫通孔とともに、胴部中位から横方向に連結する穿孔が認められる。7は土師器の長頸壺で、SD 153の底面付近に堆積する砂質土から、ほぼ完存の状態出土した。この遺物は原位置を保っていた資料と推定されたことから、中世段階の遺構の調査終了後、当該遺物出土地の周辺の深掘りを実施したが、遺構や遺物包含層などは確認できなかった。古墳時代前期後葉から中期の所産であろう。8は土師器の甗である。中世の整地層中に混在した状況で出土した資料で、古墳時代後期以降の製品である。

土師器

第3節 小 結

1. 遺構の変遷

中世大友府内町跡第5次調査A区で検出された遺構群は、16世紀前葉以前の下層遺構群と16世紀後葉以降の上層遺構群に大別される。これらはさらに切り合い関係や出土遺物によって、9世紀・15世紀後葉およびそれ以前・15世紀末葉～16世紀初頭、16世紀前葉～中葉、16世紀後葉～末葉、16世紀末葉～17世紀初頭の6つの時期に細別される(第249・250図)。

9世紀代の遺構

9世紀代に比定されるものは、土坑SK019がある。当該時期の遺構はこれが唯一のものであるが、同時期の遺物が包含層・整地層中から少量出土しており、この中には石帯(第234図18)などの注目すべき資料も存在する。本来古代の遺構・遺物が一定量存在したものであろう。古代の遺構群は中世段階の整地や遺構の構築によって、大部分が削平され、消滅したと推定される。

15世紀代の遺構

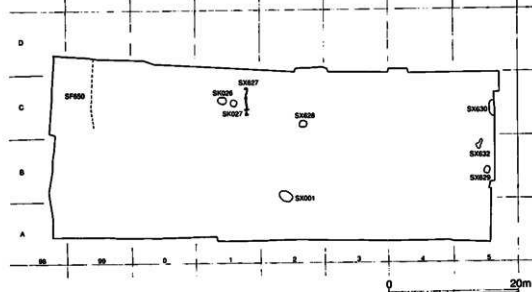
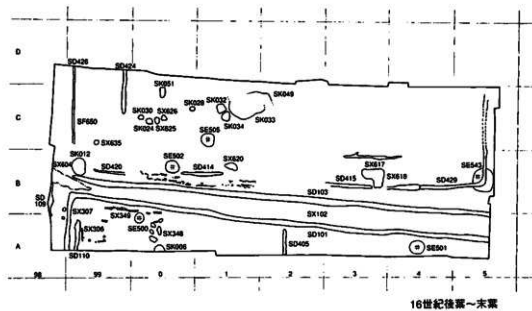
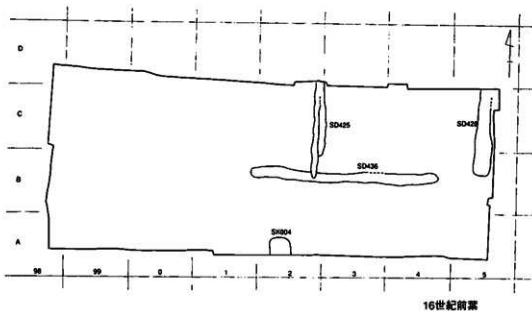
14世紀代については主要な遺構は確認されておらず、15世紀後葉から大型遺構が出現してくる。溝SD431・SD411・SD412・SD418・SD419などがこの時期に相当し、またSD411・SD412が接続するSD153も当該時期まで遡る可能性がある。柱穴群や溝、土坑などの正確な時期比定が困難な場合が多いが、15世紀後葉には町屋に関連する遺構群の形成が確実になり、一定程度の完成をみていたことが想定される。さらに、遺構の保存率が悪いため、積極的な判断が難しい状況であるが、SD431・SD416・SD419・SD411・SD412・SD153等の溝の配置のあり方は、三叉路を想起させるものであることにも注意を払っておきたい。

15世紀末葉～16世紀初頭の遺構の中で、特筆すべきものとして溝SD151・SD153がある。この2つの溝の間には2.5m前後の空地があり、当該部分が道路として使用されたことも想定可能である。また、SD153の西端部には小形で緩やかに湾曲する溝SD413が接続している。SD151に関しては5次B区でも延長部が検出され、さらに東へ延長するとともに6B区で北に屈曲する溝と接続することが確認された。SD151の北側には少数ながらも井戸や廃棄土坑が検出され、上記の溝が屋敷あるいは町屋の区画としての機能を果たしていたことが推定される。

16世紀代の遺構

16世紀前葉～中葉になると上記の区画は一時的に消滅し、溝SD425・SD436・SD428が構築される。これらの溝によって区画される空間は、東西25m、南北13m以上を渡る。出土遺物は京都系土師器1期を主体とし、屋敷あるいは町屋の区画に伴う遺構と推定される遺構である。調査区の制限によって、未調査である北側への遺構の展開は不明であるが、現状では井戸や廃棄土坑などは認められず、溝によって区画された空間の性格の解明が今後の課題となる。

16世紀後葉から末葉には最盛期を迎え、積上遺構SX102・溝SD101・SD103・SD409・SD410などが構築される。これらの遺構の主軸方向は、15世紀末葉から16世紀初頭に比定される溝SD151・SD153とほぼ同一の方向を踏襲する。また、調査区北西側には第4南北街路であるSF650が敷設され、江戸時代前期まで継続使用される。第4南北街路SF650は小砂利や小礫などを路面に敷いた舗装道路で、図示した範囲よりもさらに南に展開するが、積上遺構SX102との構造的な関係や平面的な関係を明確にできていない。積上遺構SX102の南側、すなわちSD101とSD410に囲まれる空間のほぼ中央には、溝SD405が存在し、井戸SE500およびSF501がほぼ等間隔で構築されている。SD101・SD410・SD405によって囲まれる空間内には行列SX649やSX606・SX607、整地層SX602などが構築されており、他の地点よりグレードの高い建造物が建設されていた印象を受けるが、これについても調査範囲が限られたものであるため、最終的な判断は将来の調査に譲りたい。積上遺構SX102の北側には行列SX642、溝SD430・SD414・SD4315・SD428などの構築物



第250図 5次調査A区遺構変遷図② (1/600)

が存在し、これらも屋敷あるいは町屋に伴う区画としての役割を果たすものであろう。

16世紀末葉～17世紀初頭になると、集石遺構や石列や廃棄土坑の一部を除いて、本調査区の大半の遺構が消滅する。これらの遺構の消滅の原因としては、積極的な根拠は認められないものの、出土遺物の年代観より、天正14年（1586）末から翌15年（1587）初頭にかけたの島津侵攻が契機となる可能性が考えられる。第4南北街路であるSF650のみ、継続して存続している。

2. まとめ

中世大友府内町跡第5次調査A区は、「府内古園」に基づいて作成され、「大分市史」に掲載されている「戦国時代の府内復元想定図」によると、「大友御藏場」および「林小路町」に相当する。「府内古園」の内容は16世紀後半から末葉前後の豊後府内の状況を描いたものとされていることから、本調査区の遺構群の最盛期が府内古園の内容とリンクすることが想定される。

積土遺構 SX102等の性格

本調査区で最も重要な遺構が、積土遺構SX102およびそれに付属する溝SD101・SD102である。積土遺構 SX102は、版築状の工法で構築されていることや基底部に礫などを敷きつめることによって土留めとしている部位が認められること、また溝 SD101・SD103とセットで構築されていることや基底部の最大幅が2m前後と幅狭なことなどの特徴がある。従って、発掘調査時には当該遺構を築地状の遺構あるいは小規模な土塁状遺構と想定し、「大友御藏場」の北側区画施設と解釈した。しかし、その後周辺地域の発掘調査が進展する中で、その位置関係などから当該遺構を道路あるいは道路状遺構と解釈することも可能な状況となっており、現在 SX102・SD101・SD103が築地状の積土遺構か道路状遺構かを最終的に決定する判断材料を欠いている現状である。この点についての判断は、周辺地区における発掘調査成果の公表と将来の発掘調査の結果を待ちたいが、いずれにしても当該遺構が「大友御藏場」の北側区画に関わる遺構であることは間違いないであろう。

SX102・SD101・SD103より北側の状況は、柱穴群が密集することや井戸が点在し、廃棄土坑と想定される遺構群が集中する地点が認められることから、町屋と想定される遺構群であり、「林小路町」の一画に相当する地点と推定される。SD103の北側に構築された石列 SX643や溝 SD424および SD420・SD414・SD415・SD428は、林小路町に付属する町屋あるいは屋敷の区画遺構としての性格が想定されるものである。

SX102・SD101・SD103より南側、すなわち SD101・SD410・SD405によって囲まれる空間については、「大分市史」掲載の「戦国時代の府内復元想定図」によると、「大友御藏場」の敷地内に相当する地点である。発掘調査結果からは当該空間が小型の溝 SD405によって二分され、それぞれに井戸 SE500および SE501がほぼ等間隔で構築されていることが確認できた。当該空間地の西側には石塔類を再利用した石列 SX649や整地坑 SX602が存在し、他の地点よりグレードの高い建造物が建設されていた可能性がある。とはいえ、これらの施設は、いわゆる「御藏場」の主要施設と想定される倉庫群に直接関連する遺構群ではなく、屋敷あるいは町屋の遺構群と解釈するのが、現状では妥当と思われる。「大友御藏場」に直接関連する主要施設が存在した範囲も、今後の周辺地域の発掘調査を踏まえながら、慎重に再検討を要する問題であろう。

以上のように、本調査区の調査結果は「府内古園」復元案に概ね該当する結果が得られたものの、個々の遺構の解釈や土地利用の細部の問題については、依然として課題が残る結果となった。残された課題については、周辺地域の発掘調査の進展により、将来的に解決されることを望みたい。

第3章 中世大友府内町跡第5次調査B区

第1節 調査の経緯

大友氏館
大友御藏場

中世大友府内町跡第5次調査B区は、大分県大分市六坊北町に所在し、標高4mの沖積低地上に立地する調査区である。1987年に大分市史編纂委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によると、当該調査区は南側の「大友御藏場」と北側の「大友氏館」に挟まれており、町屋等の表現もなされていない地点にあたる。府内古園C類に依れば、道路の表現がなされている空間地帯にあたる。

府内古園

本章で検討する第5次調査B区は1999（平成11）年9月から行われた第5次調査A区の発掘調査の結果により、遺構が東側に大規模に展開することが予想されたため、JR豊肥・日豊線に沿って東側に調査区を広げ、調査員、作業員の補充を行い発掘調査を行うこととなった。

発掘調査ではA区同様排土置き場の確保のため、調査区内を2回にわたって切り返して調査を行った。さらに、A・B区の調査終了後、通学路等に使用されていた北側の里道部分についても、条件整備を行い、調査の対象とした。

調査面積

年度ごとの調査期間と調査対象面積は、以下の通りである。（第251図参照）

平成12年度前半期調査区（6A～14B区） 2000年4月～2001年1月 調査面積約830㎡

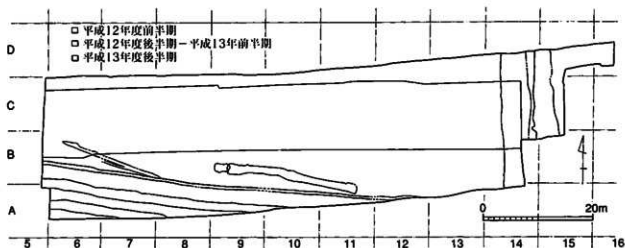
平成12年度後半期～平成13年度前半期調査区（6B～14C区）

2001年2月～2001年7月 調査面積約1,070㎡

平成13年度後半期調査区（6C～16D区・15B～16C区）

2001年11月～2001年12月 調査面積約460㎡

以上のように調査期間は2000年4月から2001年7月および2001年11～12月の18ヶ月であり、最終的な発掘調査面積は2,360㎡であった。



第251図 年度毎の調査区 (1/700)

第2節 遺構と遺物

I. 遺構の概要と基本層序

本調査区ではA区と同様に縄文時代から近世に至る各時代の遺物が出土しているが、遺構が主体的に検出される時期は15世紀から16世紀後半の戦国時代である。

当該調査区はA区と同様、国土座標に乗せた10m方眼を設定し、その遺構の性質上、A区との関連を無視できないこともあり、それぞれの小区画を西からA区の続きで6～16、南から北へA～Dの番号を付し、数字とアルファベットの組み合わせで、各々の区画を呼称することにした（6A区、16D区など）。

小区画の呼称

本調査区では旧表土上に近年の造成による置土が0.6～0.9mほど堆積しており、この造成土の下位には近世から現代の所産と思われる水田層が0.5mほど堆積する。発掘調査ではこの水田層より上位を大型重機によって除去し、それより下位の遺物包含層については、発掘作業員を投入して手掘りによる掘り下げを行った。平成12（2000）年度前半期の調査区では、平成11（1999）年のA区での調査で明らかになった積土遺構 SX102とそれに付属する溝 SD101・SD103が当該調査区に延長して展開することを確認した。また、SD101・SD103の下位にはA区同様、大型の掘り込み（後にSD153・SD151と判明）が存在することを確認した。さらにSD151は調査区西端で北に屈曲し、SD251と接続することも確認した。また、SX102・SD101・SD103に先行する形でSD105が調査区を斜めに横切ることも判明した。以上のように、平成12年度前半期の調査区積土遺構 SX102とそれに付属する溝 SD101・SD103等を主要遺構とする16世紀後半以降の上層遺構群と SX102の下位に構築された溝 SD153・SD151等を主要遺構とする16世紀前半以前の下層遺構群に大別され、出土遺物や切り合い関係から、それぞれの遺構群がさらに細かい時期に細別されることが判明した。

平成12年度後半から平成13年度前半期の調査区でもほぼ同じような堆積状況が確認されている。平成12年度前半期に調査区西端で確認された溝 SD251の延長部を確認し、さらに北に延びていることも確認できた。

平成13年度後半期の調査区（里道調査区）ではSD251の延長部を確認するとともに、これまでに検出された遺構の延長部を確認した。また、これまでの調査区同様、上下2面に大別される遺構群を確認している。

このように、中世大友府内町跡5次調査B区で検出されたすべての遺構の相違と時期を確認した結果、上層遺構群と下層遺構群は下記のような遺構群で構成されることが明らかになった。

上層遺構群……16世紀末以降・16世紀後半の遺構群で構成される。

下層遺構群……16世紀前半・15世紀後半～16世紀初頭・15世紀後半以前の遺構群で構成される。

上層遺構群の上位には、調査区のほぼ全面にわたって唐津系陶磁器が含まれる遺物包含層が存在することも確認されている。しかし、唐津系陶磁器を出土する遺構については、明確なものが確認できていない。各々の遺構の配置と上層の堆積状況については第252～253図を参照されたい。また、本報告書で使用される遺構番号と発掘調査時に使用した遺構名称が異なるため、第3表で提示した遺構一覧表で整理を行っている。

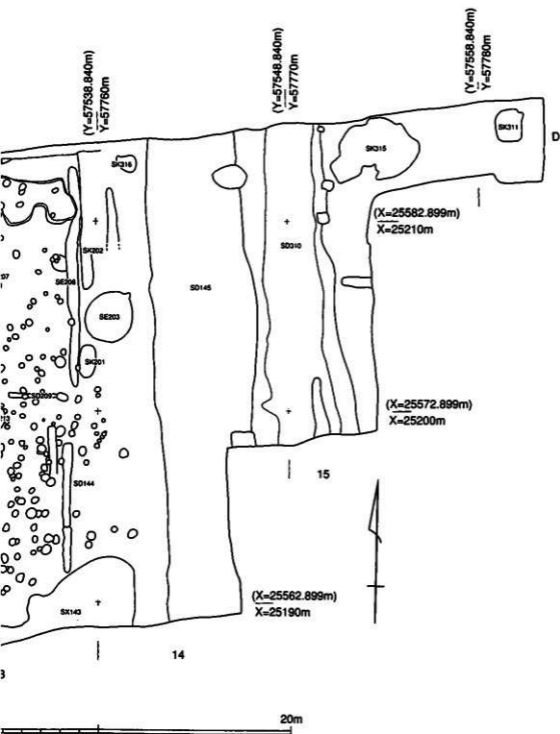
以下、遺構と出土遺物の詳細を報告する。

第3表 遺構一覧表①

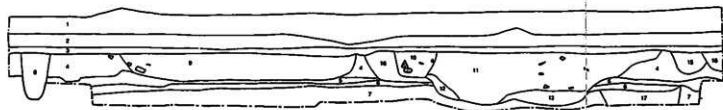
本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD101	S101	溝	6A~8A	16世紀後半~末葉	SX102に付属する溝	220
SX102	S102	積土遺構	6A~9A	16世紀後半~末葉	御蔵場の北側区画または道路状遺構	220
SD103	S103	溝	6B~10A	16世紀後半~末葉	SX102に付属する溝	220
SD105	S105	溝	6B~12A	16世紀中葉~後半	断面箱形・京都系土師器皿一括出土	231
SK106	S106	土坑	8A	16世紀中葉~後半	京都系土師器皿一括出土	270
SE108	S107-S108	井戸	9A~10A	16世紀後半~末葉	石組井戸	322
SK109	S109	土坑	8B	不明	銅銭出土	306
SK110	S110	土坑	8B	16世紀中葉以降		272
SK111	S111	土坑	8B	16世紀中葉以降	SK110の中に構築	272
SX113	S113	火災地理遺構	10A~10B	16世紀前半~中葉		337
SD114	S114-S112-S20	溝	6B~8B	15世紀末葉~16世紀初頭		244
SK115	S115	土坑	7B	16世紀前半	SD114を切る	280
SX117	S117	レンズ状の溝	9B	15世紀後半~16世紀初頭	遺構間なし	348
SK118	S118	土坑	7C	16世紀前半		280
SE119	S119	井戸	9B	15世紀後半~16世紀初頭	断面狭状・大量の礫を充填	324
SX120	S120	火災地理遺構	10A~11A	15世紀後半	遺構間なし	280
SK121	S121	土坑	9A~9B	16世紀前半~中葉		306
SK122	S122	土坑	9B	不明		246
SD123	S123	溝	9B~11A	16世紀前半~中葉	中国産茶入れ出土	341
SX124	S124	土坑	9B	16世紀前半~中葉		282
SK125	S125	土坑	9B	16世紀前半~中葉		283
SK126	S126	土坑	10B	16世紀前半~中葉		268
SK127	S127	土坑	11B	16世紀後半~末葉	礫を充填	306
SK128	S128	土坑	11B	不明		272
SK129	S129	土坑	11A	16世紀中葉以降	礫を充填	291
SK130	S130	土坑	9B	16世紀前半~中葉		349
SX131	S131	遺物集積区	9A	16世紀末葉~17世紀初頭	SX102の上面	329
SE132	S132	井戸	12A~12B	16世紀代		291
SK133	S133	土坑	12B	15世紀末葉~16世紀初頭		333
SX134	S134	埋納遺構	12B	15世紀後半	十字状の配置	294
SK135	S135	土坑	9A	15世紀末葉~16世紀初頭		306
SK136	S136	土坑	12B	不明		306
SK137	S137	土坑	12B	不明		302
SK139	S139	土坑	11B	15世紀後半		269
SK140	S140	土坑	10B~11B	16世紀後半~末葉		306
SK141	S141	土坑	12B~13B	不明	銅銭出土	327
SE142	S142	井戸	12A~13A	15世紀後半		344
SX143	S143	掘込遺構	13A~14B	16世紀前半~中葉		220
SD144	S144	溝	13B	近世		236
SD145	S145	溝	14A~14D	16世紀中葉	区画溝?	283
SK146	S146	土坑	12A	16世紀前半~中葉		284
SK147	S147	土坑	8B	16世紀前半		306
SK148	S148	土坑	8B	不明		285
SK150	S150	土坑	6A	16世紀前半~中葉		249
SD151	S151-S155- S151-S201	溝	6B~11A	15世紀後半~16世紀初頭	SX102・SD103の下位に構築	249
SD153	S153	溝	6A~7A	15世紀後半~16世紀初頭	SX102・SD101の下位に構築	306
SK154	S154	土坑	9A	不明		306
SK157	S157	土坑	12B	不明		312
SK158	S158	土坑	12A	不明		303
SK160	S160	土坑	9B	15世紀後半以前	SD150の底面に構築	334
SX170	ビット	ビット	8B	16世紀前半以前	土師質土器加工品(おはじき)	312
SK201	S201	土坑	13A	不明		274
SK202	S202	土坑	13C	16世紀後半~末葉		323
SE203	S203	井戸	13C~14C	16世紀前半以降		285
SK204	S204	土坑	12C	16世紀前半~中葉		285
SK205	S205	土坑	12C	16世紀前半~中葉		288
SK206	S206	土坑	12C	16世紀前半~中葉		288
SD207	S207	溝	13C~13D	近世	遺構間なし	
SD208	S208	溝	13C~13D	近世	遺構間なし	
SD209	S209	溝	13C	近世	遺構間なし	220
SD210	S210	溝	11B~12B	近世	遺構間なし	220
SD211	S211	溝	11B~13B	近世	遺構間なし	
SK212	S212	土坑	12C	不明		312

第4表 遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK213	S213	土坑	13B	不明		312
SK214	S214	土坑	12B	16世紀中葉以降		275
SK215	S215	土坑	12B	16世紀中葉以降		275
SK216	S216	土坑	12B	16世紀中葉以降		275
SK217	S217	土坑	11C	15世紀末葉～16世紀初頭		294
SK218	S218	土坑	12C	16世紀前半～中葉		289
SE220	S220	井戸	13A～13B	16世紀末葉	五輪塔による石組井戸・7角形 大礫を廃棄	315
SE221	S221	井戸	10C	16世紀末葉		317
SK222	S222	土坑	12C～13C	16世紀中葉～後葉		275
SK223	S223	土坑	11C	不明		312
SK224	S224	土坑	12B	不明		312
SK225	S225	土坑	12B	16世紀前半～中葉		290
SK226	S226	土坑	11B	16世紀中葉～後葉		278
SK227	S227	土坑	12C	16世紀中葉～後葉		269
SE228	S228	井戸	10B	15世紀後葉		327
SK229	S229	土坑	9B～9C	16世紀中葉～後葉		278
SK230	S230	土坑	8C～9C	15世紀末葉～16世紀初頭	土師質土器小皿や耳皿が集中	295
SK231	S231	土坑	9C	不明		312
SK232	S232	土坑	8C～9C	不明		312
SK233	S233	土坑	8C	不明		312
SK234	S234	土坑	8C	15世紀末葉～16世紀初頭		298
SK235	S235	土坑	7C	15世紀末葉～16世紀初頭	在地系土師質土器の一括出土	299
SK236	S236	土坑	11C	14世紀前半	在地系土師質土器坪の一括出土	304
SE238	S238	井戸	11C	14世紀前半	隅柱・方形縦板・6角形の井筒	329
SK241	S241	土坑	7C	16世紀後葉～末葉		269
SK242	S242	土坑	9C	15世紀末葉～16世紀初頭		300
SK243	S243	土坑	9C	不明		312
SK244	S244	土坑	8C	15世紀末葉～16世紀初頭		301
SK245	S245	土坑	8B	15世紀末葉～16世紀初頭		302
SK246	S246	土坑	8C	16世紀前半～中葉		290
SE247	S247	井戸	6C	16世紀末葉		321
SE248	S248	井戸	7B～7C	16世紀末葉		320
SE249	S249-S219	井戸	12C	15世紀後葉		325
SK250	S250	土坑	10C	不明		313
SK252	S252	土坑	11C	14世紀前半	在地系土師質土器坪の一括出土	304
SX253	S253	埋納遺構	6B	不明	縄銭埋納遺構	331
SD254	S254	溝	9C	不明		266
SD255	S255	溝	9C	不明		266
SK256	S256	土坑	8B	不明		313
SK257	S257	土坑	9C	不明		313
SX258	S258	不定形土坑	6C	16世紀中葉以降	遺構図なし	347
SE259	S259	井戸	6C	15世紀後葉		329
SX270	13B-P1	埋納遺構	13B	不明	縄銭埋納遺構	331
SX301	S301	ビット	6C	15世紀後葉～16世紀初頭	土師質土器の埋納	336
SK302	S302	土坑	8C	16世紀中葉～後葉		279
SK303	S303	土坑	8C	15世紀末葉～16世紀初頭		303
SK304	S304	土坑	9C	16世紀中葉～後葉		279
SK306	S306	土坑	6C	16世紀代	SX258の底面に構築・遺構図なし	347
SX307	S307	遺物集中部	11C	不明	備前系陶器類	348
SX308	S308	ビット	12D	14世紀代	土師質土器の埋納	336
SD310	S310	溝	14B～15D	16世紀中葉	区画溝?	244
SK311	SK311	土坑	16D	不明		313
SK315	S315	土坑	15D	不明		313
SK316	S316	土坑	14D	14世紀前半	銅銭出土	303

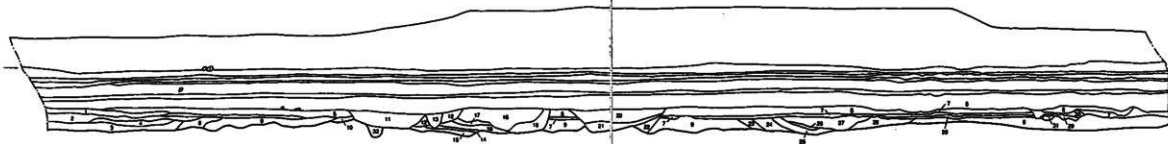


※数値は旧日本測地系・括弧内は世界測地系による。



1. 表土
2. 腐葉土
3. 木片層 (ヤングン状?)
4. 暗栗褐色土 (5cm大の卵を含む)
5. 暗灰白色土
6. 灰褐色土
7. 暗栗褐色砂質土
8. 赤褐色土 (土層片・炭化物・微量の骨片を含む)
9. 暗栗褐色土 (0.5cm以上の土層片を多数に含み、3cm大の卵・炭化物を含む)
10. 暗栗褐色土 (2~5cm大の卵・土層片・炭化物を含む)
11. 暗栗褐色土 (10よりやや明るい、土層片・炭化物・2~5cm大の卵を含む)
12. 砂質土 (ややサラサラしている)
13. 暗栗褐色砂質土 (土層片・赤色砂子・灰白色土ブロックを含む)
14. 暗栗褐色土 (土層片・白色砂子を含む)
15. 暗栗褐色土 (土層片・炭化物を含む)
16. 暗栗褐色土
17. 暗栗褐色土 (7よりやや暗い、小卵・土層片を含む)

0 20m



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色砂質土 2. 暗褐色砂質土 3. 暗褐色砂質土 4. 暗褐色土 (砂質土と骨質土が混ざる) 5. 暗褐色土と暗褐色土が混ざる 6. 暗褐色砂質土 7. 暗褐色砂質土 (灰色シルトが塊状に入る) 8. 暗褐色土 9. 暗褐色土と暗褐色土が混ざる 10. 暗褐色砂質土 11. 暗褐色砂質土 (2cm大の小卵を多く含む) 12. 暗褐色砂質土 13. 暗褐色砂質土 14. 暗褐色砂質土 15. 暗褐色土 (塊状が混ざる) 16. 暗褐色土 17. 暗褐色土 18. 暗褐色砂質土 19. 暗褐色砂質土 20. 暗褐色砂質土 (軽い卵が多く混ざる) | <ol style="list-style-type: none"> 21. 暗褐色砂質土 (骨質土が混ざる) 22. 暗褐色土 23. 暗褐色砂土 (炭分が混ざる) 24. 暗褐色砂土 (骨質土が混ざる) 25. 暗褐色砂土 (2より粒子が細かい) 26. 暗褐色砂質土 27. 暗褐色土 28. 暗褐色土 29. 暗褐色砂質土と暗褐色砂土が混ざる 30. 暗褐色砂質土 31. 暗褐色砂質土 32. 暗褐色砂質土 (灰色シルトがブロック状に入る) |
|---|---|

0 20m

第258図 第G次調査B区土層図

II. 遺構と遺物

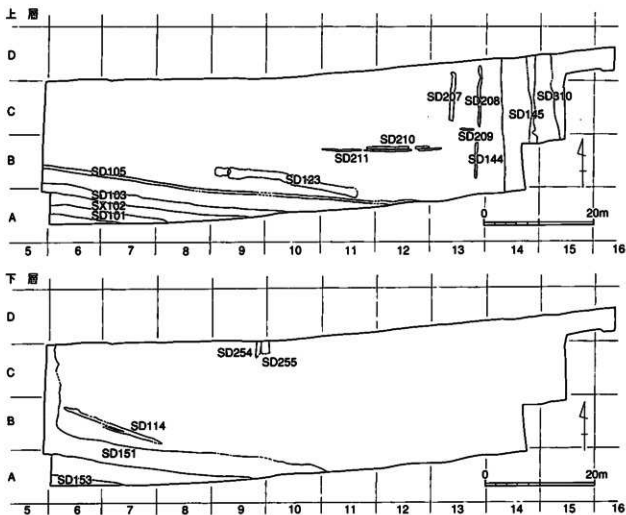
1. 溝と関連遺構

概要 中世大友府内町跡第5次調査B区では15基の溝を検出している。上層遺構群に属するものが11基、下層遺構群に属するものが4基である。

上層遺構群に属するものの内4基は近世の所産と推定され、いずれも浅い掘り込みの溝である。遺物も小破片しか出土していないが、SD210から煙管が1点出土している。残り7基は16世紀中葉～末葉の所産と推定される。これらの中で特に注目される遺構はSD101・SD103とSD105で、SD101とSD103は積土遺構SX102とともに大友御成場の推定北辺ラインあるいは道路遺構と推定されるもので、5次調査A区から続く遺構群である。

SD105はSD103の北側に位置し、SD103とはほぼ平行するように構築された断面箱形の溝である。ただ、出土遺物の検討からSD101・SX102・SD103の時期には埋没していた可能性が高い。SD123は調査区の中央南よりにSD105に平行するように構築され、30m程で終息する。機能は不明である。SD145は調査区東端で検出され調査区を南北に縦断するように構築されており、大友氏館の方に延びる。

下層遺構群に属するものは、すべて15世紀末葉～16世紀初頭の所産と推定される。SD114はSD105に切られる形で検出され、上層の溝とは軸が異なる。SD151とSD153はSX102の下位に構築された溝であり、SD151は調査区西端で西及び北に延びる。また、SD151の埋土からは頭部のみが廃棄された状況の骨が1体出土している。



第254図 第5次調査B区の溝 (1/700)

SD144 (第252図) 13B区東で検出された南北に軸を持つ溝状遺構である。底面の深さは一定ではなく3段に分かれるため細長い土坑が連続していることも考えられるが、平面プランでは確認できなかった。規模は全長2.7m、幅20~25cm、深さ5~25cmを測る。埋土は灰色系の砂質土で周辺の遺構とは異なり、近世以降の区画溝もしくは畑の畝溝の可能性も考えられる。図示が可能な遺物の出土はない。SD144の北側にはSD208やSD207などやはり南北に軸を持つ溝が検出されているが、これらもやはり同様の機能を持った溝と考えられる。

SD209 (第252図) SD209は13C区南に位置し、東西に軸をもつ非常に浅い溝である。その規模は長さ2.6m、幅20~30cm、深さ4~10cmを測る。遺構面が削平されていると考えても、深さはさほど深くはならないと考えられる。埋土は灰褐色の砂質土で、南に位置するSD144や北に位置するSD208、SD207との配置を考えると、近世の耕作溝もしくは区画溝と考えるのが妥当と思われる。図示が可能な遺物の出土はない。

SD210 (第252図) 11B区~12B区で検出された溝である。その規模は、長さ11m、幅40~44cm、深さ10~15cmを測る。西は削平され、全体の規模は検出できなかったが、すぐ南にSD210と同じような溝SD211が平行して走り13B区で終息することから、当遺構も13B区で終息すると考える。SD210、SD211ともに埋土が砂質の灰褐色土で、幅も狭く浅いことから近世以降の区画溝もしくは耕作溝と考える。遺構からは煙管が出土(第255図)しているが、他は小破片である。当調査区の西側部分には近世以降の構築と考えられる浅い溝が数条確認されている(SD144・SD207・SD208・SD209・SD210・SD211他)が、これらはすべて、その埋土が砂質の灰褐色土である。



第255図 SD210出土遺物実測図
(1/1)

SD101

SD101・SX102・SD103 (第256図) SD101はSX102の南側に付属する溝で、その規模は幅1.0~1.2m、深さ40cm前後を測る。土層断面の観察から、遺構の存続期間の中で数度の掘り返しが認められる。SX102同様、5次調査A区から続く遺構で当調査区では約22mを検出し、8A区で調査区南に逃げる。遺構内からは2期~3期に比定される京都系土師器皿がまとまって出土しており、遺構の時期はSX102と同様16世紀後葉~末葉に比定される。なお、SD101の下位には、下層で京都系土師器皿を含まず、在地系土師質土器皿のみ出土する、溝SD153が検出されている。その構築時期は15世紀後葉~16世紀初頭に比定され、SD101はSD153が埋没した後に、その上位にSX102・SD103とともに構築されたものである。

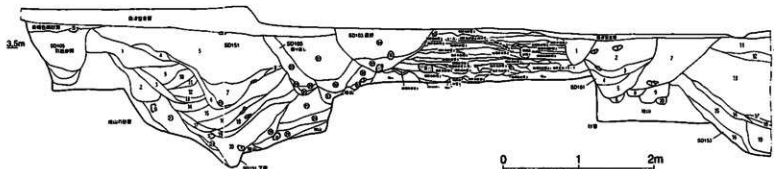
SX102

SX102は5次調査A区から続き、6A区から9A区にかけて調査区を斜走する積土遺構である。その規模は5次A区のそれとほとんど変わらず、基底部幅が2.8~3.2m、上端部の幅が1.9~2.1mを測る。遺構の残存状況は良好で、砂質土と粘質土を交互に積み上げる版築工法によって構築されている。当調査区では長さ約36mを検出し、9A区で調査区南に逃げる。A区からの総延長は100mを超える。基底面直上ないし積土下位には拳大から人頭大の礫を敷いた部位が認められ、土留めの機能を果たしていたと考えられる。また、7A区では積土遺構の基底面で、四角く面取りをした凝灰岩を暗渠風に南北に配石した部分も検出された(第258図)。積土遺構の排水施設の可能性もあるが、詳細は不明である。積土の版築の様相は一様ではなく部位によって異なり、また、礫敷きは集中して行われている部位とそうでない部位が認められる。このことから、積土遺構の構築時に

SD103・SD151

- ① 焼成土質
- ② 焼成土質
- ③ 焼成土質
- ④ 焼成土質
- ⑤ 焼成土質
- ⑥ 焼成土質
- ⑦ 焼成土質
- ⑧ 焼成土質
- ⑨ 焼成土質
- ⑩ 焼成土質
- ⑪ 焼成土質
- ⑫ 焼成土質
- ⑬ 焼成土質
- ⑭ 焼成土質
- ⑮ 焼成土質
- ⑯ 焼成土質
- ⑰ 焼成土質
- ⑱ 焼成土質
- ⑲ 焼成土質
- ⑳ 焼成土質
- ㉑ 焼成土質
- ㉒ 焼成土質
- ㉓ 焼成土質
- ㉔ 焼成土質
- ㉕ 焼成土質
- ㉖ 焼成土質
- ㉗ 焼成土質
- ㉘ 焼成土質
- ㉙ 焼成土質
- ㉚ 焼成土質
- ㉛ 焼成土質
- ㉜ 焼成土質
- ㉝ 焼成土質
- ㉞ 焼成土質
- ㉟ 焼成土質
- ㊱ 焼成土質
- ㊲ 焼成土質
- ㊳ 焼成土質
- ㊴ 焼成土質
- ㊵ 焼成土質
- ㊶ 焼成土質
- ㊷ 焼成土質
- ㊸ 焼成土質
- ㊹ 焼成土質
- ㊺ 焼成土質
- ㊻ 焼成土質
- ㊼ 焼成土質
- ㊽ 焼成土質
- ㊾ 焼成土質
- ㊿ 焼成土質

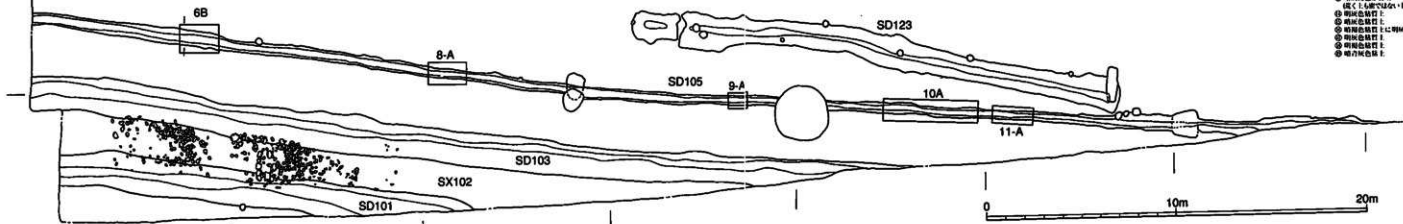
- ① 焼成土質
- ② 焼成土質
- ③ 焼成土質
- ④ 焼成土質
- ⑤ 焼成土質
- ⑥ 焼成土質
- ⑦ 焼成土質
- ⑧ 焼成土質
- ⑨ 焼成土質
- ⑩ 焼成土質
- ⑪ 焼成土質
- ⑫ 焼成土質
- ⑬ 焼成土質
- ⑭ 焼成土質
- ⑮ 焼成土質
- ⑯ 焼成土質
- ⑰ 焼成土質
- ⑱ 焼成土質
- ⑲ 焼成土質
- ⑳ 焼成土質
- ㉑ 焼成土質
- ㉒ 焼成土質
- ㉓ 焼成土質
- ㉔ 焼成土質
- ㉕ 焼成土質
- ㉖ 焼成土質
- ㉗ 焼成土質
- ㉘ 焼成土質
- ㉙ 焼成土質
- ㉚ 焼成土質
- ㉛ 焼成土質
- ㉜ 焼成土質
- ㉝ 焼成土質
- ㉞ 焼成土質
- ㉟ 焼成土質
- ㊱ 焼成土質
- ㊲ 焼成土質
- ㊳ 焼成土質
- ㊴ 焼成土質
- ㊵ 焼成土質
- ㊶ 焼成土質
- ㊷ 焼成土質
- ㊸ 焼成土質
- ㊹ 焼成土質
- ㊺ 焼成土質
- ㊻ 焼成土質
- ㊼ 焼成土質
- ㊽ 焼成土質
- ㊾ 焼成土質
- ㊿ 焼成土質



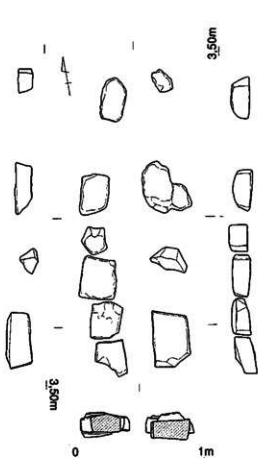
第257図 SD101・SX102・SD103・SD105・SD151・SD153土厨断面図① (1/50)

SD101・SD153

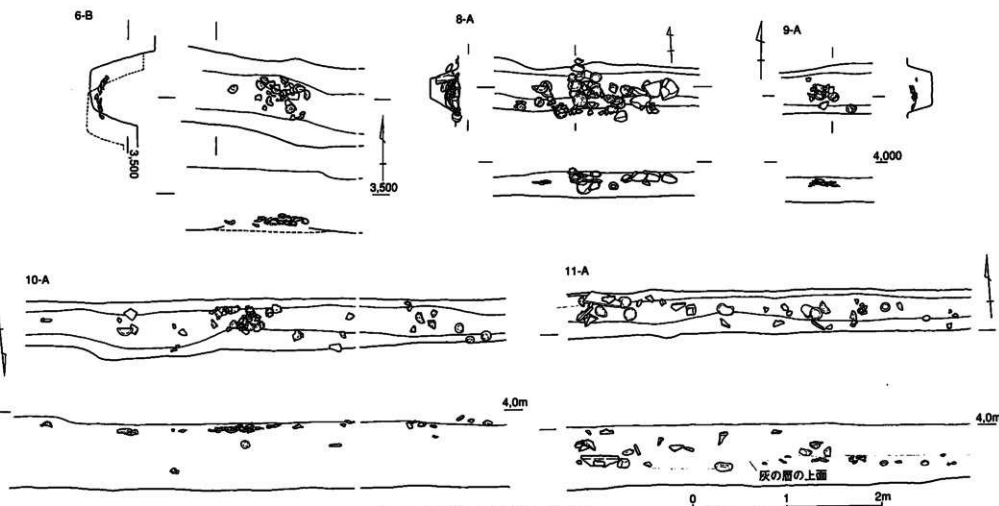
- ① 焼成土質
- ② 焼成土質
- ③ 焼成土質
- ④ 焼成土質
- ⑤ 焼成土質
- ⑥ 焼成土質
- ⑦ 焼成土質
- ⑧ 焼成土質
- ⑨ 焼成土質
- ⑩ 焼成土質
- ⑪ 焼成土質
- ⑫ 焼成土質
- ⑬ 焼成土質
- ⑭ 焼成土質
- ⑮ 焼成土質
- ⑯ 焼成土質
- ⑰ 焼成土質
- ⑱ 焼成土質
- ⑲ 焼成土質
- ⑳ 焼成土質
- ㉑ 焼成土質
- ㉒ 焼成土質
- ㉓ 焼成土質
- ㉔ 焼成土質
- ㉕ 焼成土質
- ㉖ 焼成土質
- ㉗ 焼成土質
- ㉘ 焼成土質
- ㉙ 焼成土質
- ㉚ 焼成土質
- ㉛ 焼成土質
- ㉜ 焼成土質
- ㉝ 焼成土質
- ㉞ 焼成土質
- ㉟ 焼成土質
- ㊱ 焼成土質
- ㊲ 焼成土質
- ㊳ 焼成土質
- ㊴ 焼成土質
- ㊵ 焼成土質
- ㊶ 焼成土質
- ㊷ 焼成土質
- ㊸ 焼成土質
- ㊹ 焼成土質
- ㊺ 焼成土質
- ㊻ 焼成土質
- ㊼ 焼成土質
- ㊽ 焼成土質
- ㊾ 焼成土質
- ㊿ 焼成土質



第256図 SD101・SX102・SD103・SD105・SD123実測図 (1/200)



第258図 SX102石組造構実測図 (1/30)



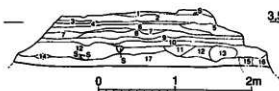
第259図 SD105遺物出土状況実測図 (1/40)

地区ごとによって工人グループが異なっていた可能性も考えられる。積土遺構の上面は、後世にかなりの削平を受けていると推測される。しかし、その構造上から「大友御藏場」北端を画する築地状の遺構が構築されていたと考えられるが、それらの施設が構築されていたことを直接示す痕跡は認められなかった。また、5次調査A区の西で行われた10次調査区(2001.8~2002.3)において、このSX102に接続するように、やはり基底部に隙を敷き詰めた道路状遺構が見つかっており、これは、「府内古岡」にみられる大友城下町から顕徳寺と祐向寺の間を通して、郊外に向かう道路に比定されている。SX102と類似した構築状況であることから、SX102も「大友氏館」南面の道路状遺構の可能性も考えられる。今後、調査区南側の「大友御藏場」内の発掘調査の進展により、当遺構の性格も明確になってくるだろうが、築地状遺構か道路状遺構かについては、今後の調査結果を待ちたい。遺構の構築時期は、付属する溝SD101や溝SD103の構築時期と同時期と推定され、16世紀後葉~末葉に比定される。

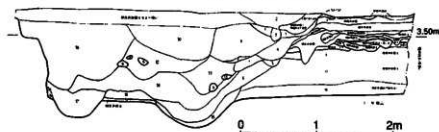
SD103

SD103はSX102の北側に付属する溝で、規模は幅約1.7~2.0m、深さ50~70cmを測る。当遺構も5次調査A区から続く遺構であり、B区では約46mを検出し10A区で調査区南に逃げる。当該遺構もやはり土層断面から数度の掘り返しが認められる。遺構の時期はSD101・SX102と同様に16世紀後葉~末葉に比定される。またSD101同様SD103の下位にもその構築時期が15世紀後葉~16世紀初頭に比定される溝SD151が検出されている。

SX102・SD101・SD103の遺構の性格については大友御藏場の北側境界施設もしくは大友氏館南を東西に走る道路遺構とそれに付属する側溝とする解釈が考えられるが、このことは先に述べたように今後の調査の進展を待ちたい。



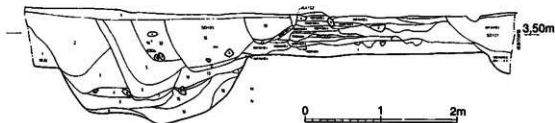
第260図 SX102土層図 (1/50)



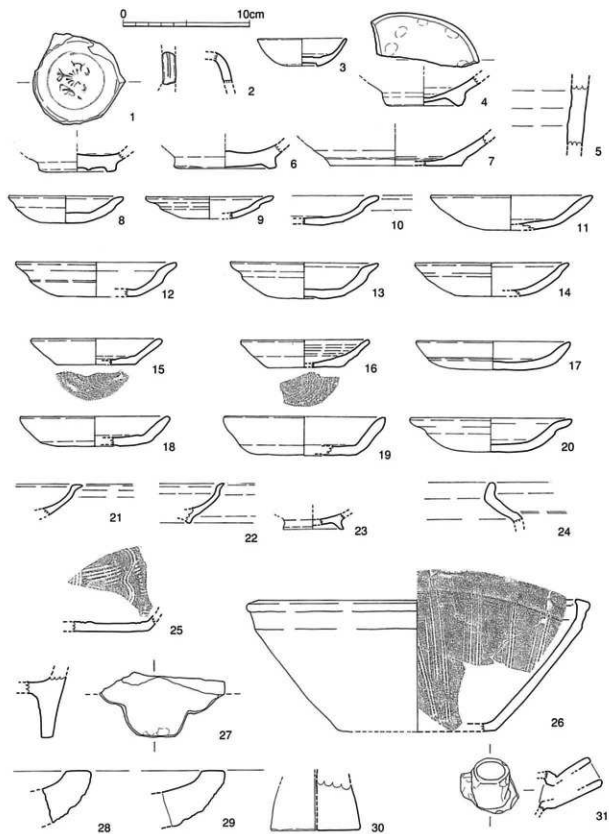
第261図 SX102・SD103土層図 (1/50)

1. 灰色砂質土(灰土含有含む)
2. 暗灰褐色砂質土(砂質土、灰土(灰化土)少量含む)
3. 暗灰褐色土(中砂質土)砂質土を含む
4. 灰色砂質土
5. 灰色土(灰土)砂質土、灰化土を微量含む
6. 暗灰褐色土(灰土)砂質土(灰化土)を少量含む、地下に暗灰色砂質土を含む
7. 灰色土(灰土)砂質土、地下に少量に灰化土を含む
8. 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む、地下に灰化土を多く含む
9. 灰色砂質土
10. 暗灰褐色土(砂質土)を多く含む
11. 暗灰褐色土(砂質土)を多く含む
12. 暗灰褐色土(砂質土)を多く含む
13. 暗灰褐色土(砂質土)を多く含む
14. 暗灰褐色土
15. 暗灰褐色土
16. 暗灰褐色土
17. 暗灰褐色土(砂質土)

- ① 暗灰褐色砂質土
- ② 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む
- ③ 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む
- ④ 暗灰褐色砂質土
- ⑤ 暗灰褐色砂質土
- ⑥ 暗灰褐色砂質土
- ⑦ 暗灰褐色砂質土
- ⑧ 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む
- ⑨ 暗灰褐色砂質土
- ⑩ 暗灰褐色砂質土
- ⑪ 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む
- ⑫ 暗灰褐色砂質土
- ⑬ 暗灰褐色砂質土
- ⑭ 暗灰褐色砂質土
- ⑮ 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む
- ⑯ 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む
- ⑰ 暗灰褐色砂質土(砂質土)を多く含む

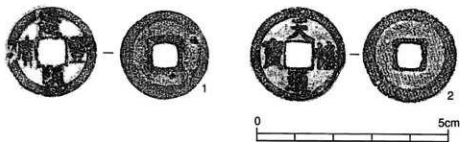


第262図 SD101・SX102・SD103土層図 (1/50)



第263図 SD101出土遺物実測図 (1/3)

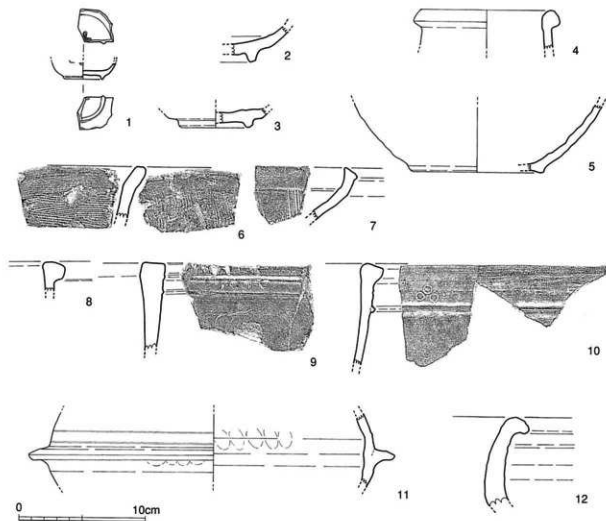
SD101出土遺物 (第263~264図) 第263図1は青磁小皿の底部片である。見込みには型彫りによる花文を施す。内外面とも施軸されるが外底部は蛇の目状の露胎となる。2は青磁の小片である。形態から瓶の把手と推定される。全面に淡青色の軸がかかる。3は白磁の小皿である。見込みは蛇の目軸割ぎとなり、底部付近から外底部にかけて露胎となる。底部は基筒状を呈する。4は朝鮮王朝産灰青軸陶器碗の底部である。見込みに砂目による目跡が認められる。5は瀬戸美濃産陶器瓶の胴部破片である。外面は淡緑灰色の灰軸がかかり、内面は無軸である。6は中国産白磁碗の底部である。見込みは全面施軸、外底部は露胎となる。7は中国南部産の焼締陶器鉢と推定される。底部は未調整である。8~14、17~20は京都系土師器皿である。器壁が6~8mmと厚く、3期の特徴を有する。16世紀末葉に比定される資料である。15~16は在地系土師器皿である。赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する。内面にはロクロ目を残す。21~24は在地産と推定される瓦質土器である。21は口縁部片である。口縁部はなでが施され、胴部は削りて調整されている。実測図では皿としたが蓋の可能性もあり、検討が必要である。22は碗もしくは皿の口縁部片である。高台部分がわずかに残る。23も口縁部片である。口縁部は外反し、口縁端部は内側に屈曲し「く」の字状になる。小破片のため器種は不明である。24は碗の底部片で、外に開く高台をもつ。25~26は豊前地域を中心とする地域で主体的に出土する瓦質土器播鉢で、灰白色を呈する。同一個体の可能性が高い。25は底部片で、見込みに花文状の播目が認められる。外底部周辺は1.5~2cm程度のヘラ削りが施され、中心部は平滑なナデが施される。26は胴部~口縁部である。胴部は丁寧な削りが施され、胴部から続く口縁部は後をもって上方に立ち上がる。口唇部は内側にやや肥厚する。27は瓦質土器火鉢の脚部片である。28~29は茶臼の鈔の破片で、同一個体の可能性がある。30は土師質の燗台である。胎土が京都系土師器と共通する浅黄色系の色調で、底部に糸切り痕が無く、なでを施す。31は土瓶の把手である。第264図1は中国北宋代の「元豊通寶」である。書体は篆書で、初鑄年代は1078年である。2は中国北宋代の「天禧通寶」である。書体は真書で、初鑄年代は1017年である。



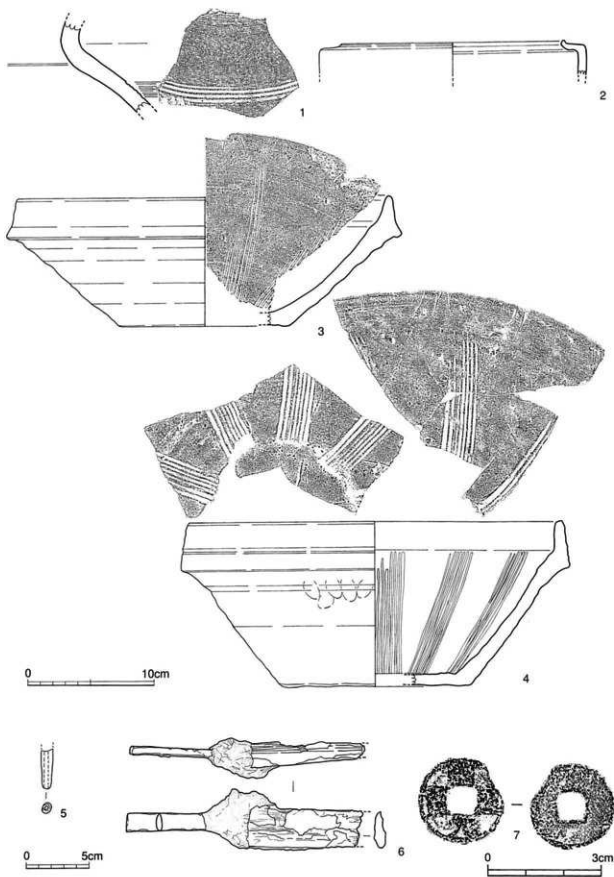
第264図 SD101出土銭実測図 (1/1)

SX102出土遺物 (第265~266図) 第265図1は中国景德鎮窯系青花小杯である。見込みに一条線と花文を描き、高台周辺にも一条線を描く。外面と高台内に文様を描くが欠損のため文様は不明である。2は中国産青磁大盤の底部である。内面に綺文が施されている可能性があるがはっきりしない。内外面とも施軸されているが、高台内の中央部分は無軸である。14~15世紀代の所産に比定される。3は中国産青磁皿の高台部である。内面見込み部分は蛇の目軸割ぎが見られ、外面は露胎となる。4は中国産の褐釉もしくは黒軸陶器の口縁部片である。口縁端部は玉縁状になり、口縁部から外面にかけて全面施軸されている。5は中国産黒軸陶器壺である。底部は露胎となる。6は土鍋の口縁部片である。口縁部はやや外反する。外面は縦の、内面は横の刷毛目を施す。7は瓦質土器播鉢の口縁部片である。口縁部は断面三角形を呈し、外傾する体部から上方に立ち上がる。8は瓦質土器の口縁部片である。口縁端部は断面四角形を呈する。小破片のため器種は不明だが、器

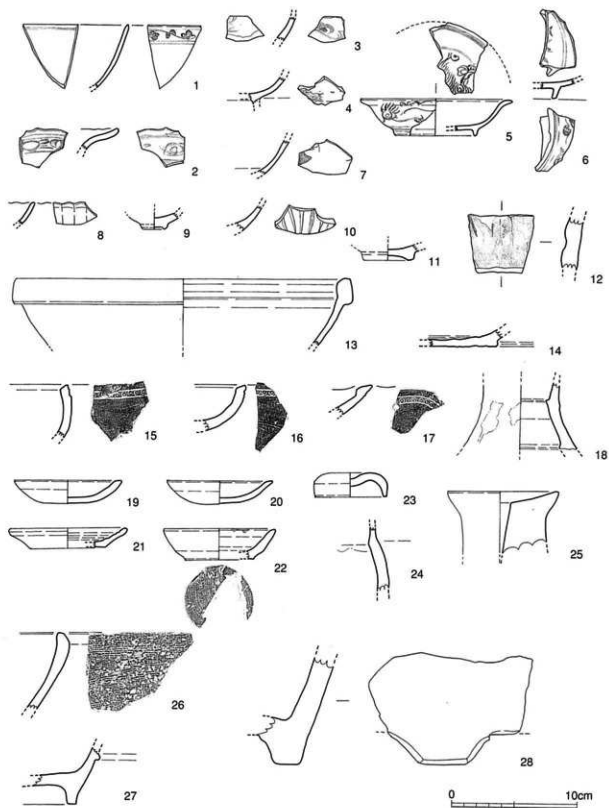
面に煤が付着しており、火鉢の口縁部片と思われる。9～10は瓦質土器火鉢の口縁部片である。9は口縁端部が肥厚し、外口縁下に二条の三角突帯を巡らせ、その間に雷文を押捺する。10は口縁部が外方につまみ出されるように肥厚する。外口縁下に三輪文を施し、その下に一条の三角突帯を巡らす。11は瓦質土器羽釜もしくは茶釜の受突帯部である。外面に2条の沈線を巡らし、内面は指圧痕が残る。12は須恵質土器壺の口縁部である。口縁部はやや外反し、端部は下方に屈曲する。時期・産地は不明である。第266図1は備前系陶磁器壺の頸部片である。外面は灰釉、内面は褐釉を施す。頸部に4条の沈線を巡らせる。2は備前系陶器広口壺である。水指として利用されたものであろう。口縁部は内側に屈曲し、端部をやや上方につまみ上げる。外肩部には灰釉が認められる。3～4は備前系陶器の播鉢である。3の口縁帯は真上に向かうが、立ち上がりが短く、口縁外角には垂下がみられる。中世5期の所産に比定され、製作年代は15世紀中頃～16世紀初頭に比定される。4の口縁帯は上方への立ち上がりが長く、やや内抱え気味となり、断面が「く」の字状となる。口縁対外面に一条の凹線をもち、胴部には指圧痕が残る。中世6期に比定され、製作年代は16世紀初頭～第3四半期に比定される。5は土鍾である。2分の1が欠損しており、灰白色を呈する。6は腐食が激しいが、小柄である。柄部分は青銅製で、刃部は鉄製である。刃先は欠損している。鞘の一部が付着して残存する。柄と刃の間に土塊が付着する。7は中国唐代の「開元通寶」である。書体は真書で、初鑄年代は621年である。



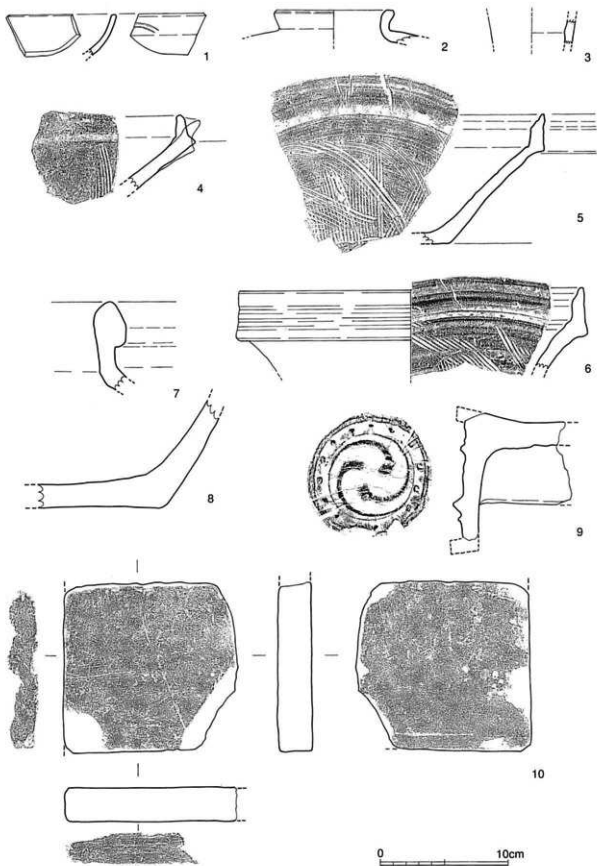
第265図 SX102出土遺物実測図①(1/3)



第266图 SX102出土遺物実測図② (1~6は1/3、7は1/1)

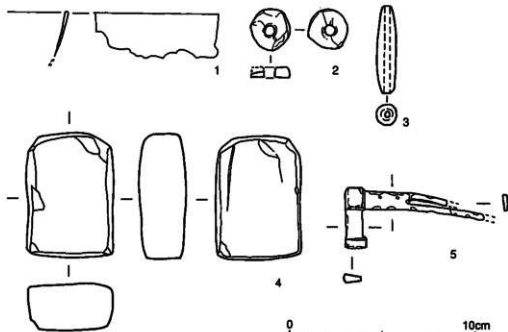


第267図 SD103出土遺物実測図① (1/3)



第268図 SD103出土遺物実測図② (1/3)

SD103出土遺物(第267~269図) 第267図1は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部片である。外口縁部に二条の界線を廻らし、その中に唐草文を描く。内口縁部には界線を廻らす。小野分類のC群に比定される。2は中国景德鎮窯系青花皿の口縁部片である。口縁部は稜花を呈する。小野分類のF群に比定される。3は中国産の五彩皿の胴部片である。4は須恵質土器の底部で碗と推定する。外面に黒漆を貼っている。5は中国景德鎮窯系青花皿である。胴部に唐草文を施し、見込みに玉取獅子と思われる文様を施す。外底部は無軸である。小野分類のB1群に比定される。6は中国景德鎮窯系青花碗の高台部で、小野分類のC群に比定される。外面に唐草文を施し、見込みに花文を描く。7は漳州窯系青花碗の胴部片である。8は中国産白磁皿の口縁部片で、菊花を呈する。9は中国産白磁小杯の底部片である。全面に施釉され貫入が認められる。高台登付は露胎となる。10は龍泉窯系青磁碗である。11は瀬戸美濃産系天目茶碗の高台部分である。内反り高台であり、体部は直線的に開くものと思われる。12は中国産黒軸陶器の胴部下半片である。13は口縁部が断面方形の緑帯状になる中国南部産焼締陶器鉢C類の口縁部片である。内面に鉄軸を施す。14は13同様中国南部産焼締陶器鉢C類の底部片である。内底に鉄軸を施し、底部外面は露胎で未調整である。13と同一個体の可能性もある。15~17は焼締陶器の口縁部片である。小破片のため器種・産地ともに特定できないが特殊な器形の鉢などの口縁部と推定される。いずれも外口縁部に二条の沈線を描き、その間に竹管文を施す。18は中国産磁器瓶の頸部である。外面に翡翠軸が掛かるが、二次被熱により赤紫色に変色している。19~20は京都系土師器皿である。いずれも3期の特徴を有し、口唇部には煤が付着する。21~22は在地系土師質土器皿である。21は内面にロクロ目を顕著に残し、胎土が赤褐色系の色調を呈する。22は色調・胎土は京都系土師器に類似している。口縁部端に煤が付着する。23は焼塩壺の壺である。胎土は赤褐色系の色調を呈する。24は焼塩壺の胴部片である。色調は浅黄色を呈する。25は土師質土器の燗台である。在地系土師質土器と共通する赤褐色系の色調を呈する。26は瓦質土器鉢の口縁部片である。27~28は瓦質土器火鉢の脚部である。28は胴部下半に一条の突帯が認められる。



第269図 SD103出土遺物実測図③ (1/2)

第268図1は中国産青磁碗の口縁部片である。2～8は備前系陶器である。2は瀝の口縁部片である。3は掛花生入の胴部片である。4～6は摺鉢である。4は中世4期もしくは5期に比定される。5は近世1期に比定される。二次比熱によると思われる煤が付着している。6は近世1期に比定される。7～8は甕である。7は口縁部片で、口縁部は玉縁状を呈する。8は底部片である。9は軒九瓦で瓦当文様は左回りの巴文で周縁部に珠文を15個配する。10は埴である。第269図1は銅製品である。器種・用途は不明だが碗などの容器の口縁部と推定する。2は在地系土師質土器を円形に加工し、中央部に孔を穿った製品である。用途は不明である。3は土錘である。二次比熱によると思われる煤が付着する。4は砥石である。5は銅製の海老碗の甕である。

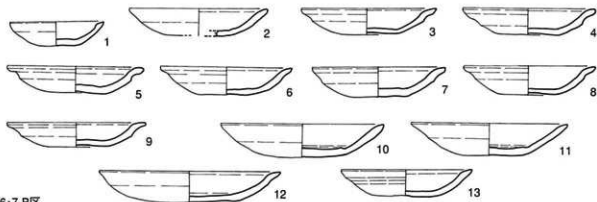
SD105 (第256図) 6B～12A区で検出した遺構である。12A区で調査区南に逃げ、調査区外に延びる様相を見せる。検出した溝の規模は長さ約72m、幅60～80cm、深さ40～80cmを測る断面箱形の溝である。当遺構はSX102・SD101・SD103と異なり、5次調査A区では検出されておらず、6区の西の調査区外で終息あるいは南北どちらかに曲がること予想される。この遺構からは京都系土師器の良好な一括資料が出土し、SX102・SD101・SD103や他の切り合いをもつ遺構との時期差を考える上で貴重な資料となる。また、遺物の出土は遺構全体にみられるが、一定量の遺物が集中して出土する地点(第259図参照)が検出された。遺構の時期は16世紀中葉～後葉に比定され、SX102・SD101・SD103が構築された時期には埋没していたと推定される。

SD105出土遺物(第270～275図) 第270図1～13は6B区の下層から一括出土した京都系土師器皿である。2期に比定されるもので3法量に分かれる。14～23は7B区出土の遺物である。14～20は京都系土師器皿で一括廃棄された状態で出土した。これらの資料も3法量に分かれ、2期に比定される。21～22は在地系土師質土器皿であるが、21は京都系土師器を模倣して作られたもので胎土が浅黄色を呈する。22は内面にロクロ目を顕著に残すもので、胎土は赤褐色系の色調を呈するものである。23は瓦質土器火鉢の口縁部片である。外口縁下に×状文を連続的に施す。24～38は8B区出土の遺物である。24～29は京都系土師器皿の一括資料である。やはり3法量に分かれ、2期に比定される。30～37は在地系土師質土器皿である。いずれも底部に糸切り痕を残す。32～36は内面にロクロ目を顕著に残すものである。37は京都系土師器皿を模倣したもので、胎土は浅黄色を呈する。38は燭台である。在地系土師質土器と共通する赤褐色系の色調で脚台部が短く、底部に糸切り痕を有する。皿部から底部にかけて穿孔され貫通する。第271図1～31は8B区上層からの一括出土資料である。1～30は京都系土師器皿で2期に比定される資料である。口径から5法量に分かれる。31は在地系土師質土器皿で摩滅が激しいものである。32～46は9A区上層出土の一括資料で、2期に比定される京都系土師器皿である。これらも口径から5法量に分かれる。2・8・13・18は口唇部に煤が付着し灯明皿として使用されていたものと推定される。第272図は10A区出土の一括資料である。1～28、30は2期に比定される京都系土師器皿で、29、31は在地系土師質土器皿である。第273図1～21は11A区出土資料である。1は中国製徳鎮窯系青花皿で底部は萆萆底となり、高台登付は無軸である。小野分類の皿C群に比定される。2～16は京都系土師器皿で2期に比定される。17～18は内面にロクロ目を顕著に残す在地系土師質土器皿である。19は中国産天目茶碗の底部である。内底部は黒色の釉で全面施軸され、外底部は露胎となる。外底部に高台を削る時に付いたと思われる「の」の字状の砂粒の痕が見られる。20は備前系陶器摺鉢の口縁部である。21は形態から陶器の把手と推定する。外面に鉄軸を施す。22～34は12A区出土資料である。22は中国産磁器青花碗で、高台登付は施軸されない。内外面とも底部付近に凹線を廻らせる。23～24は中国南部産の焼罽陶器鉢の口縁部である。23は内外面に褐釉を施し、鉢C類に比定される。24は口縁部が鐮状を呈し、口縁部上面に凹線が廻る。鉢A類に比定される。25～33は京都系土師器皿

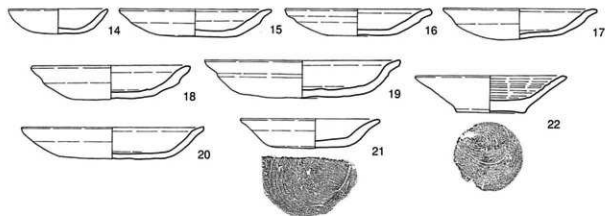
3法量

5法量

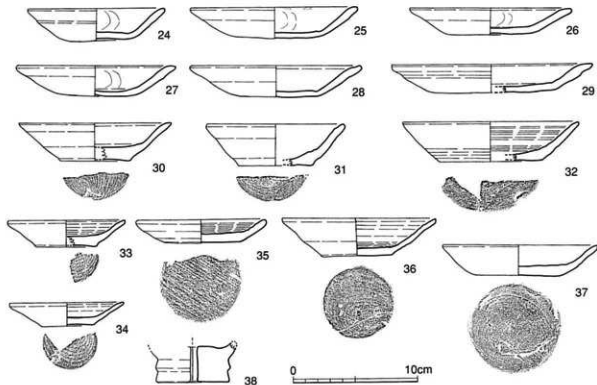
6-B区 下層



6-7-B区

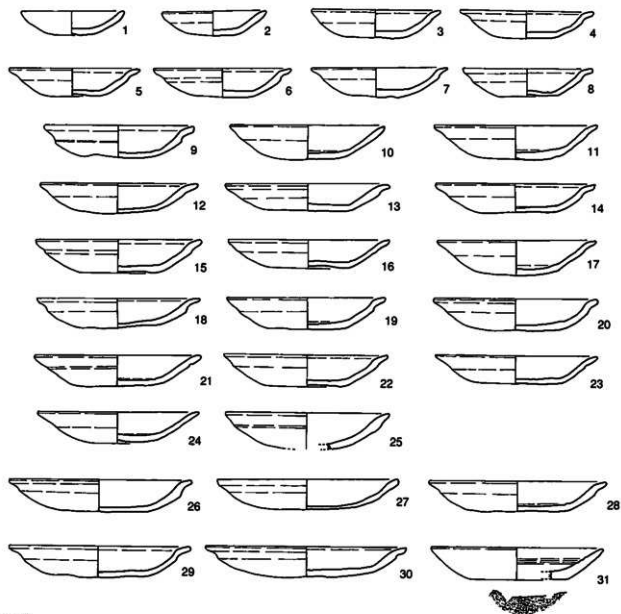


8-B区

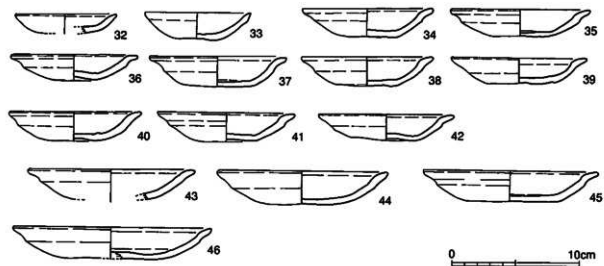


第270图 SD105出土遺物実測図① (1/3)

8-B 上層



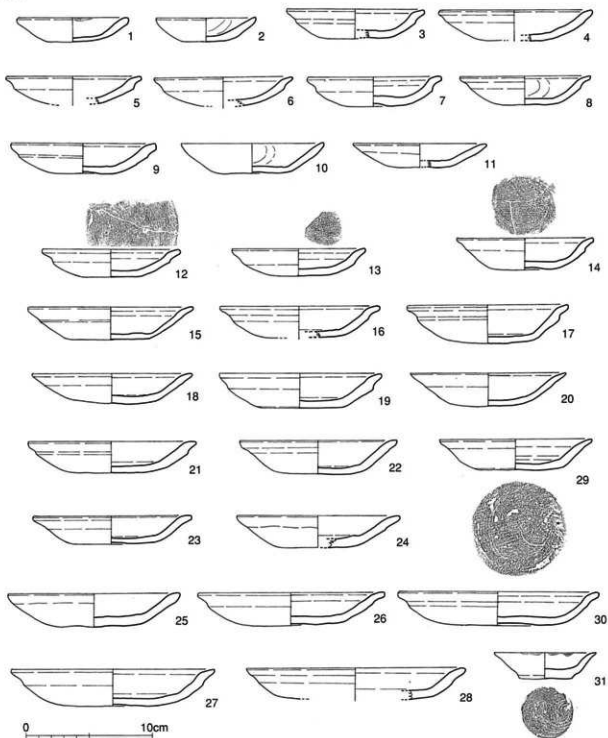
9-A 上層



第271図 SD105出土遺物実測図② (1/3)

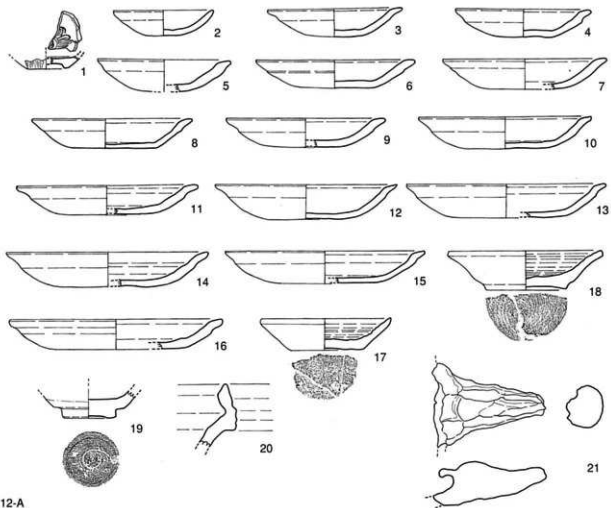
で2期に比定される資料である。34は内底部付近にロクロ目を残し、胎土が赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。

10-A

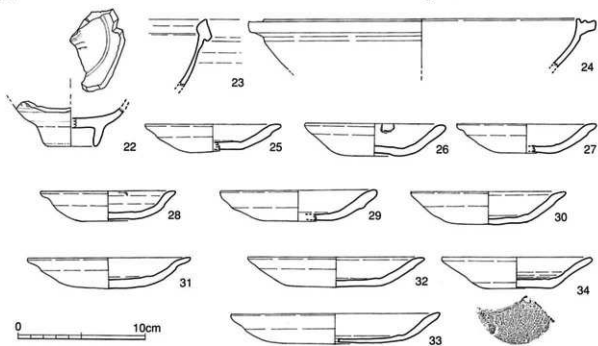


第272図 SD105出土遺物実測図③ (1/3)

11-A



12-A



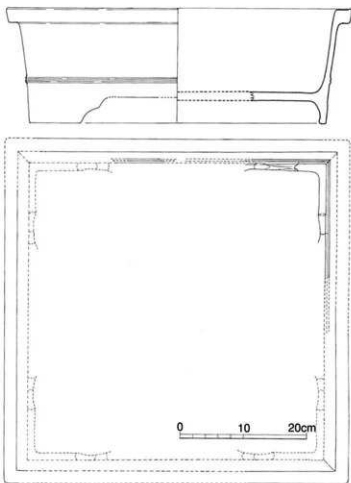
0 10cm

第273図 SD105出土遺物実測図④(1/3)

第274図は中国北宋代の銅銭である。錯で読みづらいが「熙寧元寶」と読める。書体は真書で、初鑄年代は1068年である。第275図は11B区出土の瓦質土器火鉢である。ほぼ方形を呈し、口縁部は折り倒したように外方に張り出す。胴部下半に2条の三角突帯を巡らせる。



第274図 SD105出土銭実測図(1/1)



第275図 SD105出土遺物実測図⑤(1/6)

SD145

敷度の掘り直し

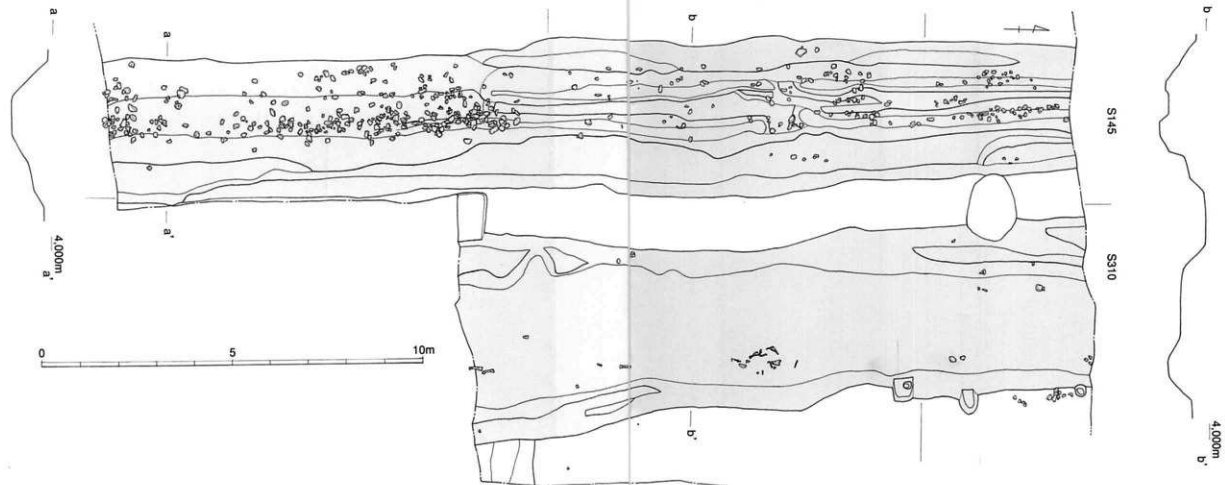
SD145 (第276図)

14区を南北に縦断する形で検出された溝で、南北両端ともさらに調査区外に延びる。検出規模は長さ約25m、幅4～5m、深さ約1.0mである。遺構は土層断面から検出規模より小規模の溝が数度で掘り直されていることが認められるが、平面プランで確認はできず、溝の変遷は確認できなかった。当遺構からは金箔が貼られた京都系土師器が出土している(第279図13)。遺構の最終埋没段階は16世紀後葉に比定される。

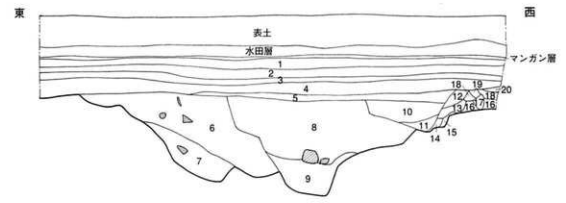
SD145の東にはSD145と平行するように南北に延びる溝状遺構SD310を検出している。SD145とSD310の間には1.0～1.5m程の空地があり、道路状遺構もしくは築地状の遺構が存在した可能性も考えられる。

当調査区の北には大友氏館跡があり、南には大友氏御藏場跡が推定されている。また、西側は大友府内町跡第8次調査が行われ、当調査区とは様相の違う調査結果が出ている。これらのことから考えてこのSD145とSD310は重要な意味を持つと思われる。つまり、大友氏館と大友御藏場、町屋を画する意味合いを持つことも考えられる。

また、この溝状遺構を延長すると大分市が平成11年12月～12年2月に調査した大友氏館第4次調査にあたり、ここでは南北に延びるSD003とSD006が検出されている。当該遺構は出土遺物から16世紀中葉に比定される。SD145の最終段階からは時期は遡るが、これらの溝状遺構に続く可能性もある。

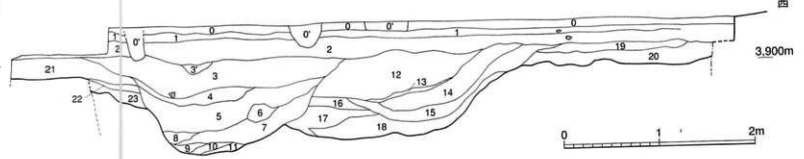


第276図 SD145・SD310実測図 (1/100)



- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1. 黄褐色土 | 11. 暗灰色砂質土 |
| 2. 水田層 | 12. 明褐色砂質土 |
| 3. 水田床土 | 13. 明灰色砂質土 |
| 4. 明灰色砂質土 | 14. 明褐色砂質土 |
| 5. 明灰色砂質土 (4より少し暗い) | 15. 暗褐色粘質土 |
| 6. 暗褐色粘質土 (よくしまる) | 16. 暗褐色粘質土 (砂が混ざる) |
| 7. 茶褐色砂質土 | 17. 暗灰色砂質土 |
| 8. 暗褐色粘質土 | 18. 明灰色砂質土 |
| 9. 暗褐色砂質土 | 19. 明褐色砂質土 |
| 10. 暗褐色粘質土 (小礫を多く含む) | 20. 明褐色砂質土 |

第277図 SD145土層断面図 (1/40)



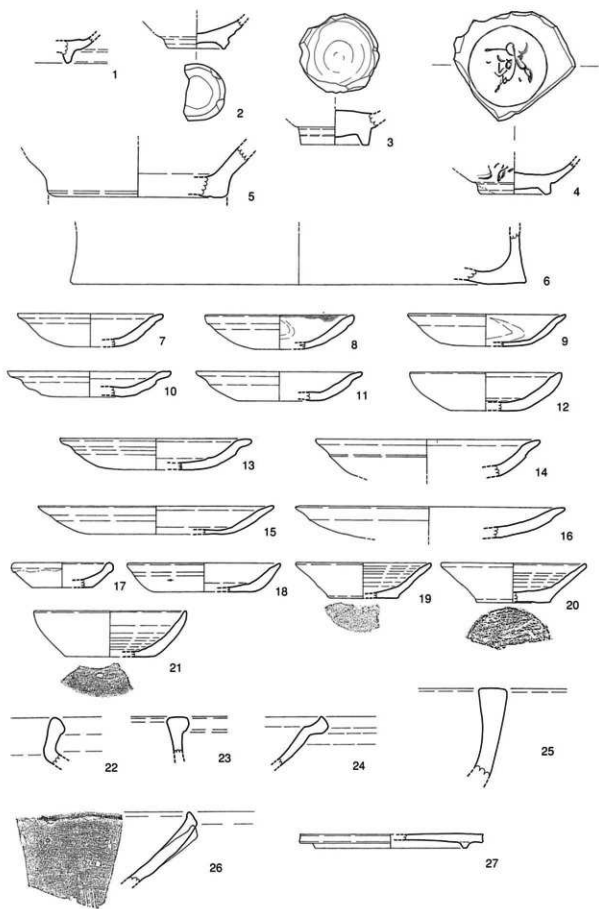
- | | |
|-------------------------------------|--|
| 0. 表土 | 13. 暗褐色粘質土 (溝(古)の埋土・掘り直し) |
| 0'. 段丘 | 14. 茶灰色粘質土 |
| 1. 暗褐色粘質土 | 15. 暗茶灰色粘質土 |
| 2. 暗茶灰色粘質土 (溝をバクする整地上、京都系土・脚器3期を含む) | 16. 暗褐色粘質土 |
| 3. 暗茶褐色粘質土 (砂質分を多く含む) | 17. 暗黄灰色砂質土 |
| 4. 茶灰色砂質土 | 18. 暗茶褐色粘質土 (京都系土・脚器2期を含む) |
| 5. 茶灰色砂質土 | 19. 黄褐色砂質土 (SD310形成以前の築地層、砂質であるがよくしまる) |
| 6. 黄褐色ドロック | 20. 暗茶灰色砂質土 (築地層) |
| 7. 暗茶褐色粘質土 | 21. 暗褐色粘質土 (焼土粒を含む、積土遺構形成土か?) |
| 8. 暗茶灰色砂質土 | 22. 暗褐色粘質土 (焼土粒を含む、積土遺構形成土か?) |
| 9. 茶灰色砂質土 | 23. 暗黄灰色砂質土 (堆山の二次堆積土、積土遺構形成土か?) |
| 10. 暗褐色粘質土 | |
| 11. 暗茶灰色粘質土 | |
| 12. 黄褐色砂質土 | |

溝(新)の埋土

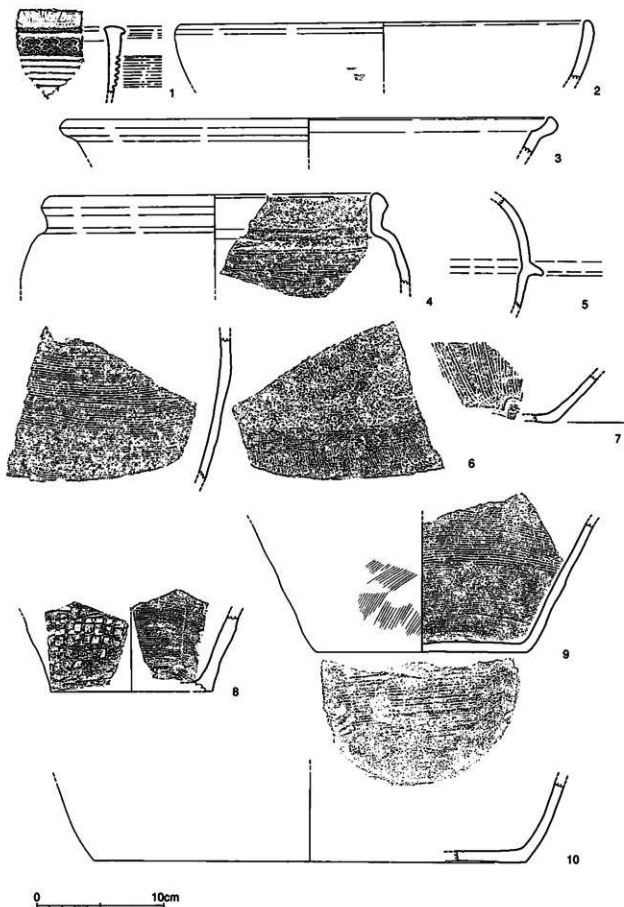
第276図 SD130土層断面図 (1/40)

SD145出土遺物 (第279~282図) 第279図1は中国産青磁の高台片である。2は白磁の高台片である。緑灰色の釉が掛かり、高台端部に目跡があることから、朝鮮王朝産白磁と推定する。3は中国産青磁の高台片で、高台部は露胎となる。底部周辺を意図的に打ち欠いている。4は中国漳州窯系磁器碗である。見込みに一条の圈線を巡らし、花文を描く。外底部は露胎となる。5は中国産褐釉陶器の底部である。6は中国産褐釉陶器の底部片で、底部はやや上げ底状になると思われる。7~14、16、18は3期に比定される京都系土師器皿である。7は外面に煤が付着する。8は口縁内面に煤が付着する。13は金箔が貼られた京都系土師器皿で、黒漆を塗った後、金箔を貼ったものである。いわゆる「ハレ」の場合において使用され、廃棄されたものと考えられる。15は器壁の薄さから1期に比定される京都系土師器皿である。泥入品か。17は中国産青磁小皿である。口縁部はやや玉縁状になる。口縁部から内面に淡緑色の釉が掛かり、外面は露胎となる。19~21は在地系土師質土器皿である。いずれも内面にロクロ目を残すものであるが、19~20は口縁部が外反するのに対し、21は口端が突り、内反する。22~27は瓦質土器である。22は壺の口縁部片で、やや外反する。23は火鉢の口縁部片で、口縁端部は肥厚する。24は鍋の口縁部片で、口縁部は外傾しながら開き、口端部で若干内湾する。25は風弁の口縁部片である。口縁端部はやや肥厚する。26は鉢鉢の口縁部片である。口縁部は外傾し、口縁端部は内側にやや突出する。27は蓋である。外面は丁寧なナデが施されている。第280図1~10は瓦質土器である。1は火鉢である。口縁端部は内外にわずかに肥厚し、口縁下に梅花文が連続的に押捺される。体部外面は波板状の平行沈線が5条以上認められる。このタイプの火鉢は県下では、久住町の「小路遺跡」で数点の報告例¹⁾がある。口縁下のスタンプは巴文であり、当資料のスタンプとは異なるが、それ以外は非常に類似する資料である。2は鉢の口縁部片である。口縁部はやや内反し、外面にハケ状の調整の痕が認められる。3は鍋の口縁部片である。外傾する口縁に続き、口端部は若干内湾する。4は壺である。玉縁状の口縁部を持ち、内外面ともにハケ目による調整が施される。5は羽釜の胴部分である。6は壺の胴部である。内外面ともにハケ目による調整が施される。7は鉢鉢の底部付近の破片である。外面はヘラ削りが施され、胴部内面に櫛状工具による掃目が7本認められる。見込みには花文状の掃目が認められ、豊前地域を中心とする地域で主体的に出土する瓦質土器鉢鉢と推定される。8~9は壺の底部である。8は胴部外面を工具による格子状のタタキ目が認められ、内面はハケ目調整が施される。9は外面に斜め方向のハケ目調整の痕跡が残り、内面は横方向のハケ目調整である。外底部には板状圧痕が認められる。10の外面はミガキ調整、内面はナデ調整が施される。鉢の底部であろうか。第281図1~2は備前系陶器壺の口縁部片である。いずれも近世1期に比定される。1は口縁部の玉縁が下方に垂下しない。2は垂下した玉縁の下部が角張り、外面に門線がみられる。3~4は備前系陶器壺の底部である。3の底部には糸切り痕が残り、いずれもロクロ目が認められる。5~10は備前系陶器鉢鉢である。5~7は口縁部片で、口縁部が内傾あるいは直立して立ち、口縁部の凹線が顕著である。内面は放射状の掃目に加えてナメ方向の掃目加わる。8は口縁部がやや内傾気味に立ち、外面の凹線はみられない。掃目は8本が認められる。9は底部から胴部片で、内面は放射状の掃目に加えてナメ方向の掃目加わる。10は胴部下半の資料である。掃目は7本が認められる。5~7、9は近世1期に比定され、8、10は中世6期に比定される。11は小柄である。12は中国明代の銅銭で一部欠損しており、鋳で読みづらい点もあるが残存部分から「洪武通寶」と推定する。初鋳年代は1368年である。

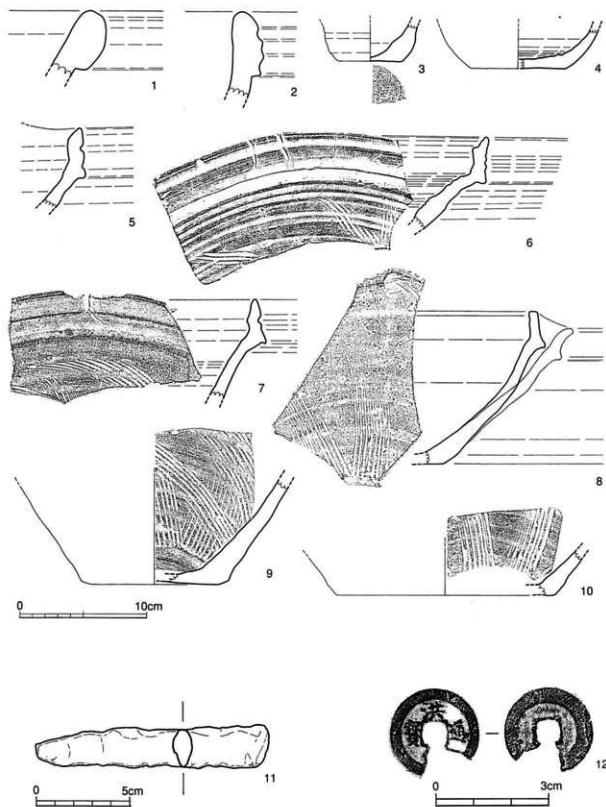
(1) 大分県久住町教育委員会 「小路遺跡 土屋敷遺跡」(原骨担い手倉成岡場整備事業部野西部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ)



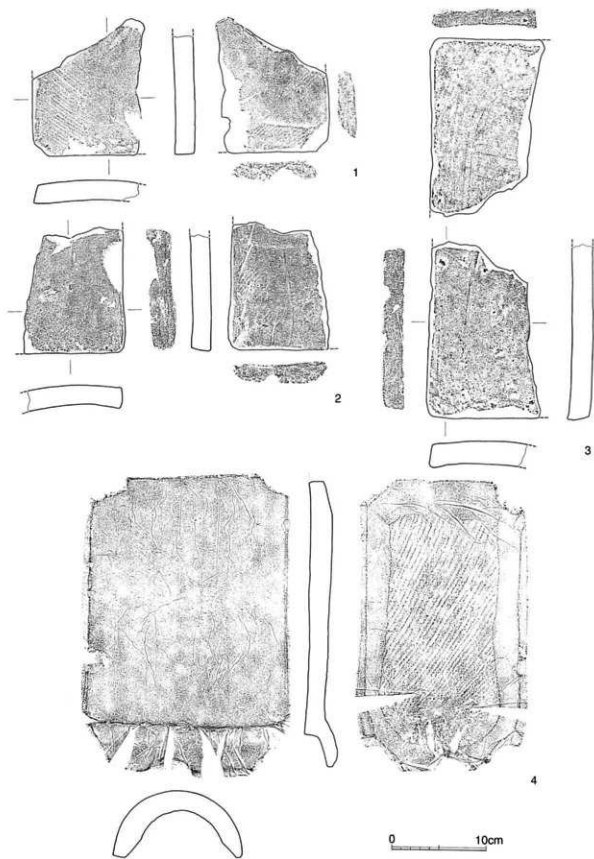
第279図 SD145出土遺物実測図① (1/3)



第280図 SD145出土遺物実測図② (1/3)



第281図 SD145出土遺物実測図③ (1~10は1/3, 11は1/2, 12は1/1)

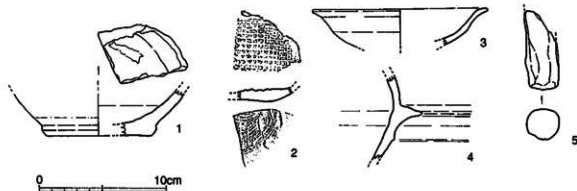


第282図 SD145出土遺物実測図④ (1/4)

第282図1～3は平瓦である。1は凹面に糸切りによるコビキ痕がみられ、その後には直線的な幅3cm程のタタキ痕を残す。4は九瓦である。外面は縦方向のナデが施されタタキをすべてナデ消している。凹面にはコビキ痕が残り、布目が認められる。吊り紐は7条以上で、刺し縫い状にして若干垂れ下がり、いわゆる九州タイプに近い。広端部凹面側は、4cm程度のケズリが施される。玉縁凹面側の両側面のみ取りは胴部まで及ぶ。玉縁凹面狭端部は、幅2cm程で削られる。いぶし焼きされており、暗灰色を呈する。

SD310 (第276図) 14B～15D区に位置し、調査区南北に縦断する平成13年度後半期の調査で検出された溝状遺構である。検出規模は長さ16.8m、幅約4m、深さ1.0～1.3mを測る。平面プランでは確認できなかったが、土層観察から検出規模より小規模の溝が、数度に渡って東から西へ掘り直されていることが判明している。西側には1.0～1.5m幅の空地地をはさみSD310と平行するように調査区を南北に縦断するSD145が検出されている。SD145は西から東へ掘り直されているもので、二つの溝は関連をもつものと推定される。また、SD310の東側で行われた8次調査区では当調査区とは線相を異にし、遺構密度が極端に少ないことから、これら二つの溝は当調査区とSD310以降を画する機能を持つものと推定される。

SD310出土遺物 (第283図) 1は中国越州窯系青磁碗の底部片である。内面から胴部は施釉され、胴部下半から外底部は露胎となる。見込み部分には目跡が残る。9世紀代の所産であろう。混入品か。2は瀬戸美濃系陶器鉢である。わずかに残る胴部と脚目の一部に施釉されているが、外底部は露胎となる。底部には糸切り痕が残る。3は中国産白磁皿の口縁部片である。口縁部は外反し、内外面ともに施釉される。貫入が多く入る。4は瓦質土器羽釜の胴部分で、灰色の色調を呈する。5は端部が欠損しているが瓦質土器鍋の脚部片である。焼成不良のためか赤褐色の色調を呈する。

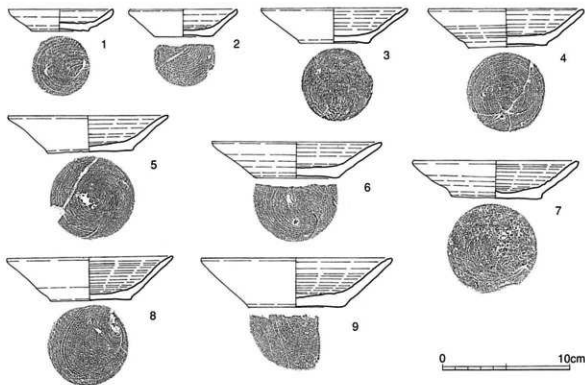


第283図 SD310出土遺物実測図 (1/3)

SD114 (第290図) 6B区～8B区で検出された、SD105、SK115に切られる溝である。検出した規模は長さ11.4m、幅30～40cm、深さ20～30cmを測る。溝の内部には遺物や大量の糠が廃棄された状況で検出された。SD101・SX102・SD103・SD105とはその軸が異なり、軸をやや北に振る。平成12年度前半期の調査で検出していた当遺構は、平成12年度後半期からの調査でその延長部分を確認した。しかしながら、平成12年度後半期の調査では周辺の遺構との切り合い関係をうまくつかめず、出土遺物の中には京都系土器Ⅱ期と推定される遺物なども見られるが、SD105との切り合い関係から15世紀末葉～16世紀前葉の時期に比定される。

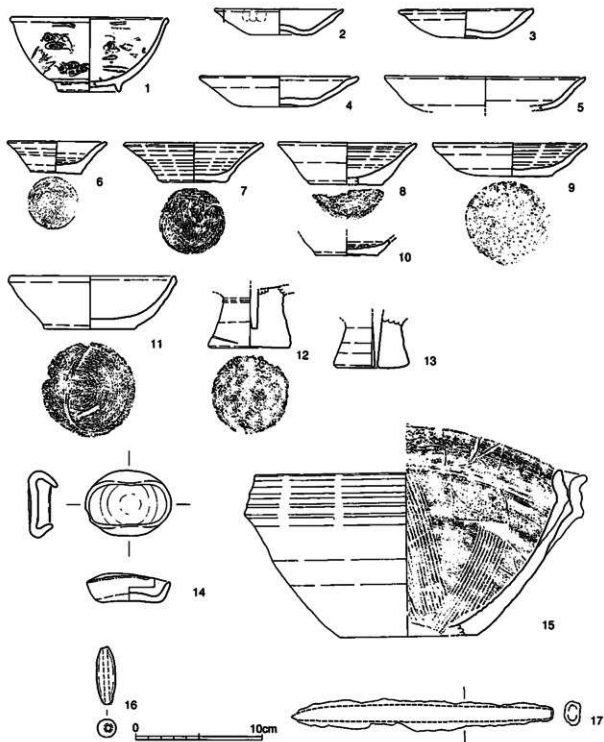
SD114出土遺物（第284～285図） 第284図は平成12年度前半期の調査で出土した遺物である。

1～9は内面に幅狭のロクロ目が明瞭に残る、在地系土師質土器皿である。胎土は赤褐色系の色調を呈する。1～2は小皿で、1は口縁部がやや内反し、口径8.2cm、器高は1.7cmである。2は口縁部が開き、口径8.6cm、器高2.1cmである。3～5は口径が12cm前後で器高は3cm前後のものである。6～8は口径が13cm前後で器高は3cm前後のものである。9は口径15.1cm、器高3.8cmとやや大型のものである。また、1と7は底部の糸切り痕から、左回転によってロクロ成形されたものであることがわかる。第285図は平成12年度後半期の調査で出土した遺物である。1は中国産五彩碗である。高台登付は露胎となる。二次被熱により変色している。2～5は京都系土師器皿で2期に比定される。器壁はいずれも4～5mm程で、2は底部がくぼむもので、口径10.4cm、器高2.0cmを測る。3はやや底部がくぼみ、口径10.7cm、器高2.2cmを測る。4は口径12.8cm、器高2.4cm、5は復元口径16.0cm、器高2.2cmを測る。6～11は在地系土師質土器皿である。6～9は幅狭のロクロ目が明瞭に残り、口縁部が外反するものである。特に7は内外面にロクロ目が顕著に残る。10は底部片であるが、内面に顕著なロクロ目が残る。11は内外面にロクロ目は認められず、口縁部はやや内反する。12～13は燗台である。12は底部に糸切り痕が残り、穿孔は貫通しない。胎土は赤褐色系の色調を呈する。13は摩滅のため底部の糸切り痕は確認できないが、穿孔は僅かに貫通し、胎土は赤褐色系の色調を呈する。14は土師質土器耳皿で、胎土は京都系土師器皿と同じ浅黄色を呈する。15は備前系陶器摺鉢である。口縁帯が長くなり内抱え気味で立ち、断面は「く」の字状になる。重ね焼き時のヘタリを防ぐためか、口縁帯外面には凹線が施される。中世6期に比定される。16は土錘である。淡茶褐色系の色調を呈する。17は鉄製品である。長さ20.8cm、最大幅2.4cmを測る。

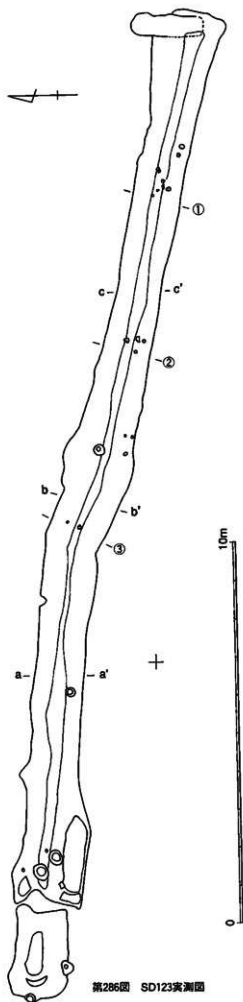


第284図 SD114出土遺物実測図① (1/3)

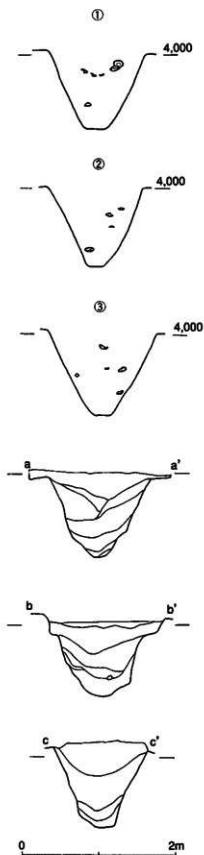
SD123 (第286図) 9B区~11A区で検出された溝状遺構である。SD105に平行するように構築されるが、軸を若干北に振り、「へ」の字状に南に屈曲する。西端は9B区で一端途切れ土坑状になる。東は11A区で終息し、SK129に切られる。全長約26m、幅1.3~2.0m、深さ約1.0mを測る。埋土中から在地系土師器と京都系土師器が共伴して出土しており、これらの遺物から16世紀前葉~中葉に比定され、SD101・SX102・SD103・SD105の時期よりは遅るものと考えられる。また、いずれの溝とも連続せず、単独で存在するため、当該時期の区画溝と推定する。出土遺物の中で中国



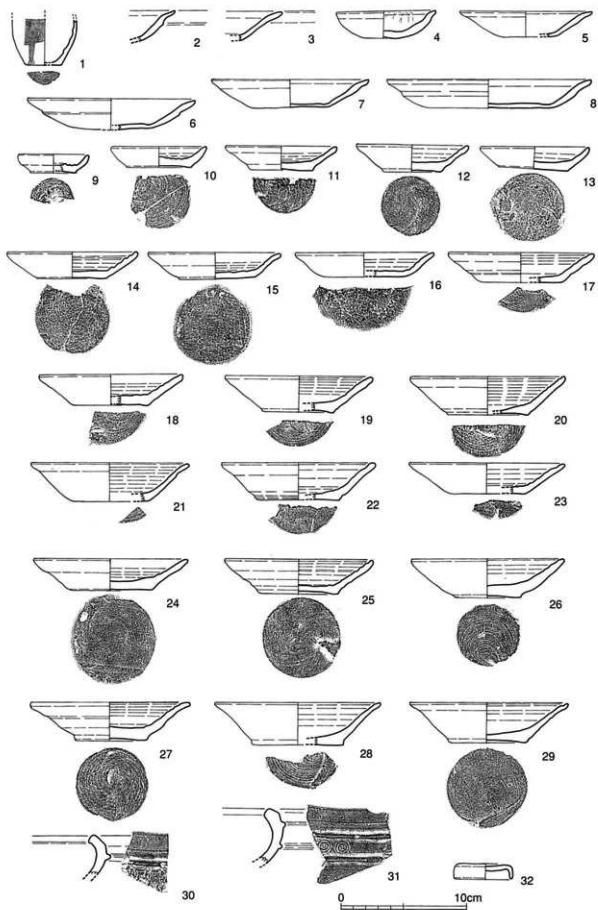
第285図 SD114出土遺物実測図② (1/3)



第286図 SD123実測図



第287図 SD123土層図・断面図

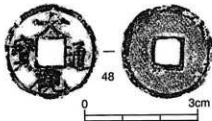


第288図 SD123出土遺物実測図 (1/3)

産の茶入れ(第288図1)は特に注目すべき資料の一つである。

茶入れ

SD123出土遺物(第288~289図) 第288図1は中国産黒軸陶器小壺で「茶入れ」として使用されていたものと推定する。SD123で出土した破片とSD123の北に存在するピットから出土した破片が接合した。胴部外面に黒軸が掛かり、胴部下半から底部及び内面は露胎となる。底部は糸切り痕が残り、内面はロクロ目が顕著に残る。器壁は2mm前後と非常に薄く、胎土は淡黄褐色を呈し、混入物をほとんど含まず精緻である。2~8は胎土が浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。2~3は1期に比定される京都系土師器皿の口縁部片である。4は京都系土師器皿の最も口径の小さいもので、内外面に煤が付着する。口径7.8cm、器高2.1cm、器壁の厚さは5mmと他の京都系土師器皿と比べると厚く混入品とも考えられるが、この法量(8cm前後)のものは時期の特定が難しく何ともいえない。5~8は器壁が薄く、1期に比定される京都系土師器皿で、煤の付着は見られない。9~29は色調が赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を残す在地系土師器皿である。9は最も口径が小さいもので内面にロクロ目を残す。10~29は内面にロクロ目を顕著に残すものである。12は外面に煤が付着する。15は底部に板状圧痕が見られる。内外面と外底部に煤が付着し、明らかに灯明皿として使用されていたことがうかがわれる。24は底部に板状圧痕が見られ、煤が付着する。26・27・28は内面に煤が付着する。30~31は瓦質土器香炉の口縁部片である。30は内外面ともに丁寧なナデ調整が施され、外口縁に一条の突帯を巡らせる。またその下に型押しによる文様が認められるが詳細は不明である。31は外口縁に二条の三角突帯を巡らせ、その間にヘラ描きによる文様を施す。32は胎土が明淡褐色を呈する土師質土器壺の蓋で、焼塩壺の蓋として使用されていたものである。第289図は中国北宋代の「大観通寶」である。書体は真書で初铸年代は1107年である。



第289図 SD123出土銭実測図(1/1)

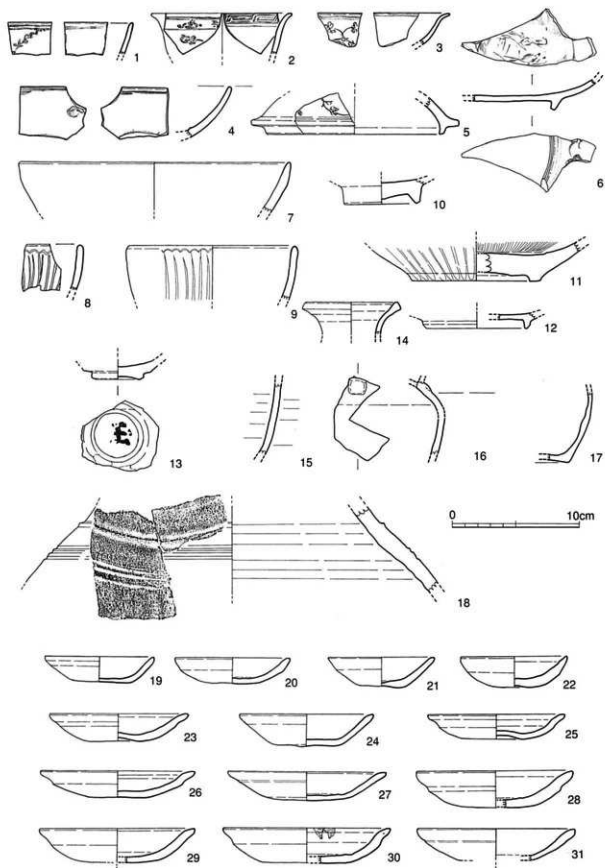
SD151(第290図) 6B区~11A区で検出した大型の溝で、SX102・SD103の下位に構築される。その規模は長さ52.5m、幅3~3.5m、深さ約1mを測る。6B区で北に延びるとともに、西は第5次調査A区に延びると思われる。溝の土層観察から(第291図参照)上層・下層に大別され、少なくとも1ないし2回の掘り直し、あるいは修築がなされていることがうかがわれる。埋土には粘質土層などの堆積が認められ、遺構内が帯水の状況であったことを示唆している。上層・下層ともに土師質土器や瓦質土器等を包含するが、上層の遺物には中国産青花等の輸入陶磁器が混ざり、土師質土器も京都系土師器皿と在地系土師質土器皿が共存する。ただし、調査の段階で、上位遺構であるSD103の掘り残しも多分にあり、遺物が混在している可能性もある。下層遺物には京都系土師器皿は認められない。また、下層遺物群の中には胎土が白色系の色調を呈し、器壁が非常に薄いロクロ成形による土師質土器が出土している。また、9A区では上層埋土の中から頭蓋骨1体が出土した。頭蓋骨の周辺に遺物の分布は認められず、単独の出土である。出土状態は非常に悪く、眼窩と頸骨が残るのみである。下顎骨は遊離して失われた状態であり、頭蓋骨のみが単独で溝中に廃棄されたものと推定される。SD151の構築時期は下層出土の遺物の中に京都系土師器皿を含まず、内外面にロクロ目を有する在地系土師質土器皿が主体となることから15世紀後半~16世紀初頭に比定され、上層遺物に京都系土師器皿が入ることから16世紀前半に修復が行われ、16世紀中葉には埋没し、SX102やSD103が構築されていくものと考えられる。

SD153(第290図) 6A区~7A区で検出した大型の溝でSD101とSX102の下位に構築され

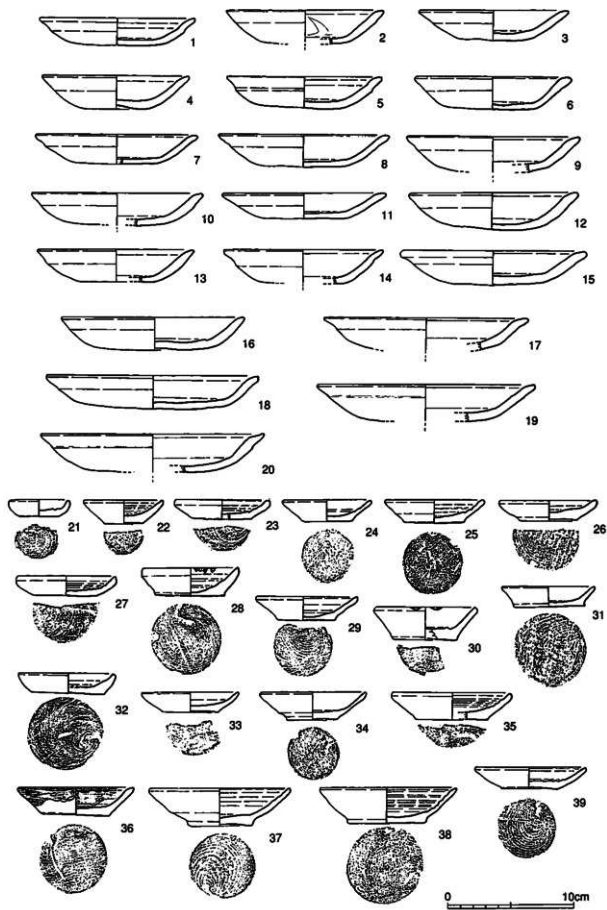
る。南側の肩は調査区外にあるため正確な規模は不明だが、検出規模は長さ18.5m、幅2.5m以上、深さ1mを測る。西側は5次調査A区に延びてゆき、東側は、調査区外に延びていく様相を呈する。土層観察から2回以上の修復が行われており、帯水の状態であったことがうかがわれる。出土遺物は多くはないが、前述したSD151と平行するように構築されており、土層（第257図参照）の堆積の状況及びSD153が埋没した後に構築されるSK150からは、2期に比定される京都系土師器皿が出土している。このことから、SD153はSD151とほぼ同じ時期に存在したものと推定する。

SD151出土遺物（第292～303図） 第292図1は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部片である。C群か。2は中国景德鎮窯系青花碗で口縁は端反りとなり、口縁内面に雷文を施す。外面は口縁下に圓線を巡らし、胴部に唐草文を描く。小野分類のB群に比定される。3は中国景德鎮窯系青花皿の口縁部である。口縁内外面に圓線を巡らし、外面に唐草文を描く。小野分類のB1群に比定される。4は中国漳州窯系磁器碗の口縁部片である。外口縁部に圓線を巡らせる。胴部の文様は不明である。5は中国景德鎮窯系青花蓋で外面に透明釉がかかり、内面は露胎となる。6は中国景德鎮窯系青花皿である。焼成不良のためか、内外面とも淡褐色を呈する。内外面とも透明釉で施されるが、高台段付は露胎となる。小野分類のB1群に比定される。7～9は中国龍泉窯系青磁の口縁部である。7は口徑から碗もしくは鉢と推定される。8と9は碗である。細線による連弁文を持ち、剣頭が連弁の単位を意識して施文されるものである。10は中国龍泉窯系青磁碗の底部である。底部周辺は意図的に打ち欠かれている。11も中国龍泉窯系青磁で鉢もしくは盤の底部である。軸が黄褐色に発色している。高台内中央部分を除いて軸が掛かる。内外面に鎊が認められる。12は中国産白磁皿である。高台段付きは露胎となる。13は天目茶碗の底部である。高台内に漆で「王」（もしくは「王」）字を描く。中国茶葉窯産か。14～16は中国産羯鞠陶器甌で、同一個体である。外面に褐釉、内面に鉄軸が掛かるが、口縁部は露胎となる。16の肩部片には欠損しているが横方向に貼り付けられていたと思われる把手が認められる。17は朝鮮王朝産陶器船形甌の底部である。外面は暗灰黄色、内面は暗赤褐色を呈する。18はタイ産のメナムノイ窯系四耳壺の肩部である。当資料はSD101出土の破片と接合しており、SD151の上位遺構であるSD103の掘り残し部分の遺物の可能性が高い。第292図19～31、第293図1～20は京都系土師器皿である。大半が2期に比定されるが、第292図27は器壁が薄くやや古い様相を呈する。逆に、第292図22、28は器壁が厚くなり、やや新しい様相を呈する。前述したように上位遺構であるSD103の掘り残しとも考えられるが、調査段階では判別ができなかった。なお、第292図30には煤が付着する。第293図21～39は在地系土師質土器皿である。28と30の口縁部内面には煤が付着する。また、36は摩滅が激しく内外面の口縁部周辺に煤が付着する。第294図1～24は在地系土師質土器皿である。大半が内面にロクロ目を顕著に残すものである。18は全体的に摩耗しているが、在地系土師質土器皿の胎土を使って京都系土師器皿を模倣したものと推定する。第295図1～12は在地系土師質土器皿である。1～3、5～10は内面にロクロ目を顕著に残すものである。4は胎土が浅黄色系の色調を呈し、京都系土師器皿を模倣したものである。11は断面形態が箱形に近いものである。12は胎土が白色系の色調を呈し、器壁が非常に薄いものである。13～14は焼塩壺の蓋である。13の胎土は赤褐色系の色調を呈し、14は浅黄色系の色調を呈する。15は焼塩壺の胴部片である。胎土は灰茶色を呈し、外面は二次被熱のためか器面が剥離している。16～18は土師質土器の耳皿である。16は胎土が浅黄色系の色調を呈し、手捏ねによる成形と思われる。焼塩壺の蓋を転用したものと推定される。17～18は胎土が赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する。19～24は土師質土器燗台である。19は皿部の破片で胎土は浅黄色系の色調を呈する。20は胎土が赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕が残る。器高は残存部分(2.1cm)からあまり高くならないと推測され、皿部から底部にかけての穿孔は貫通しない。21は胎土が浅黄色系の色調を呈し、穿孔は貫通しない。底部には糸切り痕がなくナデを施す。22は胎土が赤

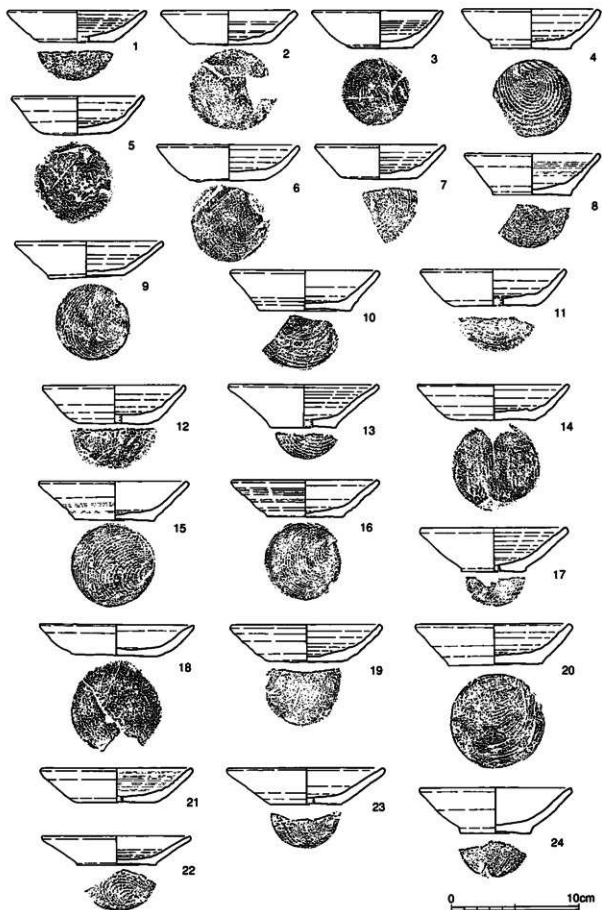
「王」字



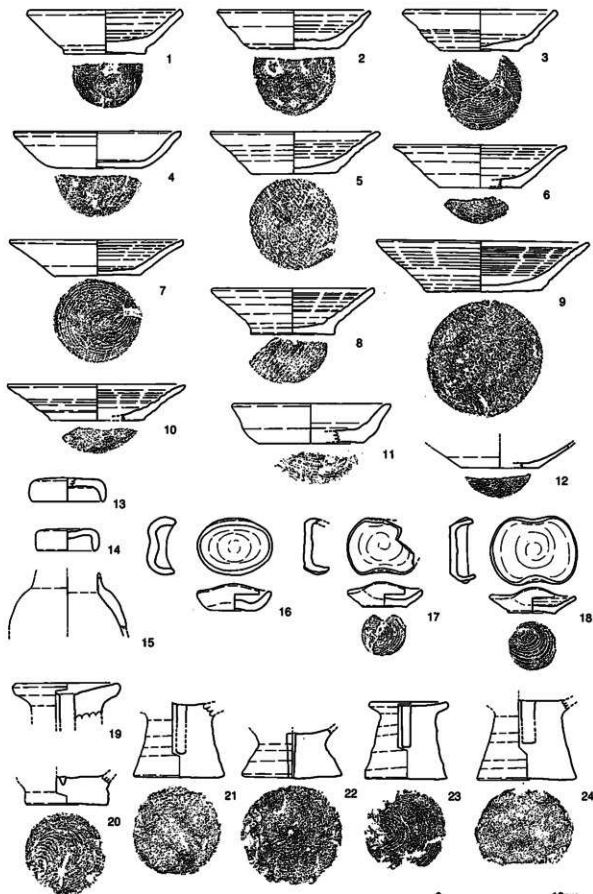
第292図 SD151出土遺物実測図① (1/3)



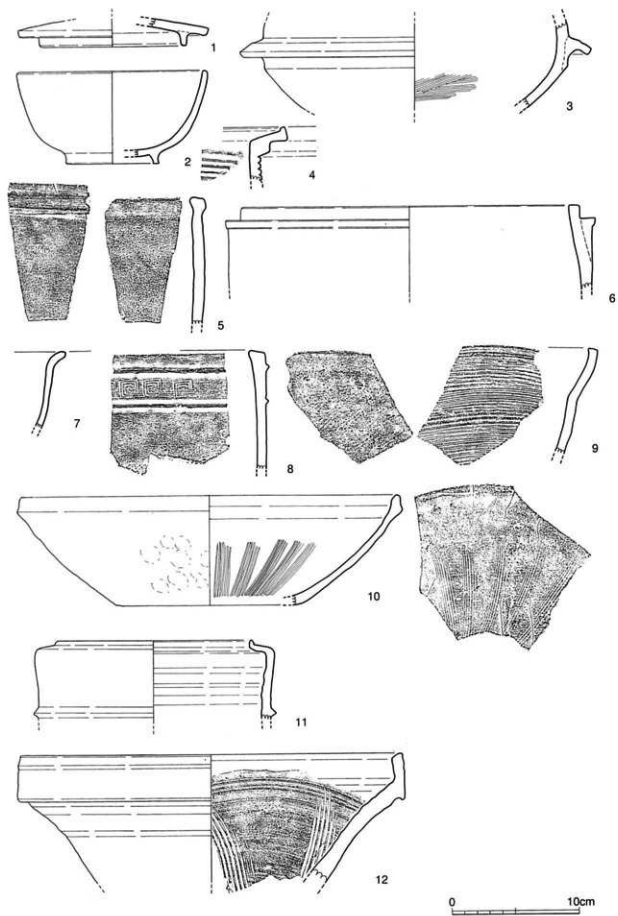
第293図 SD151出土遺物実測図② (1/3)



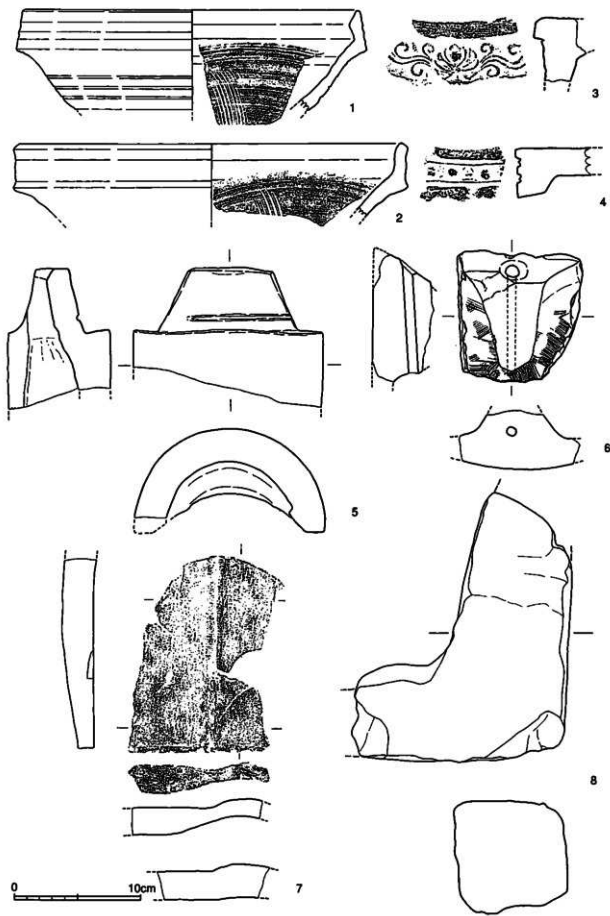
第294図 SD151出土遺物実測図③ (1/3)



第295図 SD151出土遺物実測図① (1/3)



第296図 SD151出土遺物実測図⑤ (1/3)

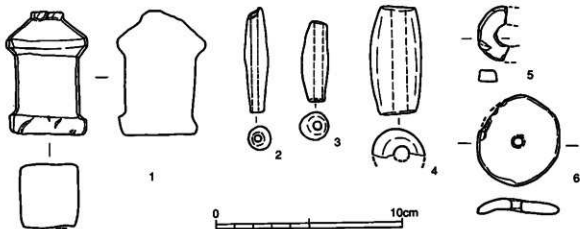


第297図 SD151出土遺物実測図⑥ (1/3)

褐色系の色調を呈し、脚台部が短く底部に糸切り痕を有する。穿孔は貫通する。23は一部皿部分に欠損があるもののほぼ完形で出土した。胎土は赤褐色系の色調を呈し、脚台部には螺旋状に模様が施される。底部には糸切り痕を有し、穿孔は貫通しない。24は胎土が浅黄色系の色調を呈し、底部には糸切り痕がなく、ナデを施す。穿孔は貫通しない。第296図1～10は瓦質土器製品である。1は壺などの蓋か。2は埴である。内面は横方向のへらによる丁寧な研磨が施されている。3は羽釜の胴部分である。内面はハケ目調整が施される。胴下部には多量に煤が付着し、よく使用されていたことがうかがわれる。4は火鉢の口縁部片である。口縁部が屈曲し、口縁端部を若干上方につまみ上げる。口縁部と胴部の境には幅広の突帯を有し、胴部外面には多量沈線を施す。器形は脚付きの浅鉢型の九火鉢になるとと思われる。5～6は火鉢の口縁部である。6は口縁部下に肥厚帯を巡らし蓋受けとする。内外面は丁寧に磨き上げられている。7は鉢の口縁部である。内外面ともに丁寧に磨かれている。8は火鉢の口縁部である。外口縁下に二条の三角突帯を巡らせ、その間にやや崩れた雷文を押捺する。9は鍋の口縁部である。10は播鉢である。外面に指おさえの痕が見られるが、被熱しており、器面が剥離している。11から12は備前系陶器である。11は胴部に一条の三角突帯を施し、口縁部は上方にややつまみ上げている。茶の湯等の水指しとして使用されていたものか。12は播鉢で、中世6期に比定される。第297図1～2は備前系陶器播鉢である。いずれも中世6期に比定する。3～4は軒平瓦の瓦当片である。3の中心飾りは連華文で中央部に雷の表現が認められる。瓦当上面は面取りをしている。顎貼り付けか。鎌倉後期頃の所産か。4は圏線を上下に施し、その間に珠連文を施す。顎部の瓦当表面は横ナデ。表面が直線的で段頸の形状をとる。顎部貼り付けか。内面には布目が残る。14世紀代の所産か。5は丸瓦である。玉縁凸面両側縁の面取りは丸瓦胴部に及ぶ。また、玉縁凸面に一条の線痕が残る。玉縁凹面両側縁に削り残しがあり、内面には布目が見られる。外面は完全にナデ消している。15世紀以降の所産か。6は瓦質製品で、中央部は穿孔する。詳細は不明だが、道具瓦の一種か。7は雁振瓦である。表面に縄目タタキの痕跡が残り、離れ砂の跡が残る。内面は丁寧にナデ消しを施す。8は凝灰岩製の石造品であるが、用途・使用部位等の詳細は不明である。なお、4と5は下層出土の遺物である。

泥塔

第298図1は泥塔である。9A区で出土したもので、単独で廃棄されたものと思われる。原形で高さ約6.4cmである。型に入れて作られるものが多いようだが、当資料は手捏ねによって作られたと思われる。外面は丁寧にナデ仕上げが施されており、黒色を呈するように焼成されている。笠上には宝珠等が付くと思われるが、欠損により不明である。2～4は土錘である。2と4は茶褐色、3は暗灰色を呈する。5～6は土師質土器の加工品である。5は在地系土師質土器皿の底部を円盤状に加工したものである。6は京都系土師器皿の口縁部付近から底部にかけての部分を利用し

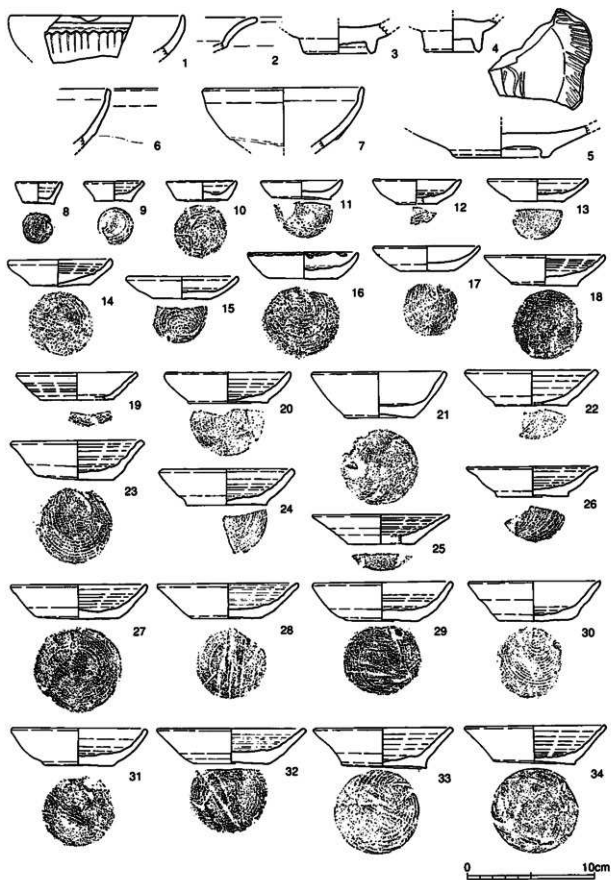


第298図 SD151出土土遺物実測図⑦(1/3)

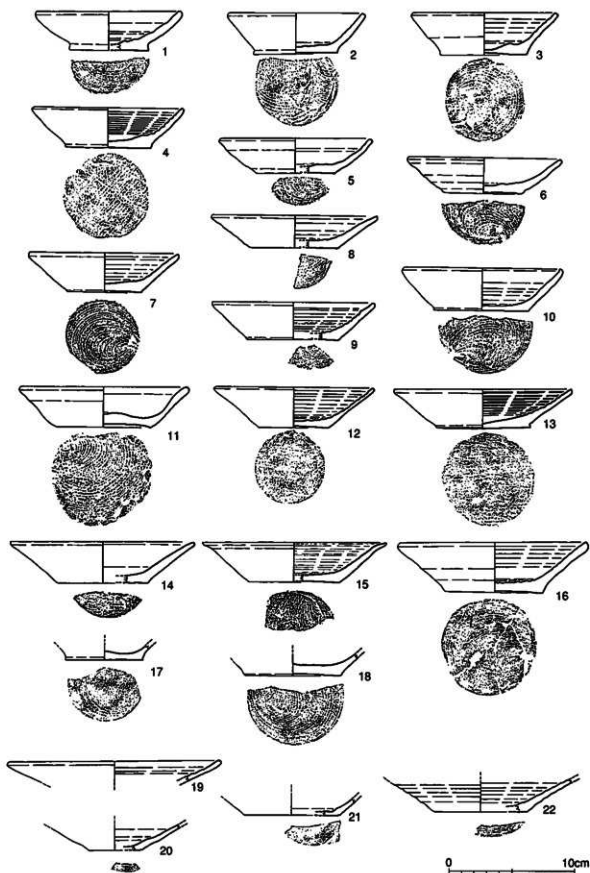
ていると思われる。5と同様に円盤状に加工されたものである。用途は不明である。

第299～302図は下層出土の遺物である。第299図1～5は中国龍泉窯系青磁である。1は碗で口縁部はやや内湾する。口縁部下に二本の凹線を巡らし、その下に剣先連弁を描く。細線と剣頭とが連弁としての単位を意識して施されている。2は桜花皿の口縁部である。3は碗の底部片で、高台付付きから内底部は露胎となる。4は碗の底部片である。貫入が認められ、高台付付けから内底部にかけて露胎となる。5は皿もしくは盤の底部である。胴部内面に筋が認められる。見込み部分に文様が認められるが詳細は不明である。胴部から高台付付きまで施釉され、高台内面と外底部は露胎となる。6～7は中国産天目茶碗である。6は胴部ににぶい赤褐色の釉が掛かり、口唇部には黒褐色の釉が掛かる。胎土は淡灰白色を呈する。7は黒褐色の釉が掛かり、胎土は灰色を呈する。いずれも釉は厚く掛けられている。8～34は底部に糸切り痕を有し、赤褐色系の色調を持つ在地系土師質土器皿である。8は口径3.7cmと最も口径の小さいものである。8～10、12～16、18、20、22～34は内面にロクロ目を残すものである。また、19は外面にロクロ目を残すものである。16は口縁内外面に煤が付着する。28、31、34は板状圧痕が残る。第300図1～18は赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。1、3～4、7～10、12～13、15～16は内面にロクロ目を顕著に残すものである。4、12～13の底部には板状圧痕が残る。2は底部の糸切り痕が2回以上認められ、糸切り離しを2回以上試みたものと推定する。11は断面形態が箱形を呈する土師器皿の最終形態である。19～22は胎土が白色系の色調を呈し、器壁が非常に薄いものである。第301図1～2は耳皿である。胎土が在地系土師質土器皿と同じ赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する。3は瓦質土器火鉢である。口縁部端はやや幅広になり、口縁下に二条の三角突帯を施し、その間に菊花文の刻印を連続的に押捺する。4～7は土師質土器燗台である。4は赤褐色系の色調を呈し、穿孔は貫通しない。5は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する。皿部から底部にかけての穿孔は貫通する。6は摩滅しているが、胎土は明灰色を呈し、貫通孔をもつ。底部は糸切り痕が残る。7は脚台部が極端に短く、底部には糸切り痕が残る。胎土は赤褐色系の色調を呈し、皿部から底部にかけての穿孔は貫通しない。8～13は備前系陶器燗鉢である。8は口端が丸く収められ、口縁断面が「く」の字状を呈する。口縁下角の垂下が顕著でシャープである。中世5期aに比定される。9は口縁立ち上がり部の厚さが一様で薄板状となり、真上に向かう。中世5期bに比定される。15世紀末葉の所産である10～11は15世紀前葉～中葉代の資料であるが、10は口縁の上方への拡張がまだ顕著でなく、下角の垂下と同程度であるため、中世4期aに比定する。11は口縁の上方への拡張が明確化し口縁外面の半ばに屈曲部をもち、下角の垂下も顕著であるので中世4期bに比定する。12は口縁端部が肥厚気味になり、口端上角と下角の突出が顕著でないため中世3期aに比定する。擦目目は7本である。14世紀中葉～15世紀前葉の所産である。13は底部である。第302図はSD151最下層からの出土遺物である。1～3、5～18は赤褐色系の色調を呈し、糸切り離しにより成形された在地系土師質土器皿である。1～3は9A区出土の資料で、5～18は10A区出土の資料である。5は口縁内面に、6は口縁内外面に煤が付着する。6、9～11は板状圧痕が残る。4は土師質土器の把手である。外面は丁寧に磨かれており、両側面は面取りされている。外面が黒色を呈するように焼成されている。どのような器形のものに付いていたかは不明である。19～20は備前系陶器燗鉢で内外面ともに灰色を呈する⁽²⁾ことから中世4期以前に比定される。19の擦り目は4本、20の擦り目は9本である。

(2) 桑岡実「備前焼燗鉢の編年について」(第3回中近世備前焼研究会資料 2000年)

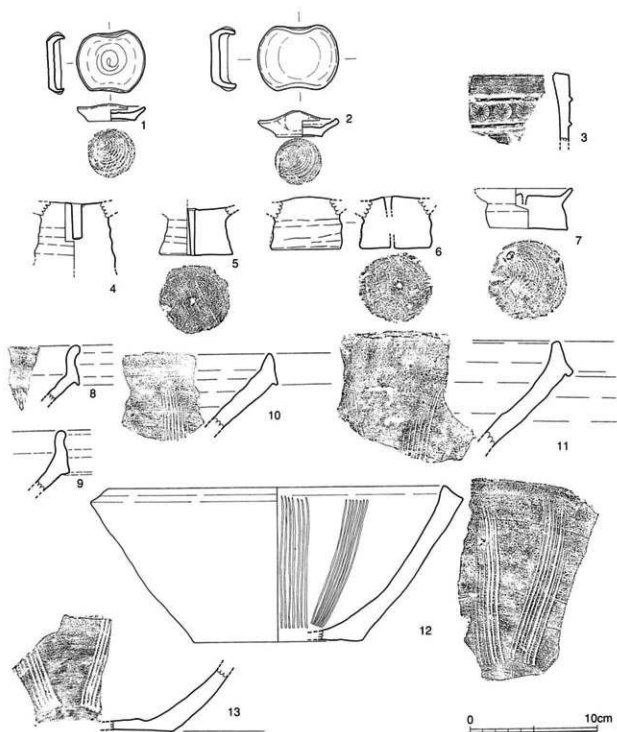


第299図 SD151下層出土遺物実測図① (1/3)

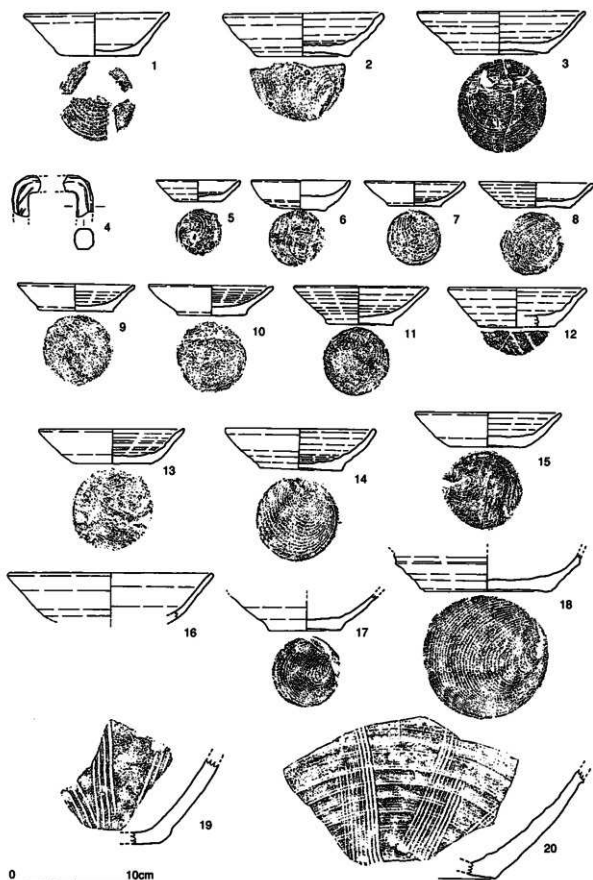


第300図 SD151下層出土遺物実測図② (1/3)

第303図1～2は下層出土の銅銭である。1は中国北宋代の「元祐通寶」である。書体は行書で初鑄年代は1086年である。2は鋳の付着が激しく銭貨名は不明である。3～4は最下層出土の銅銭である。3は北宋代の「熙寧元寶」である。書体は篆書で、初鑄年代は1068年である。4は北宋代の「元祐通寶」である。書体は行書である。5～15は上層出土のものである。5は半分欠損しており「和」「通」のみ判読できる。6は北宋代の「天禧通寶」である。書体は真書で初鑄年代は1017年である。7は唐代の「開元通寶」である。書体は真書で初鑄年代は621年である。8～10は「熙寧元寶」である。11～12は北宋代の「元豊通寶」である。書体は11が真書、12が行書である。初鑄

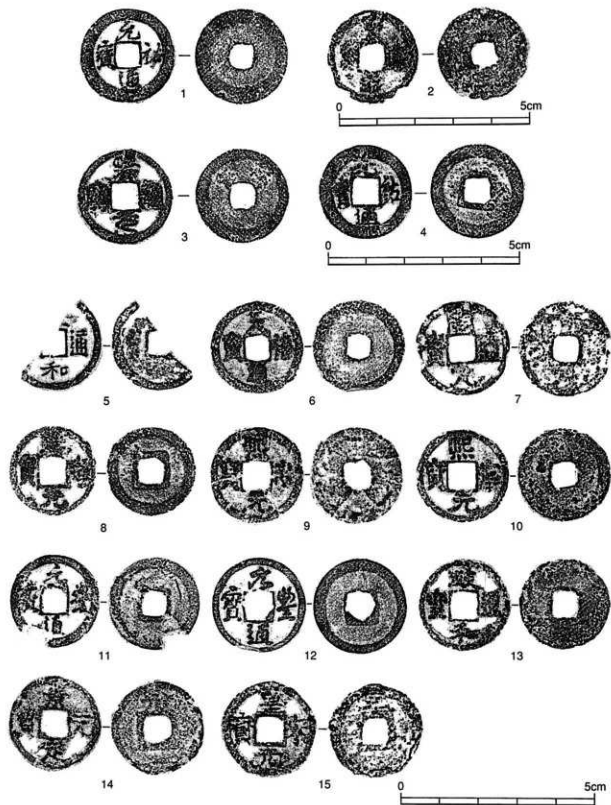


第303図 SD151下層出土遺物実測図③



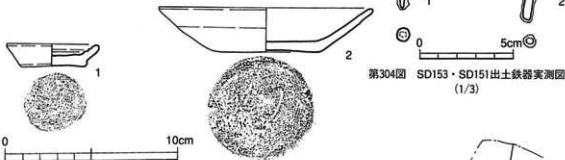
第302図 SD151下層出土遺物実測図④ (1/3)

年代は1078年である。13は北宋代の「政和通寶」である。書体は真書で、初铸年代は1111年である。14は南宋代の「景定元寶」である。背文字は「元」である。書体は真書で、初铸年代は1260年である。15は南宋代の「皇宋元寶」である。書体は真書で、初铸年代は1253年である。



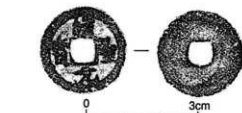
第303回 SD151出土銭実測図 (1/1)

SD153出土遺物 (第304～306図) 第304図は鉄器である。1はSD153出土のもので和釘である。2はSD151出土のもので、鉄鏝と推定する。第305図1は在地系土師器皿である。口径は5.3cmと小さく、内面にロクロ目が残る。2は在地系土師質土器皿で底部に糸切り痕を有するが、そのプロポーシオンから京都系土師器皿を模倣して作られたものと思われる。第306図は中国北宋代の「紹聖元寶」である。書体は真書で、初铸年代は1094年である。



第304図 SD153・SD151出土鉄器実測図 (1/3)

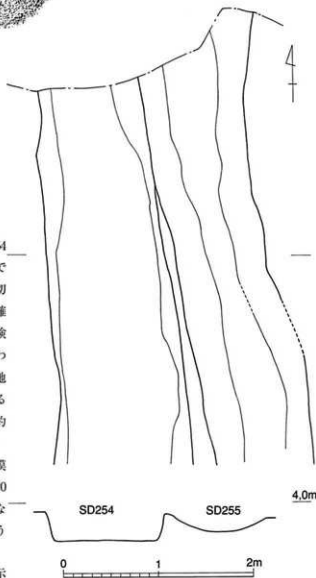
第305図 SD153出土遺物実測図 (1/3)



第306図 SD153出土銭実測図 (1/1)

SD254・SD255 (第307図)

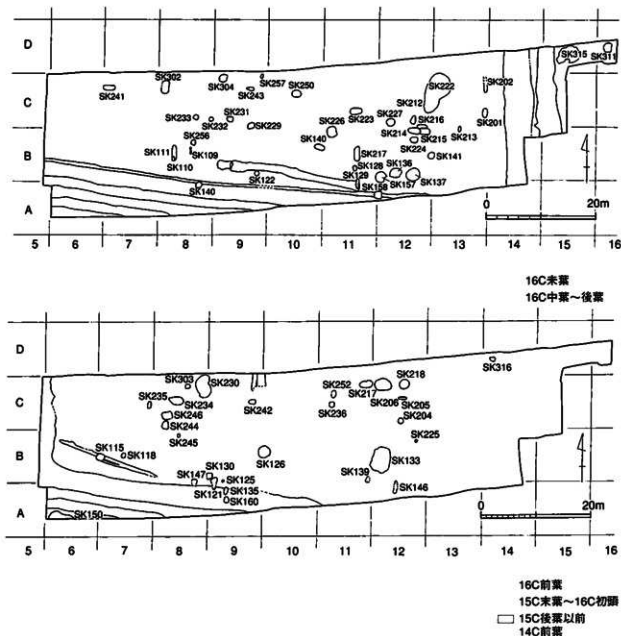
SD254とSD255は9C区で検出した南北の溝である。南は現代の大きな掘乱によって途切れているが、掘乱の南側では溝の続きは確認できなかった。上面の遺構検出の際は検出できず、数度の掘り下げを行った後にわずかにプランが確認できた。溝の埋土も地山と見分けがつきにくく下層の遺構である可能性が高い。SD254の検出規模は長さ約4m、幅1.2～1.4m、深さ30cmを測り、箱形の断面形態となる。SD255の検出規模は長さ約4.2m、幅0.9～1.2m、深さ約20cmを測り、凸レンズ状の断面形態となる。SD254とSD255はほぼ並行するように構築されるが、切り合い関係を有し、SD254がSD255を切る。出土遺物は図示が可能となるようなものはなかった。



第307図 SD254・SD255実測図 (1/40)

2. 土坑

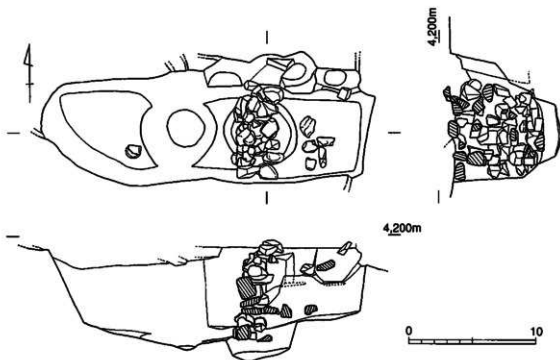
概要 中世大友府内町跡第5次調査B区では、69基の土坑を検出している。上層遺構群に属するものが16基、下層遺構群に属するものが30基である。また、出土する遺物がみられないものや遺物の出土が小破片のみであるため、時期の特定ができなかった土坑は23基である。上層遺構群に属するものは、16世紀中葉～後葉と16世紀末葉に比定できるものに大別できる。16世紀中葉～後葉の土坑は当調査区の最盛期に属し、前項で記した積土遺構とそれに付属する溝SX102・SD101・SD103と同時期に存在した遺構群である。その大半が廃棄土坑（ゴミ棄て穴）と推定される。良好な一括資料を出土するものもあるが、土坑の詳細な性格が判明するものは少ない。このような中で、比較的良好な一括資料を出土したSK106・SK222などが注目される。16世紀末葉に比定される土坑群は、積土遺構SX102等が廃絶または機能停止した後に構築されたものである。时期的にも、層位的にも唐津系陶器が出現していてもおかしくない時期であるが、土坑出土遺物の中に唐津系陶器は認められなかった。下層遺構群に属するものは、16世紀前葉、15世紀末葉～16世紀初頭、15世紀後葉以前、14世紀前葉の4時期に細別できる。16世紀前葉に比定される遺構には、ロクロ口を残す存



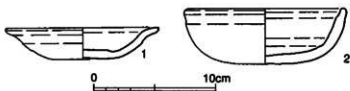
第308図 土坑 (1/700)

地系土師質土器Ⅱと1期に比定される京都系土師器Ⅱが相伴して出土する。これに対し16世紀初頭以前に比定される遺構からは、京都系土師器Ⅱの出土はみられず、在地系土師質土器Ⅱの出土のみである。このうち、16世紀前葉に比定されるSK150からは、京都系土師器Ⅰ期の比較的良好的な一括資料が得られている。15世紀末葉から16世紀初頭に比定される遺構から出土する在地系土師質土器Ⅱは、器壁にロクロ目を残すものが大半である。また、14世紀代に比定されるSK236・SK252からは、断面形態が楕形を呈する在地系土師質土器Ⅱの一括資料が出土している。

SK127 (第309図) 11B区のほぼ中央東よりに位置する。平面プランは長円形を呈し、規模は東西2.6m、南北1.0m、深さ最大0.9mを測る。土坑床面の中央部には東西2つの掘り込みがある。西側は浅いレンズ状になり、東側は直径50cm、深さ25cmほどの円形になる。東側の掘り込みの上部には15~20cm大の角礫がぎっしりと詰められた状態で検出された。遺構内からは3期に比定される京都系土師器Ⅱが出土しており、16世紀後葉~末葉に比定される。遺構の性格は不明である。

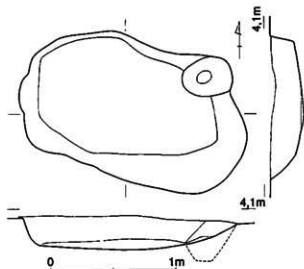


第309図 SK127実測図 (1/30)



第310図 SK127出土遺物実測図 (1/3)

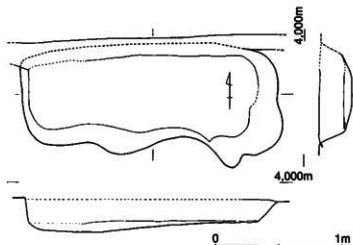
SK127出土遺物（第310図） 1～2は3期に比定される京都系土師器皿である。1は口径12.4cm、器高2.6cmで器壁は7mmを測る。内面および口縁外面に煤が付着する。2は復元口径13.0cm、器高4.5cmを測り、器壁は8～9mmと厚くなる。内面に煤が付着する。



第311図 SK140実測図（1/30）

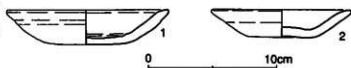
SK140（第311図） 10-11B区に位置する。平面プランは楕円形を呈し、その規模は長径約1.8m、短径約1.0m、深さ約25cmを測る。遺構の時期は出土した京都系土師器皿から16世紀後葉～末葉に比定される。

SK140出土遺物（第313図1） 第313図1は京都系土師器皿で、浅黄色系の色調を呈する。口径12.7cm、器高2.7cmで器壁は5～7mmである。3期に比定される資料である。



第312図 SK241実測図（1/30）

SK241（第312図） 7C区西に位置する。北側は掘乱により削平を受けているが、平面プランはほぼ長方形を呈し、規模は東西約2m、南北約80cm、深さ20～25cmを測る。遺物は、器壁の厚い京都系土師器皿が1点完形で出土したほかは、小破片である。遺構の時期は出土した京都系土師器皿から16世紀後葉～末葉に比定される。



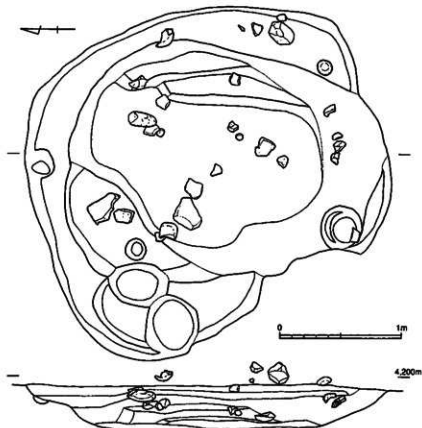
第313図 SK140・SK214出土遺物実測図（1/3）

SK241出土遺物（第313図2） 第313図2は京都系土師器皿である。胎土は浅黄色系の色調を呈し、口径10.9cm、器高2.1cmを測る。器壁は7～8mmと厚く、3期に比定される。

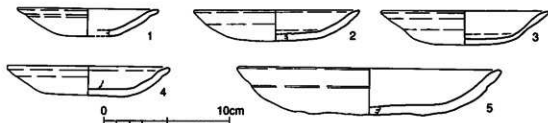
SK227（第314図） 12C区西に位置する不定形の土坑である。規模は東西最大2.7m、南北約3m、深さ10～40cmを測る。底面の状況などから2ないし3つの土坑が切り合っている可能性が高いが、遺構埋土には大きな違いが見られず、土層観察からも切り合い関係ははっきりしなかった。遺物も京都系土師器皿が散発的に出土するのみで、まとまりはみられない。出土した京都系土師器皿にも時期差はあまりみられず、短期間に掘り直され、埋没したものと推定される。京都系土師器皿の年代観から、遺構の時期は16世紀中葉～後葉に比定される。

SK227出土遺物（第315図） 第315図1～5は胎土が浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿

である。1～4は2期の様相を呈するもので、1は復元口径11.2cm、器高2.1cm、2は復元口径13.2cm、器高2.4cm、3は口径15.4cm、器高2.7cm、4は口径13.0cm、器高2.7cmを測る。4の内面には「の」の字状のナデ上げ痕が残る。5は復元口径20.8cm、器高3.2cmを測り、京都系土師器皿の法量としては最大のものにはいる。器壁は7～8mmと厚く、3期の様相を呈する。遺構上位から出土したもので、混入品の可能性も考えられる。



第314図 SK227実測図 (1/30)

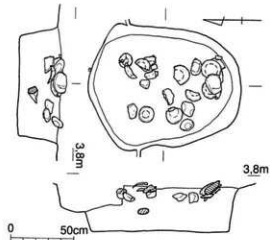


第315図 SK227出土遺物実測図 (1/3)

SK106 (第316図) 8A区の北東に位置し、SD105を切る。平面プランは楕円形を呈し、その規模は長径1.2m、短径0.9m、深さ0.35mを測る。当遺構からは京都系土師器皿が一括廃棄された状態で出土している。SD105との切り合い関係からも京都系土師器皿の幅年を考える上で、良好な資料といえよう。しかしながら、出土した京都系土師器皿はSD105出土のものと大きな形態変化はみられず、2期の様相を呈する。こうしたことから遺構の構築時期はSD105が埋没した時期とそう時期差はないと推定され、16世紀中葉～後葉に比定される。

SK106出土遺物 (第317～318図) 第317図は中国北宋代の「熙寧元寶」である。書体は篆書で、初鋳年代は1068年である。第318図1～13は2期に比定される京都系土師器皿である。いずれの遺物にも煤の付着はみられない。1～3は口径が11cm前後のもので、1は口径10.9cm、器高2.2cm、2は口径11.0cm、器高2.2cm、3は口径11.1cm、器高2.4cmである。4～8、10は口径が13cm前後のもので、4は口径12.9cm、器高2.6cm、5は口径12.7cm、器高2.4cmである。6は口径13.3cm、器高2.7cm、7は口径13.1cm、器高3.3cm、8は口径13.1cm、器高2.1cm、10は

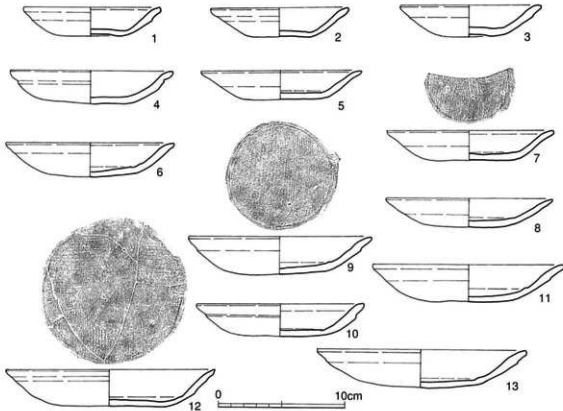
口径13.2cm、器高2.5cmである。9、11は口径が15cm前後のもので、9は口径14.6cm、器高3.0cm、11は口径15.0cm、器高2.9cmである。12~13は口径が16cmを超え、12は口径16.5cm、器高3.0cm、13は口径16.5cm、器高3.0cmである。また、1、4、10は口縁部外面に強いナデが施される。7、9、12の内面には布目痕が残る。



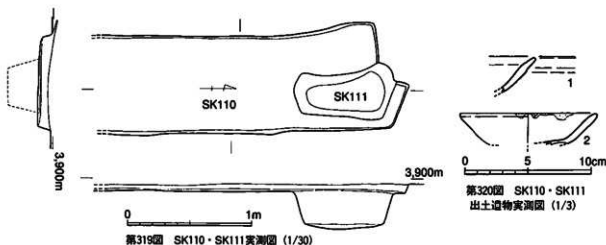
第316図 SK106実測図 (1/30)



第317図 SK106出土銭実測図 (1/1)



第318図 SK106出土遺物実測図 (1/3)

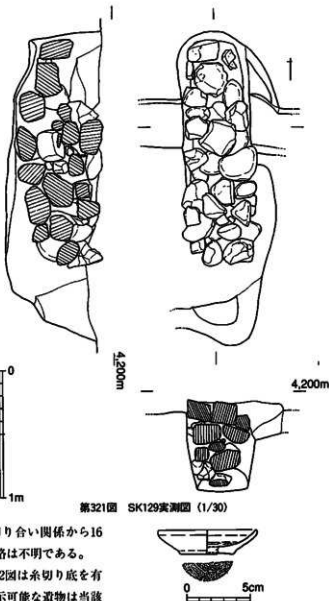


第319図 SK110・SK111実測図 (1/30)

第320図 SK110・SK111
出土遺物実測図 (1/3)

SK110・SK111 (第319図) SK110は8B区に位置する。北側はプランが不明確で検出できなかった。検出規模は長さ2.2m、幅75cm、深さ10cmを測る。SK111はSK110の中に構築されている。規模は長径80cm、短径45cm、深さ30cmを測る。それぞれの遺構からの出土遺物は小破片が主で、図示可能な遺物は京都系土師器皿の口縁部片のみである。遺構の構築時期は16世紀中葉以降と考える。

SK110・SK111出土遺物 (第320図) 1はSK110出土の京都系土師器皿の口縁部である。口縁部にナデが施され、2期の特徴を有する。2はSK111出土の京都系土師器皿である。内外面に煤が付着している。外底面は二次被熱によって剥落している。

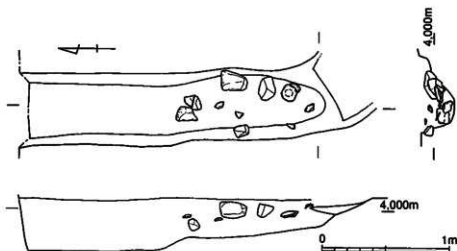


第321図 SK129実測図 (1/30)

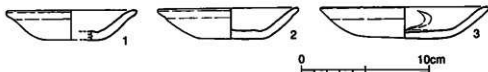
第322図 SK129出土遺物実測図 (1/3)

SK129 (第321図) 11A区に位置し、SD123の西端を切る。平面プランは長円形を呈し、その規模は南北2.5m、東西54cm、深さ70cmを測る。遺構内には人頭大の礫がぎっしりと詰まった状態で検出された。南側には礫は見られないが、砂質土のため遺構の壁が崩壊し、検出時にSD123の中に崩れ落ちてしまったためである。遺構の時期はSD123との切り合い関係から16世紀中葉以降と推定される。遺構の性格は不明である。

SK129出土遺物 (第322図) 第322図は承切り底を有する在地区土師質土器小皿である。図示可能な遺物は当該資料一点のみである。

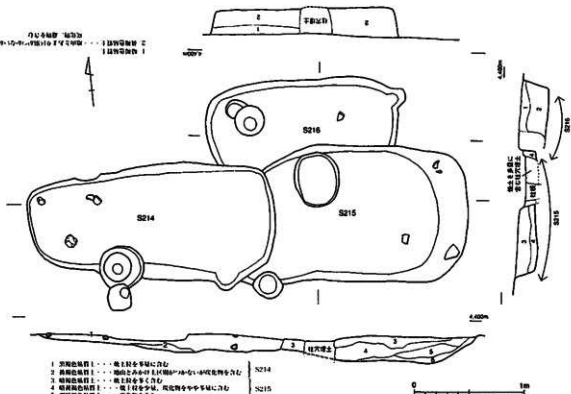


第323図 SK202実測図 (1/30)



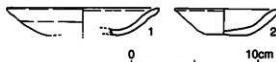
第324図 SK202出土遺物実測図 (1/30)

① 土質調査 ② 土質調査
③ 土質調査 ④ 土質調査
⑤ 土質調査 ⑥ 土質調査



- 1. 深褐色粘質土・・・堆土跡を半環状に含む S214
- 2. 黄褐色粘質土・・・堆土跡を半環状に含む S214
- 3. 暗褐色粘質土・・・堆土跡を半環状に含む S214
- 4. 暗褐色粘質土・・・堆土跡を半環状に含む S215
- 5. 暗褐色粘質土・・・堆土跡を半環状に含む S215
- 6. 暗褐色粘質土・・・堆土跡を半環状に含む S215

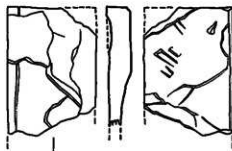
第325図 SK214・SK215・SK217実測図 (1/30)



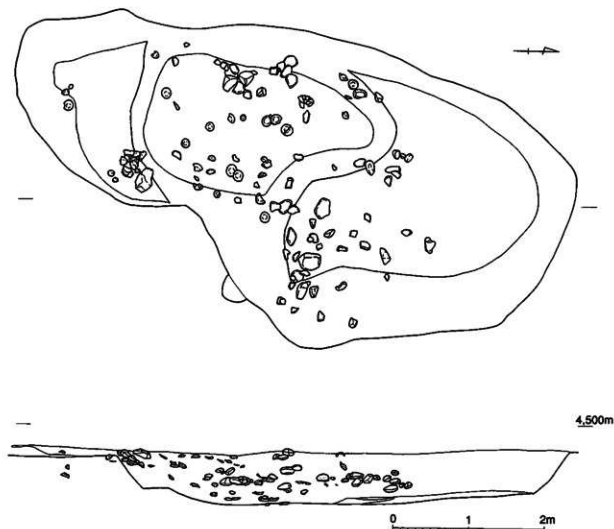
第326図 SK214・SK215出土遺物実測図 (1/3)

SK202 (第323図) 13C区の東に位置する。平成12年度後半期の調査では溝状の遺構であると認識していたが、13年度後半期の調査では遺構の続きが検出されず、ここでは土坑として報告する。検出規模は東西約69cm、南北2.8m、深さ30~40cmを測る。遺構からは3期に比定される京都系土師器皿が出土しており、遺構の時期は16世紀後葉~末葉に比定される。

SK202出土遺物 (第324図) 第324図1~3は京都系土師器皿である。いずれも煤の付着はみられない。1は復元口径10.2cm、器高2.3cmで、2は口径10.8cm、器高2.8cmを測る。3は口径13.2cm、器高2.4cmを測り、内面にナダあげ痕が残る。器壁が5~6mmと1、2に比べやや薄く2期の様相を呈する。



第327図 SK214出土遺物実測図 (1/2)



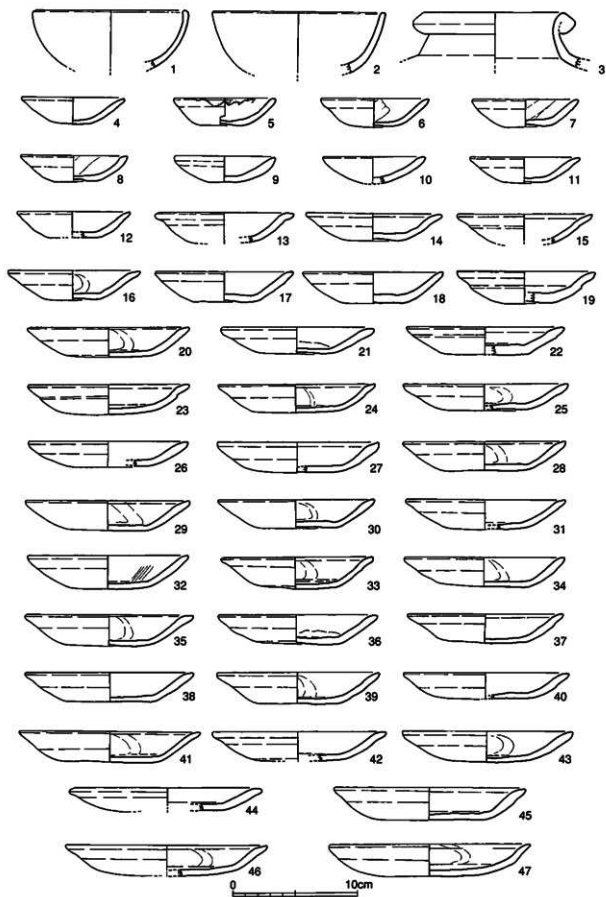
第328図 SK222実測図 (1/50)

SK214・SK215・SK216 (第325図) 12B区の東北部に位置する切り合い関係を持つ土坑である。遺構の構築時期にそう大きな時期差はみられず、時期を逸えず連続的に構築されたものと推定される。3遺構ともほぼ長方形を呈し、SK214は長径2.26m、短径1.1m、深さ15cmを測る。SK215は長径2.1m以上、短径1.2m、深さ25cmを測る。SK216は長径1.7m、短径70cm以上、深さ25cmを測る。遺構の構築順は切り合い関係からSK216→SK215→SK214である。出土遺物は少ないが、京都系土師器皿の小破片が埋土中に多くみられ、16世紀中葉以降の時期に比定する。

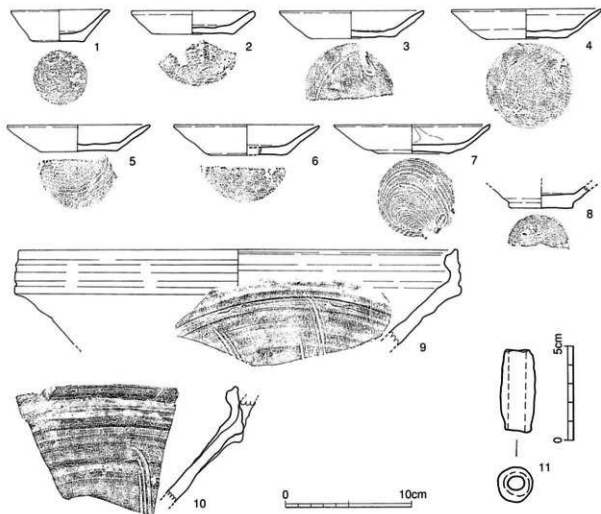
SK214・SK215出土遺物 (第326～327図) 第326図1はSK214出土の京都系土師器皿で、2期に比定される資料である。第327図はSK214出土の輝緑凝灰岩を使用した赤間靨である。第326図2はSK215出土の京都系土師器皿で、2期に比定される資料である。

SK222 (第328図) 12C～13C区に位置する大型の遺構である。南側は浅い掘り込みであり、遺構底面に段をもつことから、少なくとも2つ以上の遺構が切り合っていると推定されるが、遺構埋土に大きな差異はみられず、平面プラン及び土層観察からも遺構の切り合い関係は認められなかった。埋土中には礫や土師質土器などを包含するが、出土遺物は土坑の中央部に集中し、北東側ではやや疎散的となる。また、南側では土師質土器皿数点の破片が認められるが、出土遺物は極めて少量である。しかし、出土遺物には大きな時期差は認められず、一つの遺構として報告する。平面プランは不定形で、その規模は東西1.5～2.4m、南北最大4.6m、深さ10～40cmを測る。出土遺物には2期に分類される京都系土師器皿が多く認められ、その年代観から、遺構の構築年代は16世紀中葉～後葉に比定される。

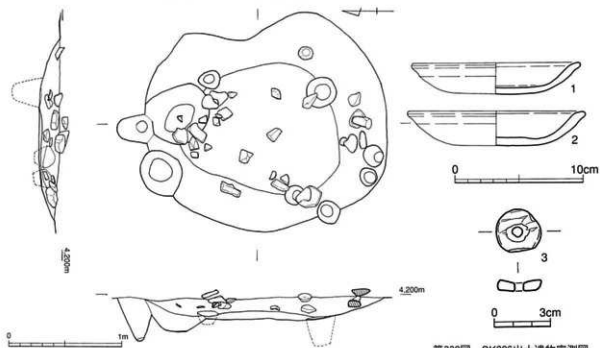
SK222出土遺物 (第329～330図) 第329図1中国産の白磁碗である。口縁部はやや内湾し、復元口径は12.0cmを測る。2は中国龍泉窯系青磁碗である。内外面は無文となり、復元口径は13.5cmを測る。3は中国産褐釉陶器壺の口縁部破片で、口縁端部は玉縁状となる。外面は全面施釉され、にぶい黄褐色の色調を呈する。内面には上半部にわずかに釉が認められるが、基本的には露胎となる。4～47は京都系土師器皿である。主に2期を主体とする資料で構成される。19と22はやや器壁が厚くなり、新しい煤相を示す可能性がある。口径に着目すると、8～9cm前後のもの(4～12)、10～11cm前後のもの(13～19)、12～13.5cm前後のもの(20～43)、15～16cm前後のもの(44～47)の4法量に細分できる可能性が考えられる。また、内外面に煤が付着するもの(5・7・38)が認められることから、本土坑出土の京都系土師器皿は食器(カワラケ)として使用されたものと、灯明皿として転用されたものが混在して出土していることが観察できる。第330図1～8は底部に糸切り痕を有する在地系土師質土器皿である。1の口縁部には煤が付着し、明らかに灯明皿として使用されたことがうかがわれる。6はそのプロローションや口縁端部の仕上げなどが京都系土師器皿に類似しており、京都系土師器を模倣して作られたものと推定する。さらに7は京都系土師器皿と同じ胎土を利用して作られたもので、内面には京都系土師器によくみられるナテ上げ痕のようなものが認められる。9～10は備前系陶器橘鉢の口縁部片で、いずれも中世6期～近世1期aに比定される。口縁帯外面の凹線は9ではやや明瞭に施されるが、10においては不明瞭である。11は孔径6mmを測る中型の土錘である。



第329図 SK222出土遺物実測図① (1/3)



第330図 SK222出土遺物実測図② (1~10は1/3、11は1/2)



第331図 SK226実測図 (1/30)

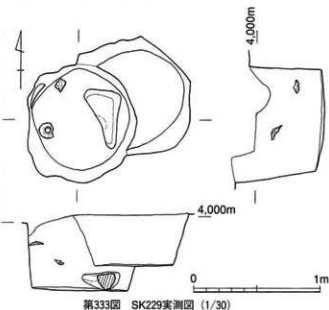
第332図 SK226出土遺物実測図
(1~2は1/3、3は1/2)

SK226 (第331図) 11B区の西北に位置する。平面プランは不整楕円形を呈し、その規模は東西1.6~1.8m、南北2.1m、深さ約20cmを測る。複数の柱穴と切り合い関係を持つが、その詳細な構築順序は不明である。埋土中からは拳大の礫と土師質土器の小破片が出土している。図示可能な遺物は少ないが、遺構内から出土した京都系土師器皿の年代観から、遺構の時期は16世紀中葉~後葉に比定される。

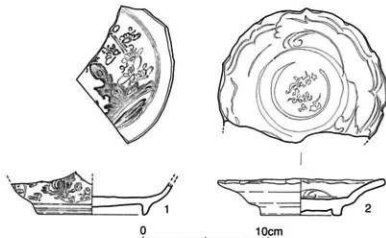
SK226出土遺物 (第332図) 第332図1~2は京都系土師器皿である。胎土は浅黄色系の色調を呈する。双方ともいびつな形をしている。1は口径13.2cm、器高2.6cmを測り、2は復元口径14.0cm、器高2.7cmを測る。3は土師質土器の加工品である。中央に6mmほどの穿孔を施す。用途は不明である。

SK229 (第333図) 9B-C区に位置する土坑である。北東側を時期不明の土坑に切られている。平面プランはほぼ円形を呈し、その規模は直径約90cm、深さ50~70cmを測る。土坑埋土下位から扁平な河原礫が検出され、埋土中位からは輸入陶磁器の青花皿と青磁皿が出土した。当該資料以外に目立った出土遺物は認められず、他の土坑とは性格が異なると推定されるが、その詳細は不明である。出土遺物から遺構の構築時期は16世紀中葉~後葉に比定される。

SK229出土遺物 (第334図)
第334図1は中国景德鎮窯系青花皿である。見込みに山水文を描き、胴部には唐草文を描く。口縁部を欠損しており、器形の詳細は不明であるが、小野分類のE群あるいはB1群に比定される資料で、16世紀代の製品である。2は中国龍泉窯系青磁皿である。見込みに印花による花文を押捺する。口縁は後花となる。外底部と見込みは露胎となり、全面に貫入が認められる。15世紀代の所産である。



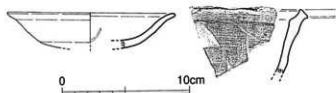
第333図 SK229実測図 (1/30)



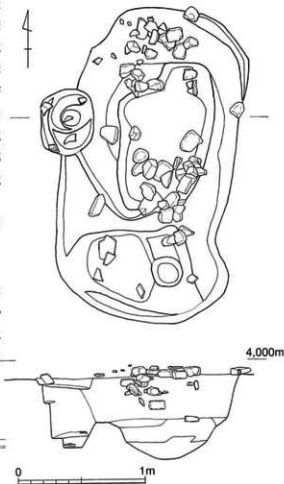
第334図 SK229出土遺物実測図 (1/3)

SK302 (第335図) 8C区の西北に位置する。12年度後半～13年度前半期の調査で南側半分を検出し、13年度後半期の調査で残りの北半分を検出した。検出状況から3つ以上の遺構が切り合っていると思われるが、調査の期間が開いたため、うまく切り合い関係を把握できなかった。検出した規模は、東西約1.4m、南北約2.5m、深さ30～70cmを測る。出土した京都系土師器皿の年代観から、遺構の時期は16世紀中葉～後葉に比定される。

SK302出土遺物 (第336図) 第336図1は京都系土師器皿で、浅黄色系の色調を呈する。2期に比定される。復元口径13.2cmを測り、内面に「ノ」の字状のナデ上げ痕が残る。2は瓦質土器鍋の口縁部片である。外傾する体部から口縁部は外反し、端部は上方にややつまみ上げる。外面は丁寧なナデ調整が行われ、内面にはヘラ描き調整が施される。



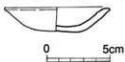
第336図 SK302出土遺物実測図 (1/3)



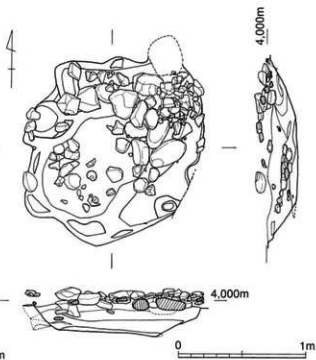
第335図 SK302実測図 (1/30)

SK304 (第337図) 9C区に位置する。平面プランはほぼ円形を呈し、その規模は東西約1.3m、南北約1.4m、深さ約20cmを測る。遺構には傘大から人頭大の礫が廃棄されており、廃棄土坑と推定される。遺物の出土は多くなく、ほとんどが小破片であったが、1点のみ第338図に示した京都系土師器皿がほぼ完形で出土した。遺構の時期は16C中～後葉に比定される。

SK304出土遺物 (第338図) 第338図は京都系土師器皿である。胎土は浅黄色系の色調を呈し、口径8.3cm、器高2.1cmを測るが、形はいびつである。



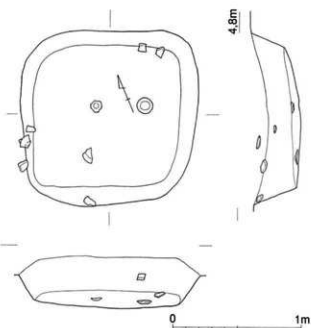
第338図 SK304出土遺物実測図 (1/3)



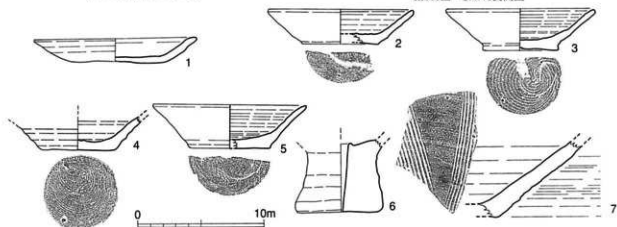
第337図 SK304実測図 (1/30)

SK115 (第339図) 7B区の東に位置する、SD114を切る土坑である。一片約1.4m、深さ約30cmの方形プランを呈する。京都系土師器皿と在地系土師質土器皿が出土しており、遺構の時期は16世紀前葉に比定される。

SK115出土遺物 (第340図) 第340図1は京都系土師器皿で、口径12.8cm、器高2.1cmを測り、1期に比定される。2～5は底部に糸切り痕を有し、ロクロ目を顕著に残す在地系土師質土器皿である。6は土師質土器燗台である。胎土は京都系土師器皿と共通する浅黄色系の色調で、皿部から底部にかけての穿孔は貫通する。7は備前系陶器播鉢の胴部片である。播目は9本以上が認められる。



第339図 SK115実測図



第340図 SK115出土遺物実測図 (1/3)

SK118 (第341図) 7C区ほぼ中央に位置する。平面プランはほぼ方形を呈し、その規模は東西約70cm、南北約85cm、深さ約20cmを測る。遺物はそのほとんどが小破片であるが、遺構上位から京都系土師器皿が出土した。京都系土師器皿の年代観から遺構の時期は16世紀前葉に比定される。

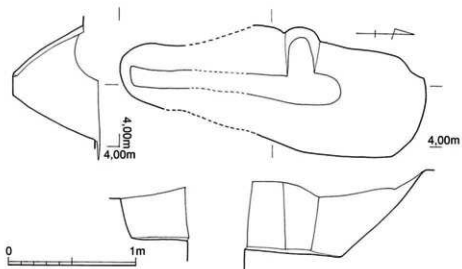
SK118出土遺物 (第342図) 第342図は京都系土師器皿である。胎土は浅黄色系の色調を呈する。復元口径12.0cm、器高2.2cmを測る。口縁部内面に成形時の粘土の継ぎ目が残る。1期に比定される資料である。

SK121 (第343図) 9A～B区に位置する、SD105に切られる土坑である。平面プランは不定形で、東西90

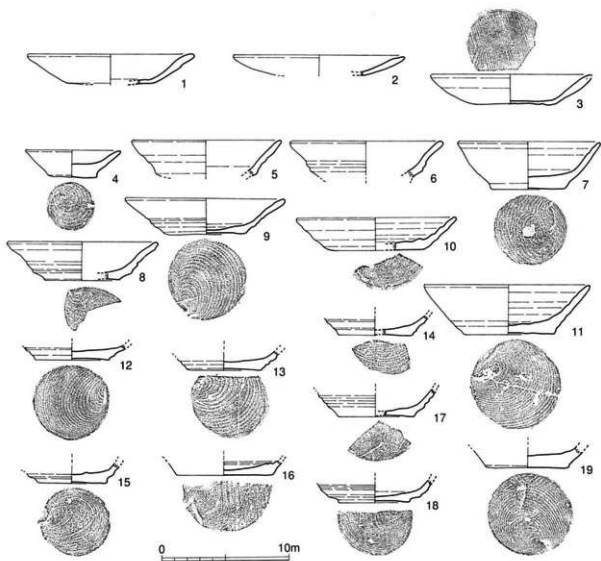


第341図 SK118実測図

第342図 SK118出土遺物実測図 (1/3)



第343図 SK121実測図 (1/30)



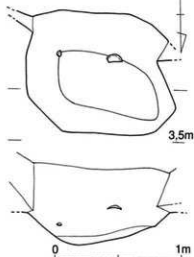
第344図 SK121出土遺物実測図 (1/3)

cm、南北2.4m、深さ60~70cmを測る。出土遺物は在地系土師質土器皿が主体をなし、その中に1期に比定される京都系土師器が若干出土している。このことから京都系土師器が当地に導入され始めた時期に推定され、遺構の時期は16世紀前葉~中葉に比定される。

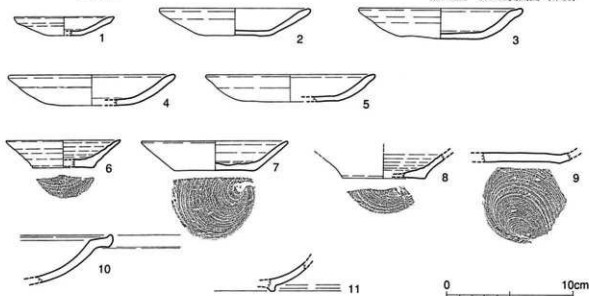
SK121出土遺物 (第344図) 第344図1~3は京都系土師器皿である。1は復元口径13.0cm、2は復元口径13.6cm、3は口径12.6cm、器高2.3cmを測り、2の口唇部には煤が付着し、3の内面にはハケ目状のナメ痕が残る。薄い器壁をもち、1期に比定される資料である。4~19は底部に糸切り痕を有し、ロクロ目を残す在地系土師質土器皿である。体部が外傾し、口縁端部はやや尖る傾向がみられる。4は口径7.6cm、底径3.8cm、器高2.0cm、5は復元口径11.7cm、6は復元口径12.0cm。7は口径11.1cm、底径5.8cm、器高3.8cm、8は復元口径12.0cm、復元底径5.8cm、器高3.0cm、9は復元口径12.5cm、底径6.0cm、器高2.8cm、10は復元口径12.6cm、底径7.2cm、11は口径13.0cm、底径7.0cm、器高3.8cmを測る。9の体下部のロクロ目は棒状工具による強い沈線が認められる。

SK125 (第345図) 9B区に位置する。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径1.3m、短径90cm、深さ約60cmを測る。出土遺物は在地系土師質土器皿に京都系土師器皿が共伴しており、遺構の時期は16世紀前葉~中葉に比定される。

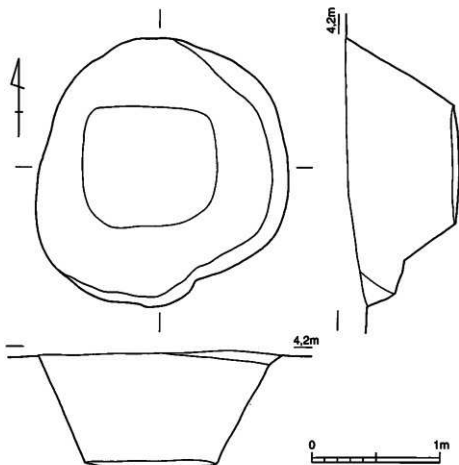
SK125出土遺物 (第346図) 第346図1~5は京都系土師器皿である。1は復元口径7.8cm、器高1.5cm、2は復元口径12.0cm、器高2.1cm、3は口径12.8cm、器高2.4cm、4は復元口径13.0cm、器高2.4cm、5は復元口径13.4cm、器高2.1cmを測る。4の内面には煤が付着する。6~9は在地系土師質土器皿である。底部に糸切り痕を有し、器面にロクロ目を残す。外傾する体部をもち、口縁端部は尖る。6は復元口径8.9cm、復元底径4.8cm、器高2.1cm、7は復元口径11.6cm、底径6.6cm、器高2.3cmを測る。10は瓦質土器の口縁部片である。鉢もしくは鍋か。外傾する体部から口縁部は緩やかに外に屈曲し、端部は上方につまみ上げる。11は瓦質土器碗の底部片である。



第345図 SK125実測図 (1/30)



第346図 SK125出土遺物実測図 (1/3)



第347図 SK126実測図 (1/30)



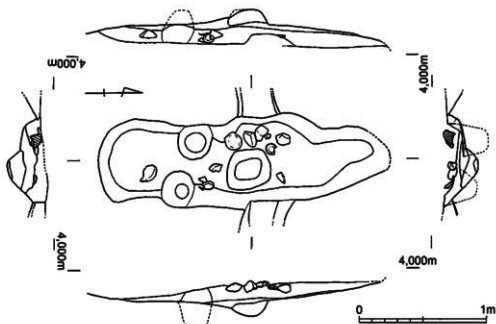
第348図 SK126出土遺物実測図 (1/3)

SK126 (第347図) 10B 区の東側ほぼ中央に位置する。平面プランはほぼ円形を呈し、規模は東西1.9m、南北2.2m、深さ約90cmを測る。出土遺物は小破片がほとんどだが、1期に比定される京都系土師器皿が出土しており、京都系土師器皿の年代観から、遺構の時期は16世紀前葉～中葉に比定される。

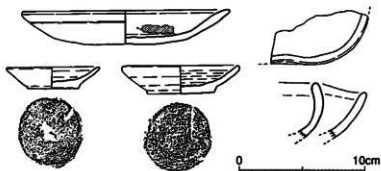
SK126出土遺物 (第348図) 第348図1は中国龍泉窯系青磁皿の口縁部片である。口縁部は稜花となる。2は京都系土師器皿である。復元口径16.0cm、器高2.6cmを測り、1期に比定される。

SK146 (第349図) 12A 区の北側ほぼ中央に位置する。遺構はほぼ中央を近世の溝に切られるが、平面プランは長楕円形を呈し、東西60～70cm、南北2.3m、深さ約10cmを測る。遺構の時期は出土した京都系土師器皿の年代観から16世紀前葉～中葉に比定される。

SK146出土遺物 (第350図) 第350図1は京都系土師器皿である。復元口径14.0cm、器高2.2cmを測り、内面に煤が付着する。2～3は在地系土師質土器皿である。4は土師質土器の碗か。彎曲した形態になるものと思われるが、口縁部片のみの出土で器形の詳細は不明である。胎土は在地系土師質土器皿と同じ赤褐色系の色調を呈する。



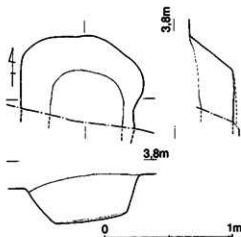
第349図 SK146実測図 (1/30)



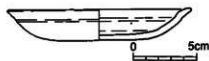
第350図 SK146出土遺物実測図 (1/3)

SK147 (第351図) 8B区に位置し、南側はSD105とSK106と切り合い関係を有する。平面プランは楕円形を呈するものと推定される。検出規模は東西約90cm、南北60~70cm、深さ約25cmを測る。遺構の時期はSD105とSK106との切り合い関係から16世紀前葉に比定される。なお、遺構の構築順はSK147→SD105→SK106の順である。

SK147出土遺物 (第352図) 第352図は浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。口径14.0cm、器高2.2cmを測る。2期に比定される資料である。



第351図 SK147実測図 (1/30)



第352図 SK147出土遺物実測図 (1/3)

SK150 (第353図) 6A区の南に位置する大型の土坑である。SD101に先行する溝SD153が埋没した後に構築されたものである。検出された規模は最大長さ5.8m、最大幅1.7m、深さ50cmを測る。南側はさらに調査区外に広がる様相をみせ、全体の規模は不明である。出土遺物から遺構の時期はSD101にやや先行すると推定され、16世紀前葉～中葉に比定される。

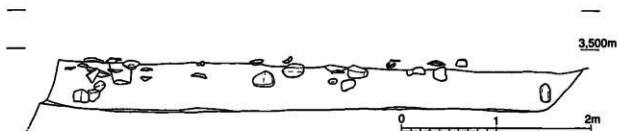
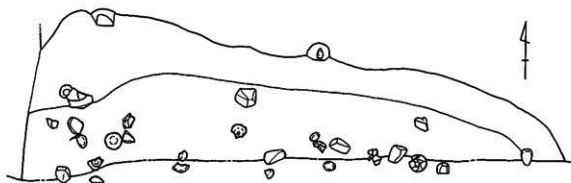
SK150出土遺物 (第354～355図) 第354図1～2は中国景德鎮窯系青花皿の口縁部片で、いずれも口縁部が端反りとなり、小野分類のB1群に比定される資料である。1は外面に渦状の密な唐草文を描く。内面はアラベスクか。2は胴部に牡丹唐草を描き、内面には文様は見られない。3は中国産白磁の底部片である。碗か。全面施釉されるが、高台畳付きは露胎となり、高台内面には砂が付着する。4～14は浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。4、7、10～11は器壁が厚くやや新しい様相を呈するが、遺構上位から出土した資料で混入品の可能性も考えられる。その他は完全に遺構埋土の中からの出土であり、1期に比定されるものである。なお、14は見込み部分に刷毛目状のナア痕が認められ、底部には板状圧痕が残る。15～19は在地系土師質土器皿で底部に糸切り痕を有するものである。15～18は赤褐色系の色調を呈するのに対し、19は浅黄色系の色調を呈し、京都系土師器皿の胎土を利用して作られたものと推定する。また、内底部から故意に穿たれたと思われる穿孔が残る。第355図1は防長系瓦質土器楕鉢である。口縁内部に三角突帯を貼り付けたことにより口縁部を形成する。内面のカキ目状の調整が施された後に、櫛状工具による描目を施す。描目は10条が認められる。2は瓦質土器楕鉢の胴部片である。6条の描り目が認められ、外面には煤が付着する。

SK204 (第356図) 12C区の南に位置する。平面プランは楕円形を呈し、その規模は東西95cm、南北約1.1m、深さ約20cmを測る。遺構上位には角礫が集中して置かれている。出土した京都系土師器皿の年代観から、遺構の時期は16世紀前葉～中葉に比定される。

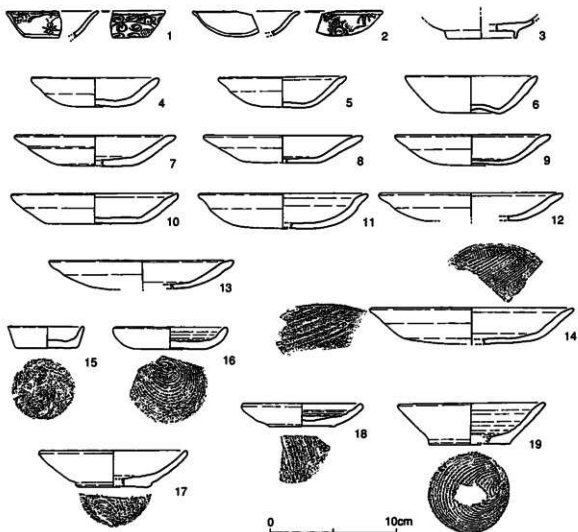
SK204出土遺物 (第358図1～3) 第358図1～2は1期もしくは2期に比定される京都系土師器皿である。いずれも内面に煤が付着する。1は復元口径12.8cm、2は復元口径13.0cm、器高2.1cmを測る。3は底部に糸切り痕を有する在地系土師質土器皿であるが、京都系土師器皿と同じ浅黄色系の色調を呈する胎土を用いて作られたもので、器形も京都系土師器皿を模倣したものである。

SK205 (第357図) 12C区に位置し、SE249の上面に構築された遺構である。平面プランは楕円形を呈し、その規模は東西80cm、南北70cmの凹レンズ状の掘り込みである。遺構内からは土師質土器2点と瓦質土器火鉢が廃棄された状態で検出された。SE249が埋没した後の柔らかい土壌に掘り込まれた廃棄土坑と推定される。遺構の時期は出土遺物から16世紀前葉～中葉に比定される。

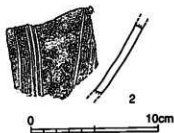
SK205出土遺物 (第358図4～6) 第358図4は1期もしくは2期に比定される京都系土師器皿である。口径13.6cm、器高2.4cmを測る。外面に指圧痕が残る。5は赤褐色系の色調を呈し、内外面にロクロ目が顕著に残る在地系土師質土器皿である。底部には糸切り痕が残る。6は瓦質土器火鉢である。胴部下半に1条の三角突帯を巡らせ、逆台形状の脚を貼り付ける。内外面ともに丁寧なナアが施される。



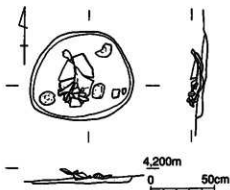
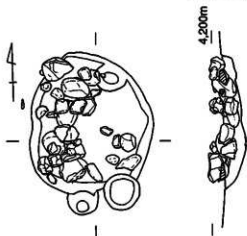
第353図 SK150実測図 (1/40)



第354図 SK150出土遺物実測図① (1/3)



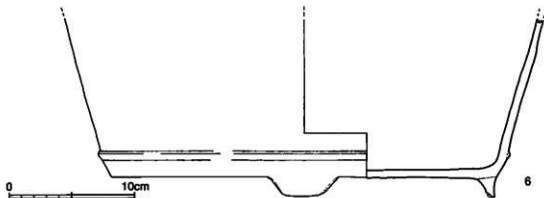
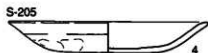
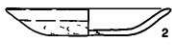
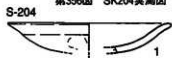
第355図 SK150出土遺物実測図② (1/3)



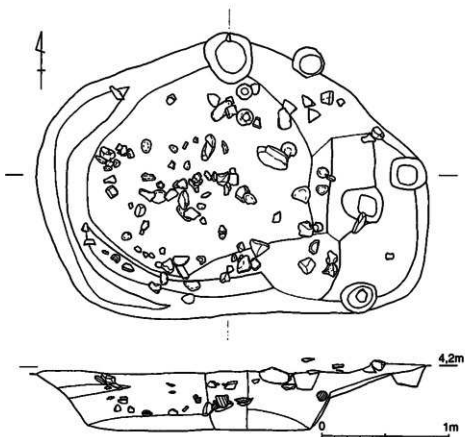
第357図 SK205実測図 (1/30)



第356図 SK204実測図 (1/30)



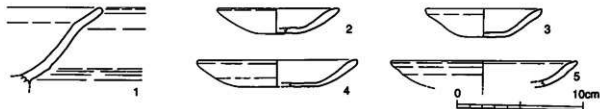
第358図 SK204・SK205出土遺物実測図 (1/3)



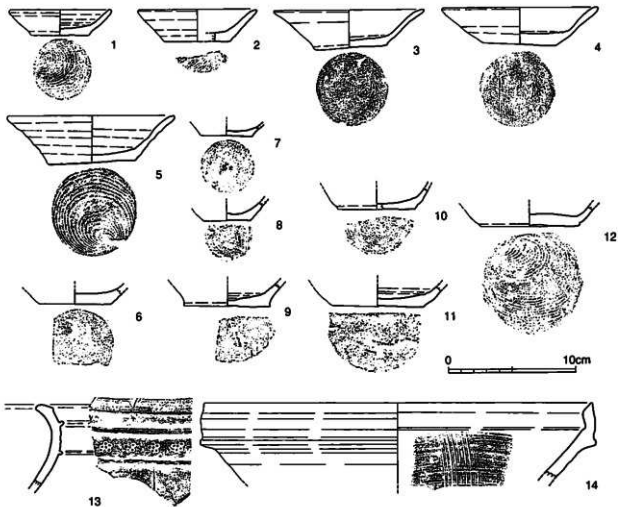
第359図 SK206実測図 (1/30)

SK206 (第359図) 12C区に位置する。やや楕円形の不定形プランを呈し、その規模は東西3.1m、南北最大2.1m、深さ最大45cmを測る。平成12年度後半期からの調査で南半分を検出し、13年度後半期の調査で北半分を検出した。遺構の東側は一端緩やかな平頂面を形成し、1m程で西に落ち込むため、少なくとも2つの遺構が切り合っている可能性もあるが、ここでは一つの遺構として報告する。遺構内からは礫とともに在地系土師質土器皿や京都系土師器皿などが出土している。遺構の時期はこれらの出土遺物から16世紀前葉～中葉に比定される。

SK206出土遺物 (第360～361図) 第360図1は中国産青磁皿の口縁部片である。全面に軸が掛かるが、軸の発色が不足しオリーブ色を呈する。2～5は1期に比定される京都系土師器皿である。いずれも煤の付着は認められない。第361図1～12は底部に糸切り痕を有する在地系土師質土器皿である。1は口唇部に煤が付着する。2～4、6～9は京都系土師器皿と同様の胎土を用いて作られている。特に4は形も京都系土師器皿を模倣して作られたものである。さらに、第360図2・4、第361図2・7・9～10は焼成時に起きたと思われる、胎土が浅黄色から橙褐色に変化する部分が認められ、同時に同じ窯で焼成された可能性が考えられる。13は内湾する口縁部をもつ浅鉢形の瓦質土器火鉢である。口縁外面には2条の突帯を巡らし、その間に梅花文を押捺する。14は備前系陶器擂鉢である。中世6期に比定される。



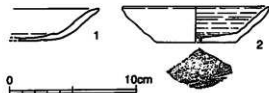
第360図 SK206出土遺物実測図① (1/3)



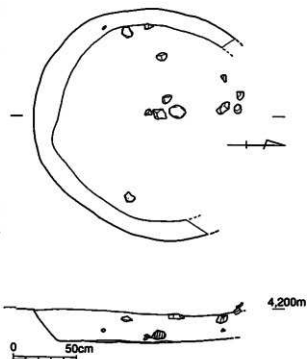
第361図 SK206出土遺物実測図② (1/3)

SK218 (第362図) 12C区に位置し、SE219の上部に構築される。SE219が埋没した後に構築された廃棄土坑と推定される。平面プランはほぼ円形を呈すると思われ、規模は直径1.8m、深さ約25cmを測る。出土遺物には、1期に比定される京都系土師器皿の口縁部と在地系土師器皿が共存し、遺構の時期は16世紀前葉～中葉に比定される。

SK218出土遺物 (第363図) 第363図1は1期に比定される京都系土師器皿である。2は赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿で、底部に板状圧痕を残す。



第363図 SK218出土遺物実測図 (1/3)



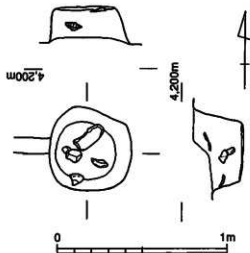
第362図 SK218実測図 (1/30)

SK225 (第364図) 12B区に位置する。ほぼ円形を呈し、規模は直径約50cm、深さ20~40cmを測る。出土した京都系土師器皿の年代観から16世紀前葉~中葉に比定される。

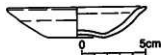
SK225出土遺物 (第365図) 第365図は1期に比定される京都系土師器皿である。底部は窪み、へそ皿状を呈する。浅黄色系の色調を呈する。口縁部内外面には煤が付着し、灯明皿と使用されたものと推定される。

SK246 (第366図) 8C区に位置する。楕円形を呈し、規模は東西1.8m、南北約1.5m、深さ約1.0mを測る。京都系土師器皿の年代観から16世紀前葉~中葉に比定される。

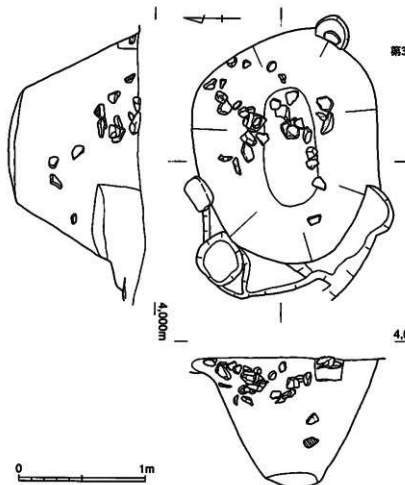
SK246出土遺物 (第367図) 第367図1は中国京徳鎮窯系青花碗の口縁部片である。口縁部内面に界線を巡らし、外面には唐草文を描く。小野分類のC群に比定される。2は1期に比定される京都系土師器皿である。3は在地系土師質土器皿である。底部は糸切り離しの後、糸切り痕をナデ消している。胎土は京都系土師器皿と同じ浅黄色系の色調を呈し、そのプロポーションからも京



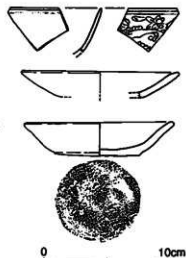
第364図 SK225実測図 (1/30)



第365図 SK225出土遺物実測図 (1/3)



第366図 SK246実測図 (1/30)



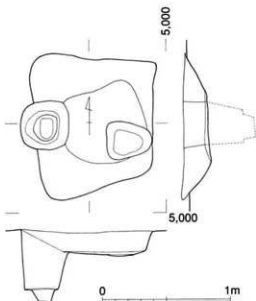
第367図 SK246出土遺物実測図 (1/3)

都系土師器皿を模倣して作られたものである。

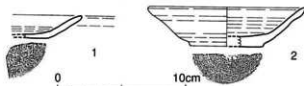
SK130 (第368図) 9B区の南西に位置する。平面プランは台形状を呈し、規模は東西約1.0m、南北0.8～1.1m、深さ約20cmを測る。出土遺物は小破片がほとんどだが、出土した京都系土師器皿の年代観から、遺構の時期は16世紀前葉～中葉に比定される。

SK130出土遺物 (第369図) 第369図1は器壁が薄く、1期に比定される京都系土師器皿の口縁部片である。胎土は浅黄色系の色調を呈する。2は赤褐色系の色調を呈し底部に糸切り痕を有する在地系土師質土器皿である。内外面にロクロ目を残すものである。

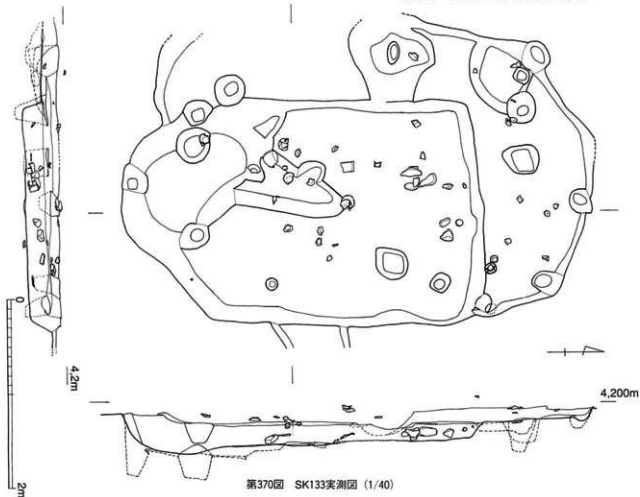
SK133 (第370図) 12B区に位置する。遺構の切り合いが激しく、明確なプランを検出するのが困難だったが、ほぼ方形を呈するものと推定される。その規模は東西約2.4m、南北約3.8m、深さ20～30cmを測る。ロクロ目が顕著に残る在地系土師質土器皿が主体であることから遺構の時期は15世紀末葉



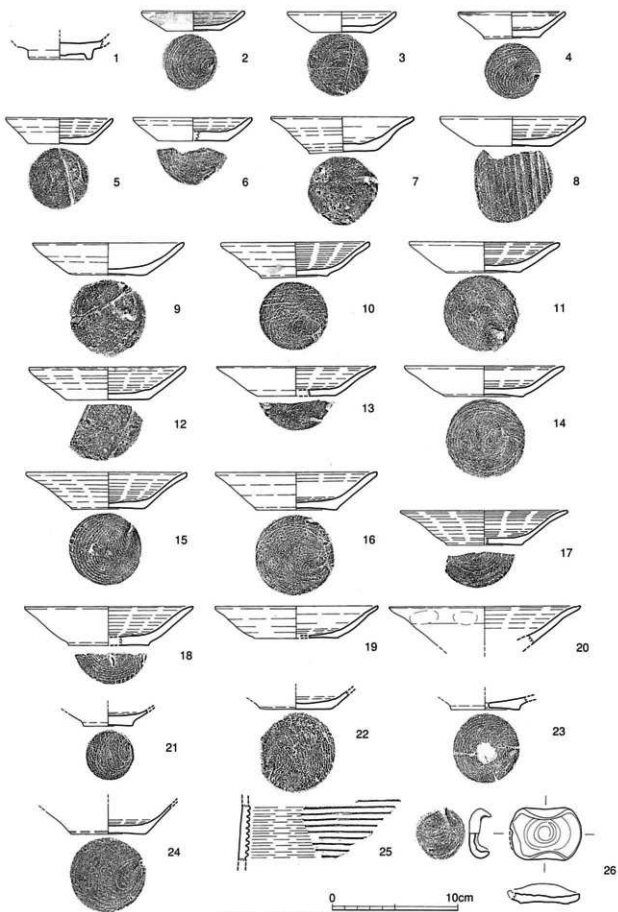
第368図 SK130実測図 (1/30)



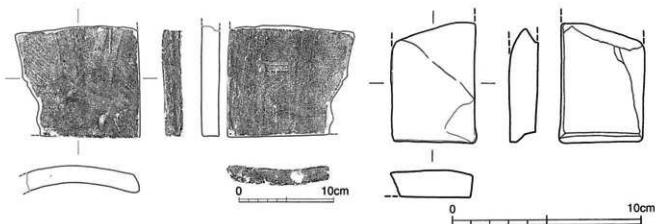
第369図 SK130出土遺物実測図 (1/3)



第370図 SK133実測図 (1/40)



第371図 SK133出土遺物実測図① (1/3)



第372図 SK133出土遺物実測図② (1/40)

第373図 SK133出土遺物実測図③ (1/2)



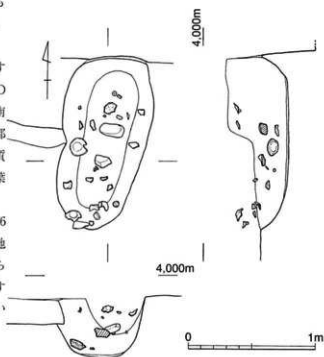
第374図 SK133出土銭実測図 (1/1)

～16世紀初頭に推定される。

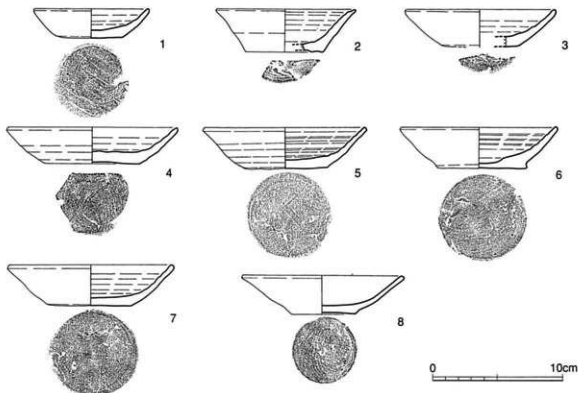
SK133出土遺物 (第371～374図) 第371図1は中国産青磁碗の高台部片である。見込み部分と外底部は露胎となる。2～24は底部に糸切り痕を有し、ロクロ目を顕著に残す在地系土師質土器皿である。2は内外面に煤が付着する。4、12は口唇部内外面に煤が付着する。6は外面に煤が付着し、10、22にも煤が付着する。5、8～10は底部に板状圧痕が残る。23は底部中央に穿孔を施したものである。25は瓦質土器火鉢の胴部片である。9条以上の波状沈線が巡る。26は耳皿である。底部に糸切り痕を有し、赤褐色系の色調を呈する。第372図は平瓦である。第373図は砥石である。第374図1～2は銅銭である。いずれも錆の付着が激しく銭種は特定できない。

SK135 (第375図) 9A区に位置する、楕円形の遺構である。北側をSD105に切られる。規模は東西約60cm、南北約80cm、深さ25～45cmを測る。京都系土師器皿の出土はなく、在地系土師質土器皿のみが出土している。15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

SK135出土遺物 (第376図) 第376図1～8は赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。煤の付着はみられない。1～7はロクロ目を顕著に残すが、8は内面のロクロ目をナデ消している。1の底部には板状圧痕が残る。



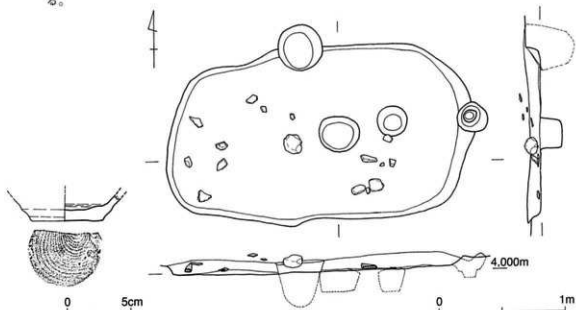
第375図 SK135実測図 (1/30)



第376図 SK135出土遺物実測図 (1/3)

SK217 (第377図) 11C区に位置する、不整楕円形の遺構である。規模は東西2.4m、南北1.5m、深さ約10cmを測る。出土遺物は疎散的で、良好な遺物はないが、底部に糸切り痕を有し、ロクロ目が残る在地系土師質土器皿の小破片が多く出土している。このことから遺構の時期は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

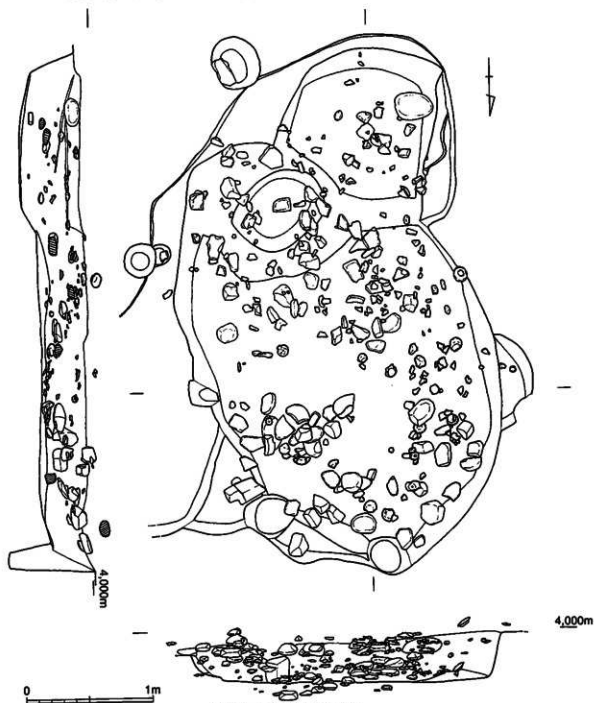
SK217出土遺物 (第378図) 第378図は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕が残る在地系土師質土器皿の底部片である。内面にはロクロ目が残る。図示可能な出土遺物はこの1点のみである。



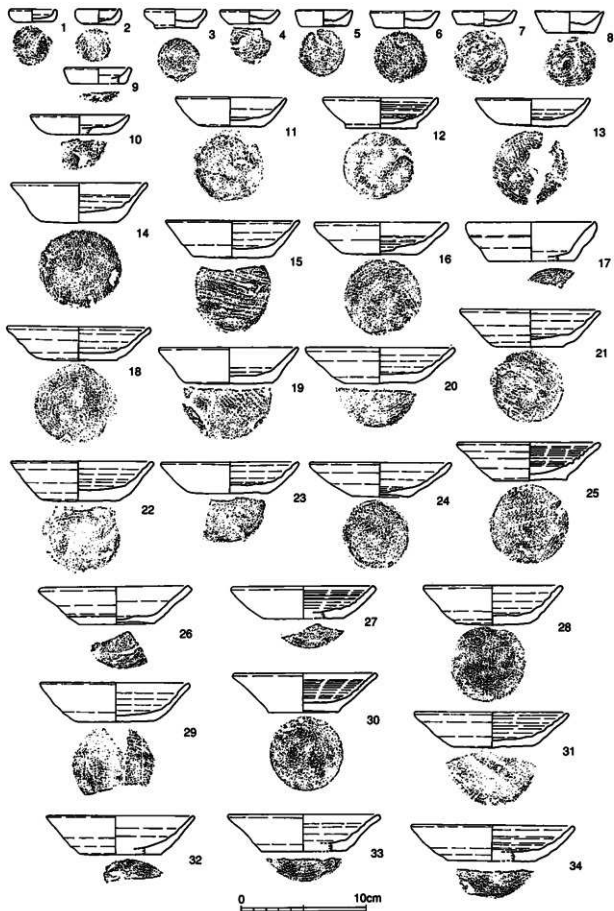
第378図 SK217出土遺物実測図 (1/3)

第377図 SK217実測図 (1/30)

SK230 (第379図) 8C~9C区に位置する、不定形の大形遺構である。平成13年度前半期の調査で南側約4分の1を検出し、後半期の調査で残りの北側部分を検出した。2~3の遺構が切り合っていると思われるが、切り合い関係は不明確で、調査期間が半年以上開いたこともあり、遺構の前後関係は確認できなかった。このため、一つの遺構として報告する。検出規模は東西2.5m、南北4.3m、深さ40~50cmを測る。遺構全体から遺物は出土しており、在地系の土師質土器皿がその主体をなす。また、遺構の南側部分では、口径が4~5cm程度の極めて小形の皿や耳皿が集中して出土し注目される。この南側部分は底面が一段低くなっている点と、検出した遺構全体の軸と異なることから、この部分が一つの土坑を形成するものと考えられる。このことから先行する北側の大形土坑に切り込んで南側の土坑が構築されているものと推定されるが、出土遺物には大きな時



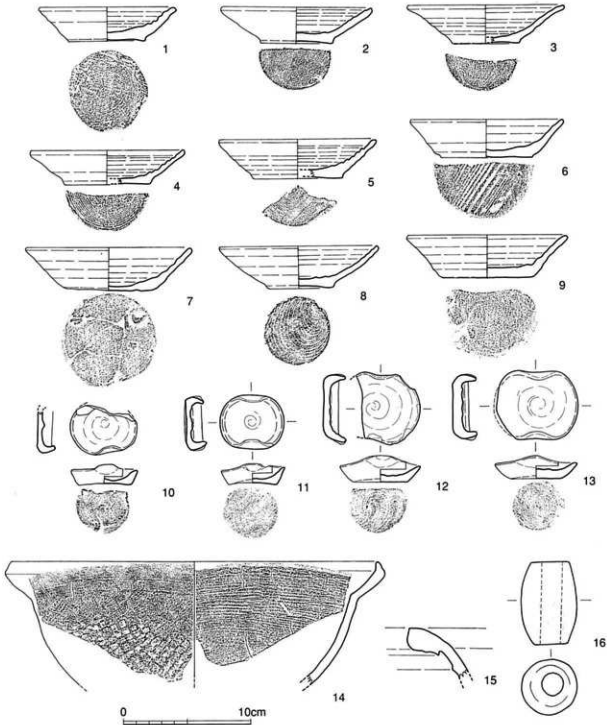
第379図 SK230実測図 (1/30)



第380図 SK230出土遺物実測図①(1/3)

期差は認められなかった。遺構の時期は、出土した在地系土師質土器の年代観から15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

SK230出土遺物 (第380～382図) 第380図1～9は口径が4～5cm程度の小型の在地系土師質土器皿である。色調は赤褐色系の色調を呈し、底部には糸切り痕を有する。また、3～8は見込み部分にロクロ目が顕著に残る。これらは第381図10～13の耳皿などとともに土坑南部で集中して出土しており、一括廃棄されたことがうかがわれ、特異な出土状態を示す。第380図10～34、第381図1～9は底部に糸切り痕を有し、ロクロ目が残る在地系土師質土器皿である。胎土は赤褐色系の



第381図 SK230出土遺物実測図② (1/3)

色調を呈する。11は口唇部に煤が付着する。13は器面全体が煤により黒褐色に変色しており、さらに口唇部には煤がべったり付着する。また第380図12・15・19・31と第381図7・9の底部には板状圧痕が残る。第381図10~13は耳皿である。赤褐色系の色調を呈し、底部には糸切り痕を有する。また、内面にはロクロ目が顕著に残る。第381図14は瓦質土器鍋の口縁部片である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を上方に引き上げる。胴部外面下位から底部外面にかけては格子状のタタキ目が認められ、内面は横方向のカキ目あるいはハケ目による調整が施される。外面には煤が付着する。防長系の鍋の特徴を有し、搬入品と推定される。15は瓦質土器の口縁部片である。口縁部は内湾し、口縁端部は肥厚する。風炉もしくは火鉢と推定される。16は孔径1.6cmを測る中型の土鍾である。外面には黒斑が認められる。第382図は中国明代の「永楽通寶」である。書体は真書で、初鋳年代は1408年である。

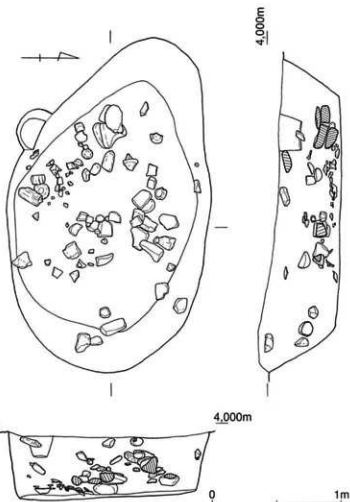


第382図 SK230出土銭実測図 (1/1)

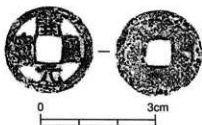
第382図は中国明代の「永楽通寶」である。書体は真書で、初鋳年代は1408年である。

SK234 (第383図) 8C区はほぼ中央に位置する土坑である。平面プランは不整形楕円形を呈し、長径2.6m、短径1.6m、深さ50cmを測る。土坑埋土中には扁平な河原礫が多数認められ、埋土下位からは在地系の土師質土器皿および備前系陶器罎鉢の口縁部片や銅銭などが出土している。遺物の出土状況や遺構埋土の様相から廃棄土坑と推定される遺構である。出土遺物から遺構の時期は15世紀末葉~16世紀初頭に比定される。

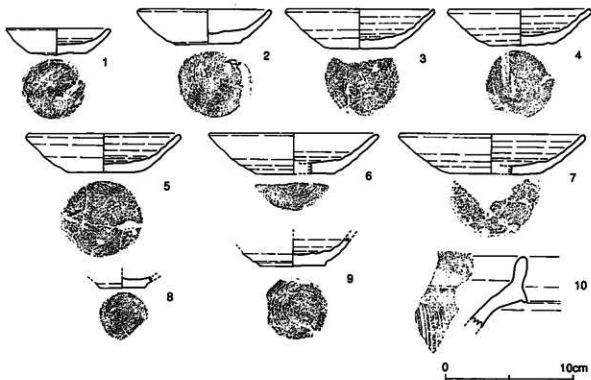
SK234出土遺物 (第384~385図) 第384図は中国唐代の「開元通寶」である。書体は真書で、初鋳年代は621年である。第385図1~9は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する在地系土師質土器皿である。2の口唇部には煤が付着し、灯明皿として使用されていたことが推定される。また、2・3の内底部はナデ調整が行われてお



第383図 SK234実測図 (1/30)



第384図 SK234出土銭実測図 (1/1)



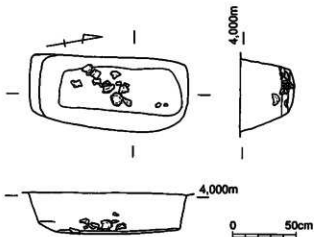
第385図 SK234出土遺物実測図 (1/3)

り、8・9には内底部にもロクロ目が顕著に残る。10は備前系陶器楕鉢の口縁部片である。口縁部は上方に立ち上がり、垂下は下方に尖る。口縁帯は外面の半ばでやや屈曲し、「く」の字状を呈する。中世5a期に比定され、製作年代は15世紀後葉に比定される。

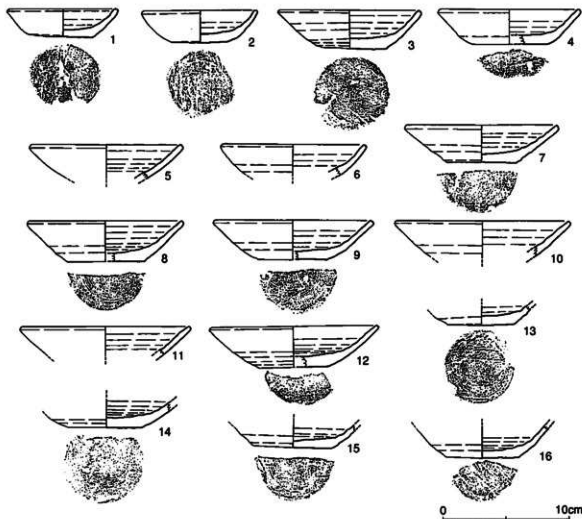
SK235 (第386図) 7C区東の中央に位置する土坑である。平面プランはほぼ長方形を呈し、その規模は東西60cm、南北1.3m、深さ約40cmを測る。土坑埋上下位からは、赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿のみが一括廃棄された状態で検出された。土師質土器皿の内面には煤の付着がなく、灯明皿として転用されたものは認められず、食器(カワラケ)として使用されたもので占められる。出土遺物は時期的にも単一の様相が認められ、良好な一括資料として評価できる。遺構の構築時期は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

SK235出土遺物 (第387図)

第387図はSK235から一括出土した在地系土師質土器皿である。いずれも赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する。また、器面にはロクロ目が顕著に残る。体部はやや内湾気味に立ち上がる特徴を示す。見込みには不整方向のナゲ調整が行われているものも認められる。口径については、10cm以内(1・2)のものと11～14cm前後(3～16)の2種類に大別することができる。なお、16の底部には板状圧痕が認められる。



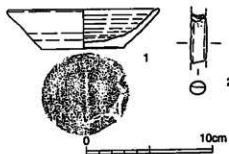
第386図 SK235実測図 (1/30)



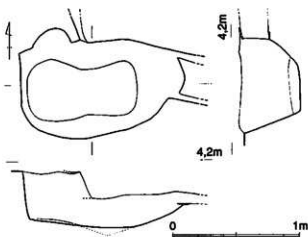
第387図 SK235出土遺物実測図 (1/3)

SK242 (第388図) 9C区に位置する土坑である。東は視乱によって、削平を受けている。平面プランは楕円形を呈するものと推定され、検出規模は、長径1.0m超、短径約70cm、深さ35cmを測る。良好な出土遺物は少ないが、遺構埋土からは在地系土師質土器皿の破片が多く出土しており、遺構の時期は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

SK242出土遺物 (第389図) 第389図1は在地系土師質土器皿である。底部には板状圧痕が残る。2は土鋪片である。古墳時代の所産か。

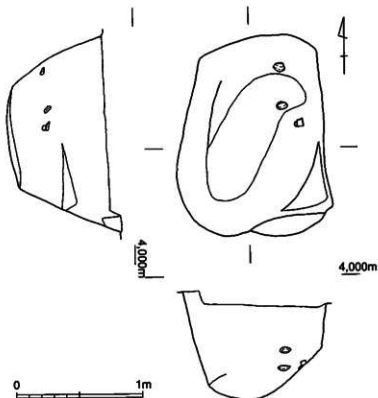


第389図 SK242出土遺物実測図 (1/3)



第388図 SK242実測図 (1/30)

SK244 (第390図) 8C区南に位置する土坑である。平面プランは不整楕円形を呈し、その規模は東西約1.1m、南北約1.5m、深さ約60cmを測る。遺構埋土中には土師質土器皿の小破片が多く含まれるが、その中において、埋土中位からはほぼ完形に近い在地系土師質土器皿が2点出土している。出土した土師質土器皿から遺構の年代は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。



第390図 SK244実測図 (1/30)

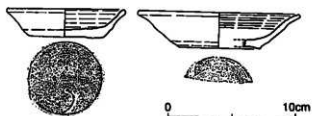
SK244出土遺物 (第391図) 第391図1～2は底部に糸切り痕を有し、赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。内面にはロクロ目が顕著に残る資料である。



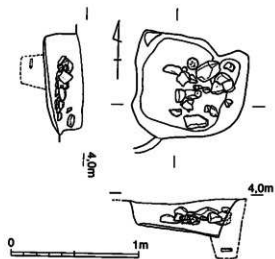
第391図 SK244出土遺物実測図 (1/3)

SK303 (第392図) 8C区北やや東よりに位置する土坑である。土坑の東北部を柱穴に切れ、明確なプランは不明だが、平面プランは不整楕円形を呈すると推定される。その規模は東西約90cm、南北約80cm、深さ20～30cmを測る。遺構埋土からは傘大から人頭大の礫とともに土師質土器皿が検出された。出土した土師質土器皿の年代観から、遺構の時期は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

SK303出土遺物 (第393図) 第393図1～2は在地系土師質土器皿である。いずれの資料も赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕、内面にロクロ目を顕著に残す。

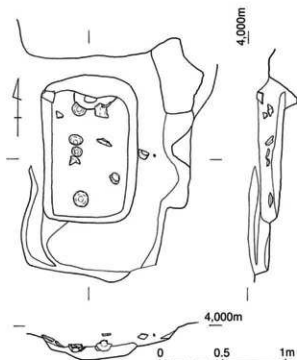


第393図 SK303出土遺物実測図 (1/3)



第392図 SK303実測図 (1/30)

SK245 (第394図) 8B区に位置する土坑である。平面プランは長方形を呈し、その規模は東西約60cm、南北約1.2m、深さ約20cmを測る。遺構の深さが浅いことから、土坑上面は削平を受けている可能性がある。土坑埋土中からは、銅銭や在地系の土師質土器皿などが出土している。これらの遺物はある程度のまとまりをもって出土しており、一括廃棄されたものと推定される。また、土師質土器皿は総じて底部に厚みをもつ特徴が認められ、同種の資料と比較してやや古い様相を呈する。遺構の構築時期は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。



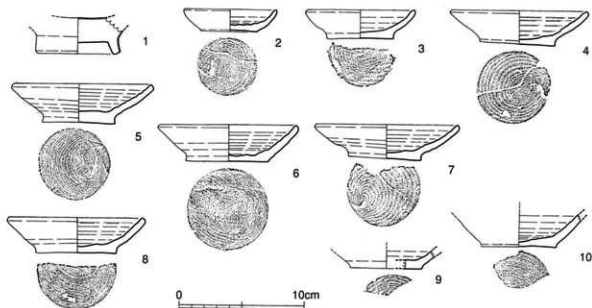
第394図 SK245実測図 (1/30)

SK245出土遺物 (第395～396図) 第395図は中国明代の「宣徳通寶」である。書体は真書で初鑄年代は1433年である。第396図1は青磁碗の高台部片である。内外面は施軸されるが、外底部は露胎となる。また、底部周辺は意図的に打ち欠かれたものである。2～10は底部に糸切り痕を有し、赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿で、ロクロ目を顕著に残すものである。3～5、7～10は底部に厚みをもつものである。



第395図 SK245出土銭実測図 (1/1)

SK139 (第397図) 11B区の南東隅に位置する土坑である。東側はSK157に切られ遺構の全体規模は不明である。検出規模は東西2.7m、南北1.1m、深さ



第396図 SK245出土遺物実測図 (1/3)

10~50cmである。遺構の切り合い関係から15世紀後葉に比定される。

SK139出土遺物 (第398図)
第398図は赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。



第398図 SK139出土遺物実測図 (1/3)

SK160 (第399図) 9 B
区に位置し、SD151の底面に構築される長方形の土坑である。規模は東西80cm、南北1.2m、深さ50cmを測る。土坑上位からは河原礫が検出された。SD151との関連から、遺構の時期は15世紀後葉以前に比定される。

SK160出土遺物 (第400図) 第400図は備前系陶器播鉢である。中世5期に比定される。

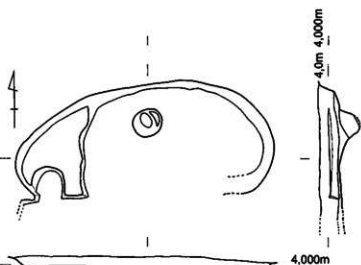


第400図 SK160出土遺物実測図 (1/3)

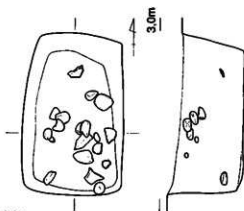
SK316 (第401図) 14D区に位置する土坑である。平面プランは不定形で、東西約1.0m、南北約90cm、深さ15cmを測る。遺物の出土は少ないが、土坑上位から断面形態が箱形を呈する在地系土師質土器皿が出土した。遺構の時期は出土遺物から14世紀前葉に比定される。

SK316出土遺物 (第402図)

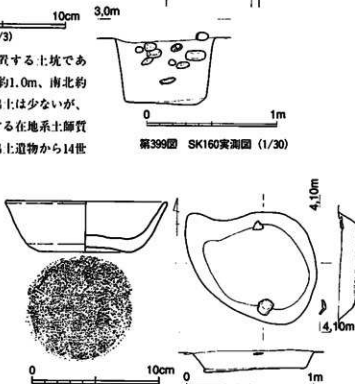
第402図は断面形態が箱形を呈する在地系土師質土器杯である。茶褐色系の色調を呈し、体部は外傾し、口縁端部はやや尖り気味となる。底部には糸切り痕を有するが、摩滅のため不明瞭である。SK236やSK252出土のものより体下部の立ち上がり部がやや厚く、新しい様相を呈する。



第397図 SK139実測図 (1/40)



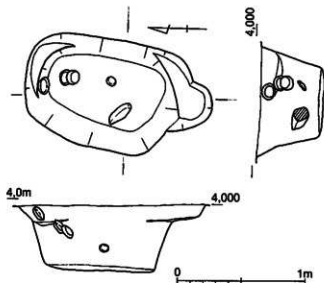
第399図 SK160実測図 (1/30)



第401図 SK316実測図 (1/30)

第402図 SK316出土遺物実測図 (1/3)

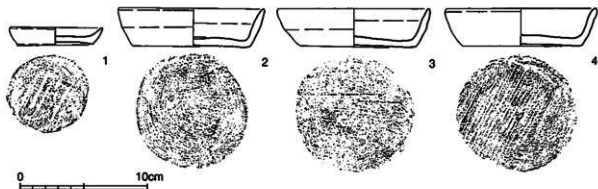
SK252 (第403図) 11C区に位置する。平面プランは楕円形を呈し、規模は東西80cm、南北1.5m、深さ50cmを測る。土坑埋土からは断面箱形を呈する在地系土師質土器杯が北側から廃棄された状態で検出された。遺構の時期は遺物から14世紀前葉に比定され、SK236とともに当調査区では最も古い遺構の一つである。また、当遺構とSK236は六角形の井戸枠をもつ井戸SE238に隣接するように構築されており、SE238との関連性が考えられるが、詳細は不明である。



第403図 SK252実測図 (1/30)

SK252出土遺物 (第404図)

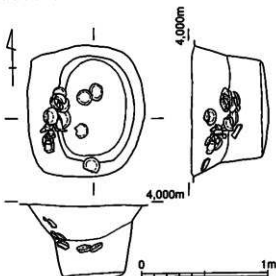
第404図1~4は断面形態が箱形を呈する在地系土師質土器杯で、体部は外傾し、口縁端部はやや尖り気味となる。底部には糸切り痕を有する。色調は1~3が白茶色系の色調を呈するのに対し、4は淡赤褐色系の色調を呈する。なお、1・4の底部には板状圧痕が残る。



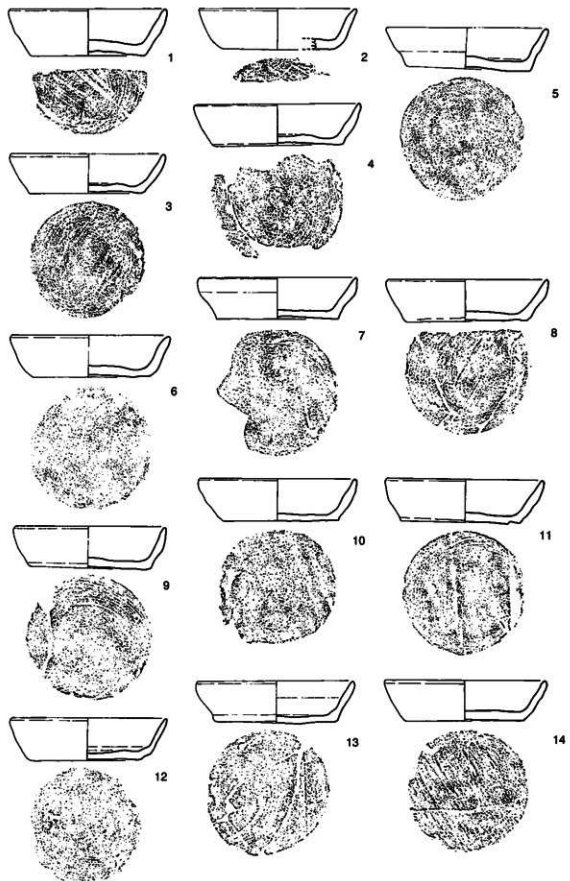
第404図 SK252出土遺物実測図 (1/3)

SK236 (第405図) 11C区に位置する。平面プランは楕円形を呈し、規模は東西80cm、南北約1.0m、深さ60cmを測る。土坑上位から中位で断面箱形を呈する在地系土師質土器杯が一括廃棄された状態で検出された。遺構の時期は遺物から14世紀前葉に比定され、当調査区では最も古い遺構である。

SK236出土遺物 (第406図) 第406図1~14は断面形態が箱形を呈する在地系土師質土器杯である。白茶色系の色調を呈し、体部は外傾し、口縁端部はやや尖り気味となる。底部には糸切り痕を有する。1・14の底部には板状圧痕が残る。



第405図 SK236実測図 (1/30)



第406図 SK236出土遺物実測図 (1/3)

SK109 (第407図) 8B区に位置する、細長い土坑である。南北両端は柱穴に切られるが、規模は東西約30cm、南北約1.3m、深さ25cmを測る。銅銭が出土しているが、その他は小破片のみで遺構の時期は特定できなかった。

SK109出土銭 (第407図) 第407図1は中国北宋代の「元豊通寶」である。書体は篆書で、初鑄年代は1078年である。

SK122 (第407図) 9B区に位置する、円形の土坑である。規模は直径約1.0m、深さ20cmを測る。図示可能な遺物はなく、遺構の時期は不明である。

SK128 (第407図) 11B区に位置する、不整形円形を呈する土坑である。規模は東西60cm、南北約90cm、深さ約30cmを測る。遺構上位には礫が置かれているが、良好な出土遺物はなく、時期は不明である。

SK136 (第407図) 12B区に位置する、不整形円形を呈する土坑である。規模は東西約1.0m、南北約90cm、深さ25cmを測る。土坑南西隅に柱穴が切り込む。遺物は小破片のみで遺構の時期を特定できるものはなかった。しかし、SE132に切られており、これよりは先行するものと推定される。

SK137 (第407図) 12B区に位置する、ほぼ円形を呈する大型の土坑である。規模は直径約2.5m、深さ30cmを測る。柱穴が二つ切り込まれている。遺構埋土中からは五輪塔の空風輪が出土したほかは、良好な資料は認められず、時期不明である。

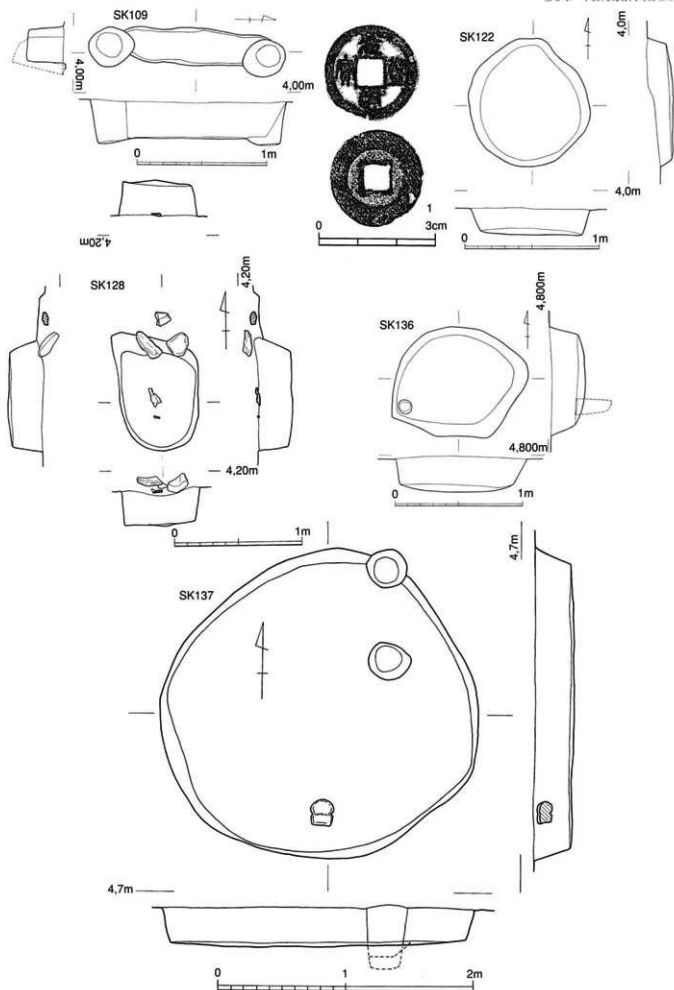
SK141 (第408図) 12-13B区に位置する、楕円形を呈する土坑である。規模は東西約1.0m、南北1.1m、深さ約30cmを測る。南西隅を柱穴に切られる。土坑埋土中から、銅銭が出土したほかは良好な遺物の出土はみられず、時期は不明である。

SK141出土銭 (第408図) 第408図1は中国北宋代の「景徳通寶」である。書体は真書で、初鑄年代は1004年である。

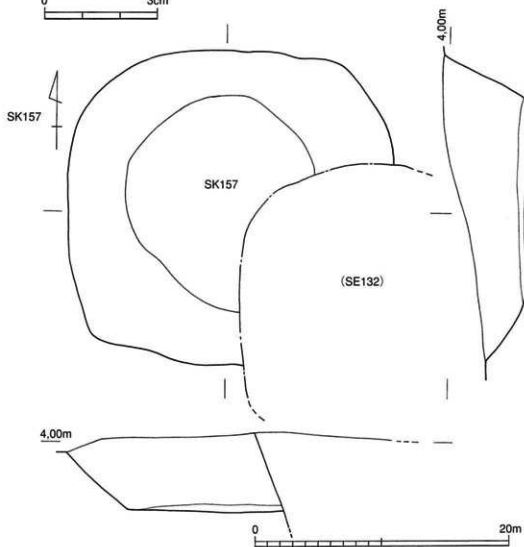
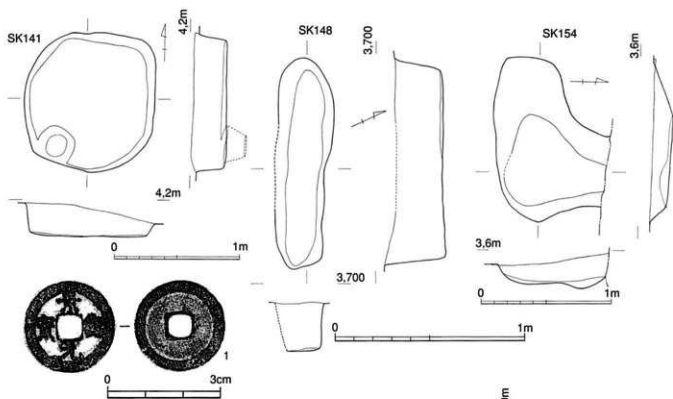
SK148 (第408図) 8B区南に位置し、SK147に南東側を切られる細長い土坑である。規模は長径1.6m、短径40cm、深さ約45cmを測る。16世紀中葉～後葉に比定されるSK147に先行するものと考えられるが、明確な時期を特定できる遺物の出土はない。

SK154 (第408図) 9A区に位置する、不定形の土坑である。北側をSD105に切られるため、明確なプランは確認できなかった。検出規模は東西最大1.2m、南北80cm、深さ10～20cmを測る。16世紀中葉～後葉に比定される溝SD105に先行する土坑であるが、良好な出土遺物がなく、明確な時期は不明である。

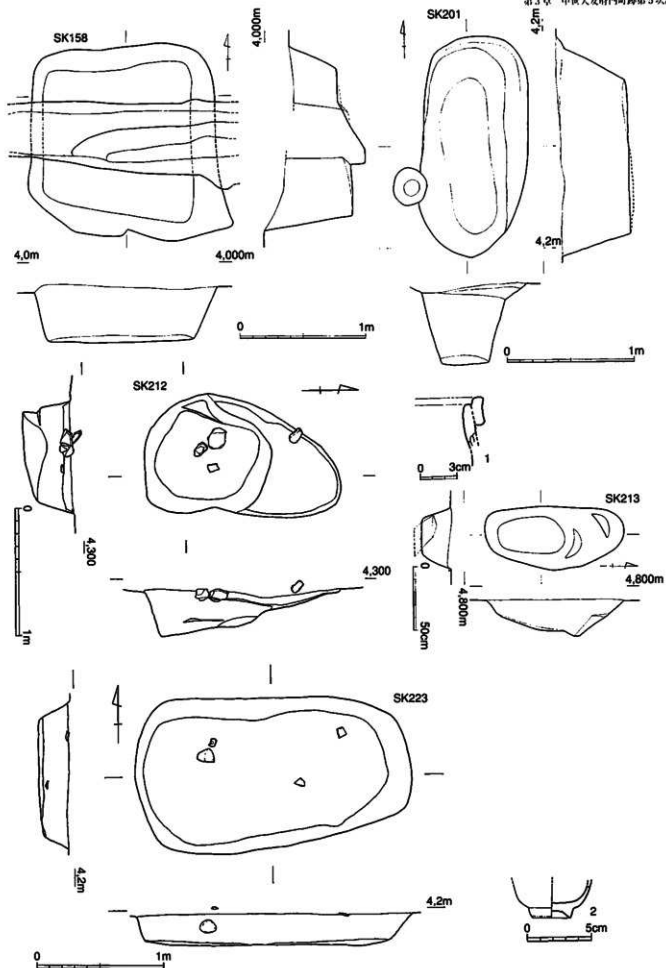
SK157 (第408図) 12B区に位置し、南東部分をSE132に切られる土坑である。平面プランはほぼ円形を呈するものと推定され、その規模は直径2.5m、深さ60cmを測る。出土遺物は小破片のみで遺構の時期を特定できるものはなかった。しかし、SE132との切り合い関係から、これよりは先行するものと考えられる。



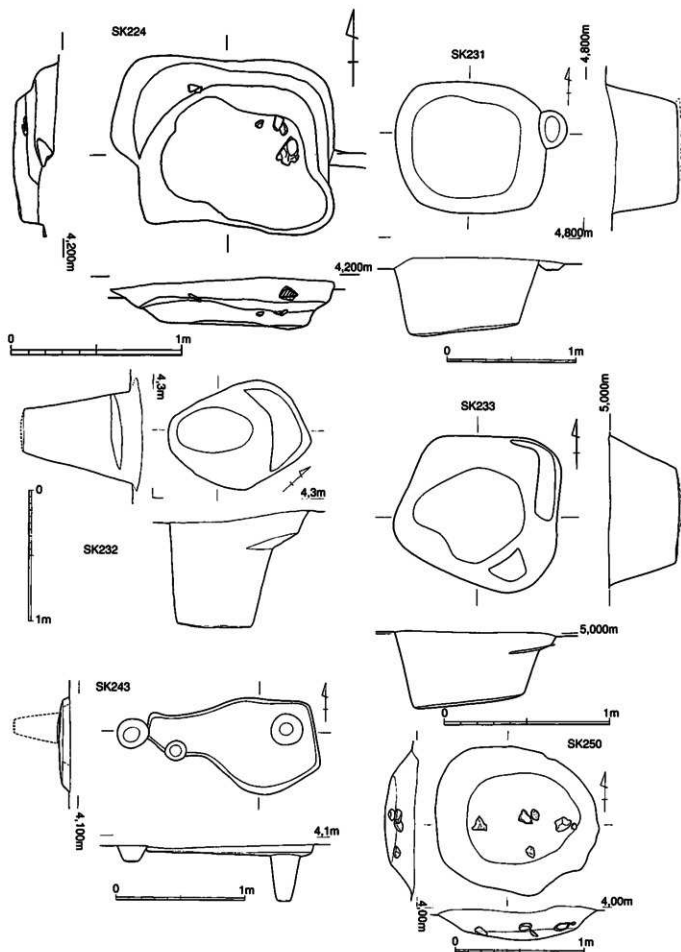
第407図 SK109・SK122・SK128・SK136・SK139実測図 (SK109~SK136は1/30、SK137は1/40、遺物1は1/1)



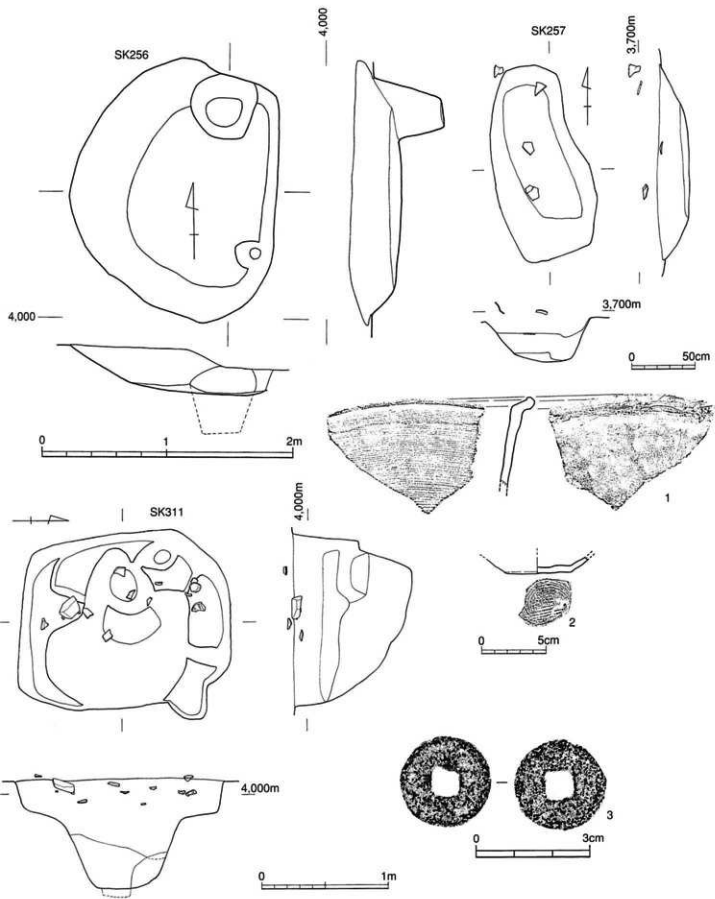
第408図 SK141・SK148・SK154・SK157実測図 (SK141~SK154は1/30、SK157は1/40、遺物1は1/1)



第409図 SK158・SK201・SK212・SK213・SK223実測図 (1/30、遺物は1/3)



第410図 SK220・SK231・SK232・SK233・SK243・SK250実測図 (1/30)



第411図 SK256・SK257・SK311実測図 (1/30、遺物1・2は1/3、3は1/1)

SK158 (第409図) 12A区西に位置する土坑である。土坑中央を溝SD105(16世紀中葉～後葉に比定される)に切られるが、残存部分から方形プランを呈するものと推定される。規模は一辺約1.5m、深さ40～70cmを測る。SD105に先行するものではあるが、時期を特定できる遺物の出土は認められなかった。

SK201 (第409図) 13A区西に位置する土坑である。平面プランは楕円形を呈し、東西80cm、南北1.7m、深さ50～60cmを測る。13世紀後葉に比定される常滑系陶器大甕の口縁部片が出土しているが、遺構の時期を特定できるものではない。

SK201出土遺物(第409図1) 第409図1は常滑系陶器大甕の口縁部片である。口縁の断面形態は「N」字状を呈し、口縁縁帯部は2cm程度である。中野晴久⁽³⁾による6a型式に比定される資料で、13世紀後葉の所産である。

SK212 (第409図) 12C区に位置する。平面プランは不整楕円形を呈し、その規模は東西90cm、南北1.0m、深さ40cmを測る。当遺構が埋没した後、上部にレンズ状に窪み浅い土坑が構築される。土坑上位で磚が検出されたが、埋土中からは良好な遺物の出土はなく、時期は不明である。

SK213 (第409図) 13B区に位置する。平面プランは楕円形を呈し、東西50cm、南北1.1m、深さ10～30cmを測る。遺構内からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

SK223 (第409図) 11C区に位置し、SE238を切る土坑である。平面プランは不整楕円形を呈し、東西2.2m、南北約1.2m、深さ約20cmを測る。褐釉陶器小杯の底部が出土したが、時期を特定できるものではなく、遺構の時期は不明である。

SK223出土遺物(第409図2) 第409図2は中国景德鎮窯系の磁器で、褐釉小杯の底部片である。内外面ともに褐釉を施す。高台端部は軸を掻きおとしており、高台端部から外底部は露胎となる。16世紀代の製品である。

SK224 (第410図) 12B区に位置する不定形の土坑である。東西約1.1m、南北約80cm、深さ約20cmを測る。当遺構が埋没した後、ほぼ同じ位置に後世の掘り込みが行われている。遺構の時期は不明である。

SK231 (第410図) 9C区に位置する楕円形の土坑である。規模は東西1.2m、短径1.1m、深さ約50cmを測る。遺構内からは良好な出土遺物は認められず、時期不明である。

SK232 (第410図) 8-9C区に位置する楕円形の土坑である。規模は長径1.1m、短径70cm強、深さ80cm程度を測る。出土遺物から遺構の時期は特定できない。

SK233 (第410図) 8C区に位置する不定形の土坑である。規模は東西1.2m、南北1.2m、深さ約60cm程度を測る。時期を特定できる遺物の出土はない。

SK243 (第410図) 9C区に位置する不定形の土坑である。規模は長径1.3m、短径30～70cm、

(3) 中野晴久「常滑・洞美」(『概説 中世の土器・陶磁器』貞陽社 1995年) 397頁

深さ10cm程度を測る。時期は不明である。

SK250 (第410図) 10C区に位置する楕円形の土坑である。規模は長径1.3m、南北1.2m、深さ25cm程度を測る。土坑埋土下位から数点の角礫を検出したが、遺構の時期を特定できる遺物の出土はなかった。

SK256 (第411図) 8B区に位置する不整形円形の土坑である。規模は東西約1.7m、南北2.1m、深さ40cmを測る。良好な出土遺物は認められず、時期は不明である。

SK257 (第411図) 9C区に位置する長円形の土坑である。東西80cm、南北1.5m、深さ25cmを測る。遺構内からは瓦質土器の口縁部片が出土したが、遺構の時期を特定できる遺物は認められなかった。

SK257出土遺物 (第411図) 第411図1は瓦質土器火鉢の口縁部片である。口縁部はし字状に外に開き、口縁端部はやや内側につまみ上げる。外面は丁寧なナデ調整が施され、内面は横方向のハケもしくはカキ目調整が施される。

SK311 (第411図) 16D区に位置する土坑である。平面プランは不整形円形を呈し、規模は東西1.4m、南北約1.6m、深さ90cmを測る。土師質土器の底部片が出土したが、時期を特定できるものではない。

SK311出土遺物 (第411図) 第411図2は在地系土師質土器の底部片である。底部に糸切り痕を有し、赤褐色系の色調を呈する。

SK315 (第411図) 15D区に位置する土坑である。遺構が複雑に切り合い、明確なプランが検出できなかった。埋土中からは銅銭が1点出土している。

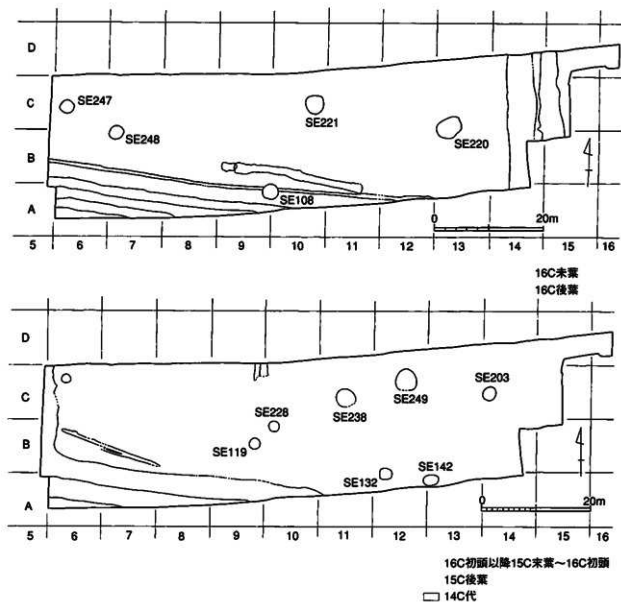
SK315出土銭 (第411図) 第411図3は銅銭であるが、鉛の付着が激しく銭種の特定はできなかった。

3. 井戸・井戸状遺構

概要 中世大友府内町跡第5次調査B区では、13基の井戸を検出している。上層遺構群に属するものが5基、下層遺構群に属するものが8基である。上層遺構群に属するものは、16世紀後葉に比定される井戸が主体をなし、当調査区の最盛期に属す。溝の項で前述した横土遺構SX102とそれに付属する溝SD101・SD103と同時併存した可能性が高い。またこれらの井戸はSX102やSD103から離れた位置に構築されていることが観察される。16世紀末葉に比定されるSE108はSD105を切って、SX102やSD103に接近した位置に構築されており、16世紀後葉代の井戸とは様相を異にする。SX102など一連の遺構が腐絶された後に掘られた可能性も考えられる。

下層遺構に属するものは、16世紀初頭以降と推定されるものが1基、15世紀末葉～16世紀初頭に比定されるものが1基、15世紀後葉に比定されるものが5基、14世紀代に比定されるものが1基である。

本調査区で検出された井戸は、木溜部に曲物を使用したものや、六角形の木枠を使用したものもあるが、そのほとんどが轆轤を使用するものである。また、石塔類や自然石による石積みで井戸側



第412図 井戸 (1/700)

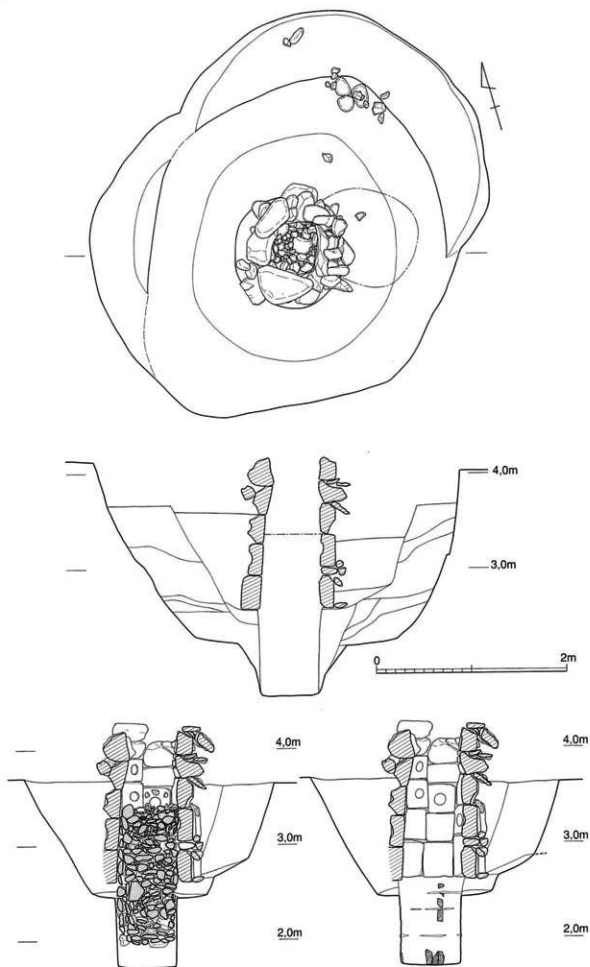
を構築するものや素掘りの井戸などもみられる。また、井戸の廃棄にあたっては、井戸内に礫や大石を投棄して井戸側や掘方を被覆するものなど様々な行為が行われている。さらに、井戸の改修が行われたことがうかがわれる例も検出された。

SE220 (第413図) 13A-B区に位置する井戸である。井戸の掘方は不整形円形を呈し、長径4.5m、短径3.7m、深さ2.5mを測る。井筒部の平面プランはほぼ円形を呈し、直径約1.0mである。湧水部は標高約1.7mで、調査時も水が湧き、当時の湧水点とほぼ変わらないものとする。遺構上面の検出段階で、掘方のほぼ中央部分に大型の河原礫を円形に配した石組みが確認された。この石組みのうち東側に当たる部分はやや整然さを欠き、この部分にのみ加工した凝灰岩を使用しており、様相を異にする。また、この石組みの東側で土色の違う土坑状の掘り込みプランを確認した。この掘り込みは調査当初、土坑として認識していたが、後に井戸側の改修(補修)に伴う掘り込みと判明した(後述)。掘方全体を掘り下げた後、最上面の礫を撤去したところ、五輪塔の部材(火輪や地輪)を使用した井戸側が検出された。また、井筒内部に多量の礫を充填して、井戸を潰した状況が確認された。これらの礫は当時の掘立柱建物の壁根等に置かれていたものなどを利用して、井戸の廃絶に利用したものと推定される。井戸側は五輪塔部材を7角形に組み、3段ないし4段に積んで形成されていた。その後、土層の堆積状態と前述した東側の土坑状の掘り込みとの前後関係を確認するために断り調査を行った。土層断面から掘方のラインは2本が観察され、埋土も明確な違いがあり、井戸の構築は2度にわたって行われていることが推察できる。はじめに構築された井戸は2度目の井戸の構築により破壊されたと思われる、その構築時期・構造等の詳細は不明である。また、検出時に井戸の掘方上部で確認された土坑状の掘り込みは、2回目の井戸が構築された後、井戸側の破損もしくは崩壊に伴う改修(補修)のためのものであることが判明した。さらに、西側の井戸側の五輪塔部材が隙間なく積まれているのに対し、東側のものは五輪塔部材の間に扁平な礫を挟み込むようにして積まれており、改修の際に井戸側の高さや角度の調整を行ったものと推定される。このため、東側の改修部分は五輪塔部材が3段となっているものと思われる。また、検出段階で認められた上部構造の石組みの一部に加工凝灰岩が使用されていたのも、この改修に伴うものと推定される。新井戸の構築にあたっては、旧井戸の湧水点をほぼそのまま利用したと考えられる。まず、検出面から2mほど旧井戸を掘り下げ、湧水部に新しく桶枠を装填し、その後、上部に五輪塔部材を4段ほど積み上げたものと推察する。桶の残存状況は悪く、わずかに桶の板材と縄跡が残るのみであるが、残存状況から結構は一体のみが使用されたものと推定される。桶の板材は、長さ推定90cm、幅約6cm、厚さ1cm程度である。旧井戸の埋土中からは良好な遺物の出土はみられなかったが、新井戸の裏込め土や井筒内から3期に比定される京都系土師器皿が出土しており、当井戸の構築および廃絶の時期は16世紀末葉に比定される。

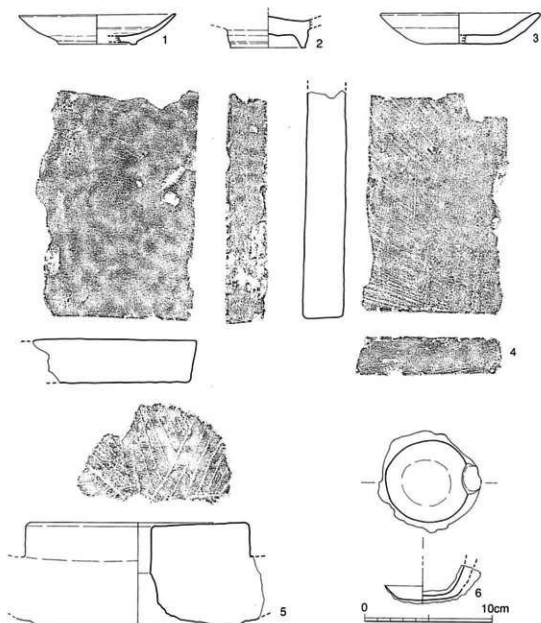
なお、当調査区では井戸側に五輪塔の部材を利用したものは当該井戸のみであるが、5次A区では複数の井戸に五輪塔部材が使用されている。また、屋敷の区画と思われる石列にも五輪塔部材が利用されている。さらに、国道10号古国府延福工事に伴う、「第2南北街路」沿いの「町屋」部分の調査でも数例検出されており、推定「万寿寺」の敷地内においても検出されている。「中世大友府内町跡」においては、井戸を構築する際に、抵抗なく五輪塔の部材を井戸側等に利用することが行われていたのであろう。これらの五輪塔部材はいったい何処からもたらされたものであろうか。「府内古園」では「大友御蔵場」の西に「祐向寺」が描かれており、また、府内の町には「万寿寺」をはじめ「称名寺」「消忠寺」など多くの寺が描かれている。これらの寺院の中から廃絶された五輪塔を選び、利用したものであろうか。

SE220出土遺物 (第414図) 第414図1は中国産の白磁皿である。復元口径は12.4cm、器高6.1

井戸側の改修
五輪塔部材



第413図 SE220実測図 (1/40)



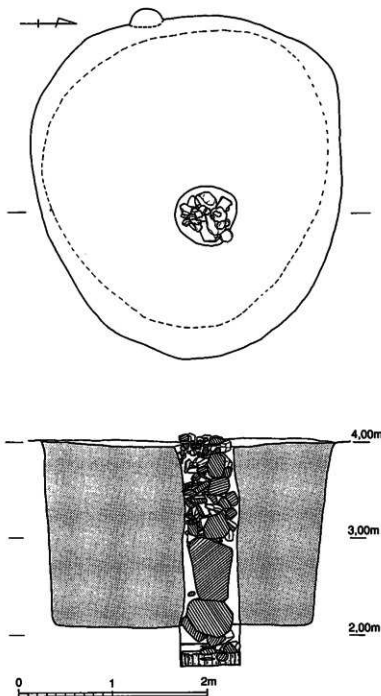
第414図 SE220出土遺物実測図(1～5は1/3・6は1/2)

cm、高台径6.1cmを測る。口縁部から体部にかけて施軸されているが、内底部および外底部は露胎となる。2は中国龍泉窯系青磁碗の高台部片である。高台径は6cmを測る。外底部は露胎となる。3は3期に比定される京都系土師器皿である。復元口径12.4cm、器高2.4cmを測り、器壁は7mm前後である。胎土は浅黄色系の色調を示す。4は埴である。凹面相当部にはコビキA(糸切り痕)が残存する。側面と端面の一部が残存し、凸面相当部と側面および端面はナデ仕上げである。5は茶臼の下臼である。罅の部分に欠損する。6は鉄製品である。直径2.8cmを測り、ほぼ円形を呈する。柄部を欠損しているが杓子の可能性が考えられる製品である。

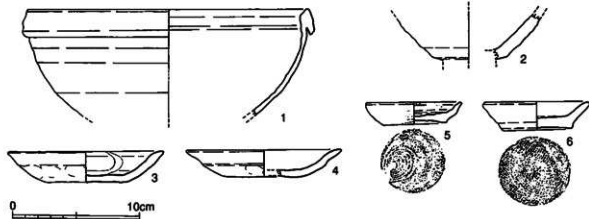
SE221 (第415図) 10C区に位置する井戸である。掘方の平面プランは楕円形を呈し、東西約3.7m、南北約3.2mを測り、深さは水溜部上面まで2.0mを測る。井土側は掘方のやや北東に位置し、平面プランは円形を呈する。直径約60cm、水溜部の深さ約50cmを測り、井戸全体の深さは約2.5mとなる。湧水部は標高約1.6mで調査時も水が湧き、当時とさほど変わらないものと思われ

る。検出時の規模と黄褐色ブロック土を含む埋土の状況から、井戸と推定され、断ち割り調査を行った。桶等の痕跡はなく、抜き取り痕も観察されなかったことから、素掘りの井戸と推定される。井筒内には大小の礫が多量に充填されており、井戸を潰した状況が確認できる。中でも井筒下位で検出された礫は長径50cmや長径70cmを測る非常に大きなものである。水溜部には結構が使用されているが、井戸廃棄時の礫の投棄によって破壊されている。そのため、残存状況はよくないが、籠跡がわずかに残り、桶の板材は幅6cm前後を測ることができる。井筒内に廃棄された礫に混ざって、3期に比定される京都系土師器皿や近世1期bに比定される備前系陶器火鉢などが出土しており、当井戸の廃棄時期は16世紀末葉に比定される。

SE221出土遺物(第416~417図) 第416図1は中国南部産焼締陶器鉢である。口縁部が断面方形を呈し、鉢C類に比定される。2は瀬戸美

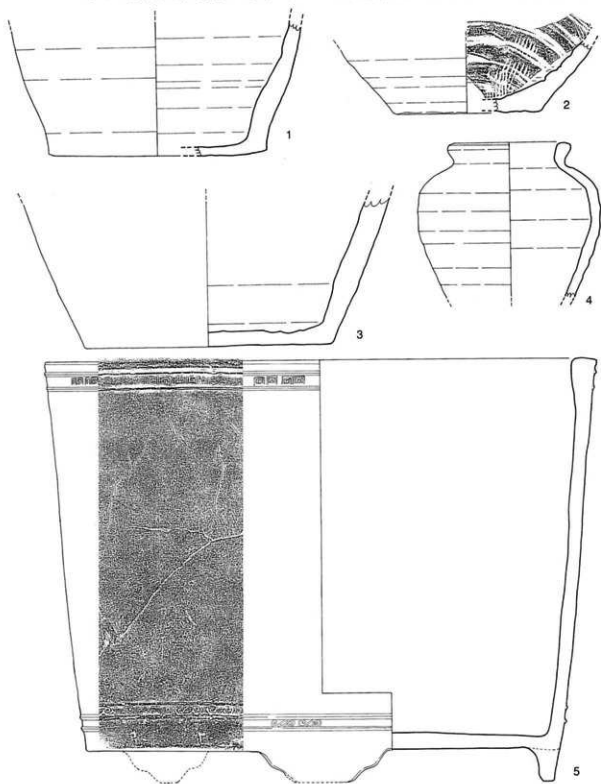


第415図 SE221実測図(1/40)



第416図 SE221出土遺物実測図①(1/3)

濃産天目茶碗の底部片である。体下部まで茶褐色の釉が掛かり、外底部は露胎となる。3～4は3期に比定される京都系土師器皿で浅黄色系の色調を呈する。3の内面にはナデあげ痕が残り、煤が付着する。口径12.2cm、器高2.4cmを測る。4は内外面に煤が付着し、復元口径12.4cm、器高2.1cmを測る。5～6は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する在地系土師器小皿である。5は内外面に煤が付着する。第417図1～4は備前系陶器である。1は壺の底部片である。色



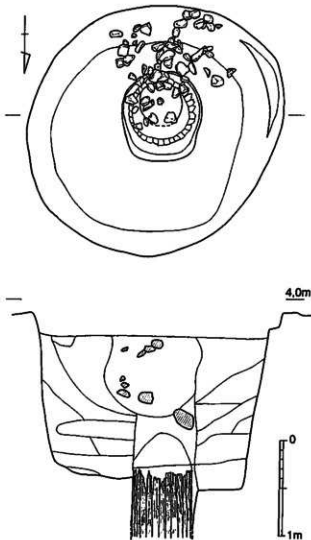
第417図 SE221出土遺物実測図② (1/3)

0 10cm

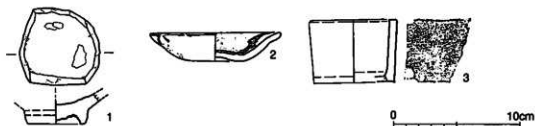
調は暗赤褐色を呈し、内底面に自然軸が掛かる。2は摺鉢の底部片である。ナナメ方向の摺目が認められ、近世1期bに比定される。3は甕の底部片で、暗赤褐色系の色調を呈する。4は甕である。灰色系の色調を呈し、復元口径9.6cm、胴部最大径14.4cmを測る。5は瓦質土器火鉢である。口径43.2cm、器高33cmを測る。口縁部下と胴部下半に二条の三角突帯を巡らす。口縁下の突帯の間には2個1単位の雷文を2つずつ等間隔に押捺し、胴部下半の突帯の間には2個一単位の双頭康手文を等間隔に押捺する。底部には逆台形状の脚を貼り付ける。口縁部端～胴部内外面は丁寧なナデ調整が行われ、胴部内面の中程はナナメ方向のヘラケズリが施され、接合痕を消している。16世紀後半代の所産である。

SE248 (第418図) 7B-7C区に位置する井戸である。掘方は楕円形を呈し、東西長径2.8m、短径2.5m、水溜部上面までの深さ1.7mを測る。水溜部は70cm以上を測り、井戸全体の深さは2.4m超である。井筒は掘方のやや南に位置し、楕円形を呈する。長径1.0m、短径90cmを測る。井戸上面には礫を廃棄した土坑が掘られている。埋没後の柔らかい土壌を選んで掘られたものと推定する。水溜部には結桶が1個体確認された。桶の残存状況は良く、直径約60cm、高さ推定90cmを測り、幅約5cm、厚さ約1.5mmの板材34枚で作られている。遺構の時期は出土遺物から16世紀末に比定される。

SE248出土遺物 (第419図) 第419図1は朝鮮王朝産の灰青釉陶器碗の底部片で、高台皿付きは露胎となり、見込みに目跡がみられる。2は2期に比定される京都系土師器甕である。外面には煤が付着する。底部はややくぼみ、口径10.5cm、器高2.2cmを測る。3は瓦質土器香炉で、口縁部外面に竹管による刺突文を巡らせる。口径7.0cm、底径6.4cm、器高5.0cmを測る。

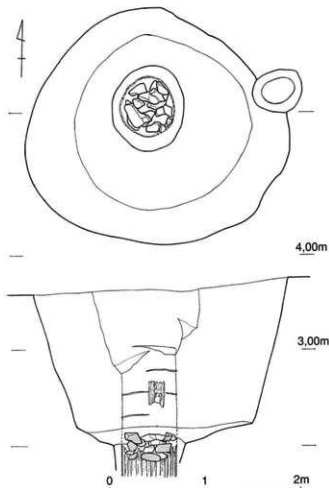


第418図 SE248実測図 (1/40)



第419図 SE248出土遺物実測図 (1/3)

SE247 (第420図) 6C区に位置する井戸である。16世紀中葉には埋没していたと思われるSD151の東側に構築されている。掘方の平面プランは楕円形を呈し、東西2.7m、南北2.5m、を測り、水溜部上面までの深さは1.6mを測る。水溜部の深さは40cm超で、井戸全体の深さは2.0mを超える。掘方のやや北寄りに長径90cm、短径70cmの井筒を掘る。井戸側上部には結桶を抜き取った跡と思われる、土坑状の掘り込みが認められる。この土坑状の掘り込みの上位では粘質土が直径90cmほどのマウンド状になっており、井戸廃棄時の井戸封じに関わるものであった可能性が高い。しかし、井戸としての認識が薄く、図面や写真などの十分な記録を行わず掘り進めてしまっている。井筒内には人頭大の礫が詰められている。井戸側に使用された結桶は2段分が観察できるが、上段の結桶の残存状況は極めて悪く、桶の板材の一部と箍跡が残るのみである。下段の結桶は投棄された礫によって、桶の上部は破損しており、その詳細は不明だが、板材の幅約5cmを測る。井戸の構築および廃絶の時期は裏込め土から中国涼洲窯系磁器の小片が出土しており16世紀末葉に比定される。

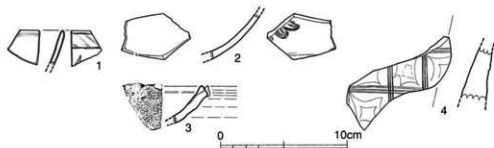


第420図 SE247実測図 (1/40)

SE247出土遺物 (第421~422図) 第421図は銅銭である。一部欠損しているが、「治」「平」「元」が読み取れ、中国北宋代の「治平元寶」である。書体は篆書で、初鋳年代は1064年である。第422図1~2は中国涼洲窯系青花碗の口縁部および胴部の破片である。3は瀬戸美濃系陶器御皿の口縁部片である。4は中国産青磁盤の底部片である。内面はオリブ色系の軸が掛かり、外面は露胎となる。



第421図 SE247出土銭実測図

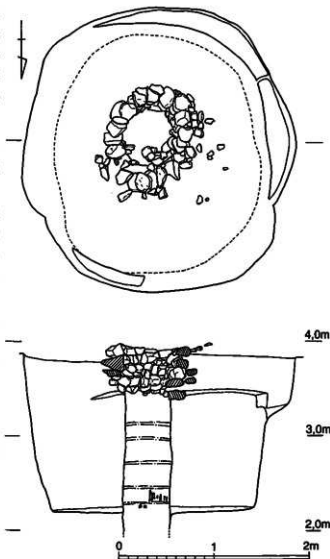


第422図 SE247出土遺物実測図 (1/3)

SE108 (第423図) 9A-10A区に位置する井戸である。溝SD105と切り合い関係を有し、遺構の構築順序は、SD105→SE108である。掘方の平面のプランは楕円形を呈し、長径3.0m、短径2.9mを測り、水溜部上面までの深さは1.7mである。水溜部には、調査時水が湧き出し、周辺部分が崩壊し、最下部まで掘り下げることができなかったが、平面プランは直径約50cmの円形を呈し、深さ30cm以上を測る。井戸全体の深さは2.0mを超える。井筒は井戸の掘方中央やや南寄りに位置し、井筒部上位を圍繞するように傘大～人頭大の礫が検出された。断ち割り調査を行ったところ、約50cmの深さに、4～5段の人頭大の礫を積み上げていることが判明した。井筒内には結桶の箍跡が残り、推定高約60cmの結桶が3段以上重ねられていたことが推定されるが、桶の残存状況は極めて悪く、わずかに板材が認められる程度であった。しかし、当該調査区で検出された、他の井戸にみられる井戸廃棄時の礫の投棄・充填などの様子は観察されず、井戸の上位構造である石積みも意図的に破壊された形跡は認められなかった。井戸の廃絶に人為的なものは感じられず、自然に埋没したものと推定される。出土遺物には混入品も認められるが、3期に比定される京都系土師器の存在や16世紀中葉～後葉に比定される溝SD105との切り合い関係から、遺構の時期は16世紀後葉～末葉に比定される。

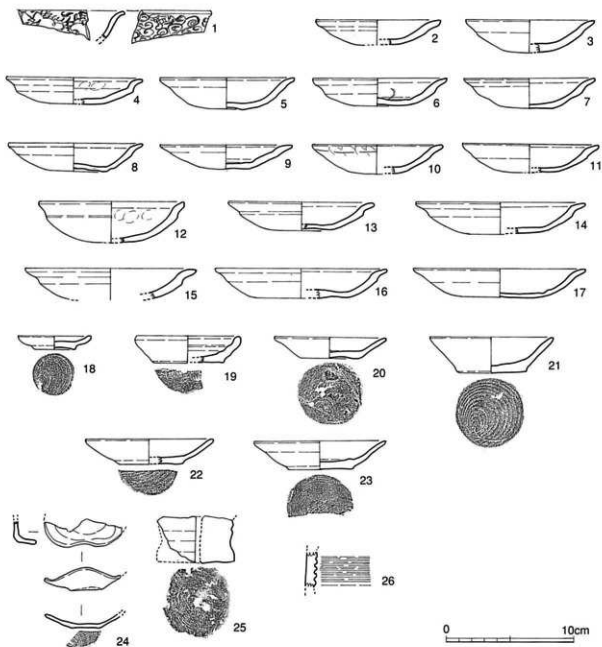
SE108出土遺物 (第424図)

第424図1は中国景徳鎮窯系青花皿の口縁部破片である。口縁部は端反りとなり、外面に渦文風唐草文、内面に唐草文様を描く。小野分類のB1群に比定される。混入品か。2～17は淡黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。2～3期に比定されるものが主体となるが、17は器壁が薄く、やや古い様相を呈する可能性がある。1期か。4の内底部には布目状の圧痕が残り、6の内面には「ノ」の字状のナデあげ痕が残る。また、16の口縁内外面には煤が付着する。口径に着目すると10cm前後のもの(2～11)、11cmを超えるもの(12・13)、13cmを超えるもの(15～17)の3法量に細分される可能性がある。18～23は在地系土師質土器皿である。色調は赤褐色系を呈し、底部に糸切り痕を有する。21は口縁内外面の3カ所に煤が付着する。本井戸出土の京都系土師器皿や在地系土師質土器皿は食器(カワラケ)として使用されていたものと灯明皿として使用されていたものが混在している。24は耳皿で、在地系土師質土器皿と共通する赤褐色系の色調を呈する。底部には糸切り痕を有する。25は燭台である。赤褐色系の色調を呈し、在地系土師質土器皿と共通する胎土を使用している。脚台部は短く、皿部は欠損している。底部に糸切



第423図 SE108実測図 (1/40)

り痕を有し、器面にはロクロ目が残る。皿部から底部にかけての穿孔は貫通する。26は瓦質土器火鉢の胴部破片である。外面に波板状の沈線を5条以上巡らせる。明赤褐色系の色調を呈する。



第424図 SE108出土遺物実測図 (1/3)

SE203 (第425図) 13C-14C区に位置する。井戸の掘方は不整楕円形を呈し、長さ2.7m、短径2.5m、深さ2.1m超を測る。井筒は井戸掘方のほぼ中央東寄り、直径約70cmの円形プランを呈する。井筒内には人頭大の礫が投棄されており、結桶等は認められなかったことから、素掘りの井戸であった可能性が高い。しかし、井戸の埋土は堅く、しまりがあるものの全体的に砂質土であり、他の井戸と比べると、やや脆弱な印象が強い。実際、調査時においても壁の崩壊等があり、十分な調査記録を取ることができなかった。水溜部周辺も砂質土であり、調査途中の雨によって井戸の壁や底面が崩壊し、井筒最下部までの掘り下げはできなかった。井戸内からの出土遺物はほとんどなく、時期の詳細は不明だが、井筒内から瓦質土器碗の破片が出土しており、16世紀前葉以降の

時期に比定される。

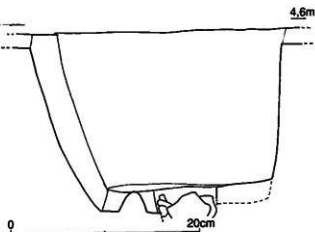
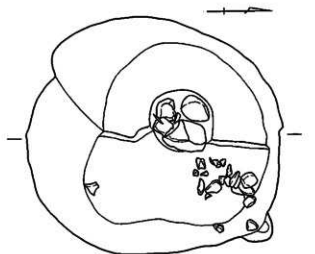
SE203出土遺物 (第426図)

第426図は瓦質土器境の口縁部破片である。

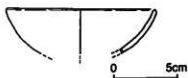
SE119 (第427図) 9B区の東に位置する。井戸の掘方は、直径約2.0mの円形を呈し、水溜部上面までの深さは1.9mを測る。水溜部の深さは30cm超で、井戸全体の深さは2.2m超である。井筒は掘方はほぼ中央に位置し、長径1.0m、短径90cmの平面楕円形を呈する。井戸上面で井筒のプランが確認できなかつたため、西側を断ち割り、土層の確認を行った。井戸底面に近づくにつれ、井戸の掘方より広がりを見せ、袋状の断面形態を呈する。断ち割り調査においても、井筒のプランは明瞭でなく、廃絶時において井戸全体を掘り返している。また、井戸の底面には準大～扁平な人頭大の河原礫が、30cm程の厚さで一面に敷き詰められており、他の井戸遺構とは様相を異にする。この礫層を除去した後に水溜部が検出され、井筒内に結植の糞と結植の板材と思われる木片が確認できた。この板材は火を受けており、炭化している。また、井筒の底には全体的に炭化物が堆積しており、あたかも結植を井戸の掘方の中で、焼却したかのような跡がうかがわれる。出土遺物には、在地系土師質土器Ⅲに1期に比定される京都系土師器Ⅲが伴見し、遺構の時期は15世紀後葉～16世紀初頭に比定される。

SE119出土遺物 (第428図)

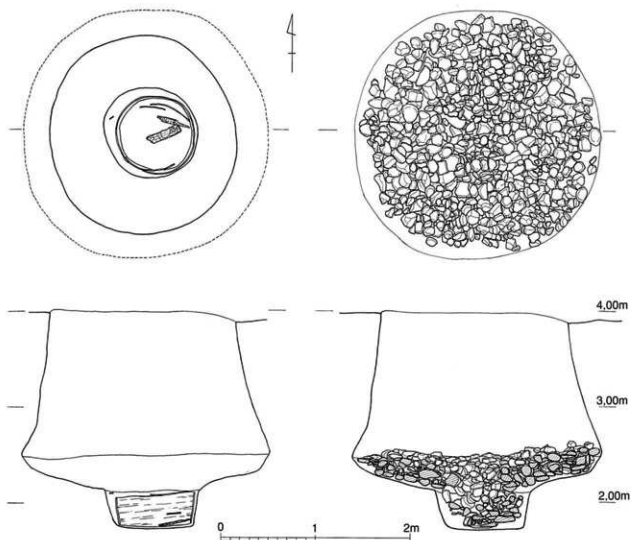
第428図1～2は浅黄色系の色調を呈する京都系土師器Ⅲで、2期に比定されるものである。3～6は在地系土師質土器Ⅲで、赤褐色系の色調を呈し、底部にロクロ目を有するものである。3・4は内底部にロクロ目が残り、4の内外面には煤が付着し、灯明皿として使用されている。5は内外面にロクロ目が顕著に残り、煤が付着する。6は内面にロクロ目が顕著に残る。7は備前系陶器壺の胴部片で、水屋壺として使用されたものと推定される。外面に1条の三角突帯が巡る。



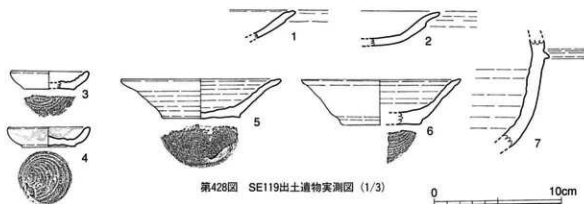
第425図 SE203実測図 (1/40)



第426図 SE203出土遺物実測図 (1/3)



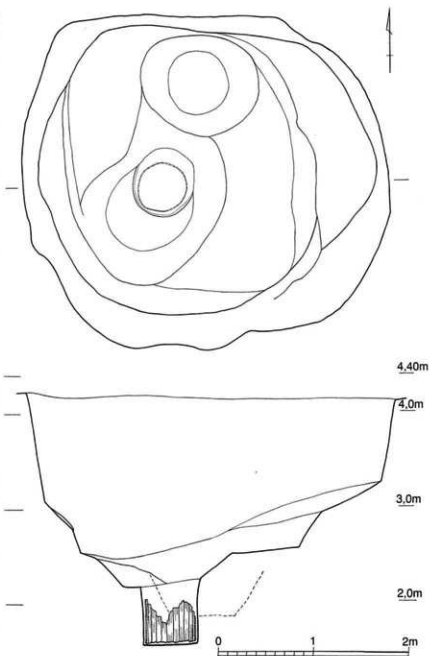
第427図 SE119実測図 (1/40)



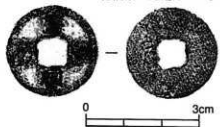
第428図 SE119出土遺物実測図 (1/3)

SE249 (第429図) 12C区北側に位置する。新田2つの井戸が切り合って存在していたが、井戸上面にSK218やSK205などの土坑が構築されるなど遺構の切り合いが激しく、また、ほとんど同じ位置に構築されているため、切り合い関係を明らかにできなかった。旧井戸は井筒部の掘り込みが確認されたものの、結桶は抜き取られていた。また、新井戸の構築時に旧井戸は破壊されたも

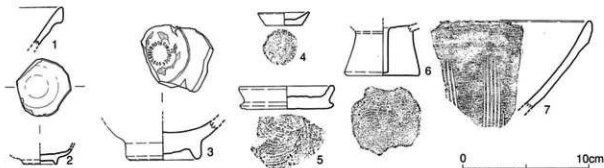
のと考えられ、その詳細は不明である。井戸全体の掘方は楕円形を呈し、東西約3.8m、南北約3.5m、深さ約2.7mを測る。新井戸の井筒は井戸掘方の中央からやや西寄りに位置する。旧井戸と新井戸の井筒の深さは実測図では50cm程の違いがあるが、それは底面が砂質土のため旧井戸の井筒を完全に掘り下げることができなかったためである。新井戸の水溜部には結桶が残存していた。結桶の残存状況は比較的良く、幅6cm強の板を25枚使用して作られたもので、箍も1本残る。出土遺物には在地系土師質土器皿があり、遺構の時期は15世紀後葉に比定される。



第429図 SE249実測図 (1/40)

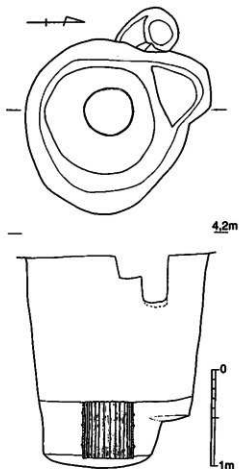


第430図 SE249出土銭実測図 (1/1)



第431図 SE249出土遺物実測図 (1/3)

SE249出土遺物 (第430～431図) 第430図は錆の付着が激しいが、中国北宋代の「皂宋通寶」である。書体は真書で、初铸年代は1038年である。第431図1は中国産の白磁碗の口縁部破片である。口縁部は玉縁状になる。2は中国産の白磁小碗の底部破片である。見込みは蛇の目軸割ぎとなり、高台部は露胎となる。3は中国龍泉窯系青磁碗の底部破片である。見込みに印可による花文を押し、高台内は蛇の目軸割ぎとなる。4は口径4.0cmの小型の在地系土師質土器皿である。色調は赤褐色系を呈し、底部は糸切り離しの後にナデが施される。内底部にはロクロ目が残る。5は茶褐色系の在地系土師質土器皿である。底部には糸切り痕が残る。6は土師質土器の燗台である。在地系土師質土器と共通する赤褐色系の色調を呈する。脚台部が短く、底部の糸切り痕はナデ消されている。皿部から底部にかけての穿孔は貫通しない。7は瓦質土器拵鉢である。口縁部と胴部の境に稜をもち、内面には櫛状工具による櫛目が6本確認できる。

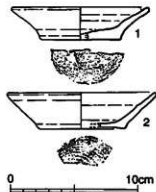


第432図 SE228実測図 (1/40)

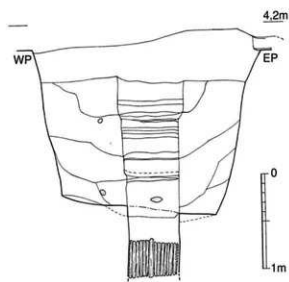
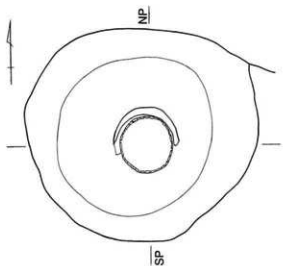
SE228 (第432図) 10B区の北西に位置する。非戸の掘方は不整形円形を呈し、東西1.9m、南北1.8m、深さ2.2mを測る。非筒は掘方の中央やや東よりに位置し、非筒の平面プランはほぼ円形を呈し、直径約50cmを測る。非戸の規模は当調査区で検出されたものと比較すると、やや小規模の部類に属する。断ち割り調査を行ったが、上層断面からは非筒の縦ラインを確認できず、桶の抜き取りをした後、一気に埋没している。水溜部には結桶が使用されている。残存状況は極めて悪いが、板付の幅は約6cmを測ることができる。また、葦跡も残っており、約3箇所認められた。木質の残りも悪く、遺構の実測図中には、結桶の設置状況を模式的に図示している。在地系土師質土器皿が出土しており、遺構の時期は15世紀後葉に比定される。

SE228出土遺物 (第433図) 第433図1～2は赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。

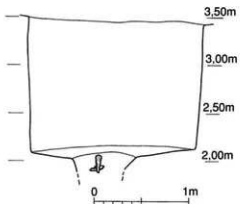
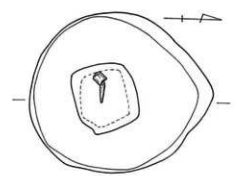
SE142 (第434図) 12-13A区に位置する。掘方の平面プランは楕円形を呈し、長径約2.5m、短径約2.3m、深さ約2.5m超を測る。非筒は掘方のほぼ中央に位置し、直径約50cmの円形プランを呈する。非筒には結桶を数段重ねて据えられていたと推定されるが、水溜部の一段のみが残存しており、上部の桶は抜き取られている可能性が高い。水溜部は調査時も水が湧き、最下部までは検出できなかった。桶の残存状況から検出したレベルより30cm程度下と推定される。残存する結桶の状態は比較的良



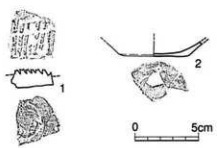
第433図 SE228出土遺物実測図 (1/3)



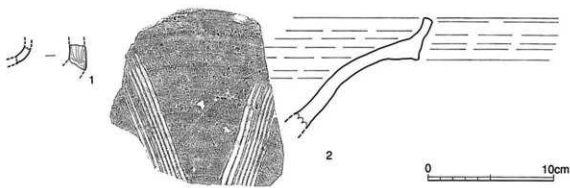
第434図 SE142実測図 (1/40)



第436図 SE259実測図 (1/40)



第437図 SE259出土遺物実測図 (1/3)



第435図 SE142出土遺物実測図 (1/3)

く、桶の状況をうかがうことができる。結桶は、幅約2～5cm程度のを39枚使用して作られている。下部は腐食のため欠損しているが、約45cmが残存する。出土遺物には中世5期から6期に比定される備前系陶器磁鉢があり、遺構の時期は15世紀後葉に比定される。

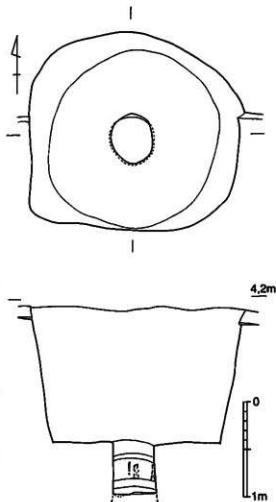
SE142出土遺物(第435図) 第435図1は白磁の破片である。瓶などの把手か。2は備前系陶器磁鉢の口縁部破片である。内面の桶目の単位は7本である。中世5期～6期に比定される。

SE259(第436図) 6C区に北に位置する。平成13年度前半期の調査で南側約6分の1が検出され、大型土坑と認識していたが、平成13年度後半期の調査で掘方全体が検出され、井戸遺構と判明した。このため、断ち割りなどの十分な土層観察はできていない。掘方の平面プランは楕円形を呈し、長径約1.9m、短径約1.7m、深さ1.7m以上を測る。井筒は掘方のほぼ中央に位置し、その平面プランは60cm×70cmの長方形を呈する。井戸の規模は当調査区で検出されたものと比較すると、やや小規模の部類に属する。井筒の形状から方形の井戸筒が使用されていたものと推定されるが、すべて抜き取られており、詳細は不明である。水溜部には節を抜いた竹の一部が真上に向けて立った状態で検出され、井戸の廃棄時に祭祀的行為が行われた可能性が考えられる。このような事例は5次調査A区においてもみられる(SE506)。出土遺物に在地系土師質土器皿の破片や第437図2のような白色系の色調を呈する薄手の土器片などがあり、遺構の時期は15世紀後葉に比定される。

SE259出土遺物(第437図) 第437図1は瀬戸美濃系陶器銅皿の破片である。軸は掛からず、底部には糸切り痕を有する。2は白色系の色調を呈し、器壁が非常に薄い土師質土器皿の底部破片である。

SE132(第438図) 12A-12B区に位置する。井戸の上層は近世の耕作溝で一部削平を受けるが、掘方の平面プランは楕円形を呈し、長径2.2m、短径2.1m、深さ2.0m以上を測る。井筒は掘方のほぼ中央に位置し、長径55cm、短径40cmの平面楕円形プランを呈する。断ち割り調査では井筒の縦ラインが確認できず、全体的に掘り下げを行った。湧水部には結桶が一段分確認できる。残存状況は極めて悪く、上下2本の籠跡の間に井筒に使用された結桶の板材と思われる木片が残るのみである。調査当時も湧水部には水が湧き、水溜部は完掘できなかった。良好な出土遺物はなく、遺構の時期については不明であるが、周辺の遺構の状況から15世紀後葉～16世紀代と推定する。

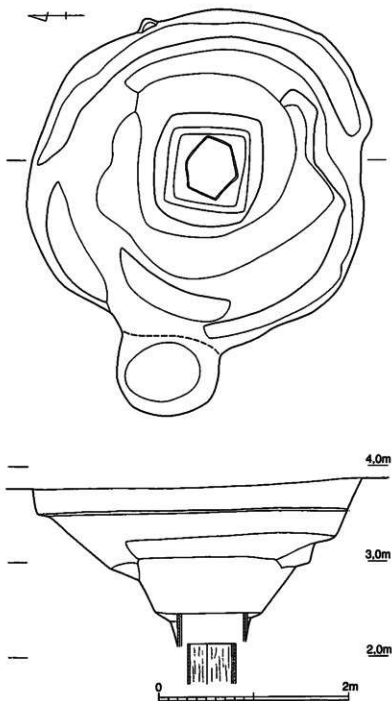
SE238(第439図) 11C区にほぼ中央に位置する。掘方の南東に時期不明のSK223が構築され、西側には当井戸を切るように、14世紀前葉に比定されるSK236が構築されている。掘方の平



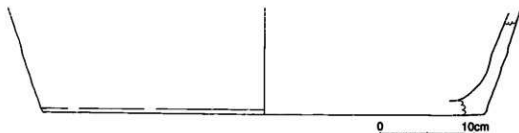
第438図 SE132調査図(1/40)

面プランは不整形円形を呈し、長径3.6m、短径3.5m、深さ2.1m以上を測る。掘方のほぼ中央に井戸側を掘る。井戸側および井筒の残存状況は悪いが、井戸側の隅柱等の痕跡は明確に残っている。井戸側は本組方形で、井筒は厚さ1.5~2.5cm、幅20~35cmの縦板を六角形に組んだものを使用していることが観察できる。遺構の実測図中には井戸側と井筒の設置状況を模式的に図示している。調査途中の雨によって井筒部が崩落し、最下部までの掘り下げはできなかった。井戸内からは良好な出土遺物はなく、遺構の時期は特定し難いが、SK236との切り合い関係から14世紀前葉以前に比定される。

SE238出土遺物(第440図) 第440図は備前系陶器甕の底部破片である。色調は灰白色系を呈する。



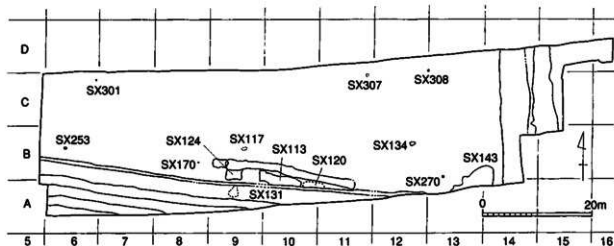
第439図 SE238実測図 (1/40)



第440図 SE238出土遺物実測図 (1/4)

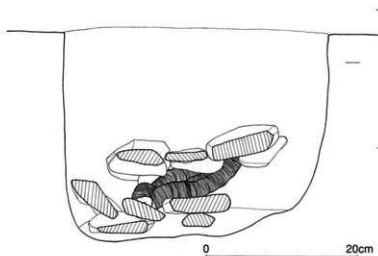
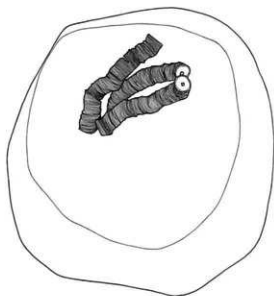
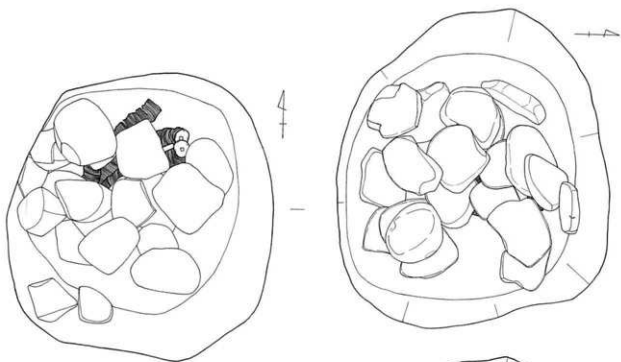
4. その他の遺構

概要 中世大友府内町跡第5次調査B区では、溝状遺構・土坑・井桁などのほかに、遺構の性格が特殊なものや性格不明なものが存在する。すなわち、埋納遺構やピット状遺構・掘り込み遺構などがそれである。埋納遺構は3基検出され、うち2基は銅銭を埋納したもの(SX253・SX270)で、もう1基は在地系土師質土器皿を「十」字状に配置した遺構(SX134)である。いずれも地鎮に関わる行為が行われた際に構築されたものであると考える。ピット状遺構は土師質土器の加工片を大量に検出したもの(SP170)や土師質土器を埋置したもの(SP301・SP308)などがある。また、焼土や灰が大量に混ざる覆土中から、被熱した土器片などが出土し火災処理遺構と考えられる遺構(SX113・SX120・SX124)や性格は不明だが、大票の掘り込み遺構(SX143)・廃棄された遺物が集中する部分などがある。以下、これらの遺構と出土遺物の詳細を報告する。

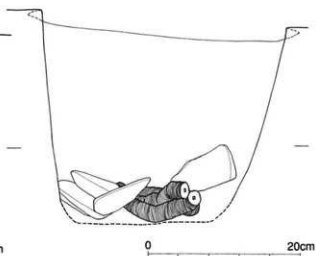


第441図 その他の遺構 (1/700)

銅銭埋納遺構 SX253・SX270 (第442～443図) SX253とSX270はともに銅銭埋納遺構である。SX270(第442図)は平成12年度前半期の調査で検出され、13B区の南や西よりに位置する。平面プランは楕円形を呈し、その規模は長径約36cm、短径約35cm、深さ約28cmを測る。遺構の底には3本の銅銭が置かれ、その上に5×10cm大の扁平な河原礫が覆うように敷き詰められている。銅銭は固く錆着しており、銭種などの詳細は不明だが、一辨は96～98程度である。SX253(第443図)は平成13年度前半期の調査で検出され、6B区やや北寄りに位置する。平面プランは楕円形を呈し、その規模は長径約44cm、短径約35cm、深さ約28cmを測る。SX270同様、遺構の底には3本の銅銭が置かれ、その上に5×10cm大の扁平な河原礫が覆うように敷き詰められている。銅銭は固く錆着していることと、保存及び展示のために遺構ごと切り取りを行ったため、銭種などの詳細は不明である。一辨は、やはり96～98枚程度である。SX253とSX270は同じようなプランに同じように3本の銅銭を埋納し、扁平な河原礫でその上部を覆うという行為を行っており、何らかの因果関係が存在するものと考えられるが、現状では可能性の域を出ない。両遺構の間は約70mあり、東西に配置されていることから推定すると、当調査区の北側もしくは南側にも同様の埋納遺構が存在する可能性も考えられる。しかし、南側はSD103やSD151で区画が遮断され、北側は「大友氏館」が存在する。従来いわれている「大友氏館」が2町四方に拡張される以前に何らかの区画があり、その区画の東西南北四方の地鎮などに伴う祭祀的行為の可能性も考えられる。



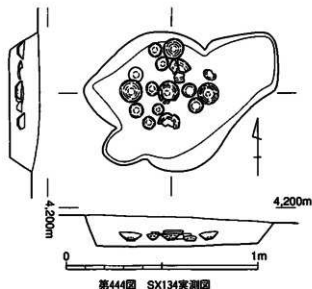
第442図 SX270実測図 (1/6)



第443図 SX253実測図 (1/6)

SX134 (第444図) 12B区の北東に位置する。平成12年度前半期の調査で検出された。調査区北側の壁付近を掘り下げている途中、土師質土器皿が検出され、土器の集中部があることを確認したため、北側を拡張して、全体像の確認を行った。南側は後世の削平によりプランが明確でなく、そのため検出時には明確なプランは確認できていない。実測図中には検出の際に確認されたプランを示している。遺構内には大小の在地系土師質土器皿が整然と配されている。土器の配置状況を観察すると、黄褐色系の色調を呈する土器の周りに、赤褐色系の色調を呈する土器が意図的に配置されていることが判る。基本的に、口径11cm程の黄褐色系の色調を呈する土師質土器を東西南北に「十字」状に配し、その周りに口径7cm程の赤褐色系の色調を呈する土師質土器を3つ置いてある。ただし、北側の周りに配された土師質土器皿の内一つは口径11cm程の赤褐色系の色調を呈するものが使用されている。また、南側のもは周りの土器が2つしかないが、これは削平により、失われたものと推定される。中央のものは単体で置かれたものと思われる。さらに、十字に置かれた大きめの土器の下には銅銭が一つずつ置かれていた。この銅銭は腐食が激しく取り上げは困難であった。当遺構で検出された在地系土師質土器の色調は、先にも触れたように黄褐色を呈するものと赤褐色を呈するものとに分かれ、そこに遺構を構築した際の意図的なものが想像できる。つまり、中心となる口径11cm程の土師質土器には黄褐色系のものを使用し、その周りに赤褐色系の土師質土器を配し、区別している。北側の黄褐色の土師質土器の周りに配されたものの内、一つが口径こそ大きいが赤褐色を呈するものを使用していることから推定される。このように整然と配置された土師質土器の状況から、他の遺構とは明らかに異なる性格のもので、地鎮等の祭祀的行為が行われた際に配列され、埋置されたものと思われる。こうした配置で、埋置された遺構は県内では白杵市の荒田遺跡に類例がある。報告者は土師質土器の配置について、曼荼羅を意識した配置の可能性にふれ、密教信仰との関わりからも追求されるべきと述べている⁽⁴⁾。当遺構の性格も同じように曼荼羅を意識して配置された可能性もあるが、その詳細は今後の研究を待ちたい。遺構の時期は出土遺物から15世紀後半に比定される。

「十字」状の
配列

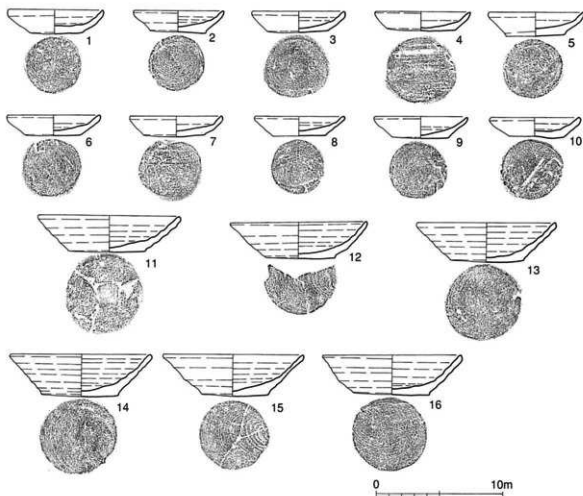


第444図 SX134実測図

SX134出土遺物 (第445図)

第445図は在地系土師質土器皿である。1～10は口径7cm程の赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。内面にはロクロ目が残し、底部には糸切り痕を残す。4の底部には板状圧痕が残る。3・8の口径部には煤が付着する。11も赤褐色系の色調を呈するが、口径は11cm程のもので内外面にロクロ目を顕著に残す。12～16は黄褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿である。内外面にロクロ目を顕著に残し、底部に糸切り痕を有する。1～11は12～16の周りに置かれていたものである。

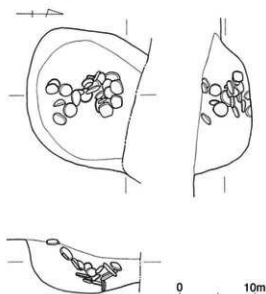
(4) 白杵市教育委員会「荒田遺跡」東九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2001年)



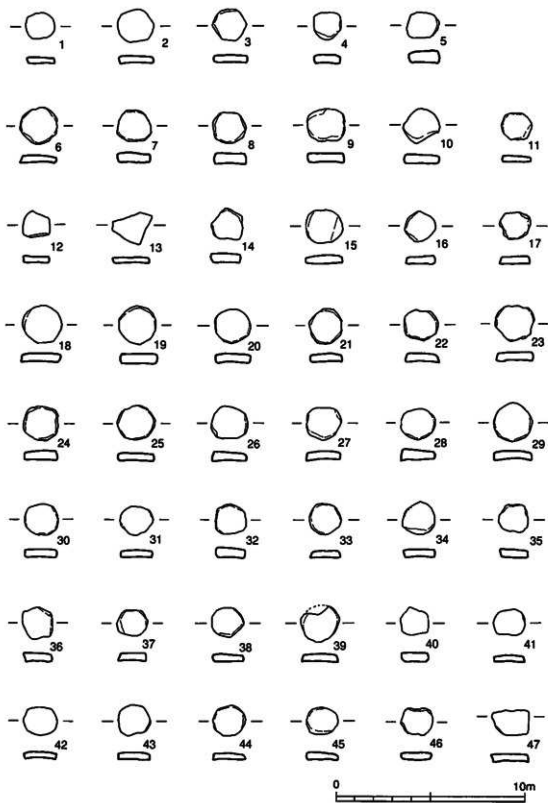
第445図 SX134出土遺物実測図 (1/3)

SX170 (第446図) 8B区に位置するピット状の遺構である。北側は削平されていたが、楕円形プランを呈するものと推定され、規模は東西約18cm、南北約15cm、深さ3～7cmを測る。遺構内には在地系土師質土器皿を円盤状に加工した製品が廃棄された状態で47個体出土した。遺構の時期の詳細は不明であるが、16世紀前葉以前の構築と推定される。

SX170出土遺物 (第447図) 第447図1～47は土器片加工品で、赤褐色系の色調を呈することから、在地系土師質土器皿を加工した製品と推定される。周縁部を欠損しているものもあるが、いずれも直径2.0cm前後、厚さ0.5cm前後の円盤状に加工されており、おはじきなどの遊具として使用されたものと考えられる。加工品の中に、浅黄色系を呈する京都系土師器皿を素材としたものが認められないことから、16世紀前葉以前の所産と推定される。



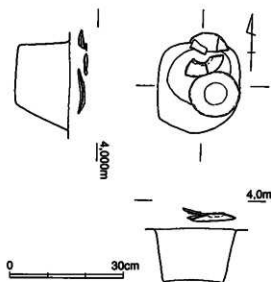
第446図 SX170実測図 (1/5)



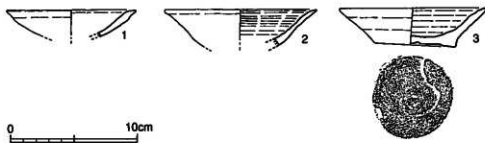
第447図 SX170出土遺物実測図 (1/2)

SX301 (第448図) 6C区の西北に位置するピット状の遺構である。検出時にプランが明瞭でなかったため少し掘り下げを行いプランの確認を行った。そのため、正確な遺構の規模ははっきりしないが、検出規模は、長径24cm、短径21cm、深さ15cmを測る。遺構上面から、おそらく合子状に重ねられていたと思われる在地系土師質土器が2個体分出土しており、何らかの祭祀的要素を持つものと考えられる。遺構の時期は在地系土師質土器に京都系土師器皿が共存することから15世紀初頭～16世紀初頭に比定される。

SX301出土遺物 (第449図) 第449図1は1期に比定される京都系土師器皿である。2～3は内外面にロクロ目を有する在地系土師質土器皿である。2の色調は赤褐色系であるのに対し、3は浅黄色系の色調を呈し、京都系土師器皿を意識して製作されたものであろう。



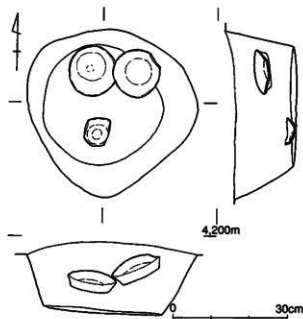
第448図 SX301実測図 (1/10)



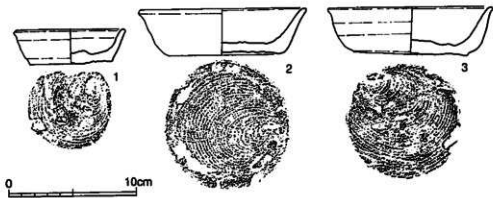
第449図 SX301出土遺物実測図 (1/3)

SX308 (第450図) 12D区に位置するピット状の遺構である。平面プランは楕円形を呈し、その規模は長径45cm、短径44cm、深さ15～20cmを測る。遺構内には断面箱形を呈する在地系土師質土器皿が3枚埋置された状態で出土した。遺構の時期は出土遺物から14世紀代に比定される。

SX308出土遺物 (第451図) 第451図は底部に糸切り痕を有し、断面形態が箱形を呈する在地系土師質土器皿である。1は赤褐色系の色調を呈し、口縁部内外面に煤が付着する。2～3の色調は淡桜白色を呈する。

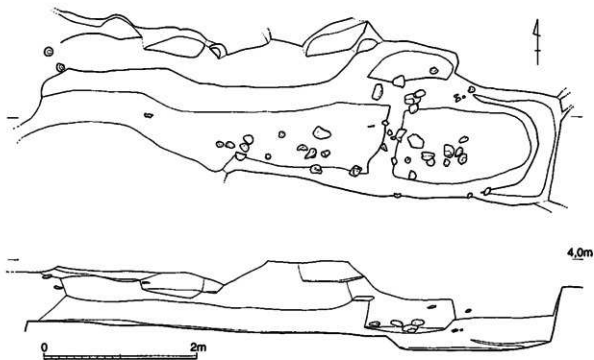


第450図 SX308実測図 (1/10)



第451図 SX308出土遺物実測図 (1/3)

SX113(第452図) 10A-10B区に位置する。北にはSD123が存在し、南はSD105、SE108によって切られる。明確な規模は不明だが、東西約7m、南北約2mの遺構である。掘り下げの段階で明確なプランが確認できず、当初は包含層として掘り下げていた。遺物の出土状況や堆積土の中に焼土や焼け落ちたと推測される礫土などが含まれており、こうした状況から火災処理遺構として判断した。北から南に傾斜した地形に陶磁器や土師質土器などを大量に廃棄した状態で検出された。出土遺物の中には1期に比定される京都系土師器皿や、赤褐色系の色調を呈し内面にロクロ目が残る在地系土師質土器皿がみられ、共存関係を持つ。また、2期の様相を呈する京都系土師器皿が出土するSD105に切られることから、遺構の時期は16世紀前葉～中葉に比定される。同様な時期の焼土層や火災処理遺構が中世大友府内町跡第4次調査⁵⁾や第7次調査で確認されており、当該遺構も火災処理を行った遺構であると推定される。これらの火災処理は、1553(天文22)年の一田雛相らの乱、1556(弘治2)年の小原鑑元・佐伯惟教らの乱などとの関連性も考慮される遺構である。

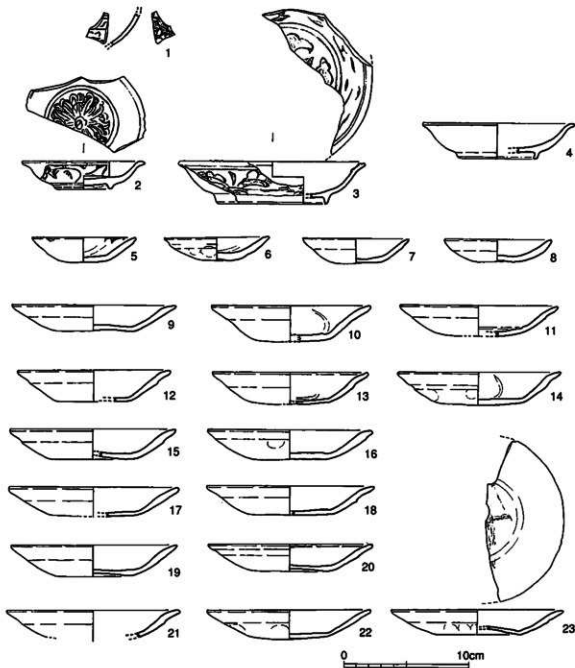


第452図 SX113実測図 (1/50)

(5) 大分市教育委員会「大友府内4～中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書～」(2002年)

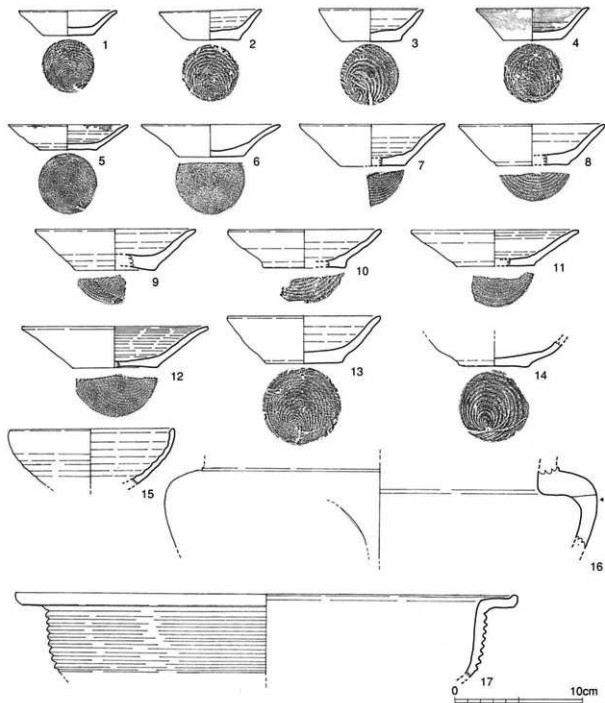
が、現段階では積極的な換機に乏しく、断定はできない。なお、出土した遺物の中には内底部に黒書を有する京都系土師器皿が認められ、注目される。

SX113出土遺物 (第453~455図) 第453図1は中国産磁器で、五彩の碗である。被熱により文様は変色している。2は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部は端反りとなる。文様は見込みに花文を描き、外面に唐草文を描く。小野分類のB1群に比定される。3は中国産磁器青花皿である。口縁部はやはり端反りとなる。文様は見込みに花文(十字花文か?)を描き、外面に唐草文を描く。小野分類のB1群に比定される。二次被熱を受けているため、文様の色は変色している。1~3の製作年代は16世紀前半代に比定される。4は中国産白磁皿で、口縁部は端反りとなるものである。高台登付きが露胎となるほかは施釉されている。5~23は胎土が浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。口径に注目すると口径が8.2~8.4cmと小さいもの(5~8)、口径が12~13cmの



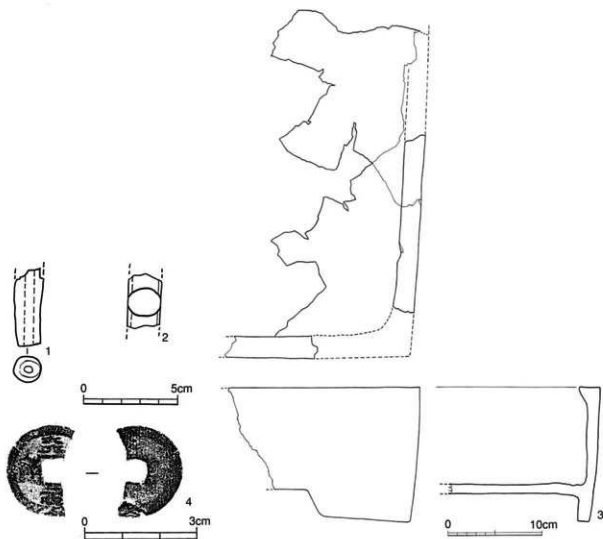
第453図 SX113出土遺物実測図① (1/3)

もの(9-15, 19-20)、口径が13cmを超えるもの(16-18, 21-23)の3法量に分類できる。また、5・7-11・13-15・18・21には煤が付着する。10・14の内面には「ノ」の字状のナデ上げ痕が残る。23は見込み部分に墨書が見られるが、欠損のために判読は不能である。当該遺構出土の京都系土師器皿は1期を主体とする資料であるが、10・16などの様に器壁が厚くやや新しい様相を呈するものも認められる。第454図1-14は赤褐色系の色調を呈し、底部に糸切り痕を有する在系土師質土器皿である。1-12は口縁部が外反気味に開くのに対し、13・14は内湾気味になるものである。1・3-5には煤が付着しており、特に4については煤の付着が激しい。また、6は内外面ともに風化が激しく器面等の観察が困難である。15は在系土師質土器の碗か。口縁部は内湾



第454図 SX113出土遺物実測図② (1/3)

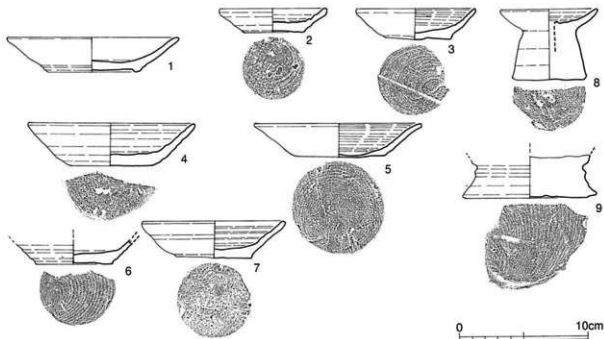
し、内外面にロクロ目が顕著に残る。色調は明橙色を呈する。16は瓦質土器風炉または火鉢の破片である。体部の一部に透かしが残存する。色調はにぶい黄橙色を呈する。17は瓦質土器の火鉢である。口縁部はし字状に屈曲し、口縁端部は上方にややつまみ上げ、丁寧に磨かれている。外口縁下に8条の波板状の沈線を巡らす。復元口径は39.4cmと大型の口径を有し、浅鉢形の器形を呈するものと推定される。色調は赤褐色を呈する。第455図1は灰黄褐色系の色調を呈する小型の管状土錘の破片である。孔径は3～5mmを測る。2は瓦質土器の脚で、色調は淡黄色を呈する。3は瓦質土器火鉢である。器高は14.1cmを測る。口縁部は直立し、内側に肥厚する。平面形態が方形もしくは長方形を呈する箱火鉢と推定され、底部に断面台形状の脚が付く。外面は丁寧なナデ仕上げが施され、外底部はケズリによる調整が施されている。4は銅銭である。欠損しているが、「天」「元」「寶」の文字が判読できることから、中国北宋代「天聖元寶」と思われる。書体は篆書で、初鑄年代は1023年である。



第455図 SX113出土遺物実測図③ (1～2は1/2、3は1/4、4は1/1)

SX120 (第441図参照) 10~11A区に位置し、西側には隣接してSX113が存在する。北から南に傾斜する地形に、土器片などを一括廃棄された状況が観察された。北をSD123、南をSD105に切られる。明確なプランは検出できず、調査当初は包含層として掘り下げた。掘り下げ途中で遺物の集中を確認したため、詳細な記録をしておらず、遺構図は図示していない。堆積土中には土師質土器などに混ざって、焼土や被熱した壁土の塊などが含まれ、火災処理遺構と推定されるが、詳細は不明である。16世紀前葉~中葉に比定されるSD123及び16世紀中葉~後葉に比定されるSD105との切り合い関係や出土遺物から、遺構の時期は15世紀後葉に比定される。

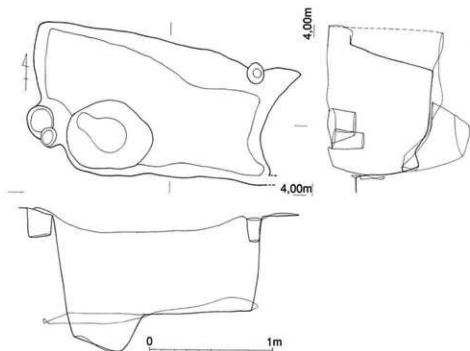
SX120出土遺物 (第456図) 1は中国産白磁皿である。口縁部から胴部は施軸されるが、内底部および外底部は露胎となる。2~7は在地系土師質土器皿で赤褐色系の色調を呈し、内面にロクロ目を顕著に残す。口縁部の形状に注目すると、内湾気味に立ち上がるもの(2~4)と外反気味に立ち上がるもの(5~7)に分類される。5は底部の糸切り痕から左回転による成形であることが観察できる。8~9は土師質土器の場合で胎土は赤褐色系の色調を呈する。8は完形で、底部に糸切り痕を有し、皿部から底部にかけての穿孔は貫通しない。皿部の口縁部には煤が付着する。9は底部に糸切り痕を有し、脚台部が短い。現状で穿孔は確認できない。



第456図 SX120出土遺物実測図 (1/3)

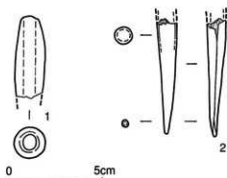
SX124 (第457図) 9B区の南ほぼ中央に位置する。規模は東西1.8~2.1m、南北約1.2m、深さ約84cmを測る不定形の土坑である。出土遺物は小破片が多く、時期の特定は難しいが、1期もしくは2期に比定される京都系土師器皿の口縁部片や内面にロクロ目を有する在地系土師質土器皿が相伴することから、16世紀前葉~中葉に比定する。

SX124出土遺物 (第458~459図) 第458図1は土鍾で下部は欠損している。2は青銅製品である。青銅製の板を円錐形に折り曲げたもので、中には木製の棒状のものが詰められている。上部が欠損しているため全体の器形、用途は不明である。第459図1は中国産白磁の口縁部片である。内口縁下に沈線を巡らす。外面には文様が認められるが、詳細は不明である。2は皿の底部片であ

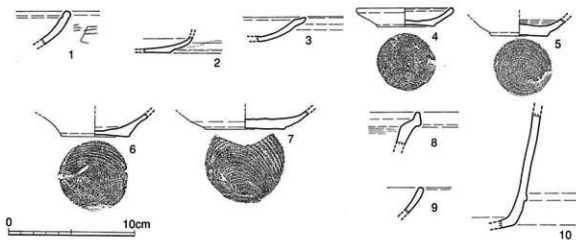


第457図 SX124実測図 (1/30)

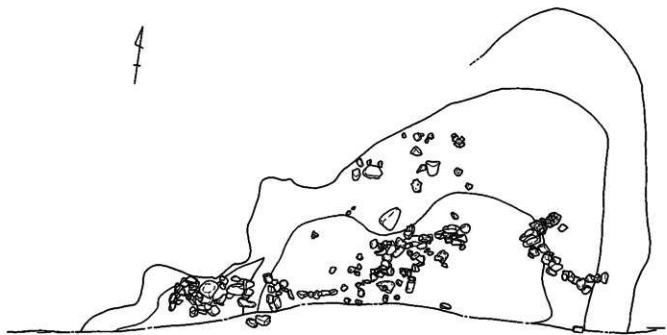
る。内面は灰釉が掛かり、外底部と体下部は露胎となる。3は1期もしくは2期に比定される京都系土師器皿の口縁部片である。4～7は赤褐色系の色調を呈する在来系土師質土器皿である。4～5は内面にロクロ目を有し、6～7はロクロ目が認められない。8～10は瓦質土器である。8は鍋の口縁部片である。口縁部は外反し、口縁端部は上方につまみ上げる。淡灰色を呈する。9は暗灰色を呈する。皿の口縁部片か。10は火鉢である。体下部に一条の突起を巡らす。内外面ともに黒褐色を呈する。



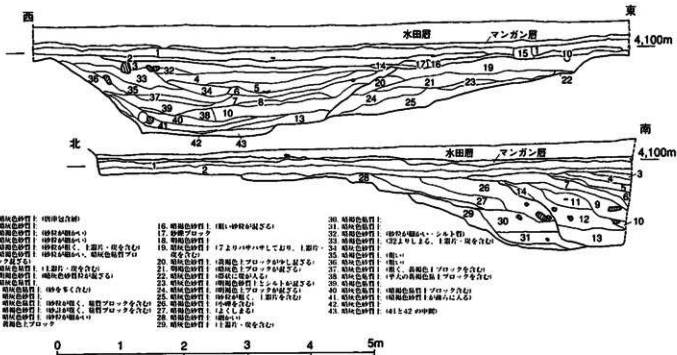
第458図 SX124出土遺物実測図① (1/2)



第459図 SX124出土遺物実測図② (1/3)



第460図 SX143実測図 (1/60)



- 1. 凝結色砂性土 (砂中石を含む)
- 2. 凝結色砂性土
- 3. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く)
- 4. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、片断片・破片を含む)
- 5. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、片断片・破片を含む)
- 6. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、片断片・破片を含む)
- 7. 凝結色砂性土 (片断片、破片を含む)
- 8. 凝結色砂性土 (砂中石を含む)
- 9. 凝結色砂性土 (砂中石を含む)
- 10. 凝結色砂性土 (砂中石を含む)
- 11. 凝結色砂性土
- 12. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、破片・ブロックを含む)
- 13. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、破片・ブロックを含む)
- 14. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く)
- 15. 凝結色土ブロック

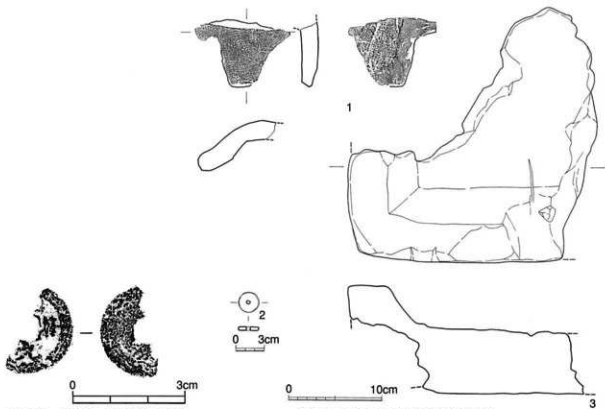
- 16. 凝結色砂性土 (粗い・砂粒が粗くなる)
- 17. 砂層ブロック
- 18. 凝結色砂性土
- 19. 凝結色砂性土 (7より1層ハマしてあり、1層片を含む)
- 20. 凝結色砂性土 (凝結色土ブロックが少し見える)
- 21. 凝結色砂性土 (凝結色土ブロックが見える)
- 22. 凝結色砂性土 (凝結色土ブロックが見える)
- 23. 凝結色砂性土 (凝結色土ブロックが見える)
- 24. 凝結色砂性土 (凝結色土ブロックが見える)
- 25. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、片断片を含む)
- 26. 凝結色砂性土 (砂中石を含む)
- 27. 凝結色砂性土 (砂中石を含む)
- 28. 凝結色砂性土 (凝結色土)
- 29. 凝結色砂性土 (片断片、破片を含む)

- 30. 凝結色砂性土
- 31. 凝結色砂性土
- 32. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、片断片・破片を含む)
- 33. 凝結色砂性土 (砂粒が粗く、片断片・破片を含む)
- 34. 凝結色砂性土
- 35. 凝結色砂性土 (粗い)
- 36. 凝結色砂性土 (粗い)
- 37. 凝結色砂性土 (粗く、片断片・破片を含む)
- 38. 凝結色砂性土 (粗く、片断片・破片を含む)
- 39. 凝結色砂性土
- 40. 凝結色砂性土 (凝結色土ブロックが見える)
- 41. 凝結色砂性土 (凝結色土ブロックが見える)
- 42. 凝結色砂性土 (凝結色土)
- 43. 凝結色砂性土 (凝結色土)

第461図 SX143土層断面図 (1/60)

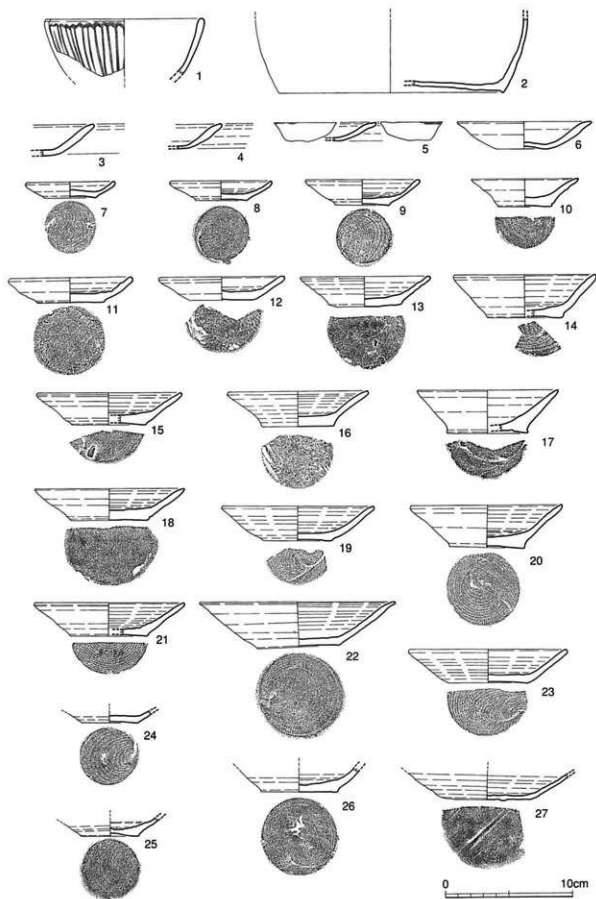
SX143 (第460図) 13A区~14Bに広がる掘り込み遺構である。南側は調査区外に続き、全体の規模は不明であるが、かなり大規模の掘り込みがなされていると推定される。土層観察から2回以上の掘り直しが行われていると推定される(第461図参照)。検出規模は東西約4.3m、南北最大2.5mを測り、深さは検出面から60cm以上となる。遺構からは大量の礫とともに1期に比定される京都系土師器皿の口縁部片や胴部にロクロ目を残す在地系土師質土器皿等が出土しており、遺構の時期は16世紀前葉~中葉に比定される。

SX143出土遺物 (第462~465図) 第462図は銅銭である。半分欠損しており、「符」「元」の文字が読み取れることから中国北宋代の「祥符元寶」(初铸年代1009年)と推定する。第463図1は丸瓦片である。内面に布目が残る。2は在地系土師質土器の加工品である。中央に穿孔を有する。用途は不明である。3は凝灰岩製の加工品である。欠損しているため形状の詳細は不明であるが、断面形態は凹状になると推定される。内外面は面取りされている。用途は不明である。第464図1は中国龍泉窯系青磁碗である。線描蓮弁文をもつもので、剣頭が蓮弁の単位を意識して施文されている。2は朝鮮王朝産陶器船徳利の底部片である。内外面に泥軸か掛かり、外底部は斑に軸が掛かる。3~6は1期に比定される京都系土師器皿で、浅黄色系の色調を呈する。5は口唇部に煤が付着する。6は底部がやや凸状に盛り上がる。7~26はロクロ成形による在地系土師質土器皿で、底部に糸切り痕を有し、ロクロ目を残すものである。胎土は赤褐色系の色調を呈する。12、18の底部には板状圧痕が認められる。27は胎土が白色系の色調を呈するものである。体部内外面にはロクロ目が残り、底部には板状圧痕が認められる。器壁は非常に薄い。第465図1は朝鮮王朝産灰青軸陶器碗の口縁部片である。見込みに鏡を形成する。2は瓦質土器擂鉢である。在地系か。3は備前系陶器壺の口縁部片である。口縁端部が欠損している。4~5は備前系陶器擂鉢である。いずれも中世6期に比定される。

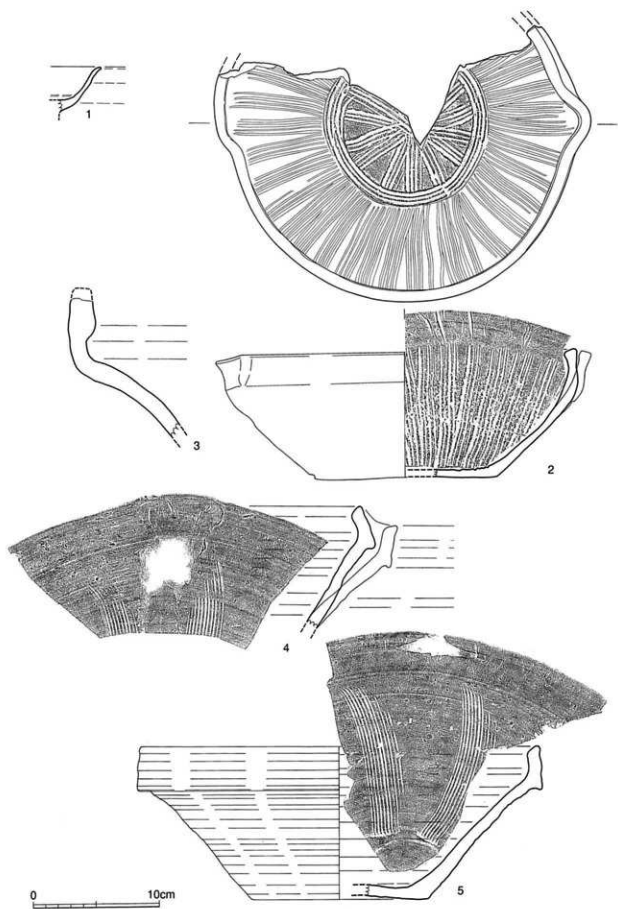


第462図 SX143出土土銭実測図 (1/1)

第463図 SX143出土遺物実測図① (1/4)



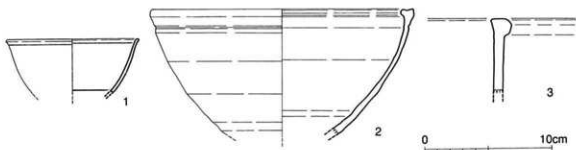
第464图 SX143出土遺物実測図2) (1/3)



第465図 SX143出土遺物実測図③ (1/3)

SX258 (第252図参照) 6C区の北東に位置し、北側は調査区外に延びる遺構である。南北に長い土坑状の掘り込みであるが、調査段階で明確なプランは検出できず、掘り下げた遺構である。そのため十分な記録はとれておらず、遺構図は図示していない。遺構の詳細な時期は不明であるが、出土遺物や周辺の遺構の状況から16世紀中葉以降と推定される。

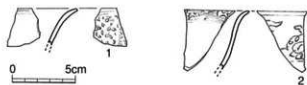
SX258出土遺物 (第466図) 第466図1は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部破片である。口縁部内外面に圈線を巡らし、胴部は無文である。いわゆる「段頭心」碗の系統にあるもので、小野分類のE群に比定され、16世紀中葉の所産である。2は中国南部産焼締陶器鉢である。口縁部が内側にやや張り出した玉縁状になる。鉢B類に比定され、底部は欠損しているが、上げ底状の形態を呈すると推定される。3は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。口縁外面が肥厚する。



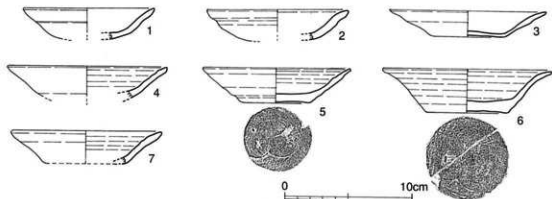
第466図 SX258出土遺物実測図 (1/3)

SX306 (第252図参照) 6C区の北東に位置し、SX258の底面に構築される。遺構のプランは不明確で、十分な記録をとれなかったため、遺構図は図示していない。出土遺物には中国景德鎮窯系青花の口縁部破片があり、遺構の時期は16世紀代に比定されるが、詳細は不明である。

SX306出土遺物 (第467図) 第467図1は中国景德鎮窯系青花である。外面に丸を3つ結合した文様を描く。外面文様から16世紀前葉に比定され、口縁部が外反することから碗ではなく小杯などの器形を呈するものと思われる。2は中国景德鎮窯系青花碗で口縁部が外反する。外面に毛彫り文様を施し、口縁内面には青花で四方禪文を描く。16世紀代の製品である。



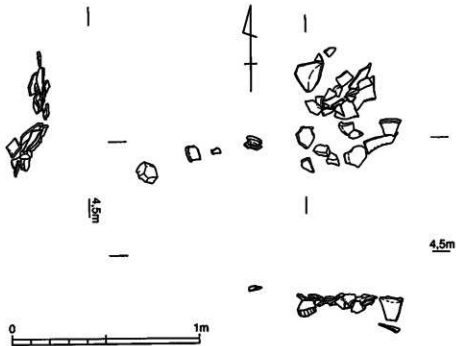
第467図 SX306出土遺物実測図 (1/3)



第468図 SX117出土遺物実測図 (1/3)

SX117 (第441図参照) 9B区のSE119の西側に位置する。浅いレンズ状の掘り込みで明確なプランは検出できなかった。そのため遺構図は図示していない。出土遺物は京都系土師器皿と在地系土師質土器皿が共存する。出土遺物から遺構の時期は15世紀後葉～16世紀初頭に比定される。

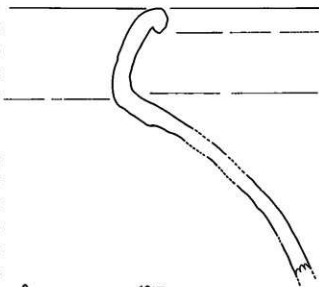
SX117出土遺物 (第468図) 1～3は浅黄色系の色調を呈する京都系土師器皿である。1～2は口縁部の小片で器壁がやや厚く2期の様相を呈する。混入品か。3は口径12.2cm、器高2.0cmで、器壁も1～2mmと非常に薄く、1期に比定される。4～7は胎土が赤褐色系の色調を呈し、内面にロクロ目を残す、在地系土師質土器皿である。5は内面のロクロ目が浅いものである。6は内外面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと推定される。



第469図 SX307発掘図 (1/20)

SX307 (第469図) 11C区に位置する。遺構検出の際に、検出面の上面に備前系陶器甕の破片が集中して廃棄された状況が確認された。廃棄された遺物は口縁部から胴部にかけての一部であり、甕1個体がすべてこの場所に廃棄されたものでない。

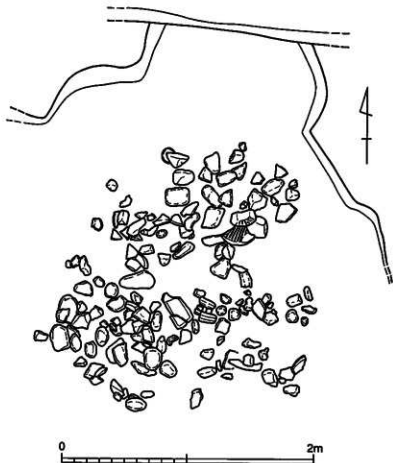
SX307出土遺物 (第470図) 第470図は備前系陶器甕である。灰白色系の色調を呈し、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は玉縁状となる。詳細な時期は不明であるが、口縁部の形態と色調から中世2期(13世紀末～14世紀初頭)に比定される可能性が高い。



第470図 SX307出土遺物実測図 (1/3)

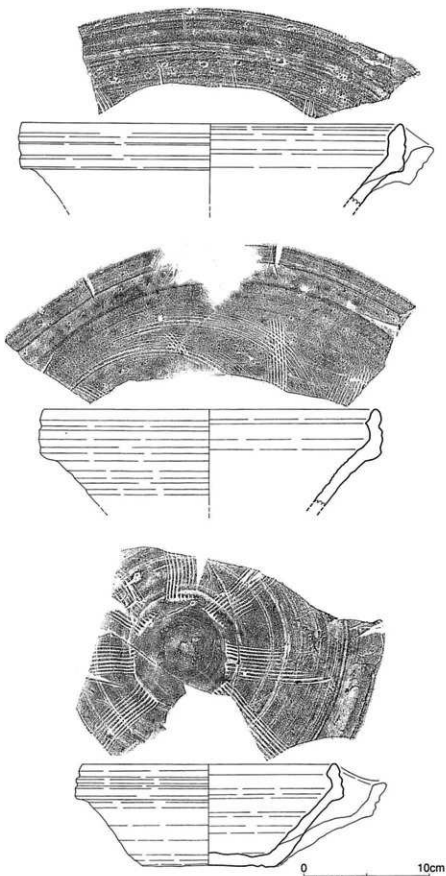
SX131 (第471図) 9A区に位置する。遺構検出の際に積土状遺構SX102の上面から検出された遺物集中区である。明確な掘り込み等は検出されなかったが、東西約2.3m、南北約2.2mの範囲で瓦や備前系陶器擂鉢などの遺物が9廃棄された状況がみられた。時期を明確に特定できる遺物は認められないが、廃棄された遺物の中には近世1期に比定される備前系陶器擂鉢が認められ、遺構の時期は16世紀末葉～17世紀初頭に比定される。また、層位的な所見から遺構が形成された時期には積土状遺構SX102やそれに付属する溝SD101・SD103の機能は停止しており、廃絶されていたと考えられる。

SX131出土遺物 (第472～474図) 第472図は備前系陶器擂鉢である。1は中世6期に比定される資料である。口縁帯は薄板作りで、口縁端部は上角を強くナデ、やや尖り気味となり、口端から下がった口縁内面に後縁をもつ。口縁対外面には凹線が巡る。色調は暗赤灰色を呈する。2は近世1期に比定される資料である。口縁帯は薄作りで、口端のナデが揃むように強く先細りとなり、口端からやや下がった口縁内に突起状の後縁をもつ。また、口端から大きく下がった口縁内にも後をもつ。内面の描目は放射状の描目に加えて、ナナメ方向の描目が認められる。描目の単位は7本である。内外面の色調は明赤灰色を呈する。3は中世6期に比定される資料である。口縁帯は薄作りで、内抱え気味になり、断面が「く」の字状となる。口縁対外面の凹線は1に比べ明瞭である。内面の描目は10本1単位で7単位認められる。内面はふい灰赤色を呈し、外面は二次被熱により煤が付着し茶褐色系の色調を呈する。第473図1は壺もしくは鉢の底部破片である。胎土は灰褐色から赤褐色系の色調を呈し、内外面に掲軸が掛かる。胴部下半から外底部は露胎となる。底部はケズリ出し高台となる。産地の詳細は不明だが中国産の可能性が高い。2は瓦質土器火鉢の底部破片である。暗灰色系の色調を呈し、内外面は丁寧なナデ仕上げが施される。外底部には指圧痕が残る。3～4は瓦質土器火鉢の口縁部破片である。3はやや外傾気味となり、口端部は外に肥厚する。内外面ともに丁寧なナデ仕上げが施される。4は口縁外面に断面台形状の突帯を貼り付け、内外面ともに丁寧なナデ仕上げが施される。5は瓦質土器火鉢に底部破片である。胴部下半に突帯を巡らせ、内外面には丁寧なナデ仕上げが施される。6～7は輪の羽口破片である。6は全体的に被熱しており、外面には煤が付



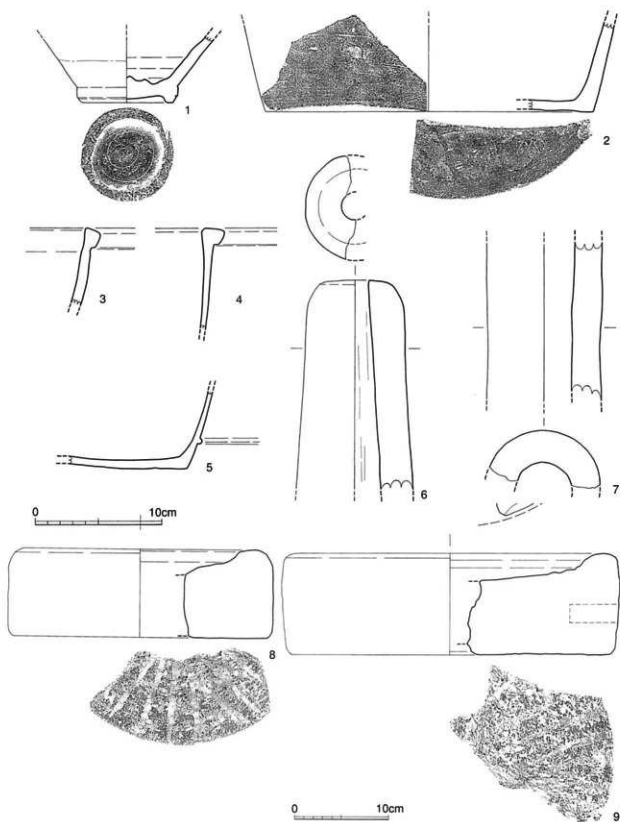
第471図 SX131実測図 (1/30)

着し暗灰色を呈する。復元孔径は2.2~4.2cmを測る。8~9は石臼である。いずれも上白で9の側面にはフルギアナが認められる。第474図は瓦である。1は平瓦破片である。凹面にコビキの跡が認められる。2は丸瓦破片である。3は雁振瓦破片である。凹面にコビキの跡が認められる。火熱を受けている。4は平瓦である。凹面に離れ砂の痕跡が認められる。5は丸瓦である。凹面にU字状に深く垂れる吊り紐痕が認められ、吊り紐の頂点部分から玉縁部に向けて、上に伸びる紐跡が残る。縄目はすべて見えている。また、幅1cm弱の棒状のタタキ痕が残る。凹面玉縁両側縁の面取りが胴部まで至り、凹面狭端部の面取りと一体となってい

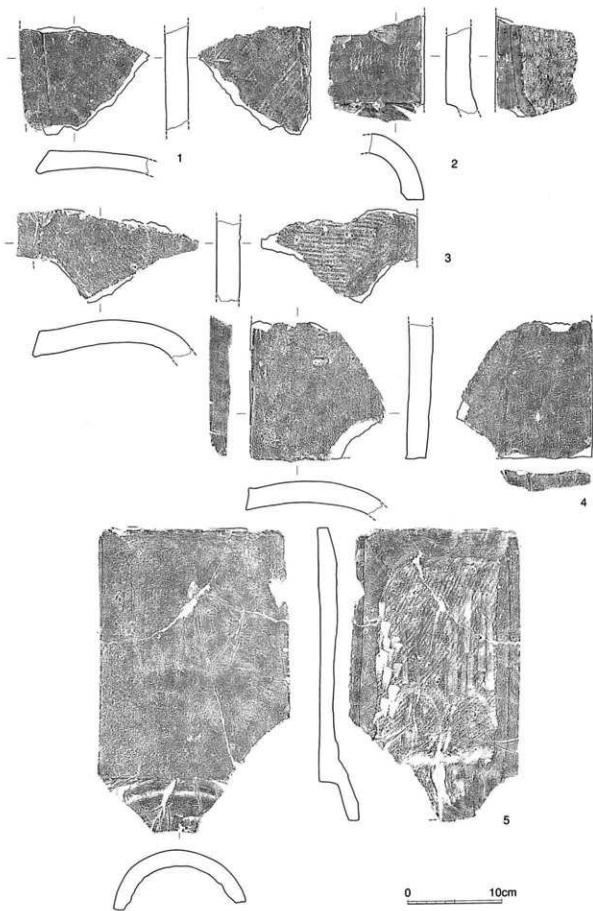


第472図 SX131出土遺物実測図① (1/3)

る。さらに凹面広端縁の面取りは幅3cm程である。色調は灰色系を呈し、硬質に焼き上がっている。16世紀代に比定される資料である。



第473図 SX131出土遺物実測図2(1~7は1/3、8~9は1/4)

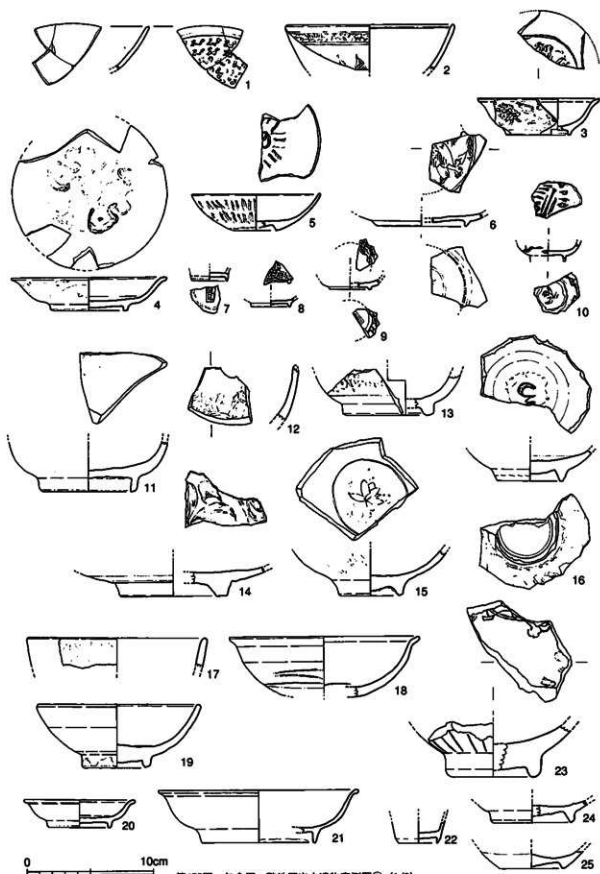


第474図 SX131出土遺物実測図③ (1/4)

5. 包含層・整地層出土遺物

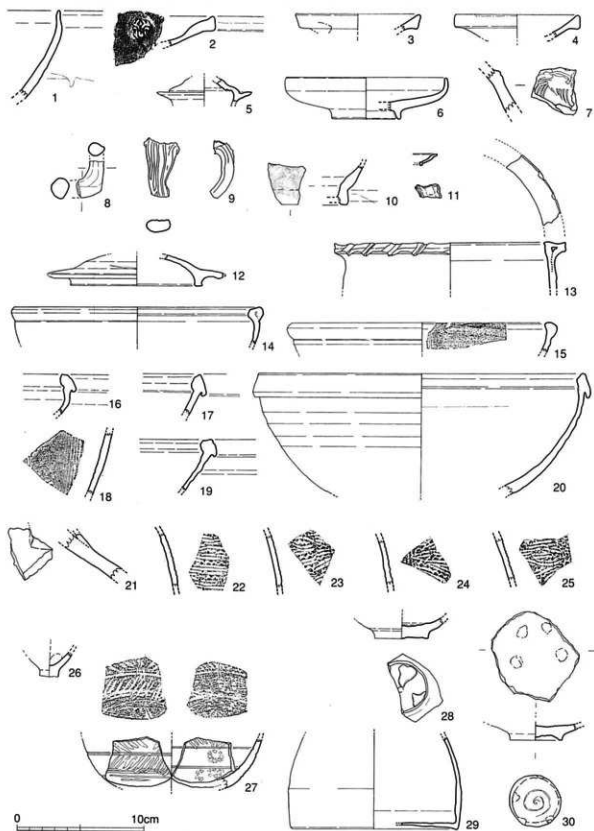
概要 本項目では遺構以外の包含層・整地層から出土した遺物の内、残存状況の良いものや注目すべきものを選別して報告する。また、柱穴やピットから出土した遺物の中で注目すべきものについても便宜上、本項目で記述を行いたい。報告すべき資料は多数におよぶが、紙幅の関係から、報告者が特に重要と判断した少数の資料に留まる。

陶磁器類 (第475～478回) 第475回1は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部破片である。外口縁下に圈線を巡らし、胴部に丸を3つ結合した文様を描く。口縁内面には圈線が巡る。いわゆる蓮子碗で、小野分類のC群に比定される。2は中国景德鎮窯系青花碗の口縁部破片である。口縁部外に波状文帯を巡らし、胴部に芭蕉葉文を描く。口縁部内には界線を巡らす。小野分類のC群に比定される。3は中国景德鎮窯系青花皿で口縁部が端反りとなり、外面に牡丹唐草、見込みに十字花文を描く。小野分類のB1群に比定される。4は中国景德鎮窯系青花皿である。口縁部は端反りとなり、見込みに花文、胴部に唐草文を描く。高台付は露胎となる。小野分類のB1群に比定される。5は中国景德鎮窯系青花皿である。底部が蒜筒底となり、内外面に梵字文を描く。小野分類のC群に比定される。6は中国景德鎮窯系青花皿の底部破片である。高台内には字款が描かれていると思われるが、欠損のため詳細は不明である。見込みに人物を描き、小野分類のE群に比定される。7は中国景德鎮窯系白磁小杯の底部破片である。高台内には四角の枠取りをし、中に「□□年造」の文字が認められる。8は中国産の三彩磁器小皿の底部破片である。明青色の翡翠釉が掛かるが、被熱により赤紫色に変色している。外底部は露胎となる。9は明青色の翡翠釉が掛かる中国産三彩磁器小皿の底部破片である。外底部は露胎となる。10は中国景德鎮窯系青花小杯である。見込みの文様は不明だが、高台内に「福」字を描く。11は中国景德鎮窯系青花碗の底部破片である。見込みに梅樹文を描き、高台付は露胎となる。小野分類のB群に比定される。12は中国産青磁小皿の胴部破片である。内面に人物文と思われる印花による文様が認められる。13は中国産の青磁碗底部破片である。外底部は露胎となる。14は中国漳州窯系青花皿の底部破片である。内面に貫入が認められ、外底部は露胎となる。見込みの文様は花文か。15は中国漳州窯系青花碗である。見込みに花文を描く。高台内面に物置と思われる付着物が認められる。16は中国漳州窯系青花碗の底部破片である。見込みは蛇の目刺抜き、外底部は露胎となる。見込みと胴部に文様を描くが、詳細は不明である。17は中国産青磁碗の口縁部破片である。外面には細線と剣頭とが連弁としての単位を意識した蓮弁文を施す。18は中国産の青磁碗である。内外面に淡灰オリープ色の釉が掛かり、外底部付近は露胎となる。口縁部は端反りとなる。19は中国産の青磁碗底部破片である。外底部は露胎となる。20は中国産の白磁小皿で口縁部は端反りとなる。内外面は白釉が掛かるが、高台付は露胎となる。内外面にわずかに煤の付着が認められる。21は中国産の白磁皿で口縁部は端反りとなる。高台付は露胎となる。22は中国産の白磁小杯底部破片である。高台部は露胎となる。23は中国産の青磁碗底部破片である。外面には蓮弁が認められ、見込みの文様は不明である。高台内周辺は露胎となる。24は中国産の白磁底部破片である。内底部と外底部は露胎となる。25は中国産の白磁皿底部破片である。帽部下半から外底部は露胎となる。第476回1は中国産の天目茶碗の口縁部破片である。外面には釉を二度掛けしている。2～4は中国産褐釉陶器壺の蓋小破片である。2は内面と口縁外の2分の1に褐釉が掛かり、外面は露胎となる。口縁内面に浮き彫りがあるが文様の詳細は不明である。3は内面のみに褐釉が掛かり、外面は露胎となる。4は内面と口縁外の一部に釉が掛かり、体部の一部にも釉が流出している。5は中国産の黒釉陶器壺の蓋である。外面には黒釉が掛かり、内面は露胎となる。蓋の口径は7.4cmを測る。6は黒釉陶器皿の破片である。内外面に黒釉が掛かり、高台付は露胎となる。高台内面には砂が付着する。中国産と思われるが、産地の詳細は不



第475図 包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3)

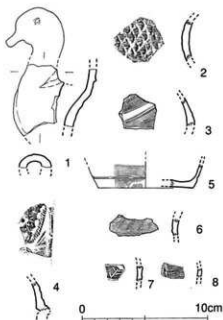
明である。7は陶器壺の破片である。中国華南、広東などを産地とする竜文壺と思われる。8は中国産の磁器で、瓶などの把手破片である。深い緑色を呈する。9も把手破片である。全面に黒軸が掛かる。10は中国産の陶器である。器種の詳細は不明だが、壺の底部か。11は中国産の青釉小皿破



第476図 包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3)

片である。体部下半から外底部は露胎となる。12は中国産焼締陶器の蓋である。内外面に褐釉が掛かる。外面中位に重ね焼きの痕跡が認められる。13は陶器甕の口縁部片である。口縁が鈎状に開き、口縁端部に斜め状の沈線を連続的に施す。内外面に褐釉が掛かる。産地は不明であるが、中国南部から東南アジア産の可能性が高い。14は中国南部産焼締陶器鉢である。口縁部が内側にやや張り出し、玉縁状になる。鉢B類に比定される。15は中国南部産焼締陶器播鉢の口縁部片である。口縁が内側にやや張り出した玉縁状になるもので、鉢B類に比定される。16は中国南部産焼締陶器鉢の口縁部破片である。口縁部は断面方形の帯縁状になる。鉢C類に比定される。17は中国南部産焼締陶器鉢の口縁部である。口縁部は断面台形状の帯縁状になる。鉢C類に比定される。

18は中国南部産焼締陶器播鉢の胴部破片である。描目は9条が確認できる。19は中国南部産焼締陶器鉢の口縁部片である。口縁部が内側にやや張り出した玉縁状になるもので鉢B類に比定される。20は中国南部産焼締陶器鉢である。口縁部は断面台形状の帯縁状になり、鉢C類に比定される。21はタイ産四耳壺の肩部破片である。外面に黒釉が掛かり、内面は露胎となる。22～25は土師質土器壺の破片で、薄い器壁をもち、外面にタタキ状の調整が認められる。淡明橙色の色調を呈し、「ハンネラ」とよばれるタイ産の土器の可能性が高いものである。26は産地不明の陶器小破片である。実測図では小杯として図示したが、蓋などに復元される可能性も考えられる。淡褐色系の色調を呈し、残存部分には施釉されない。当該資料は中世大友府内町跡第11次調査や沖縄県首里城・長崎県長崎遺跡群・大阪府堺環濠都市遺跡で頻例が出土している⁽⁶⁾。27は朝鮮王朝系陶器鉢の胴部破片である。いわゆる三島唇手とよばれるもので、内外面に線文と花文で綴られた印刻文が認められる。内外面には淡灰色の釉が掛かる。28は朝鮮王朝産雑釉陶器の小杯である。全面施釉され、高台内部に砂目による目跡が残る。29は朝鮮王朝産陶器船徳利の底部片である。内外面ともに二次被熱の跡が残る。30は朝鮮王朝系陶器甕の底部片である。全面施釉され、見込みに砂目による目跡が4カ所認められる。高台登付に目跡が5カ所認められ、高台内にはロクロ目が残る。第477図は華南三彩の製品である。1～3は鴨形水注の破片である。1は胸部で、黄白釉が施される。2・3は羽部で、2には緑釉、3には緑釉と黄釉が施される。4は鶴形水注の破片で脚台部である。印花による植物文が施され、緑釉が掛かる。5は水注の底部破片で緑釉が施される。6は鳥形水滴の尾部で緑釉が掛かる。7～8は細片のため器種は不明である。7は黄釉がほとんどを占め、一部緑釉が認められる。8は緑釉と黄釉が施される。第478図1は天目茶碗の胴部片で口縁部と底部を僅かに欠く。志戸呂産と推定される。2～5は瀬戸美濃系天目茶碗の口縁部破片である。2と5は黒褐色系の釉が掛かり、3と4は褐色系の釉が掛かる。4は復元口径11.4cm、5は復元口径10.5cmを



第477図 包含層・整地層出土遺物実測図③ (1/3)

ハンネラ

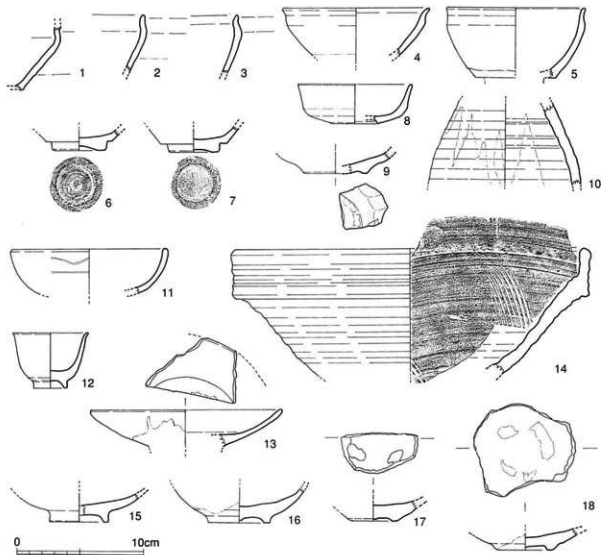
華南三彩

(6) 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡」(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第14集 2003年) 75頁

川口洋平「産地不明の貿易陶磁—対馬・志岐・長崎—」(『貿易陶磁研究』No23 2003年)

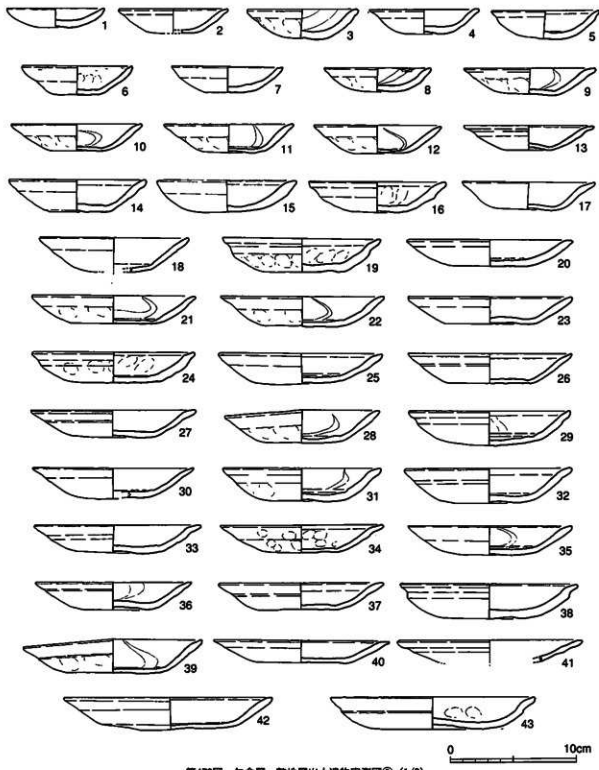
續仲一郎「堺環濠都市遺跡から出土した産地不明の貿易陶磁器—15世紀～17世紀初頭を中心として—」(『貿易陶磁研究』

測る。6～7は瀬戸美濃系天目茶碗の底部破片である。8は瀬戸美濃系陶器鉢である。内外面に緑釉が掛かり、外底部は露胎となる。9は志野焼の碗もしくは鉢の底部破片である。内外面に白色の釉が掛かる。内底部には貫入が認められ、高台内には目跡が残る。10は瀬戸美濃系陶器瓶の肩部破片である。外面は茶釉の上に褐釉が流れている。11は中国産の青磁碗の口縁破片である。外面に線描きによる文様が認められる。12は肥前系磁器小杯である。明緑灰色の釉が掛かり、外底部は露胎となる。1630～1650年代の所産である。13は唐津系陶器皿の口縁破片である。見込みに砂目による目跡が認められ、土灰釉がかかる。製作年代は1600～1630年代に比定される。14は備前系陶器描鉢である。口縁帯は薄板作りで、上方に立ち上がる。口端から下がった口縁内面に明確な段をもつ。内面には8本の描目が認められる。中世6期bに比定される。15は朝鮮王朝陶器の底部破片である。内外面ともに施釉されるが、高台登付は露胎となる。16は唐津系陶器碗の底部破片である。内外面に土灰釉が掛かり、胴部下半から外底部にかけて露胎となる。17は唐津系陶器小皿の底部破片である。内外面ともに施釉されるが、体部下半から外底部は露胎となる。見込みに胎土目認められる事から製作年代は1590～1610年に比定される。18は唐津系陶器の底部破片である。見込みに砂目による目跡が4カ所残る。内外面ともに施釉されるが外底部は露胎となる。製作年代は1610～1630年に比定される。

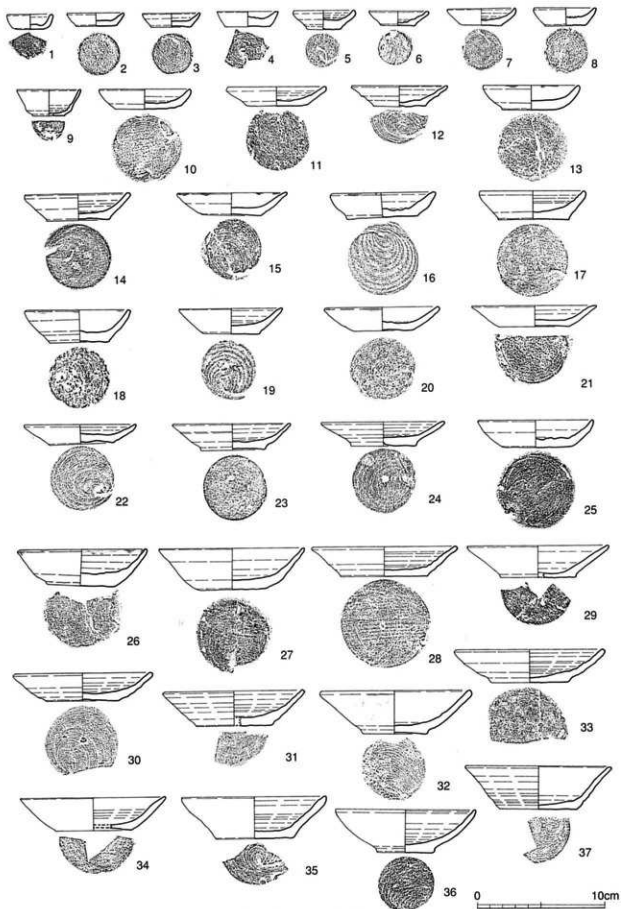


第478図 包含層・整地層出土遺物実測図④(1/3)

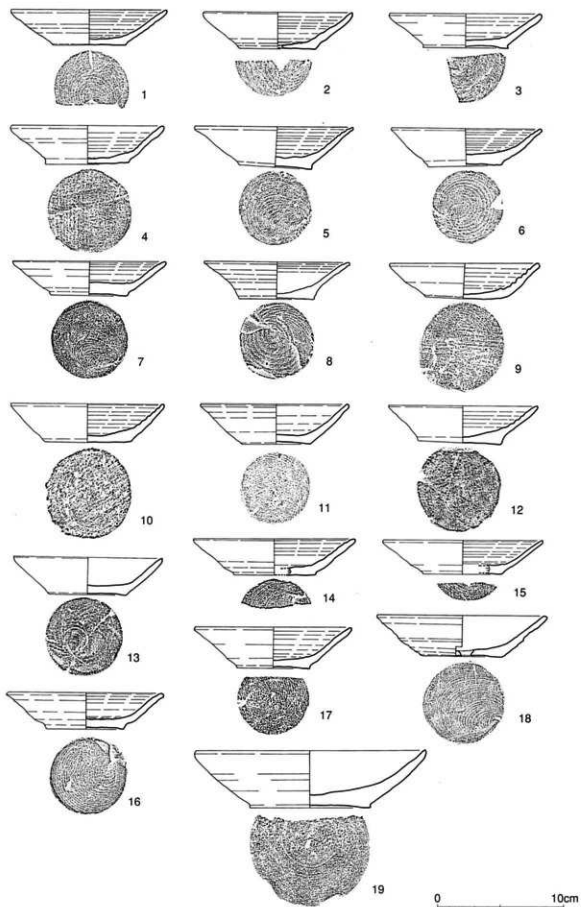
土師質土器・瓦質土器（第479～485図1・2） 第479図は5次調査B区の京都系土師器皿である。これらの京都系土師器皿には16世紀前葉に比定される1期のものから16世紀末葉に比定される3期のものまでが含まれる。1期に比定される資料は器壁が薄く、器高も2cm前後で26・34・40・42などが代表的なものである。2期に比定される資料は口縁部外面に強いナデが施され、口縁部が外反することが挙げられ、1期の段階よりは器壁も厚くなり、器高も高くなること指摘され



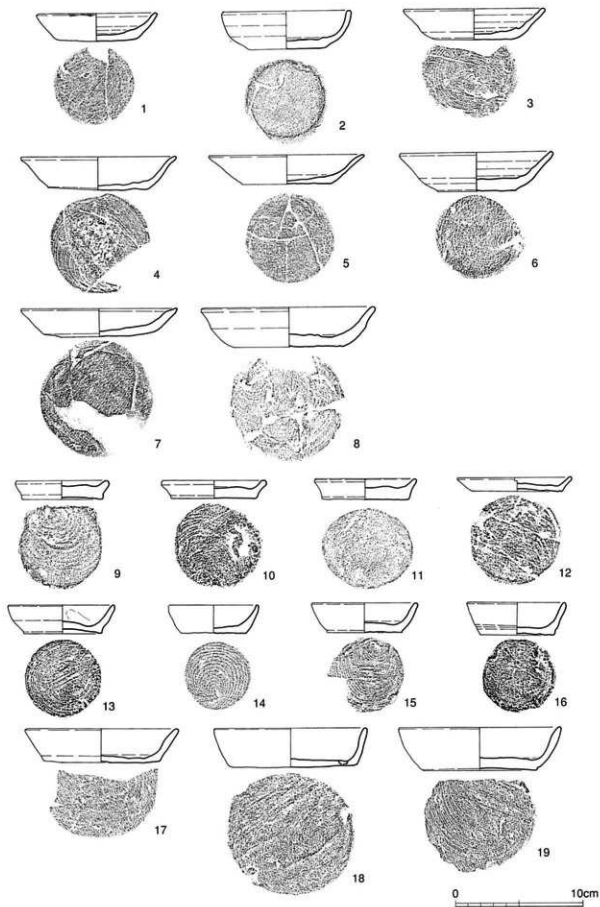
第479図 包含層・整地層出土遺物実測図⑤ (1/3)



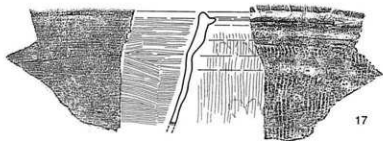
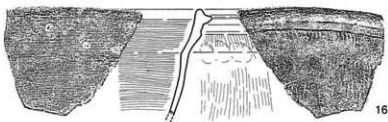
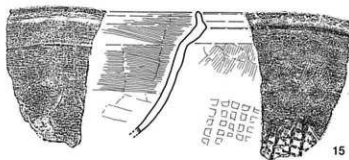
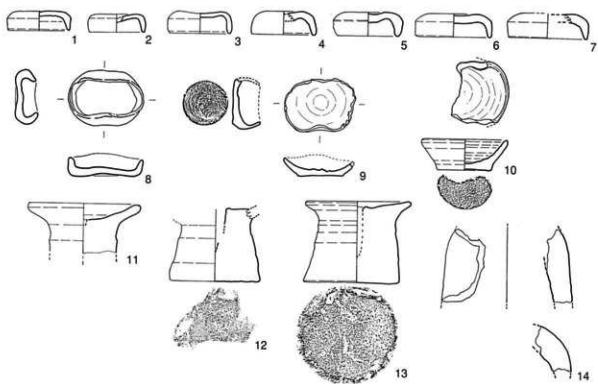
第480图 包含層・整地層出土遺物実測図⑥ (1/3)



第481図 含包層・整地層出土遺物実測図⑦ (1/3)

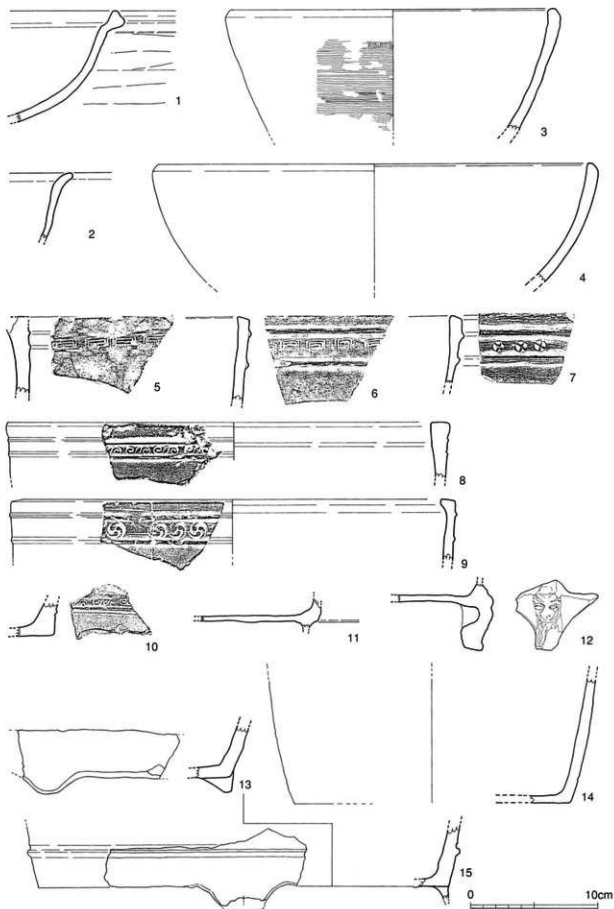


第482図 含包層・整地層出土遺物実測図⑧ (1/3)



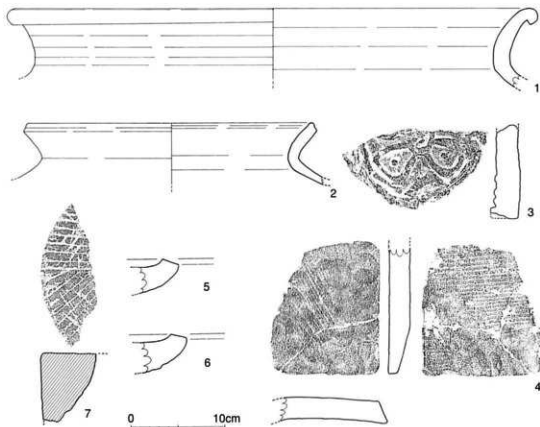
0 10cm

第483図 含包層・整地層出土遺物実測図⑨ (1/3)



第484図 含包層・整地層出土遺物実測図⑩ (1/3)

る。9・25・33・37などがその代表的なものである。3期に比定されるものの器壁は7mm前後と厚くなり、器高も3cm前後と高くなる。19・24・31・38などがその代表的な例である。なお、9・12・21・22・28・31・39は内面に「ノ」の字状のナデ上げ痕が認められ、4・6・8・22・27・28・31・33・39・43は煤が付着するものである。特に31は底部に煤の付着がみられ、二枚重ねにして使われる際に、芯をおさえる上皿として使用されたものと思われる。第480～482図は底部に糸切り痕を有する在地系土師質土器皿である。ほとんどのものは赤褐色系の色調を呈するが、第480図9は白色系の色調を呈し、器壁が薄い。他の在地系土師質土器皿とは様相が異なる。21は浅黄色系の色調を呈するもので、京都系土師器皿と同じ胎土を用いて製作されたものである。第480図は口径が12cm以内のものであるが、中でも1～8は口径が5cm以内と小型の皿で、盛塩等に使用されたものと推定される。第481図は口径が12cmを超えるものである。特に19は口径184cm、器高4.5cmと大型のものである。底部の糸切り痕はほとんど右回転だが、左回転のものもみられ（第480図7・16・19・20、第481図11）、第480図23・27・28、第481図4には板状圧痕が残る。さらに、第480図24は底部中央に外面から穿孔しようとした痕跡があるが、貫通はしていない。第481図18は内面から意図的に穿孔されている。また、第480図12～13・15～19・25～26・29・32、第481図2には内外面に煤の付着がみられる。特に17は底部にも煤の付着が認められる。第482図1・3・6は赤褐色系の色調を呈し、2・8は灰白色の色調を呈するものである。4・5・7は浅黄色系の色調を呈し、そのプロポーシオンも京都系土師器皿と酷似し、京都系土師器皿を模倣して製作されたものである。9～19は淡褐色系や明褐色系の色調を呈し、断面形態が箱形となるもので、14世紀前葉に比定される資料である。13・15・18の底部には板状圧痕が認められ、18の底部には内面から意図的に穿孔されている。また、1・15・16の口縁部には煤が付着する。第483図1～7は焼塩壺の蓋である。浅黄色系の色調を呈するもの（1・3・5～6）と赤褐色系の色調を呈するもの（4・7）



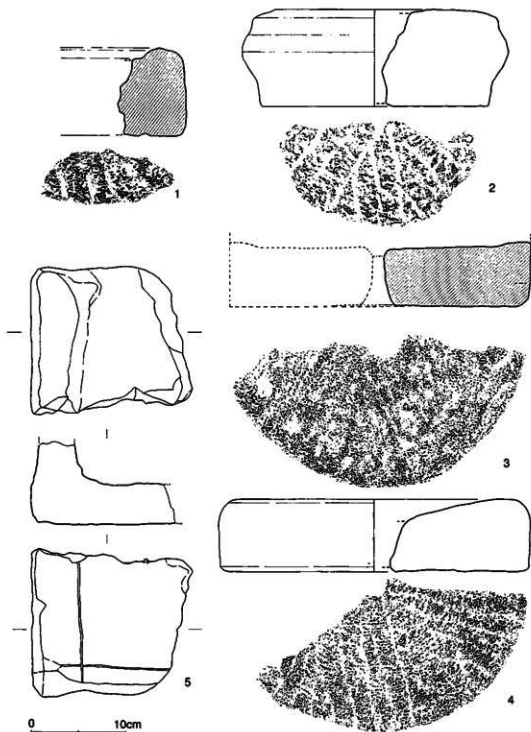
第485図 含包層・整地層出土遺物実測図⑪(1/3)

がある。8～9は耳皿である。8は浅黄色系の色調を呈し手捏ねによって作られる。9は赤褐色系の色調を呈する。底部に糸切り痕を有し、内面にロクロ目が残る。10は赤褐色系の色調を呈する在地系土師質土器皿であるが、口縁部が変形しており、耳皿として転用されたものか。11～13は土師質土器の燗台である。11～12は赤褐色系の色調を呈し、13は浅黄色系の色調を呈する。12の底部には糸切り痕が残るが、13の底部はナデ仕上げである。皿部から底部にかけての穿孔はいずれも貫通しない。14は釉の羽口破片である。15は防長系の瓦質土器鍋である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を上方に引き上げ、断面形態は「く」の字状を呈する。内面は横方向のカキ目あるいはハケ目調整が施され、外面の胴部上半はナメ方向のハケ目調整、胴部下半は格子状のタタキ調整が施される。また外面には煤が付着する。16～17は在地系の瓦質土器鍋である。口縁部はやや外側に屈曲し、口縁端部は肥厚する。内面は横方向、外面は縦方向のハケ目調整が施され、胴部には指圧痕が残る。17の外面には煤が付着する。第484図は瓦質土器製品である。1～2は鍋の口縁破片である。1は灰褐色系の色調を呈する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。口縁外面と底部付近はナデ調整、胴部はヘラケズリによる調整が施される。2は黒褐色系の色調を呈し、口縁部は外反する。3～4は鉢である。3は口径25.4cmを測り、外面は剥離している部分も認められるが、横と縦方向のハケ目調整が施される。色調は浅橙褐色系を呈する。4は外面暗灰色系、内面橙褐色系の色調を呈し、口径は35cmを測る。5～15は火鉢である。このうち5～9は口縁部破片で、外口縁下に2条の三角突帯を巡らせるものである。5は三角突帯の間にやや横長の雷文を連続的に押捺するもので、鈍い橙褐色を呈する。6は三角突帯の間に雷文を連続的に押捺するもので、褐灰色を呈する。7は三角突帯の間に⊗字の刻印を押捺するもので、褐灰色を呈する。8は三角突帯の間に双頭雁手流雲文を連続的に押捺するもので、口径33.0cmを測り、灰色を呈する。9は口縁端部が内側にやや屈曲し、三角突帯の間に3個1単位とする巴文を押捺するもので、口径35.0cmを測り、黄灰色を呈する。10～15は底部破片である。10は底部付近に三角突帯を巡らし、双頭雁手流雲文を押捺している。赤褐色系の色調を呈する。11は明橙褐色系の色調を呈し、外底部に板状圧痕が残る。脚部は欠損する。12は獸脚をもつもので、橙褐色系の色調を呈する。13は黄褐色系の色調を呈し、台形状の脚を貼り付ける。14は明灰色の色調を呈し、復元底径は23.6cmを測る。外面は風化が激しいが、内面はナデ調整が施される。15は黄灰色系の色調を呈し、底部付近に1条の三角突帯を巡らせ、台形状の脚を貼り付ける。底径は32.4cmである。第485図1は備前系陶器大甕の口縁部である。復元口径は55.0cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部は玉縁状を呈する。胎土は灰白色系の色調を呈する。2は須賀質土器壺の口縁部破片である。復元口径30.2cmを測り、胎土は灰白色を呈する。

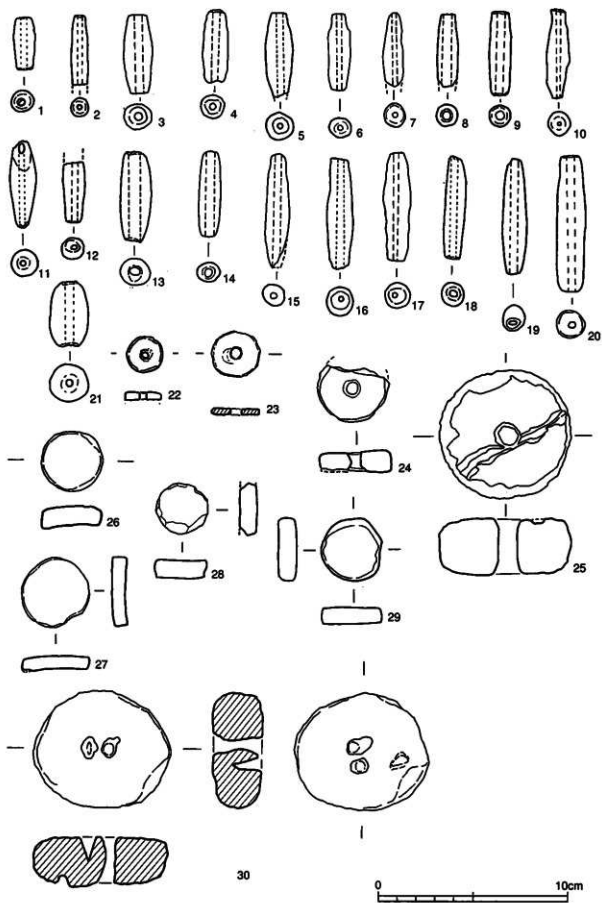
瓦(第485図3・4) 第485図3は軒丸瓦の瓦当である。文様から古代末期～中世前期頃の所産であろうか。4は平瓦の破片である。

石製品・土製品(第485図5～7・第486～488図1～10) 第485図5～6は茶臼の胴部分の破片である。7は茶臼の下臼の破片である。第486図1～4は石臼の上臼破片である。5は凝灰岩を加工した製品であるが、用途等の詳細は不明である。第487図1～21は当調査区出土の小型の管状土鏝である。このうち、20～21は重さが10gを超えるものである。22～25は有孔円盤状に加工された製品である。22・24・25は軽石を加工したもので、23は在地系土師質土器を加工したものである。紡錘車などとも考えられるが、用途などの詳細は不明である。また、材質の違いから用途は分かれる可能性が考えられる。26～29は小型の円盤状に加工された製品である。26は浅黄色系の色調を呈し、京都系土師器皿を加工したものである。27・28は暗灰色系の色調を呈し、瓦質土器を加工した

ものである。どちらも表面は丁寧なミガキ調整が行われ、表面はナデ調整が施されている。27の側面は打ち欠かれた後にスリナデが行われており、丁寧な仕上げが行われている。28の側面は打ち欠かれたままである。29は赤褐色系の色調を呈し、在地系土師質土器を加工したものである。当調査区ではピット状の遺構からやはり、在地系土師質土器を小型円盤状に加工した製品がまとめて出土している。推測の域を出ないが、これらの製品は「おはじき」等の遊具などとして使用されたものであろうか。30は軽石の加工品である。中央に並ぶように二つの穴が穿たれており、一方は貫通し、一方は貫通しない。22~25同様、用途などの詳細は不明である。第488図1~2は碗の破片で



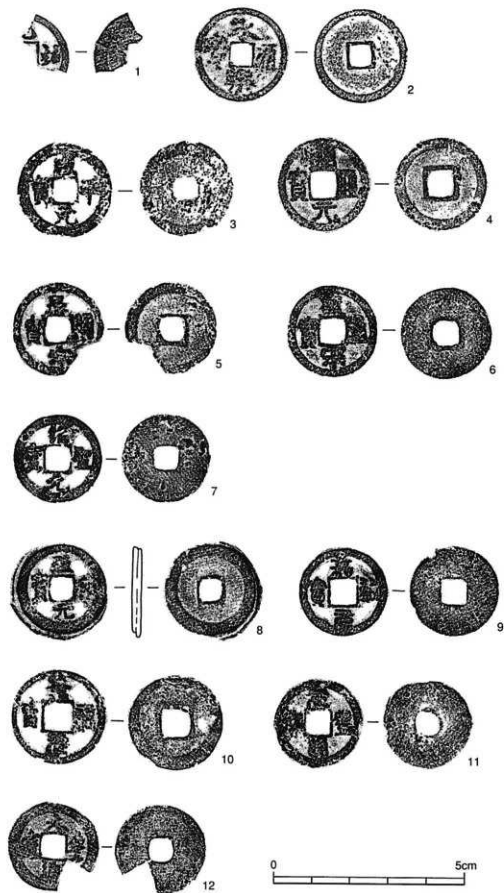
第486図 含包層・整地層出土遺物実測図② (1/4)



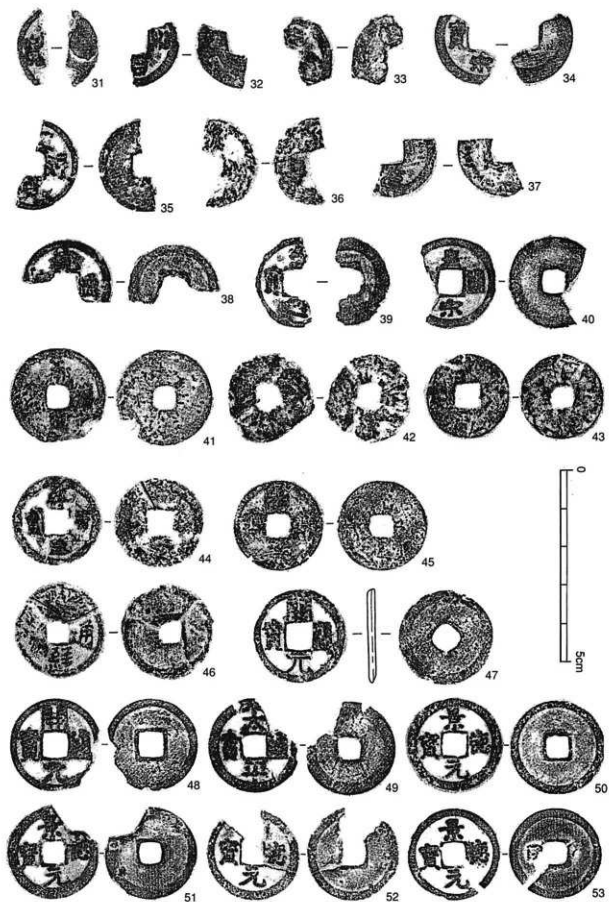
第487図 含包層・整地層出土遺物実測図⑬ (1/2)



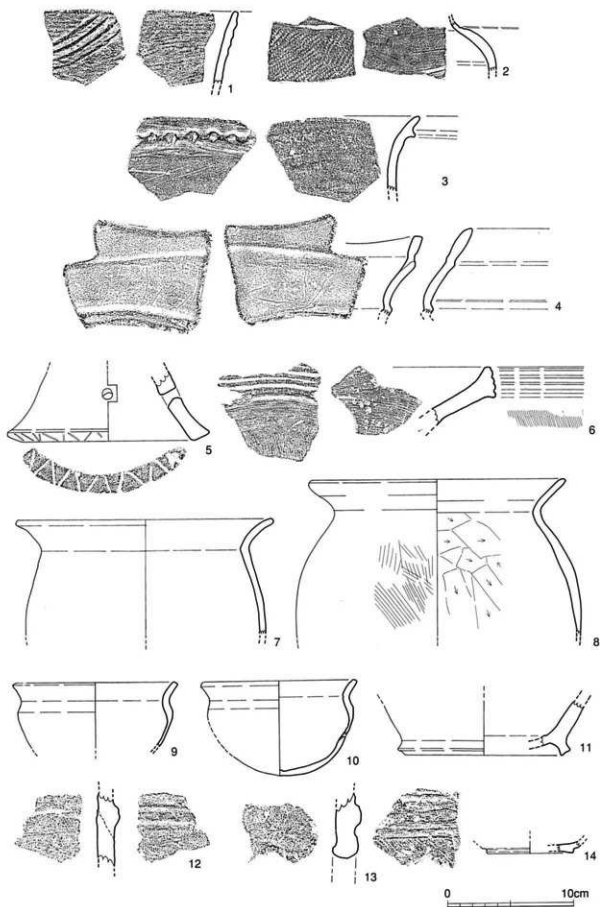
第488図 含包層・整地層出土遺物実測図⑧ (1/3)



第489図 柱穴出土銭美測図 (1/1)



第491団 含包層・整地層出土銭実測図② (1/1)



第492図 中世以前の遺物実測図 (1/3)

金属製品(第488図11~12) 第488図11は煙管である。12は刀装具で、鞘尻金具である。

銅銭(第489~491図) 第489~491図には銅銭を図示している。第489図はビットから出土の銅銭で、第490~491は包含層・整地層からの出土である。各銅銭の銭種や初鋳年代は一覧表に譲り、ここでは出土銭にみられる特徴的なことを記す。第489図8と第491図47は二枚重ねで出土している。第491図38は「寛永通寶」で、いわゆる「新寛永」である。第491図46は「朝鮮通寶」の可能性が高い。また、当調査区出土の銅銭53枚の内訳を見ると、北宋代のものが最も多く、14種類32枚を数える。明代のものは2種類4枚である。唐代のものは3枚である。また、銜や欠損のため銭種の判読不明なものは11枚であるが、これらの中には無文銭や模鑄銭は含まれない。

中世以前の遺物(第492図) 当調査区においては中世以前の遺物は検出されていないが、包含層や遺構埋土などから、縄文時代から古代にいたる遺物の出土がみられる。また、5次調査A区において古代の土坑が1基検出されており、中世以前の遺物の存在も否定できなかったため、11C区にトレンチを設定して、掘り下げを行った。その結果、中世の面から約30cm掘り下げたところで地山を検出し、これ以下の層に遺物の存在はないと判断した。しかし、掘り下げの段階で古墳時代の鉢が検出され、周辺に中世以前の遺物が展開していた可能性も考えられる。第492図には5次調査B区で出土した、中世以前の遺物を列挙した。第492図1はビットの埋土から出土した縄文時代前期の藤B式土器のI緑部破片である。I緑部に4条の隆帯が斜めに施される。色調は茶褐色を呈する。2はSD145から出土した縄文時代後期の北久根山式土器の浅鉢の破片である。外面に縄文を施し、内面は条痕による調整が施される。全体的に摩滅しており、内面には煤が付着する。3はSK119から出土した縄文時代晩期末に比定される刻目突帯土器深鉢の口縁部破片である。口縁部は大きく外反し、I緑端部は丸く収める。刻目は指刻みで、D黒野式から一方平式土器に分類される資料である。4はSD310から出土したもので、波状I緑をもつ浅鉢形土器の口縁部破片である。縄文時代晩期前半に比定される。5はSD145から出土した。図では脚として表現したが、器台の口縁部の可能性もある。胴部に穿孔が認められ、口縁端部に鋸歯文を施す。弥生時代中期末から後期に比定される。6はSE228から出土した、弥生式土器壺のI緑部片である。I緑外面には4条の凹線を施す。内面は横方向、外面は縦方向のハケ目調整を施す。文様や器形から瀬戸内地域からの搬入品の可能性が高い。弥生時代後期前半に比定される資料である。7は包含層出土の古墳時代の甕である。胎上に角四石・雲母を含み、淡褐色を呈する。8は近世以降の溝SD208から出土した、古墳時代の甕である。内面はケズリ調整、外面はハケ目調整が施される。胎上に角四石を含み、色調は褐色を呈する。口縁部と胴部外面に黒斑が認められる。9~10は11C区に設定したトレンチから出土したもので、古墳時代の鉢である。10の胴部には外から穿たれた穿孔が認められる。11は須恵器である。小破片のため断定できないが壺などの底部である可能性が考えられる。12~13は古墳時代の埴輪の破片である。12はSD310からの出土で、外面は縦方向のハケ目調整が施される。突帯は断面台形状を呈する。川西編年のV期¹⁷⁾に比定され、6世紀代の所産である。13はSK202からの出土で、外面はナナメ方向のハケ目調整が施される。円形の透し孔をもつものである。14は緑釉陶器皿の底部破片である。内外面ともに全面施釉される。SK119からの出土である。

(7) 川西宏幸「岡崎埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号(1978年)

第3節 小結

1. 遺構の変遷

中世大友府内町跡第5次調査B地区では14世紀代・15世紀後葉・15世紀末葉～16世紀初頭・16世紀後葉～中葉・16世紀後葉～中葉・16世紀後葉～末葉などの遺構が存在するが、積土状遺構(SX102)とそれに付属する溝(SD101・SD103)が構築される16世紀末葉代が最盛期であり、それ以降は衰退していく。以下、遺構の変遷について、時期別に説明を加えながら本調査区を概観していきたい。

14世紀代の遺構

14世紀代の遺構は第493図に示すように5基有るが、特に11C区中央に集中して存在する。井戸(SE238)の周りに断面箱形の在地系土師質土器皿が廃棄された土坑(SK236・SK252)が2基隣接して存在するが、これらの遺構の相関関係は不明である。

15世紀代の遺構

14世紀代から15世紀中葉までの遺構は当調査区では確認されておらず、15世紀後葉から遺構が出現してくる。15世紀後葉の主な遺構は井戸遺構4基であるが、これらの井戸の相関関係は定かではない。

15世紀末葉～16世紀初頭代の遺構の中で特筆すべきものは溝SD151・SD153であろう。これらの溝遺構はSX102・SD101・SD103構築以前に存在したものである。SD151・SD153ともにA調査区に続くことが確認されたが、SD151はB調査区の西で北に折れ、調査区外に延びることが確認されている。つまり、15世紀代にはSD151によって区画された町割りのようなものが存在したことが推定できるのである。また、SX134や時期が特定できないため、遺構変遷図には図示していないがSX253・SX270などの埋納遺構はこの時期に相当すると考えられ、前述の区画割りに伴うものと推定される。

16世紀代の遺構

16世紀前葉～中葉になるとSD151は埋没し、SD105やSD123などの溝状遺構が構築される。SD105はA調査区には延びず、B区の西で途切れるものと思われるが、この遺構の北側には廃棄土坑が展開してくる状況がうかがわれる。16世紀後葉～末葉になるとSD105は埋没し、その南に東西に延びる積土遺構SX102や溝SD101・SD103が構築され、調査区の西側では南北に延びる溝SD145・SD310が構築される。また、調査区の北側には井戸遺構や廃棄土坑が多数展開する。積土遺構の性格については本文中でも述べたが、「府内古園」復元案に見られる御蔵場の北辺を画するものとしてみる。しかし、その構築状況は第2南北街路の土層断面と類似していることも否定できない。いずれにしろ御蔵場の北側を画する遺構であることは間違いない。この延長部分の展開については今後の調査の成果を待ちたい。さらに、SD145とSD310の性格についても、8次調査区との遺構密度の違いから推察すると、やはり、何らかの区画溝と考えるのが妥当であろう。また、この二つの溝の間の狭い空地は、土層観察から積土状の遺構の存在が考えられた。これもまた、道路状遺構SD145とSD310に削られたものか、築地塀などの積土遺構となるかは判断できなかった。

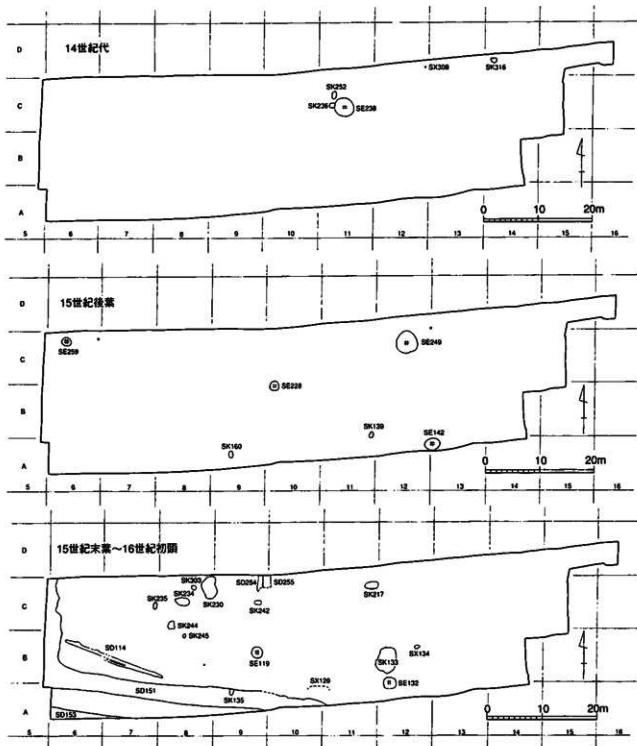
近世

近世になると当調査区には遺構が希薄になり、浅い溝状の遺構が調査区の西側で展開するのみである。近世段階ではこの区域は水田もしくは畑が広がっていたことが推察できる。

以上、紙面の関係で簡単に遺構の変遷に触れてきたが、5次調査B区では調査前に考えられていた道路状遺構(もしくは空地)的なものは検出できず、町屋的な遺構の広がりが確認された。この町屋的な広がりが当調査区の北側でどのように展開するかが今後の大きな課題になるものと考ええる。

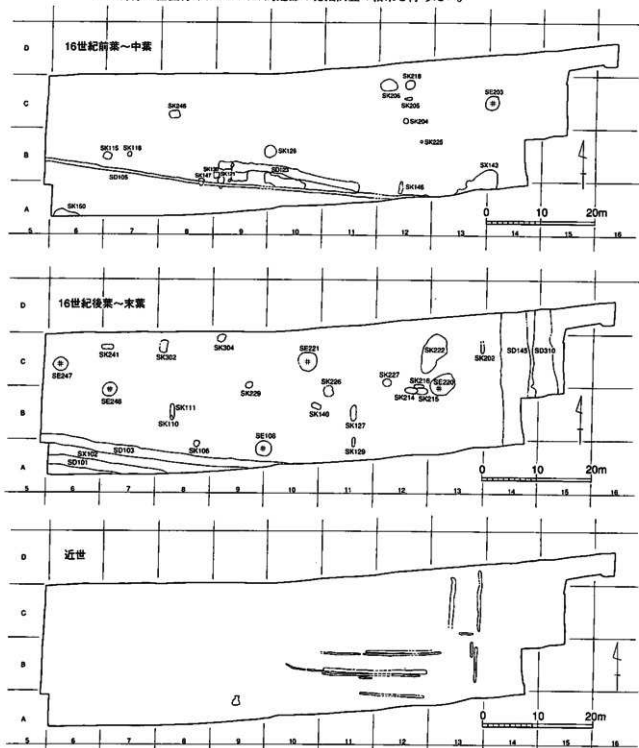
2. まとめ

中世大友府内町跡第5次調査B地区は「府内古園」に基づいて作成され「大分市史」に掲載されている「戦国時代の府内復元想定図」の「大友氏館」に南面する東西街路の地点にあたる。B地区のすぐ西の5次調査A地区では古園に描かれた「林小路町」に該当すると思われる遺構や「大友御藏場」の北を画する積土状遺構が検出されている。当調査区もそれに続く積土状遺構や「大友氏館」の西側に描かれている「御西町」を挟み、「林小路町」から続く道路状遺構が検出されるものと想定していた。また、A類からC類までである「府内古園」のどれにも、この地点に「町屋」の表現はなく、ただ東西方向道路が描かれているのみである。しかしながら、調査の結果は5次調



第493図 遺構変遷図① (1/700)

壹A区から続く積土状遺構は確認できたものの、道路状遺構は検出できず、無数のピット状遺構や土坑・井戸などが検出された。遺構の密度は非常に高く、複雑な切り合い関係を持ちながら存在しているため、遺構検出は困難を極めたが、少なくとも2面以上の生活面が存在することが明らかになった。この遺構の密集状況は「府内古園」に描かれている道路もしくは空間地的な性格のものではなく、「町屋」的な状況を呈していると言える。他の中世大友府内町跡の調査では概ね「府内古園」復元案に該当する調査結果が得られているのに対し、当調査区は想定と異なる結果を得た。当調査区はA・B・Cに3分類されている「府内古園」で街路の表現がそれぞれ異なる部分であり、この部分の位置付けについては周辺部の発掘調査の結果を待ちたい。



第494図 遺構変遷図② (1/700)